
流星のロックマン スターフォース

シューティングスター

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロッキマン スターフォース

【Nコード】

N3330J

【作者名】

シューティングスター

【あらすじ】

220X年。

地球のあらゆる電波・通信を管理する三基のサテライト…ペガサス、レオ、ドラゴンの完成で、人類の通信環境は飛躍的な進化を遂げ、街は電波を利用した無公害エネルギーに溢れ、電波を擬似物質化する事で、豊かな生活を人類にもたらした。

だが、その地球を破壊すべく、好戦的な電波星人の住む星、FMプラネットが攻撃を開始する。星河スバルは、仲間を裏切ってFM星人から追われる身となったウォーロックと出会い、電波変換して口

ツクマンとなることで、FM星人に対抗するのだった。

ブローグ

とある宇宙ステーションの中

宇宙服を着ている隊員達がパネルを使つて操作している。

「チェックC2・・・A40に誤差補正。A40に補正終了。C3、
BCともに37」

外にあるアンテナが動き出し、なにやら電波を出し始めた。

すると宇宙服を着ている一人がもう一人に話しかけた。

「星河君！」

「はい！ブラザーバンドがリンクされました。相手の星の位置を
認しろ」

今返事したのは、星河大吾。この宇宙ステーションの船長のよう
だ。

「・・・人類は、はじめて他の知的生命体とのリンクに成功したん
だ」

「はい」

ブーブーブーブーブー

突然警報機がなり始めた。

「どろした？」

大吾は問う。

「……！？強力なエネルギーが逆流してきます！」

大吾の部下であろう隊員が言った。

「星河君！」

「……惑星間ブラザーバンド計画を、敵対行為ととられたのかも
しれません」

パネルを操作しながら大吾が言う。そして大きなモニターを出し、
通信した。

『こちらは太陽系第三惑星の地球人。我々は平和的なコンタクトを
求める。繰り返す、こちらは　　うわっ！！』

通信が途絶えたようだ。

「ダイレクトなコンタクトによるオーバーフロー！？くっ！」

大吾は走りだした。

「ほ、星河君！どこへ行くんだ！？」

「どんな形であろうと、異性人との信号をキャッチしたんです！オ
ーバーフローの様子をこの眼で確認してきます！」

宇宙ステーションの中心部

ここは、ブラザーバンドシステムがある場所のようだ。電磁波が乱れている。

「……すごい！」

大吾は緑色の眼鏡かけた。黄緑色の道が続いている。

「!? なんだあれは！」

黄緑の道を影が複数でもの凄い速さで進んでくる。

ヒュイイイイイン・ドカアアアアン

その瞬間宇宙船はとてつもない光を放ち………爆発し

た。

プロローグ（後書き）

誤り字などがあったら言って下さい。
感想等お待ちしております。

第1話 逃亡者ウォーロック 前編(前書き)

説明していなかったんで、しておきます。

この小説は、流星のロックマンのアニメのリメイク版として書いています。

第1話 逃亡者ウォーロック 前編

コダマタウン

ある夜の事、川のほとりに一人の少年が寝転がっている。

彼の名前は星河スバル。赤い服につんつん頭、緑色のメガネをかけて星を見ている。

数年前

「ただいま！・・・あーいらっしやい天地さん。今日学校でね
「スバル！」」

スバルの母あかねがスバル名前を呼んだ。

「　　うう・・・」

あかねは頭を抱え泣き始めた。すると、天地が話し始めた。

「・・・宇宙ステーションの事故現場で、調査班がこれを発見しました」

天地はポケットから緑色のメガネを取り出し見せた。

「・・・父さんのビジライザーだ！」

スバルは言った。

「・・・残念ですが、先輩をはじめクルーの生存は絶望だろうと・・・」

「え！？何の事？母さん、父さんがどうかしたの？・・・父さんはいつ帰ってくるの？」

天地が話した後スバルがあかねに質問した。

「・・・ねえ、母さん！」

現代のコダマタウンの夜

「……………父さん」

スバルは星を見ながらつぶやいた。

翌日スバル宅2階

「起きてスバル！ねえ、起きて！」

あかねがスバルを起こしに来た。

「……うん……何？母さん。学校なら行かないよ」

スバルは起きるなりそう言った。

「……そうじゃなくて、フードディスペンサー（現代のオーブンのようなもの）の様子がおかしくて……。見てほしいのよ」

1階

「朝ごはんにオートミールを設定したんだけど」

「またオートミール？」

スバルがフードディスペンサーの様子を見ながら言う。

フードディスペンサーは少しバチバチとイナズマが走って、少し爆

発した。

中から煙が出はじめた。

「……コホン、コホン。ひどいなー」

スバルが咳しながら言った。

「この通りなのよ……」

「ちょっと待って」

そ言うとビジライザーをかけた。

「……やっぱりそうだ。電波ウイルスの仕業だよ」

「電波ウイルス？」

あかねがスバルに言った。

「うん。電波で送られてくるレシピに電波ウイルスがいたずらして
るんだ。まあ、この程度なら僕にも倒せる。見てて」

そう言つてスバルはトランスサーにソードのカードを差し込んだ。そ
のとたんにウイルスはデリートされ、オートミールではなく、ホッ
トケーキが出てきた。

「ほらね」

「こら、勝手にメニューをかえたな」

「えへへ」

しばらくして2人は朝食を食べ始めた。

「勉強は進んでる？」

「うん。ちゃんと通信学習してるから。・・・学校へ行けって言わないの？」

「スバルが行く気になるまで行かなくていいのよ」

「・・・ごめん、母さん。」

「いいのよ。・・・それよりおかわりは <ピンポン>
誰かしら？」

「僕が出るよ・・・」

そう言って玄関へ向かう。

第1話 逃亡者ウォーロック 前編（後書き）

感想、アドバイス等よろしくお願いします。

第2話 逃亡者ウォーロック 後編

スバル宅玄関

「はい、どなたですか？」

スバルはゆっくりとドアを開けた。目の前には髪の毛がクルクル巻きのツインテールの女の子と、メガネをかけた身長が低い男の子が立っていた。

「あなたが、星河スバル君？」

女の子が尋ねた。

「そうだけど、誰？」

今度はスバルが尋ねた。

「コダマ小学校5年A組み白金ルナ」

「えっ」

そのころとある惑星

犬のような電波体が複数の電波体に囲まれている。

『くっ！』

『もう逃げられないよ。ウォーロック！』

白鳥のような電波体があった。

『カギを渡せ！アンドロメダのカギを・・・』

牛のような電波体があった。

『いいとも。渡してやる。俺を倒すことができたらな！』

犬のような電波体・・・ウォーロックがあった。

『何故裏切った！？FM星の誇り高き戦士のお前が・・・』

白鳥のような電波体が尋ねた。

『フッ！』

ウォーロックは少し笑った。そしていきなり大地が揺れはじめた。

『何？・・・アンドロメダを起動したのか？』

『あばよ！』

白鳥のような電波体が尋ねた瞬間ウォーロックは逃げ出した。

ヒューイイイイイン・・・ドカアアアアン！！！！

ウォーロック達がいた惑星が爆発した。

宇宙空間

『地球がおれを呼んでる！』

そう言ってウォーロックは地球へと向かった。

第2話 逃亡者ウォーロック 後編(後書き)

感想お願いします！

第3話 ファーストコンタクト 前編

スバル宅玄関

「コダマ小学校？」

スバルがルナ（以後委員長）に尋ねた。

「そう。あなたのクラスの学級委員長よ。まあ、進級以来登校していないあなたが知らないのは当然だけど」

「この人ですか、父親を亡くしたショックで学校にこれなくなっただの生徒は」

メガネをかけた小さい少年が喋った。

「ムッ！」

委員長の答えに少しスバルはむかついた。

「初めまして、僕は最小院キザマロといいます」

メガネをかけた小さい少年が名乗った。

「今日は、私と登校してもらおうよ」

委員長は、スバルの腕をつかみ連れて行くこととした。

「な、何だよいきなり!？」

「どうしたの？スバル」

いいところであかねがやってきた。

「お母様ですね？ご心配なく。スバル君のことは委員長はこの私、白金ルナにおまかせください。」

委員長がいった。

「はぁ・・・」

あかねは軽く返事を返す。

「さあ、いきましよう」「ちよ、ちよっと！」「」

委員長達はスバルに事を無視してつれていった。

登校中

「ねえ、君達ちよつとまっつてくれよ!」

スバルは委員長達に言った。

「……離せよ!」

スバルは委員長がつかんでいた腕を離した。

「僕が学校に行こうが行くまいが勝手だろ!」

スバルはそう言つと走りだした。

「あ!だめよ!一緒にいくの!」

「何で僕にかまうの?」

スバルは足を止めていった。

「あなたが学校に来ようが来まいが関係ないの。けど、あなたを学校に来させることができれば、学級委員長としての私の株があがるでしょ」

「委員長は次期生徒会長に立候補するです。早い話が点数稼ぎです。僕の発案です」

委員長とキザマロが言った。

「何だよそれ！選挙の材料にされるなんてごめんだ！僕は帰る！」

ドン！

スバルが帰ろうとしたとき誰かにぶつかつた。見た目はガキ大将ほど、服にフオークとナイフがプリントされていた。

「そうはいかねーぞ！お前は黙って俺たちと来ればいいんだ！」

そういうとガキ大将っぽい男の子がガシツ！と肩をつかみ持ち上げた。

「いいところで来たわ。ゴンタ。彼を逃がしちゃだめよ」

委員長が言った。

「離せよー！」

「委員長の命令だ。おとなしく学校へ来い！」

「嫌だ！」

スバルはそう言うときゴンタの腹に足で押した。その反動でゴンタは少し吹っ飛び自由になった。だがゴンタはスバルを捕まえ押し倒し、その上に乗った。

「俺を怒らせるなよ。登校拒否！」

「違う！僕は星河スバルだ！」

二人でけんかをしていると女の人の声が

「君たち！何してるの！？」

「やばっ！」

「先生です！」

「なにい！？」

と三人が驚いているすきに、スバルがゴンタを押しつけて逃げ出した。

「ああ・・・もう！」

「逃げられた・・・」

「くそー！なかなかやるじゃねーかあの登校拒否。」

そしてスバルは逃げた後ある場所へもかった。

第3話 ファーストコンタクト 前編（後書き）

第4話 ファーストコンタクト 中編

アマケン

「すいませーん。天地さんいますか？」

スバルは天地研究所、通称アマケンに来ていた。

「ん？おお、スバル君じゃないか」

「天地さん！」

「さて、せっかく来たんだ。少しだけだがどこか案内しようか？」

そう言って天地はスバルの頭に手を乗つけた。

「ありがとう！天地さん」

そう言って二人は奥へと歩いて行った。

アマケン ロケット前

「わあ！いつ見ても凄いやー！」

「そうか。君もお父さんの後を継いでパイロットになるのか？」

天地は尋ねた。

「僕・・・父さんが生きてるようなきがするんだ。だから宇宙パイロットになって、あのロケットで父さんを探しに行くんだ」

スバルは答えた。

「そのためにもたくさん勉強しないと。君のお父さんは宇宙パイロットと同時に優秀な科学者だったんだ。電波が見えるそのビジライザーだって、君のお父さんの発明だ」

「うん。僕だって勉強してるよ」

「学校へは行かないのかい？・・・確かに勉強は家でもできるかもしれないけど、外へ出て友達を作る事もべんきょうだぞ」

「友達？」

スバルは天地に尋ねた。

「そう！困ったとき、苦しいときに悩みを打ちあけ、けんかをする親友だ」

「……いらないよ……」

スバルは天地にそう言った。

回想

<この人ですか、父親を亡くしたショックで学校にこれなくなった生徒は>

<お前は黙って俺たちと来ればいいんだ！>

スバルは、さっきのゴンタとキザマロに言われた事を思い出していた。

回想終了

「……友達なんて……いらない……」

スバルがそう言ったあと天地は帽子をとって頭をかいて考え事をした。

「……そうか……だけどスバル君……あまりお母さんを泣かせるなよ」

「えっ！」

「心配してたんだぞ、君の事！……できれば学校に行ってほし
いってな」

スバルはその話しを聞くと少し下を向く。

その日の夜のゴダマタウン

スバルは星と電波を眺めるために川辺に行き、ビジライザーをかけた寝転がった。そして、今朝からあった事を思い出していた。

「ん？なんだろう？あの光」

スバルがビジライザーで電波見ていると、突然二つの白いと黄緑の光がぶつかりあっている。

電波の中

白い光と黄緑の光が何度も何度もぶつかっている。すると白い光は白鳥の電波体に、黄緑の光はウォーロックになった。

『ウォーロック！』

『キグナス！』

キグナス（白鳥の電波体）とウォーロックがお互いの名前を呼んだ。

『小惑星の爆発でボク達を撒いたつもりだろうけど、そうはいかないよ！』

キグナスは言った。

『フツ！もう少し時間をかせげると思ったが、意外と速かったな！』

ウォーロックが笑いながら言う。

『アンドロメダのカギを渡してもらおう。』

『やなこった！アンドロメダのカギは誰にも渡さん！』

そう言うとウォーロックは逃げ出した。

『裏ぎりもの！』

その後何度もぶつかりあった。

『ウオオオオオオオオ！』

『デアアアアアアア！』

ウォーロックとキグナスは最後の1撃に全てをかけてぶつかった。

ドカアアアアアアアアアアアアン！！

『ウワアアアアアア！！』

ぶつかった瞬間もの凄い光を放ちながら爆発した。

現実世界

「……！！？ここに落ちてくる！！」

スバルが言ったその瞬間

「うわああああああ！！！！！」

黄緑色の光はスバルにぶつかった。

第4話 ファーストコンタクト 中編（後書き）

何か突然終わる気がします……。皆さんの感想よろしくお願います！

あと、活動報告の方も書いておりますので、もしよければ見ていただください。

第5話 ファーストコンタクト 後編

コダマタウン

ウーーーーー！ウーーーーー！ウーーーーー！

パトカーがサイレンを鳴らしながらある場所へ向かった。そこは、さつきスバルと黄緑の光がぶつかった場所だった。

そして、パトカーから頭にパトライトをつけた人物とその部下と思われるサテラポリスの人たちがでてきた。

「手分けして探せ！」

「……………はい！……………」

パトライトをつけた人物は部下に、何かを探すよう命令をした。

黄緑の空間

この空間は黄緑の光とぶつかつたときにできた空間のようだ。

「・・・・・・・・・・ここは？・・・・・・・・・・!？」

気を失っていたスバルが目を覚まし、ウォーロックが目の前にいる事に気づいた。

『・・・・・・・・・・』

ウォーロックは目を瞑っていたが、スバルが気づいたため目を開けた。

「うわ!・・出口!出口!・・・・・出口はどこ!？」

スバルはウォーロックに背を向け逃げようとするが・・・・・・・・

『・・・・・・・・グツ!!!』

ウォーロックはうめき声をあげた。スバルはそれに気づき、振り返ってウォーロックを見た。

「・・・・・・・・・・どうしたの君?・・・・・・・・けがしてるの?・・・・・・・・そうか・・・・・・・・さつきも一つの光と戦つたときに・・・・・・・・僕に何かできる?」

スバルはウォーロックに恐る恐る尋ねた

『……………!?……………お前の周波数……………』

ウォーロックは、スバルの周波数を感じ取り呟いた。

「えっ!?何て言ったの?」

ウォーロックに尋ねた。

『……………いや、かすり傷だ。ほっとけば治る』

ウォーロックははじめの質問に答えた。

「よかった。……………言葉がわかるんだね」

スバルは安心したのかウォーロックに近づいた。

『俺の名はウォーロック。FM星から来た』

「ウォーロック!?FM星!?!」

『……………!?しー』

スバルが質問したとたんにウォーロックが人さし指を立てて鼻にあてて言った。

『……………誰か来る!』

そう言うとウォーロックは黄緑の光になり、空間から出て行った。

「え!?!……………うわあああああ!?!」

ウォーロックが出て行ったとたんに空間が割れた。

スバルは気を失った。その後、黄緑の光がスバルのトランサーの中へ入っていった。

コダマタウン

「くそ！確かにこのあたりで以上な電波を感知したんだが・・・」
五陽田警部！」「」

部下の一人が五陽田警部に声をかけた。

「何かあったか？」

「子供です！」

「子供？」

それから時は進みサテラポリス

今は夜中のためサテラポリスのところどころにしか電気がついていない。

ウィーン！

出入口の自動ドアが開き、スバルとあかねがサテラポリスの中から出てきた。

「おい、君！」

そして五陽田警部が出てきて帰ろうとするスバルを呼び止めた。

「警部さん……」

あかねが返した。

「もう一度聞くが、あの場所で本当に何もなかったのかい？」

「はい。．．．僕はただ、星を眺めていただけです．．．」

スバルは五陽田警部の質問の答えた。だが、そのときのスバルは少し様子が変だった。

「．．．．．ならいいが」

少し考えて五陽田警部が言った。

「お世話になりました。警部さん。．．．さあ」

そう言ってあかねはスバルをつれて帰った。

「．．．．．ちっ！．．．何か引つかかるな．．．」

スバル達が帰った後五陽田警部がそう呟く。

スバル宅

「今日はもう休みなさい。温かいミルクでも飲んで」

そう言ってあかねはミルクを注ぎに行く。

「……………はっ！……………光だ、二つの光が戦っている！」

スバルはいきなりそう言った。何かの呪縛から開放され、気を取り戻したかのように。

「え！？どうしたのスバル？」

あかねは、ミルクを注いだコップを持っていきながら尋ねた。

「光だよ！光が！」

「光？」

「……………そうだ！ウォーロックだ！確かにFM星人って言ってた！」

スバルがそう言う。

「何？夢の話なの？」

あかねが少し笑いながらそう言う。

「違うよ母さん！……夢じゃなくて……」

スバルがだんだん勢いがなくなりながら言う。

「あまり母さんを心配させないでね。サテラポリスから連絡があつて、本当にビックリしたんだから」

あかねがそう言う。

「サテラポリス？」

スバルの部屋

スバルは電気を消したまま、自分のベットへ向かった。スバルの部屋は天井に窓があるため電気を消していても、月の光である程度明

るくなっている。

スバルのベットは、部屋に階段があり、それを上がったところにある。ちょうど天窓の下にある。

ドサ！

スバルがベットに倒れこむ。

「……変だな……。……サテラポリスに行った記憶がまるでないなんて……」

そう言つて、スバルは星を見るために上向きになる。

「……宇宙人も夢だったのかな？……『夢じゃないぜ！』うわ！誰！」

スバルが呟いていたらいきなり声が出たため驚いた。そして声の主に質問した。

『……名前は名乗ったはずだ』

「ウォーロック！？」

スバルは声の主に尋ねた。しかし、声の主は見当たらない。

「どこにいるの？」

『お前の目の前だ。ビジライザーをつけてみる』

スバルはそう言われると、すぐに頭にあるビジライザーをかけた。

「う、うん。・・・うわあああ！」

スバルはいきなり目の前にウォーロックが見えたため驚き、後ずさった。

『やかましいな！そう何度も驚くな。』

「やっぱり夢じゃなかった。でも君、今まで何処にいたの？」

スバルが質問した。

『お前とずっと一緒だったぜ。あの時・・・俺の電波をかぎつけ、地球人達がやってきた。んで、とっさに俺はその端末に隠れた』

そうやってウォーロックはスバルの左腕についている、箱型の形のものを指さした。

「トランサーのこと？」

『ああ。地球人と接触して、騒がれなくなかったんでな』

「そうだったのか」

スバルはウォーロックの話を受得した。

『しばらく隠れ家に使わせてもらっぜ？それと、俺のことは誰にも秘密だ。いいな？』

「えっ！……うん。いいよ。悪い宇宙人じゃなさそうだし」

スバルは少し考えて承諾した。

「僕は星河スバル、よろしく」

スバルは名乗る。

それだけ聞くとウォーロックは窓からでていった。スバルは窓を開け、ベランダにでた。

「ウォーロック？」

スバルはウォーロックを呼ぶ。

「……うわ！」

反応がないため、ウォーロックが見ている方向をみた。そしたら、今まで見えなかった、街の上に無数の電波の道が見えるようになって、いることに気がついた。

『……地球人の肉眼では見れないが、これが俺たちFM星人が住む、電波の世界だ』

「すごいや！こんなに電波がはつきり見えるなんて！……FM星人のきみの力が、ビジライザーの能力を引きだしたのかな？」

スバルはウォーロックの隣にきて感激していた。

「電波世界に宇宙人か。父さんが聞いたら驚くだろうな。僕の父さ

んは、宇宙人とのコンタクト実験をしていたんだ。宇宙ステーションで」

スバルが大吾の事をウォーロックに話した。

『…………やはりそうか……。』

「え!?!」

ウォーロックから驚くべき反応が返ってきた。

『お前は星河大吾の……。』

「ウォーロック! 僕の父さんのことを知ってるの!?!」

スバルはウォーロックに質問した。

『ああ、周波数がそっくりだ』

「…………教えてウォーロック、宇宙ステーションで何があったの? 父さんは生きてるの!?!」

『……………………』

スバルはウォーロックに質問したが、質問に答えず黙っている。

「答えてよ、ウォーロック!」

少し怒りながらウォーロックに言った。

『・・・親父さんが宇宙ステーションに乗ってたことは知ってるが、それ以上は何も知らねえ。』

「でも君は、このビジライザーのこと知ってたじゃないか」

『チツ！まだ傷が痛みやがる！俺は休ませてもらっぜ』

そう言ってウォーロックは、スバルのビジライザーに入っていた。

(ウォーロック・・・)

第5話 ファーストコンタクト 後編（後書き）

天神地祇さん、クイッククロッドさん感想・アドバイスありがとうございます
ございました。背景描写ですか・・・少し苦手ですね（T|T）でも、
がんばってみようと思います。本当にありがとうございます。

第6話 電波ウイルス（前書き）

今回も電波変換行けなさそう・・・。

第6話 電波ウイルス

次の日のコダマタウン市街 モノレールの中

スバルは、ウォーロックに人間の住む世界を案内するためにコダマタウンのモノレールに乗っていた。モノレールの中は座席に座っている人。ドアに体重をかけている人などがいる。

『おおう！！これが人間の街か！』

ウォーロックはトランサーから窓の外を見てはしゃいでいる。まるで子供のように外には、何十メートルもある高層ビルが立ち並んでいる。

「けがはどう、ウォーロック？」

『一晩寝たら楽になったぜ。それより、他のFM星人に注意しな』

「昨日戦ってたもう一人の？」

スバルはウォーロックに尋ねた。

『俺以外にもFM星人はこの地球に来ているはずだ。地球を破壊する目的でな』

「地球を破壊だつて！！？・・・あつ」

スバルはウォーロックが言った言葉に驚き大声を出してしまった。しかし、ここは、モノレールの中だ。大声を出したため周りの人の

注目がスバルに向いた。

スバルは少し赤くなりながらゆっくりトランサーを閉じる。

プラットホーム

しばらくして、スバル達はモノレールを降りる。

『さっきの話の続きをするぞ?』

「う・・・うん」

『・・・FM星人は好戦的な種族。その昔、俺の生まれる前だが、AM星とかいう強大惑星を宇宙から抹殺したと聞いた。電波世界を混乱させる電波ウィルスも、実はFM星の産物だ。他の生命体を滅ぼすための無差別攻撃さ』

「電波ウィルスが?」

スバルはプラットホームから移動しながら聞いていた。

『地球の存在を知った以上、電波ウィルスの攻撃はますます激しくなるだろう』

「ウォーロックは何で仲間を裏切ったの？」

『さあな？俺が知りたいよ』

スバルがウォーロックの話を聞きながら歩いていると

「ああ、となり街の病院かよ」

と声がする。顔を上げてみると、前に委員長達がいることに気が付いた。

「おっと」

スバルはすぐさま柱のかけに隠れた。

「文句言わない。校長先生のお見舞いだって、委員長の大事な役目よ」

「これも一つの点数稼ぎです」

委員長とキザマロがゴンタに説明している。

スバルは委員長が過ぎ去るのを待っていたら

『FM星人か？』

とウォーロックが質問してくる。

「違うよ。クラスメイトだよ」

『クラスメイト?・・・敵か!?』

「敵でも味方でもないよ。でも嫌いなんだ。僕を無理やり学校へ引っ張り出そうとするから」

スバルは、敵と勘違いしているウォーロックに、逃げる理由を説明する。

『学校とは何だ?』

「いいよ。ウォーロックが知らなくても」

スバルは、何度もウォーロックが質問してくるため、これじゃきりが無いと思い、話しを終わらせた。

しばらくして、スバルは駅の外に出た。

ドカアアアアアアン!!

「・・・・・・・・!?!」

いきなり爆発音した。誰もが音に反応し爆発した方を見た。スバル

もその音に反応し、爆発した方に振り返った。

爆発したのは、さつき乗っていたモノレールのようだ。モノレールは連結の部分から黒い煙がもくもくと上がっていつている。しかも、まだ何度も爆発を繰り返している。

『電波ウィルスだ!』

「電波ウィルスだって!？」

ウォーロックはすぐさま反応し、スバルに伝えた。スバルはそれに反応しビジライザーをかけた。

何箇所か爆発した場所に、ウィルスがいるためウィルスの仕業だとわかる。ウィルスは種類はすくないが、数え切れないほどもある。

一つは黄色く緑の線がかいてあるヘルメットをかぶり、ツルハシのような武器を持つメットリオというウィルス、
一つは、少し浮いていて、腕からとげがはえていおりそこから電気を放つビリエースというウィルス、などがある。

「サテラポリスと呼ばなくちゃ・・・」
「きゃあああ!」「」

スバルがサテラポリスを呼ぼうとした瞬間、モノレールの方から悲鳴が聞こえる。

「あれは・・・委員長!？」

『さつきの連中か』

モノレールが連結の部分から斜め下に傾いており、そこから委員長が落ちそうになっている。そして、近くにゴンタ達がいる。ゴンタは、委員長を助けようとしているが、モノレールが下に落ちそうになっているため近づけないようだ。

「どういよう？何とかしなくちゃ！」

『お前が助けに行くのか？』

「えっ！？僕には無理だよ！・・・そうだ、ウォーロック！君なら何とかできる？FM星人の力で」

スバルは少し考えて、ウォーロックに尋ねた。

『あいにく、俺の体は非物質なんですね。救助どころか握手もできませんよ。第一、地球人を助ける筋合いはねえしな』

「そんな・・・」

『お前だってあの連中の事、煙たがってたじゃねえか？』

「そうだけど・・・」

スバルは段々表情が暗くなってきた。

『ほっとけほっとけ。とばかり喰らう前にさっさと行こうぜ』

「でも・・・」

スバルはそう言って委員長達の方を見る。

「……………よし！」

スバルは少し考え何かを決心して委員長たちの方へ走り出した。

第6話 電波ウイルス（後書き）

エースさん、勇氣さん感想とアドバイスありがとうございます。文章の表現方法、背景描写のアドバイスありがとうございます。アドバイスを貰ったからには、活かしていけるようがんばります。

他にも感想・アドバイス・誤り字等ありましたら送ってください！

活動報告の方も書いておきますのでよかったですら見てください。

まだまだ未熟者ですが頑張っていきますので応援よろしく願います。

第7話 電波変換！ 前編（前書き）

やっと電波変換ですねー。

第7話 電波変換！ 前編

モノレール 屋根の上

スバルは、モノレールの上部にやっとの思いで上って来ていた。その場所は、何十メートルもの高さになる。

スバルの目の前には大量の電波ウイルスがいた。

『メットーー！』『ビリビリビーー！』

「……うあ！……よし！」

スバルは大量のウイルスを見て少し驚いたが、トランサーにバトルカードソードを差し込んだ。

「くらえ！」

『メットーー！』『ビリー！』

ウイルスはスバルが差し込んだソードで次々と倒されていく。だが、ウイルスはスバルに襲い掛かってきた。

「うわ！……くっ！」

スバルはウイルスから走って逃げはじめる。

「ハア、ハア……うわ！」

ドタ!

スバルはつまづいてこけた。

『メットー!!』

『しょうがねえな!!』

『メット〜!!』

スバルがメットリオの攻撃を受けようとしたとき、スバルのトランサーからウォーロックが出てきてウィルスを一瞬でデリートした。

『・・・力をかしてやる。その代わりに、お前の体を貸してもらっぜ。電波変換だ』

「電波変換?」

『そうだ!』

「うわ!?!」

ウォーロックはいきなりスバルの体にぶつかり、黄緑の光に包まれる。

その中から、青色の戦士がでてきた。その戦士はヘルメットに赤いバイザーをして、左腕にウォーロックの顔がついている。

「・・・僕はいつたい?・・・僕は・・・僕の体は・・・?」

『お前は今、俺と合体して電波世界にいるんだ。』

「電波世界に!?!」

スバルは、ウォーロックの言ったことに驚いている。

『電波ウィルスと戦うため、お前の体を電波状態に変換した。お前は電波人間なんだ』

「電波人間だつて!?!」

『戦えスバル!』

「そんな事急に言われても!・・・うわ!」

スバルが驚いてると、電波ウィルスがスバルに襲い掛かってくる。

「く、くるな、くるな!」

『メットー!』

スバルは恐くて、手を振り回した。

『メットー!』

スバルの手がメットリオにあつた。すると、メットリオはデリートされた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・えっ?何だこの力は?」

『おい！何感心してんだ！？ばさつとすんな！・・・ほら次だ！』
ウォーロックがそう言うと、大量の電波ウィルスがスバルの目の前に現れた。

モノレール 連結部分

「は、早く助けなさいよ！」

「そんなこと言ったって・・・うわ！」

「バカ！下手に動くと落ちるでしょ！」

ゴンは、モノレールから落ちそうな委員長を助けようとするが、体重を動かすとモノレールごと落ちてしまいそうになるため、助ける事ができない。

「今助けるからな」

ゴンタは手を伸ばして委員長を助けようとするが

「……あともう少し……きゃあああああああ……！」

「委員長……！」

あともう少しというところでモノレールの連結部分がはずれ、委員長の掴まっていた車両が逆さまになった。その反動で委員長は、宙吊り状態でつかまっている。

モノレールはかろうじて落ちないでいる。だが、委員長は今にも手を離してしまいそうだ。

「すごいや！体が羽みたいに軽いぞ……！」

『こら、スバル！気をつける！』

「えっ？・・・うわ！」

スバルはビリエースの攻撃を受けてしまい、その反動で体が吹っ飛ぶ。

「うわー！！ぶつかる！！・・・あれ？」

スバルは吹っ飛ばされたときビルにぶつかりそうになったが、体がビルをすり抜けていった。そして、ビルの反対側の電波の道に着陸する。

「驚いたな。ビルの壁を突き抜けちゃった」

『電波だからな、当然だ』

『ビリーー！』

後ろを向いたら、ビリエースが攻撃しようとしている。スバルはその攻撃をよけたが、攻撃はビルに直撃し、ビルの一部が破壊され、その一部が下に落ちた。

そのとき、サテラポリスがやって来た。そして、五陽田警部とサテラポリスの人たちが掃除機のようなものを持って、パトカーから出てくる。

「電波ウィルスは、我々の頭上だ！」

五陽田警部が言ったとたん掃除機のようなものを上に向けて構える。

そして、作動させた。

電波ウィルスは、どんどん掃除機に吸い込まれていく。

ウィイイイン、ウィイイイン

いきなり五陽田警部の頭のパトライトがなりはじめる。何かをキャッチしたようだ。

「……ん！？この電波反応は！？……そうだ、昨夜の電波の！」

そう言うと五陽田警部はキャッチした電波を追い始める。

「サテラポリスだ！」

『昨夜のうつつとつしい連中か？』

「ここはサテラポリスに任せよう。早く委員長を助けなきゃ！」

「……もう……だめ……きゃああああ!」

「委員長!」

委員長は、手を離してしまった。

『周波数を変えろ!』

「うん!」

ガシッ!

スバルは、委員長を空中でだき抱え、ゆっくり着地した。

「ふう、間に合った。……もう大丈夫」

「……えっ!？」

「怪我はない?」

「は、はい。……あなたが助けてくださったの?」

委員長は少し赤くなりながら言った。

「誰だ?あいつ」

「何者でしょう?」

上でゴンタとキザマロが喋っていると

ガコン!!

ゴンタ達が乗っていたモノレールが傾き、落ち始めた。

「うわあああああ!!」

「キザマロ、ゴンタ!」

「危ない!」

スバルは、モノレールが落ちる場所の下へ行き、大きなモノレール1両をキャッチした。

「な、何!?」

すると、五陽田警部が来て、モノレールが落ちた場所へ駆けつけた。

「よっこいしょ!」

スバルは、落ちてきたモノレールを目の前に置いた。

「た、助かった!」

「御用だ御用だ!サテラポリスの五陽田警部だ!貴様が異常な電波の発信源だな!?さあ、大人しく捕ま　「素敵!私は、五年A組み委員長の白金ルナ!あなたのお名前は?」」

委員長は、五陽田警部を押しつけ、スバルに質問した。

「えっ！？……ぼくは星……『オッホン！』……ウォー……
・ロック！？」

「えっ！？ロック……まあ……『何だと！？俺と一緒に来いロックマン！』」

五陽田警部は委員長を押しつけて、スバルを連れて行くこととする。

『スバル、上だ！』

「えっ！？」

スバルはウォーロックに言われて上を見た。

第7話 電波変換！ 前編（後書き）

続きは明日です。なんとかできました。

感想・アドバイス・質問等があれば受け付けますので、もしよければよろしくお願いします。

第8話 電波変換！ 後編

「スバル、上だ！」

「えっ!？」

「貴様聞ってるのか!？」

「・・・どいて!」

スバルは五陽田警部を押しつけて、上にジャンプし周波数を変えた。

「貴様、待」

ドカアアアン!!

五陽田警部がスバルを追いかけようとしたとき、突然モノレールの線路の上が爆発した。

「　　なんだ!？」

スバルは爆発した場所に周波数を変えながら移動していた。

「よっと。うわ！」

スバルが着いた場所には大きなウイルスが待ち構えている。

そのウイルスは大きな斧を両手で持ち、鎧のよう格好をしているビグリッパというウイルス。

『スバル、こいつだ。モノなんかかってやつを壊しちまったウイルスは』

ビグリッパは、斧を持ち上げスバルに攻撃し始めた。

「!?!?くっ!」

スバルはジャンプしてかわす。そしてビグリッパの後ろにまわりこむ。

スバルは攻撃しようとしたが、ビグリッパが斧を振りまして近づけない。

「くっ!...何か武器はないの?」

『トランサーのバトルカードを出せ!』

「バトルカード？」

『俺にバトルカードをプレデーションさせるんだ』

「えっ!？」

『いいから早く出せ!』

「わかった。じゃあ、まずはコレだ!」

スバルはフォルダーからガトリングのカードを投げる。それを左手のウォーロックが口でガブツ!と食べる。すると、ウォーロックがガトリングになった。

「・・・えっ!?!うわ!凄い!腕が武器になった!」

『感心してる場合か!』

スバルは、ウォーロックに言われるとガトリングをビッグリッパに向けて放つ。

弾はビッグリッパの体のあちこちにあたりる。すると、ビッグリッパが消えた。

「やった!」

『・・・まだだ。奴は周波数を変えて逃げただけだ。上を見る』

スバルは、言われたとおりにも上の電波の道を見る。そこにはウィル

スの大群が集まっていた。

『あそこだ。あそこにウィルスが集まってやがる』

「どっするの？」

『一気にかたづけろ！強そうなカードを出せ！』

ウォーロックはガトリングからもとの姿に戻り、スバルに言った。

「わかった！だったら・・・コレだ！」

スバルはヒートボールのカードを投げ、ウォーロックにプレデーションさせた。

するとヒートボールが出てくる。スバルはそれを、ウィルスの大群めがけて投げた。

「くらえ！」

ドカアアアアアン！！

ヒートボールは爆発し、全てのウィルスを一掃した。だが、電波空間なので爆発の被害はない。

「すっげー！！」

『今度こそやっつけたな。どっやら間に合った』

「間に合ったって？」

『そろそろ俺のエネルギーが限界なんでね』

「え！？うわ！」

ウォーロックが言い終わると、黄緑の光に包まれ、近くの場所に飛ばされる。

スバルはもとの姿に戻った。すると、五陽田警部が走ってくる。

「おい、君。こっちに何か来なかったか？ロック何とかと言う奴が・・・あ！お前・・・！」

「警部さん・・・」

「なんでここにいるんだ？」

「電波ウィルスが怖くて隠れてたんです。じゃあ！」

スバルは逃げるようにしてこの場から立ち去った。

「・・・・・・・・例の怪電波を追って二度もあの少年に出会つとは・・・」

その日の夜コダマタウン 展望台

スバルは、いつものように展望台に来ていた。

「信じられないよ……まだ夢を見てる気分だ。ありがとう、ウォーロック」

スバルはトランサーの中にいるウォーロックに話しかける。

『………わからん。理解に苦しむぜ』

「えっ！？なにが？」

『嫌ってた連中を助けてやるなんて……お前も変わった奴だな』

「そんなの……あたりまえだよ……人間なら」

『そうか……人間ならあたりまえか……。まあいい。これからもよろしくな、ロックマン』

「うん」

スバルは笑顔で返事をした。

第8話 電波変換！ 後編（後書き）

電波変換編終わりました。次は、キグナスを出そうと思います。キグナスから始まり、オヒュカスで前半は終わろうと思います。キグナスからオヒュカスまでの順番はまだ、決まっております。なので、もし「このFM星人から出してほしい」、「この順番でFM星人を出してほしい」という方がいたら、感想の方に書いておいてくれるとうれしいです。

第9話 スバル、オン・エア！（前書き）

いきなりコダマ小学校から始まります。

第9話 スバル、オン・エア！

コダマ小学校 運動場

今委員長達のクラスの5年A組は、体育の時間で運動場に出ている。

「……はあ……ロックマン様に会いたい」

「い、委員長！」

「格好良かったわよね？……あれ」

「いったい何者なんでしょうか……」

「愛しのロックマン様、今どこにいるの？」

委員長、ゴンタ、キザマロがロックマンの噂をしているようである。

その頃スバルはコダマタウンのとあるビルの屋上にいた

『心の準備はいいか、スバル?』

「……うん」

『よし、……やれ!』

「電波変換! 星河スバル オン・エア!」

スバルはトランサーを天に掲げ、そう言った。

すると、この前の青き戦士に姿を変える。

『気分はどうだ?』

「ちよつとドキドキしてる……」

(意識はあるか……)

ウォーロックは何かを考えている。

『……まあ、いい。トレーニング開始だロックマン!』

「ロックマン?」

『あの警部がそう言ってただろ? 行くぞ!』

そう言ってウォーロックはスバルを引っ張っていく。すると、猛スピードで電波の道を進んで行く。

「うわー！」

ロックマンは、途中で少し止まったり、また猛スピードで電波の道を駆け抜けて行く。

「凄い！凄いスピードだ！」

『電波変換したお前は、ウェーブロードを移動できる。その気になりゃ、地球一周に一秒もかからん』

「うわっ！凄すぎる！」

ロックマンはしばらくウェーブロードの移動していた。

『その調子だ。大分慣れてきたな』

「うん。ねえ、ウォーロック、父さんの事だけど……」

『しつこい奴だな。何も知らねえよ。』

「……チエ！……うわ!？」

ロックマンはよそ見をしていて、モノレールにぶつかりそうになったが……

「うわあああああ……あれ？」

・・・ロックマンはそのままモノレールを突き通っていった。

「びっくりした!」

『落ち着け、俺たちは電波だぞ』

「そ、そうだった・・・まだ慣れないや。あはははは!」

ロックマンは笑いながらウェーブロードを駆け抜けていく。

その頃アマケン 研究室前の廊下

「よいしょ!・・・誰もいないな」

すると、何個もある内のドアから、やせ細っていて、目の下にくまができている青年が大きなトランクを持って出てきた。

「今日はもう帰るのか、宇田海？」

「……えっ!? ……あ、天地さん! い、いえ、あの……」

いきなり天地と、アマケンに務めているであろう人が廊下の角を曲がって、宇田海に話かける。

「……? それは……もしかして完成したのか、宇田海!??」

「ああ! ……天地さんには関係ないでしょ! ? 私がどこで何をしようよと、かか、勝ってです」

宇田海は、トランクを隠すようにして抱きつく。

「! ? 宇田海……」

天地は悲しそうな顔をした。

「宇田海失礼だぞ、天地さんに向かって!」

『よし、もういいだろ。そろそろ帰るか?』

「ちょっと待って、アマケンに寄って行く」

ロックマンはウェーブロードをたどって、アマケンに行く。

「……………あつ！天地さんだ。ん？何かあったのかな？」

すると、ロックマンは天地を見かけたので廊下の窓の前で停止する。

「じ、じろじろ見ないでくれますか！」

「……………宇田海」

「嫌なんです！あれこれ聞かれるの……私のことはほつといてください！」

宇田海はそう言つとトランクを持って走っていった。

「……………なんて奴だ、この研究所であいつを働かしてやってるのは天地さんなのに！」

「いいんだ。仕方ないさ」

「えっ？」

「宇田海は以前いた研究所で辛い目にあっただ。尊敬していた上司が彼の発明を盗んで、自分の手柄にしてしまったんだ。それ以来彼は人を信じられなくなってしまった。寂しいな・・・信用してもられないのは」

ロックマンは窓の外から今の話を聞いていた。

ボタン！ブロロロロロ！

ロックマンは一台の車がアマケンから出て行くのを見かけ、ゆっくりその後を追っていく。

『面倒な生き物だな、地球人は』

「うん」

『まあ、俺は地球人がどうなるうが知ったこっちゃねえが・・・』

「えっ!?!」

『だがスバル、お前は別だ。俺の役に立つなら、お前だけは守ってやってもいいぜ』

「なんだよその言い方？そんな言い方はないだろ、ウォーロック！
ビョイイイイン！！バコーン！

「うわ！痛てて・・・」

スバルはビルにぶつかった。

『何やってんだ!?!』

「ごめん、興奮して仮死周波数帯に出ちゃった。すぐ戻る」

ビヨイイイイン!!

仮死周波数帯から戻った。だが目の前に大量のウィルスが現れた。

「うわ!電波ウィルス!」

メットリオとビリエースとあと3種類のウィルスがたくさんいる。

1種類目は両腕に剣を持っている、バサリカというウィルス。

2種類目は石像みたいで、片手に剣を持っている、モノソードというウィルス。

3種類目は火のついたバイクみたいな姿をしている、モエローダーというウィルス。

『へっ!バトルのトレーニングにちょうど良い。戦えスバル!』

『メットー!メットー!』

「うん!えい!」

ロックマンはメットリオにウォロックの口から出るロックバスターを打ち、デリートしていく。

『メット〜！メット〜！』

『ビリビリビリ〜！』

今度はビリエースがロックマンに向かって電撃を放つ。

「うわ〜！」

ロックマンはかろうじて避け、ロックバスターを打ち、デリートする。

「どけ〜！どけどけ〜！」

ビルの前に集まった人を掻き分け、五陽田警部がやってきた。

「はあ、はあ、・・・！？ロックマンめ。やっと見つけたと思ったら、電波ウィルスも一緒だと？」

五陽田警部はトランサーに写った画面を見て呟いた。

『モノソー！モノソー！』

『バサリー！』

大量のモノソードとバサリカがロックマンに襲い掛かってくる。

「バトルカード！プレデーション！ソード！」

ロックマンはソードのカードをウォーロックにプレデーションさせる。すると、ウォーロックがソードに変わる。

「えーい！」

ロックマンはソードで大量のモノソードとバサリカを切り裂いていく。

ピー！ピー！ピー！

「電波ウィルスが消えていく……いったい何が？」

五陽田警部がトランサーを見ながら呟く。

残りはモエローダー3体になった。

『モエローー!』

3体一気にロックマンに突っ込んできた。

「くっ!」

ロックマンはモエローダーの攻撃をかわし、被害を出さないため山の方へと誘い込む。

「よし!ここなら・・・バトルカード!プレデーション!エアスプレッド!・・・シュート!」

ロックマンは、よく狙いを定め放った。するとゆづばくし、3体一気にデリートすることができた。

ロックマンは全て倒すと、地上に降り、電波変換を解いた。

「・・・ぶうー」

『やればできるな』

「ありがとう、ウォーロック。ずいぶんと遠くまで来ちゃったね」

スバルは、トランサーを開きウォーロックに言う。

『・・・スバル。我々FM星人は人間の悪い心や弱い心に付け入り、その人間を洗脳して操ることができる』

「人間を操る？」

『地球の破壊をもくろむ9人のFM星人は、いずれ人間に目をつけるだろう』

「そんな・・・。じゃあウォーロックも僕を・・・」

『お前の心は操れねえ・・・。お前とお前の親父さんは特殊なんだ』

「父さん！？ウォーロック、やっぱり君は！？・・・」

『何も知らねえと言っただろう！？』

「あっ！」

ウォーロックは自分からトランサーを閉じた。

スバルは悲しい顔をして少し上を向いた。すると崖の上に誰がいることに気がついた。

「……宇田海さん？……宇田海さんじゃないか？何やってるんだあんな所で？……って、まさか！」

すると宇田海は崖から飛び降りた。

「うわああー！う、宇田海さんが！どうしようウォーロック！？」

『どうしようって言われてもなあ』

すると宇田海の背中から翼が出てきて飛んだ。

「あはっははは！成功だ！やったですー！試験飛行大成功ですー！」

「あっ！！」

スバルは驚く。まさか、翼が出てくるとは思わなかったからだ。

「これは私のもの、私だけの発明品です！絶対誰にも渡さないぞ！」

宇田海は独り言を言いながら飛んでいた。よほどうれしかったのだらう。

「何なのあれ？」

『おもしろい奴だなあ』

ウォーロックは少し笑いながら言う。

とある電脳空間

バサ！バサ！バサ！

『・・・この周波数・・・僕と同じ匂いがするよ。フッフッフ！』

第9話 スバル、オン・エア！（後書き）

引き続き、FM星人を出す順番お待ちしています。

第10話 キグナスの挑戦！（前書き）

最初のキグナスってあんまり覚えてないな・・・。

第10話 キグナスの挑戦!

大成功です!・・・ん?・・・げっ!ね、燃料切れ?・・・うわあ
あああ!!

宇田海の背中についている機械の翼は燃料を切らし、宇田海は下の
森へと落ちていく。

「うあ!墜落した!」

『ますますおもしろい奴だ』

「のんきな事言ってる場合じゃないよ!宇田海さん!」

ウォーロックは少し笑いながら言う。スバルに注意される。

スバルは下の森へと走って行く。

森

宇田海は何とか傷一つなく助かった。

「はあ・・・はあ・・・助かった」

宇田海がそう呟いていると、スバルが走ってくる。

「怪我がなくて良かったね。木に引つかかるなんて運がいいよ」

「あ、ありがとう。君は確か天地さんの知り合いのスバル君？おかげで・・・いや、怪しい。何故君がこんなところに？・・・もしや私の発明を狙うスパイでは！」

「スパイ？違うよ！」

「いいや！そうに違いない！隙を見てこのフライングジャケットを盗むつもりなんだ！嫌です嫌です！誰にも渡すもんか！」

宇田海が横にあるフライングジャケットにしがみつきなから言っ。

グ~~~~~

「あっ！」

グ~~~~~

「ん？僕も・・・」

宇田海とスバルのお腹がなる。

「あはは！ホツとしたらお腹空いちやったね。まってて……」

スバルはポケットからチョコレートを取り出して半分に割り、宇田海に渡そうとする。

「はい、半分こ」

宇田海は食べよとはしない。

「もう、疑り深いんだから。」

スバルはもう一個の方を宇田海に食べてみせる。

「……ねー!」

それを見せると宇田海は安心して食べ始める。

森 夜

「私は、どうしても人を信じる事ができないんですよ。いい人も

一杯いるってわかってはいるんですけど・・・」

そう言って宇田海は車に乗る。

「本当に乗らなくていいんですか？」

「うん。自分で帰れるから。元気出してね宇田海さん」

「ありがとう。じゃあ」

そう言って宇田海は車を発進させる。スバルは見えなくなるまで見送っていた。

宇田海の車の中

「スバル君優しい子ですね」

『危ない危ない。いいのかな？そんなに簡単に信用していきなり声が聞こえる。』

「・・・確かに。あの優しさは、逆に怪しい。・・・！？誰ですか、今の声は！？」

宇田海は声に気づく。

『ボクだよ』

するとカーナビにキグナスが現われ、いきなり光出す。

「うわあああー!!」

宇田海の手はカーブのところにぶつかり、爆発する。

その頃スバルは

スバルは、ロックマンになってウェーブロードを進んでいた。

『理解できねえ』

「えっ？何が？」

『食い物だ。お前だって腹ペコなのにやる理由はない』

「いいんだ。困っているときはお互い様だよ」

『まあ、好きにすればいいさ』

(FM星人は他人を信じない・・・似てるなあいつと)

宇田海は白い空間の中にいた。

「誰ですか？」

キグナスが目の前に現われる。

『ボクはキグナス。FM星から来た君の友達』

「友達？」

『心配いらないよ……。ボクが君の心の傷を癒してあげるよ。さあ、ボクの物になるんだ』

キグナスはそう言うと目が光る。

スバルは天地に会いに来ていた。

「えっ！？宇田海がフライングジャケットで飛んだ？本当かいスバル君？」

「偶然見たんだ。かつこ良かったよ」

「そうか、ついに！よし！」

天地はそう言っつて宇田海の研究室に走り出す。

宇田海の研究室

パソコンを操作している。

「宇宙には今は使われていない昔の人口衛星がこんなにあるんですね。・・・これにしますか」

宇田海は、無数にある人口衛星の内一つをモニターに出す。

「電波アクセス完了。これで私を裏切った上司に罰を・・・」

「宇田海！」

すると扉から天地が入ってくる。

「宇田海、フライングジャケット完成おめでとう！」

「!？」

アマケン 玄関

その頃スバルはアマケンから帰ろうとしていた。

ウィーン

自動ドアがあき、外に出る。

「……!？」

「見つけたわ、星河君」

「こんな所で油を売っていたんですか？」

「大人しく観念して学校へ来い！」

外に委員長、キザマロ、ゴンタが立っていた。

「しつこいよ！」

スバルは委員長たちをかわし、宇宙ロケットがあるほうへ走りだす。

「逃がすか登校拒否！」

ゴンタはスバルを追う。段々距離が縮まってくる。そして、スバルは捕まった。

「いたたたた！離せ！離せよ！」

スバルはゴンタに腕を掴まれ動けなくなった。

「今なら遅刻ぎりぎりです間に合いますわ。さあ、行きましょう」

「いい加減にしてくれよ！！」

スバルは振り放そうと暴れながら言う。

「バカな！学会で発表しようですって!？」

「そうだ。半重力飛行システムの実用化は人類の夢。発表すれば、エンジニアとしての君の才能も認められる。」

宇田海は黙りこむ。

「……?どうした宇田海？」

「……どうして天地さんがフライングジャケットの事を知ってるんですか？」

「あはははは！みんな知ってるさ。君は隠し事が下手だから」

「……そうか！私を裏切って発明を横取りしようとしてるんですね……天地さんまでが!!」

「う、宇田海!？」

『そうさ。この星は裏切り者で満ちている。地球人は君の敵なのだ』

宇田海のトランサーが開き、キグナスが言う。

「う、うわあああああ!」

宇田海がいきなり光出す。

ドカアアアアアアン！！

アマケンの二階が爆発した。

「「「うわあー！！」「」」

「あ、アマケンが爆発した？」

スバルがそう言うと、爆発した場所から白い光が飛び立ち後ろにあつたロケットの上に鳥のような姿をした人間が立つ。

すると、人が立っている。

「何あいつ？」

委員長が言う。

『キグナス！』

スバルはウォーロックが言うと、委員長たちに気づかれないようにその場を離れる。

「ウォーロック、あいつを知っているの？」

『FM星人のかつての仲間だ。キグナスと地球人が合体したんだ！』

「合体!？」

スバルはそれを聞いてロケットの上を見る。

「天地さん。あなたに罰を与える。研究所もろとも滅びるがいい！
ハア！」

宇田海はそう言うと自分の翼についている無数の羽をアマケンへと飛ばす。

アマケンが何度も爆発する。危険を恐れ、アマケンにいる人たちが外に非難しようとしている。

「天地さん！」

「スバル君！宇田海が変身した。」

「宇田海さんが変身！？」

「この目で見た。間違いない」

「・・・宇田海さんを止めなきゃ！」

「スバル君！」

スバルは走りだし、人がいないところに移動する。

「・・・ウォーロック！電波変換だ！」

『言われるまでもねえ！奴には借しがある！やれ、スバル！』

「電波変換！星河スバル オン・エア！」

スバルは電波変換してロックマンに変身した。

第10話 キグナスの挑戦！（後書き）

戦闘は次からあります。

第11話 衛星墜落！ 前編（前書き）

「11話ついでにこのように……アニメで言いつつミニマムが出る頃ですね」
「^ ;」

第11話 衛星墜落！ 前編

サテラポリス

「二つの強力な怪電波が天地研究所で実体化、現在戦闘中！」

「うーん。一つはロックマンだとして、もう一つは何者なんだ？」

五陽田警部は少し考えて呟いた。

アマケン 宇宙ロケット前

「やめる！キグナス！」

キグナスはロックマンの方を見る。

「君は・・・ウォーロック！」

『こんな所でお前に会えるとわな。キグナス！』

「キグナスウイングと呼んでもらおうか。会えて嬉しいよウォーロック。さあ、アンドロメダのカギを渡して貰おうか！」

『断る！俺に刃を向けたお前たちを、俺は絶対ゆるさねえ！』

「・・・ならば裏切り者の巢食うこの研究所もろとも、裏切り者の君を葬ってやるう！キグナスフェザー！」

キグナスウイングはロックマンに向かって無数の羽を飛ばし始める。

「くっ！」

スバルは周波数変えつつ羽を避ける。

そして全部かわしきったところでジャンプする。

「えい！」

ロックマンがキグナスウイングに向けてロックバスターを放った。しかしキグナスは翼で空を飛びながらかわす。

ロックマンはウォーロックを前に出し、キグナスウイングに向かって勢いよくジャンプする。

キグナスウイングもスバルに向かって突っ込んでいく。

『うおおおおおー！！』

「はあああああー！！」

そして空中でぶつかり合った。

「くっ！」

「うっ！」

ロックマンは肩を少しやられ、キグナスウイングは右翼に少し傷がつく。

「ああ、ロックマン様が・・・」

「互角かよ!」

「あのキグナスウイングと言う奴強いです!」

まだ逃げていなかった委員長たちが言う。

『踏み込みが甘いぞスバル!何をためらっている?』

ロックマンが着地してからウォーロックが言う。

「けど、あいつを倒したら宇田海さんが・・・」

『逆だ!合体した地球人を救うには、奴に勝つしかねえんだよ!』

「ボクに勝つ?不可能だ!」

キグナスウイングが鼻で笑いながら言う。

「くっ!・・・バトルカード!プレデーション!ガトリング!」

左手をガトリングに変え、キグナスウイングの羽に向かって撃つ。

「くっ!」

ガトリングは見事にヒットした。

「ロックマン様~~~~!素敵~~~~!」

「いいぞいいぞ！やっちまえー！」

委員長とゴンタが言っているとサテラポリスがやってきて、五陽田警部がパトカーから降りてくる。

「御用だ御用だ！ロックマン及びその他一味！大人しくお縄に付け！」

ロックマンとキグナスウイングは全く聞いていない。

「今度はボクの番だ！食らえ！ダンシングスワン！」

キグナスウイングは体をひねって回り竜巻を起こし、ロックマンの方へ向かっていく。

「うわああああー！」

ロックマンは避けられず、そのまま巻き込まれる。

「うっ！！」

ロックマンは空中で落とされる。そしてキグナスウイングは胸に手を構え、次の攻撃にうつろうとしていた。

「ワタリドリー！」

青い光を三つ出し、三匹のひよこになる。その内二匹は黒色、一匹は白色のひよこになりスバルに突っ込んでいく。

『……』

アマケン 司令室

天地とその部下はここに残り、キグナスウイングが飛んで行った方向を調べていた。

「・・・！こゝこれは！」

「どうした!？」

「廃棄された昔の人工衛星が落下してきます！」

「何!？」

宇宙空間 人工衛星

人工衛星が地球に向かって落下しようとしている。その人工衛星の中にキグナスウイングがいて、何かを操作している。

「フフフ。元々は宇田海が復習のために用意した作戦。だが、今使うのも悪くない……。ハッハハハハハ！」

「何だって!？」

「人工衛星が落ちてくるだと!?! バカな！」

ロックマンと五陽田警部が言った。

「衝突まで後7分30秒しかない。皆さん、速く逃げてください。」

「！」

天地が司令室からアマケンにいる人たちに言い放つ。

「うわあああ！！」

「きゃあああ！！」

アマケンにいた人たちは、悲鳴を上げながら逃げていく。

『キグナスウイングが人工衛星を操ってやがるんだ。俺たちも行くぞ！』

「行くなってどうやって？」

『奴が使ったのと同じ道を使うんだよ！』

「そうか！！」

そう言つとロックマンはウェーブロードへジャンプする。

「ロックマン……」

五陽田警部が呟く。

ロックマンは電波の複数の分岐点にやってきた。

「人工衛星に繋がるウェーブロード……あれだ！」

スバルは一番上にあるウェーブロードを選び、そのウェーブロードを進んでいく。

「ん？ロックマンが宇宙へ？」

五陽田警部はトランサーを見ながら言った。トランサーにはロックマンが人工衛星に向かっていく映像が映し出されている。

宇宙空間 人工衛星

スバルは地球に向かっていている人口衛星の前で止まる。人工衛星は大

気圏に突入しているため、少し燃え始めている。

「邪魔はさせないよ、ロックマン!」

いきなりキグナスウイングの声が出たため辺りを探す。すると、隣にあるウエ・ブロードにいる事に気づく。

「これはほんの手始め。私は裏切り物に満ちたこの星、地球を滅ぼす」

「宇田海さん」

アマケン 司令室

天地は一人だけ残り、人工衛星をコントロールしようとしている。

「……だめだ……コントロールできない……」

天地はモニターを見る。

「……人工衛星衝突まで……後4分……」

第11話 衛星墜落！ 前編（後書き）

次の回までにFM星人を出す順番決めないと・・・。

FM星人を出す順番は明日まで募集します。ある人だけでいいです

けど（＾―＾・）

第12話 衛生墜落！ 後編（前書き）

後編から分かりやすいようにキグナスが操っている宇田海は『^{キグナス・ウイング}』、
自分の意思の宇田海は「」にします。

「うん！バトルカード！プレーション！キャノン！」

『・・・くっ！させるか、ダンシングスワン！』

キグナスウイングは回転し竜巻を起こし突っ込んでくる。

「・・・シュート！」

ロックマンはキグナスに命中させる。

『ぐああああああああああああ！！！！』

「やった！」

キグナスウイングは羽が取れていき、宇田海の姿に戻った。

「宇田海さん」

「・・・あのときのスバル君の優しさは本物でした。信じようとしなかった自分はずかしい。」

宇田海はもとの姿に戻ったと思われたが、羽が宇田海のもとへ集まっ
つていき白い光に包まれる。

「ああああああああ！！！！」

「宇田海さん！」

『しまった！奴はまだ生きている。』

白い光はキグナスウイングになる。

「き、キグナスウイング！」

『この男は使い心地がいいのでねえ。もう暫く使わせてもらおうよ』

「くっ！」

『ロックマン！今日の礼はいつね必ず！』

「待て！」

キグナスウイングはウェーブロードを使って地球に向かう。それを追ってロックマンも追おうとする。

『スバル人工衛星が先だ！』

「……………くっ！」

衝突まで残り3分

「どうすれば止められるんだ!？」

『ここまで来たらもう止められないぜ』

ロックマンは辺りを見回し人口衛生の大きなアンテナを見て考える。

「・・・あれだ!」

ロックマンはアンテナの反対の電波に乗り換える。

「よし！・・・えい！」

ロックマンはアンテナのつけ根に向かってロックバスターを放つ。

ドガアアアン！！

大きなアンテナと人口衛生が爆発で切り離れた。

すると、人工衛星はアンテナがなくなった分重さが変わり、起動がずれる。

人口衛生は無数に散らばり、海の方へ落ちていく。

「人工衛星がレーダーから消えた！」

天地はレーダーから消えたことを確認する。

「・・・ロックマン敵なのか・・・味方なのか・・・」

五陽田警部は呟く。

夕方 コダマタウン 展望台

スバルは、いつもの展望台から茜色に染まる夕日を見ていた。

「・・・心配するな」

スバルはトランサーを開きウォーロックを見る。

『アンドロメダのカギを狙ってキグナスはまたやって来る。チャンスは必ずある』

「ウォーロック、アンドロメダのカギって何なの？」

『お前には関係ない』

ウォーロックが軽くあしらう。

「……宇田海さんは必ず助ける！」

スバルは夕日を見ながらそう決意した。

第12話 衛生墜落！ 後編（後書き）

キグナス編は終わりです。

勇氣さんと天神地祇さんアドバイスありがとうございました。
オ、オリキャラか・・・頑張って考えようと思います。もし、思いつかなかつたら募集しようと思います。

第13話 学校（前書き）

題名はもうちょっと考えればよかったかな・・・まあいいか

第13話 学校

ある日の午前中 スバルの部屋

スバルは机の前に座り勉強していた。

『ぐぬぬぬ〜！退屈だ！退屈だ！！退屈だぞー！！』

ウォーロックはトランサーを開きスバルに訴える。

「うわあ！しー！何やってるんだよウォーロック！？もし母さんに聞かれたら 「スバル！。どうかしたの？」 !...な、何でもないよ母さん！」

一階からあかねが聞こえる。

「そっ？ならいいけど」

何とか誤魔化せた。

『スバル退屈だ。なあ何処かにでかけようぜ』

「やだよ。それに今勉強してるんだ」

『勉強・・・だったら学校ってとこ行こうぜ！』

「え！？」

『みんなそこで勉強してるんだろっ？毎朝むかえに来る連中とか』

「それはそうだけど・・・」

『俺、行ってみたい！行こうぜスバル！行こうぜ！！』

ウォーロックはトランサーの中で暴れながら駄々をこねる。

午後

『なあ、スバル！スバルってば！！』

夕方

『行こうぜスバル！別に減るもんじゃねえくだろ？』

深夜になっても

『た〜くけちだな！あ〜あ退屈だ退屈だ！退屈だー！！・・・ん？
ぐわああああー！』

スバルはすでに寝ていたがウォーロックのせいで起きる。そしてスバルはウォーロックに恐ろしいことをし、トランサーを上着でぐるぐる巻きにして縛る。

「・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

カタカタカタ！

だが、トランサーはまだ動いている。

「何やってるのスバル。もう寝なさい」

あかねの声が聞こえる。

「はい」

スバルは返事をする。

『・・・開ける！・・・スバル！・・・』

スバルは電気を消して寝始める。

カタカタカタカタ！

「う〜ん・・・」

スバルは耳をふさぎながら寝る。

カタカタカタカタ！カタカタカタカタ！カタカタカタカタ！カタカタカタカタ！
タカタ！

「……………あああ！もう！！いくら駄々こねたって無駄だよ！！絶対、絶対！学校なんて行かないからね……………！！！！」

次の日 委員長達

委員長達はスバルの家の前で止まりカバンを置く。

「覚悟なさい星河スバル！！今日こそは何が何でも学校に来てもらうわよ……………！！！！」

ドカー……………ン！！

委員長の中にある火山が爆発していた。委員長の目が怖い。

「たく、とんでもねえ野郎だ。毎朝委員長がわざわざむかえに来てるってのに。」

「・・・スウー・・・ハアー・・・」

委員長はドアの前へ行き深呼吸をした。

インターホンを押そうとした時ドアが開き、スバルが学校のカバンを持って出てきた。スバルは目の下にくまができている。

「・・・行って来ます・・・」

スバルは学校へと歩いていく。

「え!?!え!?!」

委員長は状況が飲み込めていない。

「それが、どついつ訳かいきなり学校へ行くって言い出したのよ。」

あかねが委員長に説明する。

「えーーーー!!」

学校 正門

スバルは大きな正門の前で止まる。

『おお〜。これが学校か〜！』

トランサーから喜んでいるウォーロックの声があった。

「この前ウエーブロードから見たる？」

『細かい事は気にするなって！行こうぜスバル！』

「うわー！」

ウォーロックはスバルをトランサーの中から引っ張る。

学校 教室

スバルはカバンを置いて、自分の席に座る。スバルの席は5列ある内の3列目、後ろから2番目である。

「ちゃんと学校に来たんだから静かにしてくれよ？」

『ああ、分かってるって』

委員長がスバルのもとへ歩いてくる。

「星河君やっ和学校へ来る気になったのね！」

「ふわあ〜〜」

スバルは委員長の話しは全く聞かずあくびをする。

1 時間目

このクラスの担任の女の先生が話し始める。

「これでやっと、5年A組み全員そろったわね！星河君、もし何か分からない事があったらみんなに聞いてね？」

「はい……」

元氣なく返事する。

「委員長、お願いね」

「はい！任せてください！」

委員長は元氣に返事する。

「それじゃあ授業を始めましょうか」

2 時間目

『何か退屈だぜ……』

ウォーロックがトランサーを開けて言う。

「……し……」

スバルはトランサーを閉じる。

4 時間目

『何かすっげー退屈だぞ・・・』

スバルは開こうとするトランサーを必死に抑える。

5 時間目

『うおおおおお！！退屈だ退屈だー！！これじゃあスバルん家に居ると変わんねえー！何でこつも学校って奴は退屈なんだ！？』

スバルは必死に抑える。周りにはまだウォーロックの声は聞こえていない。

「くっ！静かにするって約束だろ、ウォーロック？あと少しだから・
・」

『こんなに退屈じゃ約束なんて守れるか！』

キーン・コーン・カーン・コーン！

「あら、じゃあ今日はここまで」

「起立！礼！」

「」「」「」「ありがとうございます！」「」「」

何とか今日一日が終わった。

「終わった」

スバルは少し安心する。

『よし、じゃあ帰るぞスバル！！』

「うわー！」

ウォーロックはそう言ってスバルの腕を引っ張って教室を出て行く。

「あつ！星河君明日もちゃんと来るのよー」

委員長が言う時にはもうスバルの姿はなかった。

第13話 学校（後書き）

最後が何か無理やり・・・無理やりにしたのは理由があるんですけどね

次からFM星人のどれかを出します。楽しみにしてくださると嬉しいです。

ウォーロックっておもしろいなー。クラスに一人はいる感じですね。

第14話 ハープ・シンガー見参!

スバルが学校に行ったその日の深夜

スバル宅

~~~~~

外から琴を弾くような音が聞こえる。

『……何だ、この音は?』

ウォーロックは目を覚まし呟く。

「……………どうしたの?」

スバルは目を覚ましウォーロックに尋ねる。

『スバルお前には聞こえないのか?』

「何が?」

どうやらスバルには音は聞こえないようだ。

『……いや、なんでもねえ』

「そう……」

スバルは眠りにつく。

『……………』

暫くウォーロックは起きて考え事をしていた。

次の日 登校中

スバルは学校に登校していた。

「あら、今日も登校するのね感心感心！」

「ん？委員長」

後ろから声が出たためスバルは後ろに振り向く。すると委員長達がいた。

「その調子で続けなさい」

「続けるよー！」

「続けてください」

委員長達はスバルを追い越して行く。すると足を止め、目の前にあるビルのスクリーンを見る。赤髪の女の子がギターを弾きながら歌を歌っている。

「あ、響ミソラです！」

「素敵！」

「俺もファンだぜ！」

『 例えばこの先 二つの心が 違う夢を見てもそばにいるから・・・  
』

スバルはそんな事はお構いなしに学校へ向かう。



下校中

スバルは学校を終え下校していた。そして歩きながらトランサーを開ける。

「・・・今日どうしたの？」

『何が？』

「昨日と違って静かだった」

『悪いかよ？』

「何か気味が悪い」

『ケツ！』

ウォーロックはそっぽを向く。

「急いで！急いでくださいーいー！」

「もう、どうしてこんな急なのよキサマロ！？」

「そんな〜！ネットで見つけた事ほめてくださいよー！」

「響ミソラのシークレットライブだもんな？」

「なんとしても見るわよー！」

委員長達が喋りながら走っている。そしてスバルを追い越して行く。

### 響ミソラのライブ会場

ライブ会場は満席になっている。

ざわざわざわざわ！

「何とか入れましたね、良かったです！」

「そろそろ時間だね。私、生で本人を見るのは初めてよ！」

「ボクもです！」

「ミソラちゃん！はやく！」

ゴンタがそう言うのと、ミソラコールが湧き上がる。



ライブ会場 外

数十分して観客全員が出てくる。すると全員響ミソラのトレカを持っている。

「良かったですね、ミソラちゃんのトレカ貰えて」

ボカッ！

ゴンタがキザマロの頭を殴る。

「ばか野郎！ミソラちゃんが入院したのに良いわけねえだろ！」

「いたたた・・・ああ！ゴンタ君のトレカ、レアカードですよ！」

「ええええ！ラッキー〜！！！」

ゴンタの持っているトレカは周りが金色に光っている。

「ミソラちゃんが入院したのに何がラッキーよ！？・・・私のカードと交換しなさい！」

「嫌だよ！」

ゴンタは逃げ出す。

「待ちなさい！！！」

「ゴンタ君！！！」

委員長とキザマロはゴンタを追い始める。

会場 控え室

ガチャ！

ドアが開きさっきの男のひとが入ってくる。そして膝まづく。

「ミソラ、どこ行っちゃったんだ〜ミソラ〜!？」

その日の深夜 スバル宅

）　　）　　）　　）　　）

また音が聞こえる。

『……………!?!?』

ウォーロックは何か気づき家を出て行き、ある場所に向かう。

ウォーロックは電波を発信しているビルに着く。

『……………来たわね!』

『……………やはりお前かハープ!』

上を見ると琴の姿をした電波体が見える。ウォーロックはこの電波体と知り合いみたいだ。

『どうしてFM星を裏切ったの、ウォーロック?』

『お前の知ったこつちやねえ!ハープ、お前の目的は何だ?俺のコールバンドで呼び出したのはお喋りしたいからじゃないんだろ?』

コールバンドとは、ある特定の電波体が違う電波体を呼びだすものである。

『ええ、任務を受けてこの地球に派遣されて来たの。一つはアンドロメダのカギを見つける事。もう一つは 『地球人の抹殺か?』』

そして、裏切り者のしまつ。アンドロメダのカギを渡して貰えるなら、私は任務を切り上げてFM星に帰れるの・・・協力してくれない？』

『それはできねえ相談だ』

『そうになると、残り二つのどちらかをしなきゃならないのよ・・・』

『どっちを？』

『そうねえ・・・』

ウォーロックとハープは上のウェーブロードへ上がる。

『食らえ！』

ハープは頭から数発ビームを放つ。

『フーン！』

だが、ウォーロックは全て避ける。

## スバル宅

「ウォーロック?」

スバルは起きて、ウォーロックがない事に気づく。そして、ビジライザーをかける。

「!?!」

電波空間は乱れていた。

スバルは服を着替え、家を飛び出す。

「……あれだ!」

電波の乱れの原因を見つける。そこには、何かがぶつかって走っていた。スバルはそこに向かって走り出す。



『おりやああああ!!』

『くっ!!』

ハーブは屋上に倒れる。

『くっ!・・・さすがね・・・私じゃ勝てないわ・・・』

『分かったんならさっさと帰れ!』

『このままじゃ帰らないんだもん!』

ハーブはウォーロックに突っ込んでいく。それをウォーロックは爪ではたき落とそうとしたが、それをかわし、上へと逃げる。

『チッ!』

ウォーロックは舌打ちをし、帰ろうとする。

『勝負はこれからよ!!』

ハーブの音がする。すると、光を放ち電波人間が出てくる。その電波人間は、金髪で赤いヘルメットをし、赤い体で、水色のギターを持っている。ギターにはハーブの顔がある。

「ここからは、このハーブ・シンガーが相手するは!」

『!!電波変換したのか!?!』

『シヨックノート!』

スピーカーを二つ出しす。ギターを弾くと、スピーカーから音符型の電波が出てウォーロックを攻撃する。だが、ウォーロックは避ける

『マシンガンストリング!』

ギターから弦をウォーロックに放つ。ウォーロックはかるうじで避ける。

『くっ!でやあああああ!』

『シヨックノート!』

『ぐわああああ!』

ウォーロックは攻撃しようとしたが避けられ、しかもシヨックノートを放たれあたってしまう。

「とどめよ!シヨックノ　　ウォーロック!」　　!??何?」

とどめをしようとするところにスバルが現われる。どうやら、ビルの階段が上がってきたようだ。

「ウォーロック、大丈夫!」

スバルはウォーロックに近づいていく。

『バカ野郎!何しに来た?』

「だって君が心配で!・・・」

「まとめてぶっ飛ばしちゃうんだから！」

「ウーーーーー！ウーーーーー！ウーーーーー！」

「えっ!?!」

サテラポリスのパトカーが来る音が聞こえる。

「サテラポリスね・・・くっ!」

ハーブ・シンガーはサテラポリスだとわかると逃げ出した。

『チッ！ハーブの奴め・・・』

ウォーロックはそう言つとトランサーの中に入って行く。

「ウォーロック?」

「ウィーン！」

すると、サテラポリスがエレベーターからやってきた。

「御用だ！御用だ！御用だ!・・・ん!?またお前かー!!」



ミソラは南の島いた

「暫く帰らないけどよろしく!」

『あ、待ってミソ・・・』

電話を切る。

「・・・それで、どんな事をすればいいの?」

ミソラはギター型トランサーに話しかける。中には、ハーブが入っている。

『とりあえず、ゆっくりバカンスを楽しみましょう!・・・で、まずはうーーんと暴れてもらおうかしら』

「そつね!」

そう言ってミソラはギターを弾き始める。

## 第14話 ハープ・シンガー見参！（後書き）

ハープ登場ですね。

勇輝さん、天神地祇さんアドバイスありがとうございました。  
新要素として、新FM星人を出そうと思います。いつになるかわかりませんが、ハ〜ハ；

感想・アドバイス待ってまーす

第15話 ハープ・ノート推参！ 前編（前書き）

・ ミソラ・・・キャラ崩壊。・・・あんまり書きたくなかったけど・・・

第15話 ハープ・ノート推参！ 前編

サテラポリス出入り口

「まったくもう、いい加減にしてもらいたいですね。子供が夜フラフラと」

「申し訳ありません・・・」

外であかねがスバルの事で五陽田警部に頭を下げて謝っている。無理もない、真夜中にビルの屋上に居たのだから。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

スバルは下を向いて黙り込んでいる。

サテラポリスからの帰り道

スバルとあかねは家に歩いて向かっていた。

「ねえ、スバル、あなた最近元気になってきたじゃない。お母さん嬉しいんだ。スバルが学校に行ってくれるようになって。」



あかね足を止め、スバルに笑顔で言う。

「……でも、どうかしたの？何かあった？」

「………何でもないよ母さん。本当に何でもないんだ」

スバルは少し考えたがさっきの言わない事にした。

「……そっか。よし、帰ろう！」

「……ごめん」

そう言って再び二人は歩き出す。

「ねえ、ウォーロック」

『何だ？』

「さっき誰と戦ってたの？」

スバルは自分の机の前に座って、トランサーを開けて尋ねる。

『お前には関係ない』

「関係なくなんかないよ！FM星人なら地球を滅ぼしに来たんじゃないの？」

『まあ、そう言う事だな。』

「ええ！？じゃあどうするの！？」

「ハーブの事は良く知ってる。派手好きの奴だから、心配しなくても向こうから騒ぎを引き起す。まあ、こっちとしては待つしかねえな」

その頃南の島

「うおおおおおおおー！！！！」

ドゴーン！

ミソラはヤシの木に走っていき、思いつきりとび蹴りをした。ヤシの実が数個落ちてくる。

「マネージャーのバカ野郎のヘツポポポーン！！！！！！」

落ちてきたヤシの実を海へと思いつきり蹴り飛ばす。

「音楽プロデューサーのたこ焼き野郎ーン！！！！！！」

ミソラは足元にあったヤシの実を全て海へ投げ飛ばす。

「歌は、心の足腰だー！！！！！！！！」

海の方に走り海に八つ当たりをする。

数分後海から戻ってくる。ミソラはハンモックをかけて横になる。

「ふうー」

『だいぶスッキリした？』

近くにあるギター型トランサーからハープの音がする。

「うん。だいぶね」

『そう、それは良かった。じゃありラックスして引いてみて』

ミソラはハープに言われてギターを手に取り、弾きながら鼻歌を歌う。

「　　　　　」

ジャーン！ジャジャジャーン！

とっても穏やかな曲だ。だが、ミソラは段々表情が沈んでいく

「ねえ、ハープ・・・私、本当に自分の歌が作れるかな？」

『あなたなら大丈夫よミソラ。あなたの波長から素敵な音楽を感じたわ。だから私、あなたの前に現れたのよ』

「私、ずっと悩んでた。アイドルとして与えられた歌を歌ってたけど、本当は自分の歌が歌いたかったの・・・だけどその歌が見つからなくて・・・」

『大丈夫。きっと見つかるわよ！』

「うん、そうだね。ありがとう！でも良い気分転換になったよ、あなたを連れ出してくれて」

ミソラは笑顔になった。

『どういたしまして!』

「ふわぁー……久しぶりに暴れたら眠くなっちゃった。ちょっと  
一眠りするね」

『うん、おやすみ』

「おやすみ」

ミソラはギターを近くの木に掛けて寝始める。

『……………フッフ』

ミソラが寝静まると突然ギターが光り始める。

そのころ委員長達は

委員長達はどうやら買い物した帰りのようだ。ゴンタとキザマロは大量の荷物を持っている。

「さあ、いくわよ!」

「はい!」

「・・・なんで僕まで?」

よく見るとスバルもいる。ゴンタとキザマロは振り返る。

「おい、何だその態度は!」

「そうですね!せっかく委員長が誘ってくれたんですよ?」

「荷物持ちに付き合わされただけじゃん」

スバルも持っている。

「何だと!」

「ちょっと早くしなさいよ!」

「はい、はい」

ゴンタは返事する。

歌が聞こえてくる。近くにあるビルのモニターから響ミソラが歌っ

ているのが写っている。

「ああ、ミソラちゃんだ！ミソラちゃん病気治ったんだ・・・」

「何言ってるんですかゴンタ君。これはただのバーチャルライブですよ」

「ええ！？うん、そうか・・・」

「よく分かってないでしょう？」

「あ、あの娘・・・」

スバルは呟く。この映像はコダマタウンの全てのモニター、テレビに映し出されているようだ。

『例えばこの先 二つの心が 違う夢見ても そばにいるから

人はそれぞれに 歌う場所がある だから支えあつ 人が引きよう

すれ違うサネ 不安になっても 信じてる この手だけは 離せない人

彼方に広がる 青空 澄んだひと・・・ジーーーーー』

いきなり映像が消える。

「な、何？」

「ミソラちゃん・・・」

「どろしたんでしょっ?」

すると、モニターにハーブ・シンガーが映し出される。

~~~~~

ハーブ・シンガーはギターを弾き、歌い始める。

『 眠れ 眠れ ほら

眠れ 眠らそつと

静かにおやすみなさい 』

「な、何だ?」

「誰なの?」

これは、全てのモニター、テレビに映し出されている。

『 眠れ 眠れ ほら

眠れ 眠らそつと

静かにおやすみなさい 』

「ふわあ〜」

すると、これを聞いていた人々は急に眠り始めた。スバル以外の人

たちは皆眠ってしまった。

「みんな！」

『スバル、これはハーブの仕業だ。行くぞ！』

「うん！電波変換！星河スバル オン・エア！」

スバルはロックマンに変身した。

第15話 ハープ・ノート推参！ 前編（後書き）

続きは次回です。

ミソラが歌ってる曲ってあんまり意識して聞いてなかったけど結構良い曲ですね。まあ、書いてるだけじゃ良く分かりませんね（笑）

感想待ってまーす！

第16話 ハープ・ノート推参！ 後編（前書き）

操られているミソラ（ハープ・シンガー）は『』、操られてないミソラ（ハープ・ノート）は「」にします。

第16話 ハープ・ノート推参！ 後編

ロックマンはウェーブロード使って、ハープ・シンガーを探していた。

『あそこだ！』

ウォーロックは昨日戦ったビルにすることをスバルに教える。

ハープ・シンガーは、昨日のビルの屋上に立っている。

『みんな眠って地球おしまい！』

「そんなのだめだ！」

『！！？』

ハープが嬉しそうに喋っていると、背後声が聞こえ、攻撃される。だが、ハープ・シンガーはジャンプして避ける。

『誰！？』

ハーブ・シンガーは後ろを振り返る。するとロックマンがロックバスターを構えている。

『ウォーロック!』

「僕はロックマン!地球をFM星人の好きにはさせない!」

『え!?どういう事なの、ウォーロック!?あなたは電波変換した地球人の意識を操ってないの?』

『黙れハーブ!大人しくFM星に帰れ!』

『帰れないのよ!任務をどれか果たさなきゃ!』

『だったら無理やり返してやる。やれスバル!』

「うん!バトルカード!プレデーション!ガトリング!」

スバルは左手をガトリングに変えた。

『くっ!ショックノート!』

ハーブ・シンガーはスピーカーを出し音符を何度も放つ。スバルはそれをガトリングで打ち落とす。

「くっ!でやあ!」

ロックマンは横に走り、ハーブ・シンガーにガトリングを放つ。

「消えた!」

弾が当たる瞬間にハーブ・シンガーは周波数を変え移動する。

『上だ!』

「えい!」

ウォーロックはすぐさまハーブ・シンガーの位置を察知し、ロックマンに伝える。そして、上にガトリングを放つ。

『!?!?くっ!』

ハーブ・シンガーは攻撃に気づかなかつた。とつさにギターを回転させバリアを張るが無数の弾には耐え切れず、吹き飛んでしまう。

『くっ!今度はこっちの　「痛たたた、ちょっと痛いじゃないの!」　えっ!?!?・・・あら〜起きちゃったの・・・』

ミソラは今の衝撃で目が覚め、ハーブの意識の操りから解かれた。ミソラは頭を抑えている。

「・・・あれ?ここどこ?それにこの格好・・・ん?あなたハーブ?何やってんの?」

ミソラは電波変換している事、ハーブがギターになっている事に気づく。

「・・・何なの?」

『お前と同じだ・・・電波変換された地球人が自分の意識を保って

るんだ』

「これどういう事ハーブ!?!」

『えつと・・・いろいろあつて・・・』

「FM星人は地球人を抹殺しようとしてるんだ!」

ロックマンはハーブ・ノート(ミソラ)に説明する。

「え!?!何それ?」

『えくと・・・』

ハーブはミソラから目をそらす。

「ちょっと!ハーブ!」

ウーーーーー!ウーーーーー!ウーーーーー!

サテラポリスのサイレンの音がする。

『あつ!まず!逃げるわよ!』

「えつ!?!」

ハーブは無理やり周波数を変えハーブ・ノートを連れて行った。

「・・・何だつたんだらう?」

『俺たちもツラ駆ろつぜ』

「えっ？うん・・・」

ロックマンは周波数を変える。

バタン！

屋上のドアが開き、五陽田警部がやって来る。

「御用だ！御用だ！御用だ！」

しかし、屋上には誰もいない。

「・・・かー！ー！！また逃したー！ー！ー！！！」

その頃コダマタウン

眠ってた人たちは、ハーブの催眠の効果が切れ、目を覚ます。

「……あれ？どうしてたんでしょう？」

「はあくミソラちゃん……」

ゴンタはまだ眠っている。

「委員長、委員長！……大丈夫？」

スバルは戻ってきていた。

「はっ！ロックマン様！？……なんだ星河君か……そうよね、
あなたがロックマン様なわけないわよね……」

「えっ！？」

「……どうしたの？」

「な、なんでもないよ」

「そう……」

（あ、危ない危ない……）

その頃南の島

「どういう事！？あなた音楽の女神って言ったじゃない！」

『すみません！FM星人です！』

ハーブはギター型トランサーの中で正座している。

「地球人抹殺つてなに!？」

『すみませーん！上から言われて仕方なくやってまーす』

「やってる?」

『あ、いや、やってました・・・もうしませーん!』

「はあ、何か変だとは思ってたけど・・・」

『あゝ・・・ごめんなさゝい・・・』

ハーブは反省しているようだ。

「……まあいいわ」

『えっ?』

ミソラはギターを持って直接目を見て話しかける。

「ねえ、ハープ。もしかして、これがあれば世界を飛び周れるの?」

『え、ええ……』

「そっか。じゃあ私、あなたと居ればいつか自分の歌が作ることができるかもしれないわね」

『ええ、あなたならきっとできるわよミソラ! 私に任せて! どこへでも連れてってあげる。』

ハープは笑顔で答える。

「ありがとう!」

二人とも笑顔になった。

「よし、じゃあ早速!」

テレビ局

「ミノラ、どこ行ったんだ〜?ん?」

~~~~~

金田のトランサーが鳴る。

「はい、もしもし?ミノラ!?!今どこ!?!えっ!?!カチンジンカッ  
てどこだよ!?!」

その頃ミノラ 雪山の山頂

「ああ、うん。すぐ戻るから・・・うん。大丈夫大丈夫・・・じゃあね〜」

ハープ・ノートは電話を切る。

「よし、行くわよハープ！」

『うん！』

二人は雪山の山頂で歌を歌い始める。

『この世界中 あふれてる まだ知らない 風景 すべては見えないこと わかってはいるけど』

誰かのため とは違う 自分だけに 誇れる 何かを探している この胸を満たす

時々いじわるな 風に押し戻されて

遠く 見える この瞬間があつて

この手が届くまで 今日も 歩き 続ける

振り返ればそこに 無限の 空が 見えるから』

第16話 ハープ・ノート推参！ 後編（後書き）

ミソラ編終了です。

最後の歌はオープニング以外の他曲の一つですね。アニメにはなっ  
かたですけど、歌わせてみました。私にとっても好きな歌なんで（  
^-^-^）

前回にも違う曲を歌ってますね。こっちはアニメでは新曲です。

感想・アドバイスを待ってます。

第17話 オックス襲来！（前書き）

操られたゴンタ』『、ゴンタ』にします。

## 第17話 オックス襲来!

学校 授業中

『退屈だ!退屈だ!』

ウォーロックはいきなりスバルに訴えだした。

「静かにしてよ!」

スバルは気づかれないように必死にトランサーをおさえている。

『うおおおお!』

ウォーロックはトランサーを無理やり開け、トランサーから出て行く。

「うわあ!」

スバルは思わず声を上げてしまった。

「星河君、どうしたの?」

「い、いえ、何でも」



屋上 休み時間

「ウォーロックの奴、いったいどこ行っちゃったんだろう・・・」

スバルは屋上からビジライザーをウォーロックを探していた。

「こんなところで何してるの?」

背後から声がする。振り返ると委員長達が立っている。

「委員長・・・」

「そついえば星河君がお休みしてた間にいろいろ工事してたからずいぶん変わったでしょう?」

「えっ?」

「私が案内してあげる」

「うわあ!」

委員長はスバルの手を握り連れに行く。

「まずは、新しくできた望遠鏡とプラネタリウムへ行きましょう」

「……………」

ゴンタは少しイライラしていた。

## プラネタリウム

プラネタリウムへ着くと委員長はトランサーを操作し始める。

すると、電源がつき宇宙が映る。さらに委員長は土星や火星などを映し出す。

「うわあ〜」

スバルはさつきと違い感激している。

「星河君もやってみる?」

「うん!」

ゴンタとキザマロは遠くから二人を見ている。

「たく!委員長は何であんな奴かまっんだ?」

「そんなのポイント稼ぎに決まってるじゃないですか。今回星河スバルを登校させたことによって委員長はポイントUP!これでは次期生徒会会長も夢ではありません!」

キザマロは分析しながら言う。

「俺だつてあんなに優しくしてもらったことないのに・・・羨ましい・・・くそ!」

「あれ?ゴンタ君妬いてます?」

キザマロがにやけながら言う。

「ばば、ば、馬鹿いつてんじゃねえ！なんで俺が……」

「顔赤いですよ？」

「う、うるせえ！」

### その頃ウォーロック

ウォーロックはウェーブロードではなく道路を進んでいた。

『たぐくつまんねー。よくもまあ、あんな退屈な事してられるぜ地球人は……あつ？』

するとサテラポリスのパトカーがこっちへやって来る。中から五陽田警部が出てくる。

「間違いない。怪電波の反応はこの辺りだ」

『げっ!』

ウォーロックはウェーブロードに乗り、もと来た道を引き返す。

『ブロロロロロ!・・・この周波数は・・・』

赤い牛のような電波体がウォーロックを見ていた。

ウォーロックは学校の運動場にたどり着く。

『フウ、危ねえ危ねえ。面倒な奴らに見つかるどころだったぜ・・・あっ?』

『ブロロロロロ!』

すると牛のような電波体が突っ込んでくる。

『うおおおお!?!』

ウォーロックは何とか避ける。

『ブロロロロロ!』

『お前は、オックス!』

『ウォーロック、よくも俺様達を裏切ったな!?!アンドロメダの力を渡せ!』

『やだね!断る!』

『ブロロ!ならお前を倒して奪うまでだ!!!』

オックスはウォーロックに突っ込んでいく。

その頃スバル達

スバル達はまだ見ている。

「くそ！つまんね〜」

ゴンタはプラネタリウムを出て行く。

暫くするとスバル達も出て行き、校庭へ出る。

ドカーーン！

すると運動場にあるスタンドライトが折れる。

「!?!何・・・どうなってるの？」

「見てくださいあれ！」

キザマロは指さす。その方向では見えない何かが戦っていた。

「まさか・・・」

スバルはビジライザーをかける。

『うおおおおお!!』

『うわああああ!!』

オックスが攻撃し、ウォーロックは吹っ飛ぶ。

『俺様のパワーはFM星ナンバー1・・・お前に勝ち目はない!』

『くっ！パワーしかとりえないお前に負けるか!』

『何?』

ウォーロックは右から左、左から右へと動き、オックスを翻ろうしていく。

『でやああああ!』

『うわああああ!』

次は、オックスが校舎に向かって吹っ飛ぶ。

『どつだ？俺のスピードについてこれねえだろ!？』

「どこ行っちゃったんだ委員長達は?・・・うわあ!」  
すると校舎が壊れる。



「な、何だ？」

ゴンタは校舎の中にいたため何が何だか分かっていない。

『痛ててて……ん？人間？……こうなったら……』

「あれってゴンタじゃない？」

『うおおおおお！！』

オックスがゴンタに向かって突っ込んでいく。

「危ない！」

「えっ？」

委員長達は見えてないようだ。

「うわあああああ！！！」

オックスはゴンタのトランサーに入り操りだす。

「電波変換！ 牛島ゴンタ オン・エア！」

ゴンタはとても大きい牛のような赤い姿になる。

『オックス・ファイア！』

「そんな！」

「何？」

『ファイアーブレス！』

オックス・ファイアは口から炎を吹き、ウォーロックに当てる。

『うわああああ！！』

ウォーロックは凄いい勢いで吹っ飛んでいく。

すると、オックス・ファイアは周波数を変え、スバル達の前へ現れる。

「うわあ！？」

「きゃあああ！」

キザマロと委員長はスバルの後ろへ隠れる。

「な、何あれ！？」

「あれは・・・牛島ゴンタだ！」

スバルは委員長の質問に答える。

「「ええ！？」」

「化け物に乗り移られたんだ！」

「化け物って・・・うそ！！」

『...!』

**第17話 オックス襲来！（後書き）**

次回はオックス・ファイアとの対決です。

明日は2回上げます。

第18話 暴走オックス・ファイア！（前書き）

今回も操られたゴンタ『、ゴンタ』にします。

## 第18話 暴走オックス・ファイア!

五陽田警部のパトカーの中

「……どこだ?」

五陽田警部は必死にウォーロックを探していた。

ピピピピピピ!ピピピピピピ!

五陽田警部のトランサーが鳴る。

「ん?どうした?」

電話に出て尋ねる。

『怪電波発生地点の発見に成功!場所はコダマ小学校!直ちに急行してください!』

「了解!」

五陽田警部はトランサーを閉じたあと、パトカーのサイレンを鳴らし始める。

ウーーーーー!ウーーーーー!ウーーーーー!

パトカーはコダマ小学校に向かい始める。

コダマ小学校 運動場

「そんな・・・これがゴンタ？」

委員長がオックス・ファイアを見てスバルに尋ねる。

『ブロロロロロ！』

『くっ！・・・電波変換しやがったか、オックス！』

『俺様はオックスじゃねえ！だ！』

「オックス・ファイア・・・」

「えっ？何？」

どうやら委員長とキザマロはオックス・ファイアの姿は見えていないが、声までは聞こえてないようである。

『ファイアーブレス!』

オックス・ファイアはスバル達の方に放つ。

「きゃあ!」

「うわあ!」

「くっ!」

スバルは片手で一回転して避ける。委員長とキザマロは避けて、スバルに背を向けて逃げ始める。

「・・・ウォーロック!」

『おう!』

「電波変換! 星河スバル オン・エア!」

スバルは委員長達がこっちに集中してない事を確認すると電波変換してロックマンに変身する。

『!?!・・・電波変換したかウォーロック!?!』

『違うぜ!今の俺はウォーロックじゃねえ、ロックマンだ!』

「・・・ウォーロック、ゴンタはどうなってるの?」

『オックスがパワーアップするため、完全にあのゴンタって奴を取



り込んでる。キグナス・ウイングの時と同じだ。あいつを倒さねえかぎり助け出すのは無理みたいだぜ』

「・・・それなら、勝負だオックス・ファイア！お前を倒す！」

スバルはオックス・ファイアに言い放つ。

『俺様を倒すだと？ブロロロ！ふざけるな！お前を倒してアンドロメダの鍵をいただく！ブロロロ！オックススタックル！』

オックス・ファイアはロックマンに突っ込む。

「うわああ！・・・くっ！」

オックス・ファイアは思っていたよりも速かった。スバルは何とか横に避ける。オックス・ファイアは近くにあったトラックのぶつかる。

『ブロロロ！オックススタックル！』

オックス・ファイアは何度もロックマンに突っ込む。その度に運動場にある鉄棒、フェンス、木などを凹ませたり、壊したりする。

「うわああ！」

委員長とキザマロは逃げていたが、壊れてたおれてしまったため逃げ道が封じられる。

「何よ、何よ、何がどうなってるのよ！！？」

そう言つて二人はまた逃げ始める。

『くく！ちよろちよるとすばしっこい奴だ！』

オックス・ファイアはロックマンを見失つたため辺りを探している。

『フツ！電波変換してもパワー任せに突っ込んでくるだけ。お前の攻撃がワンパターンなんだよ！』

ロックマンはオックス・ファイアの後にいた。

『ブロロロロ！！何だと！？アングーパンチ！』

オックス・ファイアはジャンプしてパンチを繰り返す。

「くっ！」

ロックマンはジャンプして避ける。アングーパンチは地面に直撃すると、そこだけ大きなクレーターができる。

『スバル、行け！』

「ロックバスター！」

スバルは空中からロックバスターを数発放つ。全てオックス・ファイアに命中する。

『うわああああ！！やったな！！ブロロロロ！』

『またかよー！』

オックス・ファイアはオックスタツクルをしようとする。

「バトルカード！プレーション！ソード！」

ロックマンは今度はソードでオックスタツクルを受け止める。

すると、ロックマンとオックス・ファイアは現実空間に現われる。

「あつ！ロックマン様〜」

委員長の目はハート型になっている。

ロックマンはオックス・ファイアに上へ投げ飛ばされる。

「くっ！バトルカード！プレーション！キャノン！」

左手をキャノンに変えて数発放つ。

『うおお！！。。。ブロロロ。。。』

オックス・ファイアは片膝をつく。

『やったなロックマン！。。。ん？』

すると、オックス・ファイアはスバルの後の方に委員長達がいる事に気づいた。

オックス・ファイアは素早くロックマンの後の委員長の方へと移動する。ロックマンは速すぎて気づく事ができなかった。

「きゃあああああ!!」

「委員長!!」

「しまった!!」

オックス・ファイアは委員長を片手で掴み、持ち上げる。

『人じちをとりあがつた!!』

オックス・ファイアは委員長を持って逃げる。

「待て!!」

ロックマンも追い始める。

『ファイアーブレス!!』

「うわああああ!!」

オックス・ファイアは逃げながらロックマンに放つ。ロックマンは直撃し吹き飛ばす。

『大丈夫か、スバル!!』

「うん、何とか・・・」  
「きゃあああああ!!」  
「・・・!?!」

オックス・ファイアが委員長を持って建物を上っていく。

そして上までたどり着く。

『ブロロロロ!!!』

「こつちだ、オックス・ファイア！」

『!?!?』

オックス・ファイアは上にあるウェーブロードを見る。すると、ロツクマンはウェーブロードに立っている。

『ロツクマン……』

「ロツクマン様！」

委員長はまた目がハート型だ。

「心配いらないよ！今助けるから！」

「はい！」

「……て言っちゃったけどこれじゃ攻撃できない……いったいどうすれば？」

スバルは考える。

『ファイアーブレス!』

すると、ウェーブロードに放つ。ロツクマンはジャンプし、地面へ着地する。オックス・ファイアも建物からジャンプし降りてくる。

『アンガーパンチ!』

「ぐわああああ!!」

着地してすぐパンチを繰り出す。ロックマンは避け切れず食らって、後の壁に吹き飛び。壁にクレーターができる。

「あ……ちょっとあんた!私のロックマン様に何するのよ!」

『……ファイアーブレス!』

「うわああああ!!」

オックス・ファイアは委員長を無視し、ロックマンを攻撃する。

「ああ、ロックマン様!ちょっと止めなさいって言うてるでしょ!私のロックマン様に傷が付いたらどうするつもりよ!」

『スバルどうするんだ?このままじゃ……』

『とどめだロックマン!』

オックス・ファイアはオックスタックルの体制に入っていた。

「もう!いい加減にしないで、ゴンタ!!!」

「はっ!」

『な、何!?!』

ゴントは意識を取り戻り、オックス・ファイアの動きが止まる。

『スバル今だ!』

「うん!バトルカード!プレーション!ブレイブソード!」

スバルはブレイブソードでオックス・ファイアを切る!

『ぐわあああああ!!!』

「きゃああああ!!!」

委員長は投げ飛ばされるが、ロックマンがお姫様だっここでキャッチする。委員長をおろす。

「離れて!」

「はい!」

委員長はロックマンから離れる。

『・・・やったな!!!』

オックス・ファイアはオックスタックルの体制になる。

「バトルカード!プレーション!ガトリング!」

ロックマンはガトリングに変え、オックス・ファイアに放つ。

ダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダダ

『うわあああああああああ！！！』

オックス・ファイアに全てヒットする。

オックス・ファイアの電波変換が解る。ゴンタは地面に気絶している。

『覚えてやがれ、ロックマン！』

オックスはどこかへ逃げだす。

「あつ！・・・逃げられた・・・」

暫くして

「ゴンタ」

「ゴンタ君！」

ゴンタは目が覚める。



「うん……ふあ〜良く寝た。……委員長、キザマロ、おはよう……」

ゴンタは寝ぼけている。

「大丈夫なのゴンタ？」

「大丈夫？……何が？」

「……何がって……ゴンタ君まさか何も覚えてないんですか？」

「覚えてないって、何かあったのか？」

完全に覚えていないようである。

「よかった、何もなくて」

ロックマンがウォーロックに言う。

「あ……」

「ん？」

委員長が赤くなりながらロックマンに話かける。

「本当にありがとうございました。ロックマン様」

「えっ？別にたいした事はしてないけど」「見つけたぞ、ロックマン！またお前の仕業か！」  
「やべ！」

五陽田警部に見つかり、ロックマンはウェーブロードを使って逃げ出す。

「ああ、待って、ロックマン様〜！」

## 次の日　スバル宅

『はあ！？また今日も学校へ行くだと！？冗談じゃねえぜ、あんな退屈なところ二度とごめんだ！』

「仕方ないだろ。あのまま帰って来ちゃったんだから、勉強道具とか学校に置いたままなんだから・・・」

スバルは玄関のドアを開ける。

「母さん！行ってきまーす！」

そして学校へと向かう。

放課後 プラネタリウム

スバルはプラネタリウムで星を眺めていた。

「いつか僕も行くんだ宇宙に……」

『宇宙！？いいね、行こう！今すぐ行こう！さっさと行こう！だからその前にスバル……お家に帰ろうぜ……！』

ウォーロックはプラネタリウムの中で思いっきり叫んだ。

## 第18話 暴走オックス・ファイア！（後書き）

オックス終了です。

何か最後のウォーロックかわいそうですね・・・。

風月さん、クイツクロッドさん、antinousさん、天神地祇さん感想ありがとうございました。

新FM星人はそろそろ募集します。

FM星人は2体くらい募集します。あとからAM星人も募集するかも・・・です。

感想、活動報告の方へ「名前」、「特徴」、「技」、「座（星座）のFM星人」などを書いてくれると嬉しいです

## 第19話 笑う電波空間

ある日のコダマタウン

ウーーーーー！ウーーーーー！

サテラポリスがパトカーでコダマタウンにある大橋に向かっていった。

『コダマタウン付近で電波ウィルスによる電波傷害が発生！直ちに急行せよ！』

コダマタウン橋の上のウェーブロード

橋の上で二種類のウィルスが橋を壊そうとしている。

一種類はメットリオ。

だが、もう一種類は頭が赤く、少しすこしとんがっついて下が円状で、手が変な動きをしていて、ゴミの塊を持っているウィルス。名前はジャンクネス。

『メット！メット！メット！』

『ジャンク！ジャンク！ジャンク！』

ウーーーーー！ウーーーーー！

そこへサテラポリスが到着する。五陽田警部と部下達が降りてくる。

「一匹たりとも逃がすんじゃねえぞ！」

五陽田警部が言うと部下達はウィルスを吸い込む掃除機を橋の上に向かってかまえる。

「攻撃！……ん？おい！何故攻撃しない？」

「く……く……す、すみません」

「……フフフ……ハハ！」「」「」

みんなは口を手で押さえている。

「貴様達何を笑つとる？」

「す、すみません……じ、自分でもわけが分からんですが何だか急に……ははははは！」

「ハハハハハハハハハハ！」

一人が腹をかかえながら説明したあと、他の部下も笑い始める。

「ええい、笑うな！速くウィルス退治をしろ！き、貴様ら・・・こゝ  
こんなときに笑うとは・・・何事だ・・・けしからんぞ！ははっは  
はははは!!！」

五陽田警部も腹をかかえ笑い始める。

『ジャンク!』

すると、数体のジャンクネスが五陽田警部達の上にゴミの塊を落とす。

「た、退避!!」

五陽田警部が部下達に退避させるように命令する。

放課後 学校のプラネタリム

スバルはプラネタリムで宇宙を見ていた。

ピピピピピピ―ピピピピピピ―

すると、トランサーのアラーム機能が鳴る。

「あっ、時間だ。・・・今日はこれで終わり」

スバルはプラネタリウムの電源を切り、外に出る。

『めずらしいな。いつもなら1時間でも2時間でも飽きずに眺めてるのに』

「アマケンに行くんだよ！天地さんと約束してるんだ」

学校の廊下



スバルはかばんを取りに教室に戻る。

「やあ、スバル君」

すると、一人の少年に声をかけられる。その少年は緑色の髪の色に優しそうな顔をしている。

「ん？・・・君は？」

「僕はC組の双葉ツカサ。君と話すのは今日が初めてだね。よろしく」

「う、うん、よろしく。じゃあ、僕急いだからまたね」

「うん、またね」

そう言ってスバルは、かばんを持って学校を出た。

アマケン      ロケット前

スバルは天地と話しをしている。

「お母さんに聞いたよ・・・最近学校に通ってるんだって？」

「う、うん、まあね・・・」

「いい事だよ。誰かいい友達でもできたかい？」

「別にそんなんじゃないよ」

「えっ？」

「それより学校にね、凄い性能のプラネタリウムがあるんだ！」

スバルはさつきとは違い目の色が変わる。

「プラネタリウム？」

「何万光年も先の天体が手に取るように分かるんだ！それだけじゃないよ！宇宙の出来事が詳細にインプットされてて、大昔の超新星の爆発だって再現してくれるんだ！」

「へえ」

「宇宙の進路とか、ワームホールとか、通信学習じゃ勉強できない事がいっぱいあるんだ！」

「・・・そつくりだな、お父さんと」

「えっ？」

「大吾先輩も宇宙の話になると子供のよつに夢中だった。宇宙には夢とロマンがあるんだって」

「夢とロマン・・・か」

スバルと天地はロケットを見上げる。

『そつでもないけどな』

「!!!」

トランサーが開いたが、スバルはすぐに閉める。

「今何か言つたかい？」

「な、何でもないよ!ははは!」

スバルは何とか誤魔化す。

ウ~~~~~~~~!ウ~~~~~~~~!

すると、アマケンの緊急サイレンが鳴り始める。

「ん!? 燃烧実験室で何かトラブルだ!」

天地がトランサーを開けて言うと、二人は燃焼実験室へ走っていく。

アマケン 燃焼実験室

燃焼実験室の中は、黒い煙が充満している。

ウィーン！

スバルと天地が入ってくる。

「何だこれは！？」

あははははははは！！

アマケンの職員が笑っている。

「何があつたんだ！？」

「すみません、天地さん！実験に失敗しちゃいましたー。あははははは！」

「失敗？」

「それがもう、単純なミスです！はっはははは！」

「笑っている場合じゃないだろ！早く消化しろ！」

天地は職員と消化しに行く。

「……………みんな、何がそんなにおかしいんだろう？」

『妙だぞスバル！……………この感じは……………奴だ！』

「ウォーロック？奴って……………FM星人！？」

スバルは燃烧実験室を出て、アマケンを出る。

「電波変換！星河スバル オン・エア！」

スバルは電波変換し、ウェーブロードを走りながらウォーロックと喋る。

「……………ジエミニだった？」

『そうだ、ジエミニだ。奴の発する電波は生物の神経に影響を与える』

コダマタウン中心部の交差点

ウェーブロードに、白く左腕が黄色の電波体が降り立つ。

「フフフ・・・はあ！」

電波体は、車の交差点に何かの電波を放つ。

ドカアアン！ドカアアン！

いろんなところで車と車がぶつかった。

「おい、お前どこ見て運転してやがる！」

「ははははは！居眠り運転か？このやろう！」

「はははは！この車まだ新車なんだぞ！」

みんな笑いながらけんかし始める。

「下等な生物だけに効果はてきめんだな」

上から電波体が下を眺めながら呟く。

『やはり貴様の仕業か！』

「!?!」

電波体は声がして方向へ振り向く。

「……フフフ！待っていたよウォーロック。騒ぎを起こせば必ず君が来ると思った」

『何！？』

「おっと、電波変換した今はロックマンと呼ぶべきかな？」

「僕が相手だジェミニ！」

「違うよ。僕の今の僕は電波変換した、ジェミニ・スパークだ！」

ロックマンとジェミニ・スパークは身構える。

「はあああああ！」

「でやああああ！」

二人はぶつかり合う。

「君を倒し、アンドロメダの鍵は僕が頂戴する」

『黙れ！』

「ロックバスター！」

「バリア！」

ロックマンはロックバスターを放つが、バリアに防がれる。

「ロケットナツクル！」

ジエミニ・スパークは左腕の黄色い腕をロケットのように飛ばす。

「くっ！」

ロックマンは周波数を変える。

「逃げてても無駄だよ！」

ロケットナツクルは周波数を変え、ロックマンを追尾する。

「な！？くっ！」

ロックマンはビルからビルへと飛び移る。だが、ロケットナツクルはロックマンのスピードより速く、すぐにも追いつきそうだ。

『やっかいだぜ！どこまでも追ってきやがる！』

ロックマンは大きな看板の後の隠れる。

「無駄だよ」

パチン！

ジエミニ・スパークが指を鳴らすと、ロケットナツクルは周波数を変え、看板をすり抜ける。

「うわああー！」



ロックマンはあたりそうになったがギリギリでジャンプして避ける。

ロックマンはビルをジャンプして降り、再び逃げ出す。

すると、前からロケットナツクルが来て、挟み撃ちにされる。

「くっ！バトルカード！プレーション！ヘンゲノジュツ！」

スバルは、ヌツキーの置物を身代わりにして姿を消す。二つのロケットナツクルはヌツキーに当たり爆発する。

「ふうー」

スバルは何とか助かる。

「エレキソード！」

ジェミニ・スパークが目の前に現われ、左腕を黄色いソードにする。

「うわあー！」

ロックマンをかばうようにウォーロックがエレキソードを口で受け止める。

『ぐわあああああー！』

「うわあああああー！」

だが、電気を帯びているため食らってしまっ。

ロックマンとジェミニ・スパークは後に下がる。

『スバル、バトルカードだ!』

「バトルカード! プレデーション! ワイドソード!」

左腕をワイドソードに変え、エレキソードとぶつかりあう。

しかし、ジェミニ・スパークが周波数を変えロックマンの後へ回り込む。ロックマンは受け止める。

「がっかりだよ! 電波変換した君の力がその程度とは」

「何!？」

「君はまだ電波変換をものにできていないのさ!」

「うわあああああ!」

ジェミニス・パークはまた、周波数を変え後に回りこみ攻撃する。今度は受けきずロックマンは吹っ飛ぶ。

「くそ! なら・・・バトルカード! プレデーション! ファイアバズーカ!」

ロックマンはファイアバズーカを放つ。ジェミニ・スパークは受け止める。少し後に下がるがまったく効いていない。ジェミニスパークは余裕な顔をしている。

「全然効いてない!」

『もう一発ぶち込め!』

「うん! 『プラズマガン!』 !? くつ!」

ロックマンが撃とうとするところに、いきなり上から攻撃される。ロックマンは何とか避ける。

「誰だ!?!」

上から攻撃された方向を見る。

『はっはははは!! 俺だよ俺!』

すると、ビルの上にジェミニ・スパークと同じ格好の電波人間。違  
うところは、色が黒く、右手が黄色い。

『何だと!?!』

「ジェミニ・スパークが二人!?!」

「そうさ、僕たちは二人で一人。今までの戦闘は実力の半分とい  
うところさ!」

『本番はこれからだ。俺たちの恐怖を存分に味わってもらおうよ』

ジェミニ・スパークWホワイトがジェミニ・スパークBブラックの方へ移動する。

『………逃げるんだスバル』

「えっ？」

『逃げる！』

『ははは！食らえ！』

ジェミニ・スパークWの左手とジェミニ・スパークBの右手を合わせる。

「『ジェミニサンダー！』」

ロックマンに向かって黄色い電撃を放つ。

「うわあ！くっ！」

ロックマンはあたる瞬間に周波数に変えて逃げる。

ジェミニサンダーは地面にあたると大きなクレーターになる。

『・・・逃げ足だけは一人前だな・・・』

そう言って二人のジェミニ・スパークは、周波数を変えどこかへ消える。

スバル達      ウェーブロード

ウェーブロードを走って逃げている。

『知らなかったぜ、ジェミニの奴、電波変換する事で2対に分離するとは』

「一人でも強敵なのに、あの二人が攻撃してきたら・・・」

門のまえにはツカサー一人が立っていた。

「フッフ！」

『初戦にしては上出来だったぜツカサ』

ツカサの後にジェミニが姿を現す。

「まあね・・・」

## 第19話 笑う電波空間（後書き）

長い・・・疲れる。

長いから戦闘描写が少し分かりにくいところがあるかもしれませんが、そのへんは御了承ください。

新FM星人ですが、火曜日まで受け付けます。結果は木曜くらいに発表します。

感想・アドバイス待ってまーす

## 第20話 怒る電波空間

数日前

数日前、双葉ツカサが横断歩道をわたろうとしていた。

キーーーーーーー!!

「えっ!? うわあああああ!!」

いきなり大型トラックが転倒し、ツカサはそれに巻き込まれる。

ツカサはトラックの間に挟まれ、動けなくなる。だが何とか生きていた。

すると直ぐに近くにいた数人が近寄ってくる。

「おい! レスキューはまだか!？」

「がんばるのよ!」

近寄ってきた人達がツカサを諦めるなど声をかける。

すると、火花が少し散りトラックのガソリンに引火する。

ポオオオオオオ!

「火よ!」



「危ない爆発するぞ!!」

すると、トラックの周りに集まっていた人達は、ツカサを助けようともせず逃げ出す。

「……………くっ!」

ツカサはこのときもうだめだと思った。

そのとき、天から光が現れ、光がツカサを包む。

### 光の中

ツカサはさっきの光の中で気絶していた。

『驚いたな。これほど俺の適合する人間がいるとは。』

すると、白と黒の仮面を持った黄色い電波体、ジェミニーが現れる。

「ここは? ……体が動かない。」

ツカサは目を覚ます。

『お前は十中八九助からない』

「……君は誰だい？」

『俺か？俺はFM星人』

「……FM星人だつて？」

『そう、宇宙人だ。だが俺がこの地球で活動するには人間と電波変換する必要がある』

「電波変換？」

『どうだ？この俺ならお前の命助けてやることもできるぞ』

「ほんと？ほんとなの？」

『ただし、俺に強力すると約束するならばの話だ』

「協力？」

『なに、難しい事じゃない。簡単さ。俺とお前で……この地球を抹殺するんだ』

「抹殺……」

現在 夜

ビルの上にツカサとジェミニが立っていた。

「僕は一度死にそして生まれ変わった」

「地球人を遥に超越した存在にな。ツカサ、こんな星に未練を残す必要はない！」

「・・・そうだね。僕はこんなにも凄い力を手に入れたんだ。電波変換！双葉ツカサ オン・エア！」

ツカサは電波変換してジェミニ・スパークWとBになった。

その頃 スバル宅

スバルは、学校の宿題をしている。

「…………はあく。あのさーウォーロック…………あれ？」

スバルはトランサーを開けてウォーロックに話しかける。だが、トランサーの中には入なかった。

スバルはビジライザーをかける。

『何だ？』

「うわあ！」

スバルはいきなり目の前に現われたため驚く。

『俺は宿題なんかわからんぞ』

「…………君に頼まないよ。そうじゃなくて…………」

『じゃあ何だ？』

「実は、あいつが言った事がずっと気になって…………あの時…………」

“電波変換をものにできていない”って……」

スバルはあの時の事を思い出して言う。

『……前にも説明したな。FM星人は地球人の悪い心や弱い心につけ入り、そいつを洗脳して操る事ができると。ところが、どういうわけか俺はお前を操る事ができねえ』

「うん、聞いたよ。だから？」

『ようするに、電波変換をものにできるかできないかはお前のがんばりしだいって事だ』

「えっ？そうなの？」

『しかし、ジエミニ・スパークが二人とは、俺も予想外だったぜ……奴は強敵だぞ』

「どうやったら勝てるかな？」

『そうだな……とりあえず崖の上で特訓でもするか……昨日見たヒーロー番組みたいに』

「特訓？」

『ハハハ！冗談だ』

ウォーロックが笑いながら言う。

「もう、まじめに聞いてよウォーロック！そうだ。ところで、アン

ドロメダの鍵って何？」

スバルの質問を聞いた後、ウォーロックは真剣な顔になる。

「その鍵にどんな秘密があるの？ねえ、いい加減僕にも教えてよ！」

『言ったはずだ。お前には関係ないとな』

「でも、あいつらは・・・」「ご飯ですよ！スバル！」「

一階からあかねの声が聞こえる。

『ほら、飯だ飯だ！』

そう言ってウォーロックはトランサーの中へ入っていく。

ウェーブロードにジェミニ・スパークBが立っていた。

『ハッ!』

ジェミニ・スパークBは手から電波を出し始める。

『ピッチャー振りかぶって第一球目投げた!おっと、とんでもない大暴投だ!』

ピッチャーのボールは、全然キャッチャーの方へは行かず、横に曲がり、フェンスに向かう。

「どこ投げてんだ!ノーコンピッチャー!」

「バーカ!可笑しくつてお前に投げる球なんてねえーんだよ!」

「何だと貴様!」

「やるか!?!」

ピッチャーとバッターはいい争ったあと乱闘を始める。

スバル宅 リビング

スバルとあかねは夕ご飯を食べた後、テレビでニュースを見ていた。

『アイドル歌手の響ミソラさんが急病のため今日のコンサートは中止して、過去の映像を利用したバーチャルライブに変更されました。響ミソラさんは、先月も過労を理由に……くく……コンサートを休んでおり、一部では……い、行き詰まりを感じての……け、け、仮病ではないかと……あはははははははははは！』

いきなり、ニュースキャスターの人が腹を抱え笑い始めた。

「ん？」

『あははは！ボクもあなたの大ファンっす、ミソラさん！あはははは！彼方に広がる 青空。ミソラさん！ジーーー』



放送は止まり、画面が切り替わる。

「ずいぶん陽気なテレビ局ね」

「チャンネルを変えるよ」

『ピッチャーの大暴投から始まったこの騒ぎは、今や観客を巻き込んでの大乱闘にエスカレート！前代未聞です！』

「何、何？」

あかねは少しワクワクしている。

『では、私も参加して参ります！うおー！この野郎！！ジーーーー』  
また放送は止まる。

「何なのかしら、ねえ。あら？スバル？」

あかねはスバルに話しかけたが、スバルの姿はもうなかった。

スバルはその頃走っていた。

『待てよ、スバル！』

「今のはジェミニ・スパークの仕業でしょ？」

『確かにそうだ。だが、今度は二体で襲ってくるぞ。お前、勝てる自信あるのかよ？』

「わかんないよ、そんな事！わあ！？」

ウォーロックがトランサーの中から出てくる

『悪いが、俺は勝算のない戦いなんてごめんだぜ。俺はな、正義のヒーローやりに地球に来たわけじゃないんだ。ほら、部屋に戻って宿題でもしてろ』

「ウォーロック・・・そうか・・・わかったよ。じゃあ君も他の人を探して。僕以外に電波変換できる人をね」

『な、何だと？』

「フン！」

スバルはそっぽを向く。

『・・・・・・・・・・たく！』

五陽田警部のパトカーの中

『会議中の各国長は笑いが止まらず、サミットは爆笑の渦に包まれて中止！演芸状では、漫才に腹を立てた客達が暴騰を起こしています！』

「けっ！笑ったり怒ったり、いったいどうなっちまってんだ？・・・ん？」

五陽田警部が今の連絡に腹を立てていると、前に戦車が現われる。

五陽田警部はパトカーを降りる。

戦車の中

「くそ！何だか分からんが腹が立つ！監督もプロデューサーもこのこのの！」

中に乗っている男が愚痴を言いながら戦車を動かす。

『大変です！今度は暴走した映画俳優が・・・分かってる！』

五陽田警部が返事する。

「貴様！すぐ戦車から降りろ！」

五陽田警部が拡声器を持って言う。

すると戦車が五陽田警部をロックオンする。

「な!？」

ドカアアン!!

「くっ！」

五陽田警部は撃たれた思った瞬間、耳をふさいでしゃがむ。しかし、何も起きていない。戦車の発射口から煙だけが上がっている。

「ん?・・・撮影用の火薬じゃないか、脅かしやがって!」

だが、戦車は動きだし、五陽田警部を踏みつぶそうとする。

「うわあああ!！」

ガシャン!

「ん?」

「うおおおお!！」

すると、ロックマンが戦車を素手でで止めていた。五陽田警部は何とか助かった。

戦車は全速力で進もうとするが、戦車がオーバーヒートして止まる。

「ふうー」

「『ジエミニサンダー!』」

「!?!?くっ!」

ロックマンが一安心すると、上から電撃で攻撃される。ロックマンは何とか避ける。

そして、ウエーブロードへジャンプする。

「待て、ロックマン!」

ロックマンがウエーブロードに乗ると、ジエミニ・スパークWとBが待ち受けていた。

「ジエミニ・スパーク!」

「よく来たね、ロックマン」

『今度は逃がさないぜ。アンドロメダの鍵は必ず頂く!』

「『エレキソード!』」

二対は手をエレキソード変えると、周波数を変えて消える。

「『はあああああ!』」

二対はロックマンを挟み撃ちするように出てきて攻撃する。ロックマンはジャンプして避ける。

「バトルカード!プレデーション!ダブルソード!」

ロックマンは、ソードのカードを二枚プレデーションし、両腕をソードに変える。

「はあああああ！」

『でやあああああ！』

ジェミニ・スパーク二人はエレキソードで攻撃する。ロックマンは、ソードで別々に受けとける。

## 第20話 怒る電波空間（後書き）

今日はここまでです。途中ですが・・・

次は、分かっているとは思いますが、あの人がバカンスから帰ってきます

感想・アドバイス待ってます。

## 第21話 唄う電波空間

「くっ・・・」

『フッフッフ・・・でや!』

すると、Bが周波数を変えて消える。ロックマンはBの攻撃を受け止めていたが、いきなり消えたため、少しバランスを崩す。Bはロックマンの背後に現れ、エレキソードで攻撃しようとするが、ロックマンはジャンプで避ける。

すると、Wが周波数を変え、背後に回っていた。

「うわあああああ!」

ロックマンはWに、エレキソードでたたきつけられる。ロックマンはマヒして倒れている。

その間に、WとBが近寄って来てとどめをさそうとする。

「『はっ!』」

「くっ!」

二対がとどめをさそうとしたとき、ロックマンは避けてウェーブロードを走って逃げる。

ジェミニ・スパーク二体はその後を追いかける。



五陽田警部のパトカーの中

五陽田警部は車を運転していた。後ろに電波ウィルスが大量に入った輸送車はしっていた。

「くっそー！ロックマン目・・・次あったときは必ず逮捕してやる」

「いい加減鬼ごっこはやめにしないか？」

「僕達から逃げられると思ったら大間違いだよ」

ロックマンを挟むようにして隣のウェーブロードからジェミニ・スパークが言う。

「くそ！」

『二対相手じゃ不利だ。奴らを引き離せ！』

「でもどうやって!?!」

『俺が知るか!』

『エレキソード!』

Bがこっちのウェーブロードに後ろにジャンプしてエレキソードで攻撃しようとする。ロックマンは避ける。すると、その方向にはWが待っていた。

「くっ!」

空中でロックマンは切られる瞬間に、W頭を持って、後ろに一回転して避ける。そして、Wの背中をけて、逆のウェーブロードに飛び移る。

「ぐあ!・・・くっ!」

『少しは楽しませてくれるようだな』

Bは少し笑いながら言う。

「…………このままじゃ……………いたいどうすねば!？」

ウーーーーー!ウーーーーー!ウーーーーー!

サテラポリスのパトカーのサイレンが下から聞こえる。

『ん?おい、スバル下を見る!』

「何、ウォーロック?」

『あの車だ!』

「車?」

ウォーロックはサイレンが聞こえる方を見るよう支持する。

そこにはさっきの輸送車があった。

「電波ウィルスの輸送車じゃないか!……………そうだあれを使えば……………」

ロックマンは何かを思いつき、周波数を変え、輸送車の上に現れる。

「ロックマン!？」

五陽田警部が気づく

すると、ロックマンが腕をソードに変える。

「ッ!やめろ!その車にはウィルスが……………」  
「えい!」

ロックマンが輸送車を真つ二つに切る。中に入ってた大量のウィルスが逃げ出す。

「・・・あのバカ！せつかく捕獲したウィルスが！御用だロックマン！やはり貴様は人類の敵だ！」

五陽田警部が車から出てきてロックマンに言い放つ。だがロックマンは聞かずに、ウィルスの大群の上に乗れ、ジェミニ・スパーク二体に向かっていく。

「『！？』」

二対はウィルスをかわすために別々の方向に分かれる。

『フツ！ 「えい！」ぐわ！』

Bは、避けた後油断していて、ロックマンの上から攻撃に気づかなかった。

Wは助けに行こうとしたが、ウィルスにじゃまされて助けに行けない。

『フーン！ハッ！』

「くっ！えい！」

キン！キン！

ロックマンはソード、Bはエレキソードで戦っている。Bの方がやや有利だ。

「くっ！バトルカード！プレーション！モエリング！」

ロックマンは、ソードとは逆の方をモエリングに変えてBに向けて発射する。

Bはジャンプで避け、ロックマンに切りかかり、交差する。

キン！

「・・・何！？」

スバルはソードを切られる。

『相手が一人なら勝てるとも思ったか？』

Bは余裕の笑みを浮かべる。そして、WがBの横にやってきた。

『行くぞ！』

BとWが飛び上がる。

「『ジエミニサンダー!』!」

「バトルカード! プレデーション! ガトリング!」

ジエミニ・スパークがジエミニサンダーを放つ。ロックマンはガトリングで挑む。

ダダダダダダダダ!

だが、ジエミニサンダーがガトリングの弾を飲み込みながら進む。そして、ロックマンは食らってしまう。

「ぐわあああああ!」

ロックマンは、後ろの海の方へ飛んでいく。

ジャポーン!

ロックマンは海に落ちる。ジエミニ・スパークは周波数を変え、飛んでいった方向へ向かう。

## 海の上

「何だ、あっけない幕切れだったね」

『ウォーロックを地球人と分離させ、アンドロメダの鍵のありかを白状させるぞ』

そう言つて、二体は海へ潜る。

ジャポーン！

今は夜のため海の中は暗くて何も見えない。ジェミニ・スパーク二人は、自分の体を光らせて海を照らす。

「……………いたぞ！」

Wがロックマンを見つめる。二体は海の底へ降りて、掴もうとする。だが

ボン！

ロックマンがヌッキーに変わる。

「？ヘンゲノジュツ！？」

「ワイドソード！」

ロックマンが後ろから攻撃する。

「くっ！」

ジェミニ・スパーク二体は何とか避ける。

「ロックバスター！」

ジェミニ・スパーク二体にロックバスターを放つ。

「くっ！」

「くそ！」

ジェミニ・スパーク二体は周波数を変えようとする。

ビヨイイイイイン！ブーン！

「・・・何！？」

「・・・な！？」

だが、変える事ができない。

「うわあああ！」

ロックバスターが命中する。

『海の中では周波数体が限定されるからなあ。出たり、消えたり、



お得意の攻撃もできないだろ!」

「バトルカード! プレデーション! パワーボム! ロングソード!」

ロックマンは左手をロングソード、右手にパワーボムを持つ。

「えーい!」

パワーボムをジェミニ・スパーク二体の方に投げる。

ドカアアアアアン!!

二体の間で爆発する。

「うわあああああ!」

『くっ!』

二体は、海の中で爆発したせいで水流が起き、そのため動けなくい。

「食らえ!」

ロックマンはその水流を利用して近づき、ロングソードで二体を攻撃する。

ガキーン!!

だが、二体のエレキソードで受け止められる。

『なるほど、海中とは考えたな』

「でも忘れたのかい？僕達電気属性は、水に強いんだ！」

「何!？」

『水中戦は得意だと言ってるんだ』

そう言った後、Wがロックマンの腹を蹴っ飛ばす。

「うっ！」

「『ジエミニサンダー!』」

そして、海全体にジエミニサンダーを放出する。

「うわあああああああ!!!!!」

水は電気をよく通すため、ロックマンは食らい、感電する。

『ぐっ!!スバル、早く海から飛び出せ!』

ロックマンは海を飛び出して近くの港に上がり、倒れこむ。

『しっかりしろ、スバル!スバル!』

「うっ……くっ!……」

すると、ジエミニ・スパークが上がってくる。

そしてエレキソードに変え、攻撃するために近寄ってくる。

『くっそー！スバル！スバル！』

スバルは気を失いそうになっていた。

「これでとどめだ！」

Wがとどめをさそうとエレキソードを上へ上げ、振り降ろそうとする。

~~~~~

すると、音が聞こえてくる。Wは振り降ろす瞬間手を止める。

「『！？』」

『飛び交うシグナル それぞれの今日を乗せて』

『何だ、この歌は！？』

『同じ周波数 重ねあい君と話す 迷い ためらいを振り切り
そこにあるはずの道を行こう』

「……あそこだ！」

Wが灯台の一番上を指さす。すると、誰かがギターを弾いて歌っている。

『 見上げる 空は 心に 積もる 願いの色 描く 夢を映し出す』

『フン！ハープの電波変換した姿か』

「ハープ・ノートとか言う奴だね・・・」

「くっ！・・・ハープ・ノート・・・」

スバルは立ち上がるうとする。

『必ず いつか この手に 触れる 明日への地図』

『何のようか知らんが、ほっとけ』

Bが目をそらそうとした瞬間、ハープ・ノートがジャンプした。

『強く 高く 届くまで』

『マシンガンストリング！』

ハープがジェミニ・スパークに弦をとばす。二体は避ける。

『輝いて』

ハープ・ノートは着地する。

「もうアイドルなんて呼ばないで！私は戦うアーティスト！」

『素敵！ヒューヒュー！』

『貴様・・・』

「やっと新曲が完成して、海外から戻ってきたら・・・何よこの騒ぎはっ。」

『どつやら、ジエミニの仕業のようね』

「邪魔するなら、君もしまつするよ!」

「できるかしら?」

ハープ・ノートは構える。

「・・・くっ!バトルカード!プレデーション!ブレイブソード!」

ロックマンは立ち上がり、不意について、ジエミニ・スパークを攻撃する。

「くっ!」

『くっ!』

二体はハープ・ノートに気をとられていて、ロックマンに気づかず不意打される。

「『はっはっはは!』!」

ジエミニ・スパークは笑い始める。

「凄くないか!僕達から一本取るなんて」

『楽しくなったぜ・・・次の対戦でお前を倒すのがな!』

そう言っつて二体は周波数を変え、消える。

『・・・完敗だな俺たちの』

ウォーロックは暗い顔で言う。

第21話 唄う電波空間（後書き）

ジエミニ編終了です。・・・何か・・・戦闘しかなかった話しでしたね。

新FM星人募集は終了します。いろんな方からFM星人のアイデアがありました。ありがとうございました！

第22話 仲間と転校生（前書き）

この話しはアニメとは違うオリジナルシナリオです。あと、私が作ったオリキャラを出します！

第22話 仲間と転校生

『・・・完敗だな俺たちの』

「うん・・・うつ！」

ロックマンはさっきのダメージがまだ残っていたのか、左腕をおさえながら片膝をつく。

「だ、大丈夫!？」

ハーブ・ノートが心配しながら近寄ってくる。

「う、うん、大丈夫だよ。それよりさっきは助けってくれてありがとう」

「お礼なんていいよ、大した事してないし」

ハーブ・ノートは微笑みながら言う。

『・・・ジェミニはまた俺たちを襲ってくるだろうな』

「そうだね・・・」

ロックマンは少し暗くなる。

『だが、次は勝つぞ!』

「うん！」

ウォーロックの一言でロックマンは元気を取り戻す。

「ねえ、ロックマン？」

ハープ・ノートが話しかける。

「何？」

「あなたは、この地球を守るために戦ってるの？」

「うん、そうだよ！」

『おい！勝手に決めんな！』

『あなたは黙ってなさい！』

ハープがウォーロックに大声で言う。

「・・・なら、私も一緒に戦う。私もこの地球を守る」

「えっ？」

「女だからと言ってなめないでね？私たち結構強いんだから」

「でも・・・どうしようウォーロック？」

『・・・足手まといにならないんらいいんじやねえか？』

『あら、その言葉そのままあなたに返すわ』

『何だと！てめえけんかうってんのか！？』

『さあ、どうぞでしょうね』

『この！上等だ表へ出る！』

「やめなよ、ウォーロック」

「ハーブもからかつちやだめだよ」

『ケッ！』

『はい』

ロックマンとハーブ・ノートが二人のけんかを止める。

「話は戻るけど、つまり仲間って事だよな？」

「うん」

「……そういう事ならいいと思うよ。僕達も仲間がいるとつれし
いからな」

「ありがとう、ロックマン」

『あの、お二人さん……』

ハーブが話しかける。

「何、ハープ？」

『もうそろそろエネルギーが切れるわ』

『スバル、こつちもだ』

「「えっ!?!」」

二人は電波変換が解けてロックマンはスバル、ハープ・ノートはミソラの姿に戻る。

「「あっ!」」

二人の正体がお互いに知られる。

「・・・やっぱり、ハープ・ノートの正体は響ミソラちゃんだったんだ」

「えっ?私の正体・・・知ってたの?」

「なんとなくだけど、声でそうじゃないかな?って」

「へえ〜。名前はなんて言うの?」

「スバル、星河スバル!」

「えへへ。こつちで会うのは初めてだね。よろしく」

「こつちこそ」

二人は握手をした。

その後、暫くの間二人はエネルギーを回復するのを待っていた。

「じゃあ、私帰るね」

「うん、じゃあね」

「バイバイ。電波変換！響ミソラ オン・エア！」

ミソラは電波変換して帰っていく。

『・・・俺たちも帰るか？』

「そうだね、帰ろうか。電波変換！星河スバル オン・エア！」

スバルも自分の家に帰っていった。

次の日 登校中

また、委員長達がむかえに来ていて、一緒に投稿している。

「星河君、早く行くわよ」

「はいはい」

スバルは素っ気無く返事をする。

~~~~~

すると、歌が聞こえてくる。

スバルは、もしかしてミソラかと思って目の前のビルのスクリーンを見る。だがそこには、水色の髪の女の子が歌っている。

「あ、水星亜夢です！」

「素敵！」

「俺もファンだぜ！」

三人何処かで聞いたような台詞を言った。

『 Open your shiny eyes in the  
silent night

不思議な夜 舞い降りた 足音立てず 忍び寄る 悩ましげな

黒猫のポーズ

月明かりを背に 浮かぶシルエット こっちへおいでと 微笑んで 手招き……」

この歌は少しシリアスな感じがする。

「誰？」

スバルはこの女の子の事を知らなかった。

「えっ！？知らないの？」

「突如として現れた、ミソラちゃんに並ぶアイドルですよ！」

「俺でも知ってるぜ！」

「へ、へえ……」

（何かみんな目が怖い……）

三人の目は燃えていた。

学校

「そういえば、今日転校生が来るみたいですよ」

「ええ！誰々!？」

キザマロが言うと、ゴンタが食いつく。

「話によると女の子みたいですよ」

「そうなの？」

「へえ」

スバルは興味が無く、適当に返事する。

キーン・コーン・カーン・コーン!



すると、チャイムが鳴り、教室に先生が入ってくる。

「はい、みんな席について。突然ですが、今日は転校生が来います。では、入ってきてください」

ドアが開き女の子が入ってくる。入ってきたのはさつきスクリーンに映っていたアイドル・・・<ruby><rb>水星  
亜夢</rb><rp></rp></ruby><rt>みずぼし あむ</rt><rp></rp></ruby>>だった

ええええええええ!!!

女の子が入ってきたあと、教室中に響わたった。

「みなさん、本日転向してきた水星亜夢さんです。」

「・・・・・・・・・・」

亜夢はずっと黙っている。

「水星さん？」

先生は水星が何も言わないので声をかける。

「・・・・・・・・・・よろしく」

亜夢は横向きながらそう言っつ。

か、かつこいいい!!

スバル以外の男子、女子はみんなそう言った。

「それじゃあ水星さん、空いてる席に座って」

「……………」

水星は黙って、スバルの隣の席に座う。

「……………君、何て名前？」

「えっ？……………星河スバル」

「……………よろしく」

「う、うん。よろしく水星さん」

「亜夢でいいよ。上の名前で呼ばれるの嫌いなんだ」

「わかった」

（何か水星さんって、かつこいい……………）

スバルは亜夢が座った後少しそう思った。

授業が終わって休み時間

クラスの男子、女子から質問を受けていた。

「ねえ、何でこの学校に来たの？」

「別によくない？言わなきゃだめ？・・・強いて言うなら何となく」

「そうなんだ」

亜夢はめんどくさそうに言う。

「前の学校は何てとこ？」

「・・・何だっけ？・・・忘れた」

「えっ？」

「仕事仕事であんまり行ってなったからかな」

亜夢は記憶を探っていたが本当に忘れたようだ。

「何処に住んでるの？」

「あの辺」

窓の外を亜夢は指さす。ビルが多く建ち並んで、何処をを指さしたかわからない。

放課後

「水星さん、サインください」

「私も」

「俺も」

亜夢は数人の同じクラス、違うクラスの生徒に囲まれていた。

「ちょっと、通れないんだけど」

亜夢は殺気を放ちながら一言そう言った。

集まっていた生徒はゾツとして動けなくなる。そして、道をあける。

亜夢はカバンを手で持ってその道を歩いて行く。

「今の水星さんかっこいい！」

「かっこよすぎー！」

男子、女子からそんな声上がる。

スバルは帰るために廊下を歩いていった。すると、亜夢が後ろからやってくる。

「……スバル君、一緒に帰る」

「えっ？」

「ほら、早く！」

亜夢はスバルに話しかけ、腕を掴み走って学校を出る。

## 第22話 仲間と転校生（後書き）

今日はここまでです。

このキャラは、クールでかっこいい感じのキャラです。外ならばですが……

この話しで使った歌の歌詞は水樹奈々さんがあるアニメで歌った「迷宮バタフライ」という曲です。

オリキャラの名前もそのアニメを参考にしました（笑）

感想・アドバイス待ってまーす

## 第23話 ジャスミン・ハート（前書き）

すいませんが、前回の22話少し亜夢が言った台詞などを都合により変えます。23話を読む前にさきに読んでおいたほうがいいと思います。申し訳ありません。

## 第23話 ジャスミン・ハート

「ほら、速く！」

「うわあ！」

スバルは亜夢に腕を掴まれ、走って学校を出る。

すると、学校の門を出て急に止まる。

「はあ……はあ……」

スバルは疲れていた。

「スバル君ちょっと公園までついてきて」

「えっ？」

「いいから！」

「は、はい！」

亜夢はオーラを放ちながら言うとスバルは少し怯える。

（何だ今の……背中がゾツとした……）

二人は公園へと歩いていく。



## 公園

スバルは公園に着くと、ブランコに座る。だが亜夢は座らず立っている。

「水星さん何で僕をここへ連れてきたの？」

「・・・亜夢って呼んで。」

「ご、ごめん。亜夢ちゃん」

「よし。・・・連れてきた理由は・・・ちょっと聞きたい事がある」

「聞きたい事？」

「うん。・・・君、私の事どう思う？」

「えっ?・・・どうって・・・かつこいいと思っけど。めったにいないよ君みたいな人」

「そう、やっぱりか・・・」

亜夢は質問の答えを聞くと、少し表情が暗くなる。

「・・・ごめんね、つき合わせちゃって」

「別にいいよ。聞きたい事はそれだけ?」

「うん。じゃあ、私仕事があるから」

「そっか、アイドルだから」

「アイドルってほどでもないけどね・・・」

「そうなんだ。じゃあ、また明日」

「じゃあね」

亜夢はゆっくり歩いて何処かへ行ってしまった。

「・・・なんであんな質問したんだろう?それに・・・亜夢ちゃん、急に暗くなったし・・・」

スバルは、さっき亜夢の質問、表情が暗くなった事に少し疑問を抱く。

『地球人の考えることは分からん』

ウォーロックが言うとスバルは帰り始める。

時間は進んで 亜夢の家

亜夢の家は、ビルが多く立ち並ぶ場所の中心にある一番高いマンションの最上階に住んでいた。

亜夢は仕事を終らせ帰ってくる。

「ただいま」

亜夢はドアを開けて言う。

「って誰も居ないんだっけ……」

亜夢はここに一人暮らしである。そして自分の部屋へと向かう。

「はあ〜・・・やっぱりこうなっちゃうのか・・・」

そう言っていると、部屋のドアを開け、自分のベッドに寝転がる。

「今日も外キャラ疲れた〜」

亜夢が言った外キャラとは、外向けのキャラ。素直になれないから、本当の自分とは違うキャラ（性格）になってしまふ事。

「はあ〜・・・何で素直になれないんだろ〜・・・あのとときも」

## 回想

今朝の自己紹介のとき

「みなさん、本日転向してきた水星亜夢さんです。」

「・・・・・・」

亜夢はずっと黙っている。

（やばい、どっしり何言えばいいわけ!?!）

亜夢は表情は変わらないが、頭の中ではてんぱっている。

「水星さん？」

先生は水星が何も言わないので声をかける。

(うっ!!)

「……………よろしく」

亜夢は横向きながらそう言う。

か、かつこいい!!

スバル以外の男子、女子はみんなそう言った。

回想終了

「はあ……………」

亜夢は、自分の部屋の窓からベランダへ出る。辺りは夜のため星がきれいに見える。

「本当の私・・・もっと素直になりたい！」

亜夢は手を合わせて目を瞑って星空に願う。

『だったら、私が助けてあげる』

「えっ！？・・・うわあ！」

亜夢が目を開けると、そこには、着物を着たの女の子のような電波体が現れる。

「！？・・・あんだ誰！？」

亜夢は電波体から少し離れる。

『私は、FM星人のジャスミン。そんなに警戒しないで。・・・あなたは素直な気持ちになりたいんでしょ？』

「・・・うん」

『でも、人前だと口下手なを誤解されたり、意地っ張りやひねくれた事を言ってしまったって、そのたび「かつこいい」、「クール」と誤解されてしまうのよね？』

「・・・うん」

『なら、あなたは悪くないわ。悪いのは、誤解する人達よ。こうな

「だったら、そんな人達こらしめてやりましょう?。」

「……………どうやって?。」

『フフフ!私があなたに力を貸してあげる。私があなたのトランサーの中へ入るから、その後、“電波変換!水星亜夢 オン・エア!”と唱えて』

「えっ!?!」

ジャスミンはそう言うと、亜夢のトランサーの中へ入っていった。

「……………電波変換!水星亜夢 オン・エア!」

すると亜夢は、ジャスミンと電波変換する。

「……………何?この姿?」

亜夢は、頭に水色のかんざしをしている。姿は白、赤、水色で綺麗に色分けされているの着物を着ている。手には扇子を持っている。

『私とあなたが電波変換した姿よ』

「扇子が喋った!……………ってあんたジャスミン?。」

『そうよ。……………それより、気分はどう?。』

「何だか力がみなぎってくる」

『フフフ!この姿はジャスミン・ハート。空も飛べるのよ。はい!』

「えっ？っわあああ！どうなってんの！？」

ジャスミンが言った後、扇子を一回仰ぐ。ジャスミン・ハートは空を飛び始める。

『扇子を一回仰ぐと飛んで、飛んだ状態でもう一回仰ぐと下に降りる事ができるわ。気分はどう？』

「体が、羽のように軽い！」

『そう、気に入ってもらえたみたいね』

「うん！」

『じゃあ、この力をコントロールできるように修行でもしましょうか？』

「うん！いいよ！」

ジャスミン・ハートはその後、山の方へ飛んでいってしまっ。



その頃スバルは

スバルはテレビを見ている。

「あ、亜夢ちゃんだ！」

亜夢がバーチャルライブで歌っている。

『 Open your shiny eyes in the  
silent night

不思議な夜 舞い降りた 足音立てず 忍び寄る 悩ましげな  
黒猫のポーズ

月明かりを背に 浮かぶシルエット こっちへおいでと 微笑ん  
で 手招き

欲望の影 うごめく街 天子のふりでさまよい 大切そうに抱え  
てる 行き場の無い愛のカケラ

眠りにつく頃 あなたも何処かで 幸せな夢を見ているの？

星空にキスをして いい子はもう おやすみ

見つめないで つかまえないで 迷い込んだ バタフライ

自由 歌う 誰にも見えない羽 隠してるの あなたの胸の奥  
』

最後のところで、こっちの方に指をさす。

「……………」

「どうしたのスバル？」

スバルが黙りこんでいたので一緒に見ていたあかねが声をかける。

「いや、何か抜き取られた感じがするんだ……………」

「気のせいじゃないの？」

「……………そうだよね」

そう言ってスバルは、自分の部屋へと向かう。

## スバルの部屋

スバルは、宿題をしはじめる。

『だああああ！暇だああ！』

「……………うるさいよ、ウォーロック。母さんに聞こえたらどうするの？」

『そんな事言っただって暇なもんは暇なんだからしょうがないだろ』

ピピピピピピ！…ピピピピピピ！…ピピピピピピ！

すると、トランサーが鳴る。

「ん？誰からだろう？」

スバルはトランサーに出る。

「もしもし」

『もしもしスバル君？』

「ミソラちゃん。どうしたの？急に電話してきた」

『仕事終わったから、スバル君に電話してみたくなって』

「そうなんだ……………ああ、そういえば。ミソラちゃん」

『何?』

「水星亜夢って知ってる?」

『・・・知ってるよ 私と同じでアイドルなんだ。まあ、私はアイドルじゃなくアーティストだけどね』

「・・・その子、僕の学校に転向してきたんだ。しかも同じクラス」

『へえー、そうなんだ』

「それで、帰りに質問されたんだけど」

『どんな?』

「て事なんだよ」

『へえ〜・・・亜夢そんな事言ってたんだ』

「うん。・・・って、亜夢? 呼び捨てって...もしかして友達?」

『友達というか・・・親友だけど・・・』

「えっ!?!? そうなの!?!?」

『うん。まあ、親友でもあり、ライバルでもあるけどね』

二人はそんな話をしていると、時刻は11時を越えていた。

「スバルー！早く寝なさい！」

一階からあかねの音がする。

「はい！ごめん、もう寝なさい」

『わかった。じゃあ、おやすみなさい』

「うん、おやすみ」

プツン！

「さてと、寝るか」

スバルはトランサーを切った。そして、電気を消してベッドに寝始める。

### 第23話 ジャスミン・ハート（後書き）

・・・何か無理やりな気がする・・・

ジャスミンの星座は、一応乙女座（星座はちょっとわからないので）です。ジャスミンの名前の由来は花言葉が「素直」だからです。亜夢が素直になりたいという事で、ジャスミンにしました。電波変換した姿、ジャスミン・ハートは素直な心という意味です。

スバルが歌を聞いて「何かを抜き取られた気がする」「っていうのは、単なるネタで、本編とはまったく関係ありません（笑）

話は変わって、新FM星人ですが、勇氣さんとクイツクロッドさんのアイデアに決定しました。皆さんどうもいるんなアイデア、ありがとうございます。決まったキャラが出るのは、まだ先の方になると思います。

第24話 風の舞（前書き）

眠い・・・

## 第24話 風の舞

### 次の日

スバルは学校へ行ってる途中、委員長達と合流する。

「おはよう、委員長」

「おはよう・・・じゃないわよ！星河君！昨日水星さんと何処へ行ってたの！？」

「えっ？何処って公園だけど」

「学校中噂になってますよ！スバル君と水星さんが付き合ってるんじゃないかって」

「はあ？・・・ちよつと待って！何で僕と亜夢ちゃんが付き合ってるの！？」

「お前今、水星さんの事を亜夢ちゃんって・・・」

ゴンタが静かに燃え始める。

「！？い、いや、これは亜夢ちゃんがそう呼べって言うから・・・」

「問答無用！」

「うわあ！」



ゴンタが襲い掛かってくる。スバルはそれに反応し、学校の方へ逃げる。

「キザマロ！私達も追うわよ！」

「はい！」

委員長とキザマロも追いかけて行く。

## 5年A組

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・疲れた・・・」

スバルは何とか逃げ切れて教室の中へ入る。

ジーーーーー

(なんだろうっ?.....よく見たらみんなこっち見てる.....視線が痛い.....)

スバルが入ってきた瞬間から、クラスの中に入った男子、女子から変なオーラを出しながら見られている。スバルはかまわず自分の席に着く。

「.....なあ、星河」

そしたら、一人の男子生徒に話しかけられる。

「な、何?」

スバルは恐る恐る尋ねる。

「お前、水星さんと付き合ってるの?」

「そ、そんなわけないよ」

「.....でも、昨日学校で手繋いで帰ってるってこと見たぜ?」

「私も気になるわ星河君」

すると、委員長達がクラスの中へ入ってきて言う。すると、スバルの周りを生徒が囲む。

「あ、あれは、腕を掴まれて連れて行かれたただだよ」

「本当に?じゃあ聞くけどあなた」

バーン!

「 !? 」

委員長が質問しようとしたとき、亜夢が教室の扉を勢いよく開けて入ってくる。

「 . . . . . 」

亜夢は無言で自分の席へ向かう。

「 . . . . . どいてくれる? 」

「 あ、うん。ごめん 」

スバルを囲んでいた生徒は亜夢の席も囲んでいたため、亜夢が席に座るためには邪魔だった。なので亜夢は、ちよつと殺気立てどいてくれるように言う。生徒はその席から離れる。そして、亜夢は席に着く。

. . . . .

少しの間沈黙が流れる。

「 . . . . . 水星さんおはよう 」

「 . . . . . おはよ 」

委員長がこの空気を断ち切ろうと亜夢にあいさつをする。亜夢は委員長に返事をする。

「そつだ、水星さん。あなた、星河君と昨日なんで一緒に帰ったの？」

「……………聞いてどうすんの？」

亜夢が睨み付けるように尋ねる。

「……………あなたと星河君が付き合っているかどうか、このクラスの委員長として知っておく必要があります」

「……………バカじゃないの？そんな理由になってないじゃん。それに、委員長だからって他人の秘密を何でも知ろうとするなんて、どう考えてもおかしいじゃん。」

「そ、それは……………じゃあ、秘密って事はあなた達は付き合っているのね？」

「……………委員長がさつき私にした質問スバル君にはした？」

「……………ええ、したわ」

「スバル君何て言った？」

「腕を掴まれて連れて行かれただけ”って言ってたわ」

「その通り、私がスバル君をただ連れて行っただけ。スバル君は何も悪くない」

「そんなの信じられるわけ　「信じる信じないは委員長しだい、でもこれ以上私とスバル君を巻き込まないでくれる？」　くっ！」

亜夢は最後に委員長に殺気を放ちながら言う。委員長は亜夢の迫力に負けた。

他の生徒は、みんな啞然としている。委員長が競り負けた事を驚いている。

「「「「「……か、かつこいい!!」「」「」」」」

他の生徒（スバルを除いた）は声をそろえて言った。

（……またやっちゃった……）

亜夢の顔は少し暗くなる。

スバルは亜夢の表情が暗くなった事に気づく。だが、他の生徒は気づいていない。

キーン・コーン・カーン・コーン!

すると、チャイムがなったため、みんな自分の席に着く。

(もう、何でいつもこうなっちゃうわけ!? 私のバカ!)

亜夢は心の中で叫ぶ。

(亜夢ちゃん・・・何でさっき暗くなっただらう?)

スバルは心の中で考える。

(私は・・・自分を変える事もできないの?・・・やっぱり・・・他の人を変えるしかない・・・)

「・・・先生」

亜夢は手を挙げる。

「どうしたの?」

「トイレ」

亜夢はそう言って、席を立ち、トイレへ向かう。

「ちよ、ちよっと、水星さん!？」

先生は止めようとしたが、止められなかった。

女子トイレ

「ジャスミン。．．．やっぱり私は．．．」

『亜夢ちゃん、あなたは悪くないわ。あんな勘違いする人達は消してしまいたくないわ。』

「．．．わかった．．．私やる！電波変換！水星亜夢 オン・エア！」

亜夢は電波変換してジャスミンハートになり、外のウェーブロードへ壁をすり抜けて向かう。

『!?!?．．．この周波数はFM星人！スバル!』

「ウォーロック、静かにして。気づかれちゃつてしょ」

『そんな事より、FM星人だ!』

「!?!?!?! わかった。先生!」

「何ですか?」

「僕もトイレ」

「ちよつと!」

スバルは先生を無視して教室を出て、トイレへ走る。



「行くよ！ウォーロック！」

『おっ！』

「電波変換！星河スバル オン・エア！」

スバルはロックマンに変身して、外へ出る。

外の5年A組前ウェーブロード

ジャスミン・ハートは5年A組と同じ高さのウェーブロードの立っている。つまり3階分の高さである。

「.....」

『さあ、やるのよ。亜夢ちゃん』

ジャスミン・ハートは扇子を上げ、振り下ろそうとする。

「止める！」

「!?!?誰!?!?」

ジャスミン・ハートは振り下ろすのをやめ、声が出た方に振り返る。

「僕はロックマン！お前達は誰だ！？」

「……私はジャスミン・ハート」

「私はジャスミン」

二人は名乗る。

「！？」

「……どうしたのウォーロック？」

「……ジャスミン！？そんなFM星人知らねえぞ！」

「えっ！？どういう事、ウォーロック！？」

ウォーロックは驚いた顔をする。

「フッフ。知らなくて当然だね。私は新しく生まれ、この地球に派遣されたFM星人」

「何！？この地球に来るはずだったFM星人は9体じゃなかったのか！？」

「今は、私を含む12体よ」

「何だって！？そんなにいるの！？」

『・・・その話は後だ！目の前の敵に集中しろ！』

「うん！」

ロックマンは構える。

『さあ、戦いましょう』

「・・・・・・・・」

ジャスミン・ハートも構える。

「ロックバスター！」

「風の舞 風壁！」

ロックマンはロックバスターを3発放つ。だが、ジャスミン・ハートは扇子を開き、横向きに仰いで風の壁を作り、はね返す。

「！？うわ！跳ね返ってきた！」

スバルは避ける。

「風の舞 鎌鼬かまいたち！」

ジャスミン・ハートが扇子を開いたまま、空気を水平に切る。すると鎌鼬が起き、ロックマンに向かって行く。

「くっ！バトルカード！プレーション！バリア！」

ロックマンは前方にバリアをはって防ごうとする。

「……無駄だよ」

かまいたちはバリアを切り裂いてロックマンにあたる。

「うわあああ!!」

ロックマンは鎌鼬に切り刻まれる。

「くっ!何て強いんだ」

『スバル、あの技を出させるな!』

「分かってる。バトルカード!プレーション!ガトリング!」

ロックマンはガトリングを放つ。

ダダダダダダ!

「この弾速いね。風の舞 風速!」

ジャスミン・ハートそう言うと、消える。

「き、消えた!?!」

『違う、もの凄いスピードで動いているんだ!』

そう、ジャスミン・ハートは風を操り、追い風を使うことで普通より数十倍のスピードで動く事ができる。

「・・・君遅いね・・・」

ジャスミン・ハートは後に回り込んでいた。

「!?!しまった!」

「風の舞 風月漸!やあ!」

ジャスミン・ハートは、持っていた扇子をたたみ、風をまとった剣に変え、ロックマンを切る。

「うわあああああ!!!」

ロックマンは倒れる。

『スバル、しっかりしろ!』

だが、ロックマンは気を失っている。

『亜夢ちゃんどどめよ!』

「うん。風の舞 鎌い・・・!?!」

ロックマンの指が動く。そして、段々起きる上がる。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・君、亜夢ちゃんだよね?」

「!?!?な、何を急に」

「亜夢ちゃんだよな?」

「……………そうよ!私は水星亜夢!」

ジャスミン・ハートは怒りながら答える。

「……………君……………自分の意思があるの?」

「フン!だったらどうだったの!?」

「何をしようとしてるの?」

「……………知ってどうするの?てか、君には関係ないでしょ?」

『亜夢ちゃんそんな奴に耳を貸しちゃだめよ!』

「わかってる!風の舞 鎌 「君は、FM星人に地球を滅ぼされ

てもいいの!?」 「!?」

ジャスミン・ハートはとどめをさそうとしたが、ロックマンの言葉で手が止まる。

「う、うるさい!私には関係ない!」

「じゃあ、何で歌手なんてやってるの!?」

「!?そ、それは……………」

「誰かを幸せにしたい!誰かを元気にさせたい!そう言う理由じゃないの!?」

ジャスミン・ハートは黙り込む。

「……話してよ。君が何故人を襲おうとしたのか」

「……素直になれない……素直になりたくても私は自分じゃ変わる事ができない。……だから、「かっこいい」、「クール」なんて勘違いをしている他の人を消そうと「そんなの間違ってる！自分で変われないから、人に押し付けるなんて！」でも、他にどうする事もできないの！」

ジャスミン・ハートは泣き始める。

「……なら、そのままでもいいんじゃない？」

「えっ!?!」

「無理に変わろうとしなくても、段々変えて行けばいいんじゃない?」

『……亜夢ちゃん!……最後の一撃で答えを決めましょう』

「ジャスミン……うん!風の舞 風月漸!」

ジャスミン・ハートは泣きやみ、扇子を風月漸に変える。

『スバルやるのか?』

「……うん!亜夢ちゃんのためにも。バトルカード!プレデー

シヨン！ブレイクサーベル！」

ロックマンは左腕をブレイクサーベルに変える。

「やああああああ！！」

「はああああああ！！」

キーン！！

二人は交差する。

「くっ！」

ロックマンは右腕を切られる。

「……………ロックマン……………私の負けよ」

ジャスミン・ハートは、変身が解ける。だが、生身の人間はウエー  
ブロードに立つ事はできないから変身が解けると真つ逆さまに落ち  
て行く。ここは3階分の高さ……………落ちると無傷ではすまないだろ  
う。

「危ない！くっ！」

ロックマンは痛みで動けなかった。

「どうすれば……………ジャスミンは！？……………気を失ってる。くそ  
！もつだめだ！」



ロックマンは落ちる瞬間目を閉じた。

「……………あれ？落ちた音がしない……………あっ！」

ロックマンは目を開ける。すると

「ふうー、間に合った」

『危機一髪ね』

そこには、亜夢を抱えたハープ・ノートの姿があった。

第24話 風の舞（後書き）

・・・途中から何書いてるか分からなくなりました・・・誤り字、  
分かりにくいところがあると思います。もしあれば、感想の方に書  
いておいてくれると嬉しいです。

眠い・・・。今・・・午前4時40分・・・もう朝じゃん。寝よう。

感想まってまーす ( - | - ) z z z

## 第25話 素直な心

「は、ハーブ・ノート!？」

「よいしょ!・・・ヤッホー、ロックマン」

亜夢を抱えたハーブ・ノートがロックマンのいるウェーブロードへジャンプしてやってくる。

「ロックマン怪我してるけど大丈夫？」

「えっ?・・・大丈夫だよ」

ロックマンはハーブ・ノートに心配をかけないために大丈夫と言う。

「そう、ならいいけど」

「・・・それより亜夢ちゃんは大丈夫かな？」

「・・・とりあえず寝かせよ」

ロックマン達は亜夢を屋上に行き寝かせる。

数分後

「……………ここは？」

亜夢の目が覚める。

「亜夢ちゃん、大丈夫？」

「……………スバル君……………ミソラ？」

スバル達はそのとき電波変換をもう解いていた。

「久しぶり！亜夢」

ミソラは笑顔で言う。

「うん……………久しぶり……………でも何でここに？」

「気にしない、気にしない！」

ミソラは少し焦る。

「？まあいいや……………スバル君」

「何？」

「……………ロックマンの正体って君？」

「……………うん。僕だよ」

「そう……」

亜夢はロックマンの正体を知ると、少し微笑んだ。

「……さつきはごめん！私が間違ってた！」

亜夢はスバルに頭を下げて誤る。

「……亜夢ちゃん……別に無理してまで素直にならなくてもいいと思うよ？」

「えっ？」

亜夢は頭を上げて聞き返す。

「少しくらい素直じゃなかったっていいと思う。不器用で素直になれない……きっとそれは君の個性だよ！」

「……個性？」

「そう、個性！君しか持っていない、君だけの良さだよ！」

スバルが笑顔で亜夢に言う。

「……ありがとうスバル君」

亜夢も笑顔で返す。

「そう言えば……そのFM星人どうするの？」

スバルが亜夢に尋ねる。

「……………ジャスミンの事？」

「私は、亜夢ちゃんに悪い事をさせようとしたわ。罪を償うべき……」

ジャスミンが亜夢のトランサーから出てきてみんなに言う。

「ジャスミン……………お前はFM王の命令に従っただけなんだろう？」

ウォーロックがトランサーから出てくる。

「ウォーロック……………そう、でも私は『従っただけなんだろう？』なら、お前は悪くねえんじゃないか？』 えっ!？」

「全てFM王のせいなんだろう？ならお前に罪はない。むしろ被害者だろ？」

「でも 『ジャスミン!……………さっきまでの私みたいに自分を責めちゃだめだよ』……………亜夢ちゃん……………こんな私を許してくれるの?』

「……………もちろん!」

「……………ありがとう、亜夢ちゃん」

「……………ジャスミン、行くところなんなら私と一緒に暮らさない

「？」

『えっ？』

「べ、別に一人じゃ寂しいとかそんなんじゃないんだからね！」

（・・・あれ？ツンデレ？）

（出た！亜夢のツンデレ！久しぶりだな）

スバルとミソラはそんな事を思っていた。

『・・・うん。これからよろしく亜夢ちゃん』

「よ、よろしく」

キーン・コーン・カーン・コーン！

すると、チャイムが鳴る。

「」「」「あっ！」「」

「やば！トイレ行くなって言ってたんだ！」

「僕も！」

「二人とも大変だね。じゃあ私仕事があるから帰るね？」

「じゃあね、ミンラー！」

「ミソラちゃん、また今度！」

「ばいばい！」

スバルと亜夢は走って行き、屋上を後にする。

（あれ？ミソラってどうやって帰るんだろう？・・・まあ、いいか）

亜夢はミソラの正体を知らないため、どうやって帰るのか少しだけ気になっていた。

## 教室

「「すみません！遅くなりました！」」

「・・・二人とも、放課後残りなさい！」



「はい……」

二人は先生に残るように言われる。その後スバルと亜夢は自分達の席へ座る。

すると、委員長達がやってくる。

「スバル、腹痛くて粘ってたのか？」

ゴンタがスバルに言う。

「……ゴンタ、あなたは黙ってなさい！」

「……はい」

委員長は場違いのゴンタを黙らせる。

「……星河君……ずいぶん長いトイレだったわね……どこへ行ってたの？」

「えっ!?!……どこってトイレだけど……」

「うそおっしやい！授業時間ずっとトイレにかかるわけないでしょ  
」!

委員長は大声で言う。すると、他の生徒が集まってくる。

「……委員長、スバル君は悪くないよ」

「どうして？」

亜夢がスバルをかばう。委員長はそれに聞き返す。

「……………私が屋上でサボって寝てたたの」

「何ですって!？」

「そしたら、スバル君がやって来て、私に授業をちゃんと受けるように説得していたの」

亜夢は嘘をついてスバルをかばう。

「……………じゃあ、星河君は悪くなくて、悪いのはあなただと?」

「そう。私が悪いの」

「……………そう。なら、今日のところは許してあげるわ。星河君!次はないからね」

委員長はそう言って次の授業の準備をする。

「……………いいの?亜夢ちゃん?僕なんかをかばって……………」

「別にいいよ。説得したっていうのは本当だし」

「……………ありがとう」

二人は小声で話した後、次の授業の準備をする。

放課後

スバルと亜夢は先生に怒られている。

クラスのみんなは帰ってしまっていた。

「……水星さん、次からはこういう事がないようにしなさいね?」

「……はい」

「それじゃあ、二人とも気をつけて帰ってね」

「さようなら」

スバルと亜夢は教室から出て行く先生を見送った。

「……亜夢ちゃん帰ろうか?」

「・・・そうだね」

二人はかばんを持って、教室を出て、学校を後にする。

二人が帰り始めたときにはもう日が沈み始めていた。

「ねえ、スバル君」

「あの時、何で歌手なんてやってるの？」って聞いたよね？」

亜夢がスバルに話し始める。

「・・・スバル君だけにその理由を教えるね。・・・私は、小さい頃両親と妹を車の事故で亡くして。・・・私は、両親と妹を亡くしたショックで、生きる気力をなくした。・・・そんな時、ある歌手の歌を聞いたの。その歌手の人は、みんなを楽しませる歌い方をしていた。私はその歌を聞いて元気が出た、元気が湧いてきた。その時、“こういう風にみんなを楽しませる歌が歌えるなんてす凄い！”って思えた。憧れって奴かな？・・・その時から“私も歌手になりたい、私みたいに苦しんでる人を元気に与えられる存在になりたい！”って思った。それは、今も変わらない。この思いがあるから、今の私がいる、ファンの人が応援してくれたからここまでこれた。」

「・・・・・・・・・・」

スバルは黙って亜夢の話しを聞いている。

「・・・・・・・・・・なのに・・・・・・・・それなのに、クラスみんな・・・・フアンのみんなを私のわがままで傷つけようとした・・・・・・・・」

亜夢は下を向いて泣き出してしまふ。

「・・・・・・・・亜夢ちゃん。・・・・・・・・みんなは君の事わかってあげられないかもしれない・・・・・・・・勘違いしてしまふかもしれない」

スバルが亜夢に話し始める。

「・・・・・・・・・・でも、僕は知ってるよ？君が誰よりも素直になりたがってるって事、口下手で意地っ張りでひねくれた事しかない事。・・・・・・・・僕は君の本当の気持ちちゃんと分かってる。だから、泣かないで？君には僕がついてるから」

スバルは亜夢に手を差し伸べる。

「・・・・・・・・スバル君・・・・・・・・ありがとう！」

「それじゃあ、帰ろうか？」

「・・・・・・・・スバル君・・・・・・・・展望台によって行かない？」

「えっ？・・・・・・・・いいよ」

「ありがとう」

そう言って二人は展望台へ歩いていった。

### 展望台

スバルは近くにあったベンチに座っている。亜夢はその前で立っている。

「・・・スバル君・・・君に私の新曲を一番最初に聴いてほしいの」

「えっ？新曲！？・・・僕が一番目最初って・・・まだテレビとかで歌った事ないの！？」

「そう！君が最初だよ。じゃあ歌うね？」

「うん うん」

『 悲しみに潰されそうでも そんな顔はやめて

お飾りのCheapなPrideは 捨ててしまおう

太陽のもとで瞳そむけずに生きていこう

そうだよ 笑いたい はしゃぎたい素直に 感じられる 眩しい  
H a p p i n e s s

絶対あきらめない 誰にも奪えない夢がある

今すぐ 伝えたい 掴みたい あせらず 深呼吸して

太陽が似合うよ とびきりの笑顔 見せて  
』

「……歌、良かったよ亜夢ちゃん!」

「……ありがとう。……ん?そう言えば今何時?」

「今……5時20分」

「まじ!?やば!仕事遅れちゃうぞっしょ!?!」

亜夢は時間が思った以上に過ぎている事に驚き、焦る。

『大丈夫よ亜夢ちゃん』

「ジャスミン!?!」

亜夢のトランサーからジャスミンが出てくる。

『電波変換すればいいのよ。1分もあれば着くわ』

「えっ?本当?よかつた?」

「……アイドルも大変だね」

スバルは苦笑いして亜夢を見ている。

「じゃあ、スバル君。そういうわけだからもう行くね?」

「うん。また明日」

「バイバイ!……電波変換!水森亜夢 オン・エア!」



亜夢は電波変換すると周波数を変えて消える。

『……………俺たちも帰るか？』

ウォーロックがトランサーの中から言う。

「そっだね。…………でも、せっかく展望台に来たんだから星を見ていこう」

『はああ！！？何言ってるやがんだ！さっさと帰るぞ！！……………つて、おい！聞いてんのか！？おい、スバルー！』

スバルはもう自分の世界に入り込んでいた。

『……………だめだこりゃ』

それから二人が帰ったのは今から2時間後だったという。

## 第25話 素直な心（後書き）

亜夢編終了・・・あれ？ミソラあんまり喋ってなくない？・・・まあいいか・・・。

・・・この話し考えるのに2、3日もかけてしまった。まあ、忙しかったからって言うのもあるんですけどね。

2、3日掛けた割には出来があんまり良くないですね（-\_-;）

この話し、本当は今日学校の技術の授業中上げるつもりだったんですが・・・ちょっと問題があつて無理でした（笑）

亜夢が最後に歌った曲は・・・わかる人にはわかると思います。（たぶん・・・）

それでは、感想・アドバイス待ってまーす

## 第26話 育田先生の科学教室

ある休みの日

スバルは公園のブランコに座っていた。

「はあ〜・・・宿題面倒だな・・・。通信学習の予習でとくに  
やったところなのに・・・。」

『文句言ってもなくならないぜ』

ウォーロックがトランサーの中から言う。

「困ったな・・・ん？」

ポワワーン

白い煙の輪が飛んでいる。

「・・・何だ？あれ？」

スバルはブランコを降り、煙がやってきた方向へ歩いて行く。

「あ、ツカサ君」

「ん？スバル君」

煙が飛んできた方向にはツカサとフラスコ二つを首にさげていて、白衣を着ている男の人がいた。ツカサは、穴が開いた箱のダンボールに蚊取り線香から出た煙を溜めている。

「……学校にこんな先生いたっけ？」

「ああ、育田さんは子供科学館の先生なんだ」

「そう。明日の教材をツカサ君と作ってるところなんだ。ツカサ君、もう煙は充満したんじゃないかな？」

「あ、はい。スバル君やってみる？」

「えっ？……うん」

スバルはツカサから煙が充満したダンボールを受け取る。

「さあ、箱を叩いてごらん」

スバルは育田に言われると、穴の方を空に向け、箱の横側を叩く。

バン！

ポワワーン

すると、ダンボールからさっきの白い煙の輪が出る。

「わー、凄いやー!どうなってるの?」

スバルがツカサに尋ねる。

「箱の中の空気は周りの空気と違って摩擦が小さいから、勢いよく遠くまで飛ぶんだよ。全部育田さんの受け売りだけだね」

「スバル君、よかつたら君も遊びに来ないか?」

「はい!」

### 次の日の休み

スバルはトランサーの地図を見ながらある場所に向かっていった。

「……………ここか」

スバルは子供科学館に着いた。科学の外には結構子供がやって来ている。

「あら？星河くんじゃない」

スバルは後ろから声がしたため振り向く。すると、いつもの委員長達がいる。

「お前もここに来てたのか」

「あなたのお家に誘いに行ったのよ」

「そうです！育田先生のおもしろ科学教室に！」

最後にキザマロが自慢げに言う。

「……………君たちもここに？」

教室内

「育田道徳の科学教室へようこそ。みんな、今日は科学の不思議さ、楽しさ、おもしろさを知って帰ってください」

ハイ！

「・・・点いたわ！凄い！」

委員長はレモンにプラス極とマイナス極の線を繋いで電気を流している。

「レモンやみかんなどに亜鉛と銅といった違う種類の金属をさすと、果物が電池になるんだ」

育田先生が委員長達に説明する。

「いつけー！」

ゴンタ、キザマロ、スバルは小船に、小さな火を巻くように銅パイプを巻き、パイプの端を水につけて小船を走らせている。

ちなみに、ゴンタの船はフォークとナイフマーク。キザマロは眼鏡。スバルは胸のペンダントのマークの船を走らせている。

「やったー！」

今ゴンタの船が、スバルと、キザマロの船を追い越す。

「ふむふむ、熱せられた銅パイプの中の水が後ろに押し出されて進むわけですね」

「難しい話しいいんだよ！」

キザマロが分析した事を言うと、ゴンタが怒る。

そんな事を言っていると、ゴンタの船がゴールした。

「……俺の勝ちだ！」

ゴンタは腕を上げ叫ぶ。

「ふむふむ、銅パイプの長さが勝敗に関係するようですね。ゆえにゴンタ君が勝利した」

キザマロが眼鏡をクイツ！としながら言う。

「だから、難しい話しいいんだよ！」

ゴンタはキザマロの頭を叩く。キザマロは眼鏡を落とす。

「ハハハ！」

スバルは少し笑う。

「さて、次は」



スバルは周りを見渡し、何をしようか考える。

「ん？・・・ロケット？」

スバルは、机の上に置いてあったペットボトルロケットを手に取る。

「それはペットボトルロケット。完成したら本物のロケットと同じ仕組みで飛ぶんだ」

「本物と同じ？」

スバルはロケット見て考え込む。

「じゃあ、次回はそれで決定だな。みんな！次回はペットボトルロケットを作るからな」

育田が、子供たちに言う。

その日の夜　スバル宅

スバルはペットボトルロケットを手にとり見ていた。

「・・・いつかは、僕も宇宙へ」

スバルはそっと呟く。

その頃　とあるテレビ局の電波アンテナ

テレビ局の上にある電波を発するアンテナに、天秤のような姿をした電波体がたっていた。

『・・・ハッ!』

ジジジジジジジジジ!

電波体は自分の体から電磁波を出し、アンテナを操り始める。

スバル宅 一階リビング

スバルは一階に降りてきていた。

ソファアーに座り、切ったリングを手にとって食べながらテレビを見ている。

ジジジジジジジジジ!

すると、スバルが見ていた番組が急に映らなくなる。

「ん?何だ?」

『・・・ウォーロック』

さっきの電波体が映り出す。

『!?・・・お呼びのようだな』

「・・・ウォーロック、僕も行く!」

コダマタウン 市街

「うわあああああ!」

「きゃあああああ!」

街では、マンホールから下水道の水が勢いよく噴き出している。その場にいた人たちは逃げ出す。

「・・・大変だ!電波変換!星河スバル オン・エア!」

スバルが走ってやってきて、電波変換する。

『……フレイムウエイト!』

さっきの電波体が天秤の左の皿から、炎の玉を飛ばす。すると炎の玉は建物にあたり、炎上する。

「バトルカード!プレデーション!ワイドウェーブ!」

ロックマンは炎上している場所にワイドウェーブを放ち、鎮火する。

『何?……来たか、裏切り者ウォーロック』

『チツ!リブラか。しつこい奴らだぜ!』

ロックマンは周波数を変え、リブラの目の前のウェーブロードへ移動する。

『……貴様に選択の自由を与える。A、素直に降参してアンドロメダの鍵を渡す。B、私と無益な戦いをする』

『ケツ!偉そうに……答えは……』

「これが答えだ!」

ロックマンはロックバスターをリブラに放つ。リブラはジャンプして避ける。

『ウォーロック!それがお前の答えか?後悔するがいい!へびーウ

「エイト！」

リブラはロックマンの頭上に巨大な分銅を出現させ落とす。

『来るぞ！』

「わかってる！」

ロックマンは周波数を変えて避ける。

『！？消えた！』

「バトルカード！プレデーション！ジェットアタック！」

『何！？』

リブラの斜め上に現れ、ジェットアタックで突っ込む。

『うわあああ！！』

右肩に直撃し、リブラは下へ落ちる。下には、ウェーブロードがあり、リブラは着地して逃げる。

「あ！逃げた！」

ロックマンも下のウェーブロードに降りて、リブラを追い始める。

「待て！」

『くっ！……ここはどうするべきか？A、戦う。B、逃げる。……』

・・・B、逃げるべきだ！』

リブラはさっきの傷では戦っても不利だと思い、スピードを上げ逃げ始める。

### ゴミ分別所

「貰っていいかな？」

「いいですよ。捨てるものだから」

育田は、ゴミ分別所にペットボトルを貰いに来ていた。

「・・・よし！これだけあれば、次の実験にも充分だな」

育田は数十個のペットボトルを袋につめる。

すると、上にあるウェーブロードに、リブラが通りかかる。

『……お前の体借りるぞ!』

「ん?……うわああああ!」

リブラはウェーブロードから、育田がいるほうへ向かい、ぶつかると。

数秒後ロックマンがやって来て、電波変換を解く。

『チッ!リブラの反応が消えた』

「……あつ!先生!育田先生!」

スバルはペットボトルを持っている育田を見つける。

(この少年……こいつの知り合いのようだな)

育田はすでにリブラに操られている。

「先生、今日はどうも。楽しかったです」

「今日?」



「えっ？科学の教室の事ですよ」

「あ、ああ、そ、そうだったね・・・」

(このままではまずい、どうする私？A、話につき合おう。B、怪しまれないように切り上げる・・・)

育田<sup>リョウ</sup>は考え込む。

「ん？先生どうしたの？」

「す、すまんが、私は用があるのでこれで！」

育田<sup>リョウ</sup>は走って逃げる。

「・・・変な先生」

その後 公園

リブラは誰もいない公園にいた。

噴水前のベンチに座り、育田のトランサーを見ている。

『育田道徳。科学のおもしろさを伝えるために全国を周る?・・・  
まあ、いい。私のダメージが癒えるまで、こいつ体で休ませてもら  
うとするか。それまで勝負はお預けだウォーロック!』

リブラはそう言うと、公園を去って行く。

第26話 育田先生の科学教室（後書き）

リブラ編・・・。忙しい中急いで書いたんでわかりにくいところがあるかもしれませんが。そのところはご了承くださいm——m

第27話 リブラ育田の危険な科学教室（前書き）

今回は育田が<sup>リブ</sup>（<sub>ラ</sub>）を使うことが多いです。

## 第27話 リブラ育田の危険な科学教室

翌日 ある交差点

育田は横断歩道手前で信号が青に変わるのを待っていた。

（私はFM星人のリブラ。裏切り者ウォーロックを倒すためにやってきた。だが、昨日の戦いでダメージを負い、地球人の体に移り移った）

信号が青になる。

「はい、みなで手を上げて渡りますよ」

「くくくくはい！」「くくく」

育田の前にいた幼稚園児と園児の先生が手を上げて横断歩道を渡る。すると育田も左右を確認して、手を上げて渡る。

（傷が癒えるまでお前の体を借りるぞ）

暫くして、育田はラーメン屋に行き、ラーメンではなく、そばを頼

んで食べている。

(復活した時、ウォーロックお前の最後だ!)

「……………」

じ—————

隣に座っていた五陽田警部が育田を見ている。

(な、何だこの男? ……私の正体がばれたのか?)

育田は冷や汗を流している。

「……………あんた…………ラーメン屋でそばなんていいね!」

「え? ……ああ、どうも」

育田は五陽田警部に返事を返す。

時は進み      コダマ科学館

育田は科学館に来ていた。

「……ここがこいつの仕事場か。A、怪しまれないように仕事を  
する。B、仕事をサボる。はあ……ここはAだな」

育田は中へ入っていく。

「……育田道德のおもしろ科学教室……」

育田は教室に入り、教室の前にあるホワイトボードを見る。

教室内を見渡す。机の上にはダンボールや白い紙、ペットボトルが  
入っている箱などがたくさんある。

「……それにしても汚い部屋だな」

育田は部屋を片付け始める。

## コダマ図書館

スバルは図書館でペットボトルロケットについて調べていた。

「へえ〜。空気が水を押し上げて浮き上がるんだ。早く作りたいな〜」

『子供らしいところもあるんだな』

ウォーロックが小さな声で言う。

「悪かったね。いつも子供らしくなくて」

『まあ、そう怒るなって』

「ふん！」

スバルはそっぽを向いて、本を直す。そして帰り始める。

スバルは帰り道にゴミ処理場前を通っている。

「あ、先生！」

「ん？君は」



スバルはゴミ処理場前にいた育田を見つけ、声をかける。育田は箱を抱えている。

（またこいつか）

「その箱どつするの？」

箱の中にはペットボトルが入っている。

「ああ、これね。ゴミだから処分するんだ」

「ゴミ？それ今度の実験に使う材料じゃないの？」

「え！？・・・ああ、そうだった！」

育田は少し汗をかく。

（危つくばれるとこだった！）

育田は振り向き帰り始める。

コダマ科学館

育田はゴミ処理所から帰る。

そして、トランサーを使って何かを調べる。

「・・・奴はこんなものを作っているのか」

育田はトランサーに出てきたダンボールの空気砲、ペットボトルロケットなどの設計図を見て言う。

その頃、スバルは育田の後をつけ、教室前のドアに隠れて育田を見ている。

「・・・実験の材料を捨てようとするなんて、先生どうしたんだろ  
う?」

『・・・臭うな』

「えっ?」

スバルはトランサーを開ける。

『奴からFM星人臭いがする』

「先生がFM星人?そんなまさか」

『まさかな』

暫くして

「くっそー！」

育田はペットボトルロケットを作ろうとしていたが、全て失敗していた。

（私はこいつと合わん！波長を調べずに乗り移ったのが失敗だった！）

育田は失敗したペットボトルロケットを持って外へ出る。

スバルも後をつける。

「・・・何が科学だ！こんなもガラクタ！フレイムウエイト！」

ゴミに炎の玉を飛ばす。ゴミは燃えだす。すると科学館にも炎の玉を放ち、炎上させる。

「！？先生！」

スバルは今まで木の陰に隠れていた。育田の後ろに現われ、育田を呼ぶ。

育田は振り向く。

「……先生は誰なの？」

「私は育田先生だよ。……今の見たのか？」

スバルは頷く。

「……そうか。そう、私はFM星人のリブラ！」

育田はそう言うのと光を放ち電波変換する。スバルはその光が発生してる間に建物の影に隠れる。

「先生にFM星人のリブラが乗り移ってたなんて！」

「スバルこっちも行くぞ！電波変換だ！」

「了解！電波変換！星河スバル オン・エア！」

スバルも電波変換する。

「……あの子供はどこへ行った？」

リブラ・バランスはスバルを探す。

「ついに正体を現したな！」

『！？ウォーロック！いつの間に！？』

ロックマンは建物の上にいる。

『その体で俺と戦う気か？お前に選択の自由を与えてやる。A、降参して帰る。B、負けると知って俺と戦う』

『真似するな！フレイムウエイト！』

リブラ・バランスは炎の玉を飛ばす。

『後悔するぜ！』

「バトルカード！プレデーション！ワイドウェーブ！食らえ！」

ロックマンはワイドウェーブを放つ。ワイドウェーブは、炎の玉を鎮火してそのままリブラ・バランスの方向へ向かう。

『くっ！』

リブラ・バランスはなんとか避ける。

ワイドウェーブは炎上した建物にあたり、炎が消える。

リブラ・バランスはウェーブロードへ飛び移る。

『くっ！この体で力と力の勝負はむりなのか？』

リブラ・バランスは自分の右肩ダメージを見て言う。

『・・・力が足りない時は頭を使えっか。来い、ロックマン！フレイムウエイト！』

ロックマンはジャンプで避ける。だが、ロックマンがジャンプする前にいた場所は貯蔵タンクで、炎の玉はそれにあたる。

『食らえ！』

「くっ！」

さらに炎の玉を連続で飛ばす。

ロックマンは次から次へとジャンプして避ける。そして、ウエーブロードへ飛び移る。

「・・・何処を狙ってるんだ？」

リブラ・バランスは全てロックマンの足元を狙っていた。

炎の玉は、貯蔵タンクに全てあたっている。

バコン！ガコン！

貯蔵タンクが凹んでいく。

『ん？・・・くそ！奴め、はなっから俺たちにあてる気なんてねえんだ！』

「何だって!?!」

『そうだ！貯蔵タンクを炎で気圧を上げるのが目的。ペットボトルと同じ、気圧が上がったタンクは宙を舞うぞ。工場もろともお前を吹っ飛ばしてやる。』

「何だつて！？くっつ！」

『フハハハ！これぞリブラ式、化学実験教室だ！』

バコン！ガコン！プシュー！

タンクは段々へコンでいく。ところどころ漏れ出している。

「このままじゃ・・・」

『外に気圧を逃がせ！』

「分かった！バトルカード！プレーション！スイゲツザン！てや  
！」

ロックマンはタンクのパイプを切り、気圧を逃がす。

『いいぞ！』

『よくも邪魔したな！リブラスイング！』

リブラ・バランスはロックマンの前に降りてきて、回り始める。

「くっつ！」

ロックマンはジャンプで後に避ける。

「あとはお前だ！バトルカード！プレデーション！ヘビーキャノン！えい！」

『うわああああ！！』

ヘビーキャノンはリブラ・バランスに命中する。

『A、逃げる！B、逃げる！とにかく逃げる！』

リブラはデリート寸前で電波変換を解き、一筋の光となってどこかへ逃げる。

育田は電波変換が解け、気絶する。

すると、ロックマンはどこかへ消える。

「……フフフ！ロックマン、早く君と戦いたいよ」

ツカサがコダマ科学館の屋上に現われ言う。



## 次の日の科学教室

みんなは外に出ている。

スバルとゴンタ、キザマロはペットボトルに水を入れ、空気入れて空気を入れている。

プシュー！

三人は同時に発射させる。

キザマロのペットボトルはすぐに落ち、ゴンタもその後には落ちる。スバルのペットボトルはまだ上へと上がり続けている。

「スバル君のが一等賞だな」

育田が言う。委員長はあんなに飛ぶのかというほど驚いている。

「やったー！」

「くそー！」

「ふむふむ、星河君のロケットは水と空気のバランスの勝利ですね」

「だから、難しい話はいいんだよ！・・・うわー！」

ゴンタがキザマロを殴ろうとした時、キザマロは素早く避ける。ゴンタは勢い余って転ぶ。

「そう何度も当たりませんよ」

あはははははははははは！

ゴンタはみんなに笑われる。

「育田先生、元に戻って良かった」

『ああ、そうだな』

二人はそう言った。

第27話 リブラ育田の危険な科学教室（後書き）

リブラ編終わりです。

この頃更新遅くてすみませんm——（ m

もうちょっと早く更新できるよう頑張ります！

それでは、感想まってまーす

番外編 ちよつとした雑談1 (前書き)

今日はちよつとストーリーとは関係ない雑談みたいなものです。これからたまにこつこつという話を書いていこつと思えます。

## 番外編 ちよつとした雑談1

どうもこんにちは。この小説の作者シューティングスターです！

番外編ではこの小説に出てきた何人かのゲストと私のちよつとした談話をしていこうと思います。

では今回のゲストを紹介します。スバル君とウォーロック、ミソラちゃんとハープ、亜夢ちゃんとジャスミンです。

「ど、どうもこんにちは」

『おっす！』

「こんにちはー！」

『べじじも〜』

「……………」

『こんにちは。ほら、亜夢ちゃんも挨拶して』

「……………」

亜夢ちゃん、そんなに緊張しなくても。

「別に……………緊張してないけど？」

……………まあいいや。

では、ちょっと質問でもしますか。スバル君とウォーロックに質問です！

「何？」

『できるだけ早く終らせるよ』

「………亜夢ちゃんに何で攻撃当てられなかったの？」

「『はあ！？』」

だから、戦ったとき何で当てられなかったの？

「………何かごめん……攻撃当たらなくて」

「いやいや亜夢が誤る事ないよ。ていうかスバル君当てられなかったの！？」

「えっ？……うん……まあ……僕って弱いな……」

あらら……スバル君落ち込んだ。ミソラちゃん酷い事言うね。

「えっ？私のせい！？」

『ていうか作者！その話し、てめえーが考えたんだろ！？』

えっ？……思いついた事考えずに書いてたら……こうなっちゃった（実話……）

『それって酷くない？』

『そうよ。亜夢ちゃんも言っただけよ！』

「えっ！？私！？……スバル君悪くないじゃん！……それって酷いんじゃない！？」

とは言っても君、スバル君ポコポコにしてたよね？

「い、いやそれは、仕方なく……」

仕方なく……ねえ。

「……ぶっ殺されたい？」

あれ？亜夢ちゃん……何か変な黒いオーラ出てますよ……？しかも、笑顔なのに妙に目が怖い……。

「亜夢ちゃん……その辺にしておいた方が……」

「……スバル君が良いなら良いけど」

「スバル君優しいね」

『本当ね。誰かさんとは大違い』

『そうね』

えっ？私？……まあいいや。次にミソラちゃんと亜夢ちゃ

んにやっつて欲しい事があります。

「いよいよ！」

「場合によってはどうなるか知らないよ？」

き、気をつけます……。……。歌ってください！

「「えっ？……。」「」

だめ？ほら、これ読んでも人も歌って欲しいと思ってるよ（たぶん）？

「そう言われても……。まさかコラボ？」

コラボはまた今度でいいよ。

「……。めんどくさいな」

ほら、スバル君も頼んで。

「えっ？」

……。聞きたくないの？この設定では二人ともアイドルだよ？

「……。そう言われてみると……。聞きたい！」

「……。まあ、いいか。べ、別に勘違いしないでよね！スバル君のためとかそんなんじゃないんだから！」



(( )) (( )) (( )) (( )) (( ))

『スバル・・・それ何だ?』

『あなたは黙ってなさい!』

『ハープ、お前には聞いてない!』

・・・じゃあ、誰のため?

「そ、それは何となく!」

ジーーーーー

「うっ!と、とにかく歌うよ!ミソラ、どっちから歌う?」

「じゃあ・・・亜夢から」

「で、どの歌がいいの?」

迷宮バタフライ!

「じゃあ、ミュージックスタート!」

『 Open your shiny eyes in the  
silent night』

不思議な夜 舞い降りた 足音立てず 忍び寄る 悩ましげな  
黒猫のポーズ

月明かりを背に 浮かぶシルエット こっちへおいでと 微笑んで 手招き

欲望の影 うごめく街 天使のふりでさまよい 大切そうに抱えてる 行き場の無い愛のカケラ

眠りにつく頃 あなたも何処かで 幸せな夢を見ているの？

星空にキスをして いい子はもう おやすみ

見つめないで つかまえないで 迷い込んだ バタフライ

自由 歌う 誰にも見えない羽 隠してるの あなたの胸の奥 ♪

次ミソラちゃん。

「ハートウェーブでいい？」

OKです。

『 飛び交うシグナル それぞれの今日を乗せて 同じ周波数 重ねあいい君と話す』

迷い ためらいを振り切り そこに あるはずの道を行こう

見上げる空は 心に 積もる 願いの色

描く 夢を映し出す 必ず

いつか この手に 触れる明日への地図

強く 高く 届くまで 輝いて 』

『二人とも素敵！ヒューヒュー』

「ありがとうハープ！」

『亜夢ちゃん良かったわ』

「……………」

二人ともありがとうございました！……………ん？よく考えたら、亜夢ちゃんの歌……………亜夢ちゃんが作ったわけじゃなくね？

「え……………」

だから、亜夢ちゃんが作ったわけじゃなくね？違うアニメの挿入歌を……………使つ……………て……………あれ？亜夢ちゃん？……………何でオーラが出てるの？しかも黒いしでかい……………に、逃げなきゃ……………う、動かない……………。

「私が作った歌じゃないって！……………あんたが書いたんでしょ  
うが……………」

えっ……………いや……………あの……………

「……………さようなら……………」

ゴン！バキ！ベキ！

ぎゃあああああああああ！！

「……作者が亜夢ちゃんに気絶させられたので今日はこの入んで。それではこれからもよろしくお願いします！さようなら」

『じゃあな！』

「ばいばい」

『またね』

『それでは、失礼します』

で、では、そついう事で。

「作者いつまで生きれるのかな？」

スバル君そついう事言わない！

## 第28話 ロックマン急便

コダマ宅配センター

ここは、コダマタウンへの荷物を機械が住所分けしている場所だ。

ブーーーーー！ブーーーーー！ブーーーーー

すると、住所分けしている機械が暴走し始め、警報が鳴りだす。原因は、ウィルス、ビリエースの仕業だ。

「どうなっているんだ!？」

「わーーーー！止まらない!」

ここの職員数名が機械をコントロールし、止めようとする。

『ブリーー！ブリーー!』

だが、機械ではなくウィルスのせいなので暴走は止まらない。

「ロックバスター!」

『ブリーー!』

すると、暴走させているビリエース数体の後にロックマンが現われ、ビリエース一体にロックバスターを放つ。そのビリエースはデリートされる。

他のビリエースはその攻撃に気づき、後に振り向く。

「ロックバスター！」

ロックマンは残りのビリエースをデリートしていく。段々数が減っていき、残り一体となる。

『ビリーー！』

「はっ！」

そして、最後のビリエースにロックバスターをあてる。ビリエースは吹っ飛び後ろにある機械に当たる。

ジジジー・・・ジジ

最後の一体がデリートされると機械の暴走が止まる。

「・・・止まった！」

「・・・良かった・・・」

職員は一安心する。

「・・・よし！・・・帰ろうか」

ロックマンは機械が止まるのを確認すると、周波数を変え消える。

深夜

.....  
プー.....  
プー

機械が勝手に動き出し、住所分けを始める。

次の日 スバル宅

ピンポン！

「お荷物です！」

「はい！」

あかねがパートに行っていないので、スバルが出る。

ガチャ！

「・・・うわあ！何コレ！？」

そこには、2メートルくらいの大きな箱が置いてあった。

宅配便の人はサインを書いてもらうつと帰って行く。

『お前の母さん通販好きだけど、これはさすがに買いすぎだ』

「そんなバカな・・・」

スバルは中を開ける。

「ん？」

『どっした？』

「これ・・・全部あて先間違いだよ！」



スバルは電波変換してウェーブロードを使い、昨日のコダマ宅配センターへ向かう。

『間違っただけで配達されたってわけか？』

「うん、そうみたい。」

ロックマンは宅配センターへ着く。

『・・・電波ウィルスの気配はないな・・・ん？スバル、あれ』

ジジジー・・・ジジ

ウォーロックは機械が故障している事に気づく。

「・・・もしかして昨日の・・・」

ロックマンは昨日デリートしたウィルスが機械に当たった事を思い出す。

「・・・あの時・・・かな？」

『気にする事はない。この程度で済んだんだ。逆に感謝されたいぐ

らいだぜ』

### 再びスバル宅

『おいスバル！本気か？』

「うん！」

『だから、お前の責任じゃないって』

「でも、僕にも少しは責任が」

ロックマンは箱の中を見る。中に蟹が入ってる事に気づく。

「・・・ほら、生もの」

『生真面目な奴だな』

「さてと、行くぞ！ロックマン急便！」

スバルは大きな箱を持つ。

『このサイズ全ての電波変換は無理だ。このまま行くぞ』

ロックマンは片手で箱を持ち、片手と箱を周波数をそのままですていく。

「よし！まずは……」

ロックマンはウェーブロードに飛び移り、ビルの方へと向かう。

「このビルの30階だ」

ビルの中に入り、エレベーターを待つ。

『おいおい、そんなの使いなよ』

「えっ？」

『今のお前は人間じゃないぜ。ロックマンの力を使えよ』

「ああ、なるほど！」

ロックマンは一個だけ荷物を持ち、周波数を変え、猛スピードで30階へ向かう。

「電波空間なら建物をすり抜ける事ができたんだ」

『そういう事だ』

「コレ、電波変換できるじゃん」

『このサイズならな』

「そうなんだ・・・」

片手で持てるぐらいの箱なら電波変換できるみたいだ。

30回へ到着する。ロックマンは、目的の扉の前へ立つ。

「スウー・・・ハアー・・・よし！」

ロックマンは深呼吸をする。

ピンポーン！

「はい？どなた？」

ロックマンはインターホンから女の人の声がし、中の人と話す。

「か、蟹です！」

「蟹？」

「あ・・・お、お荷物です！」

ガチャ！

扉が開く。

「あら、ご苦勞様」

「サインかハンコお願いします」

「はい！」

ハンコを押してもらつと荷物を手渡す。

「あ、ありがとうございます！」

ロッキマンは走って行く。

「フフ、かわいい宅配屋さん」

ロッキマンは残りの荷物を持ってウェーブロードを渡る。

「どンドン配るぞー！」

「次の荷物は・・・」

委員長宅

委員長はとても大きな豪邸に住んでいた。

「はあ〜退屈。何か良い事ないかなあ〜」

リビングのソファーに横たわる。

ピンポーン！

「ん？」

ピンポーン！

「もう！誰もいないの！？」

委員長は家に響き渡るように言う。

ピンポーン！

「……はいはい！」

委員長はあきらめて玄関へ向かう。

ガチャ！

「どなたです・・・ああ！」

委員長はドアを開けるとそこにはロックマンがいた。

「お荷物です！」

「ろ、ロックマン様！お茶でもどうぞどうぞ！」

「うわあー！」

ロックマンは無理やり上がらせられ、リビングのソファへ座る。

（・・・委員長の家って・・・凄いな・・・）

ロックマンは部屋の中を見渡す。天井にはシャンデリア、壁には有名な絵画、高そうな古時計などがあった。

『さつさと終わらせて次行こうぜ』

「うん」

ウォーロックとロックマンは小声で話す。

パシャパシャ！パシャパシャ！パシャパシャ！

委員長はトランサーで、ロックマンの写真を角度を変えながら何枚も撮っている。

「あ〜。サインがハンコをもらえます?」

「この角度からのロックマン様も素敵」

委員長はロックマンの話しを聞いてない。

「あ〜・・・」

「はい?」

委員長は笑顔で聞く。

「ハンコかサインを・・・」

「ああ、そうですね!気づかなくてごめんなさい」

「いえいえ」

「まあ、そう焦らずに。お茶でもしていつてください。しばしお待ちを!」

そう言って委員長は部屋を出て行く。

「あ・・・はあ〜・・・」

『ここは後回しだな』

「さっ」

そう言つと委員長の家から周波数を変えて出て行く。



数分後

「お待たせしました！ダージリングのセカンドフラッシュとお取り寄せの……あら？」

委員長はお茶とお菓子を持ってくる。そして、ロックマンが居ない事に気づく。

「お手洗いかしら？」

その頃ロックマン

「次の荷物は・・・うちだ！」

ロックマンは自分の家へ向かう。

「お鍋で作ると、フードディスプレイと一味違うのよね〜」

ロックマンはあかねに荷物を渡す。

「通信販売もほどほどにしてスバル君も言っていましたよ」

「この鍋トツテも取れて、収納に便利なのよ！」

あかねは嬉しそうだ。ロックマンは呆れた顔をする。

その頃委員長

ロックマンが居なくなってから30分が経過した。

「ロックマン様遅い・・・」

委員長はそわそわしている。

「はっ！もしかして、コダマ球場三分の広さを誇る我が家で迷っているのかも!?」

パンパン！

委員長はそう言うつと手を二回叩く。

ガチャ！

すると、執事とその部下と思われる人たちが数十人入ってくる。

「みんな！この方を探すのよ！」

委員長は部屋にあるスクリーンにさっき撮ったロックマンの写真を映し、探すよう命令する。

はい！お嬢様！

みんな返事をする、一斉に屋敷の中を探し回る。お風呂、トイレ、裏庭、屋敷全てを探し回った。しかし、ロックマンは居るはずが無いので見つからない。

その頃ロックマンは

ロックマンはハワイまで届けに行き、全ての配達を終わらせた。

そして、日本へ向かっている。

「えへへ。お土産貰っちゃった！」

最後に届けた人にお土産を貰ったようだ。

『配達終了だな』

「えっ？まだだよ」

数分後

「はあ……ロックマン様あなたは何処へ……」

委員長は、ロックマンを探しに部屋を出ていた。

ガチャ！

そして今戻ってきてドアを開ける。

すると、中にロックマンが待っている。

「ああ！ロックマン様〜！」

委員長はロックマンの元へ走って近づく。

「……サインいいかな？」

「は、はい！喜んで！」

委員長は、伝票にサインして最後に伝票にキスして渡す。

「そっだ！・・・コレどうぞ」

ロックマンはさっきのお土産を渡す。委員長は大事に受け取る。

「じゃあねー！」

「えっ？ああ！ロックマン様！」

ロックマンは周波数を変え、帰っていく。

「・・・また会えるわよね」

ロックマンはウェーブロードを使って帰っている。

『今度こそ終了だな』

「うんー！」

『スバル、得にもならない事よくやったもんだな。地球人の考える事は分らん』

「ウォーロックのお陰だよ」

『あっ？』

「手伝ってくれてありがとう！」

『あ、ああ。まあ、今回だけだからな』

「..ああ、帰るじー」

ロックマンはスピードを上げて帰っていく。

## 第28話 ロックマン急便（後書き）

長い……。あんまり関係気がするかも知れませんが、続編で関係してくるんで書きました。

それでは、感想待ってまーす



## 第29話 キャンサー参上ブク 前編

ある電波空間

『違う、これも違う』

電波空間の中で、小さなカニのような電波体が何かを探していた。

『もっとも周波数の合う人間を探して早数ヶ月。でも必ず見つけ出すブク！裏切り者ウォーロックを倒すのはこの・・・キャンサーブク！』

響ミソラのライブ会場前

一人の子供が、会場を警備している警備員に服を掴まれ持ち上げられている。

「ああ、離せ！離せよ〜！」

「この悪戯ごぞう。チケットもないのにまた入り込みやがって。今度やったら許さないぞ」

そう言っつて警備員は子供・・・挟見はさま 千代吉ちよきちを追い出そうとしてい  
る。

『・・・見つけた！オイラと同じ周波数ブク！こいつと合体すれば最強ブク！』

キャンサーは、警備員を見てそう言う。そして、一筋の光となって警備員と千代吉にぶつかる。二人は光に包まれた。

『・・・ついに・・・ついに人間と合体したブク。オレっちは・・・オレっちは・・・無敵のキャンサー・バブルとなったブク！』  
「もう入ってくるんじゃないぞ」 あ？』

警備員はキャンサー・バブルをおろして追い出す。そしてキャンサー・バブルは自分の姿をよく見る。

両手に大きなカニのはさみがあり、頭は上がカニの目、横がカニの足が三本ずつ付いている。

『・・・何じゃこりゃあああ！！？』

## 時は進み

キャンサー・バブルは口を開けて下を見ながら歩いている。

『……………うえ〜ん!』

歩くのを止め、体を丸め涙を滝のように流しながら泣き始める。

『まさかよりもよってオレっちと同じ周波数の持ち主がこんなガキだったなんて〜!!酷い、酷すぎるブック!』

すると、キャンサー・バブルの近くに子供たちが寄ってくる。

『ハッ!こんな所で泣いてる場合じゃだめだ。任務を忘れちゃだめブック!オレっちの目的は地球征服ブック!人間どもを抹殺して、早くFM星に帰るブック!頑張るブック!』

キャンサー・バブルは泣くのを止め立ち上がる。

『そうと決まれば早速……………ん?』

キャンサー・バブルの周りには数人子供が集まってがいた。

『何見てんだゴリア!?見せもんじゃねえぞゴリア!!!』

そう言って周りに集まっていた人を追い払う。

『たく！近頃のガキは・・・ん？何だコレ？』

すると、キャンサー・バブルは近くにあった、響ミソラのライブの宣伝の看板を見つける。

『！？何だこの気持ち？これは初めて経験ブック。この胸の高鳴りはいつたい？まさかこの気持ちは・・・恋？』

キャンサー・バブルは暫く看板を見ている。

『・・・うりゃあああああ！！』

すると、キャンサー・バブルは来た道を折り返し、ライブ会場へと走って行く。

『ミ・ソ・ラ・ちゃん！どわあ！』

キャンサー・バブルは警備員にぶつかる。

『な、何だブック？』

「ん？またお前か？」

『え、ちょ、ちょ、何するブック？オレっちはキャンサー・バブルブックよー！』

キャンサー・バブルは逃げようとするが逃げられず頭を掴まれる。

『離せつてば、離せブック！』

「そーれ！」

キャンサー・バブルは空の彼方へと投げ飛ばされる。

『うわああああああああああ！！』

キャンサー・バブル泣きながら飛んでいき、海の砂浜に落ちる。頭が砂浜に埋もれる。

『……よいしょ！……くそ……人間の分際でオレっちを追い出すとは許せないブク！人間共め……痛い目にあわせてやるブク』

その頃スバル、委員長達は

いつもの3人組+2人がライブ会場の法へと向かっていた。

「ミソラちゃんのコンサートチケット！」

「また、あの歌声が聞けるんですね！」

「星河君、あなたが私たちを誘うなんて、どう言う風邪の吹き回しかしら？」

「間違つて5人分予約しちゃったんだ。キャンセル方法が分からなくて……」

「……だからって私まで誘わなくてもいいんじゃない？ 一々変装しなきゃいけないんだけど……」

約一名……亜夢はサングラスを掛け帽子をかぶって変装している。

「いや、あと一枚余るのはもったいないし」

「……って事はスバル君の奢りって事？」

「えっ？ いやそういうわけじゃ　　「おお！ お前の奢りか！ サンキ

ュー！」 「ありがとう！」 「さあ、急ぎましょ！」　　……はあ  
」

スバルは、奢りじゃないと言おうとした時ゴンタ、キザマロ、委員長に邪魔され言えなくなってしまうた。

委員長達は先に行ってしまう。スバルもゆっくり歩き始める。

「久しぶりだな、ミソラの歌聞くの」

亜夢がそう言ってスバルに話しかける。

「亜夢ちゃん……君のせいでみんなの分奢りじゃないか」

「……スバル君の間違いなんだからしょうがないじゃん」

「はあ、そうなんだけど……見に行くんだったら自分の分払ってくれても……」

「何？」

二人の前を歩いていた委員長達の前に、いくつかの大きなシャボン玉が浮んでいる。

「何かしら？……うわ！」

委員長がシャボン玉に触れた瞬間に委員長はシャボン玉の中に入っていく。

「委員長！……うわあ！」

「何です！？……うわあ！」

続いて、ゴンタやキザマロもシャボン玉の中へ入って行く。

「何コレー！？」

委員長が叫ぶ。

『スバル！波長を感じた！これはFM星人の仕業だ！』

「何だつて!？」

良く見ると、委員長達意外にもたくさんの人たちがシャボン玉の中に入って浮んでいる。

「スバル君、どうする?」

「僕行ってくる！亜夢ちゃんは委員長達の事見てて」

スバルは亜夢に言うとシャボン玉の発生源へと走って行く。

### 発生源

『はっはっはっは！オレっちのバブルポップでみんな飛んでけブク  
!』

「そこまでだ!」

『ブク?』

キャンサー・バブルは後から声が聞こえたため振り返る。すると、



ロックマンがロックバスターを構え立っている。

『ウォーロック！』

『久しぶりだな、キヤンサー！』

『会いたかったブク。お前を倒すために人間と合体しキヤンサー・バブルとなったブク！』

『フツ、無駄な事を。あきらめてとつとと帰りな！』

『無駄かどうかはオレっちの攻撃を受けてから確かめるブク！おりやあああ！・・・あ』

キヤンサー・バブルが走ってスバルに攻撃しに行こうとする。だが、ロックマンに頭を抑えて止められる。子供と合体しているキヤンサーでは、腕が届かない。

『あれ？あれ？』

『届いてないけど』

『くっ！子ども扱いするな！』

キヤンサー・バブルは後にジャンプして距離をとる。

『食らえ！ブーメランカッター！』

キヤンサー・バブルは両腕にある大きなはさみをロックマンに向かって飛ばす。

「バトルカード！プレデーション！プラスキャノン！……ってあれ？」

ブーメランカッターは当たる寸前でUターンして戻って行く。

『チッ！届かないブク……こうなったら……食らえ、バブルポッ』

ドンー！

『うぎゃああああー！！』

キャンサー・バブルが攻撃しようとした瞬間、ロックマンがさっきプレデーションさせたプラスキャノンで攻撃した。

キャンサー・バブルは少し吹っ飛びうつ伏せになる。

「これ以上町の人を困らせるな！」

『う、うるさいブク！オレっちが何をしようとかってブク！』

キャンサー・バブルは四つんばいなり、涙を流し始める。

「泣いてる…… 『泣いてないブク！目から汗が出てるだけブク！』」

ロックマンは少し苦笑いをする。

「ウォーロック、キャンサーってこんな奴なの？」

『前より子供っぽさに磨きが掛かった気がする・・・』

キャンサー・バブルは目に涙を浮かべながら立ち上がる。

『泣いてないって言ってるブク！タイダルウェーブ！』

キャンサー・バブルが腕を上げると、いきなり大きな津波が起き、ロックマンを飲み込む。

「うわあ！」

すると、ロックマンが持っていたライブのチケットが宙に舞い、キャンサー・バブルの手元へ落ちて行く。

『ん？これは！ミソラちゃんのコンサートチケット！』

「いてて・・・油断した。あれ？・・・いない」

ロックマンが気づいたときにはキャンサー・バブルの姿は何処にもなかった。

第29話 キャンサー参上ブック 前編（後書き）

いつもより短いですが時間ができたんで上げておきます。

・・・それにしてもキャンサーおもしろいな（笑）  
それでは、感想・アドバイスまってまーす

第30話 キャンサー参上ブク 後編

その頃キャンサー・バブル

『ミ・ソ・ラちゃーん!!!』

キャンサー・バブルはライブ会場へこれ以上ないぐらいの速さで走っていた。

「ん？」

そして警備員の前で止まる。

『コレ、チケットブク!ふう、これで良いブク!』

チケットを手渡す。そして爽やかな顔になる。

『間に合ったブク!ミソラちゃんの歌は地球制服に疲れた体に最高ブク!それじゃあ』

「待ちなさい」

『えっ?ちよつと!』

入ろうとしたキャンサー・バブルを警備員が止め、頭を掴み持ち上げる。

「そのマスクはだめです。取りなさい」

警備員がキャンサー・バブルの頭をマスクだと勘違いし、取ることに引張る。

『あいた！あたた！これは本物ブク！』

「どうなってんだこれ!？」

『あいたた！本物だつて言ってるブク!!!』

「ん？うわ！何じゃこりゃ!？」

キャンサー・バブルは警備員に向かってバブルポップを放つ。警備員は泡の中に閉じ込められる。

『ミソラちゃん!』

キャンサー・バブルは中へと入って行く。

ライブ会場      ステージそで

ミソラはギターを持ってステージそで深呼吸をしていた。

「ふう・・・それじゃあ行くよハープ！」

『OK!』

ミソラが舞台に出ようとした瞬間

きゃあああああああ!!

うわあああああああ!!

突然悲鳴が聞こえた。

「!?!何?」

すると、見に来ていた人たちがキャンサー・バブル泡に閉じ込められて浮んでいた。

『みんなどけブク!!』

キャンサー・バブルが一番前で、見に来た人たちを追い出していた。

『キャンサー!?!どうしてここへ?』

「とにかくお客さんを助けないと!」

『最前列でみるブク!』

キャンサー・バブルがステージに近づいた瞬間

「ショックノート!」

『ん?うわああ!』

ハープ・ノートがショックノートを放つ。

『誰だブク!!!?』

「私はハープ・ノート!コンサートを邪魔するなんて許せない!」

『うるさい!オレっちを中に入れてくれないのが悪いブク!ミソラ  
ちゃんは何処ブク!?!』

キャンサー・バブルは血眼になっていた。

『あなたに聞かせる歌はないんだって!』

『お前もミソラっちの歌を聞くのを邪魔するブクね!?!ブーメラ  
ンカッター!!!』



キャンサー・バブルがブーメランカッターを二つ飛ばす。

「くっ！」

ハープ・ノートは二つとも避けるが、ブーメランカッターはステージにぶつかりはね返って来る。

「きゃあ！」

ハープ・ノートは何とか避ける。ブーメランカッターはステージに何度もぶつかる。

「あ、ステージが！パルスソング！」

ハープ・ノートはギターを鳴らして発生させたハート型の電波を飛ばす。

『フーン！』

だが、キャンサー・バブルははさみで簡単にはじく。

「何か凄い迫力……」

ハープ・ノートは少し苦笑いする。

『ミソラっちは何処にいるブク!? はやく歌を聞かせるブク!』

キャンサー・バブルはステージを壊しながら探す。

「あーやめなさい！」

『ミソラっちは何処ブク!? 何処だ何処だここじゃないブク!! 何処だブク!?!』

キャンサー・バブルはハープ・ノートのいう事を聞かず、探し続ける。

『あなたの相当なファンのようなね』

「あはは。……どうすれば。……ファン……歌……  
そうだ！」

ハープ・ノートは苦笑いした後何かを思いつく。

『ミソラっちは何処だブク!! ん?』

~~~~~

すると、曲が聞こえてくる。

キャンサー・バブルはステージの方を見る。

すると、ハープ・ノートがギターを弾いている。

『お前じゃないブク! ミソラっちを出すブク! ん?』

すると、ハープ・ノートがマイクをキャンサー・バブルに投げる。
キャンサー・バブルはマイクをキャッチする。

『ん？マイク？』

『この世界中 あふれてる まだ知らない 風景 全ては見れないこと わかっているけど』

ハーブ・ノートはソプラノトーンで歌い始める。

『ミソラっちの歌だ・・・』

ハーブ・ノートは手で“一緒に歌おうと”合図する。

『ふん！誰がお前なんかと・・・』

キャンサー・バブルはそっぽを向く。

『誰のかのためとは違う 自分だけに 誇れる 何かを探している この胸を満たす』

このライブ会場にいた人たち、泡の中に入っている人たちが曲にのり始める。

ワーーーーー！ワーーーーー！

観客から歓声が沸き始める。

『時々いじわるな 風に押し戻されて』

キャンサー・バブルも段々のって来る。

『遠く 見える この瞬間があって』

ついには歌い始める。

『この手が届くまで 今日も 歩き 続ける』

すると、ステージそでにロックマンがやって来る。

『振り返れば 無限の空が』見えるから!』

キャンサー・バブルは最後にジャンプする。

『今よ!』

「シヨックノート!」

ハープ・ノートは大量の音符を飛ばす。全てキャンサー・バブルに直撃する。

『ブク〜!歌に夢中になつてる隙に〜・・・』

キャンサー・バブルは泡を吹きながら倒れる。すると電波変換が解ける。千代吉は気を失っている。

『くっそー!覚えてるブク!』

キャンサーはどこかへ飛び去ってしまう。

パチン!

すると、キャンサー・バブルが放っていたバブルポップは音を立て

てはじけて中にいた人が出てくる。

委員長達

パチン！

「ん？うわああ！」「

委員長、ゴンタ、キザマロは少し高いところに浮んでいたため、割れた瞬間落ちていく。

ゴンタの上に委員長が落ちてくる。

「うっ！重い・・・」

「失礼ね！」

バン！委員長がゴンタを叩く。

「あはは・・・みんな無事で良かった」

亜夢が苦笑いをする。

ステージそで

ハーブ・ノートは気絶している千代吉を抱えて舞台そでに連れてきて寝かせる。

「あ、この子・・・いつも楽屋に忍び込もうとして来る子だ！」

『あなたの歌を聞いたかったわけだ・・・』

すると、ロックマンが近づいてくる。

「大丈夫？」

「あ、ロックマン！ごめんね、もうすぐコンサートが始まるの」

「あ、うん、頑張つて！」

「ありがとう」

ハープ・ノートが笑顔で言うと電波変換を解く。

「……………ん？あれ、ここは何処？」

千代吉は目が覚める。

「みんなー！！」

ステージの方からミソラの声が聞こえる。

「ステージがボロボロになっちゃったからコンサートは外でやるわー！！」

「ワーーーーー！！ワーーーーー！！」

ミソラが言ったとたん歓声が沸いた。

すると、ミソラがステージそでにいる、千代吉のもとへやってくる。

「なあ、行いじー」

「えっ？いいの？」

「もちろん！」

「やったー！」

数分後 ライブ会場外

「みんなー、行くよー！！！」

~~~~~

『飛び交うシグナル      それぞれの今日を乗せて      同じ周波数  
ねあい君と話す      重

迷い      ためらいを振り切り      そこに      あるはずの道を行こう

見上げる空は      心に      積もる      願いの色



描く 夢を映し出す 必ず

いつか この手に 触れる明日への地図

強く 高く 届くまで 輝いて 』

ワーーーーー！ワーーーーー！

「次ぎ行くよー！！」

『 この世界中 あふれてる まだ知らない 風景 すべては見えないこと わかってはいるけど

誰かのため とは違う 自分だけに 誇れる 何かを探している この胸を満たす

時々いじわるな 風に押し戻されて

遠く 見える この瞬間があつて

この手が届くまで 今日も 歩き 続ける

振り返ればそこに 無限の 空が 見えるから 』

「きゃーーーーー！……ミソラちゃん！……！」

「うおおおおー！感動だぜー！！」

「これもスバル君のおかげですね！」

委員長、ゴンタ、キザマロはコンサートを楽しんでる。

「あはは・・・みんな楽しそうだな」

「あれ？スバル君は楽しくないの？」

亜夢がスバルに尋ねる。

「楽しいけど・・・奢りって言うのが・・・」

「・・・」

亜夢はそれを聞いて何も言えなくなった。

第30話 キャンサー参上ブック 後編(後書き)

キャンサー終了です。

テスト前最後の更新になると思います。

・・・このライブ・・・もしかしたら続きを書くかも・・・(まあ、たぶん書かないと思いますが・・・)

### 第31話 正義感を持つ電波体

ある日の日曜日      スバルの部屋

今日は日曜。スバルの学校は休みである。スバルは自分の部屋で机に座って勉強していた。

『ああ〜！暇だ〜！スバル暇すぎる。何処か連れてけ〜！』

「・・・何処かって何処だよ。ていうか今勉強してるから無理だよ」  
ウォロツクがいつものようにトランサーの中からスバルに駄々をこねる。だが、スバルは勉強を進めながら言う。

『・・・あゝあ、何処かで事件起きねえかな〜！』

ウォロツクが大声で言う。ちなみに、あかねは買い物に出かけていて家にはいない。なので、ウォロツクが大声を出してもスバル以外には聞こえないのだ。

「うるさいなあ！そんな簡単に事件なんて・・・ん？」

ウーーーーー！ウーーーーー！

外からサテラポリスのパトカーのサイレンの音が聞こえる。

スバルは窓から外を見る。サテラポリスの車が何処かへ向かっていくのが見える。

「・・・ウオロツクが“事件起きねえかな”とか言うから・・・」  
『へっ！良いじゃねえか！暇で死にそうだったんだ。ウィルス退治  
と行くっぜっ』

ウオロツクはやる気マンマンだ。

「はあ、わかったよ。電波変換！星河スバル オン・エア！」

サテラポリスが向かっていた場所

サテラポリスが向かっていた場所は、とある交差点だ。

『メット！メット！メット！』

『ビリーー！！ビリーー！！ビリーー！！』

複数のメットリオとビリエースが交差点の信号機を狂わせていた。

ジジジジジジジ・・・ジジジ・・・

信号機が全て青に変わる。

キキキキキキ！ ドーン！

車と車が衝突する。その後からもどんどんぶつかっていく。

ウーーーーーー！ウーーーーーー！

サテラポリスが到着する。

中から五陽田警部とサテラポリスの人たちが出てくる。

「チツ！電波ウイルスに攻撃だ！」

「「「「「はい！」「」「」「」

返事をする、いつもの掃除機みたいな物で吸い込み始めた。

「くっ！五陽田！このウイルスバキュームに吸い込みきれないぞ！」

一人の青年が五陽田警部に向かって言う。彼の名は守護ライセンス。人一倍正義感が強いサテラポリスの一員だ。五陽田とは交友関係である。

「分かってる！今応援を要請した。もうすぐ到着する。それまで持ちこたえろ」

「・・・分かった！」

ライセンスはウィルス退治に集中した。

『メットーー!!』

すると、一体のメットリオが実体化し、ツルハシをおもいつきり降りし、グラウンドウェーブ衝撃波を放つ。グラウンドウェーブはライセンスの方へ向かう。

「くっ！」

ライセンスは何とか避けた。だが、グラウンドウェーブはライセンスの後へと向かう。後には子供が立っていた。

「!?!危ない!!」

「えっ?うわあ!」

グラウンドウェーブは少年の腕をかする。

「!?!くっそおおお!!」

『メット〜!!』

ライセンスはさつき攻撃してきたメットリオを吸い込んだ。そして、さつきの少年に近寄る。

「君!大丈夫か!?!」

「う、うん。なんとか」

『ビリー！』

すると、ビリエースが近くまで来ていた。

「！？くっ！」

ライセンスが少年をかばう形になる。

『ビリー！』

だが、ビリエースはデリートされる。

「・・・なんだ？」

ライセンスが辺りを見回す。すると、ロックマンがロックバスターで次々とウィルスをデリートしている。

「ロックマン！」

「御用だロックマン！」

ライセンスが言った後、五陽田警部がロックマンに言う。

『メット』

『ビリー！』

メットリオとビリエースは段々数が減っていく。



『スバル！こいつで最後だ』

「うん。喰らえ！」

ロックマンは最後のウイルスもデリートした。

「ふうー、終わったー」

『まだ少し物足りないがな』

ロックマンとウォーロックが話しをする。

「御用だロックマン！今日こそは貴様を逮捕する！」

「ゲツ！」

後ろから御用だが走ってやって来る。

「やばー！」

ロックマンは周波数を変えその場から去る。

「・・・くっそー！また逃げられたー！」

その日の夜      サテラポリス

「くそ！何であの時守れなかったんだ！？」

ライセンスが仕事場の机に座って考え込んでいた。今はこの部屋にはライセンスと五陽田警部以外誰もいない。

「どうしたんだライセンス？」

五陽田警部が話しかける。

「・・・俺はあの少年を守れなかった。・・・俺は一人の子供さえ守れない弱い人間なんだ！」

「・・・何を言っている？・・・確かにあの子は傷を負ったが、死んだわけではない。犠牲者がでなかっただけでもましじゃないか？」

「いや、俺があの時避けなければ・・・。後ろにあの子がいると知っていたら・・・」

「・・・自分を責めすぎだ。・・・このところ任務が失敗続きで疲れているのだろう。今日はもう休め」

「……………わかった」

ライセンスはそういつと部屋を出て行った。

### ある電波空間

ある電波空間に茶色のボディをした、西洋の大剣を持ったのような電波体が立っていた。

『……………早くFM王達の計画を止めねば……………ん？』

電波体は何かを感じ取った。

『……………某と同じ周波数……………』

## その頃ライセンス

「俺は・・・いったい何をやってるんだ？」

ライセンスは自分の家に向かって歩いていった。

「・・・俺はウィルス、FM星人から地球を守りたいからサテラポリスに入ったんだ・・・」

ライセンスは呟いている。

「なのに俺は、誰一人として守れていない・・・。俺はいつだってうすれば・・・」

『貴公は地球の守護をする者か？』

いきなり声が聞こえてくる。

「!?!?・・・誰だ?」

ライセンスが質問すると、目の前にさっきの電波体が現れる。

「!?!?・・・FM星人か!?!?」

ライセンスは少し後ろに引く。

『そう、某はFM星人ヘルクレス。さっきの質問に答える。貴公は地球の守護をする者か?』

「・・・だったらどうだってんだ?」

サテラポリスであるライセンスはウィルスやFM星人から地球を守っているので、地球の守護をしているといっても良いだろう。

『ならば地球人、貴公に頼みがある』

「・・・お前らみたいな地球を破壊しようとしてる奴の頼みなんて誰が聞くか!」

『・・・頼みが“地球の破壊の阻止”だと言ってもか?』

「な、どういう事だ!?!?」

ライセンスは驚きが隠せない。それもそのはず、FM星人から出るはずない言葉が出たのだから。

『そのままの意味だ。某はFM王の計画を阻止するためにこの地球にやってきた。頼む!貴公の力を貸してくれ!』

「・・・何でおれの力が必要なんだ？」

ライセンスは少し考えて質問する。

『FM星人は、地球では本来の力が発揮できないのだ。だが、地球人と電波変換することによって本来の力が発揮する事が出来る。そのため貴公の力が必要なのだ』

「・・・地球を守るって事か？」

『そういう事になるだろう』

「・・・わかった。協力してやる」

『地球人、感謝する』

「ライセンス・・・守護ライセンスだ」

『これから宜しく頼む』

「ああ・・・で、どうやって阻止するんだ？」

ライセンスは尋ねる。

『・・・FM星の最終兵器を破壊する』

「最終兵器！？どんなものなんだ？」

『名をアンドロメダと言う。昔、AMプラネットと言う星がその最

終兵器に滅ぼされた。だが、アンドロメダ自体は破壊できない』

「じゃあどうすんだよ?」

『アンドロメダを扱う事が出来る、アンドロメダの鍵を破壊する。それを壊せばアンドロメダは使えなくなる』

「アンドロメダの鍵……。で、それは何処にあるんだ?」

『この星に来ているウォーロックと言うFM星人が持っている』

「ウォーロック……。そいつが持つてるんだな?」

『そうだ』

「……明日から一緒に探すぞ」

『御意!』

その頃 スバル宅

「よし、勉強終わり！」

『お疲れさん。まったく、何時間もこんなつまらない事やりやがって。やっぱり地球人のやる事は分らん』

ウォーロックがトランサーの中から言う。

「君にはわからなくても良いよ」

『ケツ！そうかよ』

ウォーロックはそっぽを向く。

スバルはベランダに出る。

「・・・星がきれいだなあ」

『いつものように星を眺め始めやがった・・・。また時間がかかりそうだな・・・スバル、俺は寝るぜ？』

「うん、おやすみ」

ウォーロックはトランサーを閉じて寝始める。

『（・・・それにしてもさっきから妙な胸騒ぎがしやがる・・・何事も無いと良いんだが・・・）』



ウォーロックはそう思つて眠りに着く。

### 第31話 正義感を持つ電波体（後書き）

お久しぶりです。

更新ができず、どうもすみませんでしたm)——( m  
テストも無事終わったんでやっと更新で来ます(^-^-^)

・・・それにしても何か文章力落ちてますね。徐々になおしていきます。

こんな作者ではありますが、これからもよろしく願いますm)  
——) m

### 第32話 正義VS正義

次の日の学校終わり

スバルは学校が終わり、家に向かって歩いていった。

『やっと終わったなあ、疲れたぜ』

ウォーロックがトランサーを開けていった。

「何で君が疲れるのさ？」

『細かい事は気にするなって。今まで暇でしょうがなかったんだ。と言う訳で、何処か行こうぜ？』

「………悪いけど、帰って宿題しなくちゃ行けないから無理だよ」

『はあ！？まじかよ！？……じゃあ、一人で散歩してくるぜ』

ウォーロックはトランサーから出て、ゆっくり違う方向へ向かって行った。

「……一人でだいじょうぶかなあ？」

スバルはそう呟いて自分の家へと向かっていく。

## サテラポリス

ライセンスやサテラポリスの職員達は、事件が起きてないときはここで仕事をしていた。  
みんな、何かの資料を読んだり、書いたりしている。

『ライセンス、見つけた』

ヘルクレスがライセンスののトランサーを開けて言った。

「本当か？分かった！」

ライセンスはそう言うのと席を立つ。

「五陽田！ちょっと見回りに行ってくる」

ライセンスが少しはなれた場所に座っている五陽田警部に向かって言う。

「分かった！気を付けるよ」

それを聞くと、ライセンスはドアを開けて出て行き、サテラポリスを後にする。

「ヘルクレス、何処にいる？」

『ここから南東10キロのところだ。某と電波変換すればすぐに着く』

「わかった！電波変換！守護ライセンス オン・エア！」

ライセンスが電波変換した姿は、ヘルクレスの茶色のボディにマントをしていて、二メートルもする大剣を背中に持っている。バイザーの色は赤だ。

「・・・よし！行くぞ！」

『御意！』

ライセンス達は、ウェーブロードを使ってウォ・ロックがいる方向へと向かう。

その頃ウォーロック

ウォーロックは公園のベンチに座っていた。

『あゝあ！暇だなあゝ……………ん？……………この周波数……………F  
M星人！』

ウォーロックはライセンス達がこっちへ向かって来ている事に気づいた。

『……………まずいな。今スバルはいないし……………』

「逃げられないぜ？」

『!?!……………チツ！もう来やがったか』

ウェーブロードの上にはライセンスが立っていた。

「お前がウォーロックだな？俺はヘルクレス・メシア！」

『某はヘルクレス。さあ、ウォーロック、貴公の持ってるアンドロメダの鍵を渡せ』

『へっ！嫌なこった！欲しけりゃ力づくで奪ってみな！』

『・・・戦いたくはなかったがやむをえない』

「行くぜ！ライトバスター！」

ヘルクレス・メシアは左腕をバスターに変え、眩しい光を放っている弾を放つ。

『チツ！目くらましか』

ウォーロックは何とか避けるが、その後動けなくなる。

『くっ！なんだ！？体が麻痺してやがる！』

「あれは電撃を撒き散らしながら放っている。少しでも電撃に触れたら痺れて動けなくなる」

『なめんなよ！この程度の痺れ、俺からすると何でもねえぜ！』

「なら、これでも喰らえ！サーベルアタック！」

ヘルクレス・メシアが大剣をもの凄い早さで振り下ろす。

『ぐわあああああー！』

その頃スバルは

「ウォーロック遅いな・・・」

スバルは机に座って宿題をしていたが、ウォーロックがいつまで経っても帰ってこないので心配する。

「探しに行くか・・・」

スバルは家を出て、ウォーロックを探しに行く。

『はあ・・・はあ・・・はあ・・・』

ウォーロックはところどころ傷があり、ボロボロだった。



「・・・お前死ぬ気か？」

『ふん！俺が死ぬわけねえだろ！』

『貴公、早く渡せ。これ以上は無意味だ』

『嫌だね！死んでもわたせねえ！』

「・・・これで決める！はあああああ！！！」

ヘルクレス・メシアはバスターと大剣と自分の電波で強力なパワーを生み出す。その電波をバスターに溜める。

「メシアパワー！！！」

ウォーロックにバスターを放つ。

『くっ！』

ウォーロックは最後の力を振り絞って、ダッシュして避ける。

ドカアアアアアン！！

バスターが放たれた場所には爆発が起こる。

「ウォーロックの奴、何処に行ったんだ？」

ドカアアアアアン！！

「！？何だ！？」

スバルは爆発音が聞こえた。

「・・・まさか、ウォーロックに何かあったんじゃないか・・・行って見よう」

スバルは爆発したところに向かって走り出す。

「避けられたか・・・」

『ウォーロック、鍵を渡してくれ』

『はあ・・・はあ・・・何故お前は鍵を壊したがる？・・・他のF M星人は壊そうとしなかったか？』

『某は、FM王達の計画を止めに来たのだ』

『何だと！？……地球の破壊が目的じゃないのか！？』

『某は……もうAMプラネットや数々の星のが滅びるのは見たくない。だから某達はまず、アンドロメダの鍵を壊し、FM星人を抹殺し破壊を喰いとめる』

『抹殺！？お前、FM王を裏切つて星を破壊する気か！？』

『……今のFM星は腐っている。一旦ゼロに戻す。そして、悪いFM星に変える』

「俺たちは正義を貫き通す！」

『なら、なおさら渡せねえ！てめえらのやろつとしている事はFM王がやってる事とかわんねえよ！正義でもなんでもねえ！』

「ウォーロック！」

スバルが走ってやってくる。

「！？誰だ？」

『へっ！やっと来やがったか。スバル、電波変換だ！』

ウォーロックはスバルのところへ移動する。

「電波変換！星河スバル オン・エア！」

ロックマンへと電波変換する。

「!? ロックマン! . . .」

『スバル、奴を倒すぞ!』

「うん! ロックバスター!」

ロックマンはロックバスターを放つ。

「くっ! ライトバスター!」

ヘルクレス・メシアもライトバスターを放つ。

二つの弾はぶつかり、お互いを消しあった。

「バトルカード! プレデーション! ワイドソード!」

ロックマンはワイドソードに変え、接近戦に持ち込む。

『スバル、奴の大剣には気をつけろ!』

「サーベルアタック!」

ヘルクレス・メシアは振り下ろす。

ガキン!

ロックマンは大剣を受け止める。

「くっ! 一撃が重い . . .」

「サウザンドソード！」

ヘルクレス・メシアは剣を細かに動かし連続で攻撃する。

「ぐわあ！」

ロックマンは何度も切りつけられる。

「はあ……はあ……」

「次だ。ソードブレイク！」

ヘルクレス・メシアは空中の電波を剣が吸収し、放出しながら剣を振り下ろす。

『スバル、避ける！』

「くっ！」

ロックマンは何とか避ける。ロックマンがいた場所には大きなクレイターができる。

『あれは喰らうとやばいぞ！』

「わかった！バトルカード！プレデーション！プラスキャノン！」

ロックマンはヘルクレス・メシアに向かって放つ。

「ヘビーバスター！」

ヘルクレス・メシアはバスターを放つ。

すると、プラスキャノンにあたり、貫通してロックマンの方向に向かっていく。

「!?!」

ロックマンはギリギリで避ける。

「危なかった……。それにしても強い。接近したら大剣、離れたらバスター……。どれも強い技ばかりだ……。」

『ケツ！何弱気になってんだ？確かにあいつは強い。だが、必ず弱点がある。そうだろう?』

「……。弱点……。相手がパワーならこっちはスピードだ！バトルカードプレデーション！ブレイクサーベル！ジェットアタック！」

ロックマンはジェットアタックで一瞬でヘルクレス・メシアの懐に接近する。

「何!?!」

「はあ!」

ブレイクサーベルで一撃喰らわせる。

「くっ！サウザンドソード!」

「バトルカード！プレーション！バリア！」

サウザンドソードをバリアで防ぐ。

「やっぱり、一撃一撃はたいした事ないんだ！」

「そつだ、一撃一撃には威力はない。だが、何度も喰らうとすごい威力になるんだ！」

段々バリアにひびが入ってくる。

「まだまだ！バトルカード！プレーション！シラハドリ！」

バリアが完全に割れた瞬間、ロックマンはサウザンドソードをシラハドリで受け止める。

「何！？」

「でや！」

そして、ソードに変え切りつける。

「ぐは！くっそー！ヘビーバスター！」

ヘルクレス・メシアは後ずさり、一発が重いバスターを放つ。

「バトルカード！プレーション！ヘンゲノジュツ！」

ロックマンはあたる瞬間にヌッキーに変わる。バスターがあたるとヌッキーは消える。

「……………何処だ!？」

ヘルクレス・メシアはロックマンを見回し探す。

「バトルカード! プレデーション! ロングソード!」

『ライセンス、後ろだ!』

「くっ!」

ガキン!

ロックマンはヘルクレス・メシアの後ろから周波数を変え現れ切りつけようとする。だが、ヘルクレス・メシアが振り返り、大剣で受け止める。

「はあああああ!」

ヘルクレス・メシアは受け止めてままさっきと同じように電波を溜める。しかし、さっきとは違い、電波は大剣へと溜めている。

「喰らえ! メシアパスワード!」

ロックマンのロングソードに切りかかる。

ガキン!

「何!?! うわああああ!」



一撃をロングソードで受け止めると、ロングソードは折れてしまった。しかも受け止めたとき、風撃が起き、ロックマンは後ろへ吹き飛ばされる。

「まだだ！はあああああ！！」

ヘルクレス・メシアは自分の体へと電波を溜める。

「メシアパワー！！」

ヘルクレス・メシアは水の龍を作り、ロックマンに向かって放つ。

「・・・くっ！バトルカード！プレデーション！フリーズナックル！でや！！」

ロックマンはフリーズナックルで水の竜に攻撃する。すると、水の龍は凍り始める。

「何！？」

「これで決める！バトルカード！ガトリング！」

ダダダダダダダダダダ！

「うわあああああ！！」

ヘルクレス・メシアはその場に倒れ、電波変換が解ける。ライセンスは気絶している。

『ヘルクレス、FM星破壊なんざ止めとけ。命がいくつあっても足

りねえぞ?』

ロックマンとウォーロックが近寄ってきた。

『ああ、そのようだ・・・ロックマン、某の負けだ。・・・とどめをさせ』

「・・・とどめはささないよ」

『何!?!』

『みたか!これがスバルの優しさだ!正義つてのは、敵だろうが味方だろうがみんな守る優しい心。それがなきや正義とは言わねえ。お前らは敵のFM星人を抹殺しようとする心があったらどう?その心がお前らにある限り、ただの悪だ』

「ウォーロック、話がよくわかんないんだけど・・・」

ロックマンは何の事だか分かっていない。

『気にするな、お前には関係ねえ』

「・・・そうなの?」

ウォーロックは軽くあしらう。

『・・・ウォーロック、アンドロメダの鍵はどうするのだ?』

『へっ!俺が持つとけばあいつらは使うことができねえだろ?勿論俺は使う気はねえよ』

ヘルクレスは少し考える。

『・・・ウォーロック、貴公がFM星人の地球破壊を防ぎきる事を祈っておるぞ』

『はあ？どう言う事だよ？』

『某はFM王の動きを探る。何かあればお前に知らせる』

『・・・そういう事が』

「・・・あの、僕にはサッパリなんだけど・・・」

『気にするな。次期にわかる』

スバルは軽くあしらわれる。

『某はもう行くぞ。・・・ライセンスによろしくな』

「あ、うん」

ヘルクレスは周波数を変え、消えた。

「・・・じゃあなヘルクレス」

ライセンスは起き上がる。

「あ、起きてたんですか」

「ああ、全部聞いてたからな。俺もあいつに負けないように正義を貫き通さないと。敵も味方も大切にする優しさ……か」

ライセンスは空を見上げてそう言う。

「……じゃあな、ロックマン」

そう言うと言えどライセンスは帰っていった。

「……あ、今思ったけどもう夕方じゃん」

スバルが気づいたときには、もう日が沈みかけていた

『そうだな。帰るか？』

「……いや、星を見ていく」

『はあ！？またかよ！前にもこんな事があつたぞ！？』

スバルは展望台へ向かって歩き始める。ウォーロックの言葉はもう聞こえてないようだ。

『……誰かこいつを止めてくれ……！……！……！』

第32話 正義VS正義(後書き)

・・・何か終わらせ方が無理やりですみませんm( )m

タイトル良いのに内容が・・・。難しいな( - - ; )

感想待ってまーす

## 番外編 ちよつとした雑談2

どうもこんにちは。シューティングスターです！

なんだかんだで雑談2回目です。

では今回のゲストは・・・守護ライセンスさんとヘルクレス、スバル君と亜夢ちゃんです。

「こんにちは！」

『お初にお目にかかる』

「こんにちは」

「・・・・・・どうも」

おお、さすがライセンスさん元気があつて良いですね。・・・それに比べて亜夢ちゃんは、この前と全く変わつてない・・・。

「・・・てか、何でまた私とスバル君出してんの？普通、キャンサーとか他の人でしょ？」

・・・スバル君は主人公だから当然でしょ？

「えっ？て事は僕、この番外編毎回出るの？」

・・・そういう事になりますね。キャンサーは・・・声優さんがドラ もんで忙しいだろうから・・・。

「いやいや、この小説声優さん関係ないから」

亜夢ちゃん、これはあくまでアニメのリメイクだよ？声優さん関係があるに決まってるじゃない

「・・・リメイクって言っても声ないだろう？」

ライセンスさん・・・突っ込んだら負けだよ？

『貴公、何に負けるのだ？』

ヘルクレス、気にするな。

「・・・私を出す理由は？」

ああ、キャラ的に好きだから。まあ、いじりやすいつてももあるんですけどね（笑）

「いじりやすいつて・・・」

さあ、そんな事はどうでも良いんです！

それより、ライセンスさん、ヘルクレス、スバル君に戦った感想一言でお願いします。

「そうだな。・・・戦って大事な事を教わった気がするな」

『某もライセンスと同じで、正義には敵味方、両方を助ける優しさが必要だと知った』

「僕は、何で戦ったかチンプンカンプンだよ」

あゝ。スバル君は後で教えてあげるよ。

「ありがとう」

いえいえ。それでは次亜夢ちゃん。……ぶっちゃけスバル君の事好き？

「えっ！？……そ、そんな事あるわけないじゃん！」

亜夢ちゃん顔真つ赤

「う、うるさい！／＼／」

スバル君どう思う？

「えっ？僕は好きだよ」

「えっ？」

「大切な友達だから」

……うわゝ、相変わらず鈍感。

「はあゝ、スバル……ロックマンなんだろう？もうちよっとな女の子の気持ち分かってやらなきゃ」

「……ロックマン関係ないでしょ？……女の子の気持ちなんてわからないよ」



でも良かったね、亜夢ちゃん。スバル君好きだってよ友達としてね。

「う、うるさい！／＼／」

私としては、亜夢ちゃんを大切にしたいんだけど、亜夢ちゃんがどうしてもって言うなら・・・

「親みたい事言うな！！」

なんなら一気に仲を縮める事ができるけど？

「・・・どんな？べ、別に知りたいわけじゃないんだからね！一応よ一応！」

（食いついた・・・）耳貸して

ゴニョゴニョゴニョゴニョ

「  
！！！！バカ！！そんな事できるわけないでしょ！！？そんな・・・／＼／＼／」

亜夢ちゃん赤くなっちゃって・・・そんなにだめ？

「だめ！！／＼／＼／」

わかったよ。

「・・・何か俺たち忘れられてるな・・・」

「確かに……」

『二人で盛り上がっているな……』

……何か亜夢ちゃん顔真っ赤にしてうつむいてるんで、次行ってみましょう！

「亜夢ちゃんどうするの？」

今はちよつと話しかけない方がいいよ。たぶん。

「作者すまねえ。もう帰らなきゃ。サテラポリスで仕事だ……」

あらら……しょうがないですね。

『すまない。某もそろそろ宇宙へ戻らなければ……』

えっ？ヘルクレスも？まあ、しょうがないね。それじゃあ二人とも頑張ってるね！

「『おおー！』」

……行ってしまわれた。

さて、スバル君どうする？

「べつするって言われても……」

じゃあ、次の話でもしますか？

「そうだね」

次回はですね・・・あんまり言うとおれなんで一言だけ言っておきます。

「うん」

・・・ヴァンパイアハンターが出ます。

「えっ？誰それ？」

テスト前から迷っていた新シナリオを書くことが決めたのです。つまり、今はリメイク＋（シナリオを少し変化＋新シナリオ）ですが次回からリメイク＋＋（シナリオを少し変化＋新シナリオ＋シナリオ）になるわけです。

スバル君、詳しくは次回まで待て！君に言う事はそれでだけだ！

では、そろそろ眠くなってきたので終わりますか？

「そうだね」

それでは皆さん失礼します

「さようなら〜」

・・・って亜夢ちゃんも言わなきゃ

「えっ！？あれ？もう終わり？」

最後締めて。

「えっ？・・・これからもよろしく」

それでは改めて失礼します

第33話 ヴァンパイアハンターとの出会い（前書き）

うん．．．今思えば星霊獣のキャラが良くわからない

### 第33話 ヴァンパイアハンターとの出会い

#### ある電腦空間

「フッフッフここには人間がうようよ居るな・・・」

電腦空間の中に黒いコートを纏っている男が立っていた。

「私のおいしそうな食料・・・ではいただくでしょう」

「待て、ライマー！」

「ん？」

ライマーが振り向くと、青髪の左目に眼帯をしていて、黒い剣を持っている少年と、コウモリの羽のような羽を持つクロネコがいた。

「ほう、ここまで追ってきたか」

「ライマー、貴様を倒をここで倒す！」

「はっはっは！私と戦う気ですか？良いでしょう、存分に痛めつけてあげますよ！はああああ！」

すると、いきなりライマーの体が炎に包まれた。そして、赤い鎧を纏った四本の足があり、右手に大きな槍を持った西洋の騎士みたいなのが現れた。

「チッ！棺桶かんおけスーツか」

「その通り。では、行きますよ！」

『来るぞ、サバタ！』

「わかってるネロ！」

その頃      スバル宅

スバルは学校から帰ってきていた。

『！？スバル！』

ウォーロックがトランサーを開いてスバルを呼ぶ。

「何、ウォーロック？」

『変な周波数を感じた。FM星人とは別の周波数だ』

「えっ？FM星人じゃないって、人間じゃないの？」

『これは・・・人間に似てるが別もんだ。とにかく行くぞ！電波変換だ！』

「えっ？うん。電波変換！星河スバル オン・エア！」

スバルは電波変換し、ウェーブロードを使い、移動する。

「場所は何処なの？」

『・・・あそこだ！』

ウォーロックが指示した場所は、アマケンのロケットがある場所だった。

「ここ、アマケンじゃないか」

『早く入るぞ！』

「えっ？入るって何処に？」

『このロケットの電腦にだよ』

「えっ？どつやって？」

ロックマンがウォーロックに尋ねる。



『あ、そう言えばまだ言っていなかったな。電波変換した今の状態なら、機会の電脳に入る事ができるんだ』

「へえー、そうなんだ。よし！入るよ？」

『おお！』

ロックマン達はロケットの電脳の中へと入っていった。

「はあ！」

「くっ！」

サバタはライマーをどんどん追い込んでいく。

「ここまでだ……」

「ウヌヌ……」

サバタが剣を構え、とどめをさそうとしていた。

「……な、何だ!？」

突然サバタの後ろの方から声が聞こえる。

「!?!」

サバタは後ろへ振り返る。

「に、人間!?!」

ロックマンが後ろに立っていた。

「今だ!」

ライマーはそう言うと眩い光を放つ。

「くっ!?!」

「!?!」

「な、何だ!?!」

「くっ!?!」

サバタとロックマンはいきなり光が放たれたため、反射で手で光をさえぎる形になる。

「……消えた!?!……チッ!」

「逃げたか……」

光が消えて、サバタとネロはライマーの方を向く。だが、ライマー

の姿は既になかった。

「……………あの〜」

ロックマンがサバタに話しかける。

「…………お前、この世界の人間か？」

「えっ？う、うん。そうだけど…………」

「…………とんだ邪魔をしてくれたな」

「えっ？」

サバタがロックマンに近づいてくる。

「あと少しで奴をしとめられたところを…………お前が現れたせいで…………」

「い、ごめん。でも奴ってさっきの？」

「奴は闇の一族、ヴァンパイア一族の一人だ。ヴァンパイア一族は人間を食らい生きている」

「な、何だって!？」

ロックマンは驚きが隠せない。無理もない、さっきの奴が人間を食料にしてるなんて想像もつかない。

「じゃあ、君は奴を倒しにここへ？」

「ああ。俺たちはこの世界とは違う世界から奴を追ってやってきた」

「べ、別の世界!？」

『ああ。この世界とは違い、ヴァンパイアが住んでいる世界だ』

ネロが簡単に説明する。

「へえ〜。つて猫が喋った!?!しかも浮いてる!」

ロックマンはネロを見て言った。

「こいつは闇の精霊獣ネロ。俺の相棒だ」

『俺をその辺の猫と一緒にするな』

「あ、ごめん。ネロ」

ロックマンは軽く誤る。

「それより奴を早く倒さないと!僕も協力するよ・・・あ、自己紹介がまだだったね。僕はロックマン。こっちはウォーロック」

『宜しくな!』

「・・・ヴァンパイアハンターのサバタだ。ライマーが力を蓄える前に見つけなければ厄介な事になる」

「で、僕は何をすれば良いの?」

ロックマンが質問する。

「俺はライマーを探す。お前はある男を捜してもらう」

「ある男って？」

「ヴァンパイアを倒す事ができる太陽銃を持つ男・・・太陽少年ジヤンゴ。俺と同じでこの世界に来ているはずだ」

「ジヤンゴ・・・」

「ジヤンゴの事だ、何処か太陽がよくあたる場所に精霊獣達と一緒にいるに違いない」

サバタは少し呆れながら言う。

「あはは・・・」

ロックマンは少し苦笑いをする。

「ロックマン、ジヤンゴの事頼んだぞ」

「わかった。行くよ、ウォーロック」

『人捜しかよ・・・まあ、たまには良いかもな』

ロックマン達はそう言つと電腦を後にした。

その頃 展望台電波

電波の上に、オレンジ色の服を着た、黄色の丸いサングラスを頭に掛けている少年が寝転がっていた。

「うーん、やっぱり本物の太陽は最高だぜ！な、オテンコ？」

少年がヒマワリのような太陽ソルの光を司る星霊獣に話し掛けた。

『ああ、そうだな』

『ってお前ら、ライマーは探さなくて良いのかよ!?!?』

赤色火の玉をモチーフとした、砂漠フレイム気候を司る星霊獣アーシュラが言った。

『良いじゃないかアーシュラ』

緑色のモグラをモチーフとした、<sup>アース</sup>熱帯雨林気候を司る星霊獣トーベ  
がアーシュラに言った。

『だめよトーベ。早く浄化しないと大変な事になるわ』

青色の狼を<sup>ガラム</sup>モチーフにした、<sup>フロスト</sup>氷雪気候を司る星霊獣リザが注意する。

『そうだ、リザの言うとおり早く浄化しないとこの世界にまで影響  
を起こしてしまう』

最後に黄色の鼻を<sup>ふくじゅう</sup>モチーフとした<sup>クラウド</sup>亜寒帯湿润気候を司る星霊獣、オ  
トフリートが言う。

「ああ、わかってる。だけど、ライマーを倒すためには太陽エネルギーを蓄えなきゃいけないんだ。みんなの言うこともわかけど、倒すためには必要なんだ」

少年はそういうと手を太陽にかざし、太陽エネルギーを自分の体にチャージし始めた。

### 第33話 ヴァンパイアハンターとの出会い（後書き）

と言うわけで、あの二人出してみました。

・・・ゲームをやった人なら知ってる人が多いですよね。

昔、ボクタイDS途中までやってたのが無くしちゃってどうだったかわからないんですよ。（中古屋も売ってないから買えない・・・）

まあ、そんな事はどうでもいいですね。  
それでは感想待ってまーす



### 第34話 星靈獣

その頃ロックマンは

「ジャンゴって言う人何処に居るんだろう…」

ロックマンは町のウェーブロードを駆け巡って探していた。

「…そう言えばあいつ人間だよな。何で電腦の中に入れるんだ？」

「あ、そういえば！電波人間でもないのに何で入れるんだろう…」

ロックマンはウォーロックが言った後に足を止める。

「…そう言えば、周波数も人間と少し違った。…普通の人間じゃねえって事か」

「えっ？どういう事？」

「俺が知るか。それより探さなくて良いのか？」

「そうだった！…でも、何処に居るんだろう？」

ロックマンは少し考え込む。

「サバタが電腦に居たんだ。もしかしたら電腦や電波の中にいるかもな」

「そっか！…そう言えば、太陽が良く当たる場所とも言ってた。よ

し！」

ロックマンはそう言うと再び走り出した。

暫くして、展望台の方へやって来た。

「太陽がよく当たるって言ったらここも良く当たるよね」

『でもここへ来るのはいつも夜だけだな』

「あはは…あ、あそこに誰がいる。他にもたくさんいる…」

ウォーロックが言った言葉に苦笑いをすると、誰かいるのを発見した。そして、段々近寄って行く。

「あの…もしかして君ジャンゴ？」

そしてロックマンは話し掛ける。

「えっ？」

ジャンゴ達はロックマンの方向へ振り返る。

『お前誰だ？』

『アーシユラ、初対面の人に失礼よ！』

アーシユラにリザが注意する。

「…君、この世界の人間？」

「あ、うん！僕はロックマン。こっちは相棒のウォーロック」  
『宜しくな』

ジャンゴはロックマンの左腕のウォーロックを見て少し考え込む。

「…星霊獣？」

「えっ？」

「ああ、いや、こっちの話だから気にしないで」

ジャンゴは手を振って話をそらす。

「話を戻すね？僕はサバタに頼まれて君を探しに来たんだ」

「えっ！？サバタに？」

『と言う事はライマーを見つけたのか！？』

ジャンゴが言った後にオテンゴがロックマンに尋ねる。

「…その事なんだけど、僕のせいでそいつを逃がしてしまったんだ」

『何だって！！？』

『…それで、ライマーは今何処に？』

トーブとオトフリートが言う。

「今、サバタが追跡してる」

「わかった。教えてくれてありがとう」

「あ、うん。……それより何かいっぱい居るね」

ロックマンは星霊獣達をまじまじと見ている。

「ああ、紹介がまだだったね。左から、アーシュラ、トーベ、リザ、オトフリートだ！」

『宜しくな！』

『宜しく』

『初めまして』

『宜しく頼む』

四体の星霊獣が挨拶をする。

「そして、こっちがオテンコ。僕の相棒」

『宜しく』

そしてオテンコが挨拶する。

「みんな宜しく！」

「ここにいる奴らは全員星霊獣なんだ」

「星霊獣？」

ロックマンはジャンゴに尋ねる。

「星霊獣っていうのは、星のあらゆる自然の意思が具現化した星霊の事だよ。それぞれ天気に関係する属性を持つてる。サバタの近くにいるネロも星霊獣の一体だよ」

ジャンゴは簡単に説明をする。

「へえ、そうなんだ」

『おもしれえな。一度戦ってもみたいもんだ…！？』

「！？」

ウォーロックとジャンゴは何か反応する。

「ど、どうしたの？」

『スバル！奴だ！』

「ライマーの気配がする。しかも、アンデットの気配もする。場所は…ここから西の海の方だ！」

ジャンゴが指を指して場所を教える。

「よし、行こう！」

「それが…だめなんだ」

ロックマンが走って行こうとすると、ジャンゴの言葉に足を止める。

「えっ？」

「僕の武器の太陽銃は太陽エネルギーを充電しなくちゃいけないんだ。しかも、ライマーを倒して浄化するだけのエネルギーはまだ溜まってないんだ」

ジャンゴが自分の武器、太陽銃ナイトを見せる。

「……わかった。ライマーは僕が食い止めておく！」

「えっ？でも……」

「大丈夫！」

「……わかった。なら、こいつらを連れて行くといいよ。何かの役に立つと思う」

ジャンゴは星霊獣四体を連れていくようにすすめる。

「わかった！みんな僕について来て！」

『『『おっ！（ええ！）』』』

ロックマン達は、ライマーがいると思われる海の方へ向かう。

「…頼んだよ」

ジャンゴは一人そう呟く。

### その頃

『ミソラ！変な周波数が海の方から感じられるわ。それも凄い数よ！』

「えっ？FM星人？」

『…いいえ、人間に近いけど、人間じゃない周波数よ。…ロックマンが向かってるわ。…！？ロックマンの近くにも変な周波数四体感じられるわ』

「何が起きてるの？…とにかく行ってみよう。電波変換！響ミソラオン・エア！」

ミソラは電波変換すると、一筋の光となり、海へと向かっていった。

#### 同時刻

『亜夢ちゃん、海の方から周波数を感じるわ!』

「えっ?」

『人間に近いけど、人間でもFM星人でもない周波数よ』

「…わかった。行くよ、ジャスミン!」

『ええ!』

「電波変換!水星亜夢 オン・エア!」



亜夢もミンラと同じく電波変換して、海の方へと向かって行った。

### 第34話 星霊獣（後書き）

うーん、最後のミノソラ達を登場させるところ微妙。無理やりすぎる  
（ー；ー；）

次は戦闘になると思います。てか、星霊獣の性格とかあってるのか  
な…？

感想待ってまーす

## 第35話 トランス&バースト（前書き）

33話の星霊獣の事について少し付け加えておきました。

### 第35話 トランス&バースト

コダマ港

「…何処にいるんだ？」

ロックマン達はジャンゴの言われた通り海の近くのコダマ港に到着した。

『スバル、さつきと同じように電腦の中にもいられかねえぜ？』

「そうか！……あ！」

ロックマンは、ウォーロックに言われた後、辺りを見回す。すると、近くに灯台がある事に気づく。

「よし、みんな行くよ！」

『『『『『『おお！（ええ！）』』』』』』』』

ウォーロックと星靈獣が返事したのを確認すると、灯台の電腦へと入っていった。

あ

## 灯台の電腦

ロックマン達は中へ入ると奥へと進んで行く。

「……………見つけた！」

奥へと進むとライマーと無数のアンデットが居た。

「ん？」

ライマーは、声が聞こえたため後に振り返る。

「…なんだ貴様は…新たなヴァンパイアハンターか？」

「僕はお前を倒しに来た！」

「ハッハッハ！私を倒す？そんな事は不可能だ。行けアンデット共  
！」

ライマーが支持すると、無数のアンデットがロックマンに向かって襲い掛かってくる。

「バトルカード！プレデーション！エアスプレッド！…シユート！」

ロックマンはエアスプレッドに変えると、狙いを定め放つ。するとゆづばくし、数体のアンデットに当たる。アンデットは当たると消滅する。

「よしー」

『喜んでる場合じゃないぞー！』

ウォーロックが言うと、アンデット達が飛び掛かってきた。

「くっ！バトルカード！プレデーション！ヘンゲノジユツ！」

すると、ロックマンはヌッキーを変わり身として攻撃を避ける。

「ロックバスター！」

ロックマンはロックバスターでアンデット達に何発も放つ。当たったアンデット達は消滅する。

『スバル！このペースじゃいつになっても奴の下へ行けねえぞー！』

「わかってる！」

ロックマンは既に約20体のアンデットを倒している。だが、アンデットはまだ、100分の1も減っていない。

『ロックマン！そんなチンタラやってたら、減るもんも減らねえぞー！ここはオイラ達に任せろー！』

すると、アーシユラがロックマンに話しかける。

「えっ?…でも…」

『拙者達、星霊獣の力を甘く見るなよ?』

『僕たちなら大丈夫!』

『だから、ここはワタクシ達に任せて、先に行ってください』

オトフリート、トーベ、リザの順でロックマンに言う。

「……わかった。任せたよ!」

ロックマンはそれだけ言い残すと、アンデット達の攻撃を避け、先へと進んで言った。

『さて、やるか!』

『行くよみんな!』

『おっ!…!』

『バースト!』

4体はそう言うとアンデット達の方にバラバラに散らばって行った。

『オイラの力を見せてやる！バースト！爆炎咆哮！！』  
ボルケニック・キャノン

アーシユラはそう言うと、両腕のキャノン砲から隕石を、アンデットの上空から何発も放つ。

ヒュウウウン…ドオオオオン！ ヒュウウウン…ドオオオオン！

隕石はアンデットの所へ落ちると、爆発する。

『どつだー！』

アーシユラはそう言うとアンデットへの攻撃を続ける。

『僕のカ！バースト！激震地裂！！』  
ギガンティック・クエイク



トーベは手を前に出すと、地面を揺らし、上空から岩石を複数落とす。

ドオオオン！ドオオオン！ドオオオン！

岩石を落とすたびに揺れは大きくなっていく。

『まだまだ行くよ！』

トーベは岩石を次々と落としていく。

『拙者の力…ハア！バースト！デストラクション・ハリケーン烈風天波！！』

オトフリートは羽を広げ、突風を起こす。すると、どんどん大きな竜巻に変わる。

ヒュウウウウウウー！！

その竜巻はオトフリートが操って動かしている。

『まだまだこんな物ではないぞ！』

オトフリートが起こした竜巻は、どんどんアンデット達を巻きこん

で行く。

『ワタクシの力：バースト！氷剣乱舞！！』  
ボーン・ブレス

リザは何処からともなく吹雪を起こし、上空から氷塊を次々と落とすしていく。

カキイイイイイン！

氷塊に当たったアンデット達は凍結する。

『氷の恐ろしさ思い知らせてあげる』

リザが起こした吹雪はまだまだ止む事はない。

4体の星霊獣の攻撃は、みるみるうちにアンデットの数を減らしていき、残り約3分の1となった。

その頃ロックマン

ロックマンは、アンデット達が居たところよりもさらに奥へと進んで行っている。

「ライマー!!」

「ん?...追って来ましたか」

「お前は僕が倒す!!」

「.....良いでしょう。はああああ!!」

ライマーは炎に包まれ違う姿へ変身する。

「行くぞ!ロックバスター!!」

「ふん!そんなもの効かん!!」

ロックマンはロックバスターを放つ。だが、ライマーはロックバスターを防ごうとしない。ライマーにはロックバスターが効いていない。

「くっ!ならば、バトルカード!プレデーション!ヘビーキャノン

「!…やあ!」

へビーキャノンに変えて放つ。だが、ライマーには全く効いていない。

「そ、そんな!」

「無駄だ! 棺桶かんおけスーツがある限り、私にはあらゆる攻撃は効かない」

「何だつて!?!くそ!」

「……あきらめちゃだめだよ! ロックマン!」

「まだ正気はあるよ!」

「!?!その声はまさか……」

ロックマンは声が聞こえた方へ振り返る。すると、ハープ・ノート、ジャスミン・ハートが立っていた。

「ハープ・ノート! ジャスミン・ハート!」

「私達だけじゃないよ」

「ほら」

「えっ?」

ガキン!

ロックマンがライマーの方を見ると、サバタがライマーを大剣で攻撃していた。

「サバタ！」

「待たせたな！」

『ロックマン！ジャンゴは見つかったか！？』

「う、うん。でも、まだ太陽エネルギーを溜めるのに時間が掛かるって…」

「そうか…ならばジャンゴが来るまで食い止めるぞ！」

「ふん！コバエが何匹掛かってきた所で今の私を倒す事はできません！」  
ライマーがサバタ達に言った。

「そのようだ。さっきより比べ物にならないくらいにパワーが上がっている」

サバタはそう言うとロックマン達がいる所まで後に下がる。

「…俺が合図したら一瞬で良い、奴の隙をつくってくれ」

「…分かった」「」

サバタ達は小声で話す。

「何をゴチャゴチャ言っている？まあ良い。お前たちに私を倒すこ

とはできんのだからな!」

「今だ!」

「ロックバスター!」

「シヨックノート!」

「風の舞 かまいたち!」

サバタがライマーが余裕を見せたその一瞬の隙に攻撃するよつに合図する。攻撃は全てライマーに直撃する。

「くっ! ちょございな!」

「暗黒剣ヴァナルガンド! はあ!」

ガキイン!

サバタはライマーに暗黒剣ヴァナルガンドで攻撃する。だが、攻撃は通じていない。

「かゆいな! 攻撃とはこうするのだ! はあ!」

「ぐはっ!」

ライマーはサバタを槍で攻撃される。そしてロックマンの方向へ飛ばされる。

「サバタ! 大丈夫か!」

「…くそ！」

ライマーは槍を持って突進する構えになる。

「私は無敵なのだ！お前達は絶対に勝てない！これで終りだ！」

ライマーが突進しようとしたとき

「…………それはどうかな！？」

みんなの目の前にジャンゴが現われた。

「ジャンゴ！」

「おまたせ！！」

「（この人がジャンゴ…）」

「何！？」

ライマーは攻撃の態勢をといてしまう。

「…来るのが遅いぞ」

「ごめん。太陽エネルギーを溜めるのが時間掛かっちゃって。やっぱり本物は違うよ。でもこれで行ける！オテンコ！トランスだ！」

『おっ！』

「…俺達も行くぞ、ネロ！」

『任せろ！』

『「トランス！ソルジャンゴ！」』

『「トランス！ダークサバタ！」』

ジャンゴは、オテニコと融合し、光の戦士ソルジャンゴへと姿を変えた。

サバタは、ネロと融合し、闇の戦士ダークサバタへと姿を変えた。

「太陽の光を手にしたところで、貴様らごときに負けるはずがない！」

ライマーは槍を構え突っ込んでくる。

「ジャンゴ！一気に決めるぞ！」

「おう！ソルプロミネンス！！」

ジャンゴは魔方陣を発生させ、ライマーに攻撃する。

「ぐおおおおおおお！！棺桶スーツが剥がれていく！！！」

ライマーの棺桶スーツはジャンゴの攻撃によって体から剥がれていく。

「お前ら、棺桶スーツなくなった今がチャンスだ！」



サバタが合図する。

「分かった！バトルカード！プレデーション！ブレイクサーベル！」

「シヨックノート！」

「風の舞 フウゲツザン！」

「辺境伯ライマー！これで終りだ！ダーククロー！」

ハーブ・ノートがシヨックノートを当て、麻痺させた瞬間にロックマン、ジャスミン・ハートがソード系で攻撃し、サバタが自分の爪でとどめをさした。

「くっ！もはやこれまでか。ぬおおおおお！……！」

ライマーはアンデットと同じように消滅していった。

ジャンゴとサバタはライマーが消滅すると、トランスを解いた。

「…終わった」

『こつちも終わったぜ！！』

4体の星霊獣もアンデットを全て倒してロックマン達の方へやってきた。

「ロックマン、世話を掛けたな」

「うっん、僕の方こそ君たちに助けられたよ」

「ライマーも倒したし、この世界にはもう影響はでないだろう。…  
そろそろ行くぞジャンゴ」

「えっ？もう行っちゃうの？」

ロックマンがサバタに尋ねる。

「ああ、俺たちにはやらねばならない事がある」

「でも、もうちょっと本物の太陽を見ていたいよな」

「そうだよ、もうちょっとゆっくりしていけば良いのに」

「ほら、ロックマンもそう言ってるしもうちょっとここに居ても」

「ロックマン、またいつか何処かで会おう。行くぞジャンゴ」

『じゃあな』

サバタはそれだけ言い残すとその場を後にした。

『ロックマンじゃあな！』

『じゃあねー！』

『さっばだー！』

『また会える日まで』

そう言うと、4体の星霊獣もサバタの後を追って行った。

『ありがとうロックマン！行くぞジャンゴ』

「ああ、待てよみんな！…それじゃあロックマン達またね。いつも心に太陽を」

オテンコとジャンゴもサバタ達の後を追って行った。

『変わった奴らだったな』

「いつも心に太陽を” が良い言葉だね」

「うん。また会えるといいね」

「会えるよ。必ず」

「そうだね。僕らも帰ろうか？」

「うん」

3人も灯台の電腦を後にした。

第35話 トランス&バースト（後書き）

ボクタイ編終了です。

何かこの話し長い（ー；）

しかも最後なんか説明不足だらけ…まあ、大目に見てやってください  
い m (——) m

それでは眠いんでこの辺で（ー・ー） z z z

### 第36話 電波な幽霊 前編

ある日の夜 スバル達

今スバルは、ツカサ、委員長達と一緒に廃墟された遊園地の入り口前にやって来ていた。入り口前の看板は斜めに傾いていて、ライトが割れている。遊園地の中は観覧車や、メリーゴーランドなどの乗り物などは電気が流れていないため動かない。手入れもしていないので全て錆びきっている。

ちなみに委員長、ゴンタ、キザマロはトレジャーハンティングするような服装で大きなシャベルを持って来ていた。

「こ、これが、金銀財宝が眠ると言われているウルトラ遊園地？」

「怖いものって色々あるけど、潰れた遊園地ははベスト3に入るな」

「いかにも出そうですね…幽霊」

委員長、ゴンタ、キザマロは廃墟された遊園地を見て、怯えながら言った。どうやらここへ来た理由は遊園地に眠っているお宝が目当てらしい。

「…幽霊が怖くて宝探しが出来るもんですか！さあ、行くわよみんな！」

委員長は開き直り、中へ入ろうとする。

「い、委員長からお先に！」

「遠慮なさらずどうぞ!」

ゴンタとキザマロはそう言つと後ろに一歩下がる。

「……行きなさい!」

委員長は黙つて2人の後ろに回り込むと、ゴンタを蹴った。

「ぐえ!痛たたた…」

ゴンタは蹴りを受けると、よろけるが踏ん張る。そして渋々キザマロと中へ入つて行く。委員長も後に続く。そして2人は取り残される。

「やれやれ…」

「スバル君は幽霊が怖くないの?」

ツカサが自分のウェーブスキャナーで何かの曲を聞きながらスバルに尋ねる。

「いや、出来たら会いたくないけど…」

スバルはビジライザーを掛け、少し横を向く。

『あ?……ブイ!』

ウォーロックはスバルに向かってブイサインをする。

「(いつも似たようなのに脅かされてるからな…)」

スバルがそんな事を思っていると、ツカサがニヤリと気づかれないように笑う。

時間はさかのぼり学校で

スバルの机の周りに委員長達3人が集まっていた。

「えっ？ツカサ君が今度のグループ研究のテーマを？」

「そう、凄いアイデアを出してくれたの。コダマタウンの都市伝説に迫るのよ」

「題して、幽霊が守る財宝伝説！まあ、早い話し宝探しです」

委員長とキザマロが簡単に研究テーマを説明する。

「発表したら学校中に評判、委員長は時期生徒会長になってわけだ！」  
ゴンタが言った後、委員長が少し笑う。

「…幽霊の財宝ねえ…」

スバルは机に頬杖を着いて考える。

「怖いのか、スバル？弱虫だな」

「幽霊なんて非科学的なものを信じてるんですか？」

「別に怖いなんて言っていないだろう」

スバルは、ゴンタ、キザマロに言われて少しムキになる。

「じゃあ、早速今夜出掛けるわよ！場所は、最近宝で噂の持ちきりの…ここよ…」

委員長はトランサーを操作し、廃墟された遊園地の写真を見せる。



「この遊園地がある埋立地は、元は海。噂によると、海の底に豪華な財宝が沈んでいて、幽霊はその財宝を守っているとか…」

キザマロが歩きながら説明する。

「見た奴いつぱいいるらしいぜ！」

「…あのさあ…ぶつちやけ時期生徒会会長よりも宝物が目的なんじゃない？」

スバルがぶつちやけると、委員長が笑顔で振り返る。

「ぶつちやけないでよ、恥ずかしいじゃない！」

「…やっぱりそうなの」

スバルは呆れてそれしか言えない。

暫く進んでいく

「…電波が乱れてる。もしかして…」

スバルが自分のトランサーを操作しながら一人呟く。

「ぎゃああああー!!」

「来るなあああー!!」

すると、スバル達の前から二人の男がこちらに向かって走って来た。

「」「うわああああー!!」「」

委員長達はそれに驚く。

「幽霊だ!」

「幽霊だー!!」

2人はそう言ってその場から走って行った。

「…何だよ、脅かしやがって…」

「僕らと同じお宝目当ての人ですか」

「でも、今幽霊って…」

委員長は2人がやって来た方向に振り返る。

「…!?!」

「ん?」

委員長が何か気づいたので2人も振り返る。するとそこには、青い火を帯びている骸骨の頭が飛んでいた。

「「「きゃあああああ!!」「」」

「!?!」

火の玉を見て委員長達は悲鳴を上げ、スバルは一步後ろに下がる。

すると、いきなり遊園地の電気がつき始めた。そして、乗り物が動き始めた。ジェットコースター、観覧車、メリーゴーランドなどの乗り物には火の玉の骸骨が乗っていた。

「遊園地が動き出した!」

すると、子供用のレーシングカーがスバル達の方へ突っ込んできた。

「うわあ!」

スバルはかろうじて避ける。

「に、逃げる!」

「助けてー!!」

ゴンタがそう言うと3人は走って逃げていってしまっ。

レーシングカーは委員長達を追いかけていった。

「みんな…ツカサ君？ツカサ君がいない！？」

スバルが気づいた頃にはツカサの姿は何処にもなかった。

「…いったい何が起こってるんだ？」

『スバル！ビジライザーだ！』

「分かった！」

スバルはウォーロックに言われてビジライザーを掛ける。そして辺りを見回す。

「あ！」

すると、ウェーブロードの上に立っている、骸骨の王様のような電波人間を見つける。

「あいつは！？」

『FM星人のクラウンだ！もしかと思ったが、やはり幽霊騒ぎは奴の仕業か！』

「電波変換！星河スバル オン・エア！」

スバルはすぐさま電波変換する。

カカカカカカカ！（クラウンが笑ったときの歯がなる音

『へっへっへ。愉快愉快。やはり人を脅かすのは楽しいのぉ！』

クラウンが遊園地を見下ろしながら言った。

「エアスプレッド！」

すると、ロックマンが空中からクラウンの足元に向かって放つ。

『うお！？』

クラウンはジャンプして避け、違うウェーブロードへ飛び移る。

『何奴じゃ！？よくもこのワシ、クラウン・サンダー様に向かって無礼な！』

ロックマンはクラウン・サンダーと同じウェーブロードに降り立つ。

『！？お主はウォーロック！』

クラウン・サンダーは少し後ずさる。

『宝が眠っているとデマを流し、やってきた人間を脅かして喜ぶ。いかにもお前がやりそうな事だな、クラウン!』

『そうか、貴様が噂のロックマン!』

「これ以上の騒動は許さない!バトルカード!プレデーション!ブレイクサーベル!」

ロックマンはブレイクサーベルに変えてクラウン・サンダーに突っ込む。

『おのれ下船の分際で生意気な!』

クラウン・サンダーは懐から剣を取り出した。

ガキン!

ロックマンの攻撃をクラウン・サンダーが受け止める。

ドクン!

『(?!?これは...!!)』

ウォーロックは何かを感じた。

「やあ!」

ベキン！

クラウン・サンダーの剣をブレイクサーベルで折った。

『くっ！』

クラウン・サンダーは少し下がって距離をとる。

『うおおおおお！！』

すると、青い炎を帯びたハンマーを持った骸骨とオレンジ色のドリルを持った骸骨が出現させた。骸骨はロックマンの方向へ突っ込んでいく。

「くっ！」

ロックマンはブレイクサーベルを構える。

『戦うなスバル！』

「えっ？」

『逃げるんだ！』

ロックマンは、ウォーロックの言う通り周波数を変え逃げた。骸骨はそのまま進んで行った。

『何！？』

クラウン・サンダーも周波数を変え、一番高い塔の天辺へ移動した。

『余に恐れをなして逃げるとは！卑怯旋盤！出て来いロックマン！』

#### その頃委員長達

委員長達は出入り口の外に出てレーシングカーが来ないように出入り口を閉めていた。

「ひいいい！！！！」

レーシングカーに乗っていた幽霊は暫くすると消えていった。

「どうしたの？」

「幽霊が帰っていった」

「助かったわ……」



委員長は安心する。

「けど、どうして？」

「…もしかしたら地縛霊だからかも」

「地縛霊？」

「土地に取り付いた霊です。その土地を離れて自由に動く事は出来ないんです！」

キザマロが2人に簡単に説明する。

「そうか、遊園地に取り付いてたから外には出られなかったのね。  
…星河君は？双葉君は何処？」

委員長達は今、2人がいない事に気づく。

「あ、あいつら、まだ中に居るんだ！」

「もしやお宝を見つけたのでは？」

「何ですって！？冗談じゃないわ！宝は私の物よー！！！」

委員長は走って中に入って行った。

「委員長……」

ゴンタとキザマロは少し呆れていた。

第36話 電波な幽霊 前編（後書き）

やっとクラウンまでやって来ました。

…委員長、何でそんなに宝が欲しいんだよ（…）

### 第37話 電波な幽霊 後編

その頃ロックマン

今ロックマンは、遊園地にあるお化け屋敷の中に隠れていて窓から外の様子を伺っていた。

「…ウォーロックどうしたの？いきなり逃げるだなんて？」

外に誰もいない事を確認すると、ウォーロックに話しかけ始める。

『クラウンは弱いくせに人を脅かすのが好きな最低な奴だ』

「だったら早く倒して 『いや、あれは俺の知ってるクラウンじゃねえ。剣を交えた時に分かった。…奴の心臓は動いてねえ』  
えっ？」

ウォーロックは先ほどの戦いの時に電波で感じた事をロックマンに話し始める。

『体温や呼吸数もゼロ。生命電波すら放ってなかった』

「そんな…それじゃあ死んでるみたいじゃないか！」

その頃

遊園地の塔の天辺にクラウン・サンダーが立っていた。すると、誰かがクラウン・サンダーの前へ降りてくる。

『やや！？お主はジエミニ』

降り立ったのはジエミニ・スパークのWとBだった。

「凄い顔だねクラウン」

『元気そうだな。良い人間を見つけたと見える』

『そうなのじゃよ！それはもう周波数ピットタンコの間人だな！他人とは思えねくらいなのじゃ！』

カカカカカカカカ！

クラウン・サンダーが自慢げに話す。

『フツ、まあ良い。ところでロックマンをここへ連れてきてやったのは俺たちだ』

「君の遊び相手にと行って」

『何と!?!?』

「でもてこずるようなら力を貸すよ?」

『どつするクラウン?』

WとBは微笑みながら尋ねる。

『控えよ!余を誰と心得る!?!電波界の帝王、クラウン・サンダーなるぞ!余の力とつと見物しておれ!』

クラウン・サンダーはそう言うてから、遊園地全体を揺らし始める。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ!

「きゃああああ！何なの！？」

委員長はいきなり遊園地が揺れ始めたため、パニックになり走って逃げ回っている。

「きゃあー！」

地面がいきなり地割れしたため委員長はそれにつまずきその場に倒れる。

「痛た…！？きゃあああ！！！」

すると、運悪く委員長の目の前にあった建物が倒れてきた。だが、ロックマンが間一髪のところまで助ける。

「えっ？…ロックマン様〜！」

「どうして戻ってきたんだ！？」

「ロックマン様に会いたくて」

委員長はくねくねしながらそう答える。

「あ………そうなの」

ロックマンは呆れて言葉も出ない

遊園地出入り口前

ゴンタとキザマロは遊園地の中には入らず出入り口前に居た。

ゴゴゴゴゴゴゴゴ!

クラウン・サンダーが遊園地全体揺らし始めた同時刻。遊園地に異変が起こった。

「「うわああ!?!」」

ゴンタとキザマロは尻餅をつく。

「ゆ、遊園地が持ち上がっていく!」

「じ、地面から何か出てきます!」

理由は、遊園地が浮きだしているからだ。そして、遊園地の下から木でできた船が姿を現す。

そして、クラウン・サンダーが立っている塔の天辺には先程までなかった、髑髏どくろマークの黒色の旗が現れる。

そして船が完全に姿を現して海の上に浮かぶ。船の甲板のところには、遊園地丸ごと乗っている感じである。

『フハハハ！どうじゃロックマン、驚いたか？』

クラウン・サンダーが塔の天辺からロックマン達を見下ろしながら話し掛ける。

「何をするつもりだ、クラウン・サンダー！？」

『余の方から直々に出向き世界中に恐怖をばら撒いてやるのじゃ！』

クラウン・サンダーが言った瞬間、船が町に向かって動き出した。



『勝負じゃロックマン！我が恐怖の船出を飾る生贄いけにえとなれ！』

ロックマンとクラウン・サンダーは身構える。

『行くぞ！イカクボウガン！』

クラウン・サンダーは目の前に紫色の炎を纏っている骸骨出現させ、ボウガンを放たせる。

「くっ！」

ロックマンは委員長を抱えてジャンプして避ける。そしてメリーゴ  
ーランドのところを下ろす。

「ここに隠れてるんだ！」

「頑張つて、ロックマン様！！」

ロックマンはメリーゴーランドから離れる。

『気をつけるよ！相手は得体の知れない幽霊みたいな奴だ』

「分かった！バトルカード！プレデーション！ガトリング！ええい  
！」

ガトリングに変え、クラウン・サンダーに放つ。

ダダダダダダダダ！

『うおおおおおー!!』

クラウン・サンダーはもろに喰らう。ガトリングで体の数箇所が穴が開く。

ヒュウウウウン!

地面が薄く光る。すると、クラウン・サンダーの傷が癒えていく。

『フーン!聞かぬわそんな攻撃』

クラウン・サンダーはジェットコースターの上へと飛び移る。

「くっ!バトルカード!プレデーション!ブレイクサーベル!だあ  
!」

ロックマンもジャンプしてジェットコースターの上へと飛び移ると、クラウン・サンダーを右上から斜めに切り裂く。

『うおおおおおー!!』

クラウン・サンダーに大きな傷が出来る。だが、直ぐに傷口がふさがってしまった。

「そ、そんな!真つ二つにされても平気だなんて…」

『無駄じゃ無駄じゃ!余はジャン・クローヌ・ヴェルモンド・ジョルジョワ!又14世と言う人間と電波変換して、不死身の体を手に入れたにじゃ!』

クラウン・サンダーは勝ち誇ったような顔をして言った。

「ふ、不死身？」

「ん？そんな長つたらしい名前、昨日テレビで見たような気が…」

委員長が何かに気づき、トランサーを操作し始める。

「確か歴史上の“バカ”を紹介する、“世界バカ発見”って番組で…あつた！」

委員長は昨日見たテレビ番組を見つけた。

「ジャン・クロード・ヴェルモンド・ジョルジョワ又14世。500年前にわがままの限りを尽くした大バカ国王。…迫害にあつて追放され海へ逃げたが、日本近海で船が難破して海底に沈んだ…。つて、大昔に死んだ人じゃない！」

「何だつて！？じゃあ、クラウンは…」

『まじで幽霊になつたてのかよ！』

『その通り、じゃが地縛霊になつてみたものの自由に動けんので詰まらぬ。そこで、遊園地をそっくり船に乗せて、余は浮幽霊になる事にしたのじゃ。フハハハハハハ！』

「「ええ！？」」

ロックマンと委員長は見事にハモツた。

「…何なんだそれ？」

「バカだわ。まじで大バカだわ。…ウプ…この微妙な揺れ…船酔いしたかも…」

委員長は顔が悪くなり、口を抑える。

第37話 電波な幽霊 後編（後書き）

バカの部分を強調させてみました（笑）

### 第38話 不死身の地縛霊

#### 船の制御室

船の中には、船を制御するための制御室があった。すると、そこに周波数を変え、じえみに・スパークがやって来た。

「この戦い、もっと面白くしてあげるよ」

2人はそれぞれの手を合わせる。

「『ジエミニサンダー！』」

電撃を放ち、制御システムを壊す。

すると、船は方向を変え進み始める。

『ん？なんじゃ？』

クラウン・サンダーはいきなり方向が変わったため驚いている。

「急に揺らさないでよ、気持ち悪いから」

委員長はもうノックアウト寸前だ。

「…船がUターンした…ん？」

ロックマンが言った後、声が聞こえてくる。

「僕がやったのさロックマン」

「その声はジエミニ・スパーク！」

『制御システムを破壊してエンジンを暴走させた。この船は今、全速で陸に突き進んでいる』

「行く着き先は…コダマタウンの電波エネルギー発電所！」

「電波エネルギー発電所だって！？もしこの船が衝突したら…」

「そう、コダマタウンは火の海」

『ただし、クラウン・サンダーを倒せば船は止まる。倒せばだがな』

Bはそう言つと鼻で笑つ。

「健闘を祈るよロックマン。フッフ」

ジエミニ・スパークはそう言うと制御室から姿を消す。

「ジエミニ・スパーク…」

ロックマンは一人呟く。

『ええい！何、一人事ぶっこいとる！まじめに戦えロックマン！だあ！』

クラウン・サンダーは遊園地全体にライトアップし、アトラクション系を動かし始めた。

「だから揺らさないでっば…」

委員長は動いているメリーゴーランドにしがみついている。

クラウン・サンダーが乗っているジェットコースターも動き始めた。

『トツゲキランス！ハジヨウハンマー！』

槍を持った骸骨、ハンマーを持った骸骨を出現させ、ロックマンを狙わせた。だが、ロックマンはジャンプして避ける。

「バトルカード！プレデーション！プラスキャノン！でや！」

ドン！ドン！ドン！



ロククマンはクラウン・サンダーに何発も放つ。だが、ジェットコースターに乗って動いているので当たらない。

『やあゝい、当たらんもんねえゝ…どわあ!』

調子に乗っていたら見事に命中した。クラウン・サンダーは空中に吹っ飛ばされる。

「バトルカード!プレデーション!ファイアバズーカ!でや!」

ファイアバズーカの炎はクラウン・サンダーの腹を貫通する。

『どわあああ!』

ヒュイイイイン!

だが、またも地面が光だす。

「地面が光ってる!」

ロククマンは先程は気づかなかったが今度は気づいた。

クラウン・サンダーの傷はみるみるうちに塞がる。クラウン・サンダーは観覧車の一台へ着地する。

『無駄じゃと言つのがまだ分らんのか?余は不死身の地縛霊なのじゃ!』

「くっ!どつやったらあいつを倒せるんだ!?!?!」

ロックマンが気づいたときには、電波エネルギー発電所はもう直ぐそこだった。

「まずい！発電所はもうすぐだ！…あ！ぐわあああああ！！」  
発電所に気を取られていると、背後からランスで一撃喰らい、その後でハンマーで吹っ飛ばされる。

『これで終わりじゃロックマン！』

クラウン・サンダーは右手から電撃を放つ。ロックマンは立ち上がったばかりなので避けることが出来ず、もろに喰らう。

「うわあああああ！！」

『お主も余と同じ幽霊になるが良い！フハハハハ！』

クラウン・サンダーが高らかに笑っていると

「うるさいわよこの骸骨！！」

と聞こえてくる。クラウン・サンダーは聞こえてきた上を向く。

「ハーブ・ノート推参！ショックノート！」

『うおおおお！！？』

クラウン・サンダーはショックノートを喰らって地面に叩きつけられる。

オオオオオオオオオン！

地面は光を放つ。だが、先程とは違う音が聞こえる。

ハーブ・ノートはロックマンに近寄った。

「あ、ありがとう、ハーブ・ノート。どうしてここに？」

「新曲にアイデアを考えながらお散歩してたらこの騒ぎだもん！もう気分ぶち壊しだわ！」

ハーブ・ノートはしかめ面をして言った。

『ヌワアアアア、ウウ、ヌワアアアア！』

すると、クラウン・サンダーは急に苦しみ始めた。

『スバル！クラウン・サンダーの様子がおかしい！』

「「えっ？」」

ロックマン達が振り向くとクラウン・サンダーは胸を押さえて苦しんでいる。

オオオオオオオオオン！

「何この地面？まるで私の攻撃を受けて苦心でるみたい」

ハーブ・ノートが地面を見て言った。すると、ロックマンは考え始

めた。

「攻撃を受けて地面が苦しむ…地縛霊…そうか！分かったぞ！不死身の秘密が！」

「はあ！？」

「地縛霊だからだ！クラウン・サンダーは土地に取り付いた地縛霊。土地が無事ならあいつも無事なんだ！」

『そうか！だったら話ははええぜ！』

後から来たハーブ・ノートにはロックマンが言った意味が分かっていない。

『スバル、地面を攻撃だ！』

「バトルカード！プレデーション！フリーズナックル！」

ロックマンはフリーズナックルで地面を攻撃し、凍らせた。その凍った地面は砕け散る。

『又ワアアアアア！！』

クラウン・サンダーの胸の部分に小さな亀裂が入る。

「良く分かんないけど私も！マジガンストリング！」

ハーブ・ノートは弦で地面を、黒板を爪でひっかくように攻撃する。

『又オオオオオオ！！』

今の一撃でクラウン・サンダー全身に亀裂が入る。

「今だ！バトルカード！プレデーション！ジェットアタック！でやあ！！」

最後にロツクマンはクラウン・サンダーの体をジェットアタックで貫通させる。

ドカアアアアーン！

クラウン・サンダーは爆発する。

「あれ〜」

ジャン・クローヌ・ヴェルモンド・ジオルジョワヌ14世の骸骨は爆発したときに飛んで行き、海へと落ちた。

「いやじゃ！海に戻るのはいやじゃ！…ここら突くなさかな共！余を誰と心得る！？こらやめんか…」

ジャン・クローヌ・ヴェルモンド・ジオルジョワヌ14世は海底へと沈んでいった。

そしてクラウン・サンダーを倒したことにより船は急停止する。電波エネルギー発電所に危なくぶつかるどころだった。

「ふう、危機一髪だったね」

『まったく、骸骨と電波変換するなんてどうしようもねえやつだぜ』

「あれ？ハーブ・ノートは？」

ロックマンが気づいた頃には姿は何処にもなかった。

「あー！」

委員長はメリーゴーランドの馬の上で目を回してノックアウトになっていた。

「あはは……」

ロックマンは少し苦笑いを浮かべた。

そして次の日

委員長達、スバル、ツカサは学校に登校していた。キザマロは委員長が書いたレポートを読みながら歩いている。委員長は目の下にくまが出来ている。

「昨夜は酷い目にあつたねツカサ君。でも、みんな無事でよかったよ」

「そうだね」

ツカサは少し下を向いて答える。

「うーん、素晴らしいグループ研究のレポートです！みんな驚きますよー！」

キザマロは読んでしまった後委員長に言った。

「流石委員長！宝物は見つからなかったけど、転んでもただじゃ起

きないよな!」

ゴンタが委員長にお世辞を言う。

「題して船酔いの恐怖! 経験者にしか書けないような文章がド迫力です!」

「ヒィ! 思い出しただけでまた気分が…ウプ…」

委員長は顔色が悪くなり手で口を抑える。

「やれやれ…」

スバルはそう言って溜息をついた。



### 第38話 不死身の地縛霊（後書き）

クラウン終了です。

いや〜、ゲームに熱中してたら昨日更新できませんでしたね（笑）  
次からは気をつけます。

それでは感想待ってます

番外編 ちよつとした雑談3 (前書き)

何でこんな事になってしまったんだ…。

声優さんに興味がない方読まないほうが良いと思います。

番外編 ちよつとした雑談3

どうもこんにちは。シューティングスターです！

何だかんだで雑談3回目です。

今回は…スバル君とウォーロック、ミソラちゃんと、ハーブ、亜夢ちゃん、とジャスミンです。

「こんにちは

『よっ！』

「ヤッホー！」

『どうも〜』

『こんにちは

「……また呼ばれた……」

亜夢ちゃん、ちゃんと挨拶して。

「……どうも

よし、挨拶もすんだところで何かしよう。

「て言うか、1回目とゲストが同じじゃん！」

亜夢ちゃん、突っ込んだら負けだよ？ところで何する？

「うん」

『作者、自分で決める』

ウォーロック、出番減らされたい？

『へっ！残念ながら、主役と一緒に電波変換するから減らされる心配はねえぜ』

残念ながら、主役を交代させればそれも可能。ウォーロックがご臨終させて新たな電波体を変わりにするという裏技を使えばね。

『……まじで言ってるのか？』

勿論！私、嘘は言った事ないの。

『……すみませんでした』

分かれば良いんだよ。

「……脅迫……」

そんな事はどうでも良いんです！何する？

「……そう言えば、前回の雑談で“キャンサーの声優さんがドラマもんでいそがしいだろう”とか“これはこれはあくまでアニメのリメイク、声優さんが関係してるに決まってる”とかいったよね？」

言っていましたね。それがどうかしたの？スバル君？

「もしかして声優に詳しくかったりする？」

うん。詳しいというか大好きですね。あんな声が出せるなんて凄いつて思うもん！

「小説に声優が関係してないでしょ」

ミソラちゃん、亜夢ちゃんと同じ事いつてるよ……。関係ありますよ！声を重ね合わせながら書いてるんだから。

『声優って言えば、私たちの声優って誰が担当してるの？』

えっ？アニメに出てる時スタッフが教えてくれなかったの、ハイプ？

『ええ』

『そう言えば俺も知らねえな』

「僕も」

「私も」

4人とも知らないの？

「私とジャスミンは出てないから当たり前だけど」

『作者の中では私たち、どんな声優さんなのか知りたいわ』

じゃあ今回は声優さんの事について軽く話します。

まずウォーロックの声優さん、イトケンこと、伊藤健太郎さん！渋い役が多い。

主なアニメと役は、ロックマンエグゼのシャドーマン、BLA Hの阿井恋、ナトのチヨジ など입니다。めちゃくちゃ声が渋いんです！

『ところどころ伏字じゃねえか』

ロックマン系以外を出したら流石にまずいでしょ。

次にスバル君の声優さんは、大浦冬香さん！男の子役が多いかな。

主に、MJOR 1st seasonでの佐寿也、TOLLO Eのレ、今放送中のバトピのダとかだよ。

主役を演じたのは流星が初めてだったと思うよ。

「僕が初めての主演役…」

続いてハーブの声優さん、氷上恭子さん！女性役が多いかな。

主に、x xHO iCのサクコ、カオコ、ロザオとバパイアcup2の亜妃先生とかかな。そう言えばボクタイにも何度出てたな…。トーベとか。アニメよりゲームとかが多いかな。

『へえ』

そして最後にミソラちゃんの声優さん、ミサトこと、福圓美里さん！！とても大好きなんです、私！

主に、B L C K C Tのイブ、D A K E R T A N B L  
C Kの銀、T O L O V E R 金 の闇、ロザ オとバ パイアの  
黒 胡夢、とある 学の超 磁砲の土御 舞夏 など他多数。  
私の憧れ、水樹奈々さんと同じ事務所の後輩です！

「作者好きなんだ？」

勿論！

私の中での亜夢ちゃんは、元になったキャラクターの声優さん、伊藤かな恵さんですよ！この人も大好きです！

主に、声優2年目で主役をやった しゅ キャー！の日森、  
ダヤ、とある 学の超 磁砲の佐 涙子、宙のまま の明 美  
星。今は迷 猫オーバーン！の芹 文乃とかもやってるよ。  
今、めちやくちや活躍中の声優さんです。

「…………へえ〜」

ジャスミンは、千葉紗子さんです。女性役が多いと思う。

主に、しゅ キャー！のな しこ、x x H O i Cの猫、ロザ  
オとバ パイアの橙 瑠妃、…気づいたらロックマン系で名前が  
重なってたエグゼのジャスミンとかです。

『私と名前が同じ役を演じてるの？』

そうなんですよ。この前気づいたんだよね。奇跡だよ。

まあ、こんな感じですよ。みんなわかった？

「うん」

『ああ、色々な役があるんだな』

「凄いよね!」

『そうねえ』

スバル君達の声優さんは小説でも一緒にいいとして、亜夢ちゃん達はみなさんの想像でお願いします。

「…意味わかんない?て言うかマニア?」

わかる人にはわかるの!マニアではない、好きなだけ!

「どうだか…」

『でも、今日は勉強になったわ』

そう言ってくれると嬉しいよ、ジャスミン。誰かさんとは違って。

「えっ?私?」

別に、せつかく好きな声優さんの声なのになあ。

まあ、そんな事は良いとしてそろそろお開きにしたいと思います。

「えっ?もっ?」

「早いね」



『いつも長いのかな』

『珍しいはね』

長くてすみませんね。では、眠いで失礼します。

「」「」「」「」「」(眠いからか…)『』『』『』『』『』

それでは失礼します

「」「さようなら」

『またな!』

『それでは』

『失礼します』

「……じゃあね」

第39話 植木職人は月に吠える 前編（前書き）

ちよつと雑談3を見てくださつた方はありがとうございます。そしてマニアックすぎてすみませんm(\_\_\_\_\_)m

第39話 植木職人は月に吠える 前編

ある満月の夜 コダマ港

キン！キン！キン！

満月をバツクに、ロックマンが大きな爪を持った大きな狼のような電波人間と空中で何どもぶつかり合って戦っていた。

「はあ…はあ…はあ…」

『油断するな！ウルフはFM星人の中でも最も強暴な奴だ！』

『ガルルル！…俺をウルフって呼ぶんじゃねえ！』

『だったら何だ！？』

『今の俺は…ウルフ・フォレストだ！！』

ウルフ・フォレストは爪を構えロックマンに向かって飛び掛る。

『うおおおおおー！』

「バトルカード！プレーション！ソード！」

ガキン！

ロックマンは右手をソードに変え、ウルフ・フォレストの片方の爪を受け止める。

『ワイドクロー!』

「うわああああ!」

ロックマンはもう片方の爪の重い一撃を喰らい後ろに向かって飛ぶ。ロックマンは壁に思いっきりぶつかり倒れこむ。

スタッ!

ウルフ・フォレストがジャンプしてロックマンの目の前に現れる。

『来るぞ、スバル!』

『もらった! アッパークロ! …ぐわああああ!』

ウルフ・フォレストが攻撃をしようとするが、満月が雲に隠れ少し形を変えた瞬間、いきなり頭を抑え苦しみだす。

『(何だ!? 急にどうしちゃったんだ!? …チツ!)』

ウルフ・フォレストは、一筋の光となって何処かへか飛んでいってしまう。

「あ、待て!」

だが、逃げるのを止めようとしたときには既に遅かった。

『…逃がしたか!』

ウォーロックがそつと呟いた。

### コダマ港の倉庫裏

ウルフ・フォレストは頭を抑えて苦しんでいた。

『こいつ、何て強い精神力だ！…まずい、このままでは逆に支配されて…ちつくしよー！FM星人である俺が人間ごときに！…うわあ  
ああああー！』

ウルフ・フォレストは電波変換が解け、元の人間、尾上十郎のトランサーの中へと入っていく。

「…ん…ん？…俺はいつたい何を？…何でこんな所に？」

## 次の日の体育の授業

スバル達のクラスは体育で野球をやっていた。

カキーン！

するとゴンタがボールを打って、スバルのいるライトを軽く越し、学校の外へと飛ばしてしまう。

「あゝあ」

「スバル！ボールとって来い！」

ゴンタはバットでスバルの方を指す。

「僕！？」

「当たったり前だ！お前が守ってる所に飛んだんだから！」

スバルは、仕方なく歩いて取りに行く。

「たく！何で僕が…打つたのはゴンタじゃないか…」

スバルは、愚痴を言いながら学校を出て、ボールが飛ん出行った方向へ向かう。

すると、ボールが入ったと思われる垣根で囲まれている豪邸を前で止まる。中にはたくさんの植木が植えてあり、綺麗にカットされている。

「玄関つて何処なんだろ…」

『別に良いじゃねえか、許可取らなくても。ボール取るだけだろ？ さっと入って、さっと出ちまえば誰も気づかねえよ。とっとと済ませようぜ！』

「うわあ！」

そう言うとウォーロックは、トランサーに入ったままスバルを引っ張り、中の庭へと入っていく。

「…たくもう！」

スバルはそう言うとボールを捜し始める。

「えつと…あつた！」

木の根の近くにあったボールを発見し手に取る。

「…それにしても、ここ凄いな！」

周りを見渡すと、いろんな植木がリスや鳥、ゾウなどの動物の形にカットしてある。そして真ん中には噴水がある。

すると、スバルは植木を切っている男の人を見つけ、その方向へ歩いていく。

「ん？…何だ？」

植木を切っている男：尾上は、歩いてくるスバルに気づき後ろへ振り返る。

「ねえねえおじさん！これってもしかして全部おじさんが作ったの！？」

「…ああ、まあな」

「へえ〜凄い！本当に凄いや！」

「ところでおめえ誰だ？この辺じゃ見掛けねえ顔だな」

尾上が剪定ばさみの電波でできた刃を消し、スバルに近づく。

「えっ！？あの、その…実はここに入ったかったコレ拾いに来ただけで…」

スバルはボールを見せる。

ドクン！



「な、何!？」

尾上はボールを見た瞬間、自分の体で得たいの知れない拒否反応を起こし、ボールを見ないように手でボールを隠す。

「ば、バカ野郎!なに人ん家勝手に入り込んでんだ!とつとと出てけ!!!」

尾上は顔を合わせずに怒鳴りながら言う。

「う、ごめんなさーい!!」

スバルは走って逃げていく。

「はあ…はあ…危なかった」

「十郎様!」

すると、女の人の声が後ろから聞こえ、尾上は振り向く。女の人がお茶とお菓子を持ってきている。

「姫香お嬢さん!」

「お茶にしませんか?」

彼女は鳳おおとり 姫香ひめか。この家の主人の娘さんだ

その頃スバルは庭の外へ走って出て行く。

「はあ…はあ…はあ…危なかった」

キーン・コーン・カーン・コーン

学校のチャイムが鳴る。

「いけない！まだ授業中だった！」

スバルはそう言つとまた走り出した。

尾上は庭にあるテラスにある、パラソル付きのテーブルの前にある椅子に座る。姫香はテーブルを挟んで尾上の向かいに座っている。

「はい、どうぞ」

姫香はハート型のカップに紅茶を入れ、テーブルに置く。

「ありがとうございます、お嬢さん」

尾上は姫香に一礼すると、カップを手に取り飲み始める。

姫香は尾上に微笑むと植木が植えてある庭を見渡す。

「それにしても本当にお見事ですわ」

「えっ？」

尾上は飲むのを止め姫香の方を向く。

「十郎様のお手入れされた、木やお花達が喜んでいらっしゃるようです。お父様が惚れ込むのも分かります」

「いや、そんな。ほんとに旦那様にはお世話になりっぱなしで」

尾上は照れて少し顔が赤くなる。

「そつだ！宜しかったら、ケーキを焼いたのですがいかがですか？  
十郎様のお口に合うか分かりませんが…」

姫香はテーブルの横の方に置いてあったケーキを尾上の目の前と置く。デコレーションケーキで上に苺が乗っている。

「！？…くっ！」

尾上はケーキを見た後にケーキから目を逸らす。

「十郎様、どうなされましたか？」

「い、いやなんでも…！」

そつは言ったものの、ケーキを直視することはできない。

「あ！もしかしてケーキはお嫌いですか？それでしたら、クッキー  
はいかがですか？」

姫香はケーキを横に退かすとテーブルの下からクッキーの入ったバスケットを取り出し、テーブルの上へ置く。クッキーの形は全て丸い形だ。

「！！！？」

尾上がそれらを見た瞬間、尾上の尻からウルフ・フォレストのとき  
にあった尻尾が出てくる。尾上はそれに気づき、すぐさま両手で抑  
える。すると、尾上に生えた尻尾は姿を消す。

「い、頂きます！」

尾上はこのままではまずいと思い、クッキーを次から次へと口へと運ぶ。味なんか気にせず、ただ数を減らすことだけを考えて口へ押し込んでいる。

「うまいっす、とつても!…うっ！」

すると喉に詰まらせる。

「十郎様！」

尾上は胸を叩きながらカップに入っていた残りの紅茶を一気に飲み干す。

「…ぷはあ！」

「もう、十郎様ったら。そんなに慌てなくても、クッキーは何処へも逃げて行きませんよ。ウフフ！」

姫香は十郎へ微笑みながら言った。

「あはは!…すみません」

暫くして尾上は仕事に取り掛かっていた。

「（…俺の体はいつたいたいどうなっちまったんだ？丸いものを見るとまるで何かに取り付かれちゃったのようになる）」

剪定ばさみで枝を切りながら考えていた。丸いものを見ると変な反応が起こる現象についてだ。

「…くそ！」

ドン！ドン！

尾上は枝を切っている木に頭を何度も打ちつける。

「はかどっているかね？」

後ろから男の人の声が聞こえる。

「…旦那様！ええ、何とか今日中までには終わらせやす」

尾上が振り向くと、この屋敷の主人の鳳が立っていた。この家の主人であり、姫香の親でもある。

プシュー！

「あ、あれ？」

尾上が枝を切ろうとした瞬間、剪定ばさみの電波の部分が消え、煙

が出始めた。

数分後

「すいやせん！すぐ部品買ってきて修理しやすんで…」

尾上が鳳に一礼して剪定ばさみの部品を買いに行こうとしていた。

「お待ち下さい！」

すると、姫香に声を掛けられとめられる。

「でしたら、私も一緒にさせてください」

「ええ！？」

「…そうだな、それが良い」

姫香が言った言葉に鳳が賛成した。

「実は娘と買い物に行く約束をしていたんだが急用が入ってしまったね…。良かつたら、私の代わりに頼めないだろうか？」

「いや、でも、仕事がありやすから。今日中に終わらせねえと…」

鳳からの提案を断り、行くこととする。

「仕事なら明日に伸ばしてくれて構わんよ」

「私とのデートはお嫌ですか？」

「えっ！？いや、そんな事はけしてありやせんです！はい！」

尾上は断れなくなってしまった。



第39話 植木職人は月に吠える 前編（後書き）

と言っわけで、ウルフ編です。

…確かこの話し、テスト前に書き始めたんですよ。だけど上げるが2週間後になってしまった…。何故？（。・。・）

## 第40話 植木職人は月に吠える 後編

その頃スバル

スバルはコダマタウンの大きな5階建ての吹き抜けのあるショッピングモールの中に居た。そして、ショッピングモールで行なわれるイベント欄に目が行っていた。

「…ボールでの宛てチャレンジ？参加費無料、賞品は…最新型の小型望遠鏡だつて！！？」

スバルは読んでしまうと、すぐさま行なわれる場所へと向かう。

そしてイベントが行なわれる場所へと着く。そこにはもう受付をするために並んでいる人達が居た。見た感じ100人は居るであろう数だ。

「えつと…ここかな？」

スバルはその行列から最後尾を探して並ぼうとする。

ドン！

「うわあー！」

すると、誰かに押されて尻餅を着く。

「いたた…何するん…あ！」

スバルが顔を上げる。するとそこにはゴンタとキザマロの姿があった。

「なぐんだ、スバルじゃないか。順番だぞ。割り込むんじゃないよ」

ゴンタが仁王立ちしながら言う。

「そうですよ」

「くっ！」

スバルはゴンタとキザマロの言葉に怒りを感じるが、ぐっところえた。

スバル達はその後受付を済ませた。

参加者は全員受付で渡されたゼツケンを付けている。ちなみにスバルは18のゼツケンを付けている。

「みんな！望遠鏡が欲しいか！？」

このイベントを担当している人が、このイベントに参加している人達に向かって言った。

おおーーーー！！！！！！

勿論、参加者みんなはそう答える。

「よし、それじゃあ始め！」

その掛け声とともに、高さ何十メートルもの高さの的に向かってボ

ールを投げ始めた。  
ちなみにボールは、参加者の足元に数百個のボールが転がっているため、そのボールを的に向かって投げている。

### その頃

尾上は、スバル達がイベントをやっているショッピングモールの2階にある、選定ばさみの部品が売っている店の中に居た。姫香はその店の外におり、スバル達がやっているイベントを見ていた。

「お待たせしやした、お嬢さん」

中から尾上が出てくる。

「もう、十郎様のお買い物は終わったのですよね？それなら私の買い物に付き合ってください！」

姫香は尾上の腕を持ち、走って連れて行く。

## 洋服屋

姫香は服を選び、試着室へ入ろうとする。尾上は更衣室の外で待とうとする。

姫香が試着室に入り、戸を閉める。すると、その戸には月の絵のポスターが貼ってあった。

「!?!」

尾上はそれを見た瞬間また、尻尾が生えてくる。尾上は何とか尻尾を手で押さえる。すると尻尾は姿を消す。

そして姫香が戸を開けて着替えた姿を見せる。

パチパチ!

尾上はその姿を見て手を叩く。

そして違う服に着替えるためにまたとを閉める。

「！！」

するとまた尻尾が生えてくる。尾上は何とか尻尾を押さえる。

そして戸が開き姫香が着替えた姿を見せる。

パチパチ！

尾上は姫香を見て手を叩く。

そしてまた戸が閉められる。

この繰り返しが続く間続く。

数十分後

尾上は何とか姫香を連れて洋服屋を出る。

「はあ…はあ…お嬢さん、あっちに行きましょう…」

「は、はい」

すると、尾上の目の前にサッカーボールが現れる。

「!」

尾上はまたもや尻尾が生える。そして押さえ込む。

「すみませーん、ボールとって貰えますか？」

このボールはスバルが投げたボールのようだ。

暫くして

尾上はその後、アクセサリーショップや映画などに行った。だが、全て丸いものがあり、それを見るたびに体の一部分をウルフ・フォレストの一部分に変わってしまっていた。

アクセサリーショップでは、ネックレスなどの玉。映画では満月をバックにしたシーンの満月などで、口が狼になったり、耳が頭にちよっと生えてくきたりしていた。

「はあ…はあ…お嬢さん、こっちです」

すると、またもやボールが現れる。

「うお！？…って丸くねえじゃねえか！」

尾上は今度は手が大きな爪に変わったが、よくボールを見てみるとそれは…ラグビーボールだった。そのため手は元の姿に戻る。

「はあ…はあ…はあ…すみません…ボールとつてもらえますか？」

スバルは息切れして声がかすれながら頼んだ。

### ある電波空間

ジェミニスパークの2人はある電波空間の中に居た。そして何かを見下ろしていた。

『「ウルフ…」』

2人は尾上を見ながらそう呟いた。



その頃尾上

尾上は一人、一階のエスカレーターの近くのベンチに座っていた。

「…何やってんだ俺は？これじゃあ完全に挙動不審じゃねえか！」

尾上は頭を抱え悩んでいた。

「お嬢さんになんて思われたか…」

「すみません、十郎様」

すると、前から姫香が歩いてきた。尾上はすぐさま反応し顔を上げる。

「一人でお買い物したいなんてわがままを言って。お待ちになった

でしょう?」

姫香はゆっくりと近づいてくる。

「あまりに種類が多くて　「す、すいやせん、お嬢さん!」  
えっ?」

尾上がいきなり謝ったので、姫香が少し驚く。

「俺なんかと一緒にじゃ、楽しくねえっすよね?俺、愛想ねえし、口  
下手だし…」

「そんな事ありません。とっても楽しいですわ」

姫香が微笑みながら尾上にそう言った。すると、姫香は尾上の右袖の部分を捲くり上げ、腕に何かのリングを通した。そのリングには星が掘られている。

「はい」

「お、お嬢さん、これは?」

「今日、私にお付き合いして頂いたお礼ですわ」

「そんな!俺なんかにもつたいねえ」

尾上が右腕のリングを見ながら姫香に言った。

「まさか、一人で買い物ってコレを?」

「さあ、十郎様！今度は向こうへ行ってみましょう！」  
姫香は尾上の質問を誤魔化すと、尾上の腕を引っ張って走って行った。

### その頃スバル達

スバル達は何時間もボールを投げているが、ボールは的に届く気配がしない。

「さあ、どうした、どうした？あの的に当てる者は居ないのか？」  
イベント担当者が参加者を挑発するような口ぶりで言った。

「当てるだけで、最新の電波望遠鏡は君のものだ！」

横にある電波望遠鏡の方を指差す。確かに新品のアンテナが何本も

付いてる最新型の望遠鏡だが、小型と言う割には結構大きい望遠鏡である。

『おい、スバル。いい加減もう、諦めたらどうだ？あんなの当たるわけねえよ』

ウォーロックが流石に呆れてトランサーの中からスバルに言う。確かにウォーロックが言うように、並大抵の人間じゃ、届く事はまず不可能なぐらいの高さだ。現に当たりそうになった人は誰も居ない。

「まだまだ！」

だが、スバルは諦めなかった。

その頃尾上は腕にあるリングをじっと眺めていた。

「十郎様？あの…十郎様のご趣味に合いませんでした？」

姫香が心配しながら尋ねた。

「えっ!?!いや、違いやす!そんなんじゃない、あの…その…女性からのプレゼントなんて初めてで」

尾上は恥ずかしそうに答える。姫香はその言葉を聞くと安心する。

「十郎様!次はあちらに入りませんか?」

姫香が言った場所は、“ミラーmirror”と書かれていた。

「鏡で出来た迷路だなんて、面白そうじゃありませんか?行きましょー!」

そう言って2人は入っていく。

## 迷路の中

この迷路は壁が全て鏡であり、反射して何処が出口への道へ繋がっているか良く分からないつくりになっている。遊園地とかに良くあるあれである。

2人は鏡で色んな鏡に反射していた。

「十郎様が一杯です！」

そう言うと2人は先へと歩いていった。

すると、尾上達のかなり後ろの場所で、鏡をすり抜けてジェミニ・スパークの2人が現れた。そして、一筋に光となり、尾上の頭の中へと入り込んだ。

「!!!?うああああ!!!」

尾上は頭を押さえ膝をつく。

「十郎様?どうされたのですか?」

姫香は尾上の方を見て尋ねる。

「な、何だ!?!どうしちゃったんだ!?!」

## 尾上の精神の中

尾上の精神の中には、茨で繋がれたウルフの姿があった。

そして、そこへジェミニ・スパークがやって来る。

『…ジェミニ、お前か』

「フツ！情けない奴だ」

『何だと！？』

『人間ごときの精神力にパワーを抑えられるとは。それもFM星人の中でも、最も強暴なお前が。』  
『黙れ！』  
』

ジェミニ・スパークはウルフを小馬鹿にする。

「あまりに惨めで見てられないよ。だが…」

『助けてやる』

ジェミニ・スパークはそう言うと、手から少し電撃を放ち、ウルフを繋いでいる茨を切り離した。

『うおおおおおおおおおお！…！』

切り離れるとウルフは雄たけびを上げる。

「い、こいつは…うわあああああああ！…！」

尾上は頭を押さえて苦しみ始めた。

「十郎様！どうされたのですか？十郎様！」

姫香が尋ねて、もう一度尾上の名を呼んだ瞬間、水色の光に包まれた。光が晴れると、そこにはウルフ・フォレストが立っていた。

「！？…あ！」

姫香は右腕にリングが付いていることに気づく。

『うおおおおおお！…！』

ウルフ・フォレストは姫香が居るほうとは逆の方へ走って行った。



「あれは、まさか……」

姫香はそう呟いた。

第40話 植木職人は月に吠える 後編（後書き）

うーん、何か今回、説明文だらけな気がするんですけどよね…。

次はVSウルフです。

それではおやすみなさい）・ー（ z z z

## 第41話 ウルフ 怒りの咆哮！

ドカアアアーン！

イベントをやっている場所の直ぐ上の階で何か壊される音がした。

「何だ？」

イベントをやっている人達はボールを投げるのを止めた。

「見るよ、あれ！」

ゴンタが3階の方に指を指す。みんなはそこに注目した。そこにはウルフ・フォレストの姿があった。どうやらさっきの音は、ウルフ・フォレストが鏡の迷路の壁を壊した音のようだ。そのため壁に穴が空いている。

『ウガアアアアア！』

ウルフ・フォレストは雄たけびを上げる。

「（ウルフ・フォレスト！）」

すると、ウルフ・フォレストがスバル達がいる一階へと降りてくる。

「「うわあ！」「」

ゴンタとキザマロはすぐさま非難する。イベントに参加していた人達も悲鳴を上げながら逃げ始める。

「こんな所で大暴れされたら大変だ！ウォーロック！電波変換だ！」  
『おう！』

スバルは近くの柱の物陰に隠れる。勿論近くに人は居ない。ウルフ・フォレストから非難してるためだ。

「電波変換！星河スバル オン・エア！」

スバルは電波変換し、ウルフ・フォレストにロックバスターを放った。

『！！』

ウルフ・フォレストはすぐさまロックバスターを感知し、横に素早く避けた。

「やめろ！ウルフ・フォレスト！」

ロックマンはロックバスターをウルフ・フォレストに向かって構えている。

その頃ジェミニ・スパーク

ジェミニ・スパークはロックマンが戦っている場所から遙か上の場所から戦いを観戦している。

「現れたねロックマン」

Wは一言そう呟いた。

ウルフ・フォレストはロックマンに向かって飛び掛る。

「バトルカード！プレデーション！ワイドソード！」

ロックマンは左手をワイドソードに変え、ウルフ・フォレストの攻撃を空中で一度受け止める。2人はその後互いに離れ地面に着地する。

『ウオオオオオオ！！』

ガキン！ガキン！ガキン！ガキン！

ウルフ・フォレストは両方の爪でロックマンを何度も攻撃する。ロックマンは全てワイドソードで受け止める。

『どうなってやがんだ？前よりパワーが上がってやがる！？』

ウルフ・フォレストが壊した壁

「十郎様！十郎様！」

姫香が鏡の迷路から出てきてウルフ・フォレストを探す。

ガキン！ガキン！ガキン！ガキン！

「！？」

金属同士がぶつかるような音に反応し、吹き抜けの部分から下を見降ろす。

「…十郎様！」

姫香はウルフ・フォレストを確認すると、下の階へと降りる階段へと向かう。

ウルフ・フォレストが爪で横から攻撃する。

「うっ！」

ロックマンは受け止めたが重い一撃だったため、受け止めきれず、電波望遠鏡がある後ろへ吹っ飛び壁に激突する。

『アッパークロー！』

ウルフ・フォレストは直ぐにロックマンに近づき下から爪を思いっきり振り上げる。だがロックマンはジャンプして避けた。ウルフ・フォレストの攻撃はロックマンの代わりに他の物に直撃した。

「…ああ！！電波望遠鏡が…」

ロックマンがウルフ・フォレストの方を見ると、無残な姿となった電波望遠鏡が散らばっていた。

『よそ見るな！来るぞ！』

「！？」

すると、ウルフ・フォレストが飛び掛ってきた。

「ショックノート！」

『ぐはっ！』

いきなりウルフ・フォレストに数発の音符の攻撃が当たった。ウル



フ・フォレストはそのまま吹っ飛んでいく。

ロックマンは音符が放たれてきた方へと向く。すると、そこにはハープ・ノートの姿あった。

「ウフフ。ハープ・ノート推参！…何をもたもたしてるの、ロックマン！はやく止めないと大惨事になるわよ！」

ロックマンに一喝入れる。

「分かってる！」

ロックマンはウルフ・フォレストの方へと向き直す。

『ガルルルルル！』

ウルフ・フォレストは攻撃態勢へと入る。

「バトルカード！プレデーション！ワイドソード！」

ガキン！

ウルフ・フォレストの片方の爪の攻撃をワイドソードで受け止める。

「マシンガンストリング！」

ハープ・ノートはウルフ・フォレストに弦で動きを止める。

『…』

「今よ、ロックマン！」

ハープ・ノートが合図を送る。

「バトルカード！プレデーション！キャノン！コレならどつだ！」

ロックマンはキャノンを放つ。

ドカアアアン！！

ウルフ・フォレストに当たると爆発を起こす。

『ぐわあああああ！！』

「とどめだ！バトルカード…！！？」

するといきなりロックマンの足元に雷が落ちてくる。ロックマンはジャンプして後方へ下がり避ける。

「！？」

ハープ・ノートの方にも雷が落ちてくる。ハープ・ノートは後転して避ける。

ロックマン達は雷が放たれた場所を見る。

「ジェミニ・スパーク！」

そこにはジェミニ・スパークが立っていた。

『ウルフ！お前の力はそんなものじゃないだろう。さあ、コレを見るが良い！』

WとBはお互いの手をかざし、電気で丸い球体を作った。

『！！…ウガアアアアア！！』

ウルフ・フォレストは球体を見て雄たけびを上げる。

『やばいぞ、スバル！』

「えっ？」

『ウルフは満月を見ると、さらに強暴になっちまうんだ』

「満月？」

ロックマンはウォーロックを見た後、ジェミニ・スパークの方へ向き直る。

ジェミニ・スパークは球体を段々大きく、放っている光を強くしていった。

「！？…そうはさせない！」

ロックマンは球体に向かってロックバスターを放つ。

『「もう、遅い！」』

WとBは球体を置き去りにしてロックバスターをジャンプして避け

た。ロックバスターは球体に直撃する。すると球体は粉々に砕け散った。

『グガアアアアアアア！！』

ウルフ・フォレストは体の色が緑色になり、爪と尻尾が先程より長くなる。

『「フハハハハ！」』

ジェミニ・スパークは着地して笑い出す。

『さあ、ウルフよ！野生の動くままに暴れるが良い！ハハハハハ！』

Bがそう言うと、2人は周波数を変えて姿を消した。

『グガアアアアア！！』

ウルフ・フォレストがロックマンに飛び掛る。

「くっ！」

ロックマンは後方へ下がって避ける。ウルフ・フォレストの爪は、地面に当たる。すると、大きなクレーターができる。とてつもない威力だ。

『ワイドクロー！！アップークロー！！』

ウルフ・フォレストは爪の攻撃で、ショッピングモールの彼方此方を壊し始める。

「どうしちゃったの、あいつ?」

『完全にぶち切れてやがる! ああなっちまったら、何もかも破壊しちまうまで止まんねえぞ!』

ハープ・ノートの問題にウォーロックが答える。

「バトルカード! プレデーション! ガトリング!」

ダダダダダダ!

ロックマンはウルフ・フォレストにガトリングを放つ。弾はもの凄い速さでウルフ・フォレストに向かっていくが、ウルフ・フォレストはそれよりも速いスピードで右から左へ、左から右へと避ける。

「…速い!」

「ショックノート!」

ハープ・ノートはショックノートを飛ばすが、ウルフ・フォレストの爪に粉碎される。

『ウガアアア! ワイドクロー!』

ウルフ・フォレストは爪を横に振り、衝撃波を2人に放つ。

「うわああああ!」

2人は衝撃波を避けられず喰らってしまい後ろへ吹き飛ばす。ハープ・

ノートは地面へと倒れるが、モロに喰らったロックマンは後ろの壁に激突する。ロックマンは崩れ落ちる。

「はあ…はあ…だめだ、倒せない…」

ロックマンは半場諦めかけていた。ウルフ・フォレストはその間にもロックマンにゆっくりと近づいてきている。するとウルフ・フォレストとロックマンの間に姫香が割って入る。

「もうやめてください、十郎様！」

『ガールルルルル…』

ウルフ・フォレストは足を止める。

「十郎様はそんな酷い事ができる方ではありません！…優しいいつもの十郎様に戻ってください！！」

ドクン！

## 尾上の精神の中

今度はウルフではなく尾上が茨に繋がれていた。すると、姫香の言葉で目を覚ます。

「ハッ！お嬢さん！…俺はいつてえ何を？」

ウルフの精神から開放される。

『何、まただと！？何故こいつは俺の精神支配が効かないんだ！？』

「…こいつはみんなてめえの仕業か！いい加減、俺の体から出て行きやがれえ！！！」

尾上は自力で茨を引きちぎる。

その瞬間、ウルフ・フォレストは眩い光に包まれる。

『うわあああああ！！』

光が晴れるとそこには尾上の姿があった。尾上は倒れこむ。

「十郎様！」

姫香は尾上に近寄っていく。

ウルフは尾上とは少し離れて場所に現れる。

「あれって、さっきのおじさん!？」

『嘘だろ!？あの人間、精神力で電波変換を解除しやがった!』

ロックマンとウォーロックは尾上を見てそう口にする。

『スバル、今がチャンスだ!』

ロックマンとハーブ・ノートは立ち上がり、攻撃する態勢に入る。

「バトルカード！プレデーション！ヘビーキャノン！…シユート！」

「パルスソング！」



ロックマンはへビーキャノンを、ハーブ・ノートはハート型の音波をウルフに同時に放つ。

ドカアアアーン!!

『うわああああああああああ!!』

ウルフに攻撃は直撃し爆発が起こる。

「やったー!」

「イエイイ!!」

ハーブ・ノートはガッツポーズをする。

『くっ! やりあがったなあ、覚えてやがれえ!!』

ウルフは一筋の光となって何処かへ飛んでいった。

「十郎様! 十郎様!」

姫香は尾上を揺すって起こそうとする。

「…ハッ! …すまねえ、お嬢さん! 心配掛けちまって」

尾上は目が覚めると、すぐさま姫香に土下座をした。

「十郎様…」

姫香は首を横に振り微笑んだ。

ロックマン達はその光景を遠くから見ていた。

「それじゃあ、行くわ。またね」

ハーブ・ノートはそれだけロックマンに言うと、何処かへと飛んでいった。

『いつものめんどくさいのが来そうだ…俺たちも早く行こうぜ？』

「うん…欲しかったなあ…」

ロックマンは無残な姿になった電波望遠鏡を見てそう呟いた。

『…どうしたんだ、スバル？』

「何でもないよ」

ロックマンはウォーロックの質問を軽くあしらうと、自分への家へと飛んでいった。

第41話 ウルフ 怒りの咆哮！（後書き）

この話に2日も掛けてしまった…（――…）

…それにしても姫香の声優って豊口めぐみさんなんですよね…今のポケンのヒリの声とかやってますね。…ハッ！また書きちゃってる（――）

…こんな作者ですが、これからもよろしくお願いしますm（――）

m

第42話 オヒュカス・クイーン(前書き)

題名にオヒュカス・クイーンと書いてるのに出てこない……(……)

## 第42話 オヒュカス・クイーン

ある日、ロックマンが電波ウイルスとコダマウンのウェーブロードで戦っていた。その場に何故か委員長がおり、戦ってるロックマンを見守っていた。

「頑張ってください！ロックマン様！」

微笑みながらロックマンを応援する。

「消えろ、電波ウイルス！」

ビリエース2体、クロッカー2体をロックバスターを放ってデリートする。

「ふう…！？うわあ！」

ウイルスをデリートして安心してしていると、横から1体のビリエースが周波数を変え現れ攻撃される。ロックマンはいきなりの事に避ける事が出来ず、電撃を喰らってしまい、地面に落ちて仰向けに倒れる。

「ロックマン様！…！？」

委員長がロックマンが落ちた場所に行こうとした時、ロックマンの近くに誰かが現れる。そのため委員長は近くのビルの物陰に隠れる。

「大丈夫！？」

ロックマンの近くに居たのはハーブ・ノートだった。

「ハーブ・ノート……」

「さあ」

ハーブ・ノートは倒れているロックマンに手を差し伸べる。ロックマンはその手を使い立ち上がる。

「…誰よあれ？」

委員長がハーブ・ノートを見て呟いた。

「！？危ない！」

「えっ？」

すると、いきなりハーブ・ノートにビリエースの電撃が落ちてくる。

「くっ！」

ロックマンはハーブ・ノートをかばって攻撃を受ける。しかし、ロックマンには傷一つない。それもそのはず、たかがビリエースなどの下級ウィルスの攻撃じゃ電波人間にはそこまでダメージを負わせる事はないからだ。

「…何よ…あれ!？」

委員長はロックマンがハーブ・ノートをかばう姿を見て段々表情が悪くなっていく。

「大丈夫？」

「うん…ありがとう」

ハーブ・ノートは少し照れながら礼を言った。

「どういたしまして。それじゃあ行くよ！」

「ええ！」

そう言つて2人は周波数を変え、残りの電波ウィルスを退治しに行った。

「何よー！！？」

姿がないハーブ・ノートに向かって委員長が叫んだ。

そして時は進んで委員長の家

「……お帰りなさいませ、お嬢様!」「……」

委員長が帰つて来ると、たくさんの使用人達が頭を下げ出迎えている。委員長は使用人たちによって出来ている間道をなんなく通っていく。

「…パパは?」

委員長が歩きながら使用人達に質問すると、その中一人が答える。

「アゼルバイジャンに」

「ママは?」

「カンクーンに。お嬢様、夕食は?」

すると、今度は先程答えた使用人が委員長に質問する。

「…いない」

そう言うと、自分の部屋へ向かう。



## 委員長の部屋

委員長は部屋へ入ると直ぐにベッドに倒れこむ。そしてベッドの近くにある写真立てを見る。写真は、前日、ロックマンが一度部屋に来た時に撮った時の写真だった。

委員長はその写真立てを抱きしめる。すると、ロックマンと一緒に居たハープ・ノートの事が頭に浮かぶ。

「ッ!?!」

そして委員長は起き上がる。

## 次の日登校中 スバル

スバルは下を見て、嫌そうな顔をしながら歩いて向かっていた。

バン！

「うわ!？」

すると、いきなり委員長に背中を叩かれた。あまりの事に声を上げてしまった。

委員長はスバルを追い越し、少し横を向き、スバルの方を見る。

「もっとしゃんとしなさい」

それだけ言うと先へと歩いていった。

「…委員長?」

キーン・コーン・カーン・コーン！

授業が終わり、休み時間。ちなみに亜夢は今日仕事の都合で休みだ。

キザマロはゴンタの席にある雑誌を持ってやってきていた。

「それですね、オリンピッククオーデトリアムのドッレシングルームでは…」

「うん、うん」

キザマロが一指し指を立て、雑誌を見ながらゴンタに何かを話していた。ゴンタはキザマロの話を頷きながら聞いている。

「ゴンタ！」

すると、後ろから委員長に声を掛けられる。

「は、はい…」

ゴンタは恐る恐る振り向く。

「あなた今日、花の水やり当番でしょ!？」

「あ、いけねえ！」

委員長に言われると、席を立ち、すぐさま教室を出て行った。

キザマロがゴンタの怒られてる姿を見て、雑誌で顔を隠しながら笑

う。

「キザマロ！」

「は、はい！」

キザマロが返事をする、委員長がキザマロの雑誌を取り上げる。

「こんな雑誌、学校に持ってきちゃだめじゃない！没収よ」

「あ…はい…」

キザマロはそう言われると、下を向いて答えた。

そして

「廊下を走らない！」

「そこ！騒がない！」

「静かにしなさい！」

ピーーーーー…！

「オフサイド！」

「ヴァイオレーション！」

「アウト・オブ・バウンズ！」

今日一日どんな内容にでも注意していた。…どうやら機嫌が悪いようだ。

「「「はあ」」」

スバル、ゴンタ、キザマロはそんな委員長を見て溜息をついていた。

「今日の委員長、いつにも増して厳しいね」

「どうも機嫌が悪いようですね…」

「…これじゃあ、堪らない…」

「何か無いのかよ、委員長の機嫌を良くする方法」

3人はそう言って暫く考えていた。

「…2つあります」

キザマロが指を2本立ててスバル達に言った。

「一つはロックマンに来てもらう事」

「えっ!?!?」

スバルはキザマロの言葉に反応する。

「まあ、それは無理なので2つ目。響ミソラのコンサートに行く事」

「おお!」

今度はゴンタが反応する。どうやらゴンタもコンサートに行きたいようだ。

すると、キザマロがトランサーを開けてコンサートが今日あるのかどうか調べ始める。

「あ、今日は公開録画があります」

「チケットは?」

「…先着順です」

「ちょっと!」

「」「」「」「」「」「」

すると、委員長がキサマロの後ろから声を掛ける。

「何をぐずぐずしているの？次は教室移動よ！」

委員長が仏頂面で言う。

「「「委員長！」」」

3人が一気に委員長に近づく。

「な、何よ!？」

少し驚いたのか、少し後ずさる。

「今日の放課後、響ミソラを見に行きましょう！」

「えっ？響ミソラ!？」

手を叩いて仏頂面から笑顔に変わる。

その頃ミソラのライブ会場 楽屋

ミソラは楽屋にあるソファーに座り、イヤホンをウエーブスキャナーに繋いで音楽を聴いていた。すると、マネージャーの金田が入ってきた。

「おい、ミソラ！今日のオープニング衣装だぞ。…ジャジャーン！」

そう言っつて、少し小さめの白いフリフリがついた派手な衣装だった。

「……やだ、それ」

ミソラは目をパチパチさせて眺め、そう言った。

「最初はデビュース曲歌っつて言っただる？」

「だからっつて衣装まで！」

「デビュー当時を振り返るのが、今日のコンサートのテーマだ。着る」

「やだ」

「着る！」



「やだ！」

「着ろ！！！」

「やーだ！！！」

「着ろつてーの！！！！！」

「やだつてば！！！！！」

段々言い争いがエスカレートしていく。

ライブ会場 外

ライブ会場にはもう既に、たくさんの人が行列をつくって並んでいた。その光景をライブ会場の上からハーブが眺めていた。

『暇ね…』

静かにそう呟いた。

その行列にはスバル達も並んでいた。行列の真ん中あたりの位置だ。

「おまえ、ミソラちゃんのファンじゃなかったろ？」

ゴンタがスバルに聞いた。

「最近、ちょっと気になって」

「そうだよな〜！、やっぱりミソラちゃん良いもんな？」

ゴンタはスバルの言葉聞いて笑顔で言った。

「ねえ…これでほんとに入れるの？」

行列に並んでいる人の数を見て、キザマロに尋ねる。

「入れます！入れますとも！」

キザマロはトランサーを使って入れる確率を計算している。その目

真剣さから、絶対に入るってやるといふ気迫が伝わってくる。

「入れなかつたら大変だね」

「大暴れするかもな」

スバルとゴンタが委員長に聞こえないように話した。

「…本当に暇なのね、人間って」

並んでる人達を見下ろしながら、呟いた。

「……！？誰？」

ハープは後ろから電波体の周波数を感じたため、後ろに振り返る。すると、紫色の、蛇を巻いている女の電波体が周波数を変え、現れた。

「あら、久しぶりね、オヒュカス」

ハープはこの電波体と知り合いのようだ。

『任務はどうした、ハーブ？』

『それがねえ…ちょっとね…』

ハーブはオヒュカスから目を逸らす。

『ウォーロックは？』

『私じゃ倒せないわよ！』

少し逆切れしてオヒュカスに言った。

『アンドロメダの鍵は？』

『これでも一生懸命やったのよ』

ハーブはそっぽを向く。

『フッ、どうだか』

オヒュカスは少し鼻で笑う。

『だって、他のみんなだってロックマンに倒されちゃったのよ！』

オヒュカスに鼻で笑われたことにイラッときたハーブは怒ってそう言った。

『ロックマン？』

『ウォーロックが地球人と電波変換した姿!』

『電波変換…』

オヒュカスは静かに呟く。

『ねえ、こんな星ほっといたってどうって事ないわよ』

ハーブの今の言葉は、ミソラの事を思ってからか、地球を破壊しないで欲しいという意味を込めて言ったのだろう。

『お前の職務怠慢、上に報告しておくぞ』

『あなたもやってみれば分かるわよ!』

『ああ、やらせてもらおう。私と波長の合う地球人を探してな』

オヒュカスはそう言うと、コンサートを見るために集まっている行列の方に視線を向ける。

「只今より、開場しまーす!押さず、焦らず、騒がずご入場下さーいー!」

係員の人が出てきて見に来ている人に言い放つ。すると次の瞬間、凄い勢いで会場の中へ入ろうとする。だが、みんながみんなそう思っていると思うように前に行かず、満員電車のようなギューギューの状態になっている。

「少しでも前の席に座るわよ！」

「はい……」

「お……う」

キザマロ、ゴンタは返事はしたものの、全然前に進まない。

その頃 楽屋

2人はまだ言い争っていた。

「着てくれよ！」

「やだ！やだ！！やだ！！！！」

そしてお互い沈黙が流れる。すると、楽屋にアナウンスが流れる。

『開演、15分前です』

それを聞くと、金田の口が開く。

「じゃあ、代えの衣装があるがそっちを着るか？」

「どんな？」

「これだ！」

すると、色んな箇所にはリボンが付いている水色の水着をミソラに見せた。

「！？それは…！！」

声にならない声を発して、ミソラは後ずさった。

「私的にはなかった事にしているあの！」

「オールアイドル寒中水泳大会で着た衣装だ！」

「そっきたかー！！」

ミソラは頭を抱えて悩み始める。

「フッフッフ。さあ、どっちだ？」

その頃オヒュカス達

「フッフ、見つけた」

「えっ？誰を？」

オヒュカスは何も言わずに一筋の光となって会場の中へと入っていた。



## スバル達

スバル達は、何とかライブ会場の中へ入ることが出来た。位置は後ろから数えたほうが早い、真ん中辺りの場所だ。

「座れて良かったな！」

「良くないわよ。こんな後ろで」

ゴンタが言った後に委員長がゴンタに言った。

「まあ、まあ、入れないよりずっとましです！」

キザマロがフォローに入る。すると、委員長が席を立ち上がる。

「私、ちょっと化粧室行ってくるから」

「ええ！？委員長化粧してるの？」

…ゴンタは化粧室の意味が分かっていないようだ。

「ゴンタ君…まあ、まあ」

『スバル…』

すると、小声でウォーロックがスバルを呼んだ。

「何？」

「どうした？」

ウォーロックに返事をすると、ゴンタがスバルに気づいた。

「あ、ううん。僕もちよつと化粧室に行ってくる」

スバルは何とか誤魔化して席を立て、化粧室に向かった。

「あいつも化粧してんのか？」

「…まあ、まあ」

キザマロはもう呆れてこれ以上言葉がでなかった。

「何なの？ウォーロック」

スバルは化粧室に向かう途中で人が居ない事を確認すると、ウォーロックに話し掛ける。

『近くにFM星人がいる』

「えっ？ハーブじゃなくて？」

『この波長…俺の識別が確かなら、厄介な相手が現れた』

## 女子トイレ

委員長は鏡を見ながら髪を整えていた。

「……よし…」

そして、鏡に背を向ける。すると、オヒュカスが鏡に映る。

「えっ？」

委員長は振り向くが、鏡には自分以外映っていなかった。気のせいだと思い、トイレを出ようとするがまたオヒュカスが鏡に映る。そして幻覚だと思いながら鏡の方に目をやる。

「…！？何なの！？」

今度はオヒュカスは映っていた。しかも数体鏡に映っていた。

## 第42話 オヒュカス・クイーン（後書き）

…もう、ゴンタは頭が悪いなあ。

それにしても、このときのアニメでのミソラの「やだ！」って言い  
面白かったなあ（笑）

あ、オヒュカス・クイーンは次回です。…変なサブタイですが、  
大目に見てやってくださいm（――）m

それでは、感想待ってます

第43話 愛しのロックマン様？ 前編（前書き）

サブタイに？って良いのかな？（ー；）

### 第43話 愛しのロックマン様？ 前編

「2人ともなかなか帰ってきませんねえ」

「何化粧してんだらうな？」

キザマロとゴンタは自分の席に着いて2人が帰ってくるのを待っていた。

ブーーーーー！

昔の映画館に、始まる事を知らせる音があるときがある。その音が会場全体にライブが始まる事を知らせる。

「あ、始まります！」

「ミ・ソ・ラちゃーん！！」

ゴンタがミソラの名前を呼んだ。その瞬間、会場全体から声が湧き上がる。

ゴー・ゴー・レッツゴー！レッツゴーミソラ！！　ゴー・ゴー・レッツゴー！レッツゴーミソラ！！

それが湧き上がって数秒後、ライトがステージを照らし出す。そしてステージそこからミソラが愛用のギターを持ってやってくる。…服はいつものピンクのパーカーで黄緑色の短パンを穿いている。

…ステージそでは金田が、ミソラが嫌がってた服で腕と足、口を

縛られていて放置してある。どうやらミノラの仕業らしい。

すると、ミノラの歌の音楽が流れ出す。

「」ミノラちゃん！！」「」

キザマロとゴンタはもうライブに熱中している。

『 この世界中 あふれてる まだ知らない 風景 すべては見えないこと わかってはいるけど

誰かのため とは違う 自分だけに 誇れる 何かを探している  
この胸を満たす

時々いじわるな 風に押し戻されて

遠く 『



そして委員長は

『さあ、私と電波変換するのだ』

委員長はその一言を聞いて数歩後ずさる。

「い、いや…助けて…ロックマン様!」

『ロックマン? 私とお前の望みは一緒らしいな。電波変換すればロックマンに合えるぞ?』

オヒュカス委員長を誘惑する。そして微笑む。

「!?!」

委員長はその言葉を聞いて心が揺らぐ。

女子トイレの外

「だめだって! ちょっとまってよ、ウォーロック!」

スバルは無理やり女子トイレに連れて行くこととするウォーロックを

喰いとめている。

ウォーロックはトランサーの中からスバルを引っ張っているため、入ろうとするとスバルも入ることになってしまう。スバルはそうならないように必死に踏ん張っていた。

「ここ、女子の化粧室だよ！」

『だからどうした!?!』

「入れないよ！」

『そんなこと言ってる場合か!』

ウォーロックはスバルを説得する。だが、スバルも負けじと入ろうとしない。

その頃、委員長はオヒュカスに洗脳されていた。委員長の目にはもう光はなく、暗い目をしていた。

「電波変換 白金ルナ オン・エア」

委員長は紫色の光に包まれた。そしてオヒュカスと融合し、蛇の姿をして両腕蛇を巻いている、蛇使いの姿へと変身した。

「とにかく、中を調べるにしてももう少し方法を」 『中に入れ!』

「」

スバルはもう、ウォーロックの力に耐えられなくなり、女子トイレの中へと連れて行かれてしまった。

ドン!

そして誰かとぶつかり尻餅をつく。

「うわ!...!ごめんなさ...!うわあ!?!?」

スバルがぶつかった人に対して謝ろうと目の前を見ると、そこには委員長が電波変換した姿があった。

『フフフフ!』

すると、委員長は自分の尻尾でスバルを叩いた。

「くっ!」

スバルは1メートル程吹き飛ばされ、地面に倒れて気絶する。その

後、委員長は周波数を変えて姿を消した。

『おい、スバル！スバル！！』

ウォーロックは彼の名を何度も呼んだが、スバルの反応は無かった。

### その頃

ミソラは一曲目を終わらせていた。

「ちょっと、デビュー当時を懐かしんでみました。次は……えっ！  
？」

ミソラが喋っていると観客の様子がおかしくなる。観客の視線が自分の横を見ていることに気づき、その方向を見ると、委員長が電波変換した姿、オヒュカス・クイーンの姿があった。

「アトラクションか？」

「何の演出でしょうか？」

ゴンタ、キザマロがオヒュカス・クイーンを見てそう言った。

『ゴルゴアイ！』

すると天井に向かって、オヒュカス・クイーンが目から赤いレーザーを放つ。レーザーは天井の照明に直撃する。その照明は黒い煙を上げる。

観客はそれを見てパニック状態に陥る。

「あれ、化け物ですよー！！」

「うわああー！！」

ゴンタとキザマロ、観客達は悲鳴を上げて会場の出口の方向へと逃げ出す。

『スネークレギオン！』

オヒュカス・クイーンは両腕の蛇を前方へ飛ばし、会場を壊し始める。

「やめてよ、もう！私のライブ中に何するの！？」

ミソラはオヒュカス・クイーンに言い放つが聞こえていない。

「逃げるんだ、ミソラ！」

「え？ちよっと！」

すると、ミソラの後ろに縛られていたはずの金田がやってきた。そして、ミソラの腕を引っ張りステージまでから楽屋の廊下へ行き、金田の車が置いてある駐車場へと向かっていく。

「金田さん、手を離して！」

「離すもんか！お前に何かあったらどうする！？もっともっと稼いでもらわなきゃならないお前に！」

「もっ…」

ミソラはそんな事を言った金田に呆れていた。

ライブ会場 外

オヒュカス・クイーンが周波数を変え、ライブ会場の上に現れる。下では観客がオヒュカス・クイーンを恐れて逃げ惑っている。

『さあ、どうした！？出てこいロックマン！』

ウーーーーー！ウーーーーー！ウーーーーー！

ガチャ！

「御用だ御用だ！」

すると、サテラポリスのパトカーがやって来た。そして、中から五陽田警部とライセンス、他のサテラポリスの人達が出てきた。

630

その頃 駐車場

ブローブローブ ブローブローブ ブローブローブ

金田とミソラは車に乗って、エンジンをつけようとしていた。ちなみに、この時代の車は鍵が無くても、ハンドル横のボタンを押すだけでエンジンがつくようになっていた。先程から金田はそれを何度

も押しているがエンジンがつかない。

「あれ？エンストか？」

金田は必死に車のエンジンをつけようとしていた。その頃後ろの席では、ミソラとハーブが小声で話していた。

『で、どうするっ？』

「モチ、戦うわよ」

『了解』

ブロロロロロ！！！

そしてやっとの事でエンジンが掛かった。

「よし、逃げるぞミソラ！…っってええ！？」

金田がミソラが居るはずの後ろを振り返ると、ミソラの姿はそこには無かった。

ミソラは駐車場の人気の無い場所へと移動していた。



「電波変換！響ミソラ オン・エア！」

そして、ミソラはハーブ・ノートへと電波変換した。

その頃 スバル

『スバル！』

「…うっん…」

スバルはウォーロックの呼び声でやっと目を覚まし、起き上がる。

「…あのFM星人は？」

『上で暴れている…！』

スバルが気絶していた間にオヒユカス・クイーンが何処へいったのか、ウォーロックが簡単に説明する。

「電波変換！星河スバル オン・エア！」

第43話 愛しのロックマン様？ 前編（後書き）

何か駄文な気がする…（-\_-;）

ていつか場面が変わるのが多っ！

第44話 愛しのロックマン様？ 後編

五陽田ひきいるサテラポリスは今、オヒュカス・クイーンに攻撃しようとして、ウィルスバキームを使って吸い込もうとしていた。だが、電波人間のオヒュカス・クイーンに電波ウィルス用のウィルスバキームは全く効いていなかった。

「五陽田！ 奴には全く効いていないぞ！？」

「怯むなライセンス！」

ライセンスと五陽田警部がそう言っていると、オヒュカスが不敵な笑みを浮かべる。

『フフフフ！ ゴルゴンア…！？』

オヒュカス・クイーンがゴルゴンアイを放とうとしたときに、突然オヒュカス・クイーンの横からロックバスターが飛んでくる。勿論ロックマンの仕業だ。

『……………』

「……………」

オヒュカス・クイーンとロックマンは睨み合っていると、周波数を変えウエーブロードへと場所を移動した。

「消えた！？」

一人のサテラポリスの職員が言った。

「違う。電波の中で戦ってるんだ」

「（頑張れよ、ロックマン）」

五陽田が言った後に、ライセンスが心の中で呟いた。

ライブ会場 外のウェーブロード

『ようやく来たか、ウォーロック』

『オヒュカス！やはりか！』

オヒュカス・クインとウォーロックは睨み合いながら言った。

『アンドロメダの鍵を…』

ドクン!

「…ようやく会えましたわ、ロックマン様!」

オヒュカス・クイーンの様子が急に変わった。

『貴様、黙ってる!』

「ロックマン様!」

オヒュカス・クイーンはそう言って、ロックマンに向かって走って行く。

「うわあ!」

オヒュカス・クイーンが近づいて来たため、ジャンプしてを避ける。

「逃げないでー! ゴルゴンアイ!」

空中にいるロックマンにレーザーを放つ。

「うわあ!?!」

ロックマンは何とか体をくねらせて避ける。そしてウェーブロードに着地する。

「どっして? そばに居て欲しいのに!」

「…ウオーロック! あのFM星人と前に何かあったの?」

オヒュカス・クイーンのおかしな様子を見てウォーロックに尋ねる。

『違う！あれは電波変換された人間の意志だ。オヒュカスと人間の意志が融合している』

「そう、私はオヒュカス・クイーン！ロックマン様とアンドロメダの鍵を必ずこの手にしてみせる！」

そう言っつて決意を固めるオヒュカス・クイーン。

「何か誰かに似てる気がする……」

そんな姿のオヒュカス・クイーンを見てあの人を思い浮かべる。そのあの人が電波変換しているのだが、気づいていないロックマン。

『気を抜くな！来るぞ！』

ウォーロックが言った瞬間に

「スネークレギオン！」

オヒュカス・クイーンが両腕に巻き付いている蛇を一体、ロックマンへと飛ばす。

「ショックノート！」

だが、その蛇はショックノートに粉碎されてしまう。

「ハーブ・ノート！」

ハープ・ノートはロックマン達が居る、となりのウェーブロードに立っていた。

「出たわね！この泥棒ネコ！」

「な、何よ！？」

「憎いわ！ロックマン様と一緒にチャラチャラしているお前が憎い！」

そう言つてオヒュカス・クイーンはハープ・ノートへ飛び掛る。

「ショックノート！」

ハープ・ノートはスピーカを出してそこから音符を飛ばす。

「クイックサーペント！」

だが、オヒュカス・クイーンは空中で回転しながら、ハープ・ノートへ突っ込んでいく。このときにショックノートは弾かれて消滅する。

「きゃあああああ！！」

ハープ・ノートはオヒュカス・クイーンの攻撃がモロに喰らい数メートル吹き飛ばす。

「ロックバスター！」



「きゃあ!?!」

ロックマンはオヒュカス・クイーンにロックバスターを放つ。オヒュカス・クイーンは喰らってしまい、一度のけ反る。

「何をするの、ロックマン様!?!こんなに…:こんなに慕いしているのに!」

オヒュカス・クイーンはそう言うと、ロックマンの方に向かっていく。

「ロックバスター!えい!」

ロックマンは数発オヒュカス・クイーンに繰り出す。だが、右へ左へとオヒュカス・クイーンがもの凄いスピードで全ての弾を避けていく。

「速い!?!…:うわああああ!」

オヒュカス・クイーンはロックマンの一瞬の隙を伺い、ロックマンの体に自分の体を巻きつかせる。

「やっと捕まえた、ロックマン様。さあ、二人でアンドロメダの彼方まで旅立ちましょう。ウフフ!」

「マシンガンストリング!」

すると、ハーブ・ノートがギターの弦を飛ばし、オヒュカス・クイーンの体に巻きつかせる。

「くっ！」

「この…離れなさい！」

ハーブ・ノートがオヒュカス・クイーンを巻きつかせた弦を引つ張ると、オヒュカス・クイーンはロックマンから離れる。

「くっ！また私の邪魔をして！許さない！」

「邪魔したのはそつちでしょ！」

2人は一筋の光となって、互いに何度もぶつかり合う。

「ゲホッ！ゲホッ！」

ロックマンは膝をつき、少し苦しいのか何度か咳き込む。

『オヒュカスは元々、戦闘力の高いFM星人だ。それが今、電波変換した人間と100%に近く同調している。全力で行け！』

「分かった！バトルカード！プレデーション！プラズマガン！」

ロックマンは立ち上がり、左手をプラズマガンに変え、オヒュカス・クイーンに放つ。

「きゃあ！酷いわ、ロックマン様！」

オヒュカス・クイーンには当たったものの、あまり効いていない様子だ。すると、オヒュカス・クイーンがロックマンの方へ向かっていく。

「マシンガンストリング！」

だが、ハーブ・ノートがマシンガンストリングで動きを止める。

「くっ！」

「今よ、ロックマン！」

「ありがとう、ハーブ・ノート！」

2人は目を合わせて言う。

「！？何よこの展開！」

オヒュカス・クイーンは縛られたまま暴れだす。

「バトルカード！プレデーション！ファイアバズーカ！」

ロックマンはオヒュカス・クイーンに炎の弾を繰り返し放つ。

ドカアアアアン！！

「こんなの嫌あああああ！！！」

爆発してオヒュカス・クイーンがそう叫んだ。そして、電波変換が解け、オヒュカスと分離する。

『くっそーー！！！』

オヒュカスは一筋の光となって逃げて行った。

時は進み      ライブ会場の通路

ロックマン達は委員長が気絶しているため通路にを寝かせる。

「…委員長だったんだ」

「知り合い？」

「うん」

「もしかして…スバル君の彼女？」

「ち、違うよー！」

ロックマンはいきなり変な質問をされて少し焦る。

「本当に〜?」

ハーブ・ノートがニヤニヤしながら尋ねてくる。

「本当だよ、ミソラちゃん」

「……じゃあ、私とこの娘と亜夢が仮にスバル君の事好きだとして、  
……恋人として選ぶなら誰を選ぶ?」

「こ、恋人!? ……僕は誰も選べないよ」

ロククマンは少し悩んでそう答えた。

「……それは私達が嫌いって事?」

「そ、そうじゃないよ! ……3人の中で1人を選んじやうと、残りの  
2人が悲しんじやうでしょ? 僕はそんな姿を見たくないから誰も選  
ばないと思う。まあ、確信はないけど。ていうか、3人とも僕の  
事を好きになるなんて事ありえないでしょ」

後半は少し笑いながらハーブ・ノートに言った。

「……そっか。スバル君らしいね」

ハーブ・ノートは微笑みながらそう言った。

「……思ったけど、何で亜夢ちゃんを入れたの?」

「えっ? ……成り行きって奴?」

「あ……そう」

ロックマンはちょっと呆れてしまう。

「それじゃあ、帰るね？」

「うん、それじゃあ」

ハーブ・ノートは周波数を変えてこの場から消えた。

「（…なんであんな質問したんだろう？）」

ロックマンはハーブ・ノートの質問の意味を考えながら電波変換を解いた。

第44話 愛しのロックマン様？ 後編（後書き）

最後の質問は、“彼女？”という質問があつたなあ〜と思ったので  
何となく付け足して書いてみました（笑）

質問の意味は…まあ、だいたい分かりますよね？

…何かミソラの質問でフラグが立ってますね（^| ^:）

…フラグが立ちまくるような生活してみたいなあ〜。まあ、死亡フ  
ラグ以外ですが（笑）

それでは感想待ってます

## 番外編 ちよつとした雑談4

どうもこんにちは。シューティングスターです。

この小説前半（第1章）の最後の雑談です。まあ、第2章でも書き  
ますけどね（笑）

今回は…まず、亜夢ちゃんです。

「……なんで私だけ？」

あ、大丈夫大丈夫、後でちゃんと出てくるから。

「何で今居ないの？」

えーと、スバル君は寝坊でミソラちゃんは撮影だとかで遅れるとか…

「…その辺は作者なんだからどうにかできるんじゃないの？」

まあまあ、良い機会だからちよつと君と話そうと思って。

「…いつも充分話してると思うけど」

いや、2人ではないでしょ？たまには良いじゃない。

「……わかった」

という訳で、次回の最後のFM星人編では、……亜夢ちゃんが活躍  
します！



「…それってネタバレじゃない？」

気にするな。本当はこの頃出てなかったから、活躍できると知って嬉しいんじゃない？（ニヤリ）

「そ、そんな訳ないじゃん！」

（ん？ちよつと凶星か？）

まあ、もうちよつとネタバレすると、3人の中で一番強いのって亜夢ちゃんになるよ。…真の力はまだ出してないって事。

「……」

次回で、亜夢ちゃんにとって嬉しい事もあるよ？

「…どんな？」

「スバル君と距離を縮める《……………》って事になるかな？耳貸して

「…また変な事じゃないよね？」

だから今言つて、許可取ろつとしてるんじゃないか。

「……………わかった」

ゴニョゴニョゴニョゴニョ

「…えっ？…本当に？」

うん、君が良いならそう言う展開にするけど…

「べ、別に嬉しいわけじゃないけど…たまにはそう言うのも良いんじゃない？」

…素直じゃないんだから…。まあネタバレ(?)もこの辺にして、スバル君達を呼びましょうか。

「どうやって？寝坊して遅れてるんじゃない？」

ああ、さっき到着したたつてメールがあっただよ。…ミソラちゃんも一緒にいたいだよ？

「…そうなんだ」

さて、呼びましょうか。スバルくん！ミソラちゃん！

「…呼び方が古いよ。みなさんこんにちは」

「ヤッホー！」

さて、3人集まった事なんでちょっとした遊びをしましょう！

「どんな？」

フッフッフ！それは…この中で誰が化粧したら一番かわいいのかという遊び

「…それって遊び？」

「化粧って…」

「…作者ネタが浮ばなかったの？」

ぐっ！亜夢ちゃん痛いところ突いて来るね…。まあ、何となくやってみたかったから。それではミソラちゃん、亜夢ちゃんスタンバツて。

「はあ！？」

「まだやるなんて一言も…」

なおこれは、作者の権限で強制参加です！

「……」

それではあっちの化粧室でお願いします。

「…この恨みいつか絶対晴らしてやる！！」

亜夢ちゃん何かオーラ出てるって…。

「2人とも大変だな…」

スバル君も後で大変になるかもよ？

「何で？」

後で分かるよ…

そして時は進んで

おお、来た来た。2人ともスツピンもかわいいけど、化粧してもかわいいね！ねえ、スバル君。

「う、うん。2人ともいつもと感じが違うよ！」

「まあ、化粧だからね。いつもとは確かに違うと思うよ」

…ほら、亜夢ちゃん。せつかくスバル君が褒めてるんだから。

「あ、ありがとう」

もう、素直じゃないんだから…。

「うるさい！」

それじゃあスバル君、次君だよ？

「え…ええ！？僕もするの！？」

勿論、この中でって言ったじゃない。

「だからって僕まで　　「いいんじゃない？」　　えっ？」

「私も亜夢と同じで良いと思う。何かスバル君かわいい気がする！」

「だよな？化粧したら絶対似合っつて！」

…ここに来て2人の息が統合した。じゃあ、2人でスバル君を化粧させて上げて。

「「オツケ〜！」」

「…助けてー！！！」

「これをこっつして…」

「こっつがこっつで…」

な、何このテンション？2人が女子高生にしか見えないんだけど…。予想通りだけど…いや、予想を遥かに超えてる。

数分後

「…「これだよしー」」

出来た？

「うん！」

「バツチリ！」

どれどれ……あれ……スバル君似合いすぎなんだけど……。君本当に男の子？

「……ほつといて！」

あ……スネちゃった。

「思ったけどこの中って事は作者もじゃない？」

えっ？何その逆転的発想？

「じゃあ、作者にもやる権利があるよね！？」

……それではまたこちら辺でお開きに 「」「」「させないよ？」「」「何、このハモリ？」

「という訳で作者もやっちゃおう！」

「「おー！」」

スバル君、何か怒ってる？

「怒ってないよ？こんな姿にされた事、全然怒ってないよ？」

「（完全に怒ってる…）」

「じゃあ、覚悟！」

え…ぎゃあああああああああ！

数分後

「わあ〜凄い！」

「見違えたよ」

「スバル君も凄かったけど、作者それ以上だね」

…こんな顔にされて…私お嫁に行けない！

「あれ？そういえば作者って性別男の子？女の子？」

えっ？勿論お…秘密です。

「ええ！？秘密なの！？」

教えません！

それでは今日はこの辺で失礼します

「「「あ、終わらされてる…」「」「」

ほら、速く挨拶して。

「「失礼します！」「」

「…それじゃあ」



番外編 ちよつとした雑談4 (後書き)

どんな顔になったかはご想像にお任せします(笑)

## 第45話 FM王の左腕

### 電波空間

コダマタウン全てを見下ろせる場所の電波空間に、火の鳥、鳳凰のように大きい電波体がコダマタウンから見下ろしていた。

『どいつもこいつも、役に立たない奴らだ。：たかがウォーロックの始末も出来ないなんて呆れるぜ。：FM王もよくこんな奴らを地球に送ったもんだ』

電波体が溜息交じりにそう言った。

『：FM王が地球に派遣した奴らは…キグナス、ハーブ、オックス、リブラ、キャンサー、ウルフ、クラウン、オヒュカス、そしてFM王の右腕雷神のジェミニ。そして後から地球に送られたのが、ヘルクレスと俺だけだったな。にしても、ハーブがまさか裏切るとはな…そう言えばヘルクレスも何処に居るのか分からないんだっけな…』

電波体が電流体の名前と顔を思い浮かべながら、少し考えた。

『そう言えばジェミニは何やってんだ？あいつが居ればウォーロックを始末してアンドロメダの鍵を取り返すのに、そう時間は掛からないと思っていたが…：相当てこずってるようだな。』

だが、問題なし！FM王の新・左腕の俺フェニックスが居れば、ウォーロックを始末し、アンドロメダの鍵を取り戻す事なんて簡単だぜ！』

どうやらフェニックスは、ウォーロックから鍵を取り戻すのに相

当自信があるらしい。そしてフェニックスは、周波数を変えてその場から消え去った。

その頃 スバル

スバルは今、両手に重い紙袋を持って亜夢とコダマタウンの店が沢山立ち並ぶ場所に来ていた。ちなみに亜夢はサングラスと帽子を被り変装している。一応アイドルなので当然だろう。

「何で僕がこんな事…」

「いいじゃん、たまには」

スバルは溜息交じりで言ったのに対し、亜夢はスバルに微笑みを見せて言った。…何故こんな事になったのかと言つと…

時は昨日の学校の帰り道に遡り

スバルと亜夢は下校途中の道で何か話をしていた。ちなみに委員長達は、一応委員長なので、クラスの代表としての仕事を学校に残ってやっていた。

「えっ？買い物と一緒に付いて行って欲しいって？」

「そう、たまには買い物に行きたいなあ〜と思って…」

「…一人で行けばいいじゃない…」

「私、これでもアイドルなんだよ？変装してても変な人にはばれちゃうんだ…。しかも変な人がストーカーだったら、私危ないじゃん。だから、スバル君にはヒーローとして私を守って欲しいの」

スバルは亜夢が言った言葉を頭で整理する。

「…要するに、ボディガードって事？…僕には無理だよ。大一、僕はヒーローじゃないし…」

「私にとってはスバル君はヒーローだよ？それに、ボディガードっていうか、ただ傍に居るだけで良いの。“アイドルに彼氏なんて居る分けない、だからこの子はアイドルじゃない”みたいな感じで変

な人は寄り付かないと思うから」

「その考えちょっと強引過ぎない？それに僕、明日用事が…うっ！」

スバルが亜夢の誘いを断ろうとしたとき、スバルは断れなくなった。理由は亜夢が女の武器、上目使いでスバルを見ているからだ。

「だめ？…一生のお願いだから…」

「うっ！…分かったよ。明日だけだからね？」

亜夢は少し泣き目になりながら言うと、スバルは亜夢の誘いを引き受けてしまう。

『（亜夢ちゃん、演技上手ね）。そう言えば、ドラマにも出てるからそのせいかしら？』

そう、ジャスミンがトランサーの中で思った通り、亜夢はアイドルでありながら、ミソラと同じで何度もドラマに出演している。そのため先程の行動は全て計算なくされた演技だったのだ。

そして現在に至る

「お、重い…」

スバルは今、女の子と買い物に行くに必ずやらされる事、そう、荷物持ちをさせられていた。そのため両手は大量の紙袋で塞がっている。

「（…ハメられた。ボディガードとか言っつて、結局荷物持ち…）」

そう、スバルはまんまと亜夢の策略にハメられたのだ。

「スバル君、次はあっちに行こう？」

亜夢はもの凄くご機嫌だ。スバルはそんな亜夢の後を渋々付いて行った。

そして時は進んで

スバルはあれから2時間ぐらい買い物につき合わされていた。もう、疲れてノックアウト寸前である。

「ちょ…ちょっと休ませて…」

「男の子なんだから、それぐらいで弱音吐かない！」

亜夢の厳しい一言。その言葉を聞いてスバルは溜息をつく。

「そ、そんなに疲れた？」

「うん…」

「…分かった。少しだけだからね？まだ買いたい物あるんだから」

「あ、ありがとう。（まだ買うの！？）」

スバルは礼を言うと、近くにあるベンチに座る。その横に荷物を置き、それを挟むように亜夢が座る。

「はあ、疲れた」

「スバル、大変そうだな？」

すると、ウォーロックがトランサーの中からスバルに向かって言った。

「うん、まあ…」

『御免なさいね、スバル君。亜夢ちゃんの買い物につき合わせちゃ

って』

今度は亜夢のトランサーからジャスミンがスバルに誤った。

「良いんだよ、ジャスミン。確かにちょっと疲れたけど楽しいから……」

「……それにしても楽しそうな顔してないけど？」

「……そりゃあ、荷物持ちばかりじゃ、楽しい顔も出来ないよ」

「……ごめん。スバル君はちょっと待ってて」

亜夢はちよつとやりすぎたと心の中で反省した。そして立ち上がり近くの店へと入っていった。

「……どうしたんだろう?」

『さあな』

ドカアアアアアン!!

『「!?!」』

すると、近くにあるビルが爆発する。そしてそのビルは炎上し、黒い煙がモクモクと上がっていく。

「……何が起きたんだ?」

『!?!?!?!スバル!あの場所から気配を感じるぜ!』



「何だつて!?!まさか、FM星人!?!」

『たぶんな』

すると、スバルは荷物をベンチの上に残し、店の物陰に隠れる。

「電波変換! 星河スバル オン・エア!」

そして電波変換して、ビルの方へと向かって行った。

『うーん、もうちょっと派手でも良かったな……』

ビルの近くのウェーブロードにはフェニックスが居た。先程の爆発はフェニックスの仕業のようだ。

『…そろそろ来る頃かな?』

フェニックスがそう言って後ろを振り向くと、ロックマンがウェーブロードを渡ってきた。

『ウォーロック、待ってたぜ？いや…ロックマン』

『てめえ誰だ！？』

『おっと、こうして会うのは初めてだったな。俺はフェニックス。FM王の左腕だ』

フェニックスが笑って自分の名を名乗る。

『左腕だと！？…まさか、お前がFM王以外に姿を見せないと言われている、あの左腕か！？チツ！厄介な奴が来たもんだぜ』

ウォーロックがフェニックスを見てそう言った後、フェニックスが少し笑う。

『残念だが、俺はお前が思っている左腕じゃないぜ？お前が逃亡した後、その左腕はこの太陽系内で消息が分からなくなった。そのため俺はFM王に新しく左腕として選ばれた』

フェニックスはウォーロックに簡単に説明する。

『そうか、ならてめえを倒すなんぞ余裕だな。見たところ電波変換すらしてねえようじゃねえか』

そう、フェニックスは電波変換していない。なFM星人は、本来の力に比べ3分の1程度の力しか出せない。だから、ロックマン達

はやや有利な立場にある。

『ああ、これは…お前達へのハンデだ』

『言ってくれるじゃねえか。行くぞスバル!』

「うん!」

そう言ってロックマンは戦闘態勢に入る。

『じゃあ行くぜ。 A r e Y o u r e a d y 準備はいいか? G o …行くぜ!』

そう言ってフェニックスとロックマンはお互いに走り出した。

第45話 FM王の左腕（後書き）

うーん、何か後半スバルあんまり喋ってないような…

フェニックスの話は5話ぐらい続くと思います（^-^-）

それでは感想待ってます

## 第46話 音速のフェニックス

「ロックバスター！」

ロックマンは先手を取り、ロックバスターをフェニックス数発放つ。だがフェニックスは宙を舞、華麗に避けて行く。

『遅い、遅い！そんなんじゃ俺には当たらないぜ？』

フェニックスは挑発するようにロックマンに言った。

「くっ！だったら…バトルカード！プレデーション！ガトリング！」

ダダダダダダダダダダ！

『おっと、さっきより早いみたいだな。だが…はっ！』

フェニックスはガトリングの弾を先程よりも速いスピードで避けていく。

「！？速い！」

『そりゃそうさ。…俺はFM星で音速のフェニックスと呼ばれた程だからな。今度はこっちから行くぜ？ファイアーカッター！』

フェニックスは羽ばたき、小さな火のカッターをロックマンへ飛ばす。そのカッターは凄く速さでロックマンに向かっていく。

「！？くっ！」

ロックマンは何かフェニックスの攻撃を避ける。すると、ロックマンの後に建っていたビルにぶつかる。

スパツ！！

すると、ファイアーカッターがあたったビルは、真っ二つに切り裂かれる。切り裂かれた部分はファイアーカッターの熱で溶け、焦げている。

『何て技だ』

「ビルが真っ二つに…」

『驚いてる暇はねえぜ？ファイアーカッター！』

フェニックスは先程と同じカッターを飛ばす。

「くっ！バトルカード！プレデーション！ヘンゲノジュツ！」

ロックマンはヌッキーの身代わり置き、姿を消す。ヌッキーはファイアーカッターに切り裂かれ、ボン！といって消滅する。

『消えた！？………』

フェニックスは周りを見渡しロックマンを探す。

「やあ！」

『何！？ぐわあ！………』

すると、ロックマンはフェニックスの後に周波数を変えて現われ、左手をブレイクサーベルに変えて斜めに切った。ロックマンはフェニックスから少し離れて距離をとる。

『…なかなかやるじゃないか。次はこうはいかないぜ?』

『待て!てめえ、逃げる気か!?』

ウォーロックはフェニックスが周波数を変えて消え去ろうとしたので、挑発するように呼び止めた。

『残念だが、俺はそんな挑発には乗らないぜウォーロック。今日はお前らの様子を見に来ただけだ。だが、バトルカードに頼ってるようじゃ、俺には勝てないぜ?』

『ふん!何をしようが勝ちやあ良いんだよ!』

ウォーロックが悪役っぽい台詞を言った。

『おいおい、そんなに熱くなるなよ。もっと冷静coolに行こうぜ?』

『…お前、炎属性だろ?炎属性の奴にしちゃ、似合わねえ台詞だな?』

「ウォーロック、今はそんな事言ってる場合じゃないだろ!?」

ロックマンが話しに割って入って、話を止めさせる。

『そうだな、速いところ奴を倒すぞ!』

「うん。ロックバスター！」

ロックマンはロックバスターを一発放つ。

『よつと。悪いが、お前らと遊ぶのはここまでだ。じゃあAdiosな、ロックマン！』

フェニックスが避けた後、そうやって周波数を変えて消え去った。

「待て！……」

『…逃げられたか…スバル、亜夢のところに戻るぞ？』

「そうだった！亜夢ちゃんの事忘れてた！」

ロックマンは猛スピードで先程居たベンチへと向かった。



その頃 亜夢

亜夢が小さな紙袋を持って店から出て来た。そして、先程の荷物が置いてあるベンチに座った。

『亜夢ちゃん、スバル君はさっき爆発したビルの方へ向かったみたいね』

「もしかしてFM星人がいるの！？だったら私も行ったほうが…」

亜夢は立ち上がってトランサーの中のジャスミンに言った。

『…さつきまで反応はあったけど、今は感じられないわ。スバル君達もウェーブロードを渡ってこっちへ向かってるみたいよ？』

「あ、そうなの？なら良いか」

そう言ってベンチに座りなおした。暫くするとスバルが戻ってきた。

「おまたせ、亜夢ちゃん」

「大丈夫だった？」

亜夢は心配そうな顔をしてスバルに尋ねた。

「…うん…でも逃げられちゃった」

「そう。あ、そうだ…これあげるよ」

すると、亜夢は手持っていた小さい紙袋をスバルに手渡した。

「えっ？何コレ？」

「開けてみて」

スバルは亜夢に言われた通りに紙袋を開けた。中には、青色の星の形をしたキーホルダーが入っていた。

「うわあ〜。ありがとう、亜夢ちゃん！」

「べ、別にお礼なんていいよ。これは、私からのお礼なんだから。でもその代わり、もうちょっと買い物に付き合ってね？」

「いいよ。キーホルダー貰っちゃったからね」

スバルはもう少し続く買い物地獄に付き合うことにした。

「ありがとう。それじゃあ、行こう！」

亜夢がそう言うと、2人は立ち上がって歩いていった。

その頃宇宙の地球近くの電波空間

フェニックスは地球の近くの宇宙空間から地球を眺めていた。

『…来たときには良く見なかったが、なかなか綺麗な星だな地球ってのは。…えっと…俺と周波数が合う人間は何処に居るんだ?』

フェニックスは意識を集中させ、自分に合う周波数を探していた。

『……OK、見つけた』

フェニックスは宇宙から自分に合う周波数を持つ人間を探し出した。場所は日本のだ。

『よし、じゃあ行くか。Ready…Go!』

そう言って普通の電波体のスピードより速い、音速並みのスピードで地球へと向かっていった。

第46話 音速のフェニックス(後書き)

短い…(――…)

フェニックスって普通、不死身ってイメージですけど、あえて音速にしてみました。まあ、不死身もありますけど(笑)

今日から少し更新が遅れるかもしれませんが。…少しネタが詰まってきたもんで…すみませんm(――)m

それでは感想待ってます

第47話 フェニックス・プロミネンスの挑戦！（前書き）

挑戦というかバトルですね（笑）

なんか前にもこんなサブタイがあったような…

## 第47話 フェニックス・プロミネンスの挑戦！

あるコダマタウンの交差点

「はあ〜。この世界はつまんねえな〜」

少年が交差点を渡りながら呟いた。少年は六年生くらいで、短めの赤髪で青い目をしている。

「いつもと変わらない日常……。もっとはじけるような刺激が欲しいぜ〜」

そして、誰も居ない展望台へと到着した。

「ん？気づかないうちにこんなとこに来ちゃったか……」

すると、少年が上を向いた瞬間、オレンジ色の光が少年に向かって落ちて来る。

「ん！？なんだ？……こっちに来る！？うわあああああああ！！」

光は少年にぶつかった。するとその場はオレンジ色の光に包まれる。

## オレンジ色の空間

少年はこの空間の中で気絶していた。するとこの空間の中にフェニックスが周波数を変えて現われた。少年はそれに気づいたのか、ゆっくりと目を開ける。

「ん？…うわ！…誰だ、お前！？」

『おっと、予想通りの反応だな？…俺はFM星からやってきたフェニックスだ。お前は？』

フェニックスが気軽に自分の名を名乗った。そして少年に名を聞いた。

「…俺は不死宮涼介<sup>ふじみや りょうすけ</sup>。お前、FM星って事は宇宙人か？」

『お！お前鋭いな。そう、俺はFM星人だ』

「宇宙人が何のようだ？」

不死宮が睨み付けながらフェニックスに尋ねた。

『そう、怖い顔すんなって。俺はお前のような奴を探してたんだ』

「何!？」

『お前のような奴はそうは居ない。お前は特別な存在なんだ』

「…俺が…特別な存在…？」

『そうだ。そこでお前に頼みがある。…お前の体を貸して欲しい』

「何だと!？」

不死宮は少し後ろに後ずさる。

『悪いようにはしない。俺は任務でここへ来たんだ。任務を成功させるには人間の体が必要なんだ』

「…だからって、何で俺なんだ？」

『言つたら、特別な存在だって？俺達は自分に近い周波数の奴として電波変換できない。お前は俺とまったく同じ周波数を放っている。だから、俺ににとってお前は特別な存在なんだ』

「…フェニックス、電波変換って何だ？」

『おっと、俺とした事が肝心な事を忘れてたぜ。電波変換ってのは、簡単に言つと地球人とFM星人が合体し、電波人間になる事だ。電波人間になった者は、特別な力と地球人ときの何倍もの力を手にする事ができる。…さて、俺に協力するか、しないか返答を聞こうか？』



フェニックスが簡単に説明した後、不死宮は目を瞑って考える。  
そして、目を開ける。

「……いいぜ！俺はこういう刺激を待ってたんだからな！」

不死宮は笑って力強く答える。フェニックスはその言葉を聞いて  
気づかれないように一瞬ニヤつく。

『OK。じゃあ、まずは電波変換してもらおうか』

「おう！電波変換！不死宮涼介 オン・エア！」

不死宮はオレンジ色の光に包まれた。光が晴れると、オレンジ色  
のボディで背中に大きな赤色の翼がある電波人間が姿を現した。

「……これが電波変換した姿？」

『そうだけ。それじゃあ、任務を果たしに行くか』

「…フェニックス、お前の任務つてのは何だ？」

不死宮が自分が電波変換した姿を見終わった後、フェニックスに  
任務について尋ねた。

『裏切り者ウォーロックの抹殺だ』  
Erase

「…そうか。まあ、俺は新しい刺激さえあれば、誰かを殺そうが関  
係ない」

『じゃあ、俺の言う場所へ向かってもらっせ？』

「分かった」

そう返事をする和不死宮は周波数を変え、ウェーブロードへと移り、大きな翼を使って飛んでいく。

その頃      スバル達

まだ買い物地獄の真っ只中に居た。

「（流石に買いすぎでしょ！？しかもどんだけお金持ってるの！？）

」

スバルは心の中で叫んだ。無理もない。買い物し始めてから既に4時間が経過している。今日は学校はなく、昼から買い物に行つてるとはいえ、さすがに4時間ずっと買い物だけするのは相当こたえ

る。

「よし、一通り買い終わったかな？」

亜夢はメモを取り出して、書いてある事を買ったのか確認しながら言った。

「…うん、全部買った。じゃあ、帰ろうか？」

「う、うん（やっと…帰れる）」

そう言って2人は帰るためのバス停へと向かった。

「おっと、待ってもらおうか…ロックマン」

「!?!?」

すると、後から声を掛けられた。スバルと亜夢が後を振り返ると、そこには不死宮が立っていた。

「君…誰?…何で僕がロックマンだってわかったの？」

「名乗る程の者でもないさ。まあ、これを見ればわかるか？」

そう言って不死宮は自分の左腕のトランサーを見せる。中にはフエニックスが居た。

「…何でロックマンがお前と分かったのか教えてやる。俺は微量な電波でも感知する事が出来る。さっきロックマンに電波変換しただろう?その時の電波が人間の体に残留電波として残っている。後

は俺がそれを感知し、たどっていだけで誰がロックマンかが分かるって訳だ』

「!?!? フェニックス!?!? てことは君は…!」

「そう、俺はフェニックスと電波変換ができる人間って事だ。まあ、そんな事はどうでもいい!俺と戦え、ロックマン!俺が勝ったらアンドロメダの鍵を渡してもらおう。そして、ウォーロックを抹殺する!」

「何だつて!?! ウォーロックの抹殺!?!」

「承諾を得なければ、まずこの町を破壊する!」

『上等じゃねえか!?!』

すると、ウォーロックがトランサーの中から不死宮とフェニックスに向かつて言う。

「ウォーロック!?!」

『倒す奴は早目に倒しておいて損はない!やるぞ、スバル!』

「…分かった!」

スバルは少し悩んだ後にそう言った。

## 展望台

スバル達は街中では危ないと重い、場所を誰も居ない展望台へと変えた。

「それじゃあ、行くぜ！電波変換！不死宮涼介 オン・エア！」

不死宮は電波変換して、ウェーブロードへと上がった。

「亜夢ちゃんはここで待ってて？」

「…分かった。頑張ってるね！」

「うん！電波変換！星河スバル オン・エア！」

スバルも電波変換して後を追って言った。

『ロックマン、この姿はフェニックス・プロミネンスだ。よく覚えとけよ？…それじゃあ行くぜ！Are you Ready?…G

『…O

すると、フェニックスが行った後、フェニックス・プロミネンスがもの凄いスピードでロックマンの懐へと入った。

「何！？くっ！」

「プロミネンスブレス！」

フェニックス・プロミネンスは口から広範囲に渡って炎を放つ。だが、ロックマンはそれを察知したのか、放たれる前にジャンプして避ける。

「あ、危なかった……」

「……！？スバル、あの攻撃の熱さ半端じゃねえぞ！電波人間が耐え切れる温度を遥かに超えている！」

ウォーロックが言った後に、ロックマンはウェーブロードに着地する。

『そりゃそうさ。この炎は太陽と同じ位の熱さなんだからな』

フェニックスがロックマンに説明した。

「くっ！そっちが炎ならこっちは水だ！バトルカード！プレデーション！ワイドウェーブ！」

ロックマンはフェニックス・プロミネンスにワイドウェーブを放つ。

「無駄だ！ファイアーカッター！」

ファイアーカッターを放つ。すると、ワイドウェーブを真っ二つに切り、ロックマンの方へ進んで行く。

「くっ！だったらこれだ！バトルカード！プレデーション！ジェットアタック！スイゲツザン！」

ロックマンはジェットアタックでフェニックスの目の前に行き、スイゲツザンで切った。

「…手ごたえがない」

「はっはっは！そんなスピードで俺達を攻撃できるかってんだ！」

フェニックスはロックマンの上を飛んでいた。

「くっ！バトルカード！プレデーション！パワーボム！喰らえ！」

ロックマンはパワーボムを上に向けて投げる。パワーボムは爆発し爆風が起きてフェニックス・プロミネンスを巻き込む。

「ちっ！」

フェニックス・プロミネンスは一瞬動きが止まる。

「今だ！バトルカード！プレデーション！ホイッスル！ブレイクサイベル！」

ロックマンはホイッスルを吹き、フェニックス・プロミネンスを目の前に一瞬で出現させる。

「何!？」

「喰らえ!」

ロックマンはブレイクサーベルで切った…はずだった。

「…消えた…」

切ったときにはフェニックス・プロミネンスは目の前には居なかった。

「ふうー、危なかったぜ!」

『おいおい、そんなにスピード出すなよ…あいつらが着いて来れないだろ?』

「…それじゃあ、任務が果たせないだろ?」

『あいつ倒したら、俺が暇になっちまうからな。もう少し遊びたいんだよ』

ロックマンが後を振り返ると、まだまだ余裕なフェニックス・プロミネンスが居た。

「何て速さだ…」

『くっそ!余裕こきやがって!』

「…そろそろ決めるか!」



フェニックス・プロミネンスは空高く飛んでいく。

「ゴッドバード！」

そして、ロックマンに向かってもの凄いスピードで滑空して突っ込んできた。

「くっ！バトルカード！プレデーション！ヘンゲノジュツ！」

ロックマンはヌッキーの身代わり置き、姿を消す。

『その手は喰わないぜ！』

フェニックス・プロミネンスはヌッキーから横に向きを変えた。すると、そこにロックマンが周波数を変えて現われた。

「！？うわあああああああ！！！」

フェニックス・プロミネンスの攻撃はロックマンに直撃した。ロックマンはもの凄い勢いで吹っ飛んでいく。

「スバル君！」

すると、いきなりジャスミン・ハートが現われ、吹っ飛んで来るロックマンを受け止める。

「…亜夢ちゃん！どうして　私に任せて、スバル君。あいつは私が倒す！」　…亜夢ちゃん…でも　「スバル君は少し休んで。私なら大丈夫だから！」　…分かった！」

ロックマンは膝を付き座る。ジャスミン・ハートはフェニックス・プロミネンスに近づいて行く。

『お前、誰だ？お前のような周波数の電波体イレイズ：FM星には居なかったぞ？まあ、良い。邪魔するなら一緒にEraseするまでだ』

「私を甘く見ると後悔するよ？」

そう言ってジャスミン・ハートは自分の武器である扇子を開いて構える。

第47話 フェニックス・プロミネンスの挑戦！（後書き）

うん、何か説明が下手ですね。すみませんm（——）m

オリキャラの名前とかいろいろ考えていたら、3日も経ってしまった（——；）

第48話 ジャスミン・ハートVSフェニックス・プロミネンス(前書き)

久々に亜夢の戦闘!(^ - ^)

## 第48話 ジャスミン・ハートVSフェニックス・プロミネンス

「いくよ！風の舞 風月漸！でや！」

「おっと！」

ジャスミン・ハートはフェニックス・プロミネンスに近づき風を纏った剣で振る。だが、フェニックス・プロミネンスは軽く飛んで避ける。

「女だからって手加減はしないぜ？」

フェニックス・プロミネンスは笑うように言った。

「上等じゃん！手加減されて後悔されちゃ困るからね」

ジャスミン・ハートは少し笑って、挑発するようにフェニックス・プロミネンスに言い放つ。

「上等だこの女！<sup>あま</sup>後で泣いたって知らねえぞ！？プロミネンスブレス！」

フェニックス・プロミネンスが先程の炎の広範囲に放つ。

「風の舞 風壁！そして風の舞 突風！」

ジャスミン・ハートは扇子で横に扇ぎ、風の壁を作って炎を受け止める。そして、もう一扇ぎして、もの凄い勢いの風を発生させ、フェニックス・プロミネンスの動きを止める。

「くっ！何だ、この風！？」

フェニックス・プロミネンスは吹き飛ばされないように踏ん張るのが精一杯だ。

「今だ！風の舞　鎌鼬かまたち！喰らえ！」

ジャスミン・ハートは扇子で空気を水平に切り、旋風を起こす。その旋風は突風で動けないフェニックス・プロミネンスを切り刻む。

「うわあああああああ！！」

「やった！」

ジャスミン・ハートの大技を喰らったフェニックス・プロミネンスは相当なダメージを負った。彼はうつ伏せの状態で倒れる。

「……痛てて……たく、動けないときに攻撃なんて有りかよ！？」

フェニックス・プロミネンスは鎌鼬を受けて、切り刻まれたはずだが、先程切り刻まれた箇所はいつの間にか治っている。

「そ、そんな……どうして……」

ジャスミン・ハート顔は一気に喜びから絶望へと変わる。

「俺の能力は不死鳥と似たようなもんなんでね。お譲ちゃん知ってるか？……不死鳥フェニックスってのは、死んでも無傷の状態で蘇る。だから、不死鳥は死なないと言われている。俺の能力は、一定のダメージを超

えると、電波が体に集まっていき傷を治し、無傷の状態になる。つまり俺達は死なない。これだけ言えば、何が言いたいか分かるか？」

「……傷が治るから負ける事は無いって事？」

「そう言う事だ！ファイアーブーメラン！」

フェニックス・プロミネンスは立ち上がり、大きな翼で羽ばたき、ファイアーカッターより大きなカッターを二つ飛ばす。

「くっ！風の舞 風壁！」

風の壁を作り、一つは壁にあたった瞬間にフェニックス・プロミネンスに撥ね返す。もう一つはジャスミン・ハートとは違う方向へ飛んでいく。

「ははは！バカじゃないの？何処狙ってんの？」

「……それはどうか？」

そう呟いた瞬間、ファイアーブーメランはUターンしてジャスミン・ハートの方向へ向かっていく。

『亜夢ちゃん、後ろよ！』

「えっ？…！？きゃあ！！」

すると、ジャスミン・ハート右肩をかする。余程痛いのか左手で右肩を抑える。

ブーメランはフェニックス・プロミネンスの下へ戻っていく。

「くっそ！まだまだだ！」

ジャスミン・ハートが言った時にはもう、日が沈み始めていた。

「そろそろ、決めるか。…はっ！」

フェニックス・プロミネンスは一舜でその場を消え、ジャスミン・ハートの後に現われる。

「っ！速い！…くっ！風の舞 風速！」

ジャスミン・ハートは前にジャンプしてフェニックス・プロミネンスと距離をとる。そして、自分も風を使って速く動ける技を発動し、フェニックス・プロミネンスの背後へ回る。

「風の舞 風月漸！でや！」

「何！？くっ！」

ジャスミン・ハートの攻撃はもう少しのところまで避けられてしまった。

「あいつ…まじかよ…」

『Wow！俺達のスピードと同じぐらいのスピードが出てやがるな！こりゃあ、おもしろくなってきたぜ！』

フェニックスはここにきて何故かテンションが上がってきている。



### その頃ロックマン

「はあ…はあ…亜夢ちゃん、凄い。フェニックスの速さに付いて行ってる」

ロックマンは少し離れた場所から戦いを見ている。まだ先程のダメージが残っているのか、少し息使いが荒い。

『ああ。だが、フェニックスの奴、まだ全力じゃないな』

「えっ？本当に!？」

『あの余裕そうな顔から見て、間違いはないだろう』

「……ウォーロック！もうちょっとしたら、亜夢ちゃんに加勢するよっ」

ロックマンは万が一の事を考え、加勢に行く体制なる。

『わかった!』

「はあ…はあ…くっそ!全速力で行ったはずなのに、全然追いつかない…」

ジャスミン・ハートは、フェニックス・プロミネンスに遠距離戦では攻撃が全て避けられると思い、接近戦に持ち込もうと全速力で距離を詰めようとするが、全然距離を詰められなかった。

『亜夢ちゃん、あきらめちゃだめよ!』

「…そうだね。まだこっちにも奥の手があるんだからね」

「…お喋り中悪いが、そろそろ消えてもらっぞ!はああああ!」

フェニックス・プロミネンスはそう言うと、自分の体を大きく広げる。

「ワイドウェーブ！」

すると、フェニックス・プロミネンスに向かってワイドウェーブが飛んでいく。

「何!? くっ！」

フェニックス・プロミネンスは体をくねらせ避ける。

「…スバル君！」

ジャスミン・ハートはロックマンに気づくと、ロックマンに近づいていく。

「もう、大丈夫なの？」

「うん。亜夢ちゃんこそ、肩大丈夫!？」

「…うん」

ロックマンはジャスミン・ハートの肩のかすり傷を見て大げさそうに言った。ジャスミン・ハートはこれ以上心配掛けないように軽く返事をする。

「2対1か…」

『だが、何人相手だろうが問題なし!』

No problem

「ああ、直ぐにけりをつけてやるぜ!」

フェニックス・プロミネンスは攻撃するために構える。

「行くよ、亜夢ちゃん!」

「うん!絶対にあいつを……!?!」

すると、ジャスミン・ハートはいきなり身震いをする。

「まさか…もう…夜…!?!…きゃあああああああ!?!」

ジャスミン・ハートが空の暗さを見た瞬間、急に悲鳴を上げる。

「どうしたの!?!亜夢ちゃん!?!」

『まずいわ!亜夢ちゃん、電波変換を解くわよ!』

ジャスミンが電波変換を解くと、亜夢は元の姿に戻り崩れるように倒れる。

「どうしたの!?!亜夢ちゃん、しっかりして!」

亜夢は気絶しているようだ。ロックマンは亜夢を何度も揺する。

「おいおい、これじゃあ勝負にならないぜ?!どうする、フェニックス?」

『…NO！電波変換するためのエネルギーがそろそろ切れる。ロツクマン、勝負は3日後まで延期だ！その間に精々、腕を磨いとくんだな。行くぞ！』

フェニックス達は周波数を変えて消えて行った。

第48話 ジャスミン・ハートVSフェニックス・プロミネンス(後書き)

何か短いような…まあ良いか。てか今回戦闘しかなかったような  
ーー;) )

あ、読みにくかったら言ってくください。

感想待ってます

第49話 奥の手 ウェザートランス！（前書き）

簡単に言うと、天気で変身するって事です。

## 第49話 奥の手 ウェザートランス!

「亜夢ちゃん! 亜夢ちゃん!」

スバルは電波変換を解き、倒れて気絶している亜夢の名前を呼んで意識の確認をしている。

「……ん……くっ!」

すると、亜夢はスバルの声で意識を取り戻す。

「…スバル…君…」

「亜夢ちゃん、大丈夫? ……一体何が起きたの?」

スバルは何故亜夢がいきなり悲鳴を上げて倒れたのか、理由を亜夢に聞く。

「…スバル君と戦った後…ぐらいからかな…。私、夜に電波変換してる姿で居ると……闇ダークの力に支配されそうになるの…」

「!? な、何で夜にそんな事が起きるの!?」

「……理由は分かってる……でも……」

「…でも何?」

「…今は…言えない…」



「どうして！？君あの時　…これは私に課せられた試練みたいものの。…大丈夫。時が来たら話すから」　…分かったこれ以上は何も言わない。その代わり…無茶だけはしないでね？」

亜夢が笑顔で言うと、スバルはそれ以上問い詰めない事にした。気づけば既に7時を過ぎていた。空を見上げると、様々な星がきれいにライトアップされている。

「…あいつ…3日後に延期するって言った」

すると、スバルが口を開く。

「…今度は絶対に倒す。私には、まだ奥の手がある」

「奥の手？」

亜夢が言った事にスバルが疑問を持った。だが、亜夢は人差し指を立てて「ひ・み・つ」と言って教えようとしなかった。

「それじゃあ、もう帰ろうか。明日仕事で朝早いし」

「送っていくよ。もう暗いしね」

「勿論そのつもりだよ。この重い荷物持って行ってもらわなきゃならないしね！」

すると亜夢の隣に、先程は見えなかったが、今ははっきりと見える重い荷物がある。

「うっ！（忘れてた…）僕やっぱり用事が…」

「こんな重い荷物、女の子に持たせるんだ」

亜夢がしかめっ面でスバルを見る。

「……喜んで持たせて頂きます」

スバルは何かに負けた。亜夢は心の中で「勝った！」とガッツポーズをした。

## 時は進んで亜夢の家

亜夢は自分の部屋にあるベッドの上に寝転がる。ちなみにスバルは、荷物を届けて即行で帰った。理由は、亜夢の家に付いた頃には9時だったからだ。なぜ2時間も掛かったのかは、亜夢のマンション行きのバスが来るのに1時間待たされたあげく、マンションまでに約1時間くらい掛かったからだ。

「ふう、今日は疲れたなあ……やっぱり、夜の闇の力は勝手に逆流してきちゃうのか」

亜夢は仰向けの状態で溜息をつく。すると、横に置いたトランサーが開く。

『亜夢ちゃん大丈夫？……闇の力はやっぱり強すぎるわね……扱うのは難しいわ』

「うん。でも、いつか必ず……。そう言えばフェニックスと戦つてる時、少し運が悪かったね。奥の手を使うには日の光が弱すぎたし……」

『そうね。3日後の天気……そういえば今朝テレビで“そろそろ梅雨の時期に入る”っていつてたわね』

ジャスマンが出かける前に見ていたテレビでやってた天気予報で言つてた事を思い出す。

「梅雨！？……て事は今度戦うとき、有利になるかも！」

亜夢は跳ね起きてジャスマンに言った。

『どつ言つこと？まず、梅雨って何？』

「……簡単に言つと……暫くの間雨が降るって事！」

『……なるほど。確かにフェニックスと戦うときには有利になるわね』

「うん。……ふわぁ……眠くなっちゃった。明日も早いし、そろそ

る寝よう。おやすみ！」

『おやすみなさい』

おやすみを言つと、亜夢は電気を消して寝始める。

## スバル宅

その頃スバルもベットの中に入り寝ようとしていた。

「…あいつ、強かったね」

『ああ、はっきり言って、今の俺たちじゃ勝ち目はない』

フェニックスとの戦いでスバルは一撃も当てる事が出来なかった。スバルより強い亜夢でさえ、最初の技以外、ダメージを与える事が出来なかった。

「…攻撃を受けても電波で回復する、か…どうすれば勝てるんだ…」  
スバルはフェニック戦での事を思い出して、その対策を考え始める。

『…考えたって仕方がねえ。今日の所はもう寝るぞ』

「……うん」

スバルが返事をする、ウォーロックが部屋の電気を消した。

そして時は進み      3日後

スバルは学校が終わって、4時ごろ展望台へ居た。すると、向かいには不死宮が立っていた。

「待ってたぜ、ロックマン」

「…今の僕は星河スバルだ！」

「そりゃあ、悪かったな。…スバル、ウォーロックとアンドロメダの鍵を渡せばお前は助けてやるぜ？」

「そんなのお断りだ！友達を見捨てて自分だけ助かるうなんて、僕は御免だ！」

その言葉を聞くと、不死宮は少し笑う。

「そうか……後悔するなよ？電波変換！不死宮涼介 オン・エア！」

「望むところだ！電波変換！星河スバル オン・エア！」

2人は同時に電波変換してウェーブロードへ上がっていった。

「行くぜ！」

『今度こそウォーロック、お前を抹殺<sup>ERASE</sup>してやるぜ』

『へっ！やれるもんならやってみな！』

『じゃあ、行くぜ！Are You Ready?...Go!』

「はあ…はあ…はあ…くそ！」

ロックマンはフェニックス・プロミネンスに圧倒的な力を見せ付けられた。たった一撃も当たらない。フェニックス・プロミネンスは3日前よりも速いスピードで動いている。その速さはまさに音速だ。

『あきらめんなスバル！まだ負けると決まってるわけじゃねえ！』

「でもどうすれば…」

すると、ポツリと一滴の水滴が落ちてくる。そして、ポツリポツリと何滴も落ちてくる。ロックマンはそれを見て空を見上げる。空は鉛のような色だった。降ってくる水滴の正体、それは雨だ。

「雨…か」

『相性的には悪いが、こいつらを抹殺するぐらいなら雨なんて関係ないぜ？』

「そうだな。最後は焼き殺してやる！プロミネンスブレス！」

フェニックス・プロミネンスが炎を放った瞬間、ロックマンは万事休すと心で思い目を閉じた。

「風の舞 風壁！」

だが、その炎がロックマンへと届く事はなかった。ジャスミン・ハートが割って入り、炎を風の壁で防いだ。

「何!？」

「ごめん、スバル君！仕事で遅くなった！」

ロックマンはその声を聞いて目を開けた。

「亜夢ちゃん!?!?!ありがとう」

「ここからは私に任せて?今度こそあいつを倒す!」

「…分かった」

ロックマンはウェーブロードの下へと降りる。

「…なんだ。誰かと思えば、またお前か」

『何度やっても無駄だぜ?お前らは俺達には勝てない。この前ので分かっただろう?』

すると、ジャスミン・ハートとジャスミンはニヤリと笑う。



「確かにこの前は勝てなかった。でもあれは、天気が悪かっただけ」  
「何!?!」

『まだ奥の手を使ってないって事よ。今日の天気は最高の雨だわ!』  
『What? どういうことだ?』

フェニックスが言った後に、ジャスミン・ハートは扇子を開き、  
天へとかざす。

「発動 ウェザートランス 雨!!!」  
レイン

ジャスミン・ハートがそう唱えると、水色の光に包まれる。光が  
晴れると、水玉模様の着物のジャスミン・ハートが立っていた。

「何が起きたの!?!」

『…何だ? さっきとは違う周波数になった!?!』

ロックマンとウォーロックはジャスミン・ハートを見て驚いてい  
る。

「おいおい。何だよ、さっきの光は?」

「知りたい?」

ジャスミン・ハートはフェニックス・プロミネンスの背後に一瞬  
で回り込んで言った。

「速い！」

「何!？」

「雨の舞 時雨しぐれ！」

するとジャスミン・ハートは、扇子に水を纏わせ連続でフェニックス・プロミネンスを突く。

「ぐわあ！」

フェニックス・プロミネンスは一度目を喰らった後に、音速のスピードで後ろに回避する。

『おいおい、何油断してんだよ?』

「わ、悪い。だが、もうまぐれは通じないぜ?」

フェニックス・プロミネンスが喰らった箇所は段々治っていく。

「まぐれかどうかは分からないよ? 雨の舞 車軸しゃじく！」

扇子を開き、横に扇ぐ。すると、降っていた大量の雨粒が扇いだ方向へ向きを変え、針のようにとがって、もの凄いスピードで飛んでいく。

「何!？」

フェニックスは、音速と言えどこの大量の雨粒を全て避ける事は出来ず、何発か体に当たる。

「くっ！何故だ！何故いきなり攻撃が当たるようになったんだ！？」  
フェニックス・プロミネンスは先程まで当たらなかった攻撃が急に当たるようになったため、少し動揺している。

『これが奥の手、ウエザートランス！天気に合わせて属性、姿が変身することが出来る。さっきまでの力が風。今の力は雨！』

ジャスミンが説明する。つまり、天気と同じ属性にすることが出来ると言っただ。

『天候…まさか！？お前、FM王の旧左腕、天候のジャスミンか！？』

フェニックスが何かを思い出したかのように言った。

『……そんな肩書き…もう捨てたわ…』

ジャスミンがそう言った。その言葉にウォーロックが反応した。

『あ、あいつがFM王にしか姿を現さかったと言われる左腕！？…昔、天候を使えばジェミニに勝る程の実力者だと聞いたことがある。スバル、もしかしたらフェニックスに勝てるかもしれないぞ』

ウォーロックが驚いた後にロックマンに言った。

「本当に！？」

『ああ、奴の力は天候によって何倍にも引き上がると言われている』

説明を終えた頃、フェニックス・プロミネンスが音速の速さで動き始めた。

「お前はこのスピードに付いて来られるか？」

「……この状態なら……追いつける！」

すると、ジャスミン・ハートは言い終わると同時にフェニックス・プロミネンスの背後に現れた。

「!?!ちっ!プロミネンスプレス！」

「雨の舞 雨龍！」

扇子を開いた状態で、扇子から雨粒でできた龍を出現させた。その龍とプロミネンスプレスはぶつかり消滅した。

「くっ!ファイアーブーメラン！」

「雨の舞 車軸！」

2つのブーメランを大量の雨粒で撃ち落とす。

「これで決める!雨の舞 五月雨さみだれ!はああああ!!」

ジャスミン・ハートは扇子で上から大きく扇ぐ。すると、フェニックス・プロミネンスの上から激しい大粒の雨を降らせた。その雨はまるで梅雨の時期に長くふる五月雨のように激しく降り続いていた。

「ぐわああああああ!!」

フェニックス・プロミネンスはその技を喰らい、崩れるように倒れた。

「やった!」

それを見てロックマンが喜ぶ。だが、フェニックス・プロミネンス体に電波が集まり傷が癒えていく。

「……今のは効いたぜ……」

フェニックス・プロミネンスは立ち上がった。

「五月雨でもだめか…傷が癒えるスピードに技が追いつかない……」

「じゃあ、そろそろこっちも本気を出すか。…はああああ!!」

フェニックス・プロミネンスは上空に上がり体を大きく広げた。

「!!…今までの…本気じゃなかった!？」

ロックマンはフェニックス・プロミネンスに発言に驚く。

『そうさ!今までのはまだ、半分しか出してないぜ?ロックマン、お前がこの前戦ったジェミニだつて3分の1しか出してなかったぜ』  
『?』

「……スバル君、大丈夫。私もまだ本気じゃないから」

今度はジャスミン・ハートがロックマンに言った。

「だが、お前らが何をしようがもう遅い！地獄の暑さを受けてみる。ワールド・オブ・ザ・ヘル！」

フェニックス・プロミネンスは大きく広げた体から膨大な熱エネルギーを発生させる。

「くっ！？くっ！？」

ロックマンとジャスミン・ハートはあまりの暑さに膝を着く。

「あ、暑い。何だこの暑さ……」

雨の落ちてくる水滴は全てこの暑さに蒸発していく。

「あ、雨が……このままじゃやばい……」

「はっはっは！この暑さの前じゃ雨が蒸発するから、お前の雨の力は使えねえだろ！？雨雲はあっても雨が無ければその力は無意味だ」

「（くっ！完全にこの力の弱点に気づかれてる……）」

『さて、そろそろ……ん？』

すると、フェニックスが何かに気づく。

「どっした？」

『…これは…FM王からの通信だ！…電波が悪くて良く聞こえねえ。フェニックス…すぐ…ま…きか…ん…せよ…。帰還命令！？』

「おいおい、良いとこなのにマジかよ？」

『…奴らに止めをさしたい所だが…FM王の命令は絶対だからな…。しょうがない、今回はひとまずFM星に帰還するか』

「そうか…命拾いしたな、ロックマン！でも、次はないと思え」

フェニックス・プロミネンスが最後に一言そう言った。

『<sup>Adios</sup>じゃあな、ウォーロックと…ジャスミン』

そういつて、フェニックス・プロミネンスは周波数を変えて消え去った。それと同時に、フェニックス・プロミネンスの技の影響が消え、元の気温に戻っていく。

「助かった…のかな？」

『ああ。悔しいが、あそこでFM王の通信がなきゃ俺達は負けてたかもな…』

ロックマンが言った後にウォーロックが付け足して答える。

「…くつそー！また逃げられたあー！今度こそ絶対に倒す！」

ジャスミン・ハートは何故か燃えていた。打倒フェニックスといった感じだ。

『その意気よ。亜夢ちゃん。まだ、奥の手は半分も出してないんだから』

「うん。今度は雨は使わない」

「って亜夢ちゃん、まだ何かあるの!？」

すると、ロックマンが亜夢の発言に突っ込んで入ってきた。

「うん。ウェザートランスはあと、5つぐらいの天気を使って変身トランスができるの」

「そ、そうなんだ…」

ロックマンは「次元が違う」と心で思った。



## 第49話 奥の手 ウェザートランス！（後書き）

と言うわけでフェニックスとは引き分け（？）という感じにしました。

うーん、展開が速い気し、最後の落ちが微妙…てか、5000文字以上って…書きすぎた（<ー>）

てか、亜夢の家でネタバレしすぎた…（ー；）

エレメントウェザーは天気によって属性と力を変える事ができるってことです。

雨だと水みたいな感じレインです。風は元々ある力ウインドなので、天気に関係なく使えます。

…それにしても技名が「リボン」の時雨蒼燕流みたいだ…。

……そう言えばエグゼにそついうのいたよつな。

属性が何かボクタイと被ってるよつな…（- -；）

感想待ってます

第50話 帰って来た男(前書き)

あ……気づけばもう50話だ……

## 第50話 帰って来た男

### コダマ市街

平日の真昼間。都会であるコダマ市街には邪魔なぐらいに人が多い。そんな中、灰色のコートを着て黒い帽子を被った男が何処かへ向かって歩いている。

その男が信号や電気屋の前を通るとき、少し機会の調子が悪くなり、通り過ぎると機械の調子が良くなるといった現象が起こっていた。

暫く歩いていると、アマケンへとたどり着く。

「……………フッ」

男は扉の前で止まり、帽子を脱いで笑った。その男は、前にロックマンと戦った。FM星人キグナスに心の隙をつかれ電波変換してしまった、宇田海<sup>うたがい</sup> 深佑<sup>しんすけ</sup>だった。

コダマタウン 公園

ツカサは誰も居ない公園のベンチに、ジュースの入ったストロー付きの紙コップを持って座っていた。

「……キグナスの奴、何か企んでるよ？」

誰も居ない中、自分のウェーブスキャナーの中に居るジェミニに話し掛けた。

『…みたいだな。少し探りを入れておくか』

その頃スバル達

スバルは学校が終わり、いつもの道を下校していた。

「だから言ってるじゃない！早く探すのよ、愛しのロックマン様を！」

聞き覚えのある声が後ろから聞こえてくる。スバルが振り返ると、いつもの三人組みの姿があった。

「でも委員長、相手は電波人間なんですよ？そんなのを捕まえるなんて無理ですよ……」

ゴンタが言うと、委員長はゴンタの方へ振り向く。

「お黙りゴンタ！文句言わないで探すの……！」

「はい……」

委員長は今の言葉を思いつきり叫んで言った。ゴンタは何も言いかえせずに返事だけを返す。

『ご機嫌斜めだな、彼女。愛しのロックマン様ともだいぶ御見かけできてないだろうからなあ』

ウォーロックが冷やかすように言った。

「そういえば最近大人しいね、FM星人の連中」

最後にFM星人と戦ったのは、6月の上旬、フェニックスと戦った時だ。今は6月の下旬。3、4週間ばかり事件もなにも起きていないのだ。

「僕の推測ですが、ロックマンの正体は、案外身近の人間かもしれないよ?」

キザマロがメガネをクイツとしながら言った。

「どついう意味よ、キザマロ?」

「これまでのロックマンとの遭遇回数を調べところ、サテラポリスの五陽田警部に次いで、僕達が二番目に多いんです。これはロックマンが近くに居る何よりの証拠ではありませんか?」

「なるほど身近な人間ねえ……」

委員長はキザマロの説明に納得する。すると、スバルを見て近づいて行く。

「星河君」

「僕は違つよ!?僕はロックマンなんかじゃ……」

スバルはバレないようにと考えていると、逆に焦って質問していない事を答え始める。

「あなたがロックマン様な訳ないでしょ?心当たりがあるかどうか聞いているの!」

「うっん!全然!」

スバルは隠すのに必死だ。

「あっそ…じゃあ、探すのを手伝いなさい。ロックマン様探しに」  
委員長は少し呆れ顔になると、スバルに命令する。

「勝手な事言わないでよ！今日は天地さんと約束があるんだ」

「んもう！…頼りにならない人達ね！」

そう言つて委員長はスバルから離れて、何処かへか歩いていく。

「待ってくれよ、委員長！」

その後をゴンタとキザマロが続く。三人が何処かへ行ったのを確認すると溜息をつく。すると、スバルのトランサーが鳴り始める。

「天地さん」

トランサーを開けると、ディスプレイに天地顔が映りだす。

『スバル君！良い知らせだ！』

「えっ？」

『驚くなよ？宇田海が帰ってきたんだ！』

「宇田海さんが！？」

スバルは笑顔で聞きなおす。

『今、アマケンに居る。詳しい話はこれからなんだ。一度切るよ?』

「分かりました。僕も直ぐそっちへ行きます!」

『ああ、待ってる』

天地が良い終わると、電話切れる。そして、今度はウォーロックがディスプレイに映る。

『…怪しいぞ、スバル』

「何が?」

『あのキグナスが簡単に人間を解放すると思うか?』

「……………!!」

スバルはあの時最後にキグナスが洗脳をした事を思い出す。すると、アマケンに向かって走り出す。

『急げ、スバル!』



アマケン 研究室

天地と宇田海は二人きりでこの部屋の中に居た。部屋の電気は昼のため消しており、カーテンを開けて太陽の光で部屋を明るくしている。

「良かったな、宇田海！良くあの怪物から逃げてこられたな」

天地は話しを切り出す。

「怪物ですか…」

宇田海は天地に背を向けている。

「ずっと心配してたんだぞ。良かった、本当に良かった！」

「へえ、僕の事なんかとつくに忘れてるかと思いましたよ。そうなんだ…天地さん、心配してくれたんだ」

宇田海は暗い声で言った。

「当たり前じゃないか！」

「……フフフフ。なら、礼を言わなくちゃ」

宇田海は不気味な声を出して笑う。

「…疲れているようだな、宇田海。話しは後にしてゆっくり、別に疲れてなんかいませんよ、僕は…」　しかし」

「それに直ぐ戻らないと…今日は必要な部品を取りに来ただけですから」

「部品？何の事だ？」

すると、宇田海は天地の方へ振り返り、懐からある部品を取り出した。

「…メディオコンポーザーじゃないか？」

宇田海が取り出した部品を見て宇田海に問いかける。

「もうすぐ完成するんですよ、僕の発明が…」

「発明？」

「活気的な発明です…FM星人のためのね」

宇田海は不気味な笑みを浮かべる。

「FM…？一体何を…!？」

すると、宇田海の左腕が電波のようになり、半分透き通る感じになる。

「怪物は酷いですよ、天地さん…。FM星人は僕に素晴らしい能力を与えてくれたんです…。人間を超越した力をね…」

「宇田海…くっ！」

天地は部屋にある、緊急事態用のボタンを押し、サイレンを鳴らし始めた。アマケン中にサイレンが鳴り響く。

「そうだ天地さん、あなたにも味合わせてあげますよ…電波世界の素晴らしさを」

すると、部屋にアマケンの職員数名が入ってくる。だが、天地達の姿は何処にも無かった。その代わり、部屋の窓ガラスが割れていた。

すると、スバルがアマケンの前まで走ってやってくる。

『遅かったか！？』

ウォーロックがサイレンの音を聞いてそう言った。

天地は今、コダマタウンの市街、数十メートルの高さの、ビルとビルの間、モノレールの横などをもの凄い速さで飛んで行く。…いや、見えない何かの服を掴んで運んでいるだけだ。

すると、街でもっとも高いと思われる建物の上へとやってきた。そして、周波数を変えて、天地の服を掴んでいる宇田海が現れる。

「どうです？FM星人の能力は…彼らは素晴らしい生物です。嘘つきの地球人よりよっぽど信用できます」

「目を覚ませ、宇田海…君は化け物に操られているんだ」

「今度は化け物ですか…」

今、空は鉛色をした雲が被っている。今にも振り出しそうな天気だ。宇田海はその空を暫く見つめている。

「ならあなたと仲良しにしているあの少年も、僕と同じ化け物と言っただけだ」

宇田海は笑みを浮かべながら口を開く。

「何の事だ!?!」

「来ましたよ、スバル君があなたを助けにね」

「何!?!」

すると、宇田海は掴んでいた手を…離れた。

「!?!?うわあああああああ!?!」

天地はもの凄いスピードで落下していく。そのまま地面へと落ちたなら絶対に助かる保証は無いだろう。

「うっ!」

「……!?!」

すると、落下していく天地の右手を誰かが掴んだ。天地は手を掴んだ先を見ると、そこにはロックマンの姿があった。そして二人はゆっくりと地面に着地する。

「大丈夫ですか?」

ロックマンが無事かどうかを確認する。

「あ、ああ」

『ロックマン!』

すると、ロックマンの方へ白い羽が数発飛んでくる。

「!?!?危ない!」

ロックマンは天地を抱えてジャンプして羽を避けた。放たれてきた場所を見ると、キグナス・ウィングが飛んでいる。

『フツ!』

キグナス・ウィングは鼻で笑うと周波数を変えて姿を消す。

『奴を追え!』

「うん!」

「待ってくれ!君は…」

ロックマンも周波数を変える。天地の声はロックマンには届かなかった。

ロックマンはウェーブロードへ現れる。すると、上からキグナス・ウィングが右拳で攻撃してくる。ロックマンは何とかそれを右手を盾にして受け止める。

「くっ!でや!」

すると、キグナス・ウィングに二度蹴りし、さらにパンチを何度も繰り出す。だが、キグナス・ウィングを反撃を繰り返す。そして二人はこういった攻防を繰り返す。

ロックマンとキグナス・ウィングは距離をとるために離れる。ロックマンは左手をワイドソードに変え、キグナス・ウィングに切りかかる。

「でやー！」

『フン！ハッ！』

だが、キグナス・ウィングは自分の翼で受け止め反撃に入る。ロックマンは宙返りして交わり、空へジャンプする。

『ハアッ！』

ジャンプしたロックマンに向かってキグナスフェザーを繰り出す。

「うりゃー！」

だが、ロックマンはガトリングに変え、羽を打ち落とす。そして、上のウェーブロードへ飛び移る。

『くっ！』

キグナス・ウィングはロックマンの居ると思われるウェーブロードへ上がる。だが、ガトリングを放ったときに上がる煙で何処にいるのか分からなかった。ロックマンを探すために見回すと、ロックマンがガトリングを放ってくる。

「えいー！」

ダダダダダダダダ！

『ハッ！』

だが、キグナス・ウイングはガトリングの中を猛スピードで突っ込み、ロックマンの所へと一瞬で移動した。そしてガトリングの方の腕を掴んでロックマンごと持ち上げた。

「くっ！」

キグナス・ウイングは腹がから空きになったロックマンを一発殴って数メートル先まで吹っ飛ばす。

「うわあ！……えい！」

だが、着地した後、ガトリングをソードに変えてキグナス・ウイングに突っ込んでいく。ロックマンソードを振ったが、キグナス・ウイングがジャンプして避けたため当たらなかった。

『フッ！』

ロックマンはソードをウォーロックへ戻した。

「あいつを倒せば宇田海さんは助かるんだよね？」

『さあな、今回ばかりは保証できん』

「えっ、どうして？」

『キグナスとの同化が長すぎたんだ。奴らはもう一心同体だ。その



証拠に、前回より遙かにパワーアップしてやがる。例え奴を倒す事ができても、その時、宿主となった人間の命を奪う事になるかもしれん』

「そんな…」

『来るぞ！』

「ふっふっふ、やってるやってる…」

ツカサが少し離れたウェーブロードに座って、ロックマン達の戦いを見ている。

『フーン!』

キグナス・ウイングはキグナスフェザーを繰り出す。ロックマンはウエーブロードからウエーブロードへと飛び移り、何とか全てを避ける。そして、ウエーブロードを使って逃げ出す。キグナス・ウイングはその後ろを付いてきている。

『何やってんだ!? 攻撃しろ、スバル!』

「でも…!」

『やらなきゃ、こっちがやられるんだぞ!』

「…くっ!…!?!」

ロックマンは振り返り、ロックバスターを放とうとした。だが、その時にキグナス・ウイングは宇田海の姿になっていた。すると、雨が降り始める。

「助けて、助けてくれスバル君!」

「宇田海さん……」

『ためらうなスバル!』

「でも!」

『奴の手に乗るな! 攻撃しろ!』

ロックマンはウォーロックが言った後に宇田海を見る。

「……できないよ! 相手は人間なんだよ!」

目を逸らし、目を瞑って言った。

『今の奴は人間じゃねえ! 速く撃て!』

「だめだ…僕には撃てないよ……」

『スバル!』

「そうなんです、スバル君。FM星人にとって地球人は虫けら同然なんです。だから僕の事を撃てだなんて平気で言えるんです」

宇田海はロックマンの苦しんでる様を見て、ニヤリと笑い、喋り始めた。

「あの時もそうです…宇宙ステーションを襲撃したときも!」

「えっ? ……宇宙ステーション…?」

「FM王の命令でウォーロック率いる9体FM星人が、君のお父さんの宇宙ステーションを攻撃したんです。戦闘に集中しろ、スバル!」

ウォーロックは何とか話しを逸らそうとしたが、既に遅かった。ロックマンは宇田海の言葉を聞いて硬直し始めていた。

「君のお父さんを殺したのは…その…ウォーロックなんですよ!」

「!?!」

ロックマンは今の言葉で完全に硬直した。

「……………本当なの…?ウォーロック…」

「集中しろスバル、電波変換が維持できなくなるぞ!」

「本当です!」

ロックマンはウォーロックより、宇田海の方に耳を傾ける。

「君は…君のお父さんを殺した奴と…電波変換してるんです!」

「!?!……………」

『まずい!』

ロックマンは電波変換が不安定な状態になる。その証拠に、元の姿と今の姿が交互に変わって見えているからだ。

「フフフ！ダンシングスワン！」

キグナス・ウィングは宇田海の姿から直ぐに変わり、竜巻を起こしてロックマンに向かっていく。

『危ない、スバル！』

「！？うわあああああ！！」

だが、ロックマンが気づいたときにはもう避けられなかった。技を喰らって、ウェーブロードの下へと頭から落ちていく。

『スバル！スバル！』

ロックマンは気絶しているようだ。返事がない。

『くそ！地上まで持ってくれ！』

ロックマンはウェーブロードから数十メートルも下にあつた、川へと落ちる。そして電波変換が解け、そのまま流れていく。

## 第50話 帰って来た男（後書き）

やっと中間までやってきました。

…今まで一番戦闘描写が難しかったです（-\_-;）

誤り字とか、変な文章があるかもです。もしあれば言って下さい。

さて、記念すべき第50話になったわけですが…何かしよつかな…

…考えときます（笑）

それでは感想待ってまーす

第51話 キグナス軍団（前書き）

…一度手違いで半分くらい消えて大惨事になってしまった（-|-）；  
）

そんな訳で少し意味がわからない事があるかもです。

あと、勝手ではありませんが、アニメであった、オックスが五陽田警  
部に取り付いた話は事情によりカットします。いろいろとすみませ

んm（-|-）m

## 第51話 キグナス軍団

スバル宅 玄関

天地はロックマンと別れた後、本当に正体がスバルなのか確かめるためスバルの家に来ていた。外は空が曇天の雲に被われ、雨が降っている。

天地は外に車に止め、急いでスバルの家に入ったため少し体が濡れている。

「スバルならアマケンに行くと言ってましたよ、学校の帰りにアマケンに寄るからって…」

今天地に言ったのは、スバルの母あかねだ。

「そうですか…」

天地は下を向きながら言った。

「あの…スバルに何か？」

「いえいえ、近くまで来たんでちょっと寄ってみたんです。何だ行き違いか、しまったなあ…」

あかねに心配させないように笑いながら誤魔化した。

「どうも失礼しました」



「はあ……」

天地は玄関のドアを開け、スバルの家を後にした。そして車に乗り、運転し始める。

「……無事でいてくれよ、スバル君」

そう小さく呟いた。

ジー……ジ……ジジジー……

すると、車に付いているカーナビがいきなり電源が付き、何かを受信し始めた。

「!?!?」

天地はそれに気づき、カーナビを見る。

『……聞こえるか……? ……俺の……声が……聞こえる……か?』

すると、カーナビから声が聞こえてくる。だが、電波が悪く、所々で切れて聞こえる。

「……誰だ?」

『助けてくれ……スバルが怪我をしている……』

「スバル君が!?!?」

この声の正体はウォーロックである。天地だと知ってこの車のカー

ナビに電波を受信しているのだ。

『意識を失って…倒れてる…俺には手当ては…無理だ』

「…君は誰だ？スバル君に何があった？」

天地は疑問に思っていた事を質問した。だが、ウォーロックは答えようとしない。

「……そうか、君はFM星人だな？なら、私を助けてくれた少年はやはり…」

『…説明は後だ……今は俺を信じてくれ…』

「場所は何処だ？」

『俺が…案内する』

そう言った瞬間、車が自動運転に切り替わる。ウォーロックが車を運転しているようだ。

## ウェーブロード

暫くすると、雨が上がる。その雨が上がった後のウェーブロードにオックスとウルフが立っていた。

『……くっ！また失敗だ！』

今言ったのはオックスだ。実は今、ある男にオックスが取りついたのが、周波数が合わずに拒否反応を起こして一時的にしか取り付くことができなかったのだ。

『……地球人抹殺どころか、電波変換の相手も見つからないとは……。これ以上グズグズしていると、FM王の怒りを買っぞ』

『分かっている！くそ！……ん？』

二体の電波体が話していると、赤い小さな電波が二体の下までやってきた。

『何だ、この電波は？』

『……俺達を呼んでる！』

すると、ウルフはこの電波がやってきた方向を見た。

その頃

天地はウォーロックの案内でスバルが居ると思われる川へとやって来た。天地は車を降り、川の岸へと向かう。

「……スバル君!!」

天地はスバルを見つけ、そこへ走って行く。スバルは運良く、岸辺に体が上がっていた。

「スバル君! しっかりしろ!」

天地はスバルを抱き抱え、意識を確認する。だが返事はない。

「……大丈夫だ、息はある」

スバルの呼吸を確認する。どうやら気絶しているだけのようだ。

『そうか』

トランサーの中からウォーロックが安心して声を発する。

「病院へ運ぼう！ナビを頼む」

『分かった』

そう言って、ウォーロックにナビを任せえて病院へと向かった。

### 街外れの廃墟された建物

『……………ここか』

オヒュカス誰かに呼び出され、その呼び出された場所と思われる、  
廃墟された建物を見て呟いた。その後、周波数変えてを壁をすり抜  
け、中へと入る。すると中には、オックス、ウルフ、キャンサー、

クラウン、リブラの5体の電波体が集まっていた。

『オヒュカスブク』

最初にキャンサーが言う。

『何だお前たち？』

オヒュカスは何故ここへ呼び出したのか聞いた。

『その様子だと、お前でもなさそうだな。俺達を呼び出したのは』

『何？』

ウルフの言葉からすると、全員誰かに呼び出されたようだ。暫くして、オヒュカスは今の状況を理解する。

『けしからん！王であるこの余を呼び出すとは、一体何者だ！？』

「私ですよ」

クラウンが言った後、宇田海がこの部屋へ入ってくる。

『人間？』

『慌てるな、キグナスだ』

宇田海を見て警戒したリブラを、安心しろと言わんばかりにオヒュカスが言った。

「そう、これで仲間が全員揃ったわけです」

『ジェミニとハーブはどうしたブク？』

『連中はどうか。ハーブは時々、ウォーロックの味方してるよ  
うだし、ジェミニの奴は何を考えているか分からん』

キャンサーの問いにウルフが説明する。

「ええ、彼らの事は無視しましょう」

部屋にあるカプセル型の機械の元へ行きながら言う、宇田海。

『我々になんのように？』

「まあ、そう慌てないで。これから面白い実験をお見せします」

『実験？』

オヒュカスの質問に宇田海が答え、更にオックスが聞きなおす。

「キャンサー、協力してください」

『ん？』

「そのマークの上に移動してください」

宇田海が言ったマークとは、部屋の中心にある、黒い円のことだ。  
キャンサーは言われた通りにその場所に移動する。

『何するつもりブク？』

「素晴らしい実験ですよ……我々のためのね」

不気味の笑みを浮かべている宇田海は、懐からメディアコンポーザーを取り出し、機械にセットする。すると、電源がつき、キャンサーの真上の天井が開き、何かの放出機が出てくる。

「では、始めますよ」

宇田海が前へレバーを引くと、放出機からキャンサーに何かの光線が放たれる。

『な、何だブク!？』

すると、その光線はキャンサーを包み、眩い光を部屋全体に放つ。全員、眩い光のせいで目を瞑る。光が晴れるとそこには、キャンサーではなく、キャンサー・バブルの姿があった。

『……ん?…ぬおおおおおお!？』

『実体化した!』

オヒュカスは驚き、声を発する。

『どどど、どついう事ブク!？』

今度はキャンサー・バブルが宇田海に質問する。

「電波変換装置です。電波の実用化は地球でも実用化されています



が、生命体では初です。一度融合し、体内に残留している人間の特性をも再現する事に成功しました。まあ、私ではなく、私が宿主としているこの男の発明ですがね」

不気味な笑みを浮かべながら、宇田海が説明する。

「これさえあれば、もう電波変換に適合する人間を探す必要もありません」

『スゲエゼ、キグナス！よし、早く俺も実体化させる！』

宇田海が一通り説明し終わると、ウルフが一番最初にやらせると言わんばかりのはしゃぎっぷりを見せる。

「今から全員、この私、キグナスの配下に入ってもらおう！」

『『『『何！？』『』『』『』』』』』

「お前達、返答は！？」

六体は暫くの間沈黙するが、直ぐに電波変換装置の眩い光が放たれる。光が晴れると、キャンサー・バブルの後ろに、オックス・ファイア、リブラ・バランス、オヒユカス・クイーン、ウルフ・フォレスト、クラウン・サンダーの姿があった。この瞬間、全員キグナスの配下になるという事が決定した。

「……………フッフッフ……………ハッハハハハハハ！」

その光景を見た宇田海は、この街全体に聞こえるような声で笑った。

## コダマ病院

スバルは天地に病院に送られた後、何時間も眠っていた。

「……………ん」

すると、スバルは目を覚ます。ここが何処だか分かっていないため、辺りを見回す。

「気がついた？」

「……………母さん……」

声が聞こえた方へ振り返ると、スバルが眠っている間ずっと傍に付き添っていたあかねの姿があった。

「……………ここは？」

「病院よ。天地さんがあなたを見つけてくれたの」

「天地さんが…？」

「大丈夫？どこか痛いところはない？」

「…うん、大丈夫」

「そっか、良かった」

あかねが笑顔で言った。だが、そんな笑顔とは裏腹に、ハンカチを握り締めている。そのハンカチから、スバルが眠っているときにきつと泣いていただろう。心配で心配で堪らなかつただろう。今の笑顔はそんな感情を抑えて見せた笑顔。スバルに気づかれないように感情を隠しているのだ。

「じゃあ、先生に連絡してくるわね。大人しくしてなさい」

そう言って、あかねは立ち上がり、扉を開け部屋を出て行った。

「……………」

スバルは目を瞑り、先程の宇田海の言った言葉を思い出した。“君のお父さんの宇宙ステーションを攻撃したんです”という言葉。

「…！！……………」

スバルは起き上がり、横に置いてあったトランサーを開けて中を見る。しかし、肝心のウォーロックは居なかつた。

「彼が案内してくれたんだ。ウォーロックがね」

「!? …… 天地さん！」

天地が扉を開けて病室に入ってきた。

「彼から聞いたよ、ロックマン事」

「!? ……」

「あんな危険な連中と君は……なのに良く無事だったな。怪我もかすり傷程度で」

「ウォーロックは何処？」

ウォーロックと話しをしたという事は、ウォーロックが何処へ行つたのか分かると思い、天地に尋ねた。

「さあ？ 医療機器に影響を与えるから、離れると言ってたが… スバル君！」

スバルは起き上がり、ベッドから降りようとした。だが、それを天地に止められる。

「ウォーロックに話があるんだ！」

「まだ起きちゃだめだ！」

「あいつが……ウォーロックが父さんを殺した犯人かもしれないん

だ！」

スバルは目に大粒の涙を浮かばせていった。

「えっ！？…あ、スバル君！」

天地が驚いている隙に、スバルは走って病室を出て行った。

屋上

ガチャ！

「はあ…はあ…」

屋上の扉を開け、屋上へとやって来たスバル。病室から走ってきたせいか、少し息が荒い。扉から離れた場所でビジライザーを掛けて、見回してウォーロックを探す。だが、ウォーロックの姿は何処にも

無かった。

『俺ならここだぜ』

声が聞こえた後ろの方へ、スバルは振り返る。すると、先程まで居なかったウォーロックの姿がそこにはあった。

「……話がある、ウォーロック。父さんの事だけど  
宇宙ステーションを襲撃した話なら本当だぜ」 何!？」

ウォーロックの言葉の後、スバルの表情が変わる。

『俺はその攻撃隊長だった。だからこの件に関しちゃ、お前に恨まれても文句は言えねえ。だけどな』

「だけど何!？」

そこへ、天地が屋上へ上がってくる。天地は扉の影からスバル達を見ている。

「答えて、ウォーロック!宇宙ステーションで何があったの!？」

『……よそつ。この話はお終いだ』

すると、スバルの目に、涙が浮かぶ。その思いと共に、怒りが爆発する。

「何でだよ、ウォーロック!？やっぱり君が父さんを殺したんだ!だから何も言えないんだ!そうなんだろ!？」

「……………」

ウォーロックは何も言わず、スバルを見ている。

「……………絶交だ、ウォーロック……………絶交だ！二度と僕の前に姿を現すな！！」

「……………そうか…俺が信用できねえなら仕方がねえな。短い付き合いだったか…」

スバルは絶交という2文字の言葉を放つ。ウォーロックの閉じていた口は、その言葉でやっと口が開いた。

「だが、スバル、FM星で殺伐と育った俺だが、お前のおかげで少しだけ地球人の感情を理解できるようになった気がする。…“友情”とかいう奴をな」

「!?!?……………」

「まあ、俺の勘違いかもな。あばよ、スバル」

そう言って、一体の電波体は一筋の光となり、空の彼方へ消えていった。

「……………ウォーロックのバカやろ……………!!!」

最後に、絶交した一体の電波体の名前を思いっきり叫んだ。だが、その彼に声が届く事は無かった。

## 第51話 キグナス軍団（後書き）

あかねさん凄いなあ。泣きたいのを我慢して笑顔を見せるなんて…

何か今回自分で書いてて、あかねさんとかウォーロックの言葉でちよっと泣きそう（ノ―；）

さて、本格的に本編の中間地点ぐらいまでやってきました。電波変換装置、とても使える代物なんですよね。まあ、アニメ見た人にはわかると思いますけど…

そろそろあの三体が出てくる頃なんですよね。早くあの力使わせたいなあ。

それでは感想待ってます



第52話 電波クライシス(前書き)

今回は場面が変わるところが多いです(^| ^:)

## 第52話 電波クライシス

### サテライト管理局

スバルが入院してから次の日のサテライト管理局。サテライト管理局とは、地球の電波環境を管理しているサテライト、ペガサス、レオ、ドラゴンの三基の三基を管理している施設である。

サテライト管理局の中では上のモニターに三基のサテライトを映し出している。そして、多数のコンピューターでサテライト状態を点検している。その時の数値もモニターに映し出されている。

「原因が分からないだと?」

すると、こここの局長が一人の職員に問いかける。

「ええ、何度もチェックしましたが、ペガサス、レオ、ドラゴン…どのサテライトにもこれと言って以上は……」

「地球の電波環境への影響は?」

「ありません」

「……なら、昨日から見られるこのウェーブスペクトルの乱れは何だと思っ?」

ウェーブスペクトルと言うのは、電波が分光器によって波長順に分解したものである。昨日から何度も微弱ではあるが、ウェーブスペクトルの乱れを感じているのだ。

「毎回一ミリ秒以下とはいえ、三基同時にだぞ」

「わかりません。元々サテライトには、私達の理解を超えた未知の領域が存在しています。設計した科学者グループでさえ説明できなかったという噂ですから……」

「……確かにオーバーテクノロジーだよ。サテライトの完成で、電波環境は一気に100年以上も飛躍したんだから」

職員が言った言葉に頷きながら呟く局長。すると、管理局中にブザーが鳴り響く。

「ウェーブスペクトルの乱れです！」

コンピューターを操っていた職員一人が局長の方へ振り向き言った。

「またか」

「局長、もう一度以上がないか調べてみます」

「頼む。何もなければそれにこした事はないが……。私には何だかこの一ミリ秒以下の乱れが、三基のサテライトの心臓の鼓動のよう……何だかそんな気がしてなんのだ」

## コダマ病院

スバルとあかねは現在、病院のロビーにあり、いくつもある長椅子に座っている。

「良かったわね、直ぐに退院できて。スバルはここで待ってて。手  
続きしてくるから」

「うん」

そう言つと、あかねは立ち上がり受付へと向かう。

「……………」

スバルはトランサーを開き、何も映っていないディスプレイを見ながら、昨日の事を思い出していた。

## 回想

「何でだよ、ウォーロック!? やっぱり君が父さんを殺したんだ! だから何も言えないんだ! そうなんだろう!?」

「……絶交だ、ウォーロック……絶交だ! 二度と僕の前に姿を現すな!」

「……ウォーロックのバカやる……!」

## 回想終了

「スバル?」

「えっ?」

すると、あかねが受付から帰ってきて、スバルに声を掛ける。

「どづしたの、ぼんやりして？」

「ごめん、何でもないよ」

笑顔で答えた。あかねに心配させたくないためだ。

「そう、じゃあ帰りましょう」

スバルはトランサーを閉じ長椅子から立ち上がる。

## 再びサテライト管理局

今度は、ウェーブスペクトルとは違い、緊急時のサイレンが鳴り始める。

「局長！正体不明の電波エネルギーが、急速に接近中！」

一人の職員がレーダーを見て、局長に知らせる。レーダーには六つの電波が凄い速さで向かってくるのを映し出されている。

「セキュリティレベルを9<sup>ナイン</sup>へ変更」

局長は冷静に対処策を考え、命令する。

「レベル9へ変更します」

職員は命令に従い、コンピューターを操ってセキュリティを変更した。

「正体は何であろうと、レベル9のセキュリティを破る事は絶対に不可能だ」

「それはどうかな」

すると管理センターの外で、宇田海が局長の言葉を聞いていたかのように反応し、トランサーで何かを入力した。

すると、モニターにW A A N I N Gの文字が映り、映し出されていたセキュリティレベルの数値が、みるみるうちに激減していく。

「!? 大変です! セキュリティが解除されて行きます!」

「何!?!」

「電波エネルギー接近! 真上です!」

ドカアアアアン!

真上を見た瞬間、天井が壊され、破片が落下してくる。

「うおおおお!?!」

局長はいきなり事で目を瞑ってしまった。そして、目を開けるとそこには、オックス・ファイア、リブラ・バランス、オヒュカス・クイン、キャンサー・バブル、ウルフ・フォレスト、クラウン・サンダーの姿があった。

『サテライト管理局は、FM星人が占拠した』

『占拠したブク』

オックス・ファイアの後にキャンサー・バブルが言った。



ウィーン！

すると、扉が開き宇田海が入ってくる。

「良くやった」

「!?!」

局長達は宇田海の方へ振り向く。

「次は三基のサテライトを掌握する」

宇田海は管理局のコンピューターに向かってゆっくりと歩き出す。

「やめろ！そんな事はさせんぞ！」

『フン！』

「ぐわあー！」

局長は宇田海を止めようとしたが、オックス・ファイアの拳に吹き飛ばされた。

「「「「局長！」「」「」

職員達は吹き飛ばされた局長に近寄って行く。そして、他に何もさせないようにつックス・ファイアとキャンサー・バブルは見張りをする。

宇田海はサテライトを管理しているコンピューターを操作し始める。

「地球人にサテライトのおもしろい使い方を見せてやろう」

## スバル宅      スバルの部屋

スバルは病院から家へ帰り、自分の部屋で天地と電話をしていた。

『本当にウォーロックが大吾先輩を殺したんだろうか？』

「天地さん……」

『そう言ったのは宇田海なんだろう？キグナスとかいう、FM星人に操られていた』

「……そうだけど……」

確かに、ウォーロックの口から聞いたわけじゃなく、キグナスから聞いたことだ。もしかしたら、キグナスがスバルを倒すための心理作戦だったかもしれない。だから、実際どうなのか、スバルにも分からない。

『ウォーロックが犯人なら、そんな悪い奴が敵にやられた君を助けてくれと私に頼みに来るだろうか？』

「でも……」

『ウォーロックにも何か事情があるんじゃないかな……？もう一度よく話を……ジジジ……ジー』

「天地さん？天地さん！」

すると、いきなり電話が切れ、ディスプレイから天地の顔が消える。

## 台所

あかねはフードディスプレイで何かを作っていた。

「……あれ？」

すると、使っている途中でフードディスプレイの電源が切れてしまふ。

街中

ビルのスクリーンに、今テレビ局で歌っているミソラが映っている。

『 見上げる…ブツン! 』

すると、いきなり何も映らなくなった。

テレビ局

「おい、どうなてんだ!？」

「どわああああ…!」

テレビ局では電気が消えていて、半場暗い。スタッフ達がパニックになりながらも原因をつきとめるために右往左往に走り回っている。

「……何があったの？」

ミソラはいきなりの事にキョトンとしている。

## 再びスバル宅

スバルは自分の部屋の窓からビジライザーを掛け、外の電波を見ている。先程電話が切れた理由を調べるためだ。

「変だ…電波の様子がおかしいぞ！」

ウェーブロードとその他の電波が不安定になっている事にスバルは気づく。

## 再び台所

止まっていたフードディスプレイに電源が戻り、再び動き出す。

「あら？直った……ん？……」

チン！

フードディスプレイが出来上がった音を鳴らす。だが、そこに入っていたのは何体かのメットリオだった。

「な、何よこれ！？こんな料理インプットしてないわよ！」

すると、フードディスプレイの中からメットリオ達が出てくる。

ガチャ！

「母さん！」

すると、スバルが運良く二階から降りてくる。

「バトルカード！ソード！」

『メット〜！』

スバルはソードをトランサーに差込む。すると、メットリオ達はソードに切られ、デリートされる。

「スバル……今のは何？」

「電波ウィルスだよ」

スバルはあかねに近づいてきて言った。

「電波ウィルス？」

ジジジジジ……

「ん？」

フォードディスプレイはまだ動いており、ウィルスがまた送られてこようかする。

『メットー！』

「ひっ！」

ピ！

完全にウィルスが出て来る前に、スバルがスイッチを押し、フォードディスプレイの電源を切る。

「ふう……でも何で実体化なんて……」

スバルがウィルスが何故実体化したのか考えていると、リビングにあるテレビに電源が入った。すると、画面に宇田海が映る。

『地球人に告ぐ。地球人に告ぐ』

スバルはテレビの方へと向き変える。

アマケン

アマケンのモニターにも宇田海が映っている。

『我々は宇宙の彼方、FMプレネットから飛来した、FM星人だ！』

「宇田海……」

街中

街中のビルのモニターには、宇田海ではなく、他の六体のFM星人が映し出されていた。

『我々はたった今、地球の生命線と言うべき、ペガサス、レオ、ドラゴンの三基のサテライトを掌握した』

五陽田警部のパトカー

ウーーーーー！ウーーーーー！ウーーーーー！

パトカーを自動運転させ、ナビで見ている五陽田警部。

『偉大なるFM王の命により、これより地球人の抹殺を開始する』

「ふざけるな！何がFM星人だ！」



五陽田警部がそんな事を言っていると、目の前の道路が地割れする。

「どわああ!?!」

五陽田警部はそれを見てハンドルを切り横へ避ける。だが、電柱にぶつかってしまった。

「!?!?!?!?!」

『メット!メット!』

先程の仕業はメットリオのようだ。五陽田警部はそれを見た後、周りを見回す。

「……………電波ウイルス!」

街のいたるところに、クロッカー、ピリエース、モノソード、メットリオ等の姿があった。

その頃宇宙では

地球でウィルスが実体化している頃、地球から離れて行く電波体があった。…ウォーロックだ。

『……だいぶ遠くまで来ちまったなあ。…スバルの奴、今頃どうしてるだろう……』

ウォーロック……ウォーロック……！

すると、地球の方からウォーロックの名前を呼ぶ声が聞こえた。ウォーロックは止まり、地球に振り返る。

『あの声は…何か懐かしさを覚える不思議な声……そうだ！FM星を裏切ったあの時も、俺はあの声に導かれて地球へ……だが待てよ。あの時よりも声は微かだ……今にも消えそうなくらい……まさか、地球に何か！？』

ウォーロックは今来た道を折り返し、地球へと向かって行った。

街中

「パルスソング！」

「風の舞 風月漸！」

街中ではハーブ・ノートとジャスミン・ハートが実体化した大量のウィルスと戦っていた。ハーブ・ノートはパルスソングで、ジャスミン・ハートは風月漸で次々とバサリカ、ゴロボルタ、ビリエース、クロッカーなどのウィルスをデリートしていく。だが、ウィルスの量は全然減っていない。

「キーーーーー！！一体何百匹居るわけ！？」

『たぶん、何万匹じゃないかしら？』

大量のウィルスに怒っているハーブ・ノートの後に、ハーブが言った。

「冗談でしょ！？これじゃあ、私達の体力がもたないじゃん！」

『…ロツクマンさえ居ればまだ分からないでしょうけど』

ジャスミン・ハートがハーブの後に言った。そして、この場を打開できるかもしれない人物をジャスミンが口にした。

『メット！メット！』

すると、二人の足元に一体のメットリオが転がってきた。

「…（ブチ！）…早く来てよ、ロックマン！！！！」

二人は一緒にメットリオを思い切り蹴飛ばしてロックマンの名前を呼んだ。

「攻撃！」

少し離れた場所には、五陽田警部とサテラポリスの人達が、五陽田警部の合図と共にウィルスを御なじみのウィルスバキュームで吸いこんでいた。

「よし」

次々とウィルスは吸い込まれていく。それを見て五陽田警部は頷いた。

ベキ！

「!?!」

すると次の瞬間、ウィルスバキュームの吸い込むタンクの部分がウィルスの中からの攻撃により壊されしまった。しかも、一つだけではなく、全部だ。タンクのからウィルスが凄い勢いで出て行く。

「後退しろ！後退だ！」

五陽田警部は危険と判断し、全員を後退させ、ライセンスと共に自分も車を盾にして隠れる。

「どつする、五陽田!?!」

「……こうなりや、民間良法だ」

五陽田警部が少し考え、ライセンスに言った。

「えっ?」

「トランサーを使うんだよ。バトルカード！パワーボム！」

トランサーにパワーボムのカードを差し込む、五陽田警部。するとパワーボムが、車の向こう側に居たウィルスの上に降ってくる。それに当たったウィルス達はデリートされていく。

「見る！実体化した電波ウィルスにもバトルカードは効果がある。ライセンス、全員に伝えるんだ！」

「その手があつたか！分かつたぜ！」

「……効率は悪いがな……くっそ！何処で油を売っている。遅いぞロツクマン！」

「ん？今なんて？」

全員に伝えに行こうとしていたライセンスは、五陽田警部の独り言に反応してしまう。なんて言ったかは聞こえなかったが……

「う、うるさい！さっさと行け！」

「お、おう）さっきロツクマンって……気のせいかな？」

### 街中のビルの屋上

街中が実体化したウイルスで埋め尽くされている中、このビルの屋上に一人平然と笑って下を眺めている少年……双葉ツカサが立っていた。

「フフ、調子に乗るのも今のうちだよ、キグナス」

すると、持っていたウェーブスキャナーにパワーボムのバトルカードをスキャンさせる。すると、いつの間にか後ろに現れたビリエースが現る。先程スキャンさせたパワーボムをビリエースの頭上に出

現させ、デリートする。

『だが、ツカサ。ウォーロックの失踪だけは計算外だったな。アン  
ドロメダの鍵は奴が持っているんだぞ』

ウェーブスキャナーの中からジェミニが言った。

「ウォーロックは戻ってくるさ」

『何？』

「戻って来る……地球に星河スバルが居る限りね」

ツカサは疑う事なく、笑ってそう言った。

#### 委員長達

委員長達はウィルスから走って逃げていた。

「もっと速く走って下さい、ゴンタ君！」

ゴンタは二人より少し後から二人に付いて来ている。だが、段々ス

ピードが落ち来ている。

「だめ、もう走れないよ、俺…」

ゴンタは自分に似合わないあきらめると言う選択しを選んだ。

「あきらめないで！今にロックマン様が助けに来てくれるわよ、必ず！」

「そ、そんな事言ったって……あいて、いててて」

喋りながら走っていたためか、ゴンタは横腹が痛くなり、抑えながら走る。

『メット！メット！』

すると、ウィルスがゴンタに追い付いてきた。あともう少しで触れようとした瞬間

「バトルカード！ブラックホール！」

『メット……！』

黒い穴が現われ、ウィルスを吸い込んで行った。そして、それと同時にゴンタの足もとまる。

「はあ…はあ…はあ…」

ゴンタは四つんばいの状態になる。そのゴンタに近寄ってくる二人。



「大丈夫ですか？」

「ほら、ロックマン様が私を助けに……何だ、星河君なの？てっきりロックマン様かと……」

委員長が振り返るとそこに立っていたのはスバルだった。

「ロックマンなら来ないよ！」

「えっ？」

「もうロックマンは居ないんだ！」

第52話 電波クライシス（後書き）

うーん、長いすぎたかな…区切れれば良かった…（…）

この話し、私が始めてアニメ見たときの話しなんで良く覚えてるんですよ（笑）

いや、何度繰り返し見た事やら、（、）

それでは感想待ってまーす

### 第53話 サテライトの奇蹟

スバルは、委員長達と別れ、近くにいるウィルスをデリートしに街を駆け巡っていた。

「バトルカード！サンダーボール！」

すると、数体のクロツカーを見つけ、サンダーボールを使ってデリートした。

「……ん？……！？くっ！」

倒した後、タイヤの音が聞こえたため後ろを振り返る。すると、モエローダーがスバルに向かってつつ込んで来ていた。スバルは何とか横に避ける。

「…あ！くっ！」

避けた後、周りを見て見ると、数体のモエローダーに囲まれていた。モエローダーはゆっくりと近づいてくる。すると、いきなり目の前にビグリッパが現われ、斧をスバルの近くの地面に振り下ろす。

ドカアアアアン！！

「！！？うわあああああ！！！」

地面にはクレーターができる。するとそのクレーターが崩れ、スバルごと巻き込んで地下へと落ちていく。すると、黄緑の光が、落ちていくスバルに向かっていく。

すると、眩い光が放たれて、その光が地下から上空のウェーブロードに向かっていく。光が晴れるとそこには電波変換したスバル、ロックマンの姿があった。

「ウォーロック！……なんで戻ってきた！？絶交したはずだぞ！」

ロックマンはウォーロックから目を逸らしてそう言った。

『そんな事言ってる場合か？一時休戦だ』

「何だって？」

ロックマンは向き直り、ウォーロックに尋ねる。

『……この戦闘が一段落したら親父さんの事を話してやる』

「本当！？」

『ああ、約束する。だから戦え！』

ウォーロックは言った後に前を見る。そこにはウィルス達が数体集まって来ていた。

「……分かった。なら休戦だ」

ウォーロックに言った後、ウィルス達の方を見るロックマン。

その頃 宇宙空間

地球の周りの宇宙空間にはいつも、水色のサテライト、ペガサス。赤色のサテライト、レオ。緑色のサテライト、ドラゴンの三基が地球を見守るように宇宙空間に浮んでいる。

しかし今、そのサテライトから「ドクン！」という心臓の鼓動のよな音が聞こえてくる。それは一基だけではなく、三基同時に聞こえてくる。しかもその鼓動の音は、徐々に早くなっていく。

「ロックバスター」

ロックバスターで目の前にいるウィルスを一掃していくロックマン。そして、地上のウィルスを一掃するために、周波数を変えて地上へと降り立つ。すると、そこには委員長達が居た。

「ああ！ロックマン様よ！愛しのロックマン様が私の前に来てくれたんわ！」

委員長がロックマンのを見て、その方向へ走り出す。だが、ロックマンは走ってくる委員長に気づかず、委員長から離れる感じに走って行く。

「FM星人はサテライト管理局だ！」

『よしー！』

ロックマン達は目の前に居る数体のモエローダーをロックバスターで倒すと、そのままジャンプして周波数を変え、ウェーブロードへ飛び移る。

「ああ…ロックマン様…何処へ…？」

委員長は小さく呟いた。

先程ハーブ・ノートはジャスミン・ハートと別れビルの屋上でウィルスと戦っていた。だが、別れたのが仇になったのか数体のモノソードにに囲まれてしまっていた。

「はあ…はあ…はあ…」

ハーブ・ノートは息使いが荒い。もう体の限界のようだ。

「……マシンガンストリゲ！」

力を振り絞り、一体のモノソードに弦を飛ばした。だが、モノソードは弦を体で弾き返した。

「!?!」

ハーブ・ノートが弾き返された事に驚いていると、隙をついて他のモノソードが近づき、手に持った剣でハーブ・ノートを切り裂く。

「きゃああああああ!」

切られたハーブ・ノートはビルの下へと真っ逆さまに落ちていく。

ガシッ!

するとそこへ、ロックマンが周波数を変えて現われ、ハーブ・ノートを抱きかかえる。そしてそのまま、ゆっくりり地面へ向かって降りて行く。

「…スバル君……遅いじゃないの…」

ハープ・ノートはそっとそう言つと、気絶して電波変換が解け、ミソラへとハープへ分離する。

「…ごめん、ミソラちゃん……」

ロックマンは小さく呟く。そして、ロックマンは地上へと降り立つ。

『ウォーロック。今回は連中、本気モード前回よ』

一緒に降りてきたハープが言った。

『…そのようだな』

『正直、地球なんてどうなっても構わないと思ってたけど……ミソラだけは、守ってあげたいの』

『お前……』

『いやーね、FM星人が地球人を好きになるなんて。負けないで、ウォーロック！アンドロメダの鍵を奪われたら最後よ！』

『分かってる！』

ハープとウォーロックの会話が終わった後、ハープはミソラのトランサーに戻る。

ウーーーーー！ウーーーーー！ウーーーーー！

すると、サテラポリスと五陽田警部がロックマンの所へやってくる。



「ロックマン！……貴様！今まで何処に隠れておった！？今度こそ逮捕するぞ！」

五陽田警部がロックマンに近づいて来て言った。

「彼女をお願いします！」

「お…おっ……」

ロックマンは、五陽田警部の言葉を無視し、ミソラを五陽田警部に任せて周波数を変えて消え去った。

「ああ！アイドルの響ミソラちゃんだ！」

「本当だ！かわいい〜！」

すると、ミソラを抱えている五陽田警部のところにサテラポリスの職員が集まってくる。

「バカモン！！早くロックマンを追跡するんだ！」

「……は、はい！」

五陽田警部は一喝加える。すると、敬礼して返事をする。

「…ですが……」

「奴の行き場所なら決まっている！サテライト管理局だ！」

「前にも聞いたけど、何だよアンドロメダの鍵って？」

ウェーブロードを使ってサテライト管理局に向かいながら、ロックマンはウォーロックに聞いた。

『FM星を裏切ったとき、盗みだしておいた俺の切り札さ！』

この前とは違い、アンドロメダの鍵の事を説明するウォーロック。

『…最悪、FM王とさし違えるつもりなんでな』

「えっ？」

サテライト管理局

「…来たか」

宇田海はモニターに映るロックマンを見てそう言った。そして自分のトランサーを開く。

「電波変換！宇田海深佑 オン・エア！」

そして電波変換し、ウェーブロードで向かってきているロックマンの前へと現われた。

「うわあ!？」

ロックマンは足を止める。キグナス・ウィングは腕を組んで構えている。

「……キグナス・ウィング！いや…宇田海さん！早くサテライトの制御を戻すんだ!…でない僕は……」

「…でないと、何です？」

「でない!…僕は宇田海さんを倒さなくちゃいけない!」

「倒す?この僕を?...フッフッフ」

キグナス・ウィングは笑みを浮かべ、笑い出す。

「宇田海さん！」

「気の毒に…父親殺しの犯人と電波変換させられて」

「!?!?……」

ロックマンはウォーロックを見る。ウォーロックの目は少し下を向いている。

「そんな精神状態で戦えますか？それにほら、君の後ろ」

キグナス・ウィングの言葉の後に振り返る。そこには、オックス・ファイア、リブラ・バランス、オヒュカス・クイーン、ウルフ・フォレスト、クラウン・サンダーの五体の電波体が別々のウェーブロードに立っていた。

「!?!?…今までのFM星人が！」

「みんな電波変換してやがる！」

ロックマンの後にウォーロックが付け足して言った。

「キグナス・ウィングの電波変換装置のお陰でな」

「電波変換装置!?!?」

「宿主となる人間が居なくても」

「俺達は自由に電波変換できるのさ!?!?」

オックス・ファイア、オヒュカス・クイーン、ウルフ・フォレストが説明した。

「では、アンドロメダの鍵を頂戴しましょう」

ロックマンはキグナス・ウイングの方へ向きなおす。

「そのほうが地球抹殺は短時間で済みますから」

「何を!?!」

「最後です、ロックマン! 行け!」

『『『『『『『『『『『『おっ!』』』』』』』』』』』』』

キグナス・ウイングの支持で全員は一気に動き出す。

「バトルカード! プレデーション! ブレイクサーベル!」

ロックマンは左手をブレイクサーベルに変えて構えた。

その頃

管理局の職員はキグナス・ウィング達は居なくなつたが、動けないで居る。理由は、キャンサー・バブルが見張りみたいな事をしてい  
るからだ。

「……………くっ!……………」

『ちよつとも動いたらこのハサミでチョッキンだブク!』

……………迫力はないが、一応脅しのようなのだ。

ガキン!

「!?!?」

攻撃でブレイクサーベルが折られてしまった。

「バトルカード!プレデーション!……………」

『スネークレギオン!』

「ぐわあああああ!……………」

ロックマンはガトリングのカードをプレデーションしようとしたが、オヒュカス・クイーンの攻撃のせいでプレデーションできなかった。すると、パトカーのサイレンが聞こえてくる。どつやら管理局に向かっていているようだ。

「はあ…はあ…」

『ファイアプレス!』

『アッパークロー!』

『フォールサンダー!』

『フレイムウエイト!』

『ゴルゴンアイ!』

ロックマンが膝をついていると、五体が攻撃をモロに喰らってしまった。

「うわあああああ!」

「キグナスフェザー!」

更にキグナス・ウィングが無数の羽を飛ばしてくる。

「!?!?うわあああああ!」

ロックマンはウェーブロードから管理局近くの茂みに落ちていく。

ウーーーーー！ウーーーーー！ウーーーーー！

すると、管理局にサテラポリスが到着する。

「連中の相手をしてやれ」

キグナス・ウィングがそう言うと、他のオックス・ファイア達は周波数を変え、サテラポリスのもとへ向かう。

ドカン！ドカン！

そして、パトカーが数台攻撃によって爆発する。オックス・ファイア達は一番先頭の五陽田警部のパトカーの前へ出現する。

「くっ！……FM星人！」

五陽田警部と他数名がパトカーを降りてくる。

『控え、控え！平民の分際で頭が高いわ！』

『二つの選択肢を与える。A、全滅。B、壊滅』

「C、攻撃だ！」

『バカめ！』

五陽田警部の選択しにオックス・ファイアがバカと言って攻撃しようとした。だが



「風の舞 突風！」

どこからともなくもの凄い風が吹き、オックス・ファイアの動きを止める。

『くっ！？何だ！？』

『…あれだ！』

オヒュカス・クイーンが上のウェーブロードを指さす。そこにはジャスミン・ハートが立っていた。そして、全員がそのウェーブロードへ飛び移る。

『てめえ、よくもやってくれたな！』

「ふん！さっさと掛かってきたら？この牛タン！」

ジャスミン・ハートがオックス・ファイアに挑発した。

『ブロロロロ！この野郎！！』

「その犬、キモ蛇女、骸骨、でくの棒、全員まとめて掛かってきなよ！」

一体一体指をさして、ジャスミン・ハートはそう言った。

『この女…！』

『言わせておけば…！』

『貴様、誰に口を聞いておる!』

『貴様に選択の余地はない!』

『ブロロロロ!覚悟しろ!』

オックス・ファイアのが言い終わると、全員ジャスミン・ハートに飛び掛る。

「……あんだ達じゃ私には勝てないよ!」

ジャスミン・ハートは不適な笑みを浮かべてそう言った。

その頃      ロックマン

ロックマンは茂みに落ちてから電波変換が解け、スバルとウォーロックに分離していた。スバルは気絶している。

『くっ！……スバル』

ウォーロックはスバルの近くで倒れていた。

『スバル…俺のために…ぐわあ！』

すると、倒れているウォーロックの背中をキグナス・ウィングが足で踏んづける。

「無様だな、ウォーロック……FM星の誇り高き戦士と呼ばれたお前が。…キグナスフェザー！」

キグナス・ウィングは羽をスバルの体の周りに放つ。

『スバル！』

「僕の爆弾は知ってるだろ？」

キグナス・ウィングは一枚の羽を空中に飛ばした。

ドカーン！

すると、その羽は空中で狭い範囲で爆発する。見たところ威力はあまり無いにせよ、生身の体で受ければ重傷になるのは間違いないだろう。

「お前の宿主の命は私の手の中と言っわけだ」

『スバルは……スバルだけは助けてくれ！』

悪魔のようなキグナス・ウィングに頼み込むウォーロック。

「なら、答えてもらおう。アンドロメダの鍵は何処だ？何処に隠した？答える！」

『……………くっ！……………』

ウォーロックは口をつぐんで言おうとしない。

「…：フン！」

パチン！

キグナス・ウィングは指を鳴らす。すると、スバルの体から一番離れた羽を爆発させた。だが、ぎりぎりでは負傷はしていない。

『やめる！……………やめてくれ……………』

「アンドロメダの鍵は？」

『俺の……………俺の体の中だ……………』

「やはりそうか」

不気味な笑みを浮かべ、ウォーロックの首を掴み、持ち上げる。そして、電波の体の中に手を入れる。

『！？グワアアアアアア！！』

「……ん……！？ウォーロック！」

ウォーロックの悲鳴で、目を覚ますスバル。

『グワアアアアア！』

今のウォーロックの悲鳴と共に、空は黒い雲に包まれる。遠い所では雷が鳴っている。すると、キグナス・ウイングがウォーロックの腹から紫色の光を放つ丸いものを取り出した。ウォーロックの悲鳴はそこでなくなる。気絶しているようだ。

「ウォーロック……！」

「フフフフ！やったぞ！ついにアンドロメダの鍵を取り戻したぞ！」

キグナス・ウイングがそう言った瞬間、黒い雲に三つの穴が開く。そこから、赤い、獅子のような姿をした電波体。緑色の龍のような姿をした電波体。水色の天馬のような姿をした電波体の三体が雲の中から降りてきた。

「何！？」

それを見て、啞然としているキグナス・ウイングと他の電波体、スバル、ジャスミン・ハート。

「な、何だあれは！？」

五陽田警部が三体の電波体を見てそう言った。すると、獅子の姿をした電波体は炎を吐き、龍のような姿をした電波体は竜巻を起こし、

天馬のような姿をした電波体は吹雪を発生させ、オックス・ファイア達に放った。

『ウワアアアアアアアア！！』

ジャスミン・ハート以外の電波体達は吹き飛ばされていった。

「す、凄い……！」

その後、三体はスバル達の方を見る。そして、天馬の目が光る。すると、スバルを何処かへ転送させた。

「くっ！」

キグナス・ウイングはウォーロックを持ったまま、周波数を変えて何処かへ消えた。その後、他の電波人間も周波数を変えて消え去った。天馬、獅子、龍の電波体も消え去った。

第53話 サテライトの奇蹟（後書き）

やっと出せたー！ー！ー！

よし、次からやっとなれを書けそうだ。…何か眠くて最後の方がちよっとわけがわからないかもです。はい、すみませんm（――）m

てか、ジャスミン・ハート五対一で勝負を挑むなんて……凄いなあ（笑）

それでは感想待ってます

## 第54話 賢者の祈り

### サテライト管理局

サテラポリスは管理局内に残りのFM星人が居ないか、中をくまなく調べていた。

「何もありません、五陽田警部！トイレからゴミ箱の中まで探しましたが…」

二人のサテラポリス職員が五陽田警部の所へやってきて状況を伝える。

「チツ！撤退した後って事か…」

「現在、サテライトは正常に可動。地球の電波環境も元に戻っています！」

二人の内一人がモニターを見せながら言った。

「くそ！FM星人め……！」



街では

五陽田警部が悔しがっている頃、天地は電波ウィルスの攻撃によってボロボロになった街を見ていた。空には先程と変わらず、灰色の雲が空を包んでいる。

「消えてしまった……あれ程の電波ウィルスの大群が一匹残らず……」

これは、先程まで電波環境が悪かったから消えているのではない。街に居た全て電波ウィルスは、あの三体が来た後直ぐに何処かへ消え去って行ったのだ。

「まるで沈没する船から、鼠が逃げ出すように……」

戦争の後のような姿の街を見ながら、天地は一人呟いた。

「無事なのか……何処に居るんだ、スバル君……？」

天地は灰色の空を見上げる。

宇宙空間      サテライトペガサス

「ええ！？…宇宙…宇宙じゃないかここは！」

ここは宇宙空間にあるサテライトペガサスの中。そこに居たのは、先程の戦いで天馬のような電波体に連れてこられたスバルだった。サテライトの中からは宇宙が見える窓があり、そこから宇宙を見たスバルが言った。

「ねえ、君達…どう言う事？」

スバルが後ろを振り返る。そこに居たのは先程の天馬、獅子、龍の姿をしている電波体だった。

『ここは地球の周りに浮ぶ人工衛星の一つ、サテライトペガサスの中』

『我々が、FM星人に処刑されようとしていたお前をここへ連れてきた』

天馬、獅子の順でスバルに説明した。

『私はサテライトペガサスの管理者、ペガサス・マジック』

『私はサテライトレオの管理者、レオ・キングダム』

『私はサテライトドラゴンの管理者、ドラゴン・スカイ』

天馬、獅子、龍の順に名を名乗る。

「……………ありがとう…助けてくれて。君たちもFM星人？」

『違う。同じ電波生命体だが、我々はAM星人』

『FM星人に故郷を滅ぼされ、地球へ逃げてきた最後の生き残り』

「…FM星人に滅ぼされた？」

ドラゴン、レオの言った言葉の後に、三体に尋ねる。

『…AM星は、FM星と同じ構成系に属する平和で美しい星だったが…FM星の最終兵器、アンドロメダによって破壊された』

ペガサスは、近くにあるモニターにある星を映し出しながら説明した。するとその星はエネルギーが集まっていき……………とてつもなく大きな爆発をした。星の破片は広い宇宙へと吹き飛んでいく。

「……………アンドロメダが最終兵器…！？」

『地球に辿り着いた我々は、地球人の科学者の心に働きかけ、三つのサテライトを作るように誘導した』

『そしてサテライトの管理者となり、地球の電波環境を進化させた』  
ドラゴン、レオも更にスバルに説明する。

『この事は、地球人は誰も知らない』

「サテライトやウエーブロードを作ったのは君達なんだ。けど、何のために？」

スバルが更に質問する。

『FM星人の襲来に備えて！』

『FM星人は凶悪な侵略者！』

『彼らは、必ず地球も狙うから！』

そう言うと三体は目を白く光らせた。

廃墟された建物

何処かに姿を消したと思われていたFM星人は、電波変換装置があるこの建物に戻ってきていた。そして、円になるように集まっていた。

『……思い出したぞ!』

オヒュカス・クイーンがいきなり全員に話始める。

『間違いない!』

『何の事だ、オヒュカス?』

みんなオヒュカス・クイーンの言った言葉に疑問を持ち、代表してオックス・ファイアが質問する。

『ロックマンに電波変換するあの少年を救った三体の電波生命体……あれはAM星人。しかも、AMの三賢者の者達だ』

『AM星人だと!?!』

『AMの三賢者と言えば、知恵と勇気をバランス良く備えた勇者達……』

『そやつらが生き延びて地球に着ておつたと言つのか?』

『うーん……こいつは強敵だぜ……』

ウルフ・フォレストの言葉と共にその場は沈黙が流れる。

『何びびってるブク！俺達にはアンドロメダの鍵があるブク！』

その場の空気を壊したのはキャンサー・バブルだ。すると、顔が下がっていた全員はキャンサー・バブルの言葉で顔を上げる。

『アンドロメダの鍵を使えば、地球人もAM星人もいちころブク』

『おお、そうであったな！』

『アンドロメダの鍵を手に入れた今、恐れる物は何も無い！』

『その通りブク！ところで、アンドロメダの鍵は何処ブク？』

『…確か、キグナスが持っていたが……』

全員が部屋中を見回しキグナスを探し始める。

『おい、そのキグナスも居ないぞ！』

だが、その部屋にはキグナスの姿は何処にも無かった。

そして再びサテライトペガサス

「FM星人は凶悪な侵略者……じゃあ、やっぱりウォーロックは父さんを……嘘だ！そんなの信じられない！……信じたくないんだ、僕……」

スバルは、俯いてるのをやめて顔を上げる。そして、拳を握り締めると、今のウォーロックへの思いを三体に伝える。

『……ウォーロックには、ある秘密が隠されている』

『彼は特別な存在なんだ』

『本人も気づいていないが……』

『ウォーロックを地球に呼び寄せたのは……我々だ』

「えっ！？君達が？」

ペガサスは首を小さく頷き、更に話し始める。

『地球に来た彼は、星河スバルと言う少年に出会い、友情を育みな

がら地球のために戦ってきた』

「友情……」

回想

スバル、FM星で殺伐と育ってきた俺だが

お前のお陰で少しでも地球人の感情を理解出来るようになった気がする

“友情”とか言うやつをな

回想終了



「ウォーロック……僕の友達だ！」

更に強く拳を握り締めるスバル。

『我々は、今のウォーロックが本当の彼だと信じている』

『だからスバル、お前も信じて欲しい』

「…そうだ、ウォーロック！ウォーロックは今何処に！？」

『心配ない。生きている』

『だが、助けが必要だ』

廃墟された建物の地下

『ウワアアアアアアアア！…くそ！…』

地下室でウォーロックは電磁に閉じ込められている。その檻から出ようと、電磁の部分を掴んだ結果、体に電撃が走り壁へと吹き飛ばされた。

「無駄だよ。電磁炉は電波生命体には敗れない」

『ぐっ！…キグナス！』

檻の前までやって来た、キグナス・ウィング。

「君の処刑は後回しだ。そこで大人しく見物していたまえ」

すると、キグナス・ウィングは懐から紫色の光を放っているアンドロメダの鍵を取り出した。

『アンドロメダの鍵！何をするつもりだ！？』

「FM王の命令を実行するのさ！」

『やめろ！』

「地球を抹殺する！このアンドロメダの鍵で！」

アンドロメダの鍵を上へとかざす。すると、アンドロメダの鍵は先程までとは比べ物にならない程の光を放つ。

## 街中

キグナス・ウイングがアンドロメダをかざした頃、街を覆っている黒い雲が円形で晴れた。すると、その晴れた部分から、とても大きな機械が転送されてきた。

「な、何だあのでかいのは!？」

サテラポリスは外に出て、街中に居た。

「あれはまさかFM星人の……!」

天地が機械を見て呟いた。

するとその機械は眩い光を放ち、中心部に紫色の球体がある人型へと変形した。

そして、地面へと降り立つ。すると、腕の部分を回転させドリル代わりにして、地中へと潜って姿を消した。

「変形して地中に潜った……」

すると、天地のトランサーから何かに反応したかのように音が聞こえてくる。天地はそのトランサーを開ける。

「今の巨大メカに向かって操縦電波が放たれている…これを使えば、操縦者の居所が……」

「ははははは！これで地球もお終いだ！！」

キグナス・ウィングは笑いながら、周波数を変え、この場から消え

去った。

『キグナス！……チツ！やばいぜ！このままだと地球もろともスバルも……！』

ブーーーーー！ブーーーーー！ブーーーーー！

すると、サテライトペガサスの中で緊急事態のサイレンが鳴る。そして、モニターに地中に潜って行く機械の映像が映し出される。

「あれがアンドロメダ……アンドロメダが発動した！」

『そうだ！FM星人の仕業だ』

『アンドロメダは地球の中心部へ行き、そこで超エネルギーを放って地球を破壊するつもりだ』

『早くアンドロメダの鍵を取り戻さないと、地球はA M星と同じ運命を辿る』

「……僕とウォーロックが喰い止める！ウォーロックの所へ僕を連れて行って！」

スバルは先程までと表情が違い、暗い表情から希望に満ち溢れたような表情に変わる。

『良く言った、スバル！我々は常にお前と共に居る！』

『受け取るがいい、ロックマンの新しい力、スターフォースを！』

『そしてスターブレイクするのだ、ウォーロックと共に！』

すると、三体は眩い光を放つ。

『ウォーロックを頼む、スバル！』

そして光が晴れる。そこには、ペガサス・マジック、レオ・キングダム、ドラゴン・スカイの絵が描かれた白いカードが浮んでいた。

「これは……バトルカード!？」

スバルは三枚のカードを手にする。すると、スバルを眩い光が包む。そして、ウォーロックが閉じ込められている電磁の檻へと現われる。

『!？スバル！スバルじゃねえか!』

スバルは電磁の檻へと近づいていく。

『ま、待て、スバル!』

そして、電磁の檻を両手で掴んだ。大量の電撃がスバルの体へ走る。

「うっ! うああ!」

『や、やめろ、スバル!』

「うっ! うっ! うおおおおお!」

バチイイイン!

すると、スバルが掴んでいた部分の電磁の檻は音を立てて跡形もなく消えた。スバルはその場に倒れこむ。良く見ると所々に火傷の後が見られる。

「はあ…はあ…はあ…」

『おい、スバル!』

心配しているウォーロックはスバルに近づいていく。

「はあ…はあ…無事で良かった…」

『バカ野郎、何て無茶を…何で来た!?!』

「決まってるだろ? 君と一緒に戦うためさ!」

『!?!? スバル…お前、俺の事…』

自分の事を信じてくれた。ただそれだけの事でも自分を信じてくれたスバルの言葉を聞いて、ウォーロックは涙を浮かべる。そのウォーロックに笑顔を見せる。

「……電波変換だ、ウォーロック！」

「……分かった！」

「電波変換！星河スバル オン・エア！」



## 第54話 賢者の祈り（後書き）

はあ〜…風邪引いて昨日更新出来なかった…（、、）

今もちよつときついです…まあ、昨日よりましだけど…

さて、スターフォース編は残すところラスト1話です！ラスト1話も気合入れて書くぞ！！

あ、ちなみに、ペガサス達は死んでません。

アニメでは寿命（？）がきて、自分達をカードに変えてスターフォースの力にしました。

ですが、この小説ではゲームと同じでロックマンに力を与えたっただけで死んでない事にします！……後で登場させるつもりだからです（笑）

それでは感想待ってます

## 第55話 スターフォース!

「おい!キグナスがアンドロメダを起動させたぞ!」

オックス・ファイアが部屋にあるモニターを見て全員に言った。モニターに映し出されていたのは、アンドロメダの鍵を使って、アンドロメダを操っている姿。

「よし、俺達も外に出るぞ!」

ウルフ・フォレストの言葉と同時に全員周波数を変えて外へと出て行く。

「おい、キグナス!勝手にアンドロメダを起動させてんじゃねえよ!」

「黙れ。お前達は私の配下である事を忘れたか?お前たちは誰のお陰で電波変換できたのか忘れたか?分かったらそこで見物している」

キグナス・ウィングの言葉にオックス達は何も言い返せなくなった。

「風の舞 鎌鼬!」

すると、オックス達に鎌鼬が向かっていく。だが、ギリギリの所で避けるオックス達。

「誰だ!?!」

鎌鼬が飛んできた方向に振り向く。そこにはジャスミン・ハートが

扇子を構えて立っていた。

「あんた達、早くアンドロメダを止めろ！でないと……」

『でないと何だよ！ファイアブレス！』

「……痛い目見るよ？…風の舞 風速！」

風速を使い、ファイアブレスを素早く避ける。

「でも、痛い目を見せるのは私じゃない」

『どう言う事？』

「ほら、もうそこに居るじゃん」

ジャスミン・ハートはFM星人の後ろの方を指す。そこに居たのはスバルが電波変換したロックマンだった。

「何！？バカな！」

『『『『『『『『ロックマン！』』』』』』』』

キグナス・ウイング言った後に、オックス・ファイア達が声を揃えて言った。

「ジャスミン・ハート、君は手を出さないで！こいつらは……僕達が倒す」

「うん。スバル君、地球は君に任せたよ！」

ジャスミン・ハートは周波数を変えてウェーブロードへと移った。それを確認すると、ロックマンはオックス達の方に振り向く。

『懲りずにまた着やがったか、ロックマン！』

『返り討ちにしてやる！』

「バトルカード！プレデーション！ガトリング！」

ダダダダダダダダダ！

ロックマンは直ぐさま左手をガトリングに変えて放つ。全員は手前で組み、ガトリングの弾を耐えている。

「ロックマンは任せたぞ。地球が減ればオックス達も無事ではない。手柄は僕の独り占めだ。フフフ！バカなロックマンだ。アンドロメダの鍵は僕が持っているのに」

不気味な笑みを浮かべながら呟くキグナス・ウィング。それを影から見ている二名の電波体。

「そうは行かないよ、キグナス」

『地球など好きにするがいい。だがアンドロメダの鍵は俺達が貰う  
』！』

『くっ！頭に乗るな、ロックマン！ワイドクロー！』

「バトルカード！プレデーション！ブレイクサーベル！」

ガキン！

飛び掛ってくるウルフ・フォレストのワイドクローをブレイクサーベルで受け止め、押し返す。

『何！？くそ…！』

『どけ！俺がやる！』

『私が行く！』

オックス・ファイアとオヒュカス・クイーンがウルフ・フォレストを押しつけて、前が出る。

『オックスタツクル!』

『クイックサーペント!』

「バトルカード!プレデーション!モエリング!」

突っ込んでくる二体に向かって、モエリングを放つ。すると、二体は重なるように当たり、吹き飛ばされる。

『『グワアアアア!』』

『うそーブク!』』

『ロックマンが強くなつとるぞ!』

今の攻撃を見て、キャンサー・バブル、クラウン・サンダーが言った。

『スバル!どうして...?』

「嬉しいからさ!こうしてまた君と一緒に居られるのが!」

『お、お前...』

スバルとウォーロックが話しているうちに、いつの間にかFM星人達に囲まれてしまう。

『敵は一人我らは六人!皆の者、一斉攻撃だ!フォールサンダー!』

『つるさいぞ骨！ファイアブレス！』

『命令は私がする！アクアウェイト！』

『誰が貴様の命令など！ゴルゴンアイ！』

『引っ込んでろ！ワイドクロー！』

『お前もブク！バブルポップ！』

全員は仲間割れしながらロックマンに攻撃する。

「バトルカード！プレデーション！バリア！」

ロックマンは困まれて攻撃されたため、全部防ぐためにバリアをはった。

『どうだ！手も足もでない、ロックマン！』

『これが我らの力じゃ！』

ロックマンは、二体が言ったように手も足もでなかった。攻撃は止む事なく続いており、防ぐ事しか出来なかった。

「せいぜい遊んでいるがいいさ……地球が消滅するその時まで」

遠くでアンドロメダを操りながらキグナス・ウィングが呟いた。

『スバル！早くこいつらを倒してアンドロメダの鍵を取り戻さねえと、お前も地球も一貫の終わりだぞ！急げ、スバル！』

「分かってる！……スターフォース……AM星人に貰った新しい力を使うときだ！」

『何！？AM星人だと！？』

ロックマンはペガサス・マジック、レオ・キングダム、ドラゴン・スカイの絵が描かれているカードを取り出した。

『！？このバトルカードは……！』

「行くぞ、ウォーロック！」

『……おう！』

ウォーロックは黄緑色の光に包まれ、トランサーへと戻る。そしてそのトランサーのペガサスのカードを指し込んだ。

すると、ロックマンを水色の眩い光が包んだ。

『何だこれは！この不思議な感覚は……』

ウォーロックが光の中でそう言うと、光が膨張し、もの凄いエネルギーを放つ。そのエネルギーに吹き飛ばされてしまいそうになるオックス達。地面を踏みしめ何とか堪えている。

光が晴れると、そこに居たのは水色の姿をして、ペガサスのような翼が生えたロックマンの姿だった。

「ロックマン！アイスペガサス！」



『何！？』

「アイスpegサスだと！？」

「ロックマンの姿が変わった……あれがスターフォース……？」

『この姿は……？』

ウォーロックが今のロックマンの姿を見て呟いた。

『お、おのれ！余を脅かすとはにつく気奴！今一度一斉攻撃じゃ！』

『よし！アンガーパンチ……！！？』

クラウン・サンダーの一事でオックス・ファイアはロックマンの所へ移動し、パンチを繰り出そうとした。だが、その時オックス・ファイアは気づいた。一斉攻撃と言ったのに“自分以外誰も攻撃していない”と言う事に。

『くっ！お前ら……！！』

オックス・ファイアは怒りに満ちながらロックマンに攻撃した。だが、ロックマンは横にジャンプして避けた。そして空中に飛んでいる状態で両手をオックス・ファイアの方へ向けた。

「スタカオベヌクバン SFB！マジシャンズフリーズ！」

ロックマンはオックス・ファイアの足元に魔方陣を発生させ、巨大

な氷柱を出現させた。オックス・ファイアはその氷柱に閉じ込められる。

『グワアアアアア！！た、退却！！』

オックス・ファイアは周波数を変えて氷柱の中から消え去った。

『オックス・ファイアを一撃で！』

「スターブレイク！」

ロックマンは地面に着地し、ウォーロックにドラゴンのカードをプレデーションさせた。

「ロックマン！グリーンドラゴン！」

すると、アイスペガサスの姿から、緑色で右腕にドラゴンの爪、両肩にドラゴン鱗のようなアーマーがついている姿に変身した。

『また変身したブク！』

『負けるか！ハウリングウルフ！』

ウルフ・フォレストは緑色の狼を三体出現させ、ロックマンに向かわせる。

『スネークレギオン！』

『トツゲキランス！ハジヨウハンマー！』

更にオヒュカス・クイーンは二体の蛇を、クラウン・サンダーはドリルを持った幽霊、ハンマーを持った幽霊をロックマンの方へ放つ。

スタカオピヌクバン

「SFB！エレメンタルサイクロン！」

ロックマンは自らを回転させ、木の葉を纏った巨大な竜巻となり、技を飲み込み三体の方へ進んで行く。

『『『！？ウワアアアアアアアアアア！』』』』

三体は竜巻に巻き込まれると、同時に周波数を変えて消え去った。残りはキャンサー・バブル、リブラ・バランスの二体だけになってしまった。

「ロックマンめ……何処であんな力を！？だがもう手遅れだ。後数分でアンドロメダは地球の中心に到着し、超エネルギーを開放する。地球が消滅する様を宇宙からゆっくりと見物してやる」

『それは無理だな！』

「！？」

「『ジャミニサンダー！』』」

すると、何処からともなく声が聞こえ、キグナス・ウイングに強力な電撃が放たれる。

「うわあああああああ！！」

キグナス・ウイングは悲鳴を上げてゆっくりと倒れる。キグナス・ウイングの体から黒い煙が上がる。アンドロメダの鍵はその場に転がり落ちる。

「ふふふふ！」

電撃を放ってきた方向にはジェミニ・スパークのWとBが立っていた。そしてWがアンドロメダの鍵を拾った。

「ジェ、ジェミニ・スパーク！貴様……！」

キグナス・ウイングは先程のダメージが酷いのか、ジェミニ・スパークを見る事はできても、立ち上がる事は出来ないようだ。

「これは僕が貰うよ」

Wがキグナス・ウイングに見せ付けながら言った。

「！？卑怯だぞ……！手柄を横取りする気が……！？」

「横取り？フツ！僕らを甘く見て貰っちゃ困るな」

「俺達の野望はもっと大きいぞ」

「な、何：！？」

「アンドロメダの力で、FM王、ケフェウスを倒し……」

『FM星を乗っ取るのさ！』

「！？うわああああああ！！」

キグナス・ウイングは思いもしなかった一言で声を上げる。

「残念だね、地球が消滅するのを見物出来なくて」

『地球と一緒に滅びな、キグナス・ウイング』

二体はキグナス・ウイングに背を向け、この場を立ち去ろうとする。

「……させるかあ！！」

だが、キグナス・ウイングが最後の力を振り絞り、ジェミニ・スパーク二体の体を掴んで動けなくした。

「！？離せ！！」

『離しやがれ！！』

体を動かして離そうとするが、キグナス・ウイングは離そうとしない。

「させるか！！FM星を滅ぼすなど、させるものかああ！！……」

『くそっ！…！？』

すると、キャンサー・バブルとリブラ・バランスの悲鳴が聞こえてきた。Bはその方向を見て見ると、こっちへ向かって逃げてる二体の姿があった。

「ロックマン！ファイアレオ！」

すると、ロックマンが赤い獅子のような姿に変身した。そしてこっちらに向かってウォーロックを構える。

「スタサオセヌクバン  
SFB！アトミックブレイザー！」

ウォーロックの口でエネルギーを溜め、一気に炎の極太レーザーをキャンサー・バブル、リブラ・バランスに放つ。すると、レーザーは二体だけではなく、ジェミニ・スパーク、キグナス・ウィングも巻き込んでいく。

『ウワアアアアアあ！！熱いブク！！』

『お、覚えておれえ！！ロックマン！！』

キャンサー・バブルとリブラ・バランスはレーザーの中で周波数を変えて消えた。

「『くっくっくっくっくっ！』」

WとBは何とか持ちこたえている。だが、Wは手がすべり、持っていたアンドロメダの鍵が吹き飛んでいってしまう。

「!?しまった、アンドロメダの鍵が！」

『くっ！ロックマンめ！余計な邪魔を！』

「『ぐわあああああああ！！』」

そして二体も耐え切れなくなり、周波数を変えてその場から消えた。

「うわあああああああ！！！」

すると、キグナス・ウィングは電波変換が解け、キグナスと宇田海に分離してしまう。

『ウワアアアアアアア！！』

そして、キグナスは炎の中で消えていった。すると、炎の中から宇田海が出てきた。そしてそのまま下へと落ちていく。

「宇田海さん！くっ！エネルギーが…！」

ロックマンは先程の大技の連発で、もう立つだけのエネルギーは残っていないかった。

ガシッ！

だが、ロックマンの代わりに戦いを見物していたジャスミン・ハートが落ちてくる宇田海をキャッチした。

「ふう、危ない危ない」

「ジャスミン・ハート！良かった…！」

『まだ終わってねえぞ、スバル！』

すると、アンドロメダの鍵がロックマンの所へ落ちてくる。ウォー  
ロックは見事口でキャッチした。

「アンドロメダの鍵！」

『いつか使ってやろうと思ってたが、こんな物があるとなんか事  
ねえ！』

ガリッ！

ウォーロックはアンドロメダの鍵を思いっきり噛み、アンドロメダ  
の鍵を破壊する。すると、鍵から紫色のエネルギーが外に出て行く。



## 地中

アンドロメダは、鍵を破壊すると同時に人型から元の姿へと戻り、動きが止まる。動きは止まったが、既に地球の中心部、中心核のところまで潜っていたので、地球の重力で中心核へと落ちていった。

「スバル君！」

アンドロメダの鍵を壊して直ぐ、天地の車が到着した。そして宇田海を車の中に寝かせる。ロックマンは電波変換を解き、ジャスミン・ハートは周波数を変えて何処かへ消える。

そしてスバルは天地と話をし始める。車で寝ている宇田海も見ながら。宇田海は気持ちよさそうに寝ていて、いびきをしている。

「はっはははは！スバル君のお蔭でやっと戻れたと言うのに、宇田海はのんきなやつだなあ」

「ううん、スターフォースのお蔭だよ」

「じゃあスバル君、また後で！地球を救ったスターフォースの話し、ゆっくり聞かせてくれよな？」

「うん！」

天地はスバルの返事を確認すると、車に乗り、宇田海を病院に運びに行くのだった。

スバルは天地が行った事を確認すると、ビジライザーを掛け、左横を見る。するとそこにはトランサーに入っていないウォーロックの姿があった。

「ありがとう、ウォーロック！」

「ん？」

「僕を助けるために、大切なアンドロメダの鍵を手放してくれて」

『礼を言うのは俺のほうだ。お前が着てくれたお蔭で命拾いしたぜ』  
照れくさそうにスバルに言うウォーロック。

「当然さ！友達だもん！」

『スバル……。お前との約束についてだが　　「ウォーロックは父

さんを殺したりなんかしてないよね？」　　！？………』

「……父さんはきっと生きています。ごめんね、ウォーロック。君を疑ったりして」

『スバル………』

二人は雲が晴れ沈みかけている夕日の中、自分達の友情を取り戻した。

### アンドロメダの鍵を壊した場所

地面に落ちている壊れたアンドロメダの鍵が落ちている。そこへ双葉ツカサがやってきた。

「フフフ！甘いね、ロックマン。ゲームはまだまだ終わらないよ」

不気味な笑み浮かべて笑いながらツカサは呟く。そして壊れたアンドロメダの鍵を右手で拾い、何も入っていないアンドロメダの鍵を見つめる。

第55話 スターフォース！（後書き）

やっと書けた。殆ど駄文だ。この頃5000文字以上も書いてる（、、、）

とまあ、今こんな感じの作者です。風邪引いてちよつと喉痛いです。春休みに風邪なんて運悪すぎ…。ちゃんと予防してたのに！！

まあ、風邪引いたのはたぶん自業自得なんで、早く寝たいと思います。それにしてもやること無くて暇だなあ（ だったら続き書け！

それでは感想待ってます

番外編 ちよつとした雑談5

どうもお久しぶりです。最近風邪気味のシューティングスターです。何だかんだで五回目です。

今回は本編で活躍した…スバル君とウォーロック、亜夢ちゃんとジヤスミン、不死宮涼介とフェニックスです。

「こんにちは」

「久しぶりだな！」

「……こんにちは」

「お久しぶりです」

「暇だから来てやったぜ！」

「Hello、地球人！」

と言つわで敵キャラまで出してみました。

「って何でこいつら居るのさー！」

「ここであつたが百年目！今日こそ私があんたを倒す！」

あゝあ、亜夢ちゃん喧嘩売ってるよ……不死宮、買っちゃだめだよ？

「ああ、分かってる。何かこいつしつこそうだし」

「な〜に〜!!!?」

おいおい、女の子にしつこいは無いだろ?しかも、相手が亜夢ちゃんだよ?私はそんな命を捨てるような事はできないけどな…(ブルブル)

「大丈夫、この前俺達が有利だったし!」

……言つとくけどそれは電波変換時の話し。電波変換してないときの不死宮と亜夢ちゃんの戦闘力の差は……残念な事に亜夢ちゃんが圧倒的に高い設定にしてあるから。天と地ぐらいの差があるから。

「えっ?…まじで?なら電波変換すれば……」

言い忘れてたけど、ここでは電波変換できないからね?てか亜夢ちゃん、絶 しちゃだめだよ!

「……………すみませんでした」

あ、不死宮が誤った。しかも土下座……。まあまあ、不死宮の方が年上なんだから許してあげてよ

「えっ?僕らより年上なの!?!」

あれ、言わなかったっけ?一歳年上の六年生だよ?

「そんなの聞いてないよ……」

「今日は見逃すけど……次は必ず倒す！」

何か燃えてるねえ。

『おいおい、暑苦しいな。もっとC.O.O.I.に行こうぜ。』

『だからテメエのその台詞似合わねえって！にしても、ジャスミンがあの左腕だったとはな……』

『ああ、あれは流石の俺も驚いたぜ』

『そんな大した者じゃないわ。左腕なんて、ある程度力を持っていて、ある程度頭が良かったら誰にでもなれるわよ』

『……なんか俺、バカにされてる気分なんだが……』

『…俺も、現左腕のはずなのに、何かけなされている気分だぜ……』

『そう言えば、ジャスミン！テメエ、24話で“私は新しく生まれ、この地球に派遣されたFM星人”とか言ってたが、あれは嘘かよ！』  
『？』

『ああ、それは作者さんに“そう言っつてウォーロックを騙せ！”って言われたから……』

『作者……テメエ……！』

あ……何だかやばそうな展開に……。でもほら、こう言っつた方が何か良くない？



『問答無用！ビーストスイング！』

ちよっ！危ない！！私病人なんだよ！？さっきからクシヤミが止まらなくて…。てか、その技使うのまだ早いよ！せめて掛け声だけでやってよ！もう、そんな事ばかりしていると出番減らすよ？

『チツ！分かったよ！』

まったく、ウォーロックはまったく！……さて、気を取り戻して本編での感想でも言ってもらいましょうか。まずロックマン事スバル君！

「えっ？僕？」

ほら、亜夢ちゃんとのデートどうだった？

「（ドキッ！）」

「へえ、あれデートだったのか、星河？」

「えっ？違うよ。ただ亜夢ちゃんに誘われて行ったただだよ」

それを聞いて真っ先に反応した亜夢ちゃん、どう思いますか？（ニヤリ）

「えっ？いや、別にあれは自分的にはデートだったとか、一緒に行けて嬉しかったとかそんな事思っていないから！」

はい、本音ツンデレありがとうございます。

「本当だからね!？」

はいはい。じゃあ次に不死宮。この光景を見てどう思う？

「うーん、そうだなあ。星河が鈍感過ぎるのと、あいつがツンデレなのが凄いベタだな」

やっぱり？私もそう思うなあ。いつそ修羅場でも作ってみるか。…  
ってアニメでそんな話があったような…。まあ良いか。次に、スターフォースの力を手に入れて絶対調なウオーロック。フェニックス戦とキグナス戦で何か思った事とかある？

「そうだなあ…。まず、フェニックスを倒すのが難しいって事。それからAM星人が俺とスバルに力を貸したってことだな。何故貸したのか俺には分からねえんだが…」

ああ、フェニックスは確かに難しいよ。なんせ、不・死・鳥だからね。AM星人が力を何故貸したのかはネタバレになるから答えられないね。ジャスミンはどう思う？

「私はフェニックスに、まさかウエザートランスを使う事になるとは思わなかったわ」

おお！フェニックスを完全になめつきってますね。それを聞いてどう思う、フェニックス？

「ん？別にどうも思わねえよ。どちらにしても俺らを倒せてねえんだからな」

余裕そうだねフェニックス。あれ？そう言えば、FM王の命令でF

M星に帰還したの？

『……………あ！忘れてた！！』

えっ？まだ行ってなかったの！？

『ああ、帰ってる途中に綺麗な星達を見ていたら帰還命令の事すっかり忘れてたぜ！おい、行くぞ涼介！』

「あ、ああ。電波変換…つてここじゃ出来なかった！！」

あ、このスタジオから出れば電波変換できるよ？

「つて、ここスタジオだったのかよ！？まあ、いいや！じゃあな！また暇になったら来てやるよ！」

『Adios！』

……………まあ、何だかんだで敵なのか良く分からないなあ。

『作者、それでお前はこの小説の作者が務まるのか？』

……………それを言われると結構傷つくんだけど…？

「それにしてもフェニックスって結構のんきなんだね」

まあ、性格を私の好きなキャラに似せてあるからね。知ってる人は知っていると思うよ。なにしろ世界的に有名なSEGAのゲームの主人公、ソ…！？…ムグ…！

「それ以上は禁句だよ！」

くっ！スバル君の癖に、私の背後から口を抑えるとは……。まあいいや。スバル君の痛いところつく質問をしてやる！

「えっ？」

君の誕生日はいつだ！？

「……………」

この小説では、ミソラちゃんと亜夢ちゃんと不死宮はあるのに主人公は誕生日の日にちが無い。てか、君の誕生日を聞いたことが無い！（ちなみに、ミソラちゃんは八月二日。亜夢ちゃんは九月二十三日。不死宮は十二月六日。ミソラ以外はオリジナル設定）

「……………あのさあ」

ん？何亜夢ちゃん？

「今言わなきゃいけない事？」

えっ？……………言われてみれば別に今じゃなくても良いか。スバル君！さっきの質問忘れて？

「えっ？あ、うん……………（忘れろって、じゃあ何で質問したんだよ……………）」

じゃあ、今度は私に質問したい事ない？

「……………じゃあ、好きな歌手とかアーティストとかいる？」

やっぱり、水樹奈々さんです！あの歌声とビブラートは半端無いよ。他にもいきものがかりさん、アクアタイムズさん、GACKTさん……全員言つときりが無いからこの辺で。

「好きな食べ物は何？」

勿論、奈々さんと同じカレーです。カレーは疲労回復にもなるからね。

『今ハマってる事は？』

そつだねえ……この頃になってとある魔術の禁書目録とかとある科学の超電磁砲にハマってるね。まあ、お金が無くて、アニメしか見れないけど……。

『喧嘩好きか？』

……変な質問してくるねえ。好きじゃないけど、やられたら倍にして返す主義はある。(本当です)(笑)( )

「今欲しいものとかある？」

いっぱいあります。禁書目録とか、奈々さんのCD、漫画、今度発売するロックマンゼロ メガコレクション、新しいICレコーダー(2G)、しゅごキャラ！の漫画とか、これら全てを揃えるお金とか……

「趣味は何？」

音楽鑑賞、野球観戦、好きなアニメの声優さんが出演してるアニメを見る事。…何、その目は？おもしろいんだよ？

『特技は？』

特技は……歌う事、声優さんの声を当てる事。……ある人が言っていました、私は声フェチだそうです（笑）…何、その目は？人を無転生に目覚めたケン　ロウみたいな目で見ろな！

『最後に自分は電波変換したいと思う？』

おお、ウォーロックにしては中々良い質問だね。……うん、したいと言えばしたいけど、何でもできるし…でも何か戦ったりするのは嫌だな。攻撃されると痛いし。まあ、ウイルスとかをボコボコにして倒すのはスカツとするだろうね（笑）

「（もしかしてS？）」「」

そう言えば亜夢ちゃん、「スターフォース」の話の時ロックマンが来る事分かってたよね？あれは何で？

「えっ？…あれは…別に“スバル君がそこに現れるって誰かに言われたから”とかじゃなくて、ただスバル君を信じてただけだよ」

へえ、そうなんだ…。（正直だな……いつかスターフォースの話の亜夢編を書きます。スバルがペガサスにサテライトに連れて行かれた後、亜夢はどうしてたのかと言う話です）

そう言えば、「電波クライシス」の時、五対一で電波体に勝負だつて挑んだよね？あれは凄いなと思う。

「えっ？うん。でも、あんな奴ら五対一でも余裕でしょ？何なら六対一でも良かったよ？ウエザートランスしなくても倒せるよ？」

スバル君は六対一でちよつと押され気味だったけどね。でもスターフォース使ってから余裕で倒してたよね。

「お、奥の手使わなくても勝てるって……本当に次元が違う……」

まあ、なんせ天候を使えばジェミニだって超える力があるらしいからね。……恐ろしい……。

さて、明日は退任式で学校に行かなくてはいけないのでこの辺で失礼します。後風邪が酷くなりそうなんで……

「作者大丈夫？」

まあ何とか……それでは失礼します。……クシャミでそう……

「お大事に。それでは失礼します」

『早く元気になれよ！じゃあな！』

『お大事にして早く寝てくださいね。では失礼します』

「……それじゃあ」

## 第56話 結集！FM星団

街外れの廃墟された建物

オックス、リブラ、オヒュカス、ウルフ、クラウンの五体の電波体は部屋に通信機器でFM星に通信しようとしていた。

『FM星！FM星！応答してくれ！』

『通信を！俺たちに指示を！』

『ウェーブロードの接続を要請する』

オヒュカス、ウルフ、リブラの順に通信機器を使った。だが、通信機器からは『ジジジ』という音しか聞こえてこない。どうやらこの前の戦いで凄い量の電波が発生し、その時に通信機器を狂わせたようだ。そのため通信機器は使い物にならないのだろう。

『くっ！』

バン！

痺れを切らしたオックスが通信機器を叩いた。たぶん今の一撃で本当に壊れてしまったと思われる。

『俺達はこれからどうすればいいんだ…？』

『本国と連絡がとれぬとは』



『ウェーブロードも繋がらないから、帰るにも帰れない』

オックスが言った言葉にクラウン、リブラが頭を抱えながら答えた。

『くそ！これもみんなキグナスのせいだ！』

『居なくなつた奴を責めても仕方なかるうに』

『うるせえ！』

『うるさいのはお前だ』

『何だ、やるつてのか！？』

クラウン、オヒュカスに今にも攻撃しようしているオックス。

『よせよせ！』

『今は言い争つてる場合じゃないぞ！』

それを止めに入るリブラとウルフ。すると、もう一体の電波体がゆつくりとやって来た。

『オッホン！』

『『『『『ん？』』』』』』

全員はもう一体の電波体、キャンサーの方に振り返る。

『オイラにみんな任せなブク！』

『……………』

暫く沈黙が流れ、全員キャンサーから目を逸らし、先程の言い争いを開始する。

『大体、あの時みんな勝手にしやがって!』

『誰も俺についてこねえからだ!』

『ワシの指示に従わぬからじゃ!』

『冷静さに欠けている』

『バランスが悪いんだよ、バランスが!』

カキン!カキン!

ウルフ、オックス、クラウン、オヒュカス、リブラの順で言った後、キャンサーの方から鉄製の物で叩いたような音が二度聞こえたため、全員キャンサーの方を振り向く。

『オイラに注目するブク!』

『お前が何だ!?!?』

キャンサーに脅すように顔を近づけるオックス。

『こ、これを見るブク』

少し怯えながら右腕のはさみを見せる。はさみが開くと中に、丸くてピカツと光を反射しているものが入っていた。

『!?!お前、それは……!』

『アンドロメダの鍵ブク!』

『だけど、アンドロメダの鍵はあの時……』

オヒュカスの言った通り、アンドロメダの鍵はあの時ウオーロックが噛み砕き、壊してしまった筈だったのだが……。

『オイラはあの欠片を素早く回収し、こつやつて修復したブク!』

『お主ごときがそこまでやったと言うのか?』

『オイラを舐めてくれては困るブク!』

『見せる!』

キャンサーはアンドロメダの鍵をウルフに渡す。全員そのアンドロメダの鍵に注目する。

何故キャンサーがアンドロメダの鍵を持っていたのかと言つと…

## キャンサーの回想

キグナスがデリートされ、アンドロメダの鍵を壊され、ロックマンに負けて海岸で落ち込んでいるキャンサー。足元には一匹のカニが横歩きしている。

『海でカニとたわむれる……はあく。これから一体どうしたらいいブク……？』

『これを使え』

すると、後ろから声が聞こえ、その方向へ振り返るキャンサー。そこには右手でアンドロメダの鍵を持った、エミニ・スパークBが居た。

『それはアンドロメダの鍵！？』

『俺がなおした』

『す、凄いブク！』

Bはキャンサーにアンドロメダの鍵を手渡す。

『これでアンドロメダを起動できれば、任務達成さ』

『イエーイ！！』

これがキャンサーが持っていた真相である

『…どうも本物らしいぞ、こりゃあ』

ウルフが持っていたアンドロメダの鍵をオックスが手で持って中を見る。

『……だが、中は空っぽだ。だめじゃねえか!』

『ハツハツハツハハハ!』

すると、キャンサーが笑い出したため、全員キャンサーの方を向く。

『お前達バカブク!』

『オラア!!!』

すると、オックスが理由も聞かずにキャンサーを殴って壁へと吹っ飛ばす。キャンサーは壁へぶつかるとその場に倒れる。

『これこれ、いきなり何じゃ?』

『こいつが調子に乗ってるからだ!』

『ここは公平に話だけでも聞いてやるう』

キャンサーは何とか立ち上がった。そして先程の話しをし始める。

『……アンドロメダの鍵にはあるエネルギーが詰まっていたブク！そのエネルギーとは、怒りや憎しみや恐怖といった負の感情。つまり……感情のマイナスエネルギーだブク！』

『そのくらい知っている』

『FMせいから持って来たマイナスエネルギーをウォーロックが破壊したから困ってるんじゃないか』

『地球人から集めればいいブク』

キャンサーがニヤリと笑ってそう言つと、全員から『何！？』と返つてきた。

『ここ地球で大勢の地球人を怒らせ、泣かせ、恐がらせれば……ア  
ンドロメダの鍵はそのマイナスエネルギーを吸収し蓄えるブク！』

『『『『『『『『『『『『』』』』』』』』』』』』

『そしてアンドロメダを起動させ、この星を破壊して任務達成ブク  
』』

『よし、それだ！』

『そのためには秘密基地が必要ブク！』

『秘密基地だあ？』

『ここより凄くて見つからない基地をみんなで作るブク！』

夜中

ある工事現場から、シヨベルカーやトラックやらの電脳に入り、動かし何処かへ持って行くキャンサー達。合わせて六台のを持って行った、つまり盗んで行ったのだ。

コダマ病院 病室

スバルと天地は、このコダマ病院に入院している宇田海の見舞いに来ていた。

「いやあ、本当に皆さんにはご迷惑お掛けしました」

宇田海は、前は見せる事がなかった笑顔をスバル達に見せている。ロックマンとの戦いを通して完全に心を開く事ができたのであろう。

「宇宙人の仕業だ。仕方がない」

「落ち着きました?」

「いや……何と言うか……あのアンドロメダは地球の内部に入ったまま……。爆発しないかと気になって気になって……」

『起爆装置であるアンドロメダの鍵をぶっ壊したんだ。爆発などするか』

「本当ですか?なら良いんですけど」

宇田海は少し落ち込む表情を見せたが、ウォーロックの言葉でまた



表情が明るくなる。

「そろそろ落ち着け宇田海。スバル君達が大丈夫って言ってるんだ」

「うん」

「はい…」

「じゃあ、僕はこれで」

「ああ、スバル君！」

「はい？」

帰ろうとしたスバルに、宇田海が呼び止める。

「あの…ありがとう！天地さんも！」

宇田海のその言葉にスバルと天地は微笑んだ。

何だかんだでキャンサー達は秘密基地を完成させた。中は広い部屋があり、部屋の中央には全員が座れるように大きな円状のテーブルがある。そして少し離れた場所には宇田海が開発した電波変換装置がおいてある。他にも大きなモニター等がある。

『我らFM星人、秘密基地の完成ブク！…ドハアア！！』

キャンサーはまたオックスに吹っ飛ばされた。何故キャンサーを吹っ飛ばしたのか理由は分からない。

『よし、これで地球人からバンバンマイナスエネルギーを奪ってやるぜ！』

『だけど……地球人ってどうやってたら泣いたり、怒ったり、恐れたりするんだ？』

『俺達FM星人は違う生き物だから……』

『ぶん殴りゃあ良いんじゃないのか？』

『そんな個々にやったところで溜まるものか』

『これは地球人の意識調査でもやるしかないかのう……』

『どっやって？』

『人間に化けるが良いのではないか？』

キャンサー以外がそんな話をしていた。そして“人間に化けて意識調査”という提案が出た。

『うん…あ！あれ使えるかも』

全員が頭を抱えて悩んでいると、キャンサーが何かを思いついた。

キャンサーは今、宇田海が開発した電波変換装置にメディアコンポーターの変わりにウエーブスキャナーを差し込み、コンピュータを操って起動させる。

『システム作動！』

ピッ！

キャンサーが最後に少し大きめのボタンを押す。すると、オックスが電波変換装置から発生した黄色い光に包まれる。光が晴れるとオックスの姿は、昔オックスと電波変換した牛島ゴンタの姿になっていた。

オヒュカス、ウルフ、リブラ、クラウンの順に黄色い光に包まれる。すると、オヒュカスは委員長ごと白金ルナに。ウルフは剪定ばさみ



すると、Bは電波変換装置の差し込んであるウェーブスキャナーのもとへと歩いてくる。

『これ、おもしろい使い方ができるぞ』

『ブク？』

コダマ小学校 屋上

昼休みになり、スバルは誰も居ない屋上でトランサーの中に居るウオーロックと空を見ながら話していた。

「残りのFM星人、これからどうするんだろっ」

『さてな。当分静かにしてるんじゃないか？』

「そっ?」

『アンドロメダの鍵はねえし、散々ぶちのめしてやったからなあ』

「だと良いけど」

バン!

「うわあ!?!」

すると、いきなり誰かに張り手うちを背中に喰らわされた。そのせいでスバルは少しよろけてしまう。

「何ボツとしてんだ?」

「授業中も上の空だったわ。そんなんじゃだめよ、星河君」

「そうですよ。もっと委員長を見習ってください」

スバルに、仁王立ちのゴンタと両手を腰に当てている委員長とメガネをクイツとするキザマロの三人が

言った。張り手したのはきつとゴンタだろう。

「はいはい」

スバルは振り返って溜息交じりに返事をした。

## トンネルの下

通行人が通るトンネルの中、カバンを肩に下げている女の人が出ていく。

『ちと物を尋ねたいのじゃが』

「!?!きやあああああああ!?!」

女の方は尋ねられた人を見た瞬間、逆方向へと逃げて行った。無理もない、と尋ねてきた人とは……いやまず人ではなく、クラウンが地球人というか幽霊に変身した姿だからだ。女の方はたぶん、背中に刺さっている矢を見て逃げて行ったのだろう。

『はて、あやつは一体何を恐がっていたのじゃ?』

クラウンは、逃げて行った理由が自分だと言う事に気づいていないようだ。

## ある交差点

ウルフは交差点に居た。するとそこでは車と車がぶつかる交通事故が起きていた。

「そっちがよそ見してたんだらう!？」

「そっちが突っ込んできたんだ!」

ぶつかった車の運転手と思われる人たちが言い争いをしている。その様子を近くで腕を組んで見ている。

『うーん、怒っている』

デパート

デパートのおもちゃ売り場の近くで、一人の四、五歳くらいの男の子が泣きながら地面に寝転んで、近くにいる母親に向かって駄々をこねている。

「買って買って買って!!--買ってくれなきゃだ!!--」

それを遠くから見ているリブラ。

『泣いている、泣いている!あれは凄いなあ』

あの男の子の光景を見て感心している様子。

「もう、知らないからね。行くわよ!!--」

「...待ってよ.....」



呆れた母親は、溜息混じりに言った後、この場を去ろうと歩いていく。それを泣き止み立ち上がって追いかける男の子。

『あれ?』

#### 遊園地

遊園地のジェットコースターに乗っている人達を眺めているオックス。

「きゃあああああああ!」

ジェットコースターの降りで大勢の悲鳴が沸きあがる。

『怖がっている、怖がっているぞ!』

そして乗っていた人達が降りてきて、オックスの前を横切った。その時間こえた言葉は「凄かった」とか「おもしろかった」と笑顔で楽しそうに言っている言葉だった。

『恐怖はどうした!?』

横切った人達の言葉を聞いて思いつきり叫んだ。

#### 映画館

オヒュカスは、映画館に来ていた。映画館では「ビッグの星」というのが上映されているようだ。すると、中から泣きながらハンカチで涙を拭いている女の人が二人出てきた。

『何をそんなに泣いている?』

「だってビヨウ様が、ビヨウ様があまりにかわいそうで……」

そう言ってこの場を去って行った。

オヒュカスは映画館の中に入り暫く映画を見ていた。

《ヒロシ！根性、根性、大根性だああ！》

今は夕日に向かって屋台を引張って行った、男の人が言った台詞だ。それを聞いて、映画を見に来た観客は殆ど泣いている。だがオヒュカスは無表情のままだ。

『……………何故泣く?』

オヒュカスは周波数を変えてこの映画館を後にした。

リブラ、クラウン、オヒユカスはキャンサーが居る秘密基地へと戻ってきた。

『よし、報告するブック！まず、地球人はどうすれば悲しむブック？』

『分からない』

『分からないのじ』

『分からぬ』

『え……ええ！？』

第56話 結集！FM星団（後書き）

長い…長すぎる…もっと短くできないものか（…）

感想待ってまーす

## 第57話 逆襲！FM星団

下校中

下校時間になり、いつもの道を下校しているスバル。だが、いきなり立ち止まり、周りに誰か居ないか確認した後、近くの路地へと入っていった。

『どうした？』

周りから見たら怪しい行動をしているスバルに、トランサーを開けウォーロックが尋ねる。

「宇田海さんが言った事が気になってさ……ちょっと見に行ってみよう。電波変換！星河スバル オン・エア！」

スバルはトランサーを構えてロックマンへ電波変換をした。

「ん？…！？」

すると、路地の前を委員長が通りかかる。そして、路地に目をやると、視界にロックマンが映った。

「よし、行こう！」

「あ！ロックマン様、消えないで！」

だが、委員長が言った時には、既にロックマンは周波数を変えて消え去った後だった。委員長はロックマンが消えた後に「はあ」と

大きな溜息をついた。

#### F M 星人秘密基地

クラウン、リブラ、オヒュカスの三体は円状のテーブルに座っている。キャンサーは三体が座っている円状のテーブルの向かい側のリーダー的存在が座る場所に座っている。キャンサーの後ろには大きなモニターがある。

『えーと…諸君分かっているのだろうか……。我々F M 星人が任務を達成するには地球人を怒らすか、怖がらすか、泣かすかする必要があるブク。だからその方法を探りに行ったのに、方法が分からないと言うブクか!？』

キャンサーが諸君なんて言葉を使っている。完全に指揮官気取りのつもりらしい。

『地球人と言う奴は誠ようわからん』

『感情がコロコロ変わる』

『不幸と言う良く分からない事でよく無くのだが』

『そんな…ブク……』

キャンサーは先程までの威勢が無くなり、表情が暗くなる。

『だが、起こる理由は我々とあまり変わらない』

『ああ、怒らせるのは容易いなようだ』

『怒らせるのと似たような方法で怖がらせる事もできるぞ。要は酷い目にあわせればいいんじゃない』

『おおー！』

『そつえば、それで泣く奴もいたな』

『結論としては、地球人を酷い目にあわせればマイナスの感情が生まれるというところか』

『問題はその量じゃ。一度に多数の地球人からマイナス感情を発生させなければマイナスエネルギーは溜まらん』

『よし、ではその作戦を立てるブク！…オックスとウルフは何処ブク？』

周りを見回してオックスとウルフを探すが、何処にも姿はなかった。つまりまだ帰ってきていないのだ。

『ん？そういえば戻っておらんな』

『たく！世話を掛けさせるブク！』

## その頃

キャンサーが世話を掛けさせると言っていたオックスは、公園のブランコに座っていた。この公園では滑り台で数人の子供が遊んでいる。すると、オックスのところにウルフが歩いてやってきた。

『じゆん』

『おじお』



オックスが見た瞬間に声を掛け、ウルフは返事をする。

『どうだ？』

『いやー、参った』

ウルフは手を腰にあて、疲れきったように言う。

『良く分かるんねえな、地球人って』

オックスは膝に頬杖をつく。

『まっただ』

『だが、何か見当がついてきたな』

『ああ、結局のところ、怒るとか怖がるとかは俺達と変わらねえ』

『そうだな』

《オックスとウルフ！今すぐ基地に帰ってくるブク》

すると、二人が持っているスターキャリアーから声が聞こえてくる。キヤンサーからの通信のようだ。

『……何のために？』

《地球人を怒らせるための作戦会議を開くブク》

『だったら、会議なんていらねえぜ』

『そつだ。俺達に任せな』

すると、オックスはブランコから立ち上がる。そして、オックスとウルフはウェーブスキャナーを自分達の前に出した。

『電波変換！』

『ウルフ オン・エア！』

『オックス オン・エア！』

ウルフは水色の光に包まれ、オックスはオレンジ色の光に包まれて電波変換し、街の大通りに姿を現した。

『ぶっこわしゃあ怒るんだ！』

『ぶっこわしゃあビビルんだ！』

オックス・ファイアは車を壊し炎上させ、ウルフ・フォレストは街灯を蹴りつけて思いつきり壊しながらそう言った。その場に居た住民は悲鳴を上げながら逃げていく。ウルフ・フォレストはそれを見て雄叫びを上げる。

『あいつら何勝手にやってんだブク!』

全員はキャンサーの後ろにある大きなモニターに映る、オックス達が街を破壊している様子を見ている。

『だが、試してみるのも悪くはあるまい』

『これで、アンドロメダの鍵にマイナスエネルギーが溜まるかどうか見ればいい』

『うん』

クラウン、リブラ、オヒュカスは、キャンサーとは違い、いたって冷静だ。

『ところであれは何だ?』

オヒュカスが言ったあれとは、オックス・ファイアとウルフ・フォレストの胸のについているマークの事だ。この前まで無かったのだが、何故か二体に自分自身のマークがついている。しかも、何か少し減っているようにも見える。

『…なんだろうブク?』

### その頃ロックマン

ロックマンは何処に行ったかと思えば、廃墟された建物のあった場所に来ていた。

「こんなに壊したっけ、僕達？」

ロックマンが言う壊した部分は、アトミックブレイザーでキグナスを巻き込んだ時に一緒に建物の一部も壊してしまった部分だ。以外に巻き込んで壊した部分は広い。

『あのかきは必死だったからな』

ウォーロックがそう言うと、ロックマンは周波数を変えて中へと入った。中は光が入ってこないため薄暗い。

「…何も残ってないね。帰ろうか」

中を見回した後、周波数を変えてウェーブロードに移って街に向かって帰り始めた。街のビルを通りかかるとそこで足を止める。そしてビルのモニターを見る。

「何だ？ニユース？」

ロックマンが居るウェーブロードの下

ウェーブロードの下では街の人達がビルのモニターに映っているニユースを見ている。何故かそこには委員長達も居る。

《街は今、大変な騒ぎです！二体の化け物が街を破壊しています！》  
すると、モニターにオックス・ファイアが映し出される。

「ああ、あれ！ゴンタ君に乗り移った化け物ですよ！」

「ええ！？あれが！？」

「何でまた現れたの？ロックマン様が退治してくださったはずなのに……」

今度はウルフ・フォレストが映し出される。

「もう一体も前に暴れた奴だ」

「オックス・ファイアにウルフ・フォレスト。一体何の為に暴れているんだ!？」

ロクマンはオックス達が暴れている現場へ急いで向かっていく。

『分からん。暫くは大人しくしてると思ったが、違ったな。とにかく急ぐぞ!』

「うん!」

更にスピードを上げた。

その頃街では

『ウオオオオオオオ！！』

オックス・ファイアは口から炎を吐き、近くにある建物を炎上させる。

『ドリヤアアアアア！！』

ウルフ・フォレストはアツパークローを放ち、衝撃波を起こす。その衝撃波で建物を破壊する。

ウーーーーー！ウーーーーー！ウーーーーー！

「御用だ御用だ御用だ！FM星人！」

すると、オックス達の前に、ウィルスバキュームを持った五陽田警部とサテラポリスの職員が立ちふさがっていた。

『ファイアブレス！』

ゴオオオオオオオ！

サテラポリスの職員に向かって炎を放つ。だが、何とかそれを全員横に避けて回避する事ができた。

『ハウリングウルフ！』

今度は三匹の緑の狼を繰り出した。だが、今度は避ける事ができず、

ウィルスバキュームを前にして吸い込もうとする。だが

「バトルカード！プレデーション！ロングソード！でやつ！」

ザン！ザン！ザン！

ロックマンが左腕をロングソードに変えて現れ、三体の狼を別々に攻撃した。三匹は攻撃を受けると跡形もなく消えた。

「出たな、ロックマン！」

「下がっていてください！」

一番前に出ている五陽田警部に行った。

「きゃあああああ！！ロックマン様！！！」

モニターを見ていた委員長が真っ先に声を上げた。悲鳴ではなく歓声を…。

「やっちまえ、ロックマン！」

「しっかり！」



ゴンタとキザマロも応援しているみたいだ。

『オックス！ウルフ！お前達も懲りねえな！アンドロメダはもう起動しねえんだぞ！』

『ハツハハ！バカめ！俺達はアンドロメダの鍵を修復したんだ！』

オックス・ファイアが高笑いした後に続ける。

「何だつて！？」

『後は地球人からマイナスエネルギーを集めるだけよ！』

『それでこんな騒ぎを起こしてるのか…』

ウルフ・フォレストの言葉を聞いて、呆れた口調で言うウォーロック。

『邪魔をするな、ロックマン！』

『叩き潰してくれる！』

そう言ってロックマンに突っ込んで行く二体。だが、ロックマンはジャンプし側宙しながらロックバスターを放つ。

『一つはつきりした。ワシらが表立って暴れれば、直ぐにロックマンが駆けつけてくる』

『邪魔されるって訳か』

『…ところであれ、減ってないか？』

オヒュカスの言葉で全員モニター注目する。すると、先程は六分一程度しか減っていなかったのが、半分程度になっている。

『確かに減ってるブク……』

『デヤアアアアアアアア！オックスタックル！』

ロックマン目掛けて突っ込んでくる。

「バトルカード！プレデーション！ジャンボハンマー！でえええい  
！！」

ロックマンは両手でジャンボハンマ・持ち、オックス・ファイアの  
頭目掛けて、横のトゲがある部分を思いっきり振り下ろす。すると、  
オックス・ファイアはそのトゲに直撃する。

『ウワアアアアア！！』

『ウオオオオオオ！アツパークロー！』

「！？ぐわあああああ！！」

ロックマンがハンマーを振り下ろして直ぐに背後から、ウルフ・フ  
オレストがやってきて、急な事に避けきれずアツパークローを喰ら  
ってしまつ。

「……………くっ！！」

空中で体制を建て直し、スタツと着地する。

『こっちには二人居るって事を忘れてねえか？』

『ぶっ潰してやるぜ！』

二人はそう言って再び構える。

『スバル、行くぜ!』

「うん!スターブレイク!」

そう言うと、ペガサスのカードを取り出し、ウォーロックをトランサーに戻してスターブレイクさせる。すると、姿がああの時のペガサスの姿へと変わった。

「ロックマン!アイスペガサス!」

『ゲゲエ!?!』

『あれは…!』

『あの時だけの姿ではなかったのか!』

『絶対に勝てない……』

『ワシらの野望もこれまでか!』

『諦めるなブック!オイラ達にも新たな必殺技があるブック!』

キャンサーがモニターから三体の方に振り返って言った。そして、

電波変換装置まで移動して何処からかバトルカードを二枚取り出した。

『バトルカード！転送ブク！』

そうやって、バトルカード、キャノンとガトリングを電波変換装置に差し込んでるウェーブスキャナーにスキャンさせる。

すると、オックス・ファイアとウルフ・フォレストが光に包まれる。

『ウオオオオオオオオオオ！！』

「何だ！？」

光が晴れると二体に左手は、オックス・ファイアにはキャノン、ウルフ・フォレストはガトリングに変化していた。

「な、何あれ！？」

『バトルカードの能力を己の中に取り込んだというのか！？』

ロックマンは攻撃を仕掛けるためにジャンプして空中へ飛んだ。

『オックスキャノン!』

『ウルフバルカン!』

「くっ!」

ドン!ドン!　　ダダダダダダ!

二体はロックマンに攻撃してきた。ロックマンは何とか右へ左へと避けていく。

『おお、行けるぞ!』

『ロックマンの新能力も恐るるに足らずブク!』

ロックマンが押されている姿を見たキャンサーは感極まって踊りだす。

『ところであれ、減ってるぞ』

確かに、先程の力を使い始めてから、半分程度あったのが激減している。

『減ってるブック…』

『減ってる……』

『…そうか、分かったぞ！これは実体化した時に与えられる電波エネルギーの量なんじゃ！』

クラウンがあのと減っていつているあれを電波エネルギーの量なんだという事に気づき、全員に説明する。

『電波エネルギーの量？』

『だから使えば使うだけ、減っていくんじゃない！』

『ゼロになったらどうなる？』

『分からん』

オックスが乱れ撃ちをしたり、ウルフがガトリングを連発しているとエネルギーがみるみるうちに減っていく。

『減っていくブック……』

そして終にはエネルギーがゼロになった。

『オラアアアアアア!!』

『デリヤアアアアア!!』

二体がロックマンに襲い掛かるうとして、ロックマンがそれを防ぐ体制に入った時に事件は起きた。

『アアアア…アア…あ、あれ!?!』

『アアアア…な、何だ!?!』

二体の姿は電波変換時前の姿に戻ってしまった。

「えっ?」

『『あ、あれ?』』

オックスとウルフは何が起きたか分からず、互いを向き合う。

「御用だ御用だ!」

すると、五陽田警部が走ってやってくる。

『『!?!?』』

二体はそれに気づき、一筋の光となってこの場を去って行く。だが



「逃がすかー！！追え！追うんだあ！！」

そう言つてサテラポリスの職員と共に二体の後を走つて追つていった。…何故、車を使わないのかは、あえてスルーで。

「……………」

この場に取り残されたロックマンは、とりあえず周波数を変えて家へ帰つていった。

## スバル宅      スバルの部屋

夕方、窓から夕日が差し込んでくる中スバルは、ベットの上に仰向けの状態で寝転がっていた。

「……………FM星人達、地球の破壊を諦めていないんだ」

『まさか、アンドロメダの鍵を修復させるとはな』

「宇田海さんの心配が本当になっちゃったね……」

### F M 星人秘密基地

『それでは今後の方針を確認するブク』

キャンサーが言った後に全員が続ける。

『一つ！俺達はF M星人は、アンドロメダを起動するため……』

『地球人を泣かせる、怖がらせる、怒らせる作戦を行なう』

『一つ！作戦はロックマンに邪魔されぬように行なう』

『一つ！実体化しての作戦行動中はエネルギー切れに注意』

『よし、ブク!』

オックス、ウルフ（いつの間にか帰ってきていた）、リブラ、オヒユカスの順で続けた。

『所で、今日のあの騒ぎで少しは溜まったかのう?』

『そうだ!あれだけ暴れたんだ!』

『少しぐらいは……』

ウルフが言った後に、後ろにあるアンドロメダの鍵がおいてある場所にみんな振り返る。だが、中には何も溜まっておらず、空っぽだ。全員はそれを見て『はあ』と大きな溜息をつく。

ある電波空間にジェミニ・スパークBが立っていた。Bが右手を開くと、キャンサー達が持っているはずのアンドロメダの鍵がそこにはあった。中には数適紫色のエネルギーが入っている。

『まあ、そう簡単に集まるものじゃないからな。しっかり頼むよ』

Bはそう言ってその場を立ち去った。

## 第57話 逆襲！FM星団（後書き）

うわぁ〜、ナゲエ（- - ;）

まあ、これ書いたんで次から話の順番をバラバラで書けると思います。あ、因みに次はスターフォース編の亜夢サイドになると思います。

そういえば今日はエープリルフルでしたね。∴今度番外編でちょっとエープリルフルのネタの話でも書いてみようかなあ（笑）

それでは感想待ってます

番外編 スターフォース編 (亜夢サイド) 前編(前書き)

今回は亜夢視点です。内容は「電波クライシス」から「スターフォース!」までです。

ミソラ視点も書こうかなあとか思ったんですけど、ミソラ結構早めにやられちゃったんで書けないんですね(笑)

番外編 スターフォーエス編 (亜夢サイド) 前編

亜夢 私は今、テレビ局のスタジオで撮影している。どんな番組って言うたら歌番組になる。はあ、今日もきついなあ〜と一つ溜息をつきながら愚痴をこぼしてみる。

『亜夢ちゃん、溜息ついてると運が逃げちゃうわよ?』

ん?何だ、誰かと思えば私のトランサーの中で居候しているジャスマンか。いきなり声がするから辺りを見回しちゃったじゃないか。

「運が逃げるから溜息つくなくなって言われても、もう何時間もここで待つてんだよ?しかもまだ私歌つてないし…。これ生放送の筈なのに何でこんな待たされるわけ?ありえないじゃん!」

と局内にある女子トイレに移動して、誰も居ない事を確認するとジャスマンにそう言った。そりゃあ、これだけ待たされれば溜息の一つや二つつきたくないと私は訴える。私はトランサーを使って、テレビを見る。何となく今生放送で歌っている人を見ていた。

「うーん、長いな。昼間からこんな長い生番組なんて聞いた事ないよ…」

そして私は更に愚痴をこぼす。すると、今歌っている人が歌い終わり、次の人へと変わった。まあ、私の番まで後3人くらいかな……。つて、あれ?ここに映ってるのミソラじゃない?つて事はこの番組出てるつて事!?!……全然気づかなかった…。

『じゃあ、そろそろ戻りましょうか?』

「…そうだね」

そんな感じでスタジオへ戻ってきた。ミソラの歌声が聞こえる。もうそろそろサビかな？

『見上げる……えっ？』

えっ？急に音楽が止まった？ていうか電気も消えた？てか、暗っ！

「おい、どうなてんだ!？」

「どわああああ!」

あ、スタッフさん達が右往左往に走り回ってる。…大丈夫かな？

「……何があつたの？」

ミソラがキョトンとしてる……のんきななあ。ってそんな事言ってる場合じゃない。

「ミソラ!」

「あ、亜夢!」

「ちょっとこっち来て!」

「えっ?ちょっと!」

私はミソラの右手を引っ張り、先程まで居た女子トイレまで走った。



途中でスタッフさんとぶつかりそうになったが、何とか避けてようやくトイレまで辿り着いた。

「はあ…はあ…疲れた」

「はあ…はあ…何、悪夢？」

「何じゃない！これきつとウィルスの仕業だよ」

「あ、そつか。じゃあ、行かなきゃね！」

「うん！ジャスミン、行くよ！」

『ええ！』

「ハープ、私達も！」

『オツケ』

私達はトランサーを構え、電波変換した。勿論その後、周波数を変えて外に出た。

私はどうせ数匹ぐらいかなあと思っていたが、予想は遙かに超えていた。何故か？それは目の前には視界に収まれ切れない程に大量のウィルスだった。

「「う、うそ……」」

数分後

「パルスソング！」

「風の舞 風月漸！」

今の攻撃でミソラは三体、私は二体のウィルスをデリートした。だけど、さっきからデリートしてる筈なのに数が全然減ってない。てか逆に増えてる？

「キーーーーー！！一体何百匹居るわけ！？」

『たぶん、何万匹じゃないかしら？』

「冗談でしょ！？これじゃあ、私達の体力がもたないじゃん！」

『…ロックマンさえ居ればまだ分からないでしょうけど』

……そう言えば、スバル君が居ない？何で？……大体なんでこんなに居るわけ！？ありえないじゃん！  
イライラしてきた……！

『メット！メット！』

……ブチ！

「(ブチ!)…早く来てよ、ロックマン!!!」

『メット~~~~!』

ざまあみる!!…考えてもしょうがない。今はこいつらを倒す事に集中しなきゃ!それに、スバル君なら必ず来てくれる。……私は…そう信じてる!

でもこのままじゃ本当に数は減らないな…でも、あれを使うにもミソラの前じゃちよっとね……そうだ!

「ミソラ、二手に別れよう!こっちは私に任せて、あんたはあつちを頼む!」

「……分かった!気をつけてね!」

「そっちもね!」

ミソラはこの場所から避難させた…これでよし……

「行くよ、ジャスミン!」

『あ、なるほど。その為にミソラちゃんを…』

「そういう事!ミソラが居たんじゃ、巻き込んだんじゃうからね……覚悟しな、ウィルス共!」

ビクッ!

ウィルス達が私が睨みつけた瞬間、震えだした……？……まあ、いいや。

「発動 ウェザートランス 光！」  
シャイン

私は扇子を天へとかざし、黄色の光に包まれて太陽の模様が所々にある着物へ変わる。

「さあ、掛かっておいで。もっとも一撃で全員倒すけどね！」

『メ、メッソー！』

おっと、今のウィルスの掛け声みたいので全員飛び掛ってきちゃった……しかも良く見たら八方から来てるよ……。……この場合、簡単に避ける事できるけど、せっかく全員一気に片付けられるチャンスでもあるんだよね……。……さっさと倒すか……。

「光の舞 蓄積&放射！はあ！」

蓄積で扇子に光を蓄えて……蓄えたエネルギーを放射をしながら回転する！……これだけで全員、光のエネルギーにあたったウィルスはデリートされる……

『メッソー！』

『ピッー』

……デリート完了。

『やったわね、亜夢ちゃん』

「ふう、疲れた〜……よし、次行くよ！」

て事で私は場所を移動したんだけど……何処に行けばいいのやら。  
……これだけウィルスが居るってことは、絶対に誰かが操っている  
って事……それはたぶん……FM星人。……でも何処に……ん？

ウーーーーー！ウーーーーー！ウーーーーー！

あれってサテラポリス？……もしかしてFM星人のところに向かっ  
てる！？………ついて行ってみる価値はある。

## サテライト管理局

「ん？ここは何処？大きな建物があるけど……ウェーブロードに誰  
かいる？」

私がここに到着して周りを見ると近くのウェーブロードに七人くらいが立っていた。それを良く見てみると一人が六人相手に戦っているように見えた。

「キグナスフェザー！」

「！？うわあああああ！」

そして気づいた。あれはFM星人と戦っているロックマンであることに。

「！？あれってスバル君？それにFM星人達が……って落ちた！？スバル君落ちた！？早く助けに行かなくちゃ！」

ウーーーーー！ウーーーーー！ウーーーーー！

「連中の相手をしてやれ」

私には一人の合図で五人が降りていく様子が見えた。でも、その方向とは逆に合図した奴がスバル君が落ちた茂みに降りていく様子も見えた。

「えっ？そっちにはサテラポリスが……でも、そっちに行ったらスバル君が……」

私は迷った。五人が降りて行った方向には力を持たないサテラポリスの人達が。でも、もう一人が降りていった方には、傷を負ったであろうロックマンが。私はどっちを助けに行くべきか迷った。

ドカン！ドカン！

サテラポリスの車が、攻撃よって壊された音が聞こえてくる。その音が聞こえてくるたびに私は焦り、考える事が出来なくなっていた。

「どうすれば…」

『亜夢ちゃん、落ち着いて』

気がつけば、でかい牛がある人を攻撃しようとしている。

「!?!危ない!?!風の舞 突風!」

私はその時、勝手に体が動いた。私が起こした突風はその牛の動きを止めた。

『くっ!何だ!?!』

『あれだ!』

一人の蛇女が私の方に指を指してくる。そして全員、私が立っているウエーブロードを囲むように周りのウエーブロードに飛び移った。そして、その時思った。「こうなったら、さっさとこいつらを倒してスバル君を助けに行かなくちゃ」って。でも、さっさと終わらせるには……

『てめえ、よくもやってくれたな!』

「ふん!さっさと掛かってきたら?この牛タン」

…敵を挑発させる必要がある。

『ブロロロロ！この野郎！！』

「その犬、キモ蛇女、骸骨、でくの棒、全員まとめて掛かってきなよ！」

『この女…！』

『言わせておけば…！』

『貴様、誰に口を聞いておる！』

『貴様に選択の余地はない！』

『ブロロロロ！覚悟しろ！』

「……あんた達じゃ私には勝てないよ！」

私はこの時ニヤリと笑った。だってまんまと全員私の挑発に引っかかって、飛び掛ってきたから。

「……風の舞 大旋風！」

私は扇子を開いて回転する。しかも大回転。この技は私自らが竜巻になって攻撃する、最終奥義。八方位から飛び掛ってくるFM星人は勿論急に止まることができず、竜巻に突っ込んできて巻き込まれる。罠に掛かったとは知らずに。

『『『『『何！？ウワアアアアアアアアアア！』』』』』



「あゝあ、これじゃあ話にならないね……さっさと決めるよ！」

私は上空に上がったFM星人を見て、風月漸を構える。勿論切りつけるため。だけどそこへ黒い雲に三つの穴が開く。そこから、赤い、獅子のような姿をした電波体。緑色の龍のような姿をした電波体。水色の天馬のような姿をした電波体の三体が雲の中から降りてきた。

「何!？」

「な、何だあれは!？」

下に居るサテラポリスの警部さんみたいな人があの電波体達を見て驚いたように声を上げた。私もあれを見てビツクリした。てか、すこし大きい……。

すると、獅子の姿をした電波体は炎を吐き、龍のような姿をした電波体は竜巻を起こし、天馬のような姿をした電波体は吹雪を発生させ、FM星人達に放った。FM星人達は悲鳴を上げて飛んでいってしまった。

「す、凄い!」

私がキョトンとしていると、その中の天馬がスバル君のほうを見て目を光らせた。するとスバル君の姿が消えた。それと同時にもう一人の電波体とウォーロックが消えた。他にもあの三体とFM星人はこの場を消え去って、私とジャスミンだけになった。

「……て、あれ?スバル君助けるはずだったのに、そのスバル君が何処かに消えた?てか、さっきの三体何!?あれ、何!？」

私は誰からも帰ってこないと思っていた質問を大声で発した。てか、本当に何〜!?

『……亜夢ちゃん』

「えっ?何?」

私が頭を抱えて騒いでいたら、急にジャスミンが話しかけてきた。何だろう?ちよつと険しい顔だけど…

『さっきのあれ、もしかしたらAM三賢者かもしれないわ』

「AM三賢者?何それ?」

『AM三賢者って言うのは、今は昔、FM星のアンドロメダが破壊した星、AM星のAM星人。AM星人は私達FM星人と同じ電波の体を持っているの』

「…そのAM星人が何で地球に?」

『……分からないわ』

「とにかく、スバル君が何処に行ったのか探しに行こう!」

私達はこの場、サテライト管理局を後にした。

番外編 スターフォース編 (亜夢サイド) 前編(後書き)

亜夢の技、ポケモンのソーラービームみたいな感じがする…。

番外編 スターフォーエス編 (亜夢サイド) 後編 (前書き)

何だかんだで前後編に分けてしまった(･･････)  
前後編に分けた割には、後編とても短いです。∴今回、アニメのシ  
ナリオ無視で、あの人を出します。

「何処に居るのよ……」

私はあれから、この街をずっと探し回っていた。だけどスバル君は何処にも居なかった。でも、不思議と思ったことがある。それは

『亜夢ちゃん…さつきまで大量に居たウイルス達が一匹残らず姿を消したわね』

「うん。嵐の前の静けさって奴？」

そう、電波ウイルスが一匹も居ないのだ。何故かは知らない。でも、これはこれで街を破壊するウイルスは居ないって事だから良いことなんだけど…。

「あ、そう言えばミソラは？」

『……周波数は感じられないわ』

んもう！ミソラがどうなったかも分からない。スバル君も何処に行っただか分からない。これからどうすれば良いの！？

『……！？亜夢ちゃん、あっちの方向に今まで感じる事がなかった周波数を感じるわ。でも、これはFM星人やウイルスの周波数じゃないわ』

「えっ？あっち？…分かった、行ってみよう！」

て事でジャスミンが言う通りの場所（といつてもウェーブロードの上）についた。ここに誰か居るの？…ん？あそこに誰か居る？とにかく声をかけてみよう。

「あの〜」

「ん？」

私が話し掛けると、こっちに振り返った。って、あれ？…人間！？えっ？嘘！人間！？どうしてウェーブロードの上に！？

『あなた…人間…よね？』

「！？扇子が喋った！？」

ジャスミン、私が思っていることを質問してくれた。うわあ、初めての人なら絶対に思う一言…ってそうじゃない！何で人間がここに！？って質問しなきゃ！

「何故人間がここに？」

「えっ？…ああ、俺は元人間だが、今は電波体だ」

意味がわからない…。何、元の人間とか今は電波体って？

「じゃあ、昔は人間だったって事？」

「ああ、そうだ。そんな事より君、スバルの友達だろ？」

「えっ？ええ、まあ。……ってスバル君を知ってるの！？」

「ああ、スバルは俺の息子だからな！」

「……！？って事は、スバル君の……お父さん？」

「そう、俺は星河大吾。この地球に生きている星河スバルの父親だ！」

あれ？スバル君のお父さん？……ちよつと待つて！でも、スバル君のお父さんって宇宙ステーションの爆発で……

「……スバル君のお父さんって、宇宙ステーションの爆発で……」

「あ、俺が何でここに居るのか知りたいって顔してるな。スバルとウォーロックには秘密にいといてくれよ？……って事だ」

『「！？……そんな事が……」』

「だから、まだスバルには言わないでくれ。それから君に手伝って欲しいことがある」

「はい？」

何だろう？険しい顔して……。

「あの場所で今、スバルが新しい力、スターフォースを手に入れてウォーロックと一緒にFM星人立ち向かおうとしている。しかし、今ウォーロックはキグナスとかいうFM星人のせいで檻に閉じ込められている」

「……私にウォーロックを助けると？」

「いや、違う。今、ウォーロックはスバルが助けに行っていて、今まさに二人の絆が深まりつつある。そこで君には、二人がロックマンに変身して戦うまで、FM星人をアンドロメダを使わせないように時間を稼いで欲しいんだ」

「要するに時間稼ぎですか？」

「ああ。せっかくスターフォースを手に入れたのに、既に地球が壊されてちゃ使えないだろ？場所はあの廃墟された建物だ」

ピカッ！

『「！？」』

何！？さっきあの建物から光が…！

「…まずい、アンドロメダが起動した…！君、頼んだよ！」

「…でも、もしスバル君がウォーロックの檻を破れなかったら？」

「大丈夫！俺の息子だからな。絶対にスバルはロックマンになってあの場所に現れる！」

何だろう？この人を見てたら、誰かに似てる……スバル君かな？やっぱ親子だからかな？…自分の子供のこと、信じてるんだ…。私も、スバル君の事、信じてみよう！



「分かりました！私に任せてください！」

「ああ！頑張ってください！」

私はスバル君のお父さんの言葉を聞いた後、風速を使って猛スピードである建物に向かっていった。スバル君が来るまでの間時間を稼ぐために。

「じゃあ、俺は宇宙に戻るか。……まだやる事があるからな。……スバルを宜しくな」

### 廃墟された建物

場所はここ……だよな？誰もいな……あ、居た。……さっきの牛タン、犬、キモ蛇女、骸骨、でくの棒、それに……カニ？まあ、いいや。何でもいからスバル君が来るまで時間稼がなきゃ……ね。

「風の舞 鎌鼬！」

『誰だ！？』

…よし、こっちに気づいた。

「あんた達、早くアンドロメダを止める！でないと……」

『でないと何だよ！ファイアブレス！』

うわあ、おっそい攻撃。

「……痛い目見るよ？…風の舞 風速！」

！？……以外と早かったね……スバル君……いや、ロックマン。みんな気づいてないんだ……。

「でも痛い目見せるのは私じゃない」

『べつ言う事？』

「ほら、もうそこに居るじゃん」

私はロックマンが居る、FM星人達の後ろに指を指した。

「何！？バカな！」

『『『『『『『『ロックマン！』』』』』』』

…見事にハモッてますね…。

「ジャスミン・ハート、君は手を出さないで！こいつらは……僕達

が倒す」

「うん。スバル君、地球は君に任せたよ！」

あゝあ、ちょっと戦いたかったけどな。まあ、さっきあの人に言われたからね。「手を出すな、俺の息子に任せろ」って…でも、もしその時は私も……

まあ、そんな事はなく、戦いは終わったんだけど…。私がやった事って言ったら、宇田海さん…だっけ？あの人を助けたぐらいかな…。まあ、人の命を救ったようだから、よしとするか。

…それにしても、何であの人はスバル君ところに帰らないんだろう？それだけが気掛かりだな……

番外編 スターフォー編 (亜夢サイド) 後編 (後書き)

てなわけで番外編終了です…まさかあの人を出してしまうとは……  
(――;) )

てか、何か無理やりまとめた感があるなあ。さて、次はエープリル  
フルネタを使って遊びを…本編を書くのはいつになるのやら……

さて、今日は昼から暇だから……禁書目録でも買いに行こうかなあ  
…お金ないけど…

番外編 50話突破！エープリル企画

はい、という訳で50話突破して軽く1週間経ちますけど、あえてスルーで。

てな訳で、設定では、こっちの世界は7月に入りますが、一時的に4月1日に見せました。

「てちよつと！何でいきなり3ヶ月も戻しちゃうんですか!?!」

おっと、いきなり出て来たね、スバル君。何でかって？そりゃあ、50話突破でネタを考えてたらちよつとエープリルフルのネタがポンツ！と浮んできたから。

「そのために季節が春に戻されちゃうのか…」

まあまあ、いいじゃないかたまには。さて、今日はスバル君といろんな場所を周って4月1日にみんな何してるか見てみよう！

「……………」

ほら、行くよ！

てな訳で、最初に学校に来てみました。あ、ちなみにスバル君と作者はみんなに見えませんが。見えない事をいい事に変な事するなよ、スバル君？

「し、しないよ！」

本当かなあ？まあ、いいや。

「ちょっとゴンタ。早くしなさいよ！」

「そうですよゴンタ君！何のために春休み真っ最中の僕達が学校に来たと思ってるんですか？」

「え、えっと……なんだっけ？」

「あなたの勉強で分からない事があるって言うから、こつちやって補習を設けてあげてるんでしょうが！」

「しっかりしてくださいよ！」

「そうだったな……めんぼくない」

お、教室にあの三人組みが入って着ましたよ、スバル君！

「…でこの光景をずっと見てるの？」

エープリルフルの嘘を付いても許せるってのは昼の12時までしか効かないってのは知ってる？って事で後二箇所周るにはずっと見てる時間はないよ。今10時だから…後二時間以内に全部見て周らなきゃ行けいんだよ。

「じゃあ、今から何するの？」

フッフッフ！ここからが本題。今から、スバル君におもしろい嘘を三人についてももらいます！

「はあ！？それって作者がやるんじゃないの!？」

フッフッフ！君は作者の言う事は絶対に聞かなければならないのだよ。てか、聞かないと出番減らすよ？

「（…脅しだ…完全に脅しだ…!）」

分かったらさっさと行く！

「あ、ちょっと押さないでよ!」

君の姿は、もう他の人には見えてるから。ではおもしろい嘘期待してるよ！ゲツドラック！

「……………はあ、何で僕がこんな事……………」

ほら、早く入った入った。出番減らすよ？

「分かったよ…」

おお、入って行きました。さて、スバル君は何の嘘をつくか楽しみだなあ！

「あら、星河君じゃない。どうしたの？」

「お前も補習を受けに来たのか!？」

「そんなわけにでしょ、ゴンタ君！スバル君はゴンタ君と違って、家で通信教育してるんですから、補習を受けなくてもいいんですよ」

「そうなのか？じゃあ、何しに来たんだ？」

「あ、うん。ちょっと用があって…」

「」「何?」「」

「くっ！（こっとなったら、やけだ!）委員長、君、委員長をおろされるらしいよ?」

「えっ?」

「ゴンタ、さっき君のお母さんが、君が大切にしている牛丼クエストのゲームを捨ててたよ?」

「何!？」



「キザマ口知ってる？牛乳飲んでも背は高くないんだよ？骨は丈夫になるけど…」

「それ本当ですか!？」

……………（爆笑中）

「こんな事してる場合じゃないわ！何で私がおろされるのか先生に問い詰めなきゃ！」

「俺の牛丼クエスト!!!!」

「ぼ、僕の努力が……………」

はい、スバル君戻ってきて〜。

「……………何か悪い事しちゃったな……………」

よし、次行ってみよう！

はい、今度はこの場所です！

「ってここ何処？部屋…みたいけど…」

ああ、ここはミソラちゃんの家だよ。

「ああ、成るほど…って、ええ！？何でミソラちゃんの家！？」

いや、今日ミソラちゃん休みだって設定にしたから……休みっていつたらここに居るかなと思って

「…入ってるけど許可取ったの？」

取ってません。

「……アイドルの家に不法侵入って…逮捕されるんじゃないかな…？」

あらあら、怯えちゃって…。じゃあ、許可取るついでに嘘付いてきちゃって？

「って中に居る状態から現われてから許可取ったら、意味ないじゃん！てか、ミソラちゃんに嘘つくの！？」

ほら、早くしないと時間ないよ！

「……分かったよ…」

結構素直だな…もうミソラちゃんには見えてるからね。あ、ミソラちゃん、リビングに居たよ。

「……………ミソラちゃん」

「！？何でスバル君がここに！？」

「（思い通りの反応…）実は　「ああ、成るほど。電波変換すれば、入ってこれるか…納得！」　えっ？あ、うん。ゴメン勝手に入っちゃって……………」

「別にいいよ！それよりどうしたの？」

「（あれ？予想とは遥かに違う反応……………まあ、逮捕されないからいいか…で、嘘考えてなかったあああああ！！）…あ、えっと、その……………」

あ、困ってる困ってる……………おもしろーい！

「えっと……………」

しょうがない。手伝ってあげるか……………スバル君…

「（あ、作者の声が聞こえる。助けて…）…」

ゴニョゴニョゴニョ…って嘘をつきなさい、スバル君！

「（…分かった。でも、これってどう言う意味？）…」

(あ、意味知らないんだ…これはおもしろくなりそうだ!)…子供は知らなくてよし!さあ、言うんだ!

「(う、うん)…ミソラちゃん!」

「何?」

「…僕のものにならないかい?」

「えっ?…ええ!?」

ボン!プシュー!

「ノノノノノスバル君ノノ本気で言ってるノノノ?」

「えっ?うん…まあ(本気って…何のこと?僕には何が何やらサッパリ…)」

爆発って…やばい…笑いが…我慢…出来ない(必死で笑いをこらえてる)

「ノノノお願いしますノノノ」

…(我慢がとかれて大爆笑中)

「え…うん(何でミソラちゃん顔赤いんだろう?)」

まさか、スバル君がものつて事を知らないなんて…また笑いそう…って時間無いんだった。行くよ、スバル君!

「えっ？あ、うん。じゃあね、ミソラちゃん！」

……ミソラちゃん完全に自分の中に入ってしまわれた……。嘘って知ったらどうなっちゃうのかな……？次行ってみよう！

はい、次にやってきたのはここです！

「ってここ何処？」

先程と同じ反応ですね。ここは亜夢ちゃんの家の中だよ。

「あ、どうりで見た事ある……って……冗談……だよね？」

これが冗談だったらどれだけ幸せか……。

「……また僕が許可取りに行くの？……さっきはうまく誤魔化せたけど、今度はただじゃすまないんじゃないかな……？」

大丈夫だスバル君！安心しろ！君にはそんな命を捨てさせるような事はさせない。私が行く！

「…えっ？作者が行くの？」

任せなさい！

「うわあ、あなたって、自分は楽しんで他の人の不幸を笑ってる、鬼みたいな人じゃなかったんですね！」

…何か心に傷を負ったんだけど…？

「さあ、行ってきてください！」

じゃあ、スバル君。先に雑談するいつものスタジオに行ってくれ  
る？

「えっ？良いですけど（あれってスタジオだったんだ…）、何でですか？」

ちよつとみんなに嘘をバラそうかと…て事で先に行つて。後でみんなを呼んでくるから。

「……分かりました」

じゃあ、また後で。よ、よし、私も行くか！あ、亜夢ちゃん！

「！？ちよつ！何で私の家に居るの！？」

い、いや、ちょっと用が……

「さっさと帰れ！！でないと、サテラポリス呼ぶから！」

くっ！（かくなるうえは……）あ、亜夢ちゃん、私は君にある人がいってた事を伝えに来たんだ！

「はあ？誰、ある人って？」

耳貸して……

「ん？」

（スバル君に……君の事どうって聞いたら……好きって言ってたよ）

「（ドキッ！す、スバル君が私のことを！？……待てよ、何か怪しい……）……本当に？」

うん。本当本当！

「（テレビで聞いた事あるけど、本当の事は一回しか言わないんじゃないかったっけ……？それが本当なら作者は嘘を言ってる事に……嘘……。そうか！今日はあの日……ハーンさては私を騙そうって訳か……」

あ、何か信じてなさそうな顔だね……

「（作者は嘘ついたんだからボコボコにしてやるのかな……いや、ここは逆に騙されたフリをして、後でボコボコにしよう……）そ、そんなの信じる訳ないじゃん！」

本当だよ。君を愛してるっていつてたもん。

「（くっ！嘘って分かってても…ちょっと嬉しいかも…って何考えてんだ！し、芝居を）…えっ？そ、そんな事言われたら…私…」

じゃあ、後でいつもの雑談するスタジオに来てね！

「あ、うん。（あれってスタジオだったんだ…）ってこら！何で勝手に人の家に入ったんだ！って逃げるな！！」

ってな訳で午前11時50分。ミソラちゃんにも先程メールでここへ来いと送りましたが…スバル君、みんなに嘘をついた気分はどうですか？

「…ミソラちゃんはこれから誤るから良いとして、委員長達は今度学校に登校した時に起こられそうなんだけど…」



大丈夫！勿論怒られるようになってます。

「それじゃあだめじゃん！」

おっとここでミソラちゃんが到着したよ。

「す、スバル君、話って何？」

あ、さっきのあれのせいで目を逸らしてらっしゃる…。

「…ごめん、ミソラちゃん！」

「えっ？」

「さっき言った事、エープリルフルの嘘なんだ。言葉の意味も分からないし…」

「……そんな…」

あ、怒っちゃだめだよ、ミソラちゃん？今日はエープリルフルしかもまだ午前中だから絶対起こっちゃだめだよ。

「スバル君の…スバル君の…バカ！！」

「！！？……ちよっと作者！やっぱりだめじゃないですか！」

うーん、やっぱり女の子にあの言葉を言った後に嘘ってのはショックが大きかったか…どうしたもんか…

「ごめん、ミソラちゃん！でも、言ったのは僕だけど、言えって言ったのは作者なんだよ！」

ちよっ！何、自分は助かるために人を売ってんの！？

「でも、本当の事でしょ！？」

まあ、確かにそうだけ……ど……あれ？み、ミソラちゃん？いや、ミソラさん？……きよ、今日は……え、エープリルフルだから……怒っ  
ちやだめだよ……？

「なるほど……こんなバカな事を考えたのは作者、あなたですか……  
死んでもらいます！」

ちよっ！キャラが、声優さんが同じのあの金髪で黒服でトランスで  
きる殺し屋の宇宙人になってるよ！？

「……死んでください」

えっ？ぎゃあああああああああああああああ！！

数分後

はい、今後一切あなたには逆らいません、変な事はしません。今日この場で誓います。

「よろしい」

「大変だな、作者も」

「スバル君！」

「は、はい！」

「君も、良く分からない言葉を使って人を騙さないでね？嘘って分かったときは凄く傷ついたんだから……」

「はい、ごめんなさい」

「わかればよろしい」

ふう、酷い目にあつたなあ……はっ！まだ亜夢ちゃんが残ってた。

「あ、来たみたいだよ」

あ、亜夢ちゃん！実はさっきほど言った……

「ああ、あれ？私に嘘をつくとは言い度胸じゃない」

あれ？もうバレてる？

「もち、今日はエープリルフルだから嘘ついたんでしょ？」

でも、さつき騙されたじゃん！

「ああ、あれは演技。あんたは私を騙したと思ってたけど、逆に私があんたを騙してたって訳」

「す、凄い。まさか、作者の逆手を取るとは」

「流石、亜夢だね！」

「まあ、私にかかればこんなの…それより、作者、よくも私を騙そうとしたわね…？」

お、怒っちゃだめだよ…？まだ午前中なんだから…

「何言ってるの？私が午前中にここに来たと思ってるの？」

えっ？…今12時…5分…って午前中終わってる！？

「私はエープリルフルは午前中で効果が切れるって知ってるから、午後になってきたんだけど？」

しまった、ミソラちゃんの相手してたら時間の事すっかり忘れてた…。

「さあ、不法侵入、及び騙そうとした容疑で覚悟してもらおうか？」

あ…あれ？さつきミソラちゃんのにノックアウトされたのに、今度は亜夢ちゃん？…スバル君、ミソラちゃん、私が生きてたらまた会おう。

「頑張つてね」

「ファイト!!」

ベキ!ゴキ!バキ!

ぎゃあああああああああああ!!

「作者は今、罰を受けていますので、今日はこの辺で」

「これからもよろしくお願いします!!」

私だけ不幸だあああああああ!!

「「「自業自得でしょ!!」」」

**番外編 50話突破！エープリル企画（後書き）**

てな訳でエープリル企画終わりです。委員長達に嘘をついたスバル君は、放課後、ずっと説教され続けたのは言うまでもありません。

次回から、やっと本編に戻ります。月日ももとに戻します。

第58話 キザマロは見た！ 前編（前書き）

更新遅くなってますみませんでしたm（――）m

## 第58話 キザマロは見た！ 前編

ある日の夜 コダマタウン

「ぐわあー！」

コダマタウン市街で、ロックマンは何者かにか攻撃され、吹き飛ばされて声を上げた。…誰に攻撃されたのか…それは、ロックマンが吹き飛ばされてきた方に居た。

『フッフッフッ！』

攻撃したのはオックス・ファイアだ。攻撃した技はたぶん、アングーパンチだと思う。

…この現状から察すると、まず、オックス・ファイアがアンドロメダの鍵にマイナスエネルギーを溜めようと街を破壊しようとしたが、ロックマンが現われ、阻止されようとしているところだろう。だが、ロックマンは今の現状から見て、オックス・ファイアにおされてい

『止めだ！』

オックス・ファイアは、今まさに止めをさそうとオックス・タツクルの構えになる。

『…スバル、上だ！』

ロックマンが立ち上がると、ウォーロックがビルの上に何かある事



に気づいた。そして、スバルはそれを見ると、「あれだ」と呟いた。

『オックススタックル!』

そうこうしている内に、オックス・ファイアが突っ込んできた。

「えい!」

だが、ロックマンは、普通するであろう、突っ込んでくるオックス・ファイアを止めるための攻撃をせず、先程見つけた物の付け根にガトリングを放つ。

『何処を狙ってやがる!?!』

オックス・ファイアがそう言っていると、ビルから、先程の物が落ちてくる。そして、オックス・ファイアの視界に入る。

『…うおおおおお、赤あああああ!』

すると、それに向かって方向を変える。だが、それを良く見て見るとそれは、水が溜めてある、貯蔵タンク。オックス・ファイアはそれに気づかないで、ただ赤色をしているっていう理由だけで突っ込んだ。牛と同じで釣られたのだ。

貯蔵タンクを破壊すると、全身を水が包む。

『今だ!』

「バトルカード!プレデーション!サンダーボール!」

『うわあああああああ！！』

ロックマンが、水を被ったオックス・ファイアにサンダーボールを放つ。すると、水は電気を通しやすいため、普通のサンダーボールとは比べ物にもならないぐらいのダメージをオックス・ファイアに与えた。これは全てロックマンの計算通りのようである。

オックス・ファイアはダメージに耐え切れなくなり、周波数を変えてこの場から逃げていった。

## FM星人秘密基地

オックス・ファイアがロックマンにやられている光景を、FM星人達が見ている。得にリブラとウルフはモニターに近い所で見ている。

『相変わらず爪が甘い』

『力はあるが、ここがたりねえ』

ウルフが自分の人指し指でこめかみを2回ほどつつきながら言う。

『まったくだ』

リブラが言った後に、2体はドジなオックスの事を笑い始める。

『しかし、あの力は惜しい』

すると、電波変換装置を使って委員長の姿となったオヒュカスが、2体会話に割って入る。オヒュカスは左手を腰にあてている。

『オックスは使い方次第だ。まあ、見ている』

殆んどの生徒は帰ってしまった。だが、スバルのクラスには委員長とゴンタが居残っていた。

「では、本日の補習はここまで！」

「ど、どうも」

ゴンタはカバンをしょい、学校の靴箱を出ていく。すると、目がバツテンになりながら何かを呟いている。

「えつと……15×7<sup>は</sup>大化の改新で、我輩はCO<sub>2</sub>だから……えつと……えつと……」

ボン！

「ウガア！……」

…ゴンタは普段使わない頭をかなり使ってしまい、容量が一気になくなり、頭が爆発した。すると、一瞬足を止めるが、また家に向かって歩き始める。

一方、委員長は帰り支度を済ませ、鼻歌を歌いながら、教室を出ようとしていた。だが、ゴンタの机を通り過ぎようとしたとき、机の上になにかがあることに気づく。

「あら？…これ、ゴンタのね……もう、ゴンタったら！」

机にあったのは、宿題をするためのノートだった。委員長はそれを見て、少し仏頂面になって教室を出て行った。

委員長は走ってゴンタを追いかける。暫く走って行くと、ゴンタの後ろ姿を見つける。

「ゴンタ！ちょっと、ゴンタ！ゴンタってば！」

3回呼ぶと、やっと気づいたのか、ゴンタは後ろを振り返る。

そして、委員長はゴンタにノートを手渡したのだった。

「確かに渡しました！」

「うーん……」

授業中、委員長がゴンタを教卓の前で何故か叱っていた。理由は、ゴンタが宿題を忘れたためだ。しかし、ゴンタはノートを持って帰ってなかったから、宿題ができなかったと言うのだ。だが、昨日委員長が下校中に渡したため、持って帰ってないと言っているゴンタはおかしい。そのため委員長がゴンタを叱っているのだ。

その頃、先生とクラスみんな（とスバル）はその様子を見ている。

委員長は仏頂面。ゴンタは困ったような表情を浮かべている。

「…俺、貰ってないよ」

「そんなわけない！確かに昨日、ちゃんと渡したわ！」

「うーん……そんなわけないんだけどなあ……どうだったかなあ……」

ゴンタは目線を上にし、頭をかきながら昨日の事を思い出している。

「ゴンタ君、本当に貰ってないんですか？」

すると、前の方に居たキザマロがゴンタに尋ねる。

「本当だって！……たぶん……」

「昨日、委員長に勉強を教えて貰ってたんですよ？だめじゃないですか、やってこなきゃ！」

「いや……」

「そうよ！せっかく教えてあげたのに！今度宿題忘れたのがばれたら、母ちゃんに家から追い出されてるよ〜なんて、私に泣きついたのは何処のどいつだったかしら？」

委員長が、ゴンタが言おうとしたところに割って入り、腕を組みながら片目を閉じ、もう片方の目でゴンタを見ながら言った。委員長がゴンタの恥ずかしい情報を言った後、クラス中（スバルを除いた）から笑い声が沸き上がる。

「……俺は貰ってない！」

バン！

ゴンタは少し赤面して、教卓を思いつきり叩いて笑い声を止めて言った。

「……うそ！この手でちゃんと渡しました！」

バン！

委員長はゴンタの行動少し、驚き後ずさったが、直ぐに我に戻る。そして委員長は教卓を叩いてゴンタに言い返す。

「嘘じゃない！」

「宿題を忘れたなら、素直に謝りなさい！」

「だから、俺は貰ってない！！」

「何ですって？」

段々ヒートアップしていく2人。お互い、一步も引こうとしない。しかし、ここで担任の先生が止めに入り、一時的にこの言い争いを中断させた。

放課後 下校中のゴンタ

ゴンタは自分の家へと、まっすぐ歩いて帰っていた。見る限り、まだ仲直りはしていないようだ。ゴンタの後ろにはキザマロが付いて来て、一緒に帰っている。

「なんだよ委員長の奴……！訳の分からない事言って……！」



まだゴンタは機嫌が悪いようだ。

「（こ）こは、触らぬの神になんとやら……関わらないのが一番です  
…）」

キザマロはそう心で思い、ゴンタに何も言わずに付いて行っている。

「…大体、お前も悪いんだぞ、キザマロ！」

「ええ！？」

すると、ゴンタが後ろに振り返り、キザマロを睨み付ける。キザマロは睨み付けられて少し後ずさる。

「お前が余計な事言うからこんな事に！」

段々迫ってくるゴンタ。迫ってくるたびに後ずさるキザマロ。

「え…え…あ、じゃあ、こ）こで！さよなら…！」

キザマロは逃げていくように両手を上げて、走って行った。ゴンタは走っていつてしまったキザマロを見て、「フン！」とそっぽを向いた。

その頃委員長

ゴンタとは違う道を帰っていく、委員長。その後ろにはスバルと亜夢従えている。

「何よ、ゴンタのあの態度？クラスメイトの悩みを解決するのが委員長の役目」

委員長は一人、愚痴を溢していた。

「まだ怒ってるよ……」

「強情だねえ……」

「（君が言えた義理じゃないと思うけど……）」

亜夢を見ながら、そう思ったスバル。まあ、確かに今までの現状じゃ、言えた義理ではない。亜夢も委員長と同じぐらい強情だから。

「せつかく渡してあげたのに……ああ、もう、ムカつく！！キーー  
——！！！」

そう言つて、額に怒りマークを浮かべながら暴れだす委員長。この怒りを静める事ができる者は誰も居ないであろう。

「あの……」

「何!？」

すると、スバルが委員長に声を掛ける。声を掛けられ振り返った委員長は、鬼のような顔をしていた。スバルと亜夢はそれを見て、少し後ずさる。

「い、いや。僕これから用事があるんだ、だからここで」

「わ、私も仕事が……」

「あ、そう！勝手にしなさい！」

委員長は2人を見た後に、そっぽを向きながら言った。

「「じゃ、じゃあ」「」

2人は声を八もらせて言った後、振り返り、委員長とは逆の方向を歩き始めた。そして、委員長も「フン！」と言つて帰り道を歩き始める。

委員長とスバル達が別れる姿を見ているものが、路地に居た。姿、格好はゴンタそのものだが、中身はオックス。電波変換装置を使ってゴンタの姿になっているのだ。

#### オックスの昨日の回想

「ゴンタ！ちょっと、ゴンタ！ゴンタってば！」

オックスがゴンタの姿で道を歩いていると、後ろから委員長の声が聞こえてくる。オックスはそれが気になって後ろを振り返る。

「忘れ物よ、宿題」

すると、委員長はオックスの前で止まり、自分のカバンからゴンタのノートを取り出し、オックスに手渡した。

『宿題？』

「何言ってるの？勉強だけして宿題やんなかったら、意味無いでしょ。しっかりやりなさいよ」

『お、おう…』

委員長の迫力に、オックスは言い返せなくなり、そのままノートを受け取ってしまう。

「じゃあね！」

そう言っつて、委員長はオックスに背を向けて、歩いて下校していった。

『……………』

オックスは委員長が見えなくなってから、受け取ったノートをマジマジと見る。そして、『フーン！』と言っつて、そのノートを道端に叩きつけて捨てたのだった。

回想終了

『どうでした？』

オックスが昨日の事を思い出していると、後ろから委員長と同じ姿をしたオヒュカスに声を掛けられる。

『……いや、なんでもない』

『そうか。じゃあ行くぞ』

オヒュカスが言うと、2人はこの狭い路地を後にする。

第58話 キザマロは見た！ 前編（後書き）

もう一度言います。更新遅くなってすみませんでしたm(\_\_\_\_)m  
これからは気をつけます。

活動報告に書いたんですけど、ここから最後の方に入るまではハツ  
キリ言つて、いらなぃんですよ。おまけみたいな感じですよ。それで  
どれを書くか迷つたり、遊んだりしてたりしたら時間が無くなり、  
書けなくなつてたわけです。

まあ、書くかどうかはともかく、とりあえずこの辺の話はちゃんと  
書きます。

こんなバカな作者ですが、これからもどうぞよろしくお願いします  
m(\_\_\_\_)m

第59話 キザマロは見た！ 後編

コダマタウン 地下鉄の中

オックスとオヒュカスは路地を後にした後、コダマタウンを巡回する地下鉄に乗っていた。そして、地下鉄の中にある路線図を見ている。

『これか？』

『ああ、良く覚えておけよ』

『お、おう…』

路線図は、思っていたより広く枝分かれしている。オヒュカスはオックスに覚えておけと言ったが、勿論オックスにそれを覚えるだけの記憶力はない。だが、オックスは目を細めて見て、何とか覚えようと必死だ。

暫くして、地下鉄を降りる2人。そのまま、改札口を通過しようとしていた。普通の人は改札口にトランサーをスキャンさせて通過して行くのだが、2人はトランサーを持っていない。そのためオヒュカスは、改札口に手をかざし、自分の電波を放って機械を狂わせて通過する。

ブブー！

『お、おお！？』



だが、オックスはオヒュカスと同じ行動をせず、堂々と通ろうとしたため、勿論のごとく通せんぼされる。その音を聞いて、オックスの方向に振り返るオヒュカス。オヒュカスは睨みつけている。

『うう！？』

あれは魔王並みの恐さだと、オックスは後ずさりながら心の中で呟いた。

暫くして      ファーストフード店↓

あの改札口を抜け出したオックスとオヒュカスは、とあるファーストフード店に来ていた。因みに、外からこのファーストフード店を見ると、2階建てで、食べるところが1階一部屋、2階の二部屋、右と左に別れている。

オックス達は一階の部屋で食べながら、今回の作戦について話し合

っていた。因みに、オックスはテキサスバーガー並みのでかさのハンバーガー、骨付き肉、ジュースを、オヒュカスはサンドイッチとコーヒーを注文している。

『なるほど、水か…』

『ああ。……地下鉄のトンネルに水を流し込んで水没させる。街にあふれる人間の怒りと恐怖……アンドロメダの鍵はそのマイナスエネルギーを吸収する。…なかなかいい作戦だろう？』

『ああ、そうだな』

『いいか？お前は私の言う事を聞いていればいい。言われた通りに行動しろ！』

オヒュカスは説明が終わると、急に目付きが変わり、オックスを睨みながら言う。オックスは少しビクつきながら、『わ、わかった…』  
と言い、ストロー付きのジュースを飲み始めながら目をそむける。

『（オヒュカスめ…この姿だと何故か迫力があるなあ………）』

## その頃キザマロ

キザマロはゴンタと別れて帰っているところだ。

「はあ、今日はやけに疲れました…ゴンタ君もゴンタ君なら、委員長も委員長ですよ…！」

そう下を向いて呟きながら溜息をつき、ゆっくり歩いていくキザマロ。すると、先程のファーストフード店を通りかかった。

「……………」

すると、キザマロの視界に、一階の部屋に居るオックスゴンタとオヒュカス委員長が入ってくる。それを見て立ち止まる。

「…喧嘩してるはずの2人がどうして…?」

…キザマロには、あれが恐ろしい作戦を企てているFM星人ではなく、仲良くしているゴンタと委員長に見えるらしい。まあ、見た目が同じなので無理もないが…。

『あとは地下鉄に流し込む水の確保だ』

『おお、水なら俺に任せろ。心当たりがある』

『ほづ…』

その後2人は食べてしまった後に、ファーストフード店から出ようとしていた。

一方このファーストフードと店の二階、外から見て右側の部屋では……

「あゝむ、モグモグモグ！何だよ、委員長の奴！」

…本物ゴンタがビッククサイズのハンバーガーを両手で持ち、持ち前の大きな口でそれを食べていく。口の中に含みながら喋るという、何とも行儀が悪い。まあ、ゴンタらしいと言えばゴンタだが…。

噛んでしまった後にジュースを飲み、それを腹に流し込む。

「…でも…少し言い過ぎたかも…」

ゴンタがそんな事を思っている中、外から見て左側の部屋では……

「はゝむ！ゴンタの奴、あんな言い方ないじゃない！」

…こちらには本物の委員長が普通サイズのハンバーガーを食べながら言った。ゴンタと同じで行儀が悪い。

そしてこちらも、噛んでしまった後にジュースで流し込む。しかし、ゴンタとは違い、ジュースを上品に両手で持って飲んでいる。

「…でも…少し言い過ぎたかしら…」

「「はあ」」

2人は違う部屋に居るのだが、同じ事を考えており、同時に溜息をついた。…以心伝心という奴だろうか？

その頃キザマロは、ファーストフード店を出て行くオックスとオヒユカスを、ゴンタと委員長と勘違いをして、後をつけている。

## 地下鉄の中

2人は並んで地下鉄の中にある長椅子に座っている。キザマロは遠くから人影に隠れてその様子を見ている。

「何処に行くんでしょう…？」

そして一人そう呟いた。

遊園地 観覧車

2人が乗っているゴンドラの一つ後ろのゴンドラから、窓に顔を押し当てながらキザマロ。

そんな事に気づいていない2人は、遊園地によくあるプールを見下ろしている。どうやら、それを見るために観覧車に乗ったようだ。

『あれ？水がない？』

『どう言う事だ？』

『おかしいな……うん……』

オックスは考えこむ。何故この前来た時（第56話参照）にはプールに水が入っていたのに、今はないのか…理由は、そのプールが何らかの理由で閉鎖されたのだ。プールの近くには「Swimming pool Closed」という看板が張り出されていた。それを知らずに考えこむオックス。

「……………これってまさか……」

2人の事をもの凄く勘違いしているであろうキザマロ。

海岸

時は進んで、2人は海辺に来ている。キザマロは2人に見つからないようにうまく隠れている。

『これをどうやって駅に引き込むつもりだ!?!』

『……………』

オックスは海の水を使うためにここへ来たようだが、どうやって駅に流すかは考えてなかったようだ。オヒュカスが言った後に何も言  
い返せなくなる。

「まさか…!」

続いて釣堀

今度は釣堀に来ていた。

『釣れた!!!』

『問題外だ!』

オックスは魚が釣れて喜んでいるようだ。だが、オヒュカスはオッ  
クスの行動に呆れている。ついでに言うと、頭を抱えている。

『すまん…』

オックスは、さすがに罪悪感を感じ、落ち込みながら誤った。

「これは…!」

その様子を遠くで釣りながら言ったキザマロ。すると、それと同時に  
大きな魚が掛かったようだ。水の中で暴れまわっている。だが、

キザマロの小さな体では釣り上げることができず、引っ張られてそのまま水の中へとボチャーン！と落ちて行った。

## その夜 スバルの部屋

夜というより深夜。スバル家はいつもこの時間には寝ている。勿論スバルも自分のベッドで寝ている。

ピピピピピ！ピピピピピ！ピピピピピ！

すると、急にトランサーから着信音が鳴り始める。電話だ。スバルはゆっくりと目覚め、トランサーを開けて電話に出る。

「…はい…？」

『大変なんですよ…！』



「大変なんだ…」

スバルは少し寝ぼけている。そりゃあ、いきなり起こされれば誰でもそうなるであろう。因みに、電話の相手はキザマロだ。

『委員長とゴンタ君が仲直りですよ!』

「仲直り?良かったね」

『しかもですよ……驚かないで下さい!何と、2人はラブラブデートをしてたんです!』

先程の一言で電話を終わらせようとしたスバル。だが、キザマロの話はまだまだ続くようだ。スバルはもう限界のようだ。電話の途中で目を瞑り始める。

「デートね、はいはい…おやすみ…」

キザマロが言った言葉を軽くあしらいながら、トランサーがある方の逆の方向に寝返りを打つスバル。

『遊園地に、海に、釣堀!カアア!めちゃくちゃ渋いです!つてええ!?!ちよつとスバル君!?!』

スバルが眠っている事に今頃気づいたようだ。

『スバル君!何、寝てるんですか!?!スバル君!スバル君!!!』

キザマロは精一杯大きな声を出した。しかし、スバルはそんなのお構いなしにスヤスヤと寝ている。この後いくら呼んでもスバルは起

きなかったと言つ。

#### その頃FM星人秘密基地

『私の作戦が実行されれば、アンドロメダの鍵は人間の負のエネルギー負のエネルギーで満たされる』

一人、アンドロメダの鍵のそばにいるオヒュカス。そして、その後ろにリブラ、キャンサー、ウルフの3体が立っていた。

『準備は進んでいるのか？』

『まあな』

『オックスの調子はどうだ？』

『ああ、問題ない』

『うまくいけばいいが』

『うまくいくさ。あいつが私の言う通りに動けばな』

オヒュカスは先ほどの作戦に相当自信があるようだ。だが、この後、本当にうまくいくのか分からなくなる自体が起こる。

ブーーーーー！ブーーーーー！ブーーーーー！

いきなり、この秘密基地のサイレンがなり始めた。始めにキャンサーが後ろの方にあるモニターの電源つけて見た。

『うわ、何だあれは！？』

キャンサーが声を上げた後、オヒュカス達もモニターの方へ向く。すると、そこには、街中にオックス・ファイアが居る映像が映っていた。

『オックス！』

『バカな！……オックスめ……！』

オックスの予想外の行動に驚く全員。その中でもオヒュカスが一番驚いている。そして、誰よりもオックスに対して怒りがこもっている。

街中

今は深夜のため、近くに建っているどこのビルにも電気が殆んどついていない。その中、オックス・ファイアが現われた。

『ちまちまやつても俺様のしょうに合わねえ！水が出ねえなら強引に出すまでだ！』

そう言つて、拳を上にも構え、下へと振り下ろす。

『アンガーパンチ！』

そして、地面を砕き、水道管をぶち破った。すると、その水道管から、大量の水が一気に溢れ出し始めた。

第59話 キザマロは見た！ 後編（後書き）

そういえばこの話してあんまり戦闘なかったような……戦闘なし  
って結構つらいなあ……あ、いえ、こつちの話です。

それでは感想待ってます

第60話 知りすぎたキザマロ 前編

「ハーツハツハツハ！アングーパーンチ！」

オックス・ファイアはアングーパーンチで次々と地面を砕き、水道管を破壊していく。そのため、破壊した水道管から、大量の水が勢い良く漏れ出している。

「オックス！何をしている！？」

すると、オックス・ファイアの後ろのウェーブロードからオヒュカスが声を掛けてくる。先程まで秘密基地に居たのだが、オックスの思わぬ行動を見てからこの場にやって来たのだろう。オックスの、作戦外行動の意味を聞くために…。

「見ての通り、作戦に協力しているところだ！」

オヒュカスの方へ振り向くと、オックスが言った。この水浸しの光景が作戦に協力してるところなんだそうだ。

「良く見る！」

「……………！？どういう事だ！？」

水は、確かに勢い良く出ているが、暫くして水の出る勢いは無くなった。何故か？それは、水道管が壊れても、直ぐに管理している水道局のコンピュータが働き、水道管に流れる水を止める仕組みになっているからだ。そのため、水の勢いが止まったのだ。

『こんな事しても、たかが知れてる！そう簡単に大量の水が手に入るはずないだろう！』

ドン！

『くっ！』

すると、何処からかロックマンのロックバスターが飛んできた。ロックバスターの弾は、オックス・ファイアの目の前の地面にあたり、そのときに爆煙が起きる。

爆煙が晴れると、向かいのビルの上にロックマンがロックバスターを構えている。

『感づかれる前に退却するぞ！』

『わ、分かった』

2対はロックマンを見て、作戦をここで失敗されるわけにはいかなかったため、周波数を変えてこの場を去る事にした。ロックマンは消え去った2体が居た場所へジャンプして降りてくる。

『あつ！？何これ！？』

オックス・ファイアが開けた穴だらけの地面を見て、ロックマンは驚いた。所々水が溜まっている場所もある。

『あいつ等何をするつもりだったんだ？』

『…落とし穴？』

『まさかあ』

ウーーーーー！ウーーーーー！ウーーーーー！

そんな事を言っていると、向かいの方からサテラポリスのパトカーが多勢やってくるのが聞こえる。

『…面倒な事になる前に行こうぜ？』

「うん」

そう言っつて、周波数を変えてこの場を後にした。その時ロックマンは欠伸をして眼に涙を浮かべていた。



午前7時半…学校へと登校していく委員長の姿が見える。今日は気温が低いのか、少し霧が掛かっている。まあ、冬の寒さによる霧とは遙かに異なるが。

「……………」

委員長は浮かない顔をして登校していく。理由は昨日のゴンタとの喧嘩だ。自分で“少し言い過ぎたかなあ”と心で思っている。

「……………はあ〜」

自然と溜息をつく。相当悩んでいるようだ。

「……………あ……………」

すると、視界にゴンタが入ってきた。霧があつて気づかなかつたが、ゴンタは委員長を待っていたようだ。委員長はゴンタの少し手前で足を止める。そして、2人の間に沈黙が流れる。

「……………いい、委員長……………おはよう」

「……………おはよう」

沈黙を破ったのはゴンタだった。委員長もゴンタに挨拶を返す。

「あの…昨日は悪かったよ……………また宿題教えてくれないかなあ？」

ゴンタは笑顔でそう言った。この喧嘩は、2人のせいでは無いのだが、喧嘩したままだとお互い息が詰まる。そう思ったから、ゴンタは自分から誤ったのだらう。

「いいわよ!」

委員長はゴンタの言葉を聞いて、先程とは違い笑顔になった。そう言われて、嬉しかったのだろう。

「本当!？」

「ただし、みつちりしごくから、覚悟しなさい」

「ええ、みつちり?それはちょっと…」

「ダメ」

最後に委員長は舌を軽くべーとして可愛げに言った。こうして、  
2  
人の喧嘩は終止符を打ったのだった。

そして 登校中のスバル

いつもの道を通り直ぐ学校へ向けて歩いていくスバル。今日は時間に余裕があるのか、いつもより歩くスピードはゆっくりである。

「なんか昨日、キザマロが言ってたなあ……仲直りした委員長とゴンタが……」

スバルが考え事をしながら歩いていくと、曲がり角にさしかかろうとした時

「おっす、スバル！」

「おはよう……」

曲がり角からゴンタと委員長が現れた。

「……ラブラブデート……」

先程言っていた言葉の続きを口にしたスバル。ゴンタと委員長がそれを聞いて、首を傾げながら……

「ラブラブ……」

「デート……」

と言った。

「皆さん、おはようございます」

すると、ゴンタと委員長の後ろにキザマロが現れた。

「あら、キザマロ」

「おっす！」

「オホン！」

「「ん？」」

キザマロは一つ咳き込むと、2人の間を横切ってスバルのところへ走ってくる。

「スバル君、ちょっと！」

「ん、えっ？」

「いいから！」

そのまま、スバルの手を引っ張っていくキザマロ。スバルは何で自分が引っ張っていかれているのか分からないでいる。

「何なの？」

「2人の邪魔しちゃいけませんよ！」

「はあ？」

「2人の関係、温かく見守ろうじゃありませんか」

「はあ!？」

キザマロの言っている意味をようやく理解したスバルだが、「何で?」言いたげな顔をしながらキザマロの聞いた。

その頃ゴンタと委員長は、同時に首を傾げるのだった。

### 時は進み 理科の時間

理科の授業は理科室で行なっている。ここでは、4人一組の9グループにわかれており、スバル、ゴンタ、キザマロ、委員長のグループが一番後ろの窓際のテーブルに座っている。因みに亜夢は、仕事の都合により、学校には来ていない。

「では、2人一組で実験してください」

先生がそう言うと、クラス全員が「はい!」と返事をした。2人

一組で実験するなら、グループは必要ないと思うがあえてスルーで。

「キザマロ、一緒にやりましょう?」

「い、いや、僕はスバル君とやりますので。ねえ?」

「えっ?...うん...」

キザマロは委員長の誘いを断り、スバルに返事を求める。状況が良く分からないまま「うん」と答えるスバル。

「なーんだ。キザマロとやれば直ぐに終わらせられると思ったのに。じゃあ、しょうがないわ。ゴンタやりましょう」

がっかりしたような顔になり、ゴンタを誘う委員長。ゴンタは“しよんがないから”と言う理由に少し落ち込んだのだった。

### ある休み時間

「キザマロ!」

スバル、ゴンタ、キザマロの3人は普通に廊下を歩いていた。すると、キザマロに委員長が後ろから声を掛ける。

3人は声を掛けられた方へ振り返る。委員長が何メートルか先の方から走ってやってきて、キザマロの前で止まる。走ってきた割にはあまり距離は無かったため、息は切れていない。

「あなた当番でしょ？次の授業の教材を取りに行くわよ？」

「ああ、そうでした。…はっ！」

ここで、何かに気づくキザマロ。そして、いきなりかがんで腹を抑えだす。

「痛たたたたた、お腹があー！」

「おい、キザマロ！」

ゴンタが心配して、キザマロに声を掛ける。すると、キザマロが腹を抑えながら、スバルの手を掴む。

「スバル君、保健室うう！」

「ええ！？」

「痛たたたた！ゴンタ君、委員長を頼みましたよお！」

そう言つて、スバルの手を引っ張つて、廊下のつきあたりにある角を曲がる。

「痛たた…なんてね」

曲がって直ぐ、スバルの方を何とも無かったかのように振り向くキザマロ。

「ええ！？芝居だったの！？」

「当然です！これも委員長とゴンタ君のためです！2人の愛、見届けてみましょう！」

そう言って、キザマロは休み時間になる度に、委員長やゴンタの後を付けていた。まるでストーカーのように。委員長の場合、廊下、階段など。ゴンタの場合はトイレ、階段などを通る時に近くで見ている。まあ、ゴンタは階段を降り様としたときに足を滑らせ、転がって下の階まで落ちこちるという事故があったが、ここもスルーで

### 給食の時間

スバル、ゴンタ、キザマロ、委員長の4人は自分机をくっつけ、一つの藩を作っている。今日の給食はカレーのようだ。

すると、給食委員の合図で「頂きます！」とクラス中に響いた。

委員長は、キザマロをずっと見ている。キザマロはスプーンに一口分をすくって、口に運んでいたが、委員長の視線に気づき、委員長



とは逆の方に向いてその一口分を食べた。

「キザマロ、あなた今日ちょっと変よ？」

「そ、そうですか？」

「委員長、そんな事よりそのカレー多くないか？」

「えっ？」

ゴンタが委員長にそう言っている中、スバルとキザマロは顔を近づけ、コソコソと話し始めた。

「あのさ、考えすぎじゃないの…？」

「何がですか…？」

「委員長とゴンタの事だよ。そういう関係には見えないけど…」

そう言つて、2人はゴンタと委員長の方へと顔を向ける。

「ちょっとぐらい少なくとも良いじゃない!？」

「俺は腹いっぱい食べたいの!」

…喧嘩している。カレーの事で換えるとゴンタが言ってきているようだ。確かに、委員長の方がゴンタの方より多く見えるが…。

キザマロとスバルはその光景を見た後に向き直る。

「ほらっ？」

「でも、喧嘩するほど仲が良いって言いますし…」

2人はまた、委員長達の方へ視線を向ける。

「こら、返しなさい！」

「んんん！！！」

2人は委員長のカレーを引つ張り合っている。その内カレーを机にぶちまけそうな雰囲気だ。そんな様子を見た後に再び向き直る2人。

「これでも…？」

「…でも、僕はデイトする2人をこの目で見たんですよ！」

「右…左…上…分かりません」

時は放課後。キザマロは保健室で視力検査を受けている。勿論メガネを掛けたままでだ。じゃないとキザマロは何も見ることができないからだ。因みに、この時代の視力検査表では、光で示した所を見て判断するというものだ。まあ、殆ど今と変わらないが。

日が沈み始める夕方。スバルはまだ、家へ帰らず、学校のグラウンドにある階段の部分に両手を着き、腰掛けている。他の生徒はカバンを持って帰り始めている。

「委員長とゴンタがデートか」

「何か気になるな」

「えっ？」

「昨夜の事件を覚えているか？」

「オックス・ファイアとオヒユカス・クイーンのこと？」

「奴らは以前、2人に取り付いたよな？」

「…うん。オックスはゴンタに。オヒユカスは委員長…」

2袋が2人に取り付いた時の事を思い出す。そう、2体は一度だけ、ゴンタと委員長に取り付いたことがある。だが、その時は2体ともロックマンの活躍で、倒したのであった。



第60話 知りすぎたキザマロ 前編（後書き）

区切りが悪いですけど、ここで一度切ります。

長くなる気がするんで…。

第61話 知りすぎたキザマロ 後編

その頃 オックスとオヒュカス

オックスとオヒュカスは人間の姿、ゴンタと委員長に化けてある場所に来ていた。そこは綺麗な水が噴水のようにしてあったり、ビルから水が流れている。そのため大量の水がある場所であった。

『ここは？』

『アクアヒルズ。水をテーマにした復号施設』

『なるほど、ここを破壊するわけだなあ？』

『ああ、目と鼻の先だろ？』

2人がこの施設を見ながら、そう話していた。そして、オックスはここの水を流す、地下への入り口が何処にあるのかを周りを見て把握していた。

その頃 スバル

『キグナスの電波変換装置を使えば、物質変換して人間になれるかもなあ』

ウォーロックはスバルにそう言った。∴ガサツなウォーロックにしては頭が切れている。

「それじゃあ、キザマロが見たゴンタと委員長は……FM星人!？」

キザマロがデートだと勘違いして昨日見ていたゴンタ達は、オツクストオヒユカスが化けた姿だ。スバル達は、電波変換装置を使ってそれになる事が出来ると、ようやく気づいた。

そしてキザマロは

視力検査を終え、何故かアクアヒルズの近くの誰も人が居ないところへ来ていた。

「以上無しですか……」と言う事は僕が見た委員長とゴンタ君は本物！」

今まで磁力検査をしていた理由は、“自分の目がおかしくて幻覚が見えていたのではないか”という疑問が浮かんだようなので、確かめるっといったような感じで視力検査を受けたのだろう。

「やはりデートは本物なのですよ！」

ドン！

「あいた！」

考え事をしながら歩いていると、誰かとぶつかった。キザマロはぶつかった衝撃で少しよろめいたが、何とか踏ん張って倒れずにいた。

「すみません…ひいいい！」

誤って、ぶつかった人を見てみるとそれはゴンタだった。いや、正確にいうと、ゴンタに化けたオックスだ。隣にはオヒュカスが化けた委員長がいる。

『大丈夫か？』



『ん？こいつ…』

オヒュカスがキザマロの状態を確認する。すると、オックスが何かに気づき、昨日の事を思い出し始める。

『…お前、昨日』

「あわわわ、ごめんなさい！」

『どうして誤るのだ？』

オックスが言おうとした言葉を遮って誤るキザマロ。キザマロの慌てふためいて誤る姿を見て、オヒュカスが何故誤るのか理由を確認する。

「2人の秘密は守りますから！」

『『秘密？』』

「僕是谁にも話しませんから！遊園地も、海も、釣堀も！」

『『！？』』

キザマロは隠し事下手らしい。あの言い方じゃ、“自分はあるあなた達の後を付けてました”と言ってるようなものだ。

『（このガキに付けられていたようだな！）』

『（俺達の正体を見られた訳か！）』

正体を見られた……とオックスは言っているが、オックス達は何処でFM星人に戻ったのだろう？秘密基地以外では一度も戻っていない。2人はその事に気づいていない。つまり、キザマロの言葉に何か勘違いしているようだ。

「だ、誰にも、2人の秘密はばらしませんから！こつ見えても口は堅いほうですう！」

何か言い訳を言っていると、キザマロのトランサーから『もしもし？』と声が聞こえてくる。スバルの声だ。どうやらスバルからの電話のようだ。だが、キザマロと2人はそれに気づいていない。

すると、オックスにキザマロは胸ぐらを掴まれ、持ち上げられた。

「うわああああ！？」

「もしもし？」

スバルは電話をキザマロに掛けていたが、全然でない。

「もしもし？」

諦めずに何度も言ってみるスバル。すると、いきなりキザマロの悲

鳴がトランサーから聞こえてくる。

『うわああああ!?!?』

「!?!?もしもし!?!?」

しかし、キザマロから返事が返ってくる事は無かった。

「うわあ!?!?」

キザマロはオックスに近くにある黒いゴミ袋の山がある場所に投げられた。

「御免なさい!?!?2人の事は誰にも言いませんからあ!?!?」

涙を流しながら訴えるキザマロ。恐怖のあまり黒いゴミ袋にもたれ掛かっている。

『正体を知られたからには...!?!?』

『消えてもらっつぞ!?!?』

「正体?」

2人の言葉を聞いて、キザマロの涙は一瞬止まる。やはり、この2人もキザマロの正体を見られたと勘違いしてるようだ。

『電波変換！オヒュカス オン・エア！』

『電波変換！オックス オン・エア！』

すると、2人は腰にあるポケットから出したウェーブスキャナーを天に掲げ、電波変換をする。そして、オックスはオックス・ファイアへ。オヒュカスはオヒュカス・クイーンへと姿を変えた。

「ぎゃあああああ、委員長とゴンタ君が怪物にいい！！…ガクッ」

キザマロは悲鳴を上げて気絶した。ガクッというのは自分で言ったものだ。

ドン！

すると、オックス・ファイアとオヒュカス・クイーンの後ろの地面に一発の光の弾が当たり、爆煙が発生する。2体は弾を撃つて来た方へ振り向く。そこにはロックバスターを構えたロックマン姿があった。

『『ロックマン！』』

『予想敵中だぜ！』

「僕が相手だ！」

『チツ！邪魔が入ったか！』

『振り返ちにしてやる！オックススタックル！』

オックス・ファイアはいつものごとく、オックススタックルでロツクマンの方へ突っ込んでいく。だが、ロツクマンまでかなりの距離があるため、避けようと思えば簡単に避けられる。

『ケッ！バカの二つ覚えのスタックルかよ！』

## F M 星人秘密基地

電波変換装置のウェーブスキャナーが差し込んだ場所にはキャンサー・バブルの姿がある。何故電波変換しているかは不明。

『バトルカード！ジェットアタック転送ブク！』

右手に持っていたジェットアタックのカードをウエーブスキャナーにスキャンさせ、オックス・ファイアに転送させた。

『ウオオオオオオオオ!!』

オックス・タツクルは、オレンジ色の光に包まれて、オックス・タツクルのスピードを上げる。先程キャンサー・バブルが転送させたジェットアタックのカードのせいだ。

『加速!?!』

「速い!くっ!」

当たる瞬間に、ロックマンは横に高くジャンプして避ける。そして、地面に着地すると大廻して、オックスタツクルの向きを変えて突っ込んでくる。

『また来るぞ！』

『ウオオオオオオオ！！』

『スネークレギオン！レッドスネーク！』

すると、突っ込んでいくオックス・ファイアの目の前に、オヒュカス・クイーンがスネクレギオンの蛇を横切らせる。その蛇の色は赤色。

『赤あ！興奮するぜええ！！』

オックス・ファイアは目の色が変わった。すると、オックスタックルは更にスピードを上げて、ロックマンに突っ込んでくる。

「バトルカード！プレーション！モアイフォール！」

ドン！ ドカアアン！

ロックマンがモアイフォールをプレーションしてから二つ大きな音がした。一つ目はモアイフォールを空中に出現させ、地面へ落ちる音。二つ目はそのモアイフォールをオックス・ファイアが突っ込んで粉々に粉碎した音。

このモアイフォールでオックスタックルを防ぐはずだったが、全く防げなかった。それどころか、スピードすら落ちてない。ただし、一つだけ分かった事がある。それは、岩をも一瞬で砕く程のもの凄い威力であると言う事。

『ウオオオオオオオ！！』

「ぐっ!!」

ロックマンはオックスタックルを両腕をクロスさせて防いでいる。何とかオックスタックルを防いでいるが、まだ攻撃は終わっていない。オックス・ファイアはまだ、ずっと押し続けている。

「赤い色で興奮するオックスの特性を利用したか!」

「弱点をプラスに!なかなかの選択だ!」

モニターを見ながらウルフとリブラがオヒュカスのオックスを扱う上手さに感心している。

「ウオオオオオオオ!」



「くっ!!」

今のオックスタツクルの威力はもの凄いものだ。ロックマン腕が鈍い音を立て始めている。このままだと完全に力負けしてしまう。しかも、ロックマンの後ろには、運悪くビルがある。このまま力負けすると、ビルへと激突すると考えられる。

『オックスよ!そのままロックマン諸共ビルにぶつかるとだ!ロックマンを倒して、アンドロメダの鍵にもエネルギーが溜まる!まさに一石二鳥だ!』

「くっ……!?!」

すると、ロックマンの踏ん張っている足が後ろへとさがり始めた。このままでは間違いなく力負けする。

『ウオオオオオオ……おお…お!?!』

すると、オックス・ファイアの目の色が元に戻った。そして、先程までロックマンを押していた威力が消えた。

『何、パワー切れだと!?!』

ロックマンはそのパワーが消えた一瞬間にジャンプしてオックス・ファイアから大きく距離をとった。

「……くっ!!」

距離をとって着地した後、ロックマンは左腕を抑えながら左膝をついた。相当ダメージを負ったようだ。

『スバル、スターブレイクだ!』

「分かった!」

『くっ!後一步のところを!』

「スターブレイク!ファイアレオ!」

ロックマンはウォーロックをトランサーへと戻し、レオのカードを差し込んだ。すると、オレンジ色の光に包まれ、ファイアレオの姿へと変えた。

『スネークレギオン!』

『ファイアブレス!』

2体は技を同時に放つ。その技に向かって、ウォーロックの口にエネルギーを集める。

『スターフォーセピックパン  
SFB!アトミックブレイザー!!』

そして、アトミックブレイザーを放つ。その超エネルギーは2つ技を飲み込んでオックス・ファイアの方へと向かっていく。

『何!!?』

オックス・ファイアは何とか避ける。そして、オヒュカス・クイーンの隣へ移動する。

オックス・ファイアに当たらなかったアトミックブレイザーは、オックス・ファイアの後ろにあった建物に当たろうとした瞬間に起動を真上へと変えて、空に向かっていく。

『何と言うパワー！』

『お、俺様の炎が…！』

『くそ！退却だ！』

『くっ！』

2体はロックマンのファイアレオの力に圧倒され、周波数を変えてこの場を去って行った。

『ファイアレオ…』

『スターブレイクか…』

ウルフ、リブラがモニターに映っているロックマンの姿を見て呟いた。

『変か無しブク…』

キャンサー・バブルは一人、空のアンドロメダの鍵を見ながら呟いた。

スバルは電波変換を解除し、黒いゴミ袋にもたれかかって気絶しているキザマロのもとへとやってきて、名前を呼んで目覚めさせようとしている。

「キザマロ！キザマロ！」

「……………ん…ん…はっつ！？…スバル君？」

スバルを見てキザマロは一瞬怯えたが、スバルだと気づいたようだ。

時は進んで 次日の学校

キザマロとスバルは教室の窓から、今登校している生徒達を眺めながら昨日の話をしていた。

「それじゃあ、僕が見た委員長とゴンタ君はFM星人が化けた姿だったんですか？」

「そうみたいだね」

「はあ……紛らわしいですよ！化けるなら僕の知らない人にして下さーい！ー！」

キザマロは溜息をついた後に今まで溜まっていた何かを吐き出すために叫んだ。スバルはその横で苦笑いしている。

「はあ、すっきりした。もう大丈夫です！」

「そう、良かった」

「ありがとうございます、御座いました、スバル君！」

「……」

「おはよう……」

すると、2人の後ろからゴンタと委員長がやってきて声を掛けた。キザマロはずっと委員長とゴンタをじーっと見ている。

「どづしたの、キザマロ？」

「……2人とも……本物ですよね？」

「はあ？…ちよっ！はっっ！」

すると、委員長の両頬を引っ張るキザマロ。続いてゴンタにも同じ事を行った。ゴンタは引っ張られたとき痛かったのか、目に涙を浮かべている。

「…はあ、どうやら2人は本物のようです」

「何すんだよ!？」

「そうよ、レディに向かって!」

「えっ?うわああ!!!」

この後、キザマロはゴンタに首を絞められて逃げられないようにされ、スバルはそれを見て笑っているという事は言うまでもないだろう。

第61話 知りすぎたキザマロ 後編(後書き)

はい、後編終了。

次はどれを書こうかなあ……っってもう3時近い……まず、寝よう  
z

## 番外編 ちよつとした雑談6

はい、どうもこんにちは！

今回はいつもより早めの雑談です。何故早いかは…次話が場面<sup>カット</sup>が変わるのが多いんですよ。それで苦戦してて、今日中に更新できそうになかったんで、代わりに雑談を…。

まあ、そんな事はさて置き、今回のゲストは…まあ、いつものメンバーでいいか。と言うわけでいつもの雑談メンバーです！

「……って、紹介雑でしょ！」「」

お、いきなりハモりましたね。しかも、雑談だけに雑ですか！それより、挨拶、挨拶！

「あ、どうも（それ、無理やり…）」

「じ、こんにちは（寒い…）」

「……どうも（バカじゃないの…？）」「

さて、なにしようかなあ〜

「この雑談…作者のただのお楽しみになってきてない？」

「確かに…」

「私、帰りたいんだけど…？」



ちょっと、始まったばかりで帰りたいはないでしょ？

「だって、嫌な予感しかしないんだけど？」

「確かに」

「亜夢の言うとおりかも……」

だ、大丈夫！今回はまともだから！

「……どんな？」

題して……ツンデレ王座決定戦！！

「どこが普通だああああ！！」

ゴン！

いったああああ！！ちょっと、いきなり殴る事無いでしょ！？

「ツンデレ王座って何よ！私に対しての嫌味！？」

あ、いや……じよ、冗談だよ……あはは……。

「作者ならやりそうだけど……」

「さっきの、冗談言ってるようには見えなかったけど……？」

こ、今回は私から君達へのいろんな質問をするから答えてもらおう

かと…

「変な質問じゃないでしょね？」

へ、変じゃないよ（たぶん…）！

「あれ？この前もこんな事なかった？」

……では、質問します！

（（無視ですか……）（）（）

スバル君は休みの日はいつも家で何をしている？

「僕は大体本読んだり、勉強したり、テレビ見たり（あと、たまにウィルス退治）してるけど」

ミソラちゃんは？

「休みの日は新曲作ったり、あと、たまの休みだから買い物したり、甘いもの食べに行ったり…かな」

亜夢ちゃんは？

「…私は特になにもしてない…」

本当に？

「う、うん（強いて言うなら、電波変換時での力を付けるために特訓を……）」

詰まらない人だなあ……君、まだ5年生なんだから友達と遊園地と  
か行って楽しく遊べば良いのに。

「う、うっさい！私はそういうのは、3歳の時に卒業してるの！」

「（3歳で卒業！？…凄いなあ……）」

おお、大人だねえ。さて、次にみんなの将来の夢は？

「僕は宇宙飛行士！父さんを探しに宇宙へ行くんだ」

「私は大人になっても歌を歌い続けたい！」

おお、スバル君と亜夢ちゃんは良い夢もってるねえ。亜夢ちゃんは？

「私は……まだ分からない……かな……」

（ス・バ・ル・君のお嫁さんとかは？）

「（！？ちよつと作者！耳元で意味のわからない事ささやかないで  
よー）」

（で、お嫁さんとかどう？）

「（べ、別にお嫁さんとか興味ないし！だ、大体、何でスバル君な  
のー！？）」

（でも、ほら……好きなんでしょ……？）

「／／／だ、誰が好きなのもんかああ！！／／／」

ちよ、ちよっと！耳元で大きな声出さないでよ！危うく鼓膜が破れるところだったじゃないか……

「あの〜、作者。今、亜夢ちゃんと何話してたの？」

スバル君！……気にしたら負けだよ？

「は、はあ……（何が負けなのだろうか……）」

さて、次に好きなゲームとかは？（スバル達の世界のゲームではなく、我々の世界でのゲーム）

「そうだね……僕はポケモンとかかな。育成して戦わせるのが好きだし！」

ほうほう。ミソラちゃんは？

「私は太鼓の達人とかかな。いつも、太鼓叩きながら歌ってるし」

なるほど。イメージ通りですね。亜夢ちゃんは？

「……バ、バイオザードとか」

「（ええ！？）」

（うわぁ〜、よくあの年で買ったなあ……てか、意外すぎる……）

「お、おもしろいんだよ、結構！……な、何？みんなしてその目は

!？」

（ ）（ ）かわいい顔に似合わず、裏の方は黒いんだなあ…（ ）（ ）

「さ、作者はどうなのよ!？」

えっ、私？そうですねえ……ソック、ポケモン、ロックマン系とか…あと、この頃RPGが飽きてきたからちよつとした格ゲーとか。じゃあ、次に読んでみたい本とか？

「うーん…宇宙の本は殆ど読んだし、これといって読みたい本は…」  
「私はティーン雑誌！この頃いそがしくて、最近の雑誌読めてないから!」

「……読みたい本ねえ…別にこれといって読みたい本は……あ!」  
どうしたの？

「そういえば、恋愛ものの小説って読んだ事ないんだよね、私。だから、読むって言ったなら恋愛ものとか…あとはミソラも言ってた雑誌とか」

おお、先程とは打って変わって女の子らしいものを。クールな亜夢ちゃんらしくもない気がするけど…

「う、うっさい!」

「作者はどうなの?」

私？そりゃあ、いっぱいありますよ！マンガ（主にしゅごキャラ！、ハヤテのごとく！）、迷い猫オーバーラン（漫画版）に小説（主にとある）、迷い猫オーバーラン（小説版）などな沢山！

「そ、そうなんだ…」

さて、今回は短いですがこの辺でお開きにしましょう！あ、次回の雑談はある作者さんを出すかもしれません。まあ、最終許可を取らないとだめですけど。

（さて、最後に亜夢ちゃんとミソラちゃんをいじって終わらせよう…）（ニヤリ）

終わらせる前に、亜夢ちゃんとミソラちゃん、ちょっと来て！

「何？」

これをあげます。

「なにこれ？」

「ただのお守りじゃん？」

これは私が作った、女子が好きな男子にあげると必ず結ばれるようになる、お守りにたようなども貴重なアイテム。小説内で作ったので、渡せば必ず結ばれます。

「えっ！？」

「まじ!?!」

勿論です。小説内で出来ない事はないのです!

「「(これをスバル君に渡せば……)」」

(さて、次回の雑談で使う仕掛けも終わった事だし、終わらせるか……)

それでは、皆さん失礼します

「さようなら!」

「失礼します!(次回これを……)」

「……それじゃあ(次回これを……)」

(なにやら修羅場が発生しそうで楽しみだ)

## 第62話 一匹狼、飼われる 前編

『もういっぺん言ってみやがれ!』

『ああ、何度でも言ってみやがれ! くっただねえ作戦立てやがって……あれでアンドロメダの鍵を再生出来るとでも思っていたのかあ!?!』

いきなりだが、ウルフとオックスが基地内で口喧嘩を行なっている。その喧嘩も段々エスカレートしてくる。

『そもそも、失敗したのは、テメエがどじ踏んだせいだろうが! 何、責任転嫁してやがる、このカルビイ!』

『誰がカルビだ!?! やるか、犬野郎!?!』

『望むところだあ!』

2人は顔を近づけ合いがみ合っている。そこへ、オヒュカス達が注意に入る。

『いい加減にしな、2人とも! 仲間割れしてどうする』

『今回の作戦はバランスが悪かったただけだ。調整して再挑戦すればいい』

オヒュカスとリブラは2人を見て、少し呆れ気味にそう言った。すると、リブラのその言葉を聞いてウルフがオヒュカス達の方へ振り向く。



『何だとお！？テムエも俺様のせいだつて言うのか！？』

『そうじゃない。誰がどうと言うわけではなく、チームの全体的なバランスが』 『ああ！もういい！いい加減うんざりだぜ！俺様は出て行く！』 『』

リブラが話している途中でウルフが割って入り、話を終わらせた。しかも、出口方に振り向き、他のFM星人達に背を向け出て行くこととする。

『ちよつと、ウルフ！』

『そもそも俺様は、一匹狼。群れるのは性に合わねえんだ。お前等はお前等で勝手にやれ！』

行くこととするウルフを、オヒュカスが一瞬呼び止めたが、ウルフはそれを無視してこの秘密基地から出て行くこととする。

『ああ、出てけ、出てけ！』

『オックス！』

子供のように捻くれた様に言うオックスに、オヒュカスは注意する。だが、ウルフは『あばよ！』と残して、さっさとこの秘密基地から出て行ってしまった。

## あるDペットショップ

一人の、低学年くらいの女の子が店の自動ドアを開け、Dペットショップへ入ってくる。女の子の名前は朝倉マユあさくらという。

因みに、Dペットとは、電波ペットの略で、トランスレーウェーブスキャナーで飼う事ができる電波を物質化した動物の事である。そのDペットは普通のペットと同じで、育てる事ができる。愛情を持って育てれば、なつかせる事もできる。因みに、今は犬型のDペットしか開発されていない。他の種類は開発中らしい。

店の中では子供から大人まで、自分が持っているDペットをトランスレーウェーブスキャナーから出し、頭を撫でたり、餌を与えたりしている。

先程店に入ってきたマユは店の様子を見て、羨ましそうな顔をしている。因みに、右手には傘を持っている。理由は、今日天気予報で夕立が来るからだそうだ。

良く中を見ると、中央のテーブルの周りにスバルと亜夢&am

P・委員長集団が居た。亜夢はいつものように変装している。たまに周りから視線がくるが気にしてないようだ。

「どうだかつこいいだろう!?!」

テーブルの上にはDペットが三匹乗っていて、お座りしている。ゴインタの前には全身黒色をしているDペット。キザマロの前には体が白色に黒ぶちが所々についているDペット。委員長の前には頭と尾が黒色で、体が茶色のDペット。

亜夢はそのペット達をまじまじと見ている。心の中で可愛いと思っているのだろう。

「僕のマサムネには敵いませんよ」

「私のエリザベスが一番可愛いわ」

ゴインタもそうだが、キザマロ、委員長は自分のDペットをどうだ顔で自慢している。委員長のDペットは、名前からしてメスなのだろうか…。

「(うわぁー!どれも可愛い!)」

目をキラキラさせて、マジマジとみている亜夢。スバルはそれを見て何故か苦笑いを浮かべている。

「そういえば、スバルと亜夢ちゃんは飼ってないのか?」

急にゴインタ尋ねてくる。

「わ、私がそんなの飼うわけないじゃん！大一、全然可愛くないし！」

腕を組んで、いつもの意地っ張りな性格が出てしまう亜夢。全員心の中で、（じゃあ、さっきまでのキラキラさせた目はなんだったんだよ…）とか思ってる。それに対して亜夢は（あ……言っちゃった…私のバカ！）と思ってる。

「じゃあ、スバルは飼わないのか？」

今度はスバルにふってくる。

「えっ？」

「Dペットはトランサーやウェーブスキャナーを使って操作でき、餌を与えたり、散歩させたりできるんです」

「ああ、いいよ、僕は。」

だが、スバルは手を振って断った。Dペットは飼わないと決めていたようだ。

「そう？こんなに可愛いのに…」

「あはは……僕にはもう居るから……やかましいのが一人」

スバルが言った瞬間、トランサーの中から『ああ！？』という声が聞こえたような気がするが、そこはあえてスルーで。

すると、先程入ってきたばかりの眉が、しょんぼりしたような顔で

Dペットショップから出て行く。そして、傘の先端の部分を引きずりながら自分の家と思われる方向へ帰り始める。

## その頃

「いたぞお!!」

ウルフはウエーブロードの上に居た。すると、下から聞き覚えのある声が聞こえてくる。ウエーブロードの下を見てみると、そこにはウィルスバキウムを構え、頭のパトライトが赤く点滅している五陽田警部とサテラポリスの職員がこっち方を見ている。姿自体は見えていないだろうが、電波の体から発生している怪電波で居場所がわかるのだろう。

「そこだ、やれえ!!」

『ケツ！面倒な奴らだ。俺の邪魔すんじゃねえよ!!』

そう言ってウルフはウェーブロードを駆けて行く。

道端、ある会社の建物中、公園の池。いろんな場所にウルフは逃げた。だが、どこへ行くことも五陽田警部は追いかけてくる。

建物の中は警備員を吹き飛ばしても、公園の池は白鳥型のボートを足でこぎながら……何処までもしつこく追いかけてきた。

「御用だ！御用だ！！御用だああ！！！」

『しつこいぞテメエ等ああああ！！！！』

ウルフは街中に響くような声で叫んだ。

マユは自分が持っていた傘を差して帰っている。理由は天気予報が当たり、夕立が降り始めてきたからだ。今は小さな川のコンクリートで出来た橋を渡っている。

「詰まんない、詰まんない、詰まんない、詰まんないなあ〜」

とリズムにのせながら言っている。マユが橋を渡っている途中、橋の下にウルフが周波数を変えて現れた。

『はあ、やつとまいたか……何でこんな目に？ただ俺様は、一人静かにしていただけなのに』

今のウルフは少しやつれていようにも見える。すると、「居たぞ！」と言う声が聞こえた。聞こえた方向を見ると、またもや五陽田警部だ。いつもの口癖を言いながら橋の下に降りてくる。

『だああ！？しつこい！余計なトラブルは避けるつもりだったが、こっとなったら……ん？』

戦闘態勢に入るウルフだったが、橋の上を渡っているマユが視界に入る。すると、マユが首から提げているウェーブスキャナーに気づく。

『……あれだ！』

そう言っつて、光に包まれ、マユのウェーブスキャナーの中へと入っ  
ていった。

「御用だ、御用だ！……ん？……何？反応が消えた……くっそあ、取り逃がしたあ！」

マユのウェーブスキャナーの中

ウルフは何もないウェーブスキャナーの中で腕を組み、中から外の様子を見ていた。

『やっと静かになったぜ。ちょうど良い、暫くここで休ませてもらうか……』

そう言って、頭の後ろで腕を組み、横に寝転がって眠りだした。



暫くして

『…………ん…』

ウルフは犬のような耳を2、3ど、ピクピクさせて、目が覚めた。

『……………何だ…これは…？』

だが、ウルフが居たところはウエーブスキャナーの中ではなかった。誰かの部屋のような。窓から、夕立が上がった後の夕陽が差し込んでいる。

良く見ると、自分の周りに電波でできたオレンジ色の檻に囲まれている。

『…えっ？…え、え！？』

ウルフは自分の姿を良く見てみた。すると、今までと少し姿がちがった。耳が長くなり、尻尾が付いている。更には手が犬のように肉球がついている。

『何だこりゃ？』

「あああー!」

『!?!』

すると、いきなり驚いたような声が聞こえた。その方向を見てみると、ドアを全開にして、口をpカーンと開けてこちらの方はずっと指を差しているマユの姿があった。数秒程度固まっている。その後、ドアをボタン！勢いよく締めて、一階へバタバタ階段を降りていく。

「ママ！Dペット！かっこいいよ、Dペットがいるう！」

「そう？よかったね」

母親に話を受け流されている声が聞こえてくる。それが聞こえたウルフは『ペ、ペットお!?!』と声を発した。

「もう、本当なんだってば!」

「はいはい、宿題ちゃんとやりなさいよ」

「もう、信じてよ!」

「はいはい」

「もう、本当なのに!」

その言葉が聞こえて数秒後、部屋のドアが開いた。ちょっとだけドアを開けて、警戒するような顔でウルフを見ている。すると、ウエーブスキヤナーのあるボタンを押して、ウルフの周りがある檻を取り除き、素早くドアを閉めて出て行く。ウルフはこの変な状況では、

言葉が出なくなった。

更に数秒後、ドアが開き、部屋の中に入ってきたマユ。しかし、今度は警戒して壁に張り付いている。そして、そのまま窓際へと壁をつたっていき、ウルフのもとへ近づいていく。そして、ウルフの前に正座をして座った。

「……………」

マユは無言で、ウルフの鼻頭をツンツ！と人差し指で触った。ウルフは訳が分からないでいる。

「……………はは…」

すると、今まで警戒していた顔が消え、笑顔に変わった。ウルフが恐くないと確信したようだ。マユはウルフへ微笑み始める。

「こんにちは、ワンちゃん！あたしの名前はマユ！朝倉マユ！ワンちゃんの名前は何ていうの？」

『（はあ！？誰がワンちゃんだ！？…こいつ俺を電波ペットか何かと勘違いしてやがるな）』

「あ、そうかあ。あたしがワンちゃんの名前を決めないといけなんだあ！うう、困ったなあ」

困ってるようには見えない、マユ。顔を少し赤らめ、喜んでいるように見える。

『（…待て、このままペットになりすましてあの面倒な連中に追いつ

回される事もない。： 案外これは、ツイテルかもしれえぞ…（）」

ウルフが不気味な微笑み心の中でしていると、マユが「そうだ!」  
と喋って手を叩く。名前が思いついたようだ。そして、指を差して  
言った名前がこれである。

「ポチ君!」

『うお!?!』

ウルフはぬいぐるみのように口を開けたまま、目が点になり一瞬呆  
然とした。

「ねえ、ねえ、ポチ君なんてどう?」

『ガールルルウ!』

ウルフは我に帰り、マユに講義する。

「嫌?それじゃあねえ……犬尾君!」

これまたビシッ!と指を差して口にした。

『!?!ガールルルウ!』

「じゃあ、犬の助君!」

『ガールルルルウ!』

「イヌケン君!」

『何で、お前は君をつける!?!』

「えっ?何か言った?」

『ガ、ガLLLLLLLLウ!』

今、突っ込んでしまったが、何とか誤魔化せたようだ。

「ハルミニウム伊藤?」

『ガLLLLLLLLウ!』

「量産型13号?」

『ガLLLLLLLLウ!』

「じゃあねえ、えっと……」

こんな感じで名前を決めるのはまだまだ先のようだ。まず、もう、名前ではなくなっている。

名前を決めるだけで、先程はまだ夕方だったが、もう外は真っ暗になっっている。

第62話 一匹狼、飼われる 前編(後書き)

はあ、疲れたあ(――;) )

アニメ、オリジナルキャラがやっと思せたあ!!  
でもめっちゃ疲れたあ…

それでは、感想まっす

### 第63話 一匹狼、飼われる 後編

なんだかんだで次の日

「リックキー！じゃあ、言ってくるね！」

朝倉マユは白いランドセルをしょって、ウルフに笑顔を見せてドアを開ける態勢になっている。ウルフはお座りして、その様子を見ている。因みにリックキーとはウルフの事である。

そして、ドアを開けて一階へと降りていった。

『…リックキーってのは良いとして……フランキーってのは誰だ？』

後ろの方にはウルフが入るための犬小屋みたいな物がある。犬小屋の上の方に名前札がついている。その名札には、上の方に「リックキー Rickky」つまり、ウルフの名前が書かれている。だが、その下に「&」が付いて、更に「Franky フランキー」という名前が書かれていた。

それを不思議がったウルフは呟いた。そして、犬小屋の中を見ている。中はグシャグシャに丸めた白いティッシュのような紙で埋まっ  
ていて、入れるような感じではない。すると、その紙が一瞬ガサッ  
！と動いた。

『……！？』

ウルフは気のせいかと思ったが、一つの紙が今動いたせいで地面に落ちる。つまり、動いたのはまちがいない。

ガサツ！……ガサガサガサガサガサガサ

すると、今度は一瞬ではない。ゴミのような紙は音を立て、揺れ始めた。すると、奥の方にキラーンと光っている白い目が見えた。その目は今にも襲ってきそうな獣のような目をしていた。

それを見たウルフは、ガクガクと震えだし、変な汗が滝のように流れ始めた。更にあまりの恐ろしさに、目が点になっている。

『……あ、あれの中に……なんか居る……』

あまりの恐さに耐え切れなくなったウルフは、小屋から目を逸らす事にした。

数時間後



ウルフは数時間なにもしておらず、ただ頭に両手を回して寝転がっていた。一回からは、女の人の鼻歌と掃除機の音が聞こえている。たぶん、マユの母親が掃除でもしているのだろう。

『……ああ、つまんねえ。…考えてみりゃ、こんな所でペットの真似なんかしてる事もねえんだよな』

すると、ウルフはゆっくりと窓を見ながら立ち上がった。まあ、犬なのでお座りしている態勢になっているが。

『出て行くか…』

そう言つて、周波数を変えて窓から出て行こうとする。上半身を出し、下半身を出そうとしたとき、視界に思いがけなかったものが入ってくる。

「御用だ、御用だ、御用だ、御用だあ！」

それは、ウイルスバキュームを持っている五陽田警部だった。左から右へ横切っていくの見える。何かを追いかけているようだ。

ウルフはその姿を見て、家の中に体を引っ込めた。

『何であいつが……くそ！』

その頃スバル宅 庭

「あああああ！！！！」

庭の方からスバルの声が聞こえてくる。この声は、何かを思いがけないものを発見したときの声の上げ方だ。

「あ……ああ……あ……」

スバルは何かアンテナが付いている大きな（壊れている）物を見ながら顔を引きつっている。

『すまん、スバル！』

なにやらウォーロックが土下座をしている。トランサーの中ではない電子端末の中だ。この電子端末はこの時代の芝刈り機についているやつだ。その芝刈り機が先程の物にぶつかっている。これは何かというところ

「僕の電波望遠鏡が……」

そう、電波望遠鏡。しかも、とても高く貴重な物らしい。そ

の望遠鏡に芝刈り機が…激突している。電波望遠鏡には巨大な穴が開いており、黒い煙がモクモクと上がっている。…相当速いスピードでぶつかったのだらう。勿論、もうこれは使い物にならない。

『芝刈り機を乗り回してたらあ……』

何故、芝刈り機を乗り回すのか？理由は…ウォーロックには、この芝刈り機に乗る事でドライブしている気分になれるのだ。その、ウォーロックにとっては楽しいドライブをしている途中にぶつかったようだ。

「ウォーロック……お前……」

『すまん』

「ウォーロック……!!」

スバルは白目を向けて怒鳴りだし、説教し始めた。

## 再びウルフ

「たっだいまー！」

ドアを勢い良く開けて、マユがクルクル回転しながら入ってきた。学校が終わって、帰って来たようだ。

すると、ウルフが座っている前にある餌いれに、電波が物質化された餌が現れた。Dペットの為の餌のようだ。

『……………(ん?)…』

それをマジマジと見た後に、マユがいる方に「これは何だ」といわんばかりの顔で見た。すると、マユは笑顔でこいいうった。

「さあ、召し上がれ」

『(はあ!?ふざけんなよ!何で俺様がペットの餌なんか食わなきゃならねえんだ!?!こいつは、どっちの立場が上なのか分からせとかないと駄目だな)…ガルルル…ワンワンワン!…どお!?!』

マユに向かつて威嚇するように吼えたウルフだが、それは直ぐに止めてしまった。理由は、マユが涙を流して泣き出したからだ。「せっかく一生懸命作ったのに!」と泣いて泣いてるマユは、目をうるうるさせてウルフに訴えかけている。

『(ええ!?!)…』

ウルフはまたもや、滝のように汗が噴き出している。すると、後ろの方からガツガツ何かを食べているような音がする。…フランキーだ。フランキーが犬小屋の中で何かを食べながらウルフの方を白く光目で睨みつけている。

『（何か食ってやがる…）』

ウルフが怯えながらそんな事を思っていると、マユが更に泣き始めた。手で涙を拭いている。ウルフはそれを見て、汗が流れる早さが早くなった。

『（……………）』

何も言葉が出ない。ウルフはどうやら泣き止むか考えていた。そして、出た結論が……このペットのための餌を食べるという事だ。

『ガブガブガブガブ…』

ウルフは汗をかきながら、背中を丸くして子猫のようにして餌を食べ始めた。

「わーい、リッキー！おいしい？一杯食べてね！」

先程とは打って変わって笑顔になり、両手を挙げて跳ねている。よほど嬉しかったのだろう。

夜になり スバル宅

「僕の望遠鏡…」

薄暗い自分の部屋で、スバルは一人呟いた。月の光が入ってくるため少し明るいのが、やはり電気をつけないと暗くて目が悪くなりそうなくらいの暗さの中、スバルは自分の机の前に座ってトランサーを開けている。

『だから悪かったって言ってるじゃねえか』

「誤って住む事じゃないよ！あれはお小遣いを貯めてやっと買ったものなんだ！もう売ってないし、部品だって無いし！」

ジュジュジュ！ジュジュジュ！ジュジュジュ！

すると、開けているトランサーの着信音が鳴り始める。電話だ。

『スバル、鳴ってるぞお』

少し明るく言うウォーロックに「もう！」と切れ気味になるスバル。

そして、そのまま電話に出た。「はい!？」と出たとき、少し恐かったスバル。

「…ゴンタ?えっ?...うん...うん!...ええ!?...」

段々、明るさを取り戻していくスバル。暫くして、ゴンタとの電話を切った。

「ねえ、ウォーロック!」

「な、何だ?」

ウォーロックはトランサーの中で後ずさる。そして、不気味な笑みを浮かべてスバルは何かをウォーロックに言った。

「へへ...」

「何イイ!?!?」

その声はコダマタウン中に響き渡るかのような大きな声だった。

## マユの家

マユはお風呂に入り、黄緑色でオレンジ色の水玉がついている寝巻きの姿になっている。その姿で寝転がり、丸くなって寝ているリッキ…もといウルフの頭を撫でている。

『（ええい、うっとうしい…）』

だが、ウルフは撫でられている事に嫌気が差している。暫くすると、マユに「リッキー」と呼ばれたのでマユの方に振り返る。すると、右手を出している。

「御手！」

『（何だそりゃ！？）（ワン！）』

やらないといわんばかりの顔で、マユに吼えた。すると、マユはまたもや目に涙を浮かべ始める。

『（…！？…分かったよ…）』

ウルフは渋々そっぽを向きながら、右手をマユの右手に置く。もう、泣かれるのはごめんだ。

「はぁ！おかわり！」



マユはペア！と笑顔になると、今度はおかわりを要求してくる。ウルフは心の中で『うう』と言いながら、乗せている手を左手に interchangeable 替える。

『（たく……これだからガキは……）』

「ねえ、リッキー？」

泣きそうな声でウルフが心で言っていると、またもや声をかけられる。しょうがないので、マユの方に顔を向けた。

「円盤キャッチ！」

すると、少し上目掛けて円盤を投げる。ウルフはそれを見て……取る気はなかった、取る気はなかったのだが

『（いい加減に……何イ！？）……ワオオオン！』

ガプツ！

取ってしまった。いや、正確に言うと、体が反応してしまったのだ。理由は円盤だからだ。ウルフは円盤のように丸いものを見ると、月のように見え、狼人間のように体が反応してしまうのだ。なので、取りたくなくても月……円盤に向かって大ジャンプして取ってしまうのである。

『（……何故だ？この形を見ると、体が勝手に反応してしまう！）』

しかも、肝心の自分は気づいていない様子。

「うわぁ！凄いや、リッキー！凄いや！偉い、偉い！偉いねえ！」

マユはウルフを褒めながら頭を撫でている。何故だろう。この時ウルフは悪く無い感じがしていた。

こうして、何日ものマユとの生活が始まった。

ある時は、量が多すぎる、山盛りなんてレベルじゃない量の餌を笑顔で与えられて。

ある時は、電波の泡で一生懸命洗ってもらって。

ある時は、DペットシヨップにあるDペットのトレーニングルームで、円盤を投げて、ウルフがそれをキャッチする。そのたびにマユに褒められて。

『（そーいや、他人に褒められたのって何時だったけ……。何時だって俺は…一匹狼だったからなあ……）』

そんな事を思い始めた。

ある時は、寝言を言って床に寝ているマユに、ベットからかけ布団を引っ張って降ろして、マユに掛けてあげて、寝顔を見ながら自分はその近くで眠り。

『（…けど…悪くねえな、こういうのも……）』

マユとの生活でウルフは何かが変わり始めてきている。何が変わったのか、自分でも分からない。でも、こんな生活がいつまでも続けば良いと、彼は心の何処かではそう思っている。

第63話 一匹狼、飼われる 後編(後書き)

ウルフ…良いやつだなあ。泣けるで(ノー)。( ) 何故か関西弁

自分で書いてて、懐かしいうえに感動する…。

それでは、感想待ってます

## 第64話 飼われた狼、暴れる 前編

### 翌日後の朝

朝日が差し込む今日、天気は快晴のようだ。外からチュンチュンと雀が鳴いている声が聞こえる。そんな中、ガツガツと餌を食べている犬…もとい狼が一匹。それを見ている女の子が一人。

「頑張ろうね、リッキー！」

不意にマユがガツガツと食べているウルフに言う。ウルフは食べるのを途中で止め、マユに『ワン！』と返事をする。

### コダマコンテスト会場

ここは、コダマタウンにある大きなコンテスト会場の前。ここに大

勢の人が集まっている。この中の殆どはあるコンテストの参加者である。良く見ると、その参加者の中にスバル達（+変装した亜夢）の姿があった。

「えっ？星河君もコンテストに出るの？」

「うん、まあね」

委員長が言ったコンテストとは何か。それは、育てたDペットを競い合うコンテスト。いろんな種目で競い合い、豪華商品をそのペットの飼い主が手にするというものだ。

「でも、スバル君Dペット持ってましたっけ？」

「最近始めたんだ。みんながやってるのを見て、何だかおもしろそうだったから」

「どんなの!？」

今、食いついたのは亜夢だ。目をキラキラさせている。みんなはそんな亜夢をジーツと見ている。その間一瞬で亜夢は我にかえってことう言った。

「べ、別にどんなのか気になったとかじゃないから！」

……じゃあ、何で食いついたんだよー、と帰ってきてそうな一言。完全に嘘をついている亜夢に対して苦笑いをしながら自分のトランサーを開けてみんなにDペット見せるスバル。

「これロッキーって言うんだけど」

みんなはそれを見た瞬間固まった。背中を向け、こちらに目だけで睨めつけている犬がいたからだ。亜夢はこれを見た瞬間噴出しそうになった。なんせこの犬はウォーロックなのだから。

「（！？Dペットってウォーロックじゃん！はあく気になって損したあ……………」

「な、何これ？」

「また、奇抜なデザインですね…」

「これ犬か？どうみても不細工な熊じゃん…」

『！？あのなあ！！』

最後のゴンタの一言が効いたのか、こちらに振り返り怒りマークを付けたウォーロックが怒った。その格好は犬というか何処かのおっさんに近かった。

「ん？今喋った？」

全員勿論ウォーロックが怒って言った言葉が聞こえていた。だが、スバルは何とか誤魔化そうとした。

「し、仕方ないだろう！初めて作ったんだから！」

何とか、トランサーを閉じてウォーロックが喋った事を誤魔化した。

『…たく、…何で俺がこんな事を……………』

それは昨日の電話のあとにさかのぼる。

## 回想

『何イイ！！？俺がペットに化けてコンテストに出るだあ！？』

ウォーロックは目を見開きにして固まっている。固まっているが、開けたままの口の顎がたまにガクガクウと動いている。それ程予想外の出来事だったのだ。

「嫌なら別にいいんだよ。ウォーロックが電波望遠鏡を弁償してくれるんなら」

『あ、あ、いや、それは……』

勿論、金も稼げないウォーロックじゃ、そんな弁償するだけのお金があるわけが無い。それ以前に電波体の何も物質に触れる事ができないウォーロックじゃ稼ぐ事なんて出来るわけが無い。そのことを分かっているから、スバルは少し明るめのテンションで言ったのだ。

「何たって相手はただのペット。ウォーロックの優勝は間違いなし！これで優勝商品の電波望遠鏡は僕の物さあ！」

……どこかD・ray・manのラに似てる言い方で、目をキラインと光らせながら言った。ウォーロックはこのスバルに逆らう事ができないだろう。

『くっ……これも電波望遠鏡を弁償するため、我慢だ、我慢……！』

そう自分に言い聞かせる事しか出来なかった。

## その頃

「うわぁ、…なんか強そうな人ばっか……」

会場内にウェーブスキャナーを両手で握り締めているマユの姿があった。周りを見てみると、会場一面に大勢の人の姿があった。

「でも、頑張ろうね、リッキー！」



『ワン！（任せな、マユ！俺様は負けるのが大ッ嫌いなんだ！どんな勝負であろうと必ず勝つ！）』

ウルフは燃えていた。今まで優しく接してくれたマユのために、そして何より自分のために。

《これより、予選を始めます！》

すると、アナウンスが会場内に響き渡る。

《参加される方は、入場ゲートに集まってください！》

「よし、頑張ろう！」

そして競技は始まった

ワーワーワーッ！！という観客の歓声が会場中に響き渡っている。因みに、競技は二ステージに分かれて行なわれている。

この競技のルールは簡単。一斉にDペットをスタートさせ、走ってゴールを目指させるのだ。しかし、ただゴールを目指すのではなく、立ちふさがる障害物を突破していかなければならない。

そして1位から10位まで残った二ステージの選手（Dペット）だけが予選を突破して決勝ステージに進めるのだ。つまり、これは参加人数を減らすただの予選でしかない。

まず、第一ステージでは、委員長達のDペットがゴールを目指して走っている。

「頑張つてえ、エリザベス！」

今、Dペット達は綱渡りで先に進んでいっている。

…委員長は無我夢中で応援するあまり、キザマロの首を締めている事に気づいていない。ゴンタは「ああゝあ」と言いながら頭を抑えている。どうやら、綱渡り中に自分のペットが落ちてしまったようだ。綱の下にはマットが敷いてあるので大丈夫のだが、落ちたらそこで失格なのでゴンタはここでリタイアだ。

その頃、第二ステージでは、スバルのウォーロックがちょうど火の輪くぐりに差し掛かっていた。

「行けえ、ロックー！」

ウォーロックはこの火の輪くぐりを難なくクリアした。そりゃあ、

その辺のDペットとは違うのだから当然の結果だが…。

第一ステージにいるウルフも、難なく一位で予選を通過した。

「凄いよ、リッキー！決勝ステージに残っちゃったあ！凄いよお！」

嬉しそうな顔でウルフの頭を撫でているマユ。ここまで残れたのが信じられないみたいだ。

『（本当に嬉しそうだな、マユ！）』

「そんなあ〜」

ウルフ達の近くの場所で、委員長が呟きながら自分のエリザベスを撫でていた。

「予選落ちなんて」

「信じられません」

その後をゴンタとキザマロが委員長の後に続けた。

「う、運が悪かっただけじゃない？そんなに落ち込む事無いよ」

亜夢が頑張つて落ち込んでいる3人を励まそうとしている。だが、そんな落ち込んでいる3人とは裏腹にスバルは……笑顔でウォーロックを撫でている。

「なのに……どうしてDペット始めたばかりの星河君が決勝ステージに？」

「たまたま運が良かっただけだよ、たまたま！」

流石の亜夢もたまたまを強調しているスバルを見て、「たまたまねえ……」と何もかも見透かしているような感じで呟いている。

「いや、まぐれって恐ろしいなあ！」

「（何言つてやがる。俺が出場してんだ、あたりまえじゃねえか……ん？）」

ズバルに心の中で突っ込んだウォーロックは、不意に視線を横に向けてきた。すると、視界に……撫でられているウルフが映った。

「あれはウルフ！……フツ、まさかな。奴は孤高の戦士。こんな所で地球人のペットに成り下がってる訳がねえ」

すると、その視線に気づいたのか、ウルフがウォーロックの方に少し目を向けた。

「（ん？……あれはウォーロック！？……まさかな。いくら裏切り者とはいえ、奴は誇り高き戦士。こんな所でペットの真似事なんかしてるはずがねえ）」

お互いは同じ事考えていた。

『（それにしても……似てる……）』

二体がそんな事を思っていると、決勝ステージの案内アナウンスが  
なり始める。

《決勝ステージはディスクキャッチ対決です！マシンから発射させ  
たディスクを先にキャッチしたDペットの勝利となります！優勝者  
には副賞として、最新の電波望遠鏡が贈られます！》

そして、数分後、電波を物質化させた円盤を発射させるマシンがス  
テージの端っこ側に出現した。……誰がどう見ても、そのマシンは  
円盤を発射させるだけにしては大きすぎるような気がした。

この決勝ステージはトーナメント式だったのだが、ウォーロック：  
…もといロッキーとウルフ…もといリッキーはあつと言う間に円  
盤をキャッチをクリアしていき、決勝へとコマを進めるのだった。

## 数分後

決勝という事もあって休憩を挟み、今から決勝戦が始まるうとして

いた。すると、ドーム状になっていた天井がゆっくりと開いていく。開いた所から空を見ると、既にもう暗くなっており満月が出ている。

《さあ、見事決勝に勝ち残ったのはロッキー！そして、リック！優勝するのはどっちだあ！？》

ナレーションのようにアナウンスが入ると、観客席はワーワーッとまた歓声が上がりはじめ。

「負けるな、ロッキー！」

『任せな！』

ウォーロックはスバルに返事を返すと、対戦相手のウルフに目を向ける。

「リックイー、ガンバレエ！」

『（任せな、マユ！優勝してもっと喜ばせてやるぜ！）』

その後ウルフもウォーロックに目を向ける。

『（それにしても……似てる……）』

……また、心の中で呟きながらハモっている2人だった。

第64話 飼われた狼、暴れる 前編（後書き）

ああ、駄文になってる気がする（、、）

何か眠くて集中できなくて……（ 睡眠不足のバカ！

そういえばこの話、ウルフが暴れるの後編からですね。てなわけで、  
次回はウルフは暴れだしたら止まらないと思います（^| ^ ;）

それでは、感想待ってます……眠い……（p | - ）

**第65話 飼われた狼、暴れる 後編(前書き)**

前回の続きの決勝戦から始まります。



## 第65話 飼われた狼、暴れる 後編

《さあ、それでは決勝戦！レディ…ゴー！》

そのアナウンスと共にマシンから円盤ディスクが発射された。その瞬間、スタート地点についていたウォーロックとウルフは円盤目掛けて全力ダッシュをし始める。

『ウオオオオオオオ！！』

そして、段々円盤との距離を縮めていき、浮かんでいる円盤目掛けて大ジャンプした。その時両者は何故か『アオオオ〜ン！』と雄たけびを上げている。

ガブツ！

両者同時に円盤を思いつきり口で捕まえ地面に着地した。両者ともこの一…つしかない円盤をくわえている。この状況から引つ張り合という力業が発生する。

『ングググググウウ…！！』

両者とも離そうとしない。

『グウツ、離しやがれ、この野郎お！』

『何だあ！？テメエこそ離しやがれえ！』

『！？やはりお前はウルフ！』

『デメエはウォーロック！何故こんな所に？まあ、いい。兎に角これは俺様のものだあ！』

『させるかあ！電波望遠鏡は誰にも渡さん！』

2人とも啞えたままよくここまで話せたものだ。2人の引つ張り合いは更にエスカレートしていく。

『『グヌヌヌウ！』』

その様子を心配そうに見ている飼い主2名。マユの場合は心配でしようがないような顔をしている。

『ンヌヌヌウ！』

『ンヌヌヌウ！』

『ヌヌヌ…ウリヤアアアアツ！！』

『グワアアアア！！』

この引つ張り合い、ディスクキャッチを制したのはウォーロックだった。最後の力を振り絞って、円盤を思いつき上に振り上げ、啞えていたウルフを真後ろの弧を描かせるように吹っ飛ばしたのだ。

ウルフは腹を空に向け弧を描きながら飛んでいく。

「あああ！」

その姿を見て目を見開きにし、声を上げたマユ。マユは負けた事よ  
り、ウルフが吹き飛ばされた事に対して声を上げていた。

『（くそっ！すまねえ、マユ！……！？）』

吹き飛ばされながら心の中で誤ったウルフの目に、雲ひとつ無  
い空に浮かぶ青くて白い満月が飛び込んできた。

その瞬間、ウルフは吹き飛ばされていた体制を立て直し、その場  
の地面に着地する。

『（へへッ、やったぜ！……んなっ！？）』

勝利を確信したウォーロックが、ウルフの負けた面を一目見てやる  
かと後ろを横目で見る。すると、ウルフの姿をみるなり、啞えてい  
た円盤を地面に落とした。それ程やバイ事が起きたのだ。

ウルフは赤い目が一瞬見開きになって直ぐにキリツとした細めに変  
わり、自らが発生させた水色の光で体を包んだ。

『まずい……』

『ワオオオオン！！』

ウォーロックがそう呟いたときにはもう遅かった。その頃には既に  
光が晴れており、電波変換した姿、ウルフ・フォレストの姿になっ  
ていた。しかし、いつものウルフ・フォレストではない。体の色が  
ウルフの技“ハウリングウルフ”の体の色と同じ緑色になっていた。

「あれはウルフ！」

『スバル、電波変換だ!』

周波数を変え、トランスの中へと戻るウォロック。スバルは戻ったのを確認すると、トランスを閉じて人気のない場所に走って行く。

「リッ…キー………」

しかし、マユの声がウルフに届く事はなかった。

その頃

「な、何よあれ!?!」

「うわあああああ!?!」

「きゃあああああああー!!」

委員長達、他観客の人たちがウルフ・フォレストの姿を見て驚き、悲鳴を上げながら逃げまわっている。

「（あれは、この前の犬!? ……この前と色が違うような…）」

……名前を知らないのでもこの前の呼び方になっている。

「（なんでこんなところに……!? でも、今はそんな事言ってる場合じゃない!）」

亜夢は委員長達が混乱して逃げ回るところを見計らって、人気のない場所へと移動しようと……したのだが…。

「（!?!? しまった、今夜じゃん!? 私まだ闇ダイクを使いこなせてないから駄目じゃん!! ああ、私のバカア!）」

と心の中で叫ぶ破目になってしまった亜夢だった。

『ワオオオオーン!』

ウルフ・フォレストは爪を振って数回観客席に漸激を飛ばす。悲鳴を上げながら逃げる観客。その中には委員長達も含まれている。

「はああああ!」

ガキンツ!

空中で回転しながらソードをウルフ・フォレストの背後から攻撃したロックマン。だが、その攻撃はウルフ・フォレストの爪で防がれてしまう。その後、ロックマンは一旦距離を取るべく後ろへ下がる。

「やめる、ウルフ!」

そう言った瞬間、ウルフ・フォレストがロックマンに向かって突っ込んできた。

「くっ!」

ウルフ・フォレストの攻撃をギリギリで見切って避けていくロックマン。頭への攻撃は下にしゃがみ、足元への攻撃はジャンプして避け、避けられない攻撃はソードで受け止める。その繰り返しを行っている。

すると、ウルフ・フォレストが爪を地面につけそのままロックマン

へと振ってコンクリート混じりの衝撃波を放つ。ロックマンはそれをジャンプで避けた。しかし、後ろには……優勝商品のトロフィーと電波望遠鏡が。

ドカンッ！

電波望遠鏡とトロフィーは粉々に破壊された。

「あっ!?!」

ロックマンが気づいたときには既に遅かった。

『スバル!』

すると、ウルフ・フォレストが飛び掛ってきた。だが、ギリギリで後ろにジャンプして避ける。

「……………」

その様子を呆然と見ているマユ。2人からは剣がガキンツ、ガキンツと交じり合う音だけが聞こえてくる。マユはウルフの変わり果てた姿を見て言葉が出なくなっていた。

だが、ウルフ・フォレストがロックマンに飛びかかるうとしたとき、目に涙が浮んだ。

「リッキー、止めてえ!!」

ガキーンンンッ!!

「うわあああああー!!」

しかし、マユの言葉は届かず、ロックマンを攻撃して吹き飛ばした。  
ザンッ!

すると、倒れているロックマンの頭を爪で挟むように地面に刺した。  
今のは余りにも危なかった。もう少しでロックマンの頭を貫通する  
ところだったからだ。

『ウウウウウウ……!!』

ウルフ・フォレストは獣が止めを刺す前のように唸っていた。

「リッキー、止めてえ!!」

もう一度ウルフ・フォレストに叫んだ。すると、今度はウルフ・フ  
オレストに聞こえたのか、マユの方向に視線を向ける。

「リッキー……」

涙を浮かべながら小さく呟く。しかし、ウルフ・フォレストは『ゲ  
ルルルウ!』とマユを見て威嚇している。

「どうしちゃったの、リッキー? ……マユの事忘れちゃったの?  
駄目だよ、こんな事しちゃ!」

しかし、ウルフ・フォレストの心にマユの声は届かなかった。それ  
どころか、今にも襲い掛かろうとしている。すると、マユはウルフ・  
フォレストにゆっくりと近づいて行き、ウルフ・フォレストの大き



な爪を掴んだ。

「…元に戻って……リッキー!!」

『ッ!?!』

だが、今度はウルフ・フォレストの心に届いた。その瞬間、ウルフの頭にマユが優しく接してくれたときの記憶が横切っていく。

『……………!!』

ウルフ・フォレストはその時自我が戻ったはずだった。しかし、爪を掴んだまま涙を溢しているマユから爪をゆっくり引き、マユから爪を離す。

『…ウワアアアアアア!!』

暴走したかのように声を上げた。すると、もう一方に爪の方からオレンジ色の光が発せられているのが見える。ウルフ・フォレストはそれを警戒するように後ろへジャンプした。

すると、ロックマンがファイアレオの姿になり、左手のウォーロックエネルギーを溜めていた。

『ウガアアアアア!!』

それに向かって突っ込んでいくウルフ・フォレスト。だが、もう既に遅かった。そのときにはロックマンのSFB、アトミックブレイザーを放つだけのエネルギーが完全に溜まっていたからだ。

「えええい!!」

「リックキー!!!」

ウルフ・フォレストはロックマンが放ったアトミックブレイザーで木っ端微塵にデリートされた。木っ端微塵となった光は空の彼方へと消えていった。

## 事件の後 マユ宅

マユは一人、自分の部屋で泣いている。「リックキー!!!」と呟きながら。それ程マユにとってウルフは大切な存在になっていたのだ。

その様子を窓の外のウェーブロードから見ている物が居た。それはデリートとされたはずのウルフだった。いや、正確に言うと、デリートされたかのように見せかけて当たる瞬間に周波数を変えていたのだ。何故こんな事したのか。理由は簡単、もう迷惑をかけたくな

かったのだ。ウルフにとってもマユは大切な存在になっていた。だからこそ、これ以上迷惑かけたくないと思い、デリートされたかのように見せかけたのだ。

「マユ……いかん、いかん！ 俺さまはFM星人！ 地球時とは……」

ウルフは顔を横に振った後、右手の人指し指からある一筋の光の電波を発生させ、マユのウェーブスキャナーへと電波を送った。

マユは気づいておらず、ずっと泣きじゃくっている。すると、ウェーブスキャナーの中から子犬のような鳴き声が聞こえてくる。

マユは泣くのを止め、ウェーブスキャナーを手にとって中を見て見る。すると、中にはウルフと同じ色をした子犬が目を瞑って鳴きながら倒れていた。

「……リッキーの……赤ちゃん……？」

まだ、目に涙が溜まっているマユはそう呟いてウェーブスキャナーの真ん中のボタンを押し、中から子犬を外に出現させた。

すると、子犬は震えている。だが、ゆっくりとよろめきながら立ち上がりマユに鳴きながら向かっていく。

「……………えへ……」

その姿を見て微笑んだ。

『俺の変わりに可愛がって貰うんだぜ』

そう言つてウルフはそのウェーブロードから周波数を変えてこの場から立ち去つた。

「おいで、フランキー。新しい友達だよ」

マユは犬小屋の中からあのウルフが恐れていたフランキーを呼んだ。中からガサガサと紙くずが動きながら……ハムスターが出てきた。

そのハムスターフランキーは子犬の方に近づいて行く。

「フランキー、リツキーの子供だよ」

『ニョー！』

フランキーに挨拶するように子犬は鳴き声を発した。

「よろしくね！」

二匹にマユは満面の笑みを見せて言った。

その頃 秘密基地

『何だと！？ もういつぺん言って見やがれエ！！』

『間抜けだから間抜けと叫んだア！何か文句あんのかア、この犬やろう！？』

2体はまた喧嘩している。先程戻ってきたばかりなのに早くも喧嘩している。

『大きな口叩くじゃねエか、このカルビ！！』

『何イ！？』

『やっと戻ってきたと思ったら……』

『懲りないねエ。いいからほっときましよう』

リブラとオヒユカスは喧嘩している2対に呆れている。

『犬ウ！』

『カルビイ！』

『犬ウ！！』

『カルビィ!!』

『犬ウ!!!!』

『カルビィ!!!!』

今の2体の声が夜中のコダマタウン中に響いたのはいつまでもない。

第65話 飼われた狼、暴れる 後編（後書き）

マユ編終了。

ふう、やっと終わった……。この話はいつもより描写が難しいんで時間が掛かりました（ー；ー；）

## 第66話 ラブリイ・アンバランス 前編

### ある日の秘密基地

クラウン、ウルフ、オヒュカス、オックス、キャンサーの5対の電波体達は人間の姿へと物質変換している。その物質変換した状態でいつもの円状のテーブルに座り、弁当やお菓子といったような物を食べていた。

クラウンはつまようじに刺した羊羹を観察するように見ている。ウルフは尻尾を喜ぶように振りながらドラヤキを次から次へと口へ運んでいく。オヒュカスはテーブルに頬杖をつきながらポツキーを一本口に啜えて上下に動かしている。オックスは弁当のおかずやご飯を駆け箸という行儀が悪い食べ方で口へと入れていく。弁当は既に5、6箱食べている。

『地球人の食いもんなんてろくでもないもんだと思ってたが、以外に美味しいな』

口に運んだものを飲み込んでゴンタが話し始めた。

『そうだな、悪くない』

『……………下々の者食料など余の口に合わぬわい。…あむ…モグモグ…』  
啜えているポツキーを揺らしながら喋るオヒュカスと、合わないと言いながらしっかり食べているクラウン。ウルフは夢中でドラヤキを食べていく。……………まるでドラ もんだ。



『これも人間共の弱点を探る試練ブック。あむ！』

キャンサーは右手にあんこが載っている団子。左手にはガリガリ君のソーダ味のようなアイスを持って食べている。食べ過ぎて腹を壊さないのか、というぐらいの勢いで食べている。

『それにしても……全然溜まらねエな』

後ろの方にあるアンドロメダの鍵に顔を向けて言ったウルフ。

『地球人目、なかなかしぶとい生き物じゃ』

『ところで、一人足りないようだが…』

キャンサー以外の全員はオヒュカスの言葉の後にテーブルに座っている人数を確認した。キャンサーは子供のように食べるのに夢中だ。

『……そうだ、リブラはどうした？』

居ないのに気づいたのはウルフだった。全員『あっ！』と何かを思い出したときの顔をしながら声を発した。どうやら全員リブラの事を忘れていたようだ。

『奴は何処へ言った？』

『最近人間の姿で出かけてるみたいブック』

『出かける？ 何処へ？』

『オ、オイラ聞いてないブック！ あ、でも、何だか忙しそうだった』

ブク』

オヒユカスの問いにキャンサーが答えていく。どうやら、リブラは何処かに言ってるらしい。何処かは分からないらしいが。

『大事な作戦会議をサボるとはけしからんのウ!』

……今この時間は周りから見ると、作戦会議というかただの食事会にしか見えない。

『舐めてんのか? ふざけた奴目エ!』

ドン! バチイイインツ!!

オックスがテーブルを思いっきり叩く。それが一回目音。そのテーブルを叩いたときに発生した電磁波が後ろにあるモニターに当たり、モニターの電源が点いた。それが二回目音。

《貴様に選択の自由を与えましょう!》

すると、モニターには首に二つのフラスコを提げていて、緑色の水玉のついた蝶ネクタイをして、緑衣を着たアフロの髪形をした人、つまりリブラの物質変換した姿が映っていた。

『リブラ?』

テレビ局　あるスタジオ

このスタジオは今リブラが居るスタジオだ。後ろには大きな天秤の背景があり、その天秤の前に赤と青の箱が置いてあるテーブルが両方の器の前にある。その両方のテーブルに人が一人ずつ座っている。

『貴様に選択の自由を与えましょう！　A、土壌の踊り食い！　B、鯛の叩き揚げ！　さあ、答えはどっち？』

と観客席から向かって右の方に眼鏡を掛けた青年に向かって質問した。因みにリブラはマイクを持っている。この番組の司会のようだ。

「うーん、えーっと……」

右の人指し指を額に当てて悩んでいる。

『自由はあるけど時間はないぞオ。答えは？』

リブラが急かすように答えを聞いた。すると、眼鏡を掛けた青年は迷いを振り切ったかのように右手を思いっきり挙げ、こう言った。

「A！ Aで！」

『え、Aで良いの？ 本当に？』

嫌そうな顔で聞き返す。クイズ番組でよくあるあれだ。

「えっ…、はい、Aで！」

だが、青年は質問に対して少し詰まったが、答えは先程と同じで変えなかった。

『宜しい！ 貴様の選択はA、土壌の踊り食い！ どうだ？』

リブラはそう言うと、テーブルの上に置いてある赤色のAと書かれた箱をパカッと勢い良く開けた。すると、箱の中から赤いバネのついたボクシンググローブが飛び出してきて、リブラの左頬にクリテイカルヒットした。

『ドワアア！ 不正解！』

「そんなあ！！！」

青年はちよつとオーバーなくらいに頭を抑えながら悔しがった。その時、テレビでは画面いっぱい赤い文字で“オーマイガッ！！”という字で埋め尽くされる。

『答えはBだっつーの、このトンチンシャン！ 正解なら最高級天然鰯10人前が貴様の物になるはずだったのに！ 残念！』

リブラの頬には先程受けた攻撃のせいで赤く腫れている。リブラの

説明の途中にBの箱の中身、大量の氷に包まれるように入っている天然の鰯がカメラにはドーン！と映っていた。

スバル宅      リビング

スバルの母、あかねがソファアームに座って頬杖を膝につきながら先ほどのリブラが司会をやっているテレビを見ていた。

「いいわねえ…天然物の鰯……」

「ええ？ 今日のご飯鰯なの？」

すると、部屋から降りてスバルがあかねに言った。どうやら先程あかねが小さく呟いた言葉が聞こえたようだ。

「あら、天然物の鰯はおいしいのよ。滅多に手に入らないけど」

頬杖を止めてスバルの方を見てそう言った。スバルはそれを聞いて「へえ」と呟き、テレビの方向に視線を向ける。

「あれ？ 育田先生！」

それはあくまで“育田”ではなく、育田の姿をした“リブラ”なのだが、見た感じ育田にしか思えなかったようだ。

《今週の選択タイムはここまで！ ラブリー・バランスの選んでゲット！ また来週！》

「ラブリー・バランス？」

「最近売り出し中のタレントさんよ。言葉の使い方が変でおもしろいのよね」

「そうなんだ……」

つまり、今のリブラは最近人気者になってきたタレントだと言っている。彼が育田ではないという事はこの時にわかるだろう。

「私も今度出てみようかしら」

そう言って、ソファーから立ち上がりリビングを出て行った。出て行くのを確認すると、トランサーからウォーロックが話を掛ける。

『おい、スバル！』

「うん、あれってリブラだよな？」

『ああ、奴にあんな才能があつたとは意外だ』

「テレビの人気者になるなんて、一体何考えてるんだろっ?」

## テレビ局 楽屋

リブラがやっていた番組の今日の放送は先程終わった。終わってから、この楽屋へと番組の監督とスタッフと一緒にやってきていた。

3人は楽屋にある四角いテーブルの周りに座っている。テーブルには3人分の珈琲が入れている。

「おつかれさまでしたあ！ ラブリイさんのお蔭で、“選んでゲット” 大人気ですよ！」

「前回の視聴率、またまた記録更新ですって！」

監督とスタッフがリブラにテンションを高くして話し始める。因みに、“選んでゲット”とはリブラがやっている番組の番組名だ。

「そうか？」

「念願の全国放送も決定しましたし、やりましたね！」

スタッフが右手に持っている丸めた台本を左手に叩きながら言う。その話をしているとき、監督は頷きながら聞いている。

「全国放送？」

どうやら、リブラは何の事だか分かっていないようだ。

「コダマタウンだけじゃない、日本中のお茶の間にラブリー旋風を巻き起こすんですよ！ 選択の自由、与えまくりますよー！」

監督が簡単に分かりやすく説明する。リブラは頭の中で全国の凄さを実感していた。

「（日本中かアア！！） そりゃあ、いいー！」

何やら変な事を思い浮かべながら、リブラはフツと軽く笑みを浮かべる。

「ああ、そうだ。ロケ弁がまた余っちゃたんですけどどうですか、お土産に？」

「これも差し入れですけど、持って帰りますか？」



監督は椅子の横に置いていたビニール袋をリブラに渡す。中には5、6箱の弁当箱が入っていた。スタッフはお茶が入っている2?ペットボトルを取り出した。

「あ、こりゃあ、どうも」

余りを貰って喜んでいるようだ。そりゃあ、ただで食料が手に入るのだから当たり前か。

「次回もお願いします」

バン！

2人は弁当の残りを渡してしまうと、楽屋の外へと出て行った。リブラは右手を振って出て行く様子を見送っていた。

その頃 テレビ局の廊下では――

「今日のお仕事おーわりっつと」

廊下をゆっくりと歩いているはミソラだった。今日のミソラの仕事は終わりのようだ。まだ、明るく夕方にもなっていないのにミソラの仕事があんなに早く終わるなんて珍しい。それ程ミソラは毎日忙しいのだ。

「あっ！」

すると、ミソラの反対方向からロケ弁とペットボトルを持ったリブラが歩いてきた。ミソラは廊下の壁際へと移動し、歩いてくる頭を深々と下げた。

「おはよう御座います」

「うん」

リブラは挨拶もなしに通り過ぎて行った。因みに、ミソラが昼間に“おはよう御座います”と言ったのかと言うと、テレビ局内では朝から昼、夕、晩、深夜の全ての時間帯で全ての挨拶はこれを使わなければならないと決まっているのだ。そのため、ミソラは軽い感じでおはようと挨拶したのだ。

『ゲッ！ ちょっと、ミソラ！』

すると、ギターの中からハープが話しかけてきた。

「どうしたの、ハープ？」

『リブラよオ！ 何であいつがここに……？』

ミソラはそれを聞くと、ゆっくりと頭を上げてリブラの方へと向いた。だが、リブラは直ぐに曲がり角を曲がって行ってしまった為、少ししか見る事が出来なかった。

「……FM星人？ 今のおじさんが？ あの最近人気のタレントさんだよ……ローカル枠の番組でだけど……」

『フン、……じゃあいつかア！』

「いいの？ FM星人なんでしょ？」

『きつと、ここが気に入った口ね！ 私みたいに！』

「そうなのかなあ……」

ハープの最後の笑顔を見て、少し悩んだミソラだった。

第66話 ラブリィ・アンバランス 前編(後書き)

はい、短いですがここまで。

とても眠いです……(p\_.\_)

もう寝るか……あ、今日アニサマ2009のダイジェストが2時から(アニマックス)であるんだ……寝れない……(悲)

## 第67話 ラブリイ・アンバランス 後編

テレビ局 玄関ロビー

リブラは廊下をを出て、ロビーまで歩いて来ていた。このロビーはテレビ局自体が大きいだけあって、ロビーの空間もそうとう広い。ロビーの中心にはこの局のチャンネルに合わせてある大きなモニターテレビがある。リブラは足を止め、テレビの方へ視線を向ける。

『（地球人共が夢中になっているあの代物……あれを分析すればマインナスエネルギーについて何か分かるかと思い、このテレビ局とやらに潜入してみたが……）』

リブラが言う代物とはテレビの事である。確かに地球人はテレビで放送されている事に夢中になったり、いろんな情報にそれがおもしろければ何にでも食いついてしまう。それ程いろんな情報が多いのだ。その情報を利用してようと潜入してみただが、まだ手がかりは掴めていないようす。それに潜入にしては少し目立ちすぎてる気がするが……

「キヤーー！ー！」

悲鳴ではない声が聞こえてくる。その方向を見ると、数名の若い女の子（高校生ぐらい）達がこちらに向かってきている。

「ラブリイさんっ！ー！」

「握手してください！ ファンなんですうー！」

「私も!」

どうやらリブラ……もとい、ラブリイのファンのようだ。まあ、テレビで人気司会者になったのだから居ても当然なのだが。数人はリブラを囲むように集まっている。

『（人間なる下等生物に近づき、本質を理解するにはこのやり方は有効だ）』

そんな事を考えていると、幼稚園児ぐらいの少年がやってきて、持っていた色紙とサインペンを両手でリブラに手渡すしせいになる。

「サイン下さい!」

『いいとも!』

「うわぁ、ありがとう!」

少年が緊張しながらの言葉をリブラは笑顔で引き受けた。どこかのお昼の番組でよく言うあの言葉を使って。

……上のウェーブロードからその様子を見ている電波体が2名居た。リブラがテレビ局で何をしているのか見に来たのだろう。

『何だリブラの奴、モテモテじゃねエーか!』

『勝手な事しやがって……』

オックスの一言はリブラの気ぶり嫉妬しているのだろう。ウルフはオックスとは違い、至って冷静に呟いた。

時は進んで 秘密基地

先程まで昼間だった日は沈み、既に夜になっていた。その夜に今、秘密基地で晩御飯を食べている電波体たちが居た。

『リブラの番組、地元では大受けのようじゃな』

また羊羹を食べながらクラウンが話し始める。

『なかなかおもしろいブク。…あ ん…モグモグ…ゴクツ！ リブラのお土産のロケ弁も相変わらずおいしいブク』

キャンサーが弁当に入っているカニ型に切つてあるウィンナーを指でつまみ、口に入れる。…ある意味共食いだ…。

『ッだがよ、間違ってるよなそれって！』

『我らの使命は地球人の心を怒りや憎しみに染め上げ、アンドロメダの鍵を再起動する事。喜ばせてどうする?』

オックスが弁当を食べるのを一度止め、一言言った後にまた食べ始める。オヒユカスはまた口にポッキーを啜えて揺らしながら喋る。因みに、少し前回とは違う点がある。それはポッキーの種類だ。前はチョコだったが今はいちごになっている。

『まったくだ！　おい、リブラ！』

両手にどら焼き……ではなく、煎餅を持っているウルフがリブラを読んだ。だが、何処にもリブラは居なかった。

『居ねエのかよ！』

一瞬間があつたが、直ぐに突っ込んだのはオックス。その後、箸を持った右手でドンツとテーブルを叩いた。

『リブラ目……作戦会議をサボるとは　！』

『許せないブク！』

オックスの後にキャンサーが続けた。リブラのサボりにより全員、相当頭にきてるみたいだ。

『気に入らんのう、余を差し置いて有名人になるとは』

自慢であるうウェーブのかかった髭を右手で伸ばしながら言うクラウン。差し置いて有名人になった訳ではないと思うが、あえてスル



ーする全員。

『……こうなったら、リブラには痛い目に遭ってもらおうぜ』

『おう！ ボコボコにしてくれるわ！』

『いやいや、それではあまりに芸がない。どうせならあ奴と同じ土俵で勝負するというのはどうかのっ？』

ウルフとオックスのリブラを暴力でどうにかしようとしている話に、クラウンが遮って入ってくる。クラウンが言った言葉にキャンサーが質問する。

『ちよいと調べてみたところ、次回はなんと全国放送スペシャルなのじゃ』

その姿で幽霊どうやって調べたのだろうかと突っ込みたくなるが、あえてスルーで。

『全国放送？ 何だそりゃ？』

『実はリブラが出ている普段出ているのはこの街でしか放送されておらんしょ……ぼい番組なんじゃが……好尚につき、日本全国津々浦々で流れる事になったんじゃ』

『出世したという事か？』

『凄いブクー！』

『リブラの鼻を明かすには絶交の機会じゃてエ。我らが本気になれ

ば人間共のハートを鷲づかみにする事などぞつさも無いところを見せてやるのじゃ!』

クラウンが言う“土俵”とは、リブラと同じ立場、つまり“自分達もテレビに出てリブラより人気者になるところを見せ付けてやる”と言つ事だ。

『そうブク! オイラ達がリブラよりもっと人気者になればいいブクウ!』

『そうすれば、誰もリブラに見向きもなくなる、と言つわけだ』

『その一部始終を全国にO・Aオン・エアすれば、余達も注目のまどじゃ』

キャンサー、オヒユカスの言葉に頷きながら、更に説明する。

『ブワアア! 何かイマイチピンとこねえなあ!』

頭の悪いオックスはそっぽを向いて大きく息をつく。

『暴れるのは無しか?』

『暴れて人気者になれるのならそれも有りだろつ』

『ヨツシヤア!』

暴れて良いと聞いて、両手をガッツポーズに変えて喜ぶウルフ。オックスは満面の笑みで『うん!』と大きく頷く。

『これで決まりブク! いきなり全国デビューで、ちよー売れっ子

になつちやうぞ作戦実行するブク！」

『『『『おつー！』』』』

長つたらしい作戦を言った後に他の者達は立ち上がりながら返事をする。……というか、アンドロメダの鍵にマイナスエネルギーを溜める気はコレッぽっちも無いのだろうか…。

次の日の休日 街中

《ラブリイ・バランスのクイズ、“選んでゲット”！ 次回は全国放送スペシャルでお届けしますぞお！ テレビの前の貴様らも、心して選択せよ！》

と、モニターにCMが流れる。そのモニターがあるビルの前にはスバルとツカサの姿があった。休日なので一緒に街に遊びに来ているようだ。

「ラブリイ・バランスだってさあ……この人、育田先生にそっくりだと思わない？」

ツカサがモニターに向けていた目線を横にいるスバルの方に向けて言った。

「そ、そうだね！」

考え事しながら見ていたスバルは、急にふられたため少したじろいだ。

「知ってる？ このクイズ番組あそこで収録されているんだって」

ツカサはその場所に視線を向ける。そこには、とても高いアンテナがついている鉄塔がそびえ立っていった。

「……隣町の電波タワーか。確か、日本で一番高い鉄塔だよね？」

スバルもツカサが言った場所に視線を向けた。この世界ではその鉄塔は二ホン一高いてっとうなんだそうだ。その鉄塔の真下はテレビ局にもなっている。そのテレビ局の前に物質変換した宇宙人が居たという事は誰も知らない。

電波タワー真下のテレビ局前

『ここが会場かあ』

『思いつきり暴れて、俺様のファンを増やしてやるぜー!』

ファンと言っか、逃げ惑う人達が増えそうな気がするが……

『リブラよ、これも己を失ったお前のためを思っこと。悪く思っ  
なよー!』

オヒユカスは最後の方で不気味な笑みを浮かべ始める。

『ホッホッ! ワクワクするわい!』

クラウンにワクワクすると言っていたが、こっちとしてはクラウン  
の幽霊の姿を見た人達が悲鳴を上げないかハラハラしているが……。

『人気者になってミソラっちと共演するブク!』

『フッフッフ!』

それぞれは欲望を胸に秘め、不気味な笑みを浮かべて笑い出す。  
…

…一瞬5人が並んでいる間から…あかねが歩いていった気がしたが…。

テレビ局内 選んでゲットの収録中

天秤の背景の観客席から向かって左側の器の前のテーブルに、ミソラが頬杖をつきながらハープと小声で話している。

「これってあのおじさんが司会だったの」

『同じFM星人としては負けられないわ！ ライバル出現ね！』

何故かハープは燃えている。そうこう話していると、選んでゲットの番組がスタートした。

『では、最初の問題はゲストの響ミソラさんに出題！』

「えっ!？」

『貴様に選択の自由を与えましょう! 3年前にナマステ砂漠で発見され、新種認定された恐竜の名前はあ?』

リブラはゲスト……ミソラに右手の人差し指を向けながら問題を出題した。

「うっ!」

『A、パピプペポサウルス。B、ハラホロヒレノドン。さあ、答えはどっち?』

## スバル宅     リビング

スバルは司と別れ、家に帰っていた。そして、ソファアームに座って選んでゲットの生放送を見ていた。

「リブラの番組にミソラちゃんが出てる！」

『ほーっ……』

すると、画面に映ってるカメラが観客席の方を映し出された。

「ッ!?! えっ、母さん!?! 何でそこに!?!」

ちょうど映し出されたところのはあかねが観客席から見ている姿があった。と言う事は先程FM星人が笑みを浮かべているときに見かけたのは気のせいではなかったようだ。

スバルは観客席に居るあかねを見て驚いていたが、観客席の一番後ろの席ではウルフ、オックス、オヒュカス、クラウン、キャンサーの物質変換した姿があった。付け加えると、キャンサーは生のミソラをみて目がハートマークになっている。



第67話 ラブリー・アンバランス 後編(後書き)

FM星人達にテレビで売れっ子になってどうすんだ!と突っ込みた  
くなりますね(笑)

はあ、今日午前2時まで起きてたけど結局始まってから眠ってし  
まい、アニサマ2009見れなかった……ある意味夢落ち(落ちが  
夢だったではなく、夢の中へ落ちていった)orz

## 第68話 リブラの選択 前編

『貴様に選択の自由を与えましょう！ さあ、答えはA、Bどちらだア？』

そんな訳でミソラに指を差しながら問うリブラ……もといラブリイ・バランス。この問題は「3年前にナマステ砂漠で発見され、新種認定された恐竜の名前何？」という問題で選択肢は「A、パピペポサウルス。B、ハラホロヒレノドン」のどちらかだ。すると、いきなりミソラが「はい！」と右手を挙げた。

「Aでお願いします！」

『答えはA。……どうだア？』

とリブラはミソラの目の前に置いてある赤の箱<sup>A</sup>を開けた。すると、中から緑色の風船が膨らみ始めた。その風船は箱を開けると膨らむ仕掛けになっており、どんどん膨らんで行き、背びれのある恐竜に姿を変えた。しかも、とても大きく両手ではおさまり切れない程の幅がある恐竜だ。

ピンポンッ！

今のは正解にした時になる正解音だ。と言う事はこの問題に正解したようだ。

『見事正解のミソラさんには、パピペポサウルスをプレゼント！』

…この風船で出来た恐竜はパピペポサウルスだったようだ。しか

も、これがプレゼントだとリブラは言っている。だが、こんな大きい物ミソラが持てるはずもなく、ただただそれを見て苦笑いしている。

スバル宅     リビング

「…母さん……」

テレビに映っている観客席から一人の女性が席をたつた。何故立ったのかと言つと「この番組の挑戦者として誰かいるか」とリブラが観客席に尋ねたところ、その女性が手を挙げた。それをリブラが当たったのだ。つまり、この女性は今から問題に挑戦しようと言つのだ。……その女性はスバルの良く知っている人物、母のあかねだ。

『お前の母さん、やる気満々だなア……』

「…はは……はははは……」

スバルはそれを見て苦笑いする事しか出来なかった。

『貴様に選択の自由を与えましょう！ 銀河系の中心にあるという巨大ブラックホール、形がにているのはどっち？ A、コダマベーカーリーにあるのデリシャススカーレーパン！ B、同じくコダマベーカーリーのビッグアンパン！ さあ、答えは！？』

とミソラとは違うテーブルに座っているあかねに指を差しながら問う。あかねは両手を体の前で握りながら考えている。

「うーんと……えっと……」

『さあ、迷っている時間はありませんぞオ！』

あかねは声を上げながら悩んでいる。

『さあさあさあ！』

段々詰めよって来る。すると

『ちよつと待ったアブク！』

リブラの後ろに挟見千代吉…の、姿をしたキャンサーがステ  
ージに上がってきていた。そして、リブラに後ろから声を掛けた。

『（ん？…ッ！？ キャンサー！）』

「迷ってるなら、オイラが変わりに答えてやろうブク！ 答えはA  
ブク！」

ビシッと指を差しながらいい放つキャンサー。

「あら、迷ってなんかないわよ！ じゃあ私はB！」

バシッと青の箱を叩いて對抗するように言うあかね。

『お、オホホッ！ これは可愛い挑戦者が現われましたなあ。では、  
どちらが正解か開けてみましょう！』

少したじろぎながら答えの箱を開けようと提案する。中を開けると  
…… あんぱんが9つ入っていた。

『答えはB！』

ピンポンッ！

『見事正解の貴様には、ビッグアンパン三十個をプレゼントオ!』

「やったあ!」

中には9つしか入っていなかったが、どうやら商品は三十個あるらしい。あかねは正解して素直に喜んでいいる。

『そんなア……ミソラっちに捧げるつもりだったのに……』

半場泣き目で呟いている。

「あの子……」

『キャンサーだわ……!』

「ええっ!?!」

ハープと小さな声で話しをしている。すると、千代吉の正体をハープが見破った。まあ、物質変換しても周波数は変わらないので分かるのは当然だが。

『何やってんだ、キャンサーの奴?』

『全然目立つとらんではないかア!』

観客席の後ろに座っているウルフとクラウンがキャンサーに駄目だしている。

『さあ、どんどん行きますよ! 次の問題、選択するのは貴様だア

』。』

『おーうー!!』

と反応したのはオックスだ。いつの間にかキャンサーの立っているステージまで降りて来ていた。

『どおお!?』

いきなりの気迫ある声に少したじろいだりブラ。

『今度は俺さまだ!』

『(今度はオックス! まさか皆で着てるのか?)』

「あら、スバルのお友達だわ! 頑張つてえ!」

観客席に戻っている途中にステージを見ているあかね。オックスをゴンタだと思っているようだ。

「今度はゴンタ!？」

『いや、こいつはオックスだ!』

「ええ!？ FM星人!？」

トランサーからのウォーロックの言葉にスバルは驚いている。あの場に2体もFM星人がいると言う事は何か嫌な予感がしてきたスバルだった。

## 電波タワー 外のウェーブロード

数十メートルぐらいの高さの上空にジェミニ・スパークの二体が電波タワーを眺めていた。どうやらテレビ局の中を見ているようだ。



『フン、この調子じゃいつまで経ってもここいつは空っぽのままだ』

Bの右手には本物のアンドロメダの鍵が載せてあった。中は相変わらず溜まっていない。

「見てられないねえ」

Wも呆れたように呟いた。

『貴様に選択の自由を与えましょう！ A、ビーフカツ弁当！ B、甘辛焼き肉丼！ さあ、どっち？』

今度はオックスに指差している。

『おうッ！ 両方とも俺様のお気に入りじゃねエか！ 選べねエよオオ！』

両手を頭に回してうずくまり、嘆いている。

『では、考える時間をくれてやろう。その間に次の問題だ……うっ！？』

次の問題を出そうと観客席の方に振り返ると、そこには物質変換したウルフが歩いて来た。

『俺が答えてやる、掛かってこい！』

『（こいつ等……）これまた、威勢の良い人ですな。宜しい！ 選択の自由を与えましょう！』

『おう！』

スタジオ 編集室

監督とスタッフがこの普段は編集に使う部屋のモニターで放送を見ていた。

「ん？ 台本とずいぶん違うぞ？」

「初の全国ネットで張り切ってるんじゃないですか。ラブリーさん」

『A、満月堂の満月まんじゅう。B、十五屋のお月見せんべい。さあ、どっちだ？』

『ドワァ！？ どっちと言われると困るぜエ！』

両方とも満月のように丸いもの。それを想像しただけで頭から耳、尻から尾が出そうになっている。そのため両手でその場所を押さえながら悩んでいる。

『それならそこで悩んでいたまえ』

『次は余の番じゃ』

今度はクラウンがリブラの後ろに現われた。後ろに刺さっている矢はあえてスルーで。

『余のためにとっておきの問題を用意しておるのじゃろっな？』

『…貴様に選択の自由を与えましょう』

そう言っ腕を組んだりブラは、クラウンの方へと振り返り、指を差しながらこう言った。

『本日ゲストの大人気アーティスト、響ミソラのデビュー曲と言え  
ばア？ この問題に見事正解したら、響ミソラさんからステキなプ  
レゼントがありますぞオ』

「（そんなの聞いてないし……）」

とリブラを細めで見ている。

『はい！ その問題はオイラが答えるブク！』

すると、先程問題に正解できずに落ち込んでいたキャンサーが開き  
直りクラウンとリブラの間に手を挙げて割り込んでくる。

『何言つとる！ ミソラちゃんの問題は余の得意分野じゃ！』

キャンサーの頭を右手で抑えながら言うクラウン。その手をどかし  
てキャンサーも言い返す。

『そんなの初耳ブク！』

『貴様のごとき若輩者がミソラちゃんの事を理解するなど、500  
年早いわ！』

2人のミソラをめぐる喧嘩が始まった。因みに500年とはクラウ  
ンが電波変換した時の持ち主の生きていた頃が約500年前だ。つ  
まり幽霊になって500年待てと言つ事だ。

『ミソラっちのプレゼントはオイラの物ブク！』

『余の物じゃ!』

2人は顔をくつつけて喧嘩している。

『はい、こんな2人はホツといて次の問題いつてみよう。選択するのは貴様だ!』

カメラ目線で指差しながら言っている。その後ろには2人が喧嘩している姿が見えている。

「FM星人達何しに着てるんだらう?」

『上品がほしいんだらう』

こんな感じで2人はテレビを呆れながら見ていた。

## 第68話 リブラの選択 前編（後書き）

あかねの後の問題はアニメでは全てリブラのアドリブらしいです。

この状況だと、せつかくのミノラの出番が目立たない……。

## 第69話 リブラの選択 後編

『ウオオオオオ！！ いい加減にしろリブラア！』

リブラの問題に頭を抱えて蹲って悩んでいたオックスが叫びながら起き上がった。

『俺達を無視するな！』

『ちゃんとやれエ！！』

オックスの後にウルフが言い、オックスが叫んだ。すると、その瞬間2人は水色とオレンジ色の光に別々に包まれた。そして中から電波変換したウルフ・フォレストとオックス・ファイアが現われた。

『ブロロロロオ！！』

『ウワアアアア！！』

2体は体が反り返る程思いつきり上を向き、雄たけびを上げる。

2人のスタッフと監督はこの映像を見て驚いている。いきなり怪物が現われたのだから無理も無いだろう。

「た、大変だ！ 怪物が出たあ！」

「と、兎に角放送を中止しろ！」

「はい！」

監督の指示に2人は従い、自動カメラを操作するパネルに手を触れようとしていた。その時、

『そつはさせないよ』

パチンツ！

この部屋の出入口付近にオ物質変換したヒュカスが現われた。オヒュカスが指をパチンツと鳴らすと、パネルに“スネークレギオン”の時の無数の蛇が出現した。

「うわあ！？」

その蛇が出現した事により、2人はパネルから手を引いた。だが、



この蛇のせいで放送を中断させる事が出来なくなってしまった。

『全国放送を続ける』

後ろから命令した。3人はなす術も無く、ためらいながら「はい」と言つてオヒュカスの指示に従つた。

すると、カメラにはキャンサーとクラウンが電波変換する光に包まれる映像が映っていた。オヒュカスは2人が電波変換した事を確認すると、フツと笑みを浮かべた。

スタジオ 廊下

観客席に居た人々は近くにあつたドアからスタジオを出て、悲鳴を上げながら逃げ回っている。いきなり眼前に地球征服を目論む宇宙人が現われたのだ、逃げ出すのも無理内。

その逃げ惑う光景をステージの上からリブラは見ていた。

『私の番組を妨害する気か？ 許さん！』

そう呟くと、スタジオ全体が暗くなり、リブラのところだけにスポットライトが当たる。

『電波変換！ リブラ オン・エア！』

マイクに向かって叫ぶ。すると、受け取ったマイクからスタジオ全体のスピーカーに伝わり、スタジオ全体に響き渡った。

リブラは光に包まれ姿をリブラ・バランスへと変えた。

## 街中

ビルにあるモニターにFM星人達の姿が映っている。それを見ている街の人々は驚きが隠せないようだ。先程までの番組に化物が映っているからだ。中には「何あれ？」という声が飛び回っている。

この放送が、住宅のテレビ、ウェーブスキャナー、モノレール内の小型モニターなどに放送されている。全国放送なので更に規模は大きいであろう。

スタジオは天井が崩れ、瓦礫が落ちてきてめちゃくちゃになっている。その中に、リブラ・バランスが立っている。

『これでは、せつかくの全国放送が台無しではないか!』

すると、目の前にウルフ・フォレスト、クラウン・サンダー、キャンサー・バブル、オックス・ファイアが構えている。

『放送は続行しているさ!』

『我々のかつこいい電波変換ぶり、只今絶賛生放送中じゃア!』

『オヒユカスがうまくやってるブク!』

『お前はとつと消える! ファイアブレス!』

『ワイドクロー!』

すると、オックス・ファイアがファイアブレスを吹いて、ウルフ・フォレストが爪を構えて飛び掛ってくる。

『ウワアアアアアア！！？』

リブラ・バランスはいきなりの事に避ける事もできず、二つの技が直撃してしまった。吹き飛ばされるときに、周波数を変えて場所を移動した。すると、それとバトンタッチするようにロックマンが現われた。

「止める！ これ以上の破壊は僕が許さない！」

『来たな、ロックマン！』

「『ジエミニサンダーア！！』」

「ッ！？」

ドカアアアアーン！！

テレビ局のこのスタジオ部分が爆発した。何処からとも無く電撃が放たれたからだ。

「ジエミニ・スパーク！」

ロックマンは何とか攻撃を避けていた。他のFM星人も無事なようだ。

『何しに来たア！？』

「フッフッフ……」

不気味に笑っている。周りから見たら恐いくらいだ。

『地球人に恐怖を与えたいんだろう？』

「簡単な事じゃないか」

ジエミニ・スパークは2体とも外のウエアブロードへ移動した。それを追っていくようにロックマンとFM星人達も移動した。電波タワーを囲むような立ち位置になっている。

『ジエミニの言う事も最もだ！ オックスタックル！』

『ハジヨウハンマー！』

『ブーメランカッター！』

『アッパークロー！』

オックス・ファイアはタワーに突っ込み、クラウン・サンダーはハンマーを持った幽霊を、キャンサー・バブルはブーメランを飛ばし、ウルフ・フォレストは爪で攻撃した。所々で爆発が起きる。

ジエミニが言う方法……それは。タワーを破壊して恐怖に染め上げると言う至って単純な事だった。FM星人はその方法に従っている。

「うわあああああああ……」

タワーは先程の攻撃のせいで、ゴゴゴと言いながら斜めに傾き始める。

ロックマンはその爆発に巻き込まれ、下の方へと落ちていく。

ガシッ！

落ちていくロックマンを捕まえたのは電波変換したミソラだった。

「ハープ・ノート……」

それを呟いた時、ハープ・ノートは周波数を変えて下のウェーブロードへ移動した。そのウェーブロードにロックマンを降ろすと、F星人達が居る場所へとジャンプした。

「いい加減にしなさいーいー！ ショックノート！」

ハープ・ノートはキャンサー・バブルのブーメランカッターをギターで発生させた音符で消滅させた。

『まずいぞ、スバル！ このままじゃタワーが崩壊するー！』

「何とかしなきゃ！」

タワーはゆっくりと傾いていつている。その近くでは電波が乱れている。たぶん、電波人間の攻撃がぶつかり合うためだろう。

ロックマンはタワーが傾いている場所の付け根の部分に周波数を変えてジャンプした。

このタワーは鉄塔だ。つまり、造りは鉄骨。その鉄骨の付け根の部分が攻撃によって折れ曲がっている。折れ曲がった事により、左右のバランスが悪くなりより体重が掛かっている方向へ傾いているのだ。

「ふん…!! くう…!!」

その折れ曲がった部分から反対の方に向かって力を入れて押し試みる。だが、いくら電波人間とは言え、これを押し返すには相当な力があるであろう。傾きを止めるので精一杯だった。

「私が相手よ!」

タワーを囲うような立ち位置に居るFM星人の中心地点にハーブ・ノートが立っていた。

「フンツ! 女一人で何が出来る!?!」

「なら…2人ならどう? 風の舞 風月漸!」

ザンツ!

「ツ!? グハアツ!!」

オックス・ファイアが気づいた時には、ジャスミン・ハートに背中を切られていた。いきなりの不意討ちにオックス・ファイアは避ける事が出来なかったのだ。

「一人で駄目なら二人ってね！」

ジャスミン・ハートはハープ・ノートが居る場所へ移動した。

『不意討ちとは卑怯な！』

『正々堂々と戦えブク！』

「別にいいけど、……あんた達じゃ正々堂々と戦ったって私達に勝てるわけないじゃん？」

全員に余裕の笑みを見せて挑発した。勿論演技ではなく、本当に言っている。

『この女……言わせておけば……！』

「行くよ、ハープ・ノート！」

「OK！」

2人はFM星人の居る場所に向かってジャンプしていった。



ゴ…ゴゴゴ…ゴゴ…

タワーはロックマンのお蔭で何とかこれ以上傾かなくなっている。  
だが、

「ねえ、もしかしてずっとこうしてなくちゃ行けないのお！…？」

押し返せない。それぐらいの重さがあるのだ。

街中

リブラは先程喰らった時から数分後、今どついう状況なのか街中の  
モニターから様子を見ていた。

そこにはロックマンが倒れるタワーを抑えて活躍している映像が映っていた。

『くう！ この番組の主役は誰だあ！？ A、ラブリー！ B、ラブリー！ そう、断じてロックマンではない！！』

そう言って、街中のウェーブロードから周波数を変えてタワーのロックマンが居る場所に向かっていった。

## 編集室

「こいつは凄いスクープ映像だ！ タワー崩壊を防ぐ英雄の姿！」

監督がロックマンが映っている姿を見て言った。その崩壊中の建物中に、この3人は居るのだが、全く気づいていない。この部屋ごと斜めに傾いている。

「放送、中断しなくて正解でしたね」

『映すのはそこじゃない！ 上だア！！』

オヒュカスはそう言い放った。先程から駄目な仲間を見てきて怒っているのか、青筋を立てている。

「は、はい」

恐ろしいオヒュカスを見て、逆らえずに命令に従った。

上ではハーブ・ノート達が戦っている。

「マシンガンストリング！」

ハーブ・ノートはギター弦を飛ばす。弦はキャンサー・バブルに巻きつき、苦しめている。

『グワアアアア……！！』

すると、エネルギー切れなのか、電波変換が解け、周波数を変えて戦闘を離脱していった。

「風の舞 鎌鼬！」

鎌鼬を起こし、オックス・ファイアを襲った。オックス・ファイアは体が引き裂かれ、そのまま電波変換が解けてしまった。

『く、クソオツ！』

そして、戦闘離脱していった。

『何やってるんだ！？ 電波変換！』

奴らには任せておけないと言わんばかりの顔で電波変換したオヒュカス。一瞬、オヒュカス・クイーンへと姿を変えると、周波数を変えて上へと上がっていった。

「くっ！ もう持たないやあ…！」

諦めかけていたそのとき、周波数を変えて、誰かが後ろに現れた。

『そんな支え方じゃ話しにならん。私に任せろ！』

そこに居たのは、敵のはずのリブラ・バランスだった。

『ヘビーウェイト…！』

すると、頭上に大きな分銅を召喚させた。その分銅は傾いてる方の逆の方向の端に落とした。それはちょうど、浮かんでいたタワーの足を踏みつけ、タワーの傾きが一発で直ったのだ。その時に地響きがあったが、あれだけの物を落としたのだから仕方が無い。

何にせよ、これでタワーはもとのバランスを取り戻した。

「ありがとう！」

『スバル、上だア！』

ロックマンは礼を言うなり、直ぐに皆が戦っている場所に向かうために周波数を変え、この場を後にした。

『アッパークロー！』

『ゴルゴアイ！』

ウルフ・フォレストはジャスミン・ハートをオヒュカス・クイーンはハープ・ノートを攻撃した。

ジャスミン・ハートはギリギリまで近づいてきたウルフ・フォレストの攻撃を当たる瞬間に体をひねらせて避け、がら空きになったウルフ背中に風月漸の剣で一刀両断した。

ハープ・ノートは目から発生したビームを華麗に避け、マシンガンストリングを飛ばした。だが、オヒュカス・クイーンは見切ってい

たのか、攻撃を避けた。

『フォールサンダー!』

そして、その隙にクラウン・サンダーがハーブ・ノートの頭上から雷を落として、大ダメージを与える。

「きゃあああああああ!」

「ッ!? ハーブ・ノート!」

名を読んだが、気絶したのか、返事はなくその場に倒れて動けなくなっている。

「ハーブ・ノート!」

そこへ、ロックマンが到着した。

『スバル、フォースを使い!』

「うん! スターブレイク!」

ウォーロックをトランサーへと戻し、ドラゴンのカードを差し込み、グリーンドラゴンへと姿を変えた。

『一気にかた付けようぜエ!』

「SFB! エレメンタルサイクロン!」

SFBを発動させ、木の葉交じりの竜巻を起こす。その竜巻に残り

の電波体たちが呻き声をあげながら巻き込まれていく。

竜巻が治まった時には、もうFM星人達の姿はなかった。たぶん、逃げたのだろう。

「ミソラちゃん！」

「ミソラ！」

スターブレイクを解いたロックマンとジャスミン・ハートはハーブ・ノートへ駆け寄る。

「大丈夫？」

上体だけ起こさせ声を掛ける。

「ありがとう、スバル君、亜夢！ 凄い力を手に入れたのね」

今のはロックマンに対してだろう。今まで、一度もロックマンのスタートフォースを見ていないのでそんな言葉が出たのだ。

「じゃあ、またね！」

手を2人に向けると、周波数を変えてこの場を去っていった。

ある電波空間

ジェミニ・スパークの2体はアンドロメダの鍵の中を見ている。だが、相変わらずちよっとしか増えていないようだ。

『……マッ、こんなもんか』

Bはちよっと残念そうに呟いた。



## リブラの楽屋

リブラが楽屋に入ってくると

パンツ！ パンツ！

クラツカーの音が鳴り響いた。よく見ると、監督、その他諸々が楽屋の中に入っていた。

「……おめでとう御座います！」「……」

「あ……あ……」

まだ、状況がつかめていないリブラ。

「選んでゲットスペシャル、至上最高の視聴率を獲得しました！」

監督からそう告げられた。

「あ、ええ？」

だが、まだ良く分かっていない。あれだけの事があったのだからくびだと思っていたリブラは、予想外の展開についていけないのだ。

「あのハプニングを一切カットせずに放送したのが成功でしたよお！ あの被り物、ラブリイさんの仕込んだんだってえ？」

「すっかり騙されちゃいましたよ！」

……どうやら、一あれは仕込みで現実ではない《……………》  
……《》と知っているようだ。こっちは死にももの狂いだっただとも知  
らずに。

「あ、ああ……それはよかった」

とりあえず話をあわせてみる。

「で、次は？」

「次回も当然全国放送です！」

リブラはそのハッピーニュースを聞いて大きく頷いた。

## 秘密基地

『ツ！？ テメエ！！ 俺様のロケ弁、独り占めしてんじゃねエ！』

！』

オックスが自分の食べている箸を止め、ある一人にいった。それはキャンサーだ。キャンサーはもう、20個以上食べている事が山ずみになっている空の弁当から分かる。

『その赤いのは余のお気に入りじゃ。勝手に取る出ない！』

今度は洋館を食べているクラウンが。

『だあー！ 殆ど残ってねエじゃねエか！』

『許さんぞ』

目を見開きにそたのウルフと、口に啜えているポッキーを揺らしているオヒュカスが怒る。

『そ、そんな怒んなくなったって、リブラがまた持って帰ってきてくれるブク！』

それを言うと、全員に怒られたことに腹が立ち、残りの弁当をやけ食いし始めた。

第69話 リブラの選択 後編（後書き）

ふう、やっと終わった…（…）

次はお待ちかね、雑談になると思います！ お楽しみに〜（^^）  
/

番外編 ちよつとした雑談7 (前書き)

今回はいろんなアニメなどの名前や用語がでますが、伏字はしませ  
ん。べ、別にめんどくさいとかじゃないんだからね！ ( 亜夢風 )  
笑)

## 番外編 ちよつとした雑談7

どうも、何だかんだで7回目です

では、早速ゲストを。……この小説の主人公のスバル君です！

「こんにちは……って、どうしたの？ 急に改まったような紹介をして」

いや、何かこの頃君が主人公なのかどうか危うくなってきたからね。

「はあ？ どう言う事？」

だって、二章からFM星人中心の話になっちゃうんだもん。もう主人公が出るかどうか危ういんだよ？

「えっ、そうなの？」

はい、冗談はこのへんにして、

「（冗談ですか……）」

今日はキャラだけではなく、作者さんのゲストを。出てみたいと仰っていましたので。……只今ShootingstarRockman（next story）を連載中の勇輝さんです！

【どうもこんにちは、勇輝です】

はい、こんにちは！

「こんにちは。って、前回許可取るとか言ってたのは勇輝さんの事だったの？」

そうです。さて、今回は前半を質問コーナー、後半をお楽しみタイム

「お楽しみって？」

僕と勇輝さんの秘密です。それじゃあ、スバル君と私で勇輝さんに質問していきましょうか。2人ともOK？

【OKです！】

「いよいよ」

では、まず“好きな”系で質問します。好きな食べ物は何ですか？

【そうですね、僕の好きな食べ物はハヤシライス、寿司、焼き肉ですなー！】

ほう、ハヤシライスと寿司と焼き肉ですか！どれも私の好きな食べ物ベスト10に入りますねえ…

「ちょ、作者、ヨダレ垂れてるって！」

おっと、私とした事が……。次にアニメなどは？

【アニメはソニックと小さい頃見ていたニャンダーかめんですな】

何ですと!?! ニヤンダーかめん!?! 懐かしいなあ……小一ぐら  
いの時にめちゃくちや好きで見てたなあ。得にオープニングが好き  
だったなあ……あの時はビデオまで借りて家で何度も見ていた記憶が  
勿論ソニックスも全話(日本で放送していない第二期まで)も見て  
ましたよ、小3か4の頃。

いや、どちらも懐かしい……あの時はよかつたなあ……。

「ちょっと、いきなり過去に浸らないですよ。……まず僕その時生まれ  
てない(キャラとして)から分らないんだけど」

気にするな。今となっては歴史の一部だ!

「????」

【ははは、スバル君混乱してますね】

そんなスバル君はほつといて、アニメ関連で好きな声優さんはいま  
すか?

【そうですね……金丸淳一さん、水樹奈々さん、広橋涼さん、川  
田妙子さん、神奈延年さん、大浦冬香さん、伊藤かな恵さん、福園  
美里さん、まるたまりさん、神代千恵さん等입니다】

おお、私の好きな声優さんだらけですね。

金丸さんはソニックスやゲームのソニックアドベンチャー(他にも  
新ソニ)などのソニックの声や昔やってたつるピカ八ゲ丸君の近藤  
とか、クレヨンしんちゃんのこの前出てきた、風間君のパパとか(風  
間君のパパの声を聞いてテンションが上がった作者)。……あ、昔



のポケモンのハーリーとかやってたなあ。

広橋涼さんはソニックのティルスの声をしてましたね。

川田妙子さんはソニックのエミー、アラレちゃんなどが自分の記憶の中にありますね。あ、そういえばニヤンダーかめんにも出てたよ  
うな……

神奈さんはナックルズ、この作品に出てくるキグナス。他にもBL  
ACK CATのリバーなど。

まるたさんはあんまり知らないんですけど、前に良く見てたキム・  
ポッシブルに出てくる毛の無いネズミ、ルーファスってキャラを演  
じてたような（詳しくはデイズニーをググって下さい）……。

神代さんは……何故か、昔アニメの金色のガッシュベル！！で見た  
コーラルQってキャラしか出てこない……何故だ……

そして、最後に水樹奈々さん！！ キターーーー！！

「…テンション高いね？」

そりゃあ、一番好きな声優さんなんだよ！？ 声優にして歌手やつ  
てんだよ！？ 凄くない！？ 亜夢ちゃんが歌ってる時には奈々さ  
んになるんだよ！？

「う、うん、ある意味凄いな（……その前に目が怖い……）」

……ん？ 良く見ると、ソニックの声優さんが多いような……それ  
にしても、私の小説（脳内変換）での声優さんが4人もいらっしや

る…。

「えっ？ 3人じゃないの？（てか、声優だけで喋りすぎでしょ…）」

確かに、大浦さん、かな恵さん、美里さんがスバル君、亜夢ちゃん、ミソラちゃんだっってこの前言いましたね。実は、私の中でのフェニックスの声がこの中にいるのです！

それは……金丸さんだあ！！

「……次、行きましようか」

【はい】

ちよっ、何で無視なんですかあ！？

「これ以上は長くなりそうだったから」

【声優だけで結構スペース使ってますよ】

くっ、仕方ない。今日は見逃してあげましよう。

「【（何を見逃すんですか…）】」

では、質問を続けましよう……と言いたいところですが、この続きはまた後程。

「はあ？ 後程って？」

今から、あの2人の所に行きましょう！

「えっ、2人つて亜夢ちゃんとミソラちゃん？」

そうです。私はこの前、ある計画を立てました。その計画には勇輝さんにも協力してもらってます。そして、その計画を実行するときが遂にやってきました！

「計画って……何か嫌な予感しかしないんだけど……」

名づけて、ドッキリ修羅場大作戦！

「はぁ？」

【亜夢ちゃんとミソラちゃんをドッキリ（修羅場）にはめるという作戦です】

それにはスバル君の協力が必要です！

「な、何で僕！？」

フッフッフ、今に分かりますよ。それじゃあ、早速行きましょう！

「そんな危ない臭いがする計画に協力なんてしません！」

【そんな事言わずに協力してくださいよ】

こう言えば大丈夫です、勇輝さん。スバル君！君に拒否権はないよ！断った場合はいろんな意味で君を大変な目に合わせるからね？例えば、亜夢ちゃんの殺気を一日中受けたまま過ごすとか……）

これはスバル君を騙すための嘘です)

「……わかったよ(脅しだ…完全に脅しだ)」

【なるほど!】

「納得しないでくださいよ……!」

では、行きましょう!

はい、てことでスタジオを飛び出し、私達は今誰も居ないある公園の茂みに隠れております。

「て、何で小声なんですか? しかも茂みって……(あとやっぱりスタジオだったんだ…)」

この雑談(お楽しみ)がおもしろくなるかは君に掛かってるのだよ、

スバル君。

「は、はあ……」

君は私と勇輝さんが言った通りに動いてくれればいいのだよ。

「わ、わかりました……たく、何で僕が……」

何か言った？

「い、いいえ！　じゃあ、行ってくるよ……」

【……行きましたね】

はい。さて、ここで読者の皆様に今からやる事を説明しましょう。

まず、スバル君の所にハマリ役の人が来ます（事前にメールを送って呼びました：差出人スバル君で（笑）　内容は秘密です）。ハマリ役の人がスバル君にあるものを渡し、スバル君は受け取り（そのときのハマリ役の人の反応を見て楽しむ）、スバル君が一言言ったところでここでネタバラシ。何、簡単な事です。

そして、仕掛け人であるのは私と勇輝さん。スバル君は私達が出した指示に従うだけです。つまり、ここではスバル君は私たちの指示に従うロボットだと思ってください。

【その指示と言うのは、“ここに僕達が居る事を言わない” “軽く話しをして、ある物を受け取る事” その後“ありがとう、大事にするよ”と一言感情を込めて言うの二つです！】

ある物とはこの前最後に2人に渡したあれです。スバル君はその事を知りません。なので、受け取ってもお守りとしか思いません。

さて、そろそろ一人目が……お、来ました！……アニメ、ゲームでのヒロイン、響ミソラさんです。（ここから私と勇輝さんは小声だと思ってください）

「あ、ミソラちゃん！」

「ヤッホー、スバル君（……よし、ここであれを渡そう）」

あ、何かもう既に渡そうという顔になってますね。

【そうですね。予定ではもっと後にあの顔になるはずだったんですがねえ】

まあ早いに越した事はありません。それより、軽く話せて言っているけど……スバル君なんて話しますかね？

【さあ？ でもヒーローだから何とか行けますよ】

そうですね。

「（あ、……何話そう……考えてなかった）」

「スバル君！」

「は、はい！」

「え〜っと……ちょっと渡したい物が……」

「えっ、渡したい物？（あ、そういえば何か受け取れって……何かな？）」

「これ、…その……お守り！」

「えっ、あ、うん（えっ？ ある物ってお守り！？ てか、何でミソラちゃん赤くなってるの！！！？）」

あ、何か物もらって、意外って顔の人と真っ赤になってる人が凄い絵面になってますね……

【確かに…】

だけど、それがおもしろい！

【あ、ドSの顔になってますよ】

おっと失礼。では続きを……ッ！？ ちょ、勇輝さん！ あれ！！

【えっ？ ツ！？ えっ、登場早くないですか！！！？】

はい、まだ5分も早いです！！ 待ち合わせはの時間はまだ5分もありま……あ、なるほどお〜。

【何かなるほどなんですか？】

つまりあれですよ、待ち合わせとかするとき、相手を待たせないように早めにくるあれですよ。

【ああ、なるほど……って、つまりそれって非常にまずい状況では？】

はい、まずいです。何か恐ろしい事が起こる気がします。

「その／＼受け取ってくれる？／＼」

「あ、うん」

「あ、いただいた！ お待たせ、スバル……くん……あ、ミソラ！」

「亜夢！？」

あ、終わる前に見つかってしまった……

【……………】

「（えっ？ どうして亜夢が！？）」

「（えっ？ どうしてミソラが！？ ……あ、あれって）……ミソラ、それこの前作者に貰ったお守りだよね？」

「ッー！ ……そうよ！ 私はスバル君にくれを渡そうとしたの！」

「ッー！（って事はミソラはスバル君の事が好きなの！？） わ、私だってスバル君にこれを！」

「あ、ミソラちゃんと同じ奴だ……」

何か……これはこれでおもしろくなりそうだ！（笑）



【この状況で楽しそうですね……。僕なんか嫌な汗が出てますよ……】

「……ミソラ！ 私がスバル君に渡すんだから、あんたは引っ込んでな！」

「なっ！ 亜夢こそ、私が渡すんだからどっか行って！」

「それはこっちの台詞よ、このマセガキ！」

「ッ！！ マセガキはそっちでしょ、このシンデレレ！」

「ああ〜！！ 言ったなあ！！！」

「言ったわよ、だから？」

「ムカつく……。このオタンコナス！！！」

「そっちこそ、意地っ張りの恥ずかしがりや！！！」

「くっ！ 腹の中がブラックホール！！！」

「ッ！ 人一倍の人見知り！！！」

「大体、あんたはいつも！！！」

「亜夢こそ！！！」

「あの…2人とも…？」

「うるさい、外野は引っ込んでて!!」

「はい……」

うわあ、一人の男を巡って女が言い争う……まるで昼ドラだ……。

【言ってる場合じゃないですよ。どうするんですか、これ?】

……まさかこんな事になるとは……大体予想ついてましたけどね

【ええ!? マジですかあ!?!】

ちよ、声が大きいですって! バレちゃうじゃないですか、あのお守りはただのお守りで、話しをおもしろくするために騙したって事が!

「へえ、そうだったんだあ。……まさか、またまたあんただったとはねえ、作者。通りで都合の言い話だと思ったんだよねえ。恋が実るだなんて」

そうなんですよ、全て私が……あれ? 今誰の……まさか!?!?

「そのまさかですよ、作者」

「何度やっても分からないみたいね……」

あれ? バレてる?

【「うん、作者が自分からペラペラとってたから」】

そ、そんな事い、言っただかな、す、スバルく、君、勇輝さん？  
わ、私はただおもしろくし、しよう

「そんな冗談はもう通じませんよ、作者。今度こそあなたを殺します！」

「女の子を騙すとは言い度胸じゃない。しかも、親友と喧嘩までさせるとは」

ちよっ、一人と、トランスしてるんですけど！？ 違うマンガの人がいるんですけど！？ そして亜夢さん？ み、右手にあるだ、ダークマターを直してくれます？ てか、どっから出したの！？

「問答無用！！！！！」

「作者……2回死んで来い！！！！！」

だあああああー！ー、何で私だけ追いかられるのおおお！  
！？ 不幸だあああああー！！！！！！！！

「待ちなさい！！！」

「やっぱり100ペン死ねええ！！！！！！！」

た、助けてええ！！！！

「……作者達どっかいつちやいましたけど」

【そうですね。あ、そろそろ時間ですのでこの辺失礼させていただきます】

きます】

「あ、じゃあ今日はこの辺で。さようなら！」

【ではでは勇輝でした！】

……………次回に続く

「「続かない！！！！！」」

## 第70話 委員長、失恋大作戦ブック！ 前編

ある日 FM星人秘密基地

いつものように円状のテーブルに座って、FM星人たちが作戦会議を開いていた。

『何故アンドロメダの鍵にマイナスエネルギーが溜まらない？』

今のはオヒュカスだ。これまでFM星人達が街で暴れる事で、地球人のマイナスの感情を生み出されるはずだったのだ、計画では。それなのに、アンドロメダの鍵は一滴のマイナスエネルギーが溜まっていない。この事にFM星人は頭を抱えている。

『まったく何やってだ、お前等は？』

マイナスエネルギーが溜まらないのはお前等のせいだと言わんばかりの口調でウルフが言う。その言葉にオックスが不良ぶった口調で返す。

『人間なんかに飼われていたお前が言うな、犬ウ！』

『何だと、このカルビ！？』

『やるか、この犬ウ！？』

また、いつものように2人の喧嘩が始まった。因みに、オックスが言った人間とはマユ（詳しくは62〜65話参照）である。

『これこれ、喧嘩しても始まらんぞ』

2人の睨み合うような喧嘩にクラウンが遮って喧嘩を止めようとする。

『よし、今回は余が自ら』

『うるせエ！！！！』

話しを勝手にまとめようとするクラウンは、オックスとウルフの鉄拳を喰らってしまい、小さく潰された。

『私が行こつ』

『A、私が行く。B、リブラが行く』

リブラの選択しの意味はつまり、オヒュカスに自分が行くか、リブラが行くか尋ねているのだ。

『今度こそ大丈夫だ！俺に任せろ！！』

『いいや、俺だア！！』

『ええい、絶対余が行くのじゃア！！』

潰されているクラウンが言った瞬間、キャンサーはこの全員が喧嘩している空間から鍵をこつそり持って抜け出した。全員、いい争っていて気づいていないようだ。喧嘩中の中から犬やカルビなどの言葉が飛交っているのは言うまでもない。

街中

街中のビルがよく立ち並び、人が多いこの場所を一人の電波人間が愚痴りながら歩いていく。名はキャンサー・バブル。……見た目はコスプレした姿にしか見えないがれっきとした電波人間だ。

『もうあいつらには任せておけないブク。やはり、ここはリーダーのオイラが…やるしかないブク!』

偉そうに歩きながら呟いている。

良く見ると、周りを歩いている人達から視線を送られている。それもそのはず、子供くらいの身長の子がカニのコスプレ…をしているように見えるのである。食いつかない方がおかしい。

『(……よし、まずは恐がらせてみるブク)』

周りの人達を見ながらそう思い……行動に移した。

『オビラハFMゼインだブク！　ゴワイカ！？　ベロベロベロオ  
！！』

頬を下に引つ張りながら、右目を上、左目を下に向けながら近くにいる親子の子供に、その変な顔を見せながら言った。

因みに『オイラはFM星人だブク！　恐いか！？』と言ったのだ。  
因みに下を右、左と動かしながら言っている。

「……………」

子供は全く無表情。良く見ると、親と手を繋いでいる。

キャンサー・バブルはその手を繋いでいる先の方にゆっくりと目を向けていく。

（ギロリ！）

その子の母親と思われる中年の女の人がこっちをギロリと見ている。それははつきり言って、閻魔大王のように怖い顔をしていた。

『ぎゃあああああ！！』

勿論、キャンサー・バブルはその怖い顔に絶えられるはずもなく、悲鳴を上げながら背を向け逃げ出した。



コダマ小学校 放課後

今日の授業は終わり、いつもの道を5人並んで話しながら帰っている。左から亜夢、スバル、ゴンタ、キザマロ、委員長の順だ。

「昨日の電波ウィルス事件もロックマン様のお蔭で、被害はなかったわね」

「そうですね。流石はロックマンです」

そう2人がロックマン事、スバルの事を褒め称えていると、端方にいる亜夢がスバルに耳打ちしてくる。

「(ねえ、昨日そんな事があったの?)」

「(えっ? ああ、うん。まあ大した事じゃないんだけどね)」

「(ごめんね、私駆けつけられなくて……。今度はちゃんと行くから!)」

「（うん。仕事しながら大変だね…）」

「（べ、別に大した事じゃないよ!）」

とそんな事を2人で耳打ちし合っていると、急にゴンタがこう言った。

「そういえば、最近よくロックマンと一緒に戦ってる2人……えっと…何て言ったっけ?」

「ハーブ・ノートとジャスミン・ハートですよ」

「そうそう、あの子達かわいいなあ! ロックマンの彼女なのか? あ、そうなると彼女2人いるのかなあ?」

つまり、「二股か?」とゴンタは聞きたいのだろう。スバルはゴンタが言った言葉を軽く受け流しているが、亜夢はそうではなかった。

「（……周りから見ると彼女に見えるんだ…）」

少し、赤らめながら嬉しそうな顔をしている。スバルは隣にいるのに全く気づいていない。

ゴゴゴゴゴゴオ…!

すると、委員長の方からドス黒いオーラが出ている。しかも目が真っ赤で、犬歯が出ている。この委員長の姿はクラスメイト曰く、軽い閻魔状態と呼ぶらしい。

「あわわわわわああ……!!」

この状態に気づいているのは隣にいるキザマロだけである。禁句を言った本人はスバルの方を向いていて気づいていない。

「ご、ゴンタ君、ゴンタ君!」

「何だよ? あの子達はロックマンの彼女だ、きつと」

「ゴンタああ!!」

悪魔のような声が聞こえた。その声でゴンタはやっと反応し、自覚した。自分が言っではいけない禁句を言ってしまったことを。

「あなた今何て言ったの? あんな子達がロックマンの彼女な分けないでしょお!!!!」

最初は少し静かな口調だったが、あとの方からこの世でもっとも恐ろしいであろう顔で言った。勿論どす黒いオーラを放ちながら。

「ご、ごめんよ、委員長!」

ゴンタとキザマロは逃げ出した。何故キザマロまで逃げ出したのかは分からないが、委員長の威圧感から逃げ出す事しかできなかったのだ。

「逃がさないわよお!!」

すると、委員長は大きく振りかぶって……手に持っていたスクールカバンを権たちに向かって投げた。

カバンは横に回転しながら一直線に進んでいく。

ゴンタとキザマロはその一直線に進んでいくカバンを割って避けた。ギリギリだった。もう少し避けるのが遅ければ顔面にクリーンヒットしていただろう。

カバンは止まることなく一定の速さで進んでいく。

「あつー!!」

『いッ!? だああアア!!』

すると、前に居たカニ……もといキャンサー・バブルの顔面にクリーンヒットした。そのときの衝撃で仰向けに倒れて気絶した。

「待てエー!!」

当たった人なんか構わず、自分のためだけにゴンタは追いかけていく。何て酷い女なのだろうと、周りに人が居たら思ったであろう。

すると、キザマロはキャンサー・バブルの横を通りかかった時に足を止めた。

「大丈夫ですかあ？ あれね、完全に気絶してますね」

「一応心配してきたようだ。」

「おかしなマスクをした子供です……でも、よくできてますねえ」

キザマロはツンツンとキャンサー・バブルの顔をつついていて。これをマスクだと思っているのだろう。

「待ちなさぁーい!!」

鬼のような声が聞こえてくる。

「まだやってる。やれやれ、恋する乙女の委員長は怒りのエネルギーMAX。世界を滅ぼしちゃう勢いですね」

ボソツと呟くと、キザマロはその場から去っていった。だが、キャンサー・バブルはキザマロがボソツと言った言葉を聞き逃さなかった。というか、そこで目が覚めた。

『（何ブク!? 委員長の怒りのエネルギーで世界を滅ぼす? それはつまり……）』

自分の首から胸のあたりに提げてあるアンドロメダの鍵の中を見たと、中には透明な液体が一滴入っていた。

『おお、少し溜まっている!』

寝ていた体、上半身だけを勢い良く起こし中を確認める。

『委員長の怒りのエネルギー! もしや』

何かニヤケている。また、よからぬ事でも思いついたのだろう。

「待ちなさぁーい!」

横断歩道を追いかけていく委員長と、はたまた追いかけれ方のゴ  
ンタ。2人はまだ鬼ごっこを続けていいる。

「許してくれよ、委員長〜！」

「こら、待てつてばあ〜！」

鬼ごっこはゴンタが掴まらない限りは永遠に、何処だろうが地獄の  
果てだろうが追いかけるような勢いだ。つまり、掴まらない限りは  
この鬼ごっこは終わらない。

「委員長〜！」

すると、追いかけてきたのだろうか、スバルと亜夢が横断歩道手前  
でこの光景を見ている。二人は少し域が荒い。たぶん、追いかけて  
きたのだろう。

「委員長、落ち着いてよー！！！」

だが、スバル声は委員長に届いていない。だめだこりゃと、スバル  
は叫ぶのを諦めた。亜夢は溜息をつきながら呆れている。

「よくあんなに走れるよね……」

「鬼の委員長は体力の底がないんじゃない？」

亜夢のその言葉を聞いて、スバルは苦笑いしている。

『ッ!? スバル、何か来る! ……電波空間だ!』

突然、スバルのトランサーの中にいるウォーロックに告げられた。

「えっ？ あ、うん！」

スバルは直ぐにトランサーを掛け、ウォーロックが言った通り電波空間を見渡した。

「あれはっ!!!?!」

すると、上空から地上目掛けて電撃の塊が落ちてきた。落下地点は……ゴンタと委員長。

「きゃあああああ!!」

「うわああああ!!」

その電撃の塊は普通の人間にも見えているようだ。すると、落下する寸前、2人は姿を消した。いや、消したのではなく、もの凄いスピードにさらわれて行ったのだ。

「大丈夫、2人とも？」

それはロックマンだった。いつの間にか電波変換していたのだ。

「う……ん……」

ゴンタは急な事についていけない。目が点になって頷いている。

「ロックマン様あ！ やっぱりを助けに来てくれたのですね!?!」

ゴンタとは逆に、委員長は直ぐにロックマンに喰いついた。目がハートになっている。

「え〜っと…」

言葉が詰まった。というか顔が近い。この状況では言葉がでないのも当然だろう。

『フォールサンダーアー!!』

すると、上空から二つの電撃が放たれた。それを

「ショックノート!!」

「風の舞 風壁!!」

電波人間、2人による技でロックマン達を守るかのように攻撃を防いだ。

「ぼやぼやしない、ロックマン!!」

「まったく、油断しすぎ」

ハープ・ノート、ジャスミン・ハートは一言ずつロックマンに注意した。ハープ・ノートはビルの屋上に、ジャスミン・ハートは3人の前に立っている。

「ハープ・ノート、ジャスミン・ハート…!!」

すると、ビルの屋上からスタッと降りてくる。



「FM星人が響ミソラのライブ会場に侵入してきたの

私のと言えばよかっただろうが、それはできなかった。理由は、ゴ  
ンタと委員長がいたからだ。私と言った場合、簡単に正体がバレ  
てしまうからだ。

「それで あ、こら、待ちなさい!」

話の続きを言おうとしたら、電撃を放った存在、クラウン・サンダ  
ーが尻尾を巻いて逃げていく様が視界に入ってくる。

「追うわよ、ハーブ・ノート!」

「うん!」

2人の電波体は周波数を変えてこの場から立ち去り、逃げ出したク  
ラウン・サンダーを追っていく。

「あ、待ってよ!」

ロックマンもその後を追っていく。

「ああ…ロックマン様……またあの2人が、私とロックマン様の邪  
魔をお!」

……邪魔したわけではないと思うが、委員長はそう言っしか気が晴  
れなかった。

すると、後ろにいつの間にかキサマロが立っている。委員長のカバ

ンを持って。怒りに満ちた委員長はキザマロからカバンを受け取る  
と…

「許せなあーい!!」

…と言い、大きく振りかぶってカバンを投げた。

「ん？ だあああ!!?」

ドカッンッ!

勿論カバンはキャンサー・バブルの顔面に見事にストライク。デッドボール当た  
ったときの勢いのまま何処かに飛ばされていく。

「やっぱり酷い女ブック……でも、委員長が怒ったという事は……」

気を失う寸前、意識を保ちながら胸にあるアンドロメダの鍵の中を  
見る。するち、先程よりもう一滴透明な雫が増えていた。

「おお、溜まってるブック……！ やはり委員長を怒らせるには……」

ここで、キャンサー・バブルは空を飛びながら、意識が飛んだのだ  
った。

**第70話 委員長、失恋大作戦ブック！ 前編（後書き）**

はい、と言うわけで、修羅場編が始まりました。

修羅場編ではアニメとは少し違い、ミソラと委員長と言う組に亜夢も入ります。そして思う存分スバル君を取り合ってもらったつもりです（^-^-）

それでは、感想待ってます

## 第71話 委員長、失恋大作戦ブク！ 後編

数時間後      キャンサー・バブルが飛ばされた場所

『ン……ハッ！ 酷い目にあったブク』

どうやら、目が覚めたようだ。キャンサー・バブルの目が覚めたときには既に陽が沈みかけていた。

『…ハープ・ノートめ、ミソラっちとは大違いの乱暴者ブク……あいてて…！』

どちらも同じなのだが……キャンサー・バブルはその事を知らないため、このような事が言えるのだ。ハープ・ノートが本人と知った時はどんな反応をするのだろうか……。

すると、キャンサー・バブルは上半身を起こした。飛ばされ、落下した時にぶつけたせいも、妙に背中が痛い。

『くそーッ！ せっかくマイナスエネルギーを集められるチャンスだったのにイ〜！ でも、焦る事はないブク！』

俯きながら悔しがったが、直ぐに立ち直った。何故か…

『ロックマンにあの2人をくっつければ、委員長が怒ることが分かったブク！』

…だそうだ。先程のキザマロの眩き、委員長の怒りに満ち溢れた時の行動……この事から、委員長の嫉妬のボルテージが上がっていく

事が実証された。

『よし、頑張るぶく！ 委員長失恋大作戦ブク！』

ザバアーツ、と海の波がぶつかる音が聞こえる。つまり、キャンサー・バブルが居たのは、波がよくぶつかる崖の上だったのだ。そこにポツンと大声を出しているのだ。陽が沈んでいく夕陽に向かって……。

## 翌日 学校の正門前

殆どどの生徒が登校してしまい、一時間目の授業が始まっている時間。キャンサー・バブルはその誰もが教室の中に入っている生徒に変装して正門前に立っていた。因みに頭のカニは大きめのフードで隠し、口にはマスクをしている。

『ここが学校という所ブクかあ』

勿論この時間は門は閉まっている。だが、そう呟いた後に、キャンサー・バブルはその門を掴んで不敵な笑みを浮かべた。

『フッフッフ、作戦はしつかり考えて来たブク。…フーン…！…グググ！ あれ、開かないブクウ……………』

キャンサー・バブルは本気の力で横に引っ張ったはずなのに、門は開かなかった。電波変換した姿でも開かないのだ……相当頑丈な門なのだろうか……。それを思うとキャンサー・バブルの瞳には涙が浮んでいる。

「君、どうしたの？」

『ッ！？』

すると、学校の中から門の前まで、この学校そ先生と思われる女の人が、右手を腰に当てやって来た。急の事にキャンサー・バブルは逃げる事が出来なかった。

『え、あ、あの、その、えっと…………ゴホン、ゴホン！』

少し動揺した後、自分がマスクをしている事を思い出し、わざと大げさに咳き込んでみた。

「ああ、風邪で遅刻したのね。はいはい」

すると、その先生は門をスツと開けた。キャンサー・バブルが開ける事が出来なかったその門を。……その先生はキャンサー・バブルを“風邪で遅刻したこの学校の生徒”だと騙されてしまった。

つまり、学校によからぬ事を考えている宇宙人を侵入させてしまったのだ。

「風邪、お大事にね」

『ゴホン、ゴホン、ゴホン！』

風邪と誤魔化して学校の中へと走って逃げていく。今のキャンサー・バブルの心情は危なかったの一言で表せそうだ。

#### 休み時間 5 - A の教室

教室の中の委員長をキャンサー・バブルはバレないように廊下から様子を伺っている。すると、委員長は席を立ち、前にある黒板の方へと歩いていった。

その隙に教室に入り、机の上にあるノートを置いた。そして、教室を出て行くこととする、が。

ドカツ！

「ウワァッ！」

ゴロゴロゴロゴロ！

キャンサー・バブルは急いでいたため、出口近くの机の角に体をぶつけて、こけ、ゴロゴロと教室の外へと転がっていく。

その時に非常に痛かったのか、目から涙が流れていく。

すると、委員長が自分の机の前にはやって着て、キャンサー・バブルが置いたノートの中に目を通した。ノートには右ページの方にLoveと書かれた傘の下にロックマンとハープ・ノートの絵（幼稚園児が書いたような下手）が描かれていた。左ページには傘に×がついている絵があった。描いてる途中に失敗したのだろう。だが、今気にするべきところはそこではない。

委員長はそれを見て、静かにノートをパタンツと閉じ、そして大きく振りかぶって

「何よ、これ！！」

ガコンツ！

前の方でスバルと話しているゴンタの頭めがけて思いっきり投げたのだ。ゴンタは頭にノートの角の部分がクリーンヒットしたため、目に涙を浮かべている。

「ッ！？」

「ッ！？」

これにはスバルも驚いた。いきなり友達の頭に当たったのだ、無理



もない。

2人は、ノートが投げられた方向を直視する。すると、委員長がゴ  
ンタの方に人差し指を差している。

「ゴンタ！ あんたの仕業ね！？」

「ええ！？」

何故、ゴンタの仕業だと思ったのかと言うと、昨日の会話と描いて  
あった絵の下手さ。この2つからゴンタの仕業だと委員長は思い込  
んだのだ。勿論ゴンタの仕業でわなく、描いた犯人は聞き耳を立て、  
フッフッフと笑っている。

## 授業中 プレネタリウム

今度は星に関しての授業をするために、プレネタリウムの星を見て  
いる。

「これがかに座です」

先生が立体映像を見せながら説明している。

すると、委員長のトランサーに一通のメールが届いた。勿論授業中のため、着信音はマナーモードになっているため鳴っておらず、小刻みに震えている。

委員長はそつと先生にバレない様にトランサーを開けた。

「……………ラブレター!? しかもロックマン様からだわ!」

メールには…あて先 Luna 件名 Love Letter ラブレター  
差出人 From: Rockmanと書いてあった。委員長はそのメールを迷わず開いた。

内容は…内容 Text…

Dear Jasmine ジャスミン・ハートへ Heart

I love you 好きです

From: Rockman

と書いてある。

「ジャスミン・ハートへ? 好きです? ロックマンより?」

パタンッ!

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ…!!

委員長はその何ともわざとらしい、誰かが仕組んだようなメールを見て、怒りに満ち溢れていた。トランサーを閉じてから、静かに殺

気を体中から放っていた。

『フッフッフ…また怒ってるブク!』

送ったの犯人は、勿論キャンサー・バブル。送った端末機器は片手で持っているウェーブスキャナー。これも作戦の内ようだ。

#### 次の休み時間 廊下

生徒の皆は廊下にあるモニター前に集まっていた。

「ええ!？」

その驚いた声はスバルが発したものだ。何故声を上げたのかは

「ロックマンとハーブ・ノートが電撃結婚!？」

とモニター書いてあり、その画像があるからだ。明らかに新郎新婦の顔のところにロックマンとハーブ・ノートの顔写真が貼つてある。つまり、合成写真という奴だ。

ゴンタとキザマロが声を揃えて言った後、隣に居た委員長が黒いコースラを放っている。

すると、スバルの隣に居た亜夢も何とも言えない委員長より黒色が濃く、禍々しいオーラを体から放出していた。これを人は嫉妬のオーラと呼ぶ。

「うわあ!?!」

隣に居たキザマロとスバルは同時に声を上げた。隣に殺気を放つ少女達がいるのだから。嫉妬と言うのは時には美女達を鬼の姿へ変える。

「っつな訳ないでしょう!!!!!!」

生徒は全員、委員長と亜夢から離れた。危険を察知したからだ。

委員長はクルクルのヘアーが逆立ち、亜夢は拳を握り締めて今にもモニターを壊しそうな勢いである。これが恋する乙女の嫉妬のパワーである。

それを遠くから見ている者は、

『フッフッフ、またまた怒ってるブック。……何だか一人増えているブックが、まあいいブック。次の作戦もどんどん行くブック』

壁の物陰に隠れてその様子を見ている。

その夜 委員長宅

夜になり、月が光となりこの暗い世界を照らしている。そんな中、一人の電波人間がある家に忍び込んでいる。その家では既に寝静まっております、その家の娘、ルナ事委員長のもとにやって来ている。

『フッフッフ』

軽く笑い声を溢した後、委員長の耳元でこう呟いた。

『ロックマンとジャスミン・ハートはラブラブ…ロックマンとジャスミン・ハートはラブラブ…』

「ん…んん……ロックマン様………」

委員長は夢の中で囁かれ、寝言を言っている。委員長にとっては悪夢と呼べるものをみているのだろうか。

『フフ、聞いているブク〜。ロックマンとジャスミン・ハートはラブラブ〜、ロックマンとジャスミン・ハートはラブラブウ〜』

「うう、カー…」

ガシッ！

『あ！？ ドワアアアア！！』

委員長が寝返りうつたとき、キャンサー・バブルの服を委員長に掴まれた。すると、次の瞬間更に寝返りをうち、掴まれたままの服ごとキャンサー・バブルが入ってきた窓の外へと投げ飛ばされた。…寝相が悪いとかそういうレベルではないのは確かだ。本当は起きているのではないだろうか、と突っ込みたくなるが、あえてスルーで。

投げ飛ばされたキャンサー・バブルは頭から地面に着地した。というか地面に激突した。その時に目から涙が漏れ出した。

『痛いブク〜！ でも、怒ったブク』

泣き目のキャンサー・バブルは不気味に笑っていた。

次の日 学校の屋上

スバルと委員長とゴンタ、キザマロ、亜夢のいつものメンバーは屋上で何かを話し合っている。因みに、屋上にはパラソル付きのテールブルがあり、5人はそこで話し合っている。

『デートは楽しいブクね、ハープ・ノート？ そうブク、あ、いやいや、そうね、ウフフフ！』

ロックマンの姿(?)をしたキャンサー・バブルが左手にハープ・ノートの安っぽい人形を持って、何やら意味が分からない芝居をしている。

『オイラ達は恋人同士ブク！ そうよ、恋人なのブク。 ラブラブだブク！ ラブラブよブク！』

「……………な、なにあれ？」

『やっぱり、バカだ』

ハープ・ノートの真似をするときに裏返った声を出しているキャンサー・バブルの様子を見て、スバルとウォーロック呆れている。やはり頭は子供レベルなのか、と。

『ラブラブだブク。 ラブラブよ…ブク…？』

キャンサー・バブルが途中で止めた。理由は簡単。殺気むき出しの

亜夢と委員長が目の前に居たのだから…。

「何なの、あんた！ ロックマン様はそんなんじゃないわよ！」

「……………子供でも容赦しないよ…？」

委員長は鬼のような顔。亜夢はかろうじて笑っているが…目は笑っていない。すると、委員長がキャンサー・バブルを持ち上げ、「何者！？」と言いながら、変装している部分を取って捨てていった。

変装に使っている、ロックマンのヘルメットの部分を取られた時、カニの頭が姿を現した。

「あれ、カニ？」

「ッ！？ ほう、FM星人がこんなところで何をしてるのかしらあゝ！？」

「……………あんたもしかしてえ！？」

『な、何の事ブック？ オイラはアイアイ傘ノート置いたり、偽ラブレターを送ったり、電撃結婚写真を作ったり、委員長の家に忍び込んで催眠術を掛けようとしたりしてないブック！』

……………何から何まで全てバラしたキャンサー・バブル。それを委員長と亜夢は聞き逃さなかった。聞いた後、殺気を放った閻魔大王の姿に変わった。

「やっぱりあんたの仕業だったのね…！」



「覚悟しな、カニー!!」

『ヒイヒイヒイ!!』

秘密基地      キャンサーの部屋

秘密基地の中には一人一人個人別の部屋がある。キャンサー・バブルはその中の自分部屋に戻って来ていた。今のキャンサー・バブルは左目の辺りと、右手以外は全て包帯でグルグル巻きの姿になっているのは言うまでもない。

キャンサー・バブルは右手にリモコンを持ち、横に少し長いソファーに座っている。

『ふう、疲れたブク……』

ピッー!

キャンサー・バブルはリモコンで目の前にあるテレビの電源を点けた。すると、そこには眼鏡を掛けたミソラと背の高い金髪の男性と手を繋ぎ合っている映像が映りだす。

『仕事で疲れた体にミソラっちの声は優しいブク。デートしている可愛いブク！…ッ!? どう言う事ブク!? この男目エ!』

すると、先程手を繋いでいた男性は違う女性と手を繋ぎ、ミソラは怯えるようにそれを見ている。

『この人は私のものよ。あなたとはもう終わったのよ! オーツホツホツホ!』

『そんな…どうして…酷いわ…!!』

ミソラの演技は上手い。涙をちょうどいい位の量を流し、視聴者に悲しそうなイメージを上手く思わせている。フィクションと分かっているとしても、本当にあっているような感じがしてしまうがない。

『うう、どうしてブク? …酷いブク…!!』

キャンサー・バブルの頬を伝って、涙がツウーツと流れていく。ポタポタと落ちる音が聞こえてくる。

『こやつは相当な悪じゃ。性倍してくれる』

すると、いつの間にかキャンサー・バブルの隣にクラウン・サンダーが座ってコメントしていた。キャンサー・バブルはそれを聞いて、内緒にしていた事がバレたと思い、ドキッとした。

『ああ、何。余もミソラちゃんのファンなんじゃ』

『そうブクかア……ん？』

ホツとしたキャンサー・バブルは視線をテレビに戻した。

《こんな女にあなたを渡さないわ！ 私の怒りはエベレスト急！  
可愛さ余って未知さ百倍！ あなたの居ない世界なんて、滅ぼして  
みせるんだからあ！》

一つ一つのセリフに決めポーズを入れ、続けていく。すると、画面  
が「惚れたら 地獄 夏の乱」と言う文字が出てきた。次回予告の  
ようだ。

《次回、惚れたら 地獄 夏の乱 宜しく！》

と、音声が流れた。すると、プツンツとテレビの電源が切れた。キ  
ャンサー・バブルがリモコンで電源を切ったのだろう。

『フウ、今週もおもしろかったブク。次回も楽しみブク』

一つ息をついて、感想を述べた。どうやら毎週見ているようだ。

『ああ、そうブク！』

キャンサー・バブルはアンドロメダの鍵の事を思い出した。地道に  
委員長を怒らせて溜めたアンドロメダの鍵の事を。

『委員長を怒らせてマイナスエネルギーを溜めていたブク！』

『何と！？ で、溜まったのか？』

『見るブク！』

自慢げにアンドロメダの鍵をクラウン・サンダーに見せた。中には、半分以上透明なエネルギーが溜まっていた。これが努力の結晶という事だ。

『ほほう、これは凄い！』

『ハッハッハ！ もう少しブク。よーッし、この調子で次の作戦ブク！』

見せたアンドロメダの鍵を懐にしまいこむように首から提げ、元の位置に戻る。

『やや！ してそれはどんな作戦じゃあ！？』

『フッフッフ、それは……その前にもう一回見ようっ！』

『あららッ！』

クラウン・サンダーの首は、キャンサー・バブルの昭和的なボケで体から滑るように取れてしまった。頭に載っていた王冠も頭が取れた事により、地面に転がり落ちた。

キャンサー・バブルはまたテレビを点けると、先程のドラマをまた見始めた。どうやら録画していたようだ。まあ、ミソラのファンとして妥当な行動であろう。

第71話 委員長、失恋大作戦ブック！ 後編（後書き）

という訳で、委員長だけではなく、亜夢も怒らせてみました。ぶっちゃけ、委員長より亜夢の方が恐いです……。

てか、丁度6000文字って……一番多い文字数だ（・ー・）  
もう少し減らそうかなあ……出来たならば……

あ、次回から修羅場の話し……だったと思います……。

## 第72話 ドラマで修羅場の大作戦ブク！ 前編

『委員長（+おまけ）の怒りのマイナスエネルギーでこんなに溜まったブク！』

ソファアの後ろにある机の上でアンドロメダの鍵の中を眺めている。中の透明な液体はちやぶちやぶと音を立てて揺れている。

『よし、勿論作戦はなんじゃ？』

前のソファアで足を組んでくつろいでいるクラウン・サンダーが、キャンサー・バブルの方を向いて質問する。

『…これブク！』

そう言っつて、ソファアに飛び込むように座り、手に持っているリモコンでテレビを点けた。

ピッ！

『あなたなんかには負けないわ！ 終わるのはあなたの方！ このエベレスト級の怒りのエネルギーでぶっ飛ばしてあげるわ！』

ピッ！

ここで、キャンサー・バブルは一時停止のボタンを押した。テレビには最後の台詞と共に止まっているミノラの姿を映し出している。

『ミノラっちが言っていたこの台詞…。これをハープ・ノートが委

『委員長に言えば……』

『なるほど、委員長の怒りがドカーンと爆発。そんなもってマイナスエネルギーが満タンとなるわけじゃな？』

キャンサー・バブルの続きを予想し、続けるように口にする。キャンサー・バブルは『そうブク！』と言って頷いた。

『『ダアツーハツハツハツハ！！』』

二体の電波人間は馬鹿笑いし始めた。だが、クラウン・サンダーは笑いすぎて途中で、顎の骨がカクンツと外れてしまう。直ぐ様両手で抑えて治したので、問題はないようだ。

『それじゃあ、頑張るブク！ 委員長失恋大作戦、最終章ブク！』

『よし、出撃じゃ！』

『『おおーっ！！』』

二体は両手を挙げて気合を入れたようだ。この作戦にはクラウン・サンダーも加わるようだ。

『…あ！』

すると、何かを思い出したかのように声を発するキャンサー・バブル。

ソファから立って、テレビの方に近づく。すると、テレビの下に置いてあるDVDレコーダー…によく似た四角い機械が置いてあっ

た。そこから、DVD…のディスクに良く似たディスクを取り出し、専用のケースに入れた。

『大事なミソラっちはここに閉まってと…』

そして、壁際にある隠し扉を開ける。そこには、何本ものDVD…に良く似たもの入っているケースが何段もズラリと並べてあった。一つ空いてる場所があり、その場所に先程のケースを入れた。……並べてあるディスクの中身は全てミソラが出ている番組が記録されている。

例えば、「ミソラ ドラマ ドクターオー」「ミソラは二度死ぬ」「シルバーフィンガー」「ト・キヨ・より愛を込めて」などなど。…何処かで聞いたことある題名だが、あえてスルーしておこう。その後、隠し扉を閉める。

バタン

『これで完了ブック。じゃあ気を取り直していくブック!』

『うむー!』

キャンサー・バブルの言葉の後大きく頷いて返事をするのだった。



次の日スバル宅      リビング

今日は学校が休み。午前中からスバルはリビングのソファアームに座ってテレビを見ていた。

《あなたなんかには負けないわ！ このエベレスト級の怒りのエネルギーでぶっ飛ばしてあげるわ！》

テレビであっていたのは……昨日の昼間にやっていた、ミソラ主演のドロドロした感漂う昼ドラだった。

「へえ、これがミソラちゃんのドラマか……」

「お昼にやってた再放送の続きね」

すると、台所の方からあかねがやってきて、スバルの隣に座った。

「再放送もやってるの！？ 凄いなあ」

「それより、いつからミソラちゃんなんて言うようになったの？」

「えっ？ いや、ま、前からそう言う呼び方だったよ！？」

「何、焦ってるのよ？」

からかっている。文を読む限りそうは見えないが、実際は、あかねはニヤニヤしながら尋ねており、スバルは焦って少し汗をかいている状況だ。

「別に焦ってなんかないよ。それよりドラマ、人気なんだね」

話を逸らそうと試みる。うまくいくのだろうか…

「だっておもしろいのよお。女の戦い。ミソラちゃん可愛いし。スバルもミソラちゃんがタイプなの？」

先程とは話は変わったが、差ほど変わっていなかった。というか、先程より危ない気がする。…ジト目でスバルの方を横目で見ている。

「ッ！？ ち、違うよー！」

「そうなの？ うん…あ！ じゃあ、じゃあもしかして、この前テレビで見ていた亜夢ちゃん？ それとも委員長さん？」

何故か近づいてきている。

「な、何言ってるの、母さん！？ そ、そんな興味ないよ！」

何故か赤くなっているスバル。一度もそんな風に彼女たちの事を考えてかたがなかつたのだろう。

先程の言葉を言うと、スバルはその場を立ち上がり、台所の方に向かって逃げるように歩いていった。

「（うふふ。スバルも何だかんだ言って、まだまだ子供ねえ）」  
どことなく笑顔のあかね。小さく口の中で呟くと、先程のドラマの  
方に目を向ける。

スバルは台所からコーヒーの入った容器を持ってきて、食事をする  
テーブルの上でカップにコーヒーを注いでいる。

『可愛いな、スバル』

勝手にトランサーが開いた。中からウォーロックがからかうと、ス  
バルはコーヒーに注ぐのをやめ、トランサーを閉じて「フンッ！」  
とそっぽを向くのだった。

ここは車がかなりの量が止まっている車道。何故止まっているかといったら渋滞しているからだ。早く進めとクシヨンの音が飛び交っている。何故渋滞しているのかは理由があるらしい。

すると、この車の持ち主であり、ミソラのマネージャーである金田が車から降りて、渋滞の最前列と思われるほうを目を向ける。

「たく、何でこんなに渋滞しているんだあ？ 何かあったのかあ？」

すると、何キロかある場所に建っているビルの上の部分が爆発した。

「うわあ！？」

『ミソラ、FM星人みたいよ』

ハープはミソラに呟いた。爆発して驚いている金田に対して、ミソラとハープはいたって冷静だった。

「うん」

そう頷いた瞬間、ミソラはピンク色の光に包まれ、車の中から姿を消した。

「何かあったみたいだ」

すると、車の中に戻ってきて、運転席に座る金田。ミソラに向かって話しているようだが、周りから見たら独り言の大きい駄目な大人。そんな感じがする。

「たく、今日もも仕事一杯あるんだぞ！ こんな所で…ええ！？」

あれ？ ミソラ？ 何処にいったんだ！？ ミソラー！！」

後方の席を見た時にやっと気づいた。最後に叫んだ一言は周りの車にもしっかりと聞こえるぐらいの大きさだったという。

### 爆発したビル

先程爆発したビルでは、クラウン・サンダー召喚したと思われるトツゲキランス、ハジヨウハンマーの幽霊の姿があった。

複数の幽霊たちはビルを、持っている武器で攻撃している。

『ホッホッホッホ！』

それを高笑いしながら下から眺めているクラウン・サンダー！

「止めなさい！」

すると、後ろのウェーブロードにピンク色の女の子が立っていた。勿論、ハーブ・ノートだ。

『現れおつたな、ハーブ・ノート!』

「シヨックノー」

『バブルポップ!』

不意打ちされた。攻撃しようとした瞬間、後ろからキャンサー・バブルの泡の攻撃で。ハーブ・ノートはいきなりの事に避ける事が出来ず、泡の中に閉じ込められてしまった。

「な、何これ…」

泡の中に声が反射し、綺麗な声が何十にも聞こえてくる。

『ホーツホツホ!』

『ハーツハツハ!』

2人して高笑いしていると

「風の舞 突風!」

「ロックバスター!」

笑っていらなれない状況にガラリと変わった。ジャスミン・ハートの風で2人の動き、及び笑いななどを止め、ロックマンは口

ツクバスターで泡をバチンツと割った。

そのバチンツと音がした時、キャンサー・バブルはビックリしてこけて前に手をついた。

『い、いきなり攻撃するとビックリするだろ、馬鹿ア!』

何やら逆切れしている。

『やはり来たか、ロックマン! お主の相手は余がしてしんぜよう。キャンサー、お主はれいの奴を…』

『分かったブク!』

そう言うと、クラウン・サンダーは上に飛び、キャンサー・バブルは下のウェーブロードへと足場を変えた。

「えーい!」

『ウワア!?!』

すると、ロックバスターを一発、キャンサー・バブルにお見舞いした。あたりはしなかったが、空中でバランスを崩して顔から着地する。

その後、ロックマンは的をクラウン・サンダーへと変え、数発撃つ。クラウン・サンダーは笑いながら簡単に避けていく。

「私達の相手はあなたね?」

ハープ・ノートは、体制を立て直して立とうとしているキャンサー・バブルに言い放った。ジャスミン・ハートはハープ・ノートの横へと移動する。

『お前達には酷い目に遭わされたから、仕返ししてやりたいブックが！…その前に、ジャー！』

「「はあ？」」

2人は声を上げた。理由はキャンサー・バブルが両手で文字が書いてあるページのスケッチブックを持って、見せているからだ。

『あれ？ これってあなたのドラマの台詞じゃない？』

「えっ？ ……そういえば…」

『ついでだから、お前も言うブック！』

「えっ？ あたし？」

少しずつ近づいて、書いてある内容を読むハープ・ノートと急に振られて戸惑っているジャスミン・ハート。

「「あなたなんかには負けないわ…終わるのはあなたの方！ このエベレスト級の怒りのエネルギーでぶっ飛ばしてあげるわ！ おーっほっほっほー！！」」

何だかんだ言って、息を合わせて読んでいる2人。ミソラはドラマと同じポーズまでつけて言っている。ついでを言えば、高笑いも付けている。



「って、あ、つい読んじゃった……」

「恥ずかしい……」

『『女優のさがねえ』』

ハーブとジャスミンは意見が一致している。こんな主人を持って、二体の電波体も大変だ。よく見ると、キャンサー・バブルは右手にウェーブスキャナ-を持っている。

『完璧ブック!』

どうやら先程の台詞を録音していたようだ。すると、スケッチブックを捨てて『さらばブック!』といって、敵に背を向けて逃げた。

「あ、待ちなさい!」

「こら、逃げるな!」

だが、2人の声は届かず、そのまま走り去ってしまった。

「何だったの?」

「さあ?」

2人が呆然としていると、後ろの方から『ア〜レエ〜!』という声と共に星がキラーンと光る音が聞こえた。ハーブ・ノートの隣にロックマンが現れる。クラウン・サンダーが居ないのは触れないで

おじい。

「キャンサー・バブルは？」

「「さあ？」」

2人は首をかしげながらそれしかいえなかった。

第72話 ドラマで修羅場の大作戦ブック！ 前編（後書き）

すみません、これは本当の設定では夜なんですけど、事情により昼に変えさせてもらいました。

最初の「+おまけ」のおまけは、勿論亜夢です（笑）

それにしても……亜夢を入れるが難しいなあ。そのせいか、めっちゃ駄文に（-\_-;） 次は更に難しそうな予感…。

### 第73話 ドラマで修羅場の大作戦ブック！ 後編

#### 委員長宅

委員長も今日は昼間からソファーに寝転がって、雑誌を読んでいる。委員長が読んでいるのはティーン雑誌のようなものだ。

「何々、今週の恋愛運……“恋のライバル登場”、“いよいよ決着の時”……って、何これえ！？」

と読んで直ぐ、上体を起こした。その雑誌を覗き込むように顔を雑誌に近づける。

「決着！？」

委員長にはこの単語が気に掛かっている。好きな人は居ても、ライバルなんて者が思い当たらないからだ。

すると、窓の前を誰かがもの凄く、肉眼でとらえきれるかきれないかの一瞬横切った。

「えっ！？」

委員長は窓の方を見る。だが、そこには誰も居ない。……居るはずが無い。この家はいたるところに監視カメラやら赤外線レーザーが張り巡らされてある。例えば、敷地内に進入できたとしても、敷地内の見回りをしている執事達がいるため、この屋敷近くまでこれるはずがないからだ。

「何！？ 誰！？」

誰か居るのだろうか。委員長は考える前に反射的に言葉が出た。すると

『ハーブ・ノート、ジャスミン・ハート推参！』

……無理して裏声で言っている言葉が返ってくる。

「ハーブ・ノートとジャスミンハート！？ ……まさか……」

委員長はありえないという顔をして呟いた。いくらロックマンの近くに居るあの2人と言えど、この場所にやってくるはずがないと思っただからだ。すると

《《あなたなんかには負けないわ…終わるのはあなたの方！ このエベレスト級の怒りのエネルギーでぶっ飛ばしてあげるわ！ おーっほっほっほー！》》

「何ですってえ！？」

流石にここまで言われちゃ黙っていられない。委員長はソファーから立ち上がって拳を握り締める。

「…怪しい。フン！ どうせまた力二でしょ！」

『ギクッ！』

部屋の中からは見えないが、外から見たほうの窓の影に張り付くようにキャンサー・バブルが立っていた。委員長の予想(?)は当たっ

ていたのだ。先程の声は手元に持っている、録音したウエーブスキヤナーから発せられた声である。

キャンサー・バブルは様子を伺うように覗き込もうとしたとき

「見つけたわよ、キャンサー・バブル！」

「こんな所で何やってんの！」

背後に本物の2人が現れた。

『ツ!? ホ、本物ブク!』

「今度は何企んでるの、キャンサー？」

『ヒュ〜ヒュヒュ〜、な、何の事ブク?』

「(十分怪しいってば……)」

口笛を吹いて誤魔化そうするキャンサー・バブルに2人は心の中で突っ込んだ。どこからどう見たって、怪しいの一言しか出てこない。

「お仕置きよ! ショックノート!」

「風の舞 風月漸!」

と、いきなり攻撃をする2人。する寸前に目がキラーンと光ったところから少し怒っている様子だ。

『ドワアアアアアアアアア!』

キャンサー・バブルは真上の方向に大きく花火のように上がり、近くの茂みに落っこちる。

「騒がしいわね!」

すると、委員長が窓を乗り越上げこちらの方に吼えながら覗き込んだ。

「あ、本当に居たの?」

先程ここへ着たとは知らない委員長は、目を丸くさせて二人に質問した。

「私の家に何か御用?」

少し強めの口調で言うと、委員長を護衛するかのよう二人は背中を向ける。

「危ないから下がって!」

委員長の方を見ずに警戒しながら言うハープ・ノート。

「どっしてここに居るの?」

「他にも敵が居るかも知れない!」

今度は周りを見渡しながらジャスミン・ハートが言う。

「何しに来たの?」

「油断は禁物よ！」

まるで話がかみ合っていない。それどころか、質問を聞いてすらない様子だ。

「ちょっと、私の話を聞いてるの!？」

「もう、うるさいわね!／もう、うるさい! 危ないって言うてるのよ!」「」

2人は同じタイミングで言うと、委員長に一喝入れる。

「分かった! さっき言った事は、私への宣戦布告ね!」

「「はあ?」「」

「いいわ、受けて立つわよ!」

「あゝ、もしもし?」

苦笑いしながらハーブ・ノートは委員長に尋ねるが、それを無視して委員長は窓の淵に片足を置き、その足に腕を乗せて、ヤクザがよくなるような構えになる。

「そのまえに、あなた達はロックマン様の何なの? いつもロックマン様に纏わりついて!」

「纏わりつくって……そう言う貴女こそロックマンの何なのよ?」

ハーブ・ノートはそっぽを向きながら尋ね返す。



「…私からすると、あんたもロックマンの何？」

ジャスミン・ハートから思いもよらぬ言葉が放たれた。

「えっ？ ……ジャスミン・ハートこそ、あなたロックマンにちよつと救われただけじゃなかったかしら？ 何であなたも纏わりついでるのよ？」

「あ、あたしは別にそういうわけじゃ」

「私を無視してるんじゃないわよ！…！」

「ああ、もううっさい！ 少し黙って、クルクル女！」

カチンッ！

ジャスミン・ハートからの爆弾発言で委員長の中の何かが切れた。すると、窓をまたいで外へと出てくる。

「何ですって！？ もう一回言ってみなさい！」

「何度でも言ってるわよ！ このクルクル女！」

「キーーーーー！！！」

「あんたもよ、ハープ・ノート！ ずっと纏わりついて！」

「それはこっちの台詞よ！ ロックマンに纏わりついているのは貴女達じゃなくて？」

「「何ですつてえ!?!」」

「何よお!?!」

三つ巴の言い争い。3人からはただならぬオーラが出ている。委員長は紫、ハーブ・ノートは淡いピンク、ジャスミン・ハートからはまがましい黒のオーラが放たれている。

『くっそー、あの二人目エ……』

すると、茂みから這いつくばって出てきたキャンサー・バブルはこの状況を目の当たりにした。

『…どうなってるブク? 何だか凄い緊張感ブク……委員長だけでなく、あの2人も恐ろしく怒っているようブク…もしかして!』

キャンサー・バブルは首から提げているアンドロメダの鍵に目をやった。アンドロメダの鍵は透明な液体で満たされている。

『満タンブク! 3人の怒りで溜まったブク!』

そう言うと、その場で立ち上がった。そして、ゆっくり歩いて3人の所へと向かっていく。

『ホレ! お前らよくもこのキャンサー・バブル様にひどい事をしたなブク! 仕返しに来てやったぞブク!』

3人のすぐ近くまで来て止まり、そう言った。が、誰からも返事は帰ってこない。

『…おい、こら！ 聞いてるのかア！？』

すると、全員キャンサー・バブルの方へ目をやった。目をやるとうか、睨み付けた。

「くくくうるさいわね！／＼くさいわね！」「くくく」

すると、キャンサー・バブルの顔を、委員長は左の方、ハープ・ノートは右の方、ジャスミン・ハートは真正面から平手打ちをお見舞いした。

悲鳴を上げてキャンサー・バブルの顔はペラペラの紙のように潰される。

『もう怒ったブク！ 許せないブク！ これで世界を滅亡させてやるブク！』

キャンサー・バブルはアンドロメダの鍵を天に掲げた。すると、アンドロメダの鍵からとてつもない紫のエネルギーが発生し始めた。

「な、何！？」

と3人を代表してハープ・ノートが言葉にする。

『いよいよブク！ さあアンドロメダよ！ 世界を滅ぼすブク！』

キャンサー・バブルがそう叫んだ瞬間、この大宇宙から一つの星、地球が電波兵器アンドロメダによって破壊される……はずだった……。

アンドロメダの鍵から放たれていた光は見る見るうちに失っていく。

「3人とも大丈夫？」

すると、3人の間を割ってロックマンが上の方からやって来た。

「『『ロックマン様！/ロックマン！…あ！』『』」

3人は同時にロックマンの下へ近づくと、同時に声を上げた。

「えっ？ 何？」

状況がイマイチ分からない。

その頃、アンドロメダの鍵を天に掲げたキャンサー・バブルはそのままの状態で固まっている。遠くの方から「温泉が出たぞーい！」という声が聞こえたがあえてスルーで。

「そうでしたわ！ まだ決着がついていませんでしたわ！」

「そうよ、ちょうどいいわ！」

「ロックマンにはつきりさせてもらおう！」

3人はロックマンを見ながら、言葉を繋げるように一人ずつ言う。

「えっ、何？ 何かあったの？」

すると、全員顔を近づける。

「『ロックマン／＼ロックマン様、この子達とはどういう関係なの!?』」

見事にハモる3人。お互いが他の2人に向かって指を差している、何とも不思議な光景だ。

「え〜っと、……どうしよう、ウォーロック?」

小声でウォーロックに助けを求める。すると、ウォーロックから

『どうやら修羅場みたいだな』

そんな言葉をよく知ってるなあと突っ込みたくなるような一言。だが、これでは何の解決にもなっていない。

「さあ!」

「答えて!」

「ロックマン!」

「ええ!?!」

3人目ののが怖い。これが一人の男を巡った3人の女の戦いなのかと心で感じるスバル。

「あ、あの〜」

『次回、ロックマン決断!』

ヒュー……

いつの間にかクラウン・サンダーがスケッチブックをこちらに見せるようにして立っていた。スケッチブックには「次回 ロックマンの決断！」大きく記されている。それを言った瞬間、夏だと言うのに寒い風が吹いた。

「次回に回さんでいい！！！！」

すると、3人は少し間を置いて、同時にクラウン。サンダーを殴って遙か彼方まで飛ばしたのだった。

「ロックマンノロックマン様！！！！」

話しは戻る。

『ウエエーン！！ どうしてブク！ 何も起こらないブク！』

そう言って持ったまま泣き出して、暴れているキャンサー・バブル。4人はそちらの方に視線を向ける。

何故、何も起こらないの。それは、中に違う液体が入っているからだ。これは、全てキャンサー・バブルの一滴一滴の涙。だから透明な色をしているのだ。

事はキャンサー・バブルに委員長のカバンが最初に当たったときから始まった。そのときに出た一滴の涙がたまたまアンドロメダの鍵の中に入ったのだ。それから、委員長からの攻撃、ミソラドラマで感動したときに目から出た涙がアンドロメダの鍵の中に入っ

た。なので、キャンサーがただマイナスエネルギーと勘違いしていただけなのだ。考えても見れば、たかが1人2人の負の感情でそう簡単に溜まるはずが無い。

キャンサー・バブルはアンドロメダの鍵を持った腕を上下に振り回しているところ…。中に入ったキャンサー・バブルの涙が全て外に飛び散った。

『又アツ！ せっかく溜めたマイナスエネルギーがあー！』

まだ気づいていないようだ。

『もう、やけくそブック！ タイダルウエー…ドハア！？』

技を出すために一回転している途中、頭に圧力鍋がクリーンヒットしていた。良く見ると、委員長が投げた後の構えをしている。

「まだいたの、しつこいわね！」

「お邪魔虫にはこれよ！ ショックノート！ フォルテツシモ！」

「飛んでけ！ 風の舞 突風！」

ハーブ・ノートはいつもより数段大きい音符を飛ばし、ジャスミン・ハートは突風を発生させる。

『ここ何処ブック？ オイラは何してたブック？ ……デエエエエ！！』

音符が当たった後、空の彼方へと吹き飛ばされる。更に吹き飛んでいくキャンサー・バブルは、ジャスミン・ハートが発生させた突風

にのって通常より高く、勢い良く飛んでいく。

『ブクウウウウウウウウウ！！！』

キラーン！

そして、星となったとき。

「貴女達、なかなかやるわね」

「あなたもね」

「流石ね」

3人は先程の思いもやらなかつた展開でいつの間にか互いを認め合っている。ロックマンはこれをチャンスと思い、

「仲間だよ、皆仲間！ 仲良くね？ ね！」

先程の質問の答えを言った。少々答えになって無い気もするが、これでのだろう。



## 秘密基地

あれから数日後。また作戦会議を開いていた。

『どうすればアンドロメダの鍵にマイナスエネルギーが溜まるんだ？』

『お前等が駄目過ぎなんだよ！』

『お前が言うな、犬ウ！』

オヒュカスの後に再びウルフとオックスの喧嘩が始まった。そんな2体を無視してオヒュカスは腕を組んで悩んでいた。

『どうすれば……』

『あ、そろそろ収録の時間だ』

隣にいたリブラは自分の番組の収録があるスタジオへと向かった。

『ミソラちゃんは可愛いのう……』

クラウンはミソラの写真集を読んで一人呟いている。会議中に何やっているのだと突っ込みたくなる。

『（ここは何処ブク？ オイラは誰ブク？）』

そして、頭に大きなばんそうこうをしているキャンサー・バブルは記憶を意失っているようである。あの中で真剣に考えているのはオヒュカスだけだと言う事が改めて分かる光景であった。

第73話 ドラマで修羅場の大作戦ブック！ 後編（後書き）

はあ、頭が痛いせいか、かなり駄文な気が……。

意味がわからない単語とかありましたらすみませんm（――）m

亜夢を混ぜるのが難しいとか言ってみましたけど、案外スナリいけました（笑）

今回はジャンゴ編以来の+ + シナリオを書こうと思います。内容はゲームであった話のリメイク（？）です。ゲームやってる人なら分かると思います。

それでは感想待ってまゝす

## 第74話 電磁波ボール

ある日の夜 展望台

漆黒に被われている、暗い夜。既に今日という日付がかわろうとする時間の5分前をまわっている。この展望台は普段からあまり人が来ないため、殆んど無人の状態、ましてやこんな遅くにこんな事に來る人もいないはずなのだが、今日は違った。赤髪の青目の少年が一人空を見上げていた。

「……こうやって地球から星を見るのは何日ぶりだろうか……」

『おいおい、何年ぶりに帰ってきたわけじゃないんだから、そんなに暗い顔して言うなよ。それに、まだ行ってから一ヶ月くらいしか経ってないぜ、涼介？』

「十分立つてんじゃないかねえか、フェニックス！」

先程の少年は、以前スバル、亜夢と戦った事がある不死宮涼介。そして、不死宮のトランサーの中に居るオレンジ色の鳥のような電波体は、現・FM王の左腕、音速のフェニックスである。この2人は、スバル達と戦っている途中にFM王の帰還命令により、今の今で地球を離れた宇宙空間に居たのだ。

「大体、こんなに遅くなったのもお前のせいじゃねえか！ 地球に戻る途中にいろんな星に寄り道しやがって！」

『いいじゃないか。綺麗な星とか見て周りたかったんだから』

「……寄り道しなければ半月も早く戻れたものを……」

今は7月の中旬。不死宮達がFM星に向かったのは、6月の上旬。つまり、一ヶ月以上も地球を離れていたのだ。

「……お前、FM王に言われた事、忘れてねエだろうな？」

『Yes……勿論覚えてるぜ』

フェニックスは先程までとは打って変わって、真剣な顔になる。

時は一ヶ月以上程前に遡る

『着いたぜ……』

「……ここがFM星か？ 何にもねえところだな」

『……No……違うぜ、涼介』

不死宮とフェニックスの電波変換した姿、フェニックス・プロミネンスはFM星へとやってきている。何故、人間である不死宮まで来ているのかは、本人が「地球は暇だから俺も連れてけ！」とフェニックスに頼んだからである。フェニックスはそれを軽く承諾してこ

ここまで連れてきたのだ。

「どづいう事だ。フェニックス？　ここはFM星じゃないのか？」

『ここはFM星の近くにある、とある惑星だ。何も無いのはここに誰も住んでいないからだ』

つまり、ここはFM星ではないという事だ。しかも、誰も居なく暗い空間のような惑星だ。

「FM星には行かないのか？」

『俺一人なら行けるんだが、お前が居るから行けないんだ。理由はお前が地球人だから』

「……地球人じゃだめなのかよ？」

『お前等地球人が耐えられる電波の量は決まっている。電波変換してても、その量は変わらない。電波だらけのFM星なんかに行ったら、瞬間的に電波に押し潰されて……』

「……どうなるんだよ……？」

『電波化したまま元に戻れなくなる』

「ッ！？」

フェニックスがFM星まで行かない理由。それは、不死宮の事を思つての事だった。FM星人の殆んどは、地球人の体なんて道具に過ぎないという考えがある。しかし、フェニックスは違った。いくら任

務とはいえ、協力してくれた者に危害は加えないと言うのがフェニックスのポリシーらしい。

『さて、ここからならFM王の通信も届くだろう』

そう言うと、フェニックスは電波変換したまま、不死宮の腕についているトランスアーを操り始める。

『え〜ツと、ここをこうして、ここがああで…』

いろんな数値を入力して行く。不死宮はそれを呆然と見ている。

『よし、これで通じるはずだ…』

すると、トランスアーは通話モードに入った。プツ、という音がすると誰かの声が聞こえてくる。画面には絡まったビデオテープのように何を映っていない。

《…フェニックスか？ 早く戻って来ぬか》

子供っぽい声だった。何処かの王様みたいな喋り方をしている。

『ああ、済まないFM王。ちょっととした理由で近くまでしか行けないんだ。今、座標、F・52、M・1地点にいるんだが……』

《む？ 直ぐ近くではないか。どういう事だ？》

「俺がいるからさー！」

すると、不死宮がFM王の質問に不死宮が答える。フェニックスは

呆然とした。すると、トランサーの向こうから『貴様は誰だ!?!』と帰ってくる。

「俺は不死宮涼介! 地球人だ!」

不死宮は……火に油を注ぐような行為をする。

《どういうことだ、フェニックス!? 何故地球人が》

『FM王、その話はまた今度だ。俺を呼び出した用件はなんだ?』

《……まあ、よい。こちらも時間がないのでな》

一応、話しは逸れたようだ。時間が無いという単語に少し気にかかったが、気にしない事にする。

《お前に少し伝えておかなければいけない事がある。太陽系内で消息を絶つたと思われていたジャスミンが》

『それならこの前、地球で戦ったぜ。どうやら地球人にねがえつたらしいがな』

《そうか。ならば、奴も始末しろ。奴が敵に回ると、少しばかり厄介なのでな》

『ああ、分かっている(始末するのを邪魔したのはあんなだけだな……)』

FM王の言葉に反論のようなものを心で思ったフェニックス。その後、また喋り始める。



『で、他に用件はないのか？ まさか、それだけで俺を呼び出したんじゃないんだよな？』

《ああ、……実はお主に電磁波ボールを地球に設置して欲しいのだ》  
電磁波ボール…電波の世界にある肉眼では見る事が出来ないものを  
現実世界に出現させる事が出来る、電磁波の塊の事だ。主にウエー  
ブロードなどがその一つである。

『電磁波ボールを？ でもあれはまだ試作段階だったんじゃない？』

《つい先日、改良を加え、完成する事に成功した。そのデータを後  
でお主に送る。どう使うかはお主に任せる》

『OK、任せろ！』

《アンドロメダの鍵を取り返せば、地球など簡単に破壊できるであ  
ろう。取り返すまで、これを役立てるといい》

プツンッ！

F M王は通信を切った。すると、数秒後、不死宮のトランサーに一  
通のメールが受信された。先程の電磁波ボールのデータのようなだ。

「で、どうするんだ、フェニックス？」

『どうするもこうするも、さっきのあれを実行させるまでだぜ！』

「じゃあ、地球へ戻るぞ？」

『Ok！ 音速で帰るぜエ！』

フェニックス・プロミネンスは地球の方向へ向かって、もの凄いスピードで進んで行った。

そして今に至る

「…明日にでも実行させるか」

『Ok！』

深夜0時を回る。今日と言つ日が終わりを告げた。

『明日というか今日だよな？』

「まあ、そうだな……」

細かい気がするぞ、フェニックス。そんな事を思いながら不死宮は歩いてこの展望台を後にした。

朝　　スバル宅

「行つてきまーす！」

「行つてらっしやーい」

玄関でスバルとあかねの音が響く。時計は午前7時30分を回っている。

「昨日は大変だったね」

『ああ、キャンサーのバカがわけ分からん事やってたしな』

昨日の昼間、スバル達は委員長の家で修羅場に遭遇したのだ。スバルは苦笑いを浮かべている。

「あはは…まあ仲直りできたみたいで良かったよ」

喧嘩した理由がスバルであることに気づいていない本人。よくそん

な子と言えるなとウォーロックがしかめっ面でスバルを見ている。

『で、こんな朝早くから何処に行くんだ？』

7時30分。そこまで早くはないと思うが、こんな早くに子供が歩くのは流石に早すぎる。スバルは白いスクールカバンを持っていないことから、学校に行っている訳ではないのだろう。まず、この日は日曜日なので学校は休みだ。

ならば、何処に向かっているのだろう。

「ん？ 展望台だよ」

……何だか地獄のような言葉が返ってくる。

『……すまん。良く聞こえなかった。何処に行くって？』

「だから、展望台」

何度聞いても同じ名詞。

『……………』

予想外の言葉に何も言葉が出てこない。

「今日は星を見るんだあ」

瞳をキラキラさせて言うスバル。ウォーロックはワナワナと震え始める。

『ダアアア！ 何でこんな朝っぱらから空なんて見るんだよオ！？  
こんな時間に星なんて見えるはずねエだろ！？』

「そうでもないよ。空を見てるだけでも十分だよ」

『俺は十分じゃねエ！ むしろたまの休みをこんな事に使うなんて、  
お前は生き物として不十分だあ！！』

「なっ！ ウォーロックだって、休みの日になるとどっか連れてけ  
つてうるさ過ぎだよ！ 君こそ生き物として不十分だよ！！」

『何だとオ？ テメエ言わせておけば…！』

そんなこんなで喧嘩しているうちに展望台へと到着した。

『ああ、暇だ暇だ暇だ！！』

「まだ見て無いのにうるさいよ！……ッ！？ ウォーロック、静か  
に！」

『嫌だね！ 俺を展望台以外に連れてくつてならいいけどな！？』

「お願いだから……あそこに誰がいるんだ……」

スバルが展望台へと着いた頃、少し背が高めの少年の後ろ姿が見え  
た。

それが見えた瞬間、スバルは物陰に隠れた。こんな朝から展望台に  
いるなんて自分以外有り得ないと思ったから。それにその少年いは  
スバルも見覚えがあった。

「あれは……不死宮だよ」

『何！？　って事はフェニックスも一緒か！？』

「ここからじゃ良く見えないけど……トランサーに向かって誰かと話してる……」

「やるぞ、フェニックス」

『ああ。だが、これを使うには一度電波変換しておいた方がいいぜ。これは大量の電磁波を発生させるから、間近にいるとお前の体に影響がでるからな』

「……そうか、わかった。電波変換！　不死宮涼介　オン・エア！」

不死宮はトランサーを天へと掲げる。体がオレンジ色の光に包まれ、フェニックス・プロミネンスへと姿を変えた。

「よし……電磁波ボール、セット！」

ゴ…ゴゴゴゴゴゴ…ゴゴゴゴゴゴゴゴゴオ！！

フェニックス・プロミネンスは両手を前に出し、黒くて丸い物を出現させた。それは形がないのか、所々ゆがんでいる。真ん中には紫色の点がある。

「ッ！？ 何だ、あれ！？」

『…ッ！？ 電波が乱れてやがる…なんだこりゃ！？』

電波、というか現実世界に影響が出始めている。スバルの肉眼で見えないはずのウェーブロードが徐々に姿を現し始めているのだ。

「ウェーブロードが…！」

『こりゃあ、あいつ等に聞いたほうがいいかもしれねえな！ スバル、電波変換だ！』

「うん。電波変換！ 星河スバル オン・エア！！」

ロックマンの姿へと電波変換するスバル。

「やっと電波変換したか、ロックマン」

フェニックス・プロミネンスはこちらを向いた。どうやら隠れたのが気づかれていたようだ。

「何をしている!？」

物陰から飛び出し、フェニックス・プロミネンスに問う。

「何って、電波空間と現実世界の融合だ！」

不適な笑みを浮かべている。それが不気味でしようがない。

「融合!?! どういうことだ!?!」

「言った通りの意味さ。ウォーロック、お前ならこの後どうなるか分かるはずだぜ？」

急にウォーロックに話を振られた。ウォーロックは暫く沈黙した後、そつと口を開きはじめる。

『…普通、電波空間と現実世界には別々の空間として考えられている。それは合わさる事の無い物質同士が互いの空間に行く事ができない世界だからだ。しかし、電波変換は、電波の者と現実の者が融合する事によって、両方の空間の行き来が可能になる。だが、それが物質同士の融合ではなく空間同士が融合された場合、合わさる事がなかった世界が合わさったとき……どちらかの空間が消滅する』

『大正解だぜ、ウォーロック』

フェニックスが笑いながら言っている。



「そ、そんな……」

「だが、安心しな。今ここにある電磁波ボールはテストしているだけで、実際この現実世界全てに電波空間を出現させている訳じゃない。この小ささならせいぜいこの展望台の周り程度までが限界だ」

今ここにある電磁波ボールはまだ完全じゃない。つまり、完全に現実世界に電波空間を出現させているわけではないからどちらかの空間が減るわけではないと言う事だ。

「でも、これをする俺等に少しデメリットが発生する。勿論お前たちにもだ」

「…デメリット？ 何だ、それは？」

「それは…戦ってみりゃ分かるさ！ プロミネンスブレス！」

いきなり目の前に炎が発せられた。これは完全に不意打ちというものだ。

「ッ？！ くっ！」

ロックマンは当たるギリギリの瞬間でジャンプをして避ける。

「（ニヤリ…） まだまだ、ファイアーカッター！」

「くっ！ ……ッ！？」

空中にいる状態の時に小さい炎のカッターが放たれた。あの攻撃はよく覚えている。ビルを一瞬で真っ二つにする程の威力があるのだ。

それを避けるために周波数を変えようとしたのだが……周波数は変わらなかった…。

「そんな…周波数が変わらない!？」

「電波空間と現実空間が一つになってるんだ。周波数を変えられるわけねえだろ！」

その通りである。周波数を変えると言う事は、電波空間と現実空間との波長を合わせる、又はその境目の波長に合わせる事でその空間に行き来したりできるのだ。だが、ここには電波と空間が一緒、つまり同じ空間なのだ。なので変えようとしても変わる事ができない。勿論、一緒の空間なので、境目もあるけがない。

凶器カッターはもう目の前にまで来ていた。もう避けようとしてもカードをブレーションしても避ける事ができない距離まで。ロッキマンは瞬間的に目を閉じた。

「(だめだ、当たる……)」

……

「(あれ?)」

もう既にカッターが当たってもおかしくないのだが……ロッキマンは無傷である。方向的に間違いなく当たるはずである。なのに傷がない、当たった音を聞こえない。

「……なぜ?」

ロックマンの目の前では風が竜巻のように渦巻いている……これは見覚えがある技だった。

「はあ………またお前か」

ロックマンの方を向いて溜息をついているフェニックス・プロミネンスの姿がある。いや、微妙にロックマンではなく、ロックマンの後ろの方を向いている。

「そこ、大きな溜息つかない！ それに勘違いしないで！ 私はスバル君に用があつて来たんだから！」

聞き覚えのある言葉が聞こえてくる。……ツンデレで風を使う……あの人物がロックマンの頭に浮んだ。

「……ジャスミン・ハート？」

後ろを向くと、やはりそうだった。頭の簪と白と赤と水色に綺麗に彩っている着物を着こなしている女の子の姿があった。

「おはよう、スバル君！」

そう言えばまだそんな時間だったな、とロックマンは心で思っている。

## 第74話 電磁波ボール（後書き）

ふう、シナリオ考えていたら二日も経ってしまった。

まあゲームでしか出なかつた電磁波ボールを出しちゃいましたし、もう何でも有りになしようかな（おい！）

あ、ウォーロックが説明している事は、私が考えた勝手な設定です。こんななんだったらおもしろいだろうなあと思ひまして（笑）

それにしても……まだこの話しに重要な人が出せてない……次話ぐら  
いだす予定ではあるんですけど、出せるか分かりませんね（――；；  
）

それにしてもこの小説、誤り字やら、矛盾してる事だらけですね。  
もしかしたら伏線をする事になるかもしれませぬ。その時は直ぐお  
知らせします。

第75話 異常発生(前書き)

どうも、遅れてすみませんm(――)m

少し書いてる途中に詰んでしまったもので……兎に角急いで書いた  
んで、脱字、意味のわからない文があるかもしれない。

そのときは教えてくださると幸いです(<―>)

では、どござー！

## 第75話 異常発生

「おはよう……ねえ……」

頭を掻きながら呆れた顔でジャスミン・ハートを見ている。

「で、また負けに来たわけ？」

『何度負けりや気が済むんだ？』

フェニックス・プロミネンスの後にフェニックスが続ける。少々呆れ口調だ。

「負けてない！ あれは引・き・分・け！」

引き分けを強調して言うジャスミン・ハート。よっぽどこの前の戦いを根に持っているようだ。確かに勝負すらついていたいなかったものの、あのままだと誰がどう見ても負ける戦いであった。だが、戦って負けそうだった本人は認めていない。……負けず嫌いなのだろうか。

「亜夢ちゃん…助けてくれてありがとう」

「えっ？ あ、うん…別にこれくらい良いつて。それより……」

問題は目の前の敵だ、と言いたいのだろう。言葉は続けなかったが、目は敵の方に向いている。

「……行くよ、ウォーロック！」

『ああ!』

ロックマンは一枚のカードを取り出し、ウォーロックへプレデーションさせた。いや、このカードの場合、“プレデーション”ではなく、“スターブレイク”だ。

「スターブレイク! ロックマン! アイスペガサス!」

水色の光に包まれ、アイスペガサスの姿へスターブレイクするロックマン。

「何だ、その姿? まさか、俺を倒そうって気じゃねえだろうな?」

フェニックス・プロミネンスの先程までの目が変わった。敵に向けた殺意を目で表しているように。

「そのまさかだと言ったら?」

『Wow! 精々、楽しませてくれよ!』

フェニックスがフェニックス・プロミネンスの代わりに言葉を発する。

「スバル君! 私も」

「亜夢ちゃん、君は隙があったらあの電磁波ボールを!」

「一緒に戦う」と言おうとしたが、ロックマンの言葉に打ち消されてしまう。

「……分かった」

少し考えたが、ロックマンの言葉を承諾した。今はあいつを倒すより、このおかしい現象をどうするかが先決だからと思ったからである。そして、あの現象を引き起こしているのは何でもない、あれである。

だが、あれを破壊するのを、フェニックス・プロミネンスがみすみす許すわけが無い。ならば、「一人が破壊するための隙を作り、もう一人が破壊する」という作戦が自然と決まってくる。つまり、「隙を作る」がロックマンで、「破壊する」がジャスミン・ハートとに課せられる。

「そういうわけで破壊させてもらうよ！　アイススラッシュ！」

「破壊？　んな事させるかよ！　ファイアーカッター！」

ロックマンが放った氷の塊は、難なくフェニックス・プロミネンスの攻撃に粉碎されてしまう。威力はほぼ互角のようだ。

「バトルカード！　プレデーション！　スイゲツザン！」

左手をスイゲツザンへと変形させ、フェニックス・プロミネンスへと突っ込んでいく。

「わざわざ突っ込んでくるとは……動く手間が省けたぜ！　プロミネンスプレス！」

広範囲に広がる炎を、突っ込んでくるロックマンに向けて吹き放つ。



だが、当たる寸前にロックマンの姿が視界から消えた。

『何、消えた!?!』

「何処へ行った!?!」

辺りを見回すが何処にも居ない。

今のこの空間では周波数を変える事はできない。つまり、姿が消えるのではなく見えなくなっただのだ。しかし、周波数を変えることが出来ないのだから、この空間の中に居るのは確実。では、何処に居るのだろうか。

「(………そういえば先程の姿は羽がついていたような……っ!!)…  
上か!」

上を見えあげる。だが、そこには出現したウェーブロードと眩しい太陽しかなかった。

「っ!?! くそっ! 何処に」

「でやっ!」

視界を目の前に戻した瞬間、フェニックス・プロミネンスは斜めに切られた。先程まで姿が見えなかったロックマンは目の前に居て、フェニックス・プロミネンスを切っている。

「な……に……くっ!」

切られた反動で倒れそうになったが、何とか持ち堪える。そして、

徐々に傷口が塞がっていく。フェニックスの不死鳥としての能力だ。

「…効いたぜえ……どうゆうカラクリだ？」

あつたものが急に消え、なかったもの急に現れる。頭で理解できない事が目の前で起きてフェニックス・プロミネンスは、言葉自体は冷静だが内心焦っている。

「僕の今の姿に君が惑わされた。これがヒントかな……」

フェニックス・プロミネンスは先程、自分が炎を放った場に視線を向ける。何故かその地面だけ水で湿ったような感じになっていた。

「っ！！ そついうことが……！」

『何か分かったのか？』

「ああ！」

すると、フェニックス・プロミネンスは空高くに上昇していく。

「行くぜ！ ゴッドバード……！」

今度は空中からフェニックス・プロミネンスがロックマンに向かって突っ込んできた。

「アイススラッシュ！」

「そんなんじゃ俺には当たらないぜえ？」

連続で氷の塊を放つ。だが、全ての氷を避けながら更に加速しながら突っ込んでくる。

「くっ！  
スターフォースピックバン SFB！ マジシャンズフリーズ！」

目の前に魔方阵を出現させ、氷の氷柱を出現させる。それにフェニックス・プロミネンスはぶつかった。

バキッ、という音共に、氷柱は半分割れ、音を立てて崩れ始める。

「……やはりな。この氷を俺に気づかれないように出現させ、炎を防ぐと共に、氷による鏡の反射でお前の姿が消えたかのように見せた…だろ？ その証拠にあそこに水が地面に染み込んだ後がある。俺の炎で氷が溶け染み込んだ後がな」

「なるほど……氷の反射か。なかなかやるじゃないか！」

「チッ、余裕な顔しやがって！ スバル、こつからは小細工なしだ！」

「うん！ バトルカード！ プレデーション！ ガトリング！」

ダダダダダダダダッ！！

スイゲツザンからウォーロックに戻し、それからガトリングへ変える。それをフェニックス・プロミネンスに放つ。

「そんなの当たらねえぜ！」

フェニックス・プロミネンスはもの凄い速さで一発一発を避けてい

く。まるで弾が見えているかのようである。

「ファイアーブーメラン！」

「バトルカード！ プレデーション！ アイスメテオ、ヘビーキャノン！」

フェニックス・プロミネンスが羽ばたき、二本の火のブーメランを繰り出す。ロックマンは、上空から氷の塊を降らせてブーメランを打ち落とす。その後、ヘビーキャノンのエネルギー弾を敵に向かって放つ。

「ちっ！」

舌打ちをしながらエネルギー弾を避ける。だが、この時フェニックス・プロミネンスに隙が出来た。エネルギー弾を避ける時に当たらないか軌跡を見ていたからだ。

「今だ！ SFB！マジシャンズフリーズ！！」

ロックマンは、その隙を理容して上空に魔方陣を発生させ、フェニックス・プロミネンスを氷柱で氷付けにしようとする。

「なっ！？……」

いきなりの事に体が反応せず、そのまま氷付けにされてしまう。フェニックス・プロミネンスは驚いた顔のまま、体が動かなくなってしまう。

「亜夢ちゃん、今のうちに電磁はポールを！」

「うん！ 風の舞 風月ざ」

「……舐める……な……！ 雑魚ど……も……お！ ワールド…… オブ……  
ザ……ヘル……！！」

すると、電磁波ボールのもと走り、そして扇子は風を纏った剣に換えようとしたとき、氷付けのフェニックス・プロミネンスから声が発せられ、氷柱がゆっくりと溶け、水に始める。

フェニックス・プロミネンスが内側から地獄の暑さを発生させたのである。その暑さのせいで氷柱は溶け始めたのだ。

「くっ！」

2人はこの暑さに耐える事が出来ず、その場に膝を着く。今、この地域一帯に、フェニックス・プロミネンスが電波体でも耐え切れなほどの熱量を発生させている。これをモロに喰らうと一瞬でバタンツと倒れてしまうだろう。

「はぁ……はぁ……はぁ……」

あまりの暑さに息を切らす。今の2人はありえないくらいの熱量のせいで頭がボーッと始めて、脱水症状になりかけている。

「はぁ……はぁ……早く、あれを破壊しないと……っ！？」

ジャスミン・ハートが膝を着いているのは、電磁波ボールの直ぐ傍手を伸ばせば届く場所。なのに、破壊できない。しようとはしているのだが、この熱気のせいで体が言う事を利かなくなっているのだ。

氷を溶かして出てきたフェニックス・プロミネンスの熱気はそれほどまでに強大な力のである。だが、その力を発生させて数秒後、電磁波ボールには異変が起きていた。

ジジジ……ジジジジ……

電磁波ボールを回るかのように電撃が走っていたのだ。この世界でよくある、機械等にウィルスが進入し、機械自体をおかしくした時に走る電撃のようである。

「……っ！？ ウェーブロード……が……！」

『……電波が乱れて、現実空間に維持できなくなってやがるぜ！』  
つまり、今、この電磁はボールは正常ではない。何かの拍子に正常ではなくなったのだ。

「……おい、これってまさか」

『……どうやら俺たちの暑さが問題らしいな』

正常でなくなったのは、発生させた当の本人の技によるものだ。だが、それ程異常ではなく、まだウェーブロードが現実空間にきちんと維持している。

『亜夢ちゃん！ 今のうちに破壊しましょ！』

「はぁ……うん……くっ……！」

ジャスミン・ハートは立ち上がるが、直ぐに膝を着いてしまう。まだ、フェニックス・プロミネンスの技は続いている。まるで死ぬか死なないかの境目の世界をさまよっているようである。

「さて、ついでだから倒すか！」  
デリートする

フェニックス・プロミネンスが電磁波ボールの傍にいるジャスミン・ハートに狙いを定め、炎の刃を飛ばす。  
ファイアカッター

「っ！？ くっ！」

もう避けるだけの力はない。フェニックス・プロミネンスが発生させた熱気に殆どの体力を持っていかれたからである。この攻撃に当たれば間違いなく無傷では済まない。むしろ、死に勅命するかの大怪我を負ってしまうだろう。ほんの少し動けばそれでいい。だが、体は言うことをきかない。

……ジャスミン・ハートは死を覚悟し目を瞑った。

「亜……夢ちゃん……！！！」

声は届かない。今からどれだけ急いでも、100%間に合わない。奇跡が起きない限り、絶対に。

ジジジジ……ヒュイイイイン！！！！

「えっ……っ！？」

ジャスミン・ハートは変な音が聞こえたため、後を向く。すると、電磁はボールが音を立て……ジャスミン・ハートを吸い込んだ

「『っ！？ 消えた！？』」

もう一度言う。消えたのではなく吸い込んだのだ。テレビをブツツと一瞬で消えるように一瞬で。

勿論、的が消えたと同時にファイアーカッターは外れ、地面を切り裂く。

「……………えっ？」

ロックマンは今の状況が良く理解できない。簡単に理解できるのも異常だと思いが。

「……………なんだよ…今の…？」

フェニックス・プロミネンスも理解不能の状態である。

『…完成とは言っていたが、まだ未知の部分があるらしいな……………試しに使ってみてよかったぜ』

未知の部分……………例えるなら、あるところにAの液体とBの液体があったとしよう。その液体を誤って混てしまい、思いもよらない化学反応が起こってしまった。今の現状はそれと同じ事が言える。まだ、成分がよくわかっていない電磁波ボールは先程の熱気により、吸い込みという化学反応を起こしてしまったのだ。未知の部分とはこの化学反応の事である。

しかし、吸い込んだと言う事は、電磁波ボールのあちら側は何処かに続いているのだろうか。電磁波ボールはただ吸い込んだだけであ



り、吸い込んだ先には何かしら世界に繋がっていてもおかしくない。

その頃 吸い込まれたジャスミン・ハート達は

『亜夢ちゃん、大丈夫？』

「あいたた…うん、なんとか。……ここは…」

『わからないわ。電波空間と現実空間ではないようだけど……』

そこは知らない場所であった。何処かわからない、見た事がない世界。見渡す限り現実世界ではない事は分かる。ジャスミン・ハートの後ろには先程吸い込んだ電磁波ボールが宙に浮んでいる。

「早く戻らないと……」

電磁波ボールに手で触れようとする。だが、何も起きない。それど

ころか、触れる事すら出来ない。

「っ!?!? ……まさか、このまま戻れないとか…」

ジャスミン・ハートの頭に絶対にあってはならない事が浮ぶ。それを直ぐに打ち消し、電磁波ボールに向かってこう叫ぶ。

「ちょっと、ありえない!! 早く戻せえー!!…!!」

その声はこの空間中に響いた。

## その頃      ロックマン達

2人と2体はその場に立ち竦んでいた。視線は電磁波ボールに向いている。

「どうすればいいんだろう……」

『俺にはわからん』

「……よし、帰るか」

フェニックス・プロミネンスは羽を広げて飛び始める。周波数が変えられないため、このまま飛んで帰る気だ。

「ちょっと待ってよ！ 君のせいでこうなったんでしょ！！」

飛んで帰ろうとしている敵に突っ込むように言葉を発する。

「だからどうした。俺は関係ない。お前が何とかするんだな。んじや！」

『Adios』

羽ばたきこの場を逃げるように立ち去るフェニックス・プロミネンス。

『……完全に逃げたな』

「それはともかく、何とかしなきゃ！」

主犯者に放置された電磁波ボール。まだ、ジジジと電撃がボールの周りを駆け巡っている。ロックマンはその電磁波ボールに近づいた。すると、中から聞き覚えがある声が聞こえてくる。

《早く戻せえー！！！！》

「うわぁ!？」

急に大声が聞こえたため驚き、尻餅をつく。

「この声は亜夢ちゃん!？」

《っ!？ スバル君？ 大変なの、そっちに戻れないみたいなんだ  
けど……》

「何だつて!？」

電磁波ボールからは先程とは違い、少し弱気の声が聞こえてくる。

「あたし……どうすればいいの……わからない……よ……グスッ」

電磁波ボールに向かって喋っている。少し、目に涙を浮かべている。

《お、落ち着いて。とりあえず、何処にいるか分かる?》

「そんなの…ヒクツ…わかんないよ…!」

涙がツウーと頬を伝って流れていく。それ程、今の状況は彼女にとつて恐いのだ。居場所がわからないところに一人孤独にこの場所にいる。今までの楽しかった世界に戻れないと思ったとき、自然と涙も出てくる。

『亜夢ちゃん……しっかりしなさい。泣いてる場合じゃないわよ!』

「でも…どうすれば…」

『あ〜』

誰かに後から声を掛けられた。誰も居ないと思っていたのだが、いつの間にか一人の人が声を掛けてきた。まあ得体の知れない物に向かって泣いているジャスミン・ハートを見て、気になったのだろう。

ジャスミン・ハートは涙を拭って、後を見る。すると

「えっ……スバル…君……?」

スバル…いや、ロックマンの姿に似ている青い少年が立っている。だが、似てはいるが、所々パーツが違っている。頭にあるツインツンの髪がなくヘルメットで覆い被っている事、胸に赤と黒のマークがある事、このように自分が知っているロックマンと所々違っている。

『君、大丈夫?』

「……あ、うん。……」

あまりにも自分の友達の姿に似ていたので、呆然としている。

『僕はロツクマン。君は？』

「ロツク……クマン……」

その少年は姿だけではなく名前までも一緒の少年である。

## 第75話 異常発生（後書き）

てなわけで、登場させました。なかば強引ではありますが……。

それにしても、何でこんなに時間を掛けてしまったのだろうか…60  
00文字越えだし…掛けたわりには出来が酷い。本当にすみません。  
m ( ) m

次話をもっと速く更新できるように頑張ります！（ - ）ゞ

あ、twitter始めました。まあたいそうな事は書きませんが  
…。  
暇なとき書いていくんで宜しくです。

それでは、感想待ってまーす

第76話 過去から未来へ（前書き）

題名良いのに本文が……



## 第76話 過去から未来へ

『僕はロックマン。君は？』

「ロック……ク……マン……」

啞然として青色の少年を見る。名を聞かれたが、答えられない。自分の知っている人に姿が似ていて名前が同じ、このいきなりの状況にジャスミン・ハートの頭は混乱しているからだ。

「（はあ？ ロックマン！？ ……姿似てるけどスバル君………じゃないよね。…じゃあ一体誰なんだあ！ いきなり知らない人に話し掛けられてるんですけどお！！）」

『君、大丈夫？』

「えっ、あ……うん……」

再度、その青い少年に声を掛けられる。いきなりの事に少し驚くが、小さく頷いた。

『君、名前なんていうの？ ……民間のナビじゃないみたいだけど』

「（へえ？ ナビ？）」

『あ、ちょっと待って。僕のオペレーターから通信みただから』

「（はあ？ オペレーター？ ……何、暗号？）」

聞きなれない言葉を先程から使ってくる少年。何も知らないジャスミン・ハートからしたら意味が分からないのは当然である。…そもそも、そのおかしな格好は何なのだろうと突っ込みたい。

『どうしたの、熱斗君？』

「ロックマン、そいつ名前なんていうんだ？」

何処からか少年の声が聞こえてくる。先程のロックマンと話しをしているようだが、近くには誰も居ない。それどころか、この空間に人っ子一人居ない。そんな中あの少年は誰と話をしているかの分からないが、独り言を呟いている。

『さあ？ さつき聞いたんだけど…もう一度聞いてみるね。君、名前はなんていうの？』

「えっ？ あ、…私はジャスミン・ハート。こっちはジャスミンっていうの」

そう言って手に持っている扇子をロックマンに見せる。

『よろしくお願ひします』

「はあ、こっち？ ……うわあ、扇子が喋ったあ！！？」

熱斗と呼ばれた少年の声はかなり驚いていた。その点こっちのロックマンは至って冷静である。

『ははは…熱斗君驚きすぎだよ。宜しく、ジャスミン・ハート。所で、この辺で電磁波の乱れをキャッチしたんだけど、何か知らない

かな？』

「えっ？ …… ああ、そうだった！ 口、… スバル君！」

完全に自分が知っているロックマンの事を忘れていた。後の振り向き、電磁波ボールに向かって彼の名前を呼んだ。ロックマンと云いそうになったが、それを言つとややこしい事になりそうなので、本人の名前を呼んだ。

### その頃

「……何だか、向こう側から話声が聞こえるけど誰か居るのかな？  
……何て言っているのか聞こえないけど」

『てか、完全に忘れられてねエか？』

「………確かに」

展望台に一人電磁波ボールと面と向かって眩いている。あっちでジャスミン・ハートが話し始めてそろそろ5分が経過する。

《スバル君！》

やっと、聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「亜夢ちゃん！ そっちは大丈夫！？」

《うん……ロックマンって名前の子が……》

「…ふえ？ 僕？」

気の抜けるように声を発し、はてなを浮かべるロックマン。

《しかも、“ナビ”とか“オペレーター”とか意味の分からないこと言ってるんですけどお……》

何故か小声で聞こえてくる。

「ん？ それ何処かで…… “ナビ” …… “オペレーター” ……」

『何だそれ、暗号か？』

ジャスミン・ハートと同じ事を言っている。もしかしたら、2人は気があつのではなからうか。

話を戻そう。何処かで聞き覚えがあるような単語。ロックマンは記憶を探って思い出そうとしている。日常生活、テレビ、本、学校

…あらゆる情報を収集する場所で聞いたことはないか目を瞑り思い出す。

「（何だろう…最近学校で…っ！…）…そうか！」

目を見開きにして顔を上げる。そして、電磁波ボールに食いつく様に顔を近づける。

「亜夢ちゃん！もしかしてそのロックマンって、名前の語尾にエグゼって付いてなかった!？」

「エグゼ？ いや、別にそんな」

『付いてるよ』

後ろから声でジャスミン・ハートの言葉は遮られた。先ほどの青い少年、ロックマンの言葉だ。

「えっ？」

『僕の正式名称はロックマンエグゼ』

《っ！？ …… やっぱり…… 事はそこは西暦20XX年。電波よりコンピュータネットワークが発達していた時代……》

ロックマン（スバル）の声はエグゼ（ロックマンエグゼ）に聞こえていたようだ。それより、あつちの世界から思いもよらない言葉が返ってきた。

「20XX年……っ！ まさか……！」

その言葉の意味は、ジャスミン・ハートが今いる場所は過去……という事を意味している。しかも、2000年程前の。

《そして、さっきのロックマンって言ってた子は、世界を幾度も救ったロックマンエグゼ。そして、そのオペレーターの光熱斗。200年前のヒーローだよ！》

ナビとは、コンピュータネットワークを仮想空間、“**“ 電脳世界”**”で活動する事ができる、ネットナビの事である。普段殆どナビはそのナビ持ち主オペレーターと呼ばれる人間が持っているPersonal Terminal、通称PETペットという携帯端末の中に入っている。まあペットに入らなくても良い、完全自立型ナビと言う例外もいるが。

…ナビは普段電脳世界でしか活動できないのだが、中にはあるエリアを発生させる事によってオペレーターと融合して現実世界に姿を現したり、又はあるロボットを使って現実世界に出現する事ができ

る。

「うそ……この子が……」

もう一度彼に振り返り、顔を見る。

「（……そうは見えないんだけど。……ていうか、2000年前って、じゃああたしタイムスリップしたって事！？ 嘘、ありえなーい！ー！）」

『（なぜだろう……凄くけなされた感があるのは……）』

「で、その……喋る扇子を持ったおまえは一体ここで何してるんだ？ それと、その後ろのビリビリ電撃が走ってるそれは何だ？ ……さつきからそれから声が聞こえて気味が悪いんだけど……」

世界を救った熱斗という少年の声が聞こえてくる。すると、エグゼの横にディスプレイのような物が出現した。そのディスプレイにはオレンジ色のバンダナを頭につけた少年の顔が映っている。あれが熱斗、ロックマンのパートナーで先程の声の主のようだ。

「えーっと……どうしよう、ジャスミン」

『……ちゃんと話したほうがいいと思うわ。それに、世界を救ったヒーローさんみたいですし、何か方法を知ってるかも』

「そうだね……実は……」

ジャスミン・ハートは今までの事を話した。何故ここに居るのか、電磁波ボールの秘密、これを通じたあつちでは自分の友達がいるこ

と、全てを。

『……って事は、君は未来からタイムスリップしてきた電波体と人間宇宙人が合体した電波人間と呼ばれる存在で、タイムスリップした理由がその電磁波ボールと呼ばれるこれのせい、その向こうには僕に似ている君の友達、スバル君ロックマンがいるって事？』

「でも、そんな事信じられねえな、タイムスリップなんて」

『でも、現にここに居るわけだし、信じるしかないんじゃない？』

2人で話し合っている。一応信じてもらえたようだ。

「因みに、それを破壊したらどうなるんだ？」

「……たぶん、破壊したら電波の乱れは治まって……あたし達が未来に帰れなくなると思う……」

「……そつか。じゃ破壊するわけにはいかないな。お前達が帰れるよ  
う俺達も協力してやるよ、な、ロックマン！」

『そうだね。手伝うよ、ジャスミン・ハート』

過去で世界を救った2人は笑顔で言う。その2人の眼差しはとても真っ直ぐしている。これが世界を救ったヒーローの眼差しなのだろう。……スバルもこの眼差しを持っている気がする、とジャスミン・ハートは心の中で思っている。

「……ありがとう。聞こえる、スバル君？」



笑顔でお礼を言って、電磁波ボールに声を掛ける。

「何？」

《こっちでそっちに帰れないか、4人で考えてみるよ》

「わかった。でも……ゆっくりしてられないみたいなんだ……」

ロックマンは承諾したが、何か焦っているようである。

《どうして？》

「それは……こっちに数えられないほどのウイルスが居るからだよ  
ロックマンが後ろを振り返る。すると、そこにはいろんな種類の電  
波ウイルスが大量に待ち構えていた。メットリオ、クロツカー、ビ  
リエース、バサリカ、モエローダー等などのウイルスが多い。」

《えっ？ どう言う事？》

「…たぶん、このボールが発生させている電磁波に呼び寄せられたんだと思う。僕が時間を稼ぐから、そのうちに早く！」

《わ、分かった。…無理しないで！》

「うん…行くよ、ウォーロック！」

『あア！』

ウィルスの方に走って向かい、ロックバスターなど攻撃を開始しデリートし始める。だが数は一向に減る様子はない。、

「どうしたんだ？ そんな険しい顔して？」

熱斗は聞く、先程の話しがよく聞こえなかったのか状況を理解してなかったからだ。

『あつちで大変な事が起きてるみたいなんだよ』

エグゼがそれを簡単に説明する。先程の言葉からエグゼは理解したのだろう、更に先程の未来からの言葉を詳しく熱斗に話している。

「……………」

ジャスミン・ハートは悩んでいる。声は通じるのに、空間の行き来が出来ない。未来と過去は繋がっているのにそちらに向かってタイムスリップする事ができない。どうすればその移動が可能なのか悩んでいる。

『ジャスミン・ハート、これに吸い込まれたって言ったよね？』

すると、悩んでいるところにエグゼ尋ねる。ジャスミン・ハートはそれに静かにコクツと頷く。

『その時、どうしてそんな現象が起きたの？　ただ電磁波を発生させるだけの物だったんでしょ？』

「…うん。確か、あのとき……私達が絶えられない程の熱エネルギーを浴びてから電磁波ボールがおかしくなって、タイムスリップしたんだと思う」

「なるほど。じゃあ、そのときと同じ状況を再現できればもう一度起こす事が出来るかもしれねえな」

確かに、理屈はそうだが、うまく良くかどうかわからない。もしかしたら更に過去、又は未来の方に行ってしまう可能性がある。しかも、まだ問題がある。

「でも…その熱エネルギーってどうやって発生させるの？」

そう、そのエネルギーが問題なのだ。フェニックス・プロミネンスが発生させたエネルギーは太陽と紙一重のエネルギーだそうだ。太陽と言うと、摂氏約6000度だ。これが発生するなんてフェニックス・プロミネンスぐらいしか考えられない。

『それは大丈夫。でも他に方法はないし、一か八かやってみようよ』

「失敗したら、そのときはそんときだ！」

これは賭けだ。成功するか失敗するか。成功する確率はかなり薄い。だが、他に絶対成功するなんて方法はない。ならば、何もしないより、当たって砕けると言う事だ。

『やりましょう、何もしないよりマシだわ』

「……分かった。それに賭けてみる！」

悩んだ末にそう決断したジャスミン・ハート。最後の言葉は、覚悟を感じ取られるぐらい強い言葉だった。

「よし、ならいくぜ！ バトルチップ！ サラマンダー！ スロツトイン！」

エグゼの体に炎が纏った。そして、エグゼから凄じ熱エネルギーが発生し始めた。

『ウオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！』

ジジジジ……ジジジ……

すると、サラマンダーの熱エネルギーで電磁波ボールに影響が出始める。

「……………もう少し……」

ジジジジ…ヒュイイイイン…！

先程同じであちらの世界と繋がったようだ。さすがに吸い込みまではしなかったようだ。

「やった！」

『さあ早く行ってあげて！』

「うん。ありがとう！」

ジャスミン・ハートは電磁波ボールの中へと消えていく。

「……………ロックマン」

『うん……分かってる』

「ロックバスター!!」

『……チツ、数が全然減ってねエぞ!』

「くそ…さすがに多過ぎる」

ウイルスに攻撃をし始めて約5分。もう既に何体倒したなんか覚えていない。だが、敵の数は一向に減っていない。

そろそろ敵の攻撃が厳しくなってきた。後ろには電磁波ボール。それに攻撃を当てさせないようにしているが、敵の攻撃を全てバリアー系の防ぐのには限界がある。

だが、その時に

「スバル君!」

帰って来た、一人と一体の未来の住民が。どうやら過去と未

来の世界を繋ぐ事が成功したようである。

「っ!! …お帰り!」

「…ただいま。…それにしても数多くない?」

さすがのジャスミン・ハートも驚いていた。いくら最強の力を持つ彼女でも、この数は驚いた。前の電波クライシス事件時のように全然数が減らないのだ。

「こんな数、どうやって相手にしたら」

「大丈夫、僕に任せて!」

「『コッポツ!?』」

すると、全員の後ろ、電磁波ボールの前に一人の少年が立っている。名前はロククマンエグゼ。過去の世界で何度も世界を救ったヒーロー。ここに居るはずのない存在だ。

『僕に任せて! 熱斗君、お願い!』

「ああ! バトルチップ! スプレットガン! トリップスロット  
イン!」

そして、電磁波ボールのあっち側から熱斗の声が聞こえる。熱斗は過去に居てこの状況が見えないはずである。だが、この状況がまるで見えて居るように直ぐに対応するようにバトルチップをスロットインさせた。

「『プログラムアドバンス！ ハイパーバースト！！』」

そして、両手を大きなバスターに変換させウイルスに向かって発射させた。弾はいろんな方向に散らばり、かなりのウイルスをデリートさせていく。

「『す、凄い……』」

あまりに大きな威力に2人は啞然と立ちすくんでいる。

「まだまだ！ バトルチップ！ メガキャノン！ トリプルスロットイン！」

「『プログラムアドバンス！ ギガキャノン！！』」

今度は両手を大きなキャノン砲変え、ドデカイエネルギー弾を発射させた。残りのウイルスは全て、このエネルギーの中に消えて行き、全てデリートして一掃した。

「ふう、いっちょ上がりいー！」

『流石だね、熱斗君』

熱斗は過去、エグゼは未来で喜び合っている。2人は本当に心が通じ合っているように見える。これが絆というものなのだろうか。

『……君がスバル君。未来のロックマン。本当だ、僕にそっくり！』

「あなたがロックマンエグゼ……ありがとう！」



先程のウィルス一掃に対してお礼を言うロックマン。

『うん』

ジ…ジジジジ…

すると、電磁波ボールが音を立て始めた。良く見ると、徐々に周りのウェーブロードが完全に見なくなろうとしている。つまり、それは電磁波ボールが消滅しようとしているからだと思われる。

「ロックマン、早くしないと閉じちまうぞ！」

『あ、もういかなきゃ行けないみたい。じゃあ皆、バイバイ！』

「うん！ 帰るの手伝ってくれてありがとう」

「さようなら…また会えるよね？」

『うん……きつと』

その言葉を残すとエグゼは電磁波ボールのなかへと消えて行った。その数秒後、電磁波ボールは自然と跡形も無く消えて行った。まるで力を使い果たしたかのように。

「…いつか……きつと」

そうして2人の電波人間は朝は終わった。まだ今日という日は始まったばかり。

## 第76話 過去から未来へ（後書き）

てな訳でエグゼ編終了です。昨日、一昨日はパソコンがインターネット繋げれなくなってたんで上げれませんでした。（その後一人で何とか直しました）

あ、最後の文は別に何の意味もありません。適当に書いただけです（笑） てか、一番出したかったキャラが最後にしか出てないって……。

ふう、このエグゼ編、一番日にちを掛けた気がします。でも掛けたわりにはよくわからんデキに（――；）

因みに今、「WORKING?」というアニメの二話目を見ながら書いてます。突っ込みながら書いてるんで何書いているか分からなくなってるところがあるかもです（^―^；）

……それにしても、当初の予定では亜夢にデレてもらおうと思ったのに……全然だせる雰囲気じゃなくなってしまった。

次回はたぶん雑談になるかと。……亜夢に新しいツンデレを（ニヤ！）

番外編 ちよつとした雑談8 (前書き)

もう雑談なのだろうか… ( - - ; )

番外編 ちよつとした雑談8

こんにちは、そろそろ息抜きに雑談をやりたいと思ったのでやりま  
す。

てな訳で今回は……主人公組みスバル君とウオーロック、敵キャラ  
組みの不死宮とフェニックス、嫉妬三人組の一人、水星亜夢ちゃん  
とジャスミンです。

「こんにちは

』  
『おう！』

「よう、来てやったぜ！」

『Hello。また会ったな！』

『こんにちは

』  
「……なんでわざわざ組をつける……そして何でまたこいつが居るの  
！……」

挨拶もなしにいきなり怒鳴るとは……流石亜夢ちゃん

「“流石亜夢ちゃん”じゃ、なーい！！」

「……うるせえな。もう少し静かにしろよ」

「大体、あんたもあんたよ！私を過去に飛ばすなんて！」

「あ、過去に飛んでたのか。タイムスリップって奴か？ だったらスゲー体験したんだから幸運に思え」

「何ですって！！ あのと き本当に……怖かったんだから……」

(……あ、そういえば飛ばされて直ぐ泣いてたなあ……)……よし。スバル君、スバル君。

「何？ 小声でどうしたの」

亜夢ちゃんを慰めてあげてよ。

「はい？」

男の子なんだから、泣いてるレディにそれくらいしてあげなきゃ。

(もっともレディと呼ぶには恐ろしい気がして呼びたくないが……)

「……だからって何で僕が」

『スバル、男なら腹くくれ』

「……意味わかんないよ」

良いから早く。

「……分かったよ。亜夢ちゃ」

「おい、泣いてんのか？」

あらら？ 何故そこで不死宮が……

「はあく、……女らしいとこあんじゃねえか、お前。……悪かった」

「えっ？」

「『ツ！？』『』」

……あれ？ ……今何て言った、不死宮？

「……だから悪かったって。だから泣くな」

「『『』……はあ？』『』」

「えっ……ええ！？ 何で誤ってんの！？」

「何だよ、誤ったら駄目なのかよ？」

「いや……そういう訳じゃないけど……」

……雑談序盤から何か変な感じなのですけど……これどういうことが説明して、フェニックス。

『……ん？ 何で俺？』

いや、君この状況を前にして顔色一つ変えなかったから。

『……何処からどう見たって、涼介が誤ってるだけだろ？』

……それが問題なんじゃないか……。くそ、これじゃせっかく計画し

た亜夢ちゃんの恥ずかしいこと話しちゃおう作戦が台無しに

「ああ…作者？ 後ろ後ろ…」

ん？ 何、不死宮？ 後ろって

「私の恥ずかしい事って何？」

あ……ごめんなさい。

「…もう既に誤ってる。しかも土下座」

「大変だな、作者も。で、あいつも泣き止んだわけだが……」

「はあ？ 泣いてないし」

「『『『』』』』……………（思いっきり号泣してたような『『『』』』』」

……………（ええ……）

「な、何よ、皆してこっちみて！」

「『『『』』』』そういえばそうだったな『『』』』」

うん。もうこれは治らない。まあこれが亜夢ちゃんの良いところでもあるんだし。

「はあ？ 何のこと？」

気にしない、気にしない。じゃあ本題に

「あ、わりい。俺帰るは」

…はあ？

『これから用事があるんでな』

(そんな設定にはしてないのにな……) ……わかりました。まあいいでしょう。

「『『』』 (いいんだ／いいのかよ……) 『『』』」

じゃあ、また敵として！

「ああ……またな」

『Adios』

「……次は倒す！」

「…勝てたらな」

そういえばそんな設定が……まあいいや。さて、敵は帰ったことだし、本題にはいりましょう。

「本題つてなに？」

「またなんかいやな予感が……」

大丈夫。今回は真剣にキャラ設定の事でも話すから。



「キャラ設定？」

まあオリキャラだけだけだね。さすがにそろそろ真剣にやるのかな  
と思っ

「「「「（じゃあ今までふざけてたと…）」」」」

どうしたの？

「「「「別に…」」」」

あれ？ 皆ツンデレ？ まあいいや。

まずは、スバル君も結構苦戦した守護ライセンスさん。募集したオリキャラの一人と一体ですね。設定は…サテラポリスの一員で、正義感が強い、五陽田とは割り交友。容姿は、外見だけでは細く見えるのだが、腹筋と腕の筋肉だけは凄い、茶色い瞳に、茶色い髪という設定ですね。

そして一緒に電波変換したFM星人ヘルクレス。ヘルクレス座のFM星人で、強い正義感の持ち主。電波変換時の名はヘルクレス・メシアです。

ヘルクレスの喋り方は西洋の戦士のような感じで、結構カッコイイ！

まあこんな感じで短くまとめていきます。

「短すぎない？」

そう？ べ、別にめんどくさいとかそんなんじゃないんだからね！！

「……何でツンデレやってんの。（亜夢ちゃんの役目でしょ……）……てか、それはそれで駄目でしょ！」

あ、冗談だから。短くまとめないと凄い字数に……

『めちやくちや現実リアルな事言ってるけど、いいのか？』

『さあ？ まああの人のことだから、何か考えがあるんじゃないかしら？ ねえ、作者さん』

えっ？ あ、ああ、うん。そ、そうだよ（変な汗かいてるバカな奴）じゃあ次行ってみよう。

次は先程までここにいて、まだ全然余裕に戦っている不死宮涼介。これは私が考えた地球人二人目のキャラです。設定は……小学6年生で、暇なのが嫌いで刺激を求める少年。容姿は、短めの赤髪で青色の目という設定です。

その相棒はフェニックス。鳳凰座のFM星人で鳳凰のように炎で作られた不死鳥のような姿をしている。属性は炎属性だが、至って冷静。たまに英語などの言葉を使うときがある。電波変換時はフェニックス・プロミネンス。

フェニックスに対しては凄く好きなキャラの性格を使っているので結構好きなキャラです。

この不死鳥は結構苦戦したようね。亜夢ちゃんなんて全戦全敗だしね。

「ま、負けてないし！ あれは引き分けだし！」

はいはい、強がりはその辺で。

ラストにこの作品のヒロインに加わっている、水星亜夢ちゃん。突如と現れたアイドル。ミソラとは同期。口下手な事ををクールと誤解される。また、意地っ張りでひねくれた事しかいえないのをおこいいと勘違い。本当は口下手で素直になれない事をギャップに持っている。人一倍友達を大切にする女の子。容姿は、肩までかっている水色の髪に、ハートの髪飾りをしています。

FM星人は、ジャスミン。乙女座のFM星人です。因みに、名前の由来は亜夢ちゃんが素直になれないことから素直の花言葉、ジャスミンの花から取りました。容姿は、着物を着たの女の子のような姿。とても礼儀よくおしとやかで、いつも笑顔で亜夢ちゃんのことを見守っている。電波変換時はジャスミン・ハート。天気のを扱う事によってより強い力が発揮できる。

他にも亜夢ちゃんの設定はありますが、その辺は25話参照してください

「（参照って……それじゃあ、雑談で説明する意味ないじゃないか）」

ふう、君の設定が一番悩んだよ、亜夢ちゃん。

「し、知らないわよ！」

因みに、私が考えたキャラのモチーフをアニメなどのキャラで言う……ライセンスさんはどのアニメでもよくいるようなおこいとお兄さんの感じ。ヘルクレスは、「金色のツシユ・ル」に出てきたース（だったような）みたいな感じ。亜夢ちゃんは……殆ど

でそのキャラそのものの「じゅご ヤラ！」の日 森 むとほし  
歌 を合体させたような感じ。ジャスミンはこれまた「しゅ キャ  
ラ！」の藤 なでしこみたいな感じ。フェニックスはやっぱりSE  
GAのソ ック。不死宮は……モチーフなしですね。今の所…。

「それにしても、設定って殆どパクリじゃないの？」

グサツ！

うう……重い一撃…流石亜夢ちゃん。痛いところを突いてくる…。

まあこれで本題は終わったので、後は一人ずつエグゼ編の感想でも  
まずスバル君。

「2000年前のヒーローに逢えて感動だよ！」

それはよかったね（2000年後のヒーローさん）。続いてウォー  
ロック。

『おう。あのエグゼって奴つエんだろ？ 一度戦ってみてエと思っ  
たぜ！』

は、ははは（本当に喧嘩つばやいなあ。流石、ハーブ曰くガサツな  
ウォーロック）。ジャスミンはどうだった、2000年前に行ってみ  
て？

『そうねえ……2000年前のヒーローさんに助けて貰えなかったら、  
私達はどうなっていたか…』

そうだね。本当に君たちの力じゃ戻れなかったよね。未来にあんな

エネルギー発せられる代物ないもの。最後に亜夢ちゃん。2000年前に行ってみてどんな気持ちだった？

「べ、別に何とも」

ほう……涙流して泣いてた君がよく言えるね。

「っ！！」

怖かった？ 寂しかった？ どんな気持ちだった！？

「~~~~！！ うっさい、バカ作者あ！！！！」

えっ？ 何で切れるの！？

「うっさい、ハゲ！」

なっ、誰がハゲですか！！ そっちこそ、マセてるツンデレ……！

「っ！！ 作者く！ 今日という今日は消す！」

……あ、まずい……喧嘩売っちゃった……じゃ、今日はこの辺で……失礼しますっ！！ = = = = @ @ @ @ / < > / 逃げろっ！

「待てえ！！！」

「……また行っちゃった……この雑談絶対作者最後いないよね」

『確かに……』

『言われてみればそうね』

「……まあいいか。では失礼します」

『じゃあな!』

『失礼します』

第77話 発明大魔王宇田海 前編

ある川の上流、山の近くの小さな滝の下。白い着物のようなもの着た一人の青年がその滝にうたれるている。胸の辺りで手を忍者が忍術を使うときのように手を組んでいる。

「FM星人が居なくなりますように……地球が無事でありますように……」

御祈りのように呟くこの青年は、前にFM星人キグナスに憑依された地球人、宇田海深佑である。滝にうたれている理由は不明である。

その少し離れた木の陰では宇田海の上司、天地守が不安そうな顔で宇田海の様子を見ている。

「宇田海……っ!!」

そう呟いた最中、宇田海が川に落ちた。勿論小さな滝とは言え、上流。流れは速い。その川を手と足をジタバタさせながら宇田海は流れてく。

「うわあああああははあ!!」

「宇田海い!!」

天地は勢いよく流れてく宇田海の後を追って、名前を呼びながら走って行く。

## 数分後

宇田海は何とか助かった。上流から大分離れた場所、で天地が追いつき、宇田海を引っ張り上げたのである。そこは既に下流だったため、結構ゆっくりな勢いで流れていた。

宇田海は岸辺で四つん這いになり、気道に水が入ったのか少し咳を込んでいる。

「ゴツホン！ はあ…はあ…はあ…はあ…」

「宇田海、もうこんなことは止めてくれ」

天地は片足を着いてしゃがみ、宇田海に話し掛ける。話からすると、宇田海は何度も滝にうたれにきているようだ。

「はあ…いいえ、天地さん！ 僕はFM星人に操られていたいえ、大変な事をしてしまったんです！ その罪滅ぼしをしなくては世間に対して申し訳なくて……」

落ち込むように下を向く。彼は彼なりに罪滅ぼしがしたくてこんなバカな事をしたようだ。

「だがなあ、宇田海…お前の祈りが何か効果があるとは思えないぞ」



ストレートに言う。確かに、自分を犠牲にしてまで神に祈りを捧げたところでどうにかなるわけではない。まして、祈っても行動するのは自分なのだ。神がどうにかしてくれるなら、この世の中は幸せだらけだ。

「……分かってます。でも僕にはこうするしか」

「お前は技術者じゃないか？」

ない、と言おうとしたが、天地に言葉を遮られた。その天地は微笑んで、宇田海に問い掛けている。

「だったら、世のため人のためにたるような発明品を作ってみたらどうだ？」

更に続ける。要するに、祈って神頼りにするより、自分が行動して人のためになれないのか、と尋ねているのだ。

「それで社会に貢献したらいい」

「………それです！」

すると、いきなり何か思いついたかのように立ち上がり、拳を握り締める。

「世のため人のため、僕はこれから発明王……いえ、発明大王を目指しますっ！……！」

「っ！……？」

「うおおおおおおお

！！」

「いや……そこまで目指さなくても良いんじゃないかな……」

天地がそう言った時には、既に宇田海は街に向かって走り去った後だった。

街中 裏路地前の道

あまり人が通っていないこの道で、ビルとビルの間路地に左手を入れている少年が一人立っていた。だが、ただ立っているのではなく、何かと格闘しているように見える。

「くうう！ ……っ！ あはは……」

その様子を周りの人が気にし始めたことに気づき、まずいと思いそ

れに笑顔で返した。先程までの彼は、右手をビルに着き何かを引っ張っているようにも見えた。

「うわぁっ!?!」

すると、吸い込まれていくように路地の中に引っ張られる。

路地の中心地点に着いたとき、左手が引っ張られている方角と反対の方角に体重を移動させる。

「いい加減にしてよ、ウォーロック！ 僕は科学館に行きたいのぉ！」

『科学館なんか退屈だア！ 海にでも行こうぜ、なアなアなアなア！』

相変わらずこの2人は周りから見たらおかしい現象を巻き起こしている。スバルは反対の方向に引っ張り、ウォーロックは喋る時にトランサーをパカパカツと開いたり閉じたりし、スバルのことを引っ張っている。スバルより、ウォーロックの方が少し力が強いようだ。

「科学館！」

『海！』

「やだっば！」

『じつちい！』

「くうう！」

『じんのオー!』

だが、スバルも粘り強く引っ張っている。ウォーロックも負けじとトランサーを何度も開閉しながら引っ張っている。

「うう、科学館…!」

『男なら海だア…!』

すると、トランサーに稲妻が走るように電気が生じる。そして

バリッッ!

「うわぁっ!?!」

変な音と同時に勢いよく後ろに尻餅を着く。ウォーロックが引っ張っている方の力が無くなったため、反動で後ろの尻餅を着いた。

カラッッ!

すると、目の前に何かが落ちた。

「あれ?」

……あれは、スバルのトランサーの上画面…であろう。でも、トランサーは確かに左腕に

『あ、あれ? どうなったんだ俺エ? どうなってるんだ、俺エ!』

「ん？ つー！」

ウォーロックが叫んだ。何が起きたのだろうかとうと左腕のトランサーを見ると、トランサーのウォーロックが映っている下画面に大きな亀裂が入り、稲妻のような電気が生じている。そしてなにより驚いたのが、付いているはずの上画面の姿が無い。接続部分に多数のコードは見えているのだが、やはり上画面はない。……これは誰もが壊したと認識するであろう現状。

「僕のトランサーがあー！」

そして

そして2人は科学館にも海にも行かずに、代わりにアマケンに来ている。勿論、壊れたトランサーを修理してもらうため。

「何でトランサーがこんな壊れ方をするんだ？」

天地が呆れたように2人に尋ねる。すると2人は

「ウォーロックが悪いんだ」

『スバルのせいだ！』

と他人のせいにしてそっぽを向く。まあこれはどちらかが悪いとかそんなのでなく、どっちもどっちなのだが。

「まあ、いいだろう。修理はアマケンで引き受けるよ。ちょっと掛かりそうだが」

『おおい、俺は何時までこのままなんだ？』

ウォーロックはトランサーの中に入り、たまに映っている画面が壊れかけた映写機のようにブレている。

「うーん、そうだなあ…あっ、そうだ！」

少し手を後頭部に置き、考えた後何かを取りに行くようにこの場を離れた。

「ウォーロックは、これに入ればいいんじゃないかな。ほら」

すると、自分の机の引き出しから、ある物も取り出しこちらに見せる。それは手で持てるぐらいの白い箱型のような物、ミソラやツカサ、FM星人たちも所持している今流行のウェーブスキャナーだった。だが、普通のとは色が少し違い、オレンジやグリーン（又はピ

ンク)の部分がブルーになっている。

「ああ、それって!」

「ウェーブスキャナーだ。ただしこれはアマケンの特別せいだ」

スバルの許へ行き、ウェーブスキャナーを手渡す。その後、直ぐにウェーブスキャナーの中にウォーロックは移動した。

「うわあ、凄い!」

スバルはウェーブスキャナーをある程度眺めた後に呟いた。そして中に入ったウォーロックは『別に狭くもねエな、悪くねエ!』と云って気に入ったようだ。

「修理が済むまでこれを使っているといい」

「はい!」

ウィンツ!

するとこの部屋の自動ドアが開き、誰かが急ぎ足で入ってくる。

「駄目ですよ、天地さん! せっかくだから発明しましょう! 新発明のトランサーを作るんです!」

誰かと思えば宇田海だ。という事は、先程の話の一部始終を聞いていた様な感じである。

「スバル君、トランサーに新機能があったら便利じゃないでしょう

「かあ？」

「はあ？」

「え〜と…掃除機とか！ トースター機能とか要りませんかあ？」

悩んだ割には訳のわからない事を言っている。知っているとは思いますが、掃除機は部屋とかを掃除する奴、トースターはパンを温めてこんがり焼いてくれる奴である。

「い、いりません」

「かはっ！！ じゃ、じゃあ…缶切りとか、コルク抜きとかは？」

「いりません」

「だあ！」

笑顔で断った後、宇田海は崩れるように四つん這いになった。まあ断るのも無理ない。そんな何でも出せるような機能のトランサーじゃ、ドラ もんの四次元ポケットの方がまだマシだ。オマケとしてつける機能にしては要らない物ばかり。大一そんなトランサー、もうトランサーとは言えない。

「おいおい宇田海……」

しゃがんで宇田海の肩に手を置く。そしてこう一言。

「トランサーにそんな物付けてもしょうがないだろう」



同感だ。

「でも……でも発明が……発明に行き詰ってしまっあははあああ  
!」

両膝を着いたまま上半身を起こして頭を両手で抑える。本当に行き詰っているようだ……。

### 宇田海の部屋

「うわあ、これみんな発明品?」

宇田海の部屋にはかなりの発明品で埋めつくされている。掃除機やら大きな機械などなど、中には何時かのフライングジャケットもある。

「そう何ですけど、あまり評判がよくなって……これじゃ少しも社会に貢献できないです……」

少し落ち込んでいる。そんな事は気がづ、スバルは部屋の発明品を観まわしている。

「…これは?」

近くにある2 m以上ありそうな大き目の機械に目をつけた。

「ああ、ファスナー直し機です」

「ファスナー…直し？」

そんな名前じゃピンとこない。まずファスナーを直すと言う事自体よく耳にしない言葉である。因みにどんな機械かというと

「洋服のファスナーが噛んでしまっても、簡単にはずしてくれるマシーンです」

という事らしい。

「へえ〜」

『おもしろそうだ！ スバル、やってみるよ！』

「えっ、うん」

やけにテンションが高いウォーロック。一応スバルの赤いシャツにも胸元にファスナーがあるので試しにやってみる事にする。スバルは胸に提げているペンダントを右手で持ってファスナーを開け、ファスナー直し機の中に入る。

すると警報機のような音を立て、機械から二つのマジックハンド的なものが出現し、スバルの腕を持ち上げて水平に上げる。そして更に二つのマジックハンドが出てきて、一つはシャツを抑え、一つはシャツのファスナーを上下にする。これで一応直しているのだろう。

やり終わると、4本の手はスバルを解放し、機械の中に戻っていく。

「ちよっ、ちよっと便利だけど……大きいよね」

「皆そう言います」

宇田海はもう猫背になっている。

「あれは？」

「ん？」

今度はピラミッド型の少し大きな機械に指を差す。ピラミッドの中央にはドア的な物の姿がある。

「あ、タイムマシーン」

「えっ、凄い、タイムマシーン!？」

「の外身です」

「うっ!？」

一瞬テンションが上がったスバルだが、直ぐに元に戻される。それどころか、外身と聞いて中身より先に作るってどう言う事、と疑問が浮んでくる。

「中身の作り方はまだどうにも。ああ、磁界エネルギーとは、タキオンはあ……!？」

だったら何故外身作ったんだよ、と突っ込みたくなる一言。宇田海は頭を抑えて悩んでいる。

「ああ、僕は何を作ればいいんだあ！？ 何を発明すれば世のため人のためになるんだあ！？」

ビーーーーー！ ビーーーーー！ ビーーーーー！

すると、部屋中いや、アマケン中に警報機の音が響き渡り始める。

「っ、何！？」

宇田海は部屋にあるディスプレイとタッチパネルを使い警報の原因を調べる。

「大変だあ！ 第二実験室でウイルス事故が起きたんです！」

第77話 発明大魔王宇田海 前編（後書き）

さて、何だかんだで77話かぁ。奈々さんの7だなぁ（、（、（、（）  
はい、うるさーい）

あ、たぶん予定ではアニメの42話から45話まで書いて、46話から49話書かないと思いますね。アニメでのこのときの話しがない方はググツて下さい。たぶんWikipediaに書いてあると思います。

理由はあまり関係ないかなぁ、と思ったからです。

45話までリメイクしたら、残すは最終決戦編になると思います。いやぁ、遂にここまで来たか…最後まで全力で頑張ります！

それでは感想待ってまーす

## 第78話 発明大魔王宇田海 後編

### アマケン 第二実験室

第二実験室で天地率いる3人のアマケン職員は部屋の中央にあるタッチパネルを操作し電波ウイルスに対処していた。この部屋にある透明な壁に囲まれている実験する場所がある。その実験する場所に電気が生じている。ウイルスは其処に居ると思われる。

「天地さん！」

すると、この部屋の自動ドアが開き宇田海が走って入ってくる。

「宇田海！ ファイアーウォールの状況確認！」

「は、はい！」

宇田海に天地は直ぐ様指示を出す。宇田海は返事をする、直ぐ様タッチパネルの場所に着き、パネルを操作し始めた。

「実験モジュールに大量のウイルスが進入しています！」

「何としてもデリートするんだ！」

モニターを見て現状を報告すると、天地は直ぐに指示を出す。

「うわぁ、大変だ！」

二階から第二実験室内にあるの実験モジュールをビジライザーを掛けて見て、言葉を発した。

実験モジュールでは数体のメットリオ、バサリカ、ビリエースがキンキンッと攻撃を加えていた。

『スバルウゥ、一発ぶっ飛ばしてやろうぜ！』

「うん！」

何故か喜んで見えるように見えるウォーロック。だが、今はそれどころではない。

スバルは返事をした刹那、ロックマンに電波変換して周波数を変え、一階に向かって飛び降りた。

「ロックマン！」

天地は着地したロックマンに気づき、驚いたように名を呼ぶ。ロックマンはそれに返答はせずにウィルスを手リートするため、更に周波数を変えてウィルスの方に向かう。

その刹那

「電波ウィルスが激減していきます！」

モニターの画面一面に広がっていた『WARNING』の文字が、徐々に消えていく。ロックマンがウィルスをデリートしてく為だと思われる。それと同時に警報機の音も徐々に小さくなり、最終的には消えて聞こえなくなった。

「ああ、もう大丈夫だ」

数分後 天地の部屋

天地は机に座り何かを書いていた。先程の事故の報告書のようなものだと思われる。天地の後ろには宇田海とスバルが立っている。

「アマケンでもこんなウィルス事故が起きるんですね」

「あっはっは、面目ない」

振り返りスバルに笑ってみせる。

「FM星人が地球に着てからですよ、電波ウィルスが前より発生するようになったのは！」



そう言つて宇田海は両拳を握り締める。

「今日はスバル君達が居てくれたから素早く対処出来たが、そうでなければ大変だ。場合によればサテラポリスの出動を要請しなけりやならん」

「何か電波ウィルスを個人で対処できるような装置があれば良いんでしようけどねえ……」

宇田海が右手の人差し指を額にあて、考え出した刹那、

「それだよ、宇田海！」

と椅子から立ち上がる。

「は？」

「そういう装置をお前が発明すればいいんだよ！」

「発明？」

「そうですよ、宇田海さん！　そういう装置なら皆欲しがります！　スバルもこの案に賛成のようである。意外と良い発明の案は近くにあったようだ。」

「うん、それなら世のため人のためになる！　よおーし、早速開発しなけば！」

ポオオー！！

宇田海は燃えている。いつもの暗い宇田海とは違い、世のため人のためになる発明品を作るといふ目的のために燃えている。

「うおおおおおおおおおおお」

ある時は本を難しい読みながら勉強し、

「おおおおおおおおお！！」

ある時はタイピングの早撃ちをし、

「あたっ、あたっ、あたあっ！！」

そしてある時は金槌で木材をドンドンドンツと叩いたりして完成まで一歩ずつ近づいていった。

そして数日後

「こんにちは！」

アマケンにトランサーを取りやって来たスバル。だが

「えっ、トランサーまだ直ってないんですか？」

何で、と言いたそうな顔で天地に尋ねる。

「いやあ、宇田海の奴が責任持って引き受けたと言ったんだが…あいつ今、れいの装置に掛かりきりだからなあ」

「ああ、あの電波ウイルス退治機」

思い出して口出すスバル。宇田海が今作っている装置の名前は“電波ウイルス退治機”というらしい。

「ここ数日はずっと研究室に閉じこもりっきりだ。ちょっと様子を  
見に行ってみようか？」

## 宇田海の部屋

「あ……ん……はう……いえ、……私はただの発明大王なので、そのような事はあ……」

机の上に顔を置き、涎を垂らしながら眠っている。それにしても寝言にしては大きすぎるような気がするが。

「宇田海、おい！」

「……んう？ ……あやあ？」

すると、天地達が部屋にやってきて眠っている宇田海を大きな声を出して起こす。どうやら完全に眠っていたらしい。

「あ……天地さん。スバル君……」

まだ少し寝ぼけているのか、何故ここに、と言う顔で2人の名を呼んだ。

「寝るならちゃんとベッドで寝たほうが良いぞ」

「いえいえ、寝てなんか居られませんよ！」

『寝てた』

すると、椅子から立ち上がって机の上にあるペンギンの人形を手にとった。そのペンギンはお腹にデジタル式ではなく、アナログ式の時計が付いている。

「装置の安定を待つただけです！　これから試運転を開始します」

今の言葉からするに完成したようである。

その完成した装置は近くにある他の少し大きめの机の上に置いてある。形は小さな家のような感じで、屋根の部分に、左にレバー、真ん中にディスプレイと右に幾つかのボタンと何かの調節するためのダイヤルが付いている。……これのモーターがどこことなくゴキブリホイホイに似ているが、それはまた別の話。

「これ？　完成したの？」

「はい。僕は電波ウイルスを根本から退治するような装置を目指しました。それが一番世のため人のためになると思われるからです」

つまり、ただ其処にいるウイルスを退治するのではなく、ウイルスの大群をまとめて一気に退治しようという事だ。だがしかし、それを行なうには全てにウイルスをまとめる必要がある。それを可能にしたのがこの装置である。

「凄いいじゃないか、宇田海！」

「その結論はまだです。装置がうまく作動するかこれからです」

宇田海は横に天井からぶら下がっているひものようなスイッチを引いた。すると、天井から少し大きめのモニターが降りてくる。それには『極秘！ 電波ウイルス退治機』と書かれている。

「この装置は三つの機能を必用としています」

指を3本立てて説明し始める。

「まずは誘引。捕獲、消滅の三つ」

モニターには装置がある特殊な電波を発生し、寄って来たウイルスを網で捕獲し消滅する映像が映し出される。あくまでもイメージなので簡単な映像だ。

「つまり、電波ウイルスを引き寄せ、捕まえ、消し去ってしまう機能です」

先程説明した続きだが、根本、つまり大群のウイルスを呼び寄せ一匹残らず消し去ってしまう事でウイルスの数が減り、ウイルスによる被害が減ると言うわけだ。

『説明はいいから、早くやってみるよ』

急かすようにウォーロックが言う。ウォーロックの頭じゃ話が分からないので、聞くより見る。百聞は一見に如かずという奴だ。

「はい、わかりました」

ガチャッ！ ヒュイイイイイン

「「おお!!」「」

レバーを起動させると音を立てて特殊な電波を発し始めた。それと共に装置にバチバチツと電気が生じ始める。

「な、何だ!?!」

「成功です! 誘引されて電波ウイルス達が大量に引き寄せられているんです!」

真ん中のディスプレイはレーダーウィルスになっているようで、発信機のように幾つもの点が反応している。

「よ、よし、早速捕獲し、消滅させるんだ!」

「...そこまではまだ行ってないんです」

「「えっ!?!」「」

『何だとオ!?!』

これには皆驚いた。完成しているように説明してるのか変わらず、肝心なところが完成していない。中途半端な状況で実験している。

「まず完成させたのは二つ目の誘引装置で、それはこのように見事に機能しているようで……」

## 第二実験室

「うおお!?!」

第二実験室にある実験モジュールのが、先日のウイルス事件と同様に電気を生じてウイルスに破壊されている。

すると、第二実験室のモニターは『WARNING』の文字で埋め尽くされていく。

「何でこんなに電波ウイルスが!?!」

「っ、電波ウイルスが続々集まってきていますう!」

少し、焦り始める宇田海。

「兎に角こいつを止めよう!」

「分かりました!」



その瞬間、天地は何者かに腕を引っ張られた。

「うわあっ!?!」

「天地さん!」

天地を引っ張ったのは宇田海の発明品の一つ、ファスナー直し機のマジックハンドだった。ファスナー直し機にはやはり電気が生じており、ウィルスの仕業である事は間違いない。

「早くそいつを止める! スイッチを切れっ!」

「は、はい!」

スバルと宇田海はあれを見て呆然としていたが、天地の声に我に戻り、レバーをOFFにしようとする。が、

「あ、あれ? レバーが何かに引っ掛かってる!」

つまり、電源を切る事が出来ないのだ。だが、このままでは非常にまずい。今地球上に居る電波ウィルスがこのアマケンに寄せ付けられているのだから。

『行くぞ、スバル!』

「うん! 電波変換! 星河スバル オン・エア!」

スバルはアマケンに居るウィルスを退治するべく電波変換するのだが、あまりのウィルスの量に驚いた。

「うわぁっ!?!? こんなに呼び寄せちゃったの!?!?」

眼前では大量のクロツカー、メットリオ、ビリエースの群れが今にも襲い掛かってきそうな雰囲気放っていた。

第78話 発明大魔王宇田海 後編（後書き）

我ながら微妙な出来……次はもうちょっと頑張ります！

それでは感想まってまーす

## 第79話 アマケン大パニック 前編

「うわあっ!?!? こんなに呼び寄せちゃったの!?!?」

『片っ端から退治するしかねエぞ!』

「ロックバスター!」

左手のウォーロックから放たれた数発のエネルギー弾は、メットリオ、クロッカーなどの電波ウィルスに命中しデリートしていく。今の攻撃で三分の一を減らす事が出来たようだ。

『メットー、メットー、メットー!』

しかしデリートした刹那、天井から周波数を変えて先程数など比で無い程の量のウィルスが出現する。

「また現われた! 宇田海さん!」

「あれ? あれ? あれ?」

何度装置のレバーを下げて、電源をOFFにしようとする。だが、レバーは、中で何かにつつかえた状態のまま、先程とんなら変わらない。宇田海の声の聞こえと少し焦っているように聞こえる。

「あれ? あれ? あれええ!?!?」

すると、最後の言葉の時、宇田海は部屋にある掃除機に服を吸い寄せられ、装置から離されてしまう。ウィルスが掃除機を狂わせ、操

っていると思われる。

これではどの道装置を止める事が出来ない。

「宇田海さん！ つ！？ くそお！」

宇田海を助けに行こうとした刹那、大量のウィルスに向かおうとする道を封じられ助けに行けなくなってしまった。すると、ウィルスの出現スピードがあまりにも早いのか、そのウィルス達に飲み込まれてしまった。

「うわああ！！！」

『スバル！』

今この部屋には、ファスナー直し機のマジックハンドに捕まれたままの天地。掃除機に身動きを封じられている宇田海。そして、ウィルスに飲まれてしまったロックマン。誰もこの装置を止める事が出来ないほぼ絶望的な状況に陥っている。

アマケンから少し離れたウェーブロードの上

ロックマン達が絶望的な状況に陥っている最中、少し離れた場所にメットリオとキャンサーの姿がある。何をしているのだろうか。

『ほーれほれ』

左手にはキャンサーのマークが付いているバケツを持っている。右手でそこから丸い金平糖のようなものを取り出し、ウィルスたちにはら撒いている。……まるでウィルスを飼育しているように見える。

『はあ、オイラは何時になったらFM星に帰れるブク？ これじやあ一生地球に星流しブク……』

島ならぬ星流し。

今地球にはFM星まで直行できる電波がリンクしていない。FM星にいるFM王によって電波をリンクさせる事が出来るのだが、まだ地球を抹殺していないためリンクしていないのだ。まあフェニックスのように他の星の電波を経由して帰る事は可能なのだが、その分帰るのに時間が掛かりすぎる。普通の電波体なら1年以上掛かる。…フェニックスは例外で数日あればつくが。

話しが少し逸れた。リンクしていなため帰れない。そのためキャンサーは落ち込んでいる。

そして、先程の金平糖のようなものを再びばら撒いた。

『……………ッ…メッター、メッター』

すると、何かを感じ取ったかのようにウィルス達は金平糖に見向きもせず、移動を開始する。

『お、おい、お前たちどこ行くブク？』

ウィルスが歩いていく方角の先のウェープロードを見ると、分岐点があり、そこから他のウィルスがあるいてきている。皆、何処かへ向かっているようだ。

『あ……………』

キャンサーはそれを見て呆然と立ち竦んでいた。

サテラポリスの中にある技術部、つまり機械や装置を開発する場所がある。そこに五陽田警部と技術部担当の職員の2人がある事に付いて話し合っている。

「うーん、もう少しどうにかならんもんかなあ？」

「どうにかですか？」

「FM星人なんてのが暴れる御時世だ。俺達サテラポリスももつと新兵器、最新兵器を装備したいわけだ」

「はあ……」

つまり、あのウィルスバキュームを超える新兵器は作れないものかと尋ねているのだ。確かにあれじゃFM星人に効果はない。ましてやウィルスを吸い込む量が一定を超えれば直ぐに使えなくなってしまう。しかもあれは倒すのではなく、一時捕まえて後で処分をするというとても手間の掛かる事をしなければならない。

「技術部でも日夜研究を進めているのだろうか？」

「何分予算が回って来なくて……」

「そこを何とかするのが技術部の仕事だろうか」

無茶振りだ。予算が無いのに何かを開発しろだなんて無理な話した。何か良いものを作るにはそれなりにお金を消費する。それを無しで作れだなんて、約30年前のヤツーマンのボツキーじゃあるまいし。



すると、部屋の自動ドアが開く音がした。

「ん？」

「五陽田！ 電波ウイルス大量発生のお知らせだ！」

「何い！？」

入ってきたのはライセンスだ。通報を受けたと言う事は、アマケン職員の誰かがサテラポリスに通報した事になる。

それを聞くと五陽田警部の目の色は変わった。

そしてある場所

ある大きな木が一本立っている場所で一人少女がギターを持って座

っている。横には赤い少し小さ目のスピーカーが置いてある。

……ザアアアアアアアアアア！！

すると、そのスピーカーから雑音のような大きな音が一瞬放たれ、直ぐに止んだ。

「っ！？ ななな何！？」

『電波空間が変な具合よ』

ギターからFM星人ハープの音が聞こえる。

『……なんかこう…電波ウィルスが活性化してるみたいな…』

「もう、人がやっとの思いで手に入れた創作の時間を邪魔しないでよねー」

そう言うと彼女は立ち上がり、ウィルスに怒りをぶつけるべく電波変換するのだった。

「んんんんおおお！」

天地と宇田海は装置から逃れるべく精一杯力を込めていた。だが、装置はビクともせず、逃れる事が出来ない。

「ロックバスター！」

ロックマンはウィルスから何とか逃れ、バスターを放ちウィルスをデリートしていく。だが

『メッター、メッター！』

数は増えるばかりで一向に減る様子はない。このままではまた飲み込まれるのも時間の問題だ。

「宇田海！ 装置を止める！！！」

「出来ればやってますう！」

宇田海は掃除機に体を縛られ、浮んでいる。否、正確には浮かされている。

アマケンの彼方此方のコンピューター、機械などは黒い煙を上げて爆発を繰り返している。否、アマケンだけではなく、アマケンを中心としたコダマタウンも幾度と無く爆発を繰り返している。

「バトルカード！ プレデーション！ エアスプレッド！」

空中でエアスプレッドに変え、下にいるウィルスを一掃しようとした時、

『メット！』

ドンッ！

「うわっ！？」

上から降ってきたメットリオに背中を踏まれ、そのまま地面へと落ちて行く。攻撃は失敗に終わる。ロククマンは先程のメットリオに乗られたままである。

その様子を周りにいるウィルスはじっと見ている。

「くう…こんなに居たんじゃ電波ウィルスでも強敵だあ」

『スバル、こうなったらまず元を絶ってしまえ！』

「元？」

つまり、ウィルスが集まってくる原因、あの装置を破壊しろということだ。

「スバル君、あのウィルス誘引装置を破棄するんだ！」

「ええ？ 僕の作ったあの装置をお？」

『しょうがねエだろ！』

「……………うん」

少し考え、ウォーロック意見に賛成する。このままじゃラチが開かない。というかやられてしまう。

「うう……………うりゃあああ！！！」

上に乗っていたウイルス共も違う場所へ放り投げ、そのままロックバスターの構えになる。

「ごめんね、宇田海さん！」

「ああ、そんなあ……………」

「ロックバスター！！！」

この一撃で装置を破壊し、全てが終わる……………

『させるかあ！！！！！！』

筈だった……………。放った刹那、カニ型の子供が割って入りロックバスターをモロに浴びる。だが、そのせいで破棄する事が出来なかった。カニの背中は先程受けたロックバスターの焦げ跡があり、プシュー、と音を上げている。

『ブクッ……………うう……………うう……………うう！！』

こっちを横目で怒ったように振り返る。それは何処かで見た事があ

る子供、否、電波体だった。

「お前はキャンサー・バブル！」

『又アツハツハツハ！ 良い様だなロックマン！』

『はあ？ お前何が言ってるんだあ？』と突っ込むウォーロック。良い様ってどっちがだよ……。

『あえつとあうあわあ……フン！ 言いたい事は一杯あっても、こういう威圧的な態度にまだなれていないだけだブク！』

つまり、子供と言う事だ。……分かってるよ、キャンサー。

『知っているブク！ 見ていたブク！ この装置があれば、電波ウイルスを幾らでも呼び寄せられるんだブク！』

「っ！！」

キャンサー・バブルの手にはあの装置がある。先程はあの装置を守るために代わりに受けたのだ。

『こつするブクかア〜？』

「ああ！！ それに触らないで！ これ以上パワーを上げたらどうなることかあ！？」

奴の嫌らしい言い方にまんと騙され、拳句の果てにはベラベラと余計な事を喋る宇田海。

『ほづほづ、つまりこれはポリウムダイヤルブックねエ？』

「あっ！」

「宇田海…余計な事を……」

天地はそんな宇田海を見てあきれて伏せている。

第79話 アマケン大パニック 前編（後書き）

すみません、短い上に中途半端ですが、この辺で切らせて頂きます

m ( ) m

∴今日は書くつもりだったんですが、母の日で母といとこ達と祖父母で食事に行く事をすっかり忘れてて……ついさっき帰って来たばかりです ( - | - ; )

まあ私が奈々さんのアルバム（去年の）を買ったせいってのもあるんですが（笑）（笑い事じゃねえ！ 結局おまえのせいじゃねえか！）

さて、そろそろ最終決戦の終盤を考え始めなければ。まだ序盤ぐらいしか考えて無くて（ ^ | ^ ; ）（おい！）

それでは感想待ってまーす



## 第80話 アマケン大パニック 後編

今、宇田海の世のため人のために作ったウイルス誘引装置は、世界と人との混乱をもたらしており、その装置をキャンサー・バブルのもとにある。その使い方をまんまとキャンサーの思惑道理に教えてしまった宇田海。そしてその装置を壊すべく、キャンサー・バブルごと攻撃しようとしているロックマン。

『構う事ねエ！ キャンサー・バブルごと装置をぶっ壊せ！』

「バトルカード！ プレデー　　っ！？　　うわあああ！！」

プレデーションさせようとした刹那、キャンサー・バブルは装置のダイヤルを回し、誘引することが出来る電波の強さを強めた。その効果によりロックマンのもとに大量のウイルスが押し寄せる。

押し寄せた後、ロックマンの姿はない。ウイルスの波に流されたのである。宙にはプレデーションするはずだったカードが一枚舞っている。

『カーツカツカツカ！　これは使えるブク！』

「はあ！」

大量のウイルスを何とか左手をソードに変え、デリートする。その後距離を詰めるためにジャンプするが

『うりゃあー！』

キャンサー・バブルがダイヤルを弄ると、空中にいるロックマンの頭上に大量のウィルスが押し掛かってくる。その重さに耐え切れる事が出来ず、ロックマンは地面に叩きつけられる。

『クーツクツクツク！ これは最強の地球侵略兵器ブク！』

「そんな！ 世のため人のためになる筈の僕の発明が」

装置というものは便利であればあるほど使い方を間違えるととんでもない事が起きる。今まさにその現状だ。宇田海の装置はFM星人にとって侵略へ気になりつつある。

その頃街では

五陽田警部率いるサテラポリスは、宇田海の装置のせいで街に蔓延るウィルスをウィルスバキュームで吸い込んでいる。

街の人々は既に非難した後で、この辺りにはサテラポリス以外誰も居ない。

「どうしたあ？ 電波ウイルスが全然減って無いぞ！」

「駄目だ、五陽田！ 吸っても吸ってもきりがない！」

「くっ」

五陽田警部はライセンスによる一言を聞いて、悔しがるように奥歯を噛み締めた。

「ショックノート！」

すると大量の音符と共にその声が五陽田警部には微かだが聞こえた。さすがに音符までは見えなかったが。その声が聞こえた方向、1つの電磁波を帯びているビルに視線をやる。

他のサテラポリスの職員には聞こえていないようだった。

「ショックノート！」

ウェーブロードの上ではその声の主、ハーブ・ノートが数十体いたウイルスをデリートしていた。

そこ等中に居たウイルスを一通りデリートした後、ウェーブロードを駆けてある場所に向かっていく。

「…ん？ 五陽田！ 正面のウイルスの数が急激に減ったぞ！」

「何い？ 何だか分からんが、突撃い！」

「はあああ！」

『うりゃあ！』

「っ！？ うわあああああ！！！」

ロックマンが左手をフリーズナックルに変え、キャンサー・バブルに殴りかかるうとした刹那、目の前からウィルスの大群に流され阻止されてしまった。

キャンサー・バブルが自分を攻撃から守るためにダイヤルを回したのだ。そうになると、少し厄介だ。なんせキャンサー・バブルに攻撃を加えようとすると、全てウィルスに防がれてしまうのだから。

『イエーイ！ これさえあればアンドロメダの鍵を一杯にすること

も容易いブク！ いや、これさえあれば地球滅亡も容易いブク！』

「そんなぁ……………」

「くっ…！」

ロックマンはウィルスとウィルスの間に挟まれ出られなくなっている。

『つらァ！』

更に追い討ちを掛けるように頭上にウィルスを出現させ、ウィルスの雨を降らす。

『ロックマン！ ウィルスの闇に沈むがいいブク！』

「ショックノート！」

『ん？』

すると、ロックマンを埋め尽くしていたウィルスが、その声と共に全てデリートされていく。

「……………」

ロックマンが気づいたときには既にウィルスに姿は無かった。代わりに左隣にハーブ・ノートが現れた。

『ハーブ・ノートか。まとめてやっつけてやるブク！』

「ありがとう、ハーブ・ノート！」

「こいつねえ、悪さをしてるのは？」

「うん」

2人の顔は笑顔になっている。この絶望的状态で仲間が増えたからだ。仲間が一人いるだけで十分案視するのだ。

「スターブレイク！ ロックマン！ アイスペガサス！」

スターブレイクしてアイスペガサスの姿へとなる。

『無駄ブク！』

キャンサー・バブルが装置をロックマン達の方へ向けると、キャンサー・バブルの方からウィルス達が押し寄せてきた。

それをロックマンは空中へ、ハーブ・ノートは横へと避ける。

「アイススラッシュ！」

そして空中から氷の塊を放つ。氷の塊はウィルス達の中央の地面にあたると、地面が侵食するように氷の地面が広がり、ウィルスたちを凍らせて氷の閉じ込める。

「ショックノート！」

そしてその氷に閉じ込められたウィルスにショックノートで止めをさした。

『オーラオーラオーラア!』

更にキャンサー・バブルはダイヤルを弄ってウィルスを出現させる。ウィルスたちは2人の電波人間を困んで動けなくする。

「くっ!」

「そんな!」

『まずいわよオ!』

『しっかりしろ!』

『ブククククク! ロックマン、ハーブ・ノート! そして裏切り者のウォーロックにハーブよ! お前達ともこれでお別れだブク!』

「くっ!」

『さあ、電波ウィルスの闇に沈むがいいブク!』

装置のダイヤルに手を掛ける。良く見るとその装置は電気が生じている。そしてそのダイヤルを回した瞬間

スポンツ!

と、何かキレイに抜けるような音がした。手には……装置からはずれたダイヤルが…。

『ブク?』

ボカンッ!

装置を覗き込んだ刹那、その装置は黒い煙を上げて爆発。勿論黒い煙はキャンサー・バブルの顔を巻き込んだ。

『ブークー?』

何が起きたのか分っていない。

ブーン

『メット、メット、メット』

何かの音と共にウィルス達はキャンサー・バブルの前を横切りこの場を立ち去っていく。どうやら装置が壊れた事により誘引電波の影響がなくなったようだ。

『あゝ…おい……何処行くブク? あ』

去っていくウィルス達に尋ねるが答えない。顔を上げると眼前には敵の2人が腰に手を当ててこっちを見ている。

『あの…えっと……その…』

もの凄いい小聲、聞こえるか聞こえないかぐらいの声で呟く。

『それは…チクシヨオー!!!』



目に涙を浮かべ、半泣きの状態で周波数を変えてこの場から逃げるように立ち去った。

「ふう」

「じゃあ、私ようがあるから」

「うん」

ハープ・ノートも周波数変えてこの場から立ち去った。

「あーあはあは　せつかく作った僕の装置が……僕の装置が……」

泣き声を上げて装置を両手に載せている宇田海。装置はプシュー、と音と煙を上げている。

そこへファスナー直し機から開放された天地は宇田海へ近寄っていき、慰めの言葉でも掛けてやるのだろう

「また作ればいい……いや、ていうか……もう作るな！」

「あええ？」

……訂正しよう。慰めの言葉ではなく、作るなと一喝。あれほどの騒ぎを起こしたのだ、逆に作れと言う方がおかしい。

「捕獲装置と消滅装置が完成するまでは、誘引装置の政策は禁止だ  
！」

「そんなあ……」

「そんなあ、じゃない！ まったくもう！」

…考えてみれば、普通先に捕獲か消滅のどちらか先ではないだろうか。ただ呼び寄せるだけの装置など、ある意味を敵を手助けしてるとしか思えない。

「うう……」

「御用だ御用だ！」

「うう！？」

「っ！？」

ロックマンにとって聞き覚えがある声が聞こえた。2人にとってもこの声は何か嫌な事しか起きない気がした。

すると、五陽田警部と他数名が部屋の入り口から入ってきた。

「この騒ぎの黒幕、御用だ。お前の仕業か！？」

とロックマンを指を差す。何故必ず最初にロックマンを疑うのだろうか…。

「ぼ、僕は違うよ…！」

「じゃあ、誰だっただ？」

口が悪い不良のような言い方、お前以外誰がいると言いたげな目を

ロッキマンに向けている。

「あ、あのお……」

左手をゆっくりと上げる宇田海。全員はその方向に視線を向ける。

「僕です」

それを聞いた五陽田警部はタタツ、と宇田海のもとへ近寄った。

「お前が黒幕か！」

「すみません、警部さん！ 宇田海に悪気があったわけじゃないんです」

と代わりに天地が五陽田警部に頭を下げる。

「それどころか世のため人のために電波ウィルスを退治する新発明をしようとして……」

「新発明だと？」

「それが少し暴走してしまって……」

「何がほんの少しだあ……！！！！」

「「ひいっ！！」」

五陽田警部の一喝で2人は縮こまる。だが、五陽田警部は一喝いれたにも関わらず、どこことなく笑顔だ。否、笑顔と言うか何かを企ん

でいる顔だ。

「よーし、そういうことなら詳しい話はサテラポリスの技術部でたっぷりと聞かせてもらおうか」

「「はあ…?」「」

そして次の日 アマケン

あの騒ぎの次の日、スバルと天地は外の芝生で座っている。

「あの後こつてり絞られたんだが…サテラポリスから電波ウィルス退治用装置の依頼をされたんだよ」

サテラポリス 科学部

「世のため人のために発明するぞ！」

カンカンカンッ！

ある四角い箱型の鉄のような物にネジをドライバーで回し、その後トンカチでそれを叩く。…何が出来るのだ折るか

元に戻る

「宇田海の奴、張り切っちゃってさ」

そう言ってる天地はどこことなく笑顔だ。

「それで僕のトランサー、まだ直ってないんだ」

『まあ俺はこっちでも良いけどよ』

ウォーロックは結構ウェーブスキャナーを気に入っているようだ。

そして

「目指すは発明大王です！」

と拳を高く挙げて叫ぶ宇田海。周りからみたら「何やってんだ？」というよつな言葉が帰ってきそつな状況だったとき。

第80話 アマケン大パニック 後編（後書き）

昨日は更新できなくてすみません（<|>）

昨日は勉強と久々に漫画（最近大人買いした）を読んだので更新しませんでした。それにしても……1巻からなくて6巻から最新巻（11巻）はあるってどういふことなんだよ……何で本屋なのに置いてないのよ！（それでも6巻から11巻まで買った奴）

それにしても11巻は…特装版を買わなきゃよかった……税込み990円って殆ど1000円じゃん（-|-;-）  
単行本（普通）は税込み440円ぐらいなのに…もうお金ないよ！

あ、話逸れましたね。何にしてもなんかすみませんm（|）m

それでは（にしても990円は高いよ……）

第81話 リブラ・バランス崩壊 前編（前書き）

なんか描写やら表現やら意味のわからないことだらけだ。てか、眠くて何かいてるか分かりません…（――…）

## 第81話 リブラ・バランス崩壊 前編

### テレビ局

皆さんは覚えているだろうか。あのFM星人リブラもとい、ラブリイ・バランスが“ラブリイ・バランスの選んでゲット!”という番組の司会をしていた事を。

その番組はいつものように今日も公開収録をやっている。

『貴様に選択の自由を与えましょう! A、ウナギ。B、アナゴ。さあ、答えはA、Bどっちだ!?!』

と観客席の方に指を差す。

だが、その観客席には殆ど人が居らずガラガラの状態だ。その数人は、話し合っている人も居れば、昼食であろうご飯を食べている人もいる。他にも座席に寝転がっている少年やサッカーボールでヘディングの練習をしている少年もいる。そんな感じで誰もこの収録を見に来たわけではなく、ただ休憩がてら座って好き勝手やっているだけである。

つまり、それ程この番組の人氣が落ちたということだ。

『(地球侵略日記：地球人は熱しやすく冷めやすい。その態度は分かりやすい) さあさあ、盛り上がっていきましょう! さあ答えはどっち!?!』

心の中で日記を書いているかのように呟く。そして、反応の薄い、



いや寧ろ反応のないこの会場を盛り上げようと声を張る。すると

ドカーーン！

『ウオ！？』

いきなりに顔面にサッカーボールがクリーンヒット。その反動で後ろに大の字に倒れる。

「あ、ごめん」

と素っ気無く誤る少年。先程ヘディングしていた少年だ。少年はボールを取って客席の方に戻っていく。すると

ドォーン、ドン！ ドゴォーン！！

と後ろにある大きな天秤がベキツと折れたような姿になり、スタジオのセットが崩壊していく。勿論リブラは先程のボールのせいで気絶していて動かない。そんな中、セットは完全に崩壊して無残な姿になってしまった…。

スバル宅      リビング

お昼頃：この時間なら毎週、母親あかねは“ラブリー・バランスの選んでゲット！”を見ている……はずだった。見えていると思っていた番組と違う番組を見ている。

スバルは毎週みているはずの番組を気になって質問してみることにする。

「いつものクイズ番組は見ないの？」

リビングに座っているあかねはテレビを見ながらこう答える。

「ああ、あれね」

「あれねって。あんなに毎週見てたのに」

「でもこっちの方がおもしろいから」

「そうなんだ」

つまり、あの番組の刺激に飽きたので違う刺激の番組を見ているということだ。まあテレビではよくあることだ。いくらおもしろいギャグを使う芸人が居たとしても、だが、同じギャグを何度も使っていたとしたら見ている人は飽きてしまう。一時期は流行っても、直

ぐに忘れられてしまう。それが芸能界の世界なので当然といえば当然なのだが。

「うわっ！ お風呂場のカビが擦らずに落ちた！」

目を凝らして画面に食いつくように見るあかね。昼間というか朝の10時くらいにやりそうな裏技紹介の番組を見ているようである。

そんなあかねはほっといて、スバルは台所へ足を進める。

「早速注文、注文」

……ショッピング系の番組だったようだ。リモコンで何かを注文しようとしている。

スバルは台所でいつものようにコーヒーを自分のマグカップに注いでいる。

「大変だなあ、タレントさんって」

『タレント？ 忘れたのか？ あいつはFM星人のリブラだぜ』

「あ、そうだった」

コーヒーを注ぎ終わってコーヒーが入った容器を横に置く。

『これをきっかけに地球侵略を再開するかもなア』

「いやな事言わないでよ」

テレビ局      リブラの楽屋

リブラと番組の監督が向かい合って楽屋の中のテーブルを挟んで低い椅子に座っている。

『前回の放送で打ち切りですか？』

リブラの声が楽屋内に響く。結構、中は広いのだ。

「まあ、何ていうか……いろいろあつてねえ。急な話で悪いねえ」

監督は背もたれに背中をまかせ、大きな態度を取って軽い感じで喋っている。まるで早く出て行ってくれといわんばかりの態度だ。

すると、楽屋のドアがガチャツと開いた。

「「「「おはよう御座います！」「「「「

高校生位の少女達4人が楽屋の中へ入ってくる。

「おっは〜！」

挨拶を返すように彼女たちに手を振る監督。

そしてリブラは彼女たちと入れ替わるかのように楽屋の外へ。

「また何かあったらお願いするから。これいつものロケ弁の残り」

『ど、どうも…』

ドアの前でロケ弁の残りが入った紙袋を手渡されたので受け取る。

「じゃあ」

と一言言つと、監督は楽屋の中に入りドアをバタンツと閉める。

すると、一度開いた。

「そつそつ」

と言って、ドアの前に張られてあった「ラブリィ・バランス」の張り紙をビリッと取って直ぐに締めた。これで完全にお役ごめんということのようにだ。

『（地球人にはたてまえと本音があるクビならクビとはつきり言うてくれた方がスッキリする！）』

リブラは燃えるゴミのゴミ箱に自分が今ま着用していたオレンジ色の上着を脱ぎ捨てた。まるで怒りをぶつけるように放り投げた。

『（視聴率のいい頃は高級料亭の幕の内弁当だったなあ……）』

と手に持っている紙袋の中を覗き込む。中にはカップ麺ばかりが入っている。昔のように高級弁当の面影は何処にもなかった……。

リブラはテレビ局を後にして、ブラブラと歩いて帰ることにした。

『はあく、やっぱり……（A、ロケ弁を持ち帰り過ぎたのがいけなかったのか）』

心の中に潜むリブラの天秤は右へと傾く。すると、外界のリブラの体が歩きながら右に少し傾く。

『（B、いや、あれは残り物だったから問題なし）』

今度は右が上がり、逆に左の天秤が傾く。体も左へ傾く。

『（だとしたら、A、カラオケでディレクターより良い点を取ったから）』

更に右へ傾く。体も右へ。

『（B、そんな事で起こす人ではない！）』

今度は左へ。

『（ならば、A、収録中にズボンのチャックが開いてたからか）』

右へ。

『(B、あれでNG大賞を貰えたから問題ない！ 馬鹿馬鹿しい！)』

左へ天秤が傾いた瞬間、リブラは狂ったように暴れだした。そして一瞬リブラが2体に分かれたかのように見えた。しかし、直ぐに1人に戻ったようにも見えた。すると、外界の体の額に雨水の一滴のような水野マークがついている。

『はっ、あれかもしれない！』

すると、懐からウェーブスキャナーを取り出し、操作し始める。

『 月×日、電車に乗り遅れて収録が遅れる。あるいは 月×日、収録中に鼻毛が出ている事に気づく』

これは全て口に出している。つまり、周りに沢山の通行客が集まっている。しかも、自分は足を止めて大きな声で吠えている。これで人が集まらないほうがおかしい。

『(はたまたこれか！ 月×日、ボーツとしていてファンと握手をしなかったから。まさかこれか！？ 月×日、内緒で営業をした。ばれたか！？ そうだこれに違いない！)』

といつもとは違い、狂ったように暴走するリブラ。すると

『だまれ！』

とリブラの声が。でも先程と雰囲気が違う。リブラが……2  
体いる。

『だまれ？ そんな言い方はないだろう！』

額に雨水マークのリブラが。

『こんなくだらない日記なんかつけやがって！』

今度は額に炎のマークがついたリブラが。

仮に水（A）の方を<sup>マイナス</sup>-、炎（B）の方を<sup>プラス</sup>+と呼んでおこう。

-と+のリブラが体を操って喧嘩をしている。しかし、リブラは2  
体でも体は1つ。つまり、周りの人間から見たら一人二役している  
ように見えるのだ。

『くだらないだと！？』

『ああ、お前のマイナストークには疲れた！ もっと前を見る！』

『お前こそ、前ばかり見て失敗を省みない！ だからロックマンに  
負けてばかりではないか！』

よく見たら、リブラは大勢の人に囲まれている。周りから見たらど  
う見ても一人で何役もこなす芸をしているおじさんにしか見えない。

『俺一人の責任にする気か！？ この後ろ向き野郎オ！』

すると+が右ストレートを繰り出した。



『この調達猛進野郎！』

対する - は左ストレートを繰り出す。

そして互いのパンチは右は左頬に左は右頬にクリーンヒット。クロスカウンターに見えなくもない。だが、周りから見たら「両手で自分の両頬を殴って何がしたいんだ」という疑問しか浮かんでこないだろう。それ程おかしな光景にんまっているのだ。

中では激しい一発を耐え切った+が勝利したようだ。- が+の中へ吸い込まれていく。

そしてこう一言。

『Bだ。……さて、帰るか』

と言って地面に置いていた紙袋を持ち、再び歩き出す。集まってきた人たちは、リブラが行く道を開けてマジマジと見るのだった。

第81話 リブラ・バランス崩壊 前編（後書き）

めっちゃ表現難しい……。無理やで、私こんな技術ないで…（な  
んで関西弁？）

昨日書かなかったからだろうか、すごい駄文になってグダグダにな  
っている気が…それとも眠いからか。どちらにせよ、駄文ですみま  
せん。

くそっ！ リブラ書きにくいんだよ！（何故切れる？）

あ、活動報告の方に書きましたが、これから学校やら勉強やらで忙  
しくなりそうなんで二日か三日に一回の更新になるかもです。まあ  
昨日はビデオデッキを修理してたんで更新しなかったんですが…。

## 第82話 リブラ・バランス崩壊 後編

### FM星人秘密基地

全員物質変換した人間の姿でいつもものように何かを食べている。  
…  
…カップ麺のようなものを食べているようだ。

『豚骨ラーメン最高お！』

オックスはラーメンを食べて感激のあまり声を上げる。

『俺はそぼくな醤油ラーメンッ』

次にウルフ。なにやらご機嫌なようだ。

『これは齒の弱い余にも食べられるぞい』

左手にカップ麺（塩味）を、右手に箸を持っているクラウンが言う。

『この汁うめエ！』

とキャンサーがカップ麺の汁を飲み干し、机に勢いよく置く。そのラーメンには“カニミソラーメン”と書かれている…。

『地球人は冷酷だ。人気のあつたときは、今日はうな重…明日は幕の内。人気が落ちればカップ麺。…貴様に選択の自由を与えましよう！ ……いつも言っている彼には選択の自由はなかったわけだ。A、クビ。B、クビ』

席を立ち、テレビを見ながら指を一本ずつ立てて言うオヒュカス。

確かにリブラは、選択の自由を与える前にクビになっている。選択といわれるものがなかったのだ。…それが芸能界というものだ。人氣がなくなると直ぐに仕事がなくなる。まったく脆いものだ。

『リブラがクビィ!?!』

『じゃあ明日から弁当なし!?!』

『……驚くところはそこなのか?』

オヒュカスは驚くところが少しズレているオックスをしかめっ面で睨んだ。

その頃リブラは

あれから+は帰ろうとはせず、ある場所へと来ていた。その場所の近くには大きなガスタンクが幾つもある。

『番組打ち切り大いに結構！ 人間をリサーチ……回りくどいやり方は御免だ！ 電波変換！ リブラ オン・エア！！』

リブラは前にウェーブスキャナーを出し、物質変換した育田の姿から電波変換してリブラ・バランスへとなる。だが、少しだけいつもと違った。いつもは両方の天秤に炎と水が載っているのだが、今回は左の炎だけしか載っていなかった。それと腹の少し下の部分に、物質変換時に見られた額にあった炎のマークがそこについていた。

そしてリブラ・バランスはガスタンクの前に立ち

『フレイムウエイト！』

とそのガスタンクに向かって炎の塊を放つ。

ドカンッ、ドカンッ、ドカンッ！！

幾つもの炎を放ち、小さな爆発を何度も起こさせる。

今はまだ大丈夫だが、もしこの炎がガスタンクの中のガスに引火したら途轍もない大きな爆発を起きるかもしれない。そうになると、大規模に渡って被害が及ぶ。

それを止めるべく、ロックマンが周波数を変換させウェーブロードに現れた。

『俺の予想、あたったな』

「…リブラ・バランス……」

頷いて、今にも爆発させそうな犯人の名を呟いた。

『泣け！ 喚け！ 恐怖を感じるオ！ 負のエネルギーが我々のか  
てとなる！』

下では炎が円状になっている場所がある。その中心には炎に囲まれ  
るようにリブラ・バランスが立っている。

『フツハツハハハハ！』

「止めるんだ、リブラ・バランス！」

リブラ・バランスが高笑いをしていると、上のウェーブロードに  
立っているロックマンが言う。

『ん……来たか、ロックマン』

『番組打ち切りの八つ当たりかア？』

挑発するようにウォーロックが言う。

『フン、タレント業？ くだらん！ オレの仕事は地球人を恐怖に  
陥れることだア！ フレームウエイト！』

「バトルカード！ プレデーション！ ネバーレイン！」

そのカードをプレデーションさせた瞬間、黒い雲が一瞬だけ出現し

雨を降らせた。刹那、ロックマンに向かってきていた炎はその雨に沈下された。

「ロックバスター！」

そして一発ロックバスターを放つ。

『ツ！？ ウオオオオオオオオ！！』

その攻撃はリブラ・バランスの腹に直撃し、リブラ・バランスは吹っ飛んでいく。

すると、吹っ飛んでいく途中、空中で腹の下にある炎にマークが水へと替わり、天秤に載っていた左の炎も消えて、代わりに右に小さく渦巻く水が現れる。

『ぐぐウ！！』

そして背中から地面へと着地する。

『く……ん？ ここは……？』

その後、立ち上がりあたりを見回す。だが少し様子が変わる。まるで自分の記憶が抜け落ちたかのように、何故ここに立っているのかわからないようだ。

すると、円のようにして囲んでいた炎は徐々にリブラ・バランスのを閉じ込めるように近づいてきている。直ぐに後ろにはガスタンクがあり、これに引火したら大変な事になる。

『スバル、急げ!』

「うん! バトルカード」

『アクアウエイト!』

ボン、プシューッ!

「えっ!?!」

ロックマンが炎を消そうとワイドウエーブのカードを出したが、使う意味がなくなった。リブラ・バランスが、自ら出現させたはずの炎を、水を炎と同じく自分を囲むように発生させ、沈下させたからだ。

辺りには沈下させた時に発生した白い蒸発した水蒸気が視界を悪くする。

『…ッ!? ロ、ロックマン!? くっ!』

水蒸気が晴れるとリブラ・バランスの姿が見えた。だが直ぐに、逃げるように周波数を変えていった。

「……………」



時は進んで      コダマタウン川原

リブラの - はあれから逃げ切って育田の姿に物質変換して土手に座っていた。

少し後ろにある道では犬散歩、ジョギングしている人たちの姿がある。下の川岸では子供が野球をしている。だが野球と言っても本格的な試合のようなものではなく、バットとボールで遊ぶ程度のものだ。

『……テレビ局を後にしたところまでは覚えているのだが、その後の記憶が全く無い……気がつくロックマンと戦っていた……。どうなっているんだ…?』

リブラの額には水のマークがある。つまり先程までの+が行動していた時の記憶が全く無いのだ。ある事からこの2人は入れ替わるのだろう。

カキーン!

「「あ、危ない!」」

すると、何処からからボールが思いつきり飛ばされる音と子供2人の声が聞こえてきた。

『ん？ ツー！』

リブラが気づいたときには既にボールは目の前にあった。

ゴンッ！

『ぐわア！』

ボールは見事に顔に直撃。ストライク 否、ここはホームランとでも言うべきか。デッドボール

リブラは当たった反動で後ろに倒れこむ。近くには先程直撃したボールが転がる。

「大丈夫ですかーあ？」

「救急車！ 救急車！」

一人はリブラを、一人は救急車を呼んだ。

『ん……んん』

リブラは気がついた。だが、額にあった水のマークは炎のマークへと変わる。

『…ここは？ うッ』

直撃したボールの跡が残っている顔を起こし、辺りを見回す。する

と、前に二人の子供の姿があった。一人はゴンタ、一人はキザマロ。

『（…なんだ!?!）』

リブラの顔をマジマジと見ている2人。

「…あつ！ ラブリィ・バランス！」

『ギクツ！』

2人は思いっきりリブラに指差し言う。そして更にキザマロはこう言う。

「貴様に選択の自由を与えましょう！」

「テレビ見えました！」

『……ウ』

リブラは2人に言葉を返せなくなってしまふ。そんな2人はリブラのことをジーツと見ている。

「…じ…」

『……ゴクツ』

あまりにも緊張感がある空気。リブラにとってはバレるかバレないかの瀬戸際だ。

「…はあ〜」

と2人は暫くして溜息をつく。

「な分けないか」

「他人の空似です」

2人はそう言って落ち込んだ。これが本人とも知らずに…。

『そ、そうですッ。人違いですッ。失礼』

リブラはそう言って誤魔化すと、2人に背を向け、顔を抑えながら歩き出す。

『いたた…いつの間に…？（確か、俺はロックマンと戦っていたはず……なのに、気づくと川原にいた）』

やはり、あの2人はある衝撃を受けると入れ替わり、活動している時の記憶は残るが、活動していない時の記憶は残らないようだ。

## ラーメン屋

『ころ玉蕎麦一つ』

リブラはいつものようにラーメン屋でころ玉蕎麦を頼んでいた。

ころ玉蕎麦が自分の目の前に出てくる。因みにリブラは左手にウェーブスキャナーを持っている。画面には「家族の医学 躁鬱病、二重人格」と表示されている。

『おそらく、人間で言う二重人格症と言うものだろう』

暫くして、リブラはお金を払って店をあとにして歩いてく。すると、店の店長と思われる方の「毎度どうも！」と言う声が聞こえた。

ゴンツ

足元に違和感を感じた。何かを踏んでしまったようだ。

『ん？』

「グルルルルル

」

足元には黒色の犬が、そして犬の尻尾を自分の足踏んでいる。

『あア……………！』

リブラは流石にまずいと足をそつと退かした。だが、犬の怒りは収まるはずもなく

『うウ…ウワアアアアアアアアアアアアアア！！』

「ワン、ワン、ワン、ワンッ！！！」

手を前に出して、走って逃げていくリブラを追いかけた。勿論リブラに復讐するために。

ガァブウツ！！

『ツ！！！？　いッてエエエエエエエエ！！』

尻を、名も知らない犬に噛まれた。途轍もない痛みが走る。

その衝撃で+から-へと替わった。

『ドオオオオオオオオオオ！！　（地球侵略日記。　月×日。我々の敵である青ライオンよりも身近な所に危険はある。この星の犬は恐ろしい…）』

と心の中で日記を書くように呟く。

暫くして

暫くして追いかける犬を撒き、リブラは今本屋の中におり、ある本をジッと立って読んでいる。お金がないので立ち読みをして居るのだらう。本屋を図書館のように扱っている。

『（地球侵略日記。私は疲れている。人間で言う病気という奴だ。私の体の中には二つの人格が存在する元々一つだったものが、別れてしまったようだ）』

「家族の医学」という本の、「二重人格症」に関するページを読んでいる。先程+がウエーブスキャナーで読んだものと同じものようである。

『二重人格症……か…（病気になって改めた。私は地球侵略に向いていないと思う）』

そう心で呟くと、本を元の場所に戻し、出口へと向かって足を進める。

すると、出口のドアに貼つてあるチラシが視界に飛び込んだ。チラシには「銀河Milky Way 賞Prize」と書かれている

『ん？ 銀河賞？ 犬、猫、人間、宇宙人でも大歓迎……宇宙人でも大歓迎、か。…フッ』

リブラは何かを思いついたかのように少し笑った。

その後、本屋を後にしてウェーブスキャナーでその事について調べ始める。リブラはその画面だけを見ながら道を歩いている。

『銀河賞、応募要項、か……うわッ！』

歩いていると視界ががらりと変わった。先程まで見ていた景色が上へと移動した。

つまりリブラは落ちたのだ。しかも昔の古いギャグのような感じでマンホールに落ちたのだ。ちゃんと前を見ていなかったために。

『いたた……ハッ！ また替わったか？ ……ん？』

隣に落ちているウェーブスキャナーに目をやる。すると、そこには「御応募ありがとうございます」と表示されていた。



第82話 リブラ・バランス崩壊 後編（後書き）

ふう。やっと書けたあ（^ー^；）

どうも、昨日書けませんでした。勉強してたもんで……（ノ、）  
この頃全然他の方の小説が読めてない……。二週間程度読めていない  
なあ……今日読めるだけ読もうかな。

あ、そう言えば知ってる人は知っているとありますが昨日、ハヤ  
のごとく！ のハムスター（あむ）が誕生日でしたね。畑さんの  
Twitter書いてありましたよ。少し遅いですがおめでとう御  
座います（\*^o^\*）（ここで言わんでもいいでしょ！）

それにしても、少しずつ亀になりつつあるなあ……もう少し頑張ら  
ないと、予定がはるかに狂ってしまっ…。

それでは、感想待ってます

### 第83話 宇宙人も悩んでいる 前編

数日後 コダマ出版社

「わ、私の作品が大賞!?!」

リブラの - はいきなり出版社の方の拍手に包まれる。ふかふかのソファーに座っているのにどうも落ち着かない。まず、一体何が起きたのだろう。いきなり出版社の職員の御偉い方々に拍手されながら大賞と告げられているこの状況はなんなのだろう。

「おめでとう御座います!」

一人からお祝いの言葉を貰ったが、自分はまだ応募した覚えはない。……否、思い当たる節はあった。

「(おそらく、もう一人の私を送ったのだろう)」

そう、+がいた。

あの時に+と入れ替わった。+が体を支配しているときに+がやった事、起こった事は+しか記憶することが出来ない。なので+が送っていたとしたら記憶にないのも無理ない。

「拝見させていただきました。地球を侵略に来た宇宙人が異国の文化や風習に戸惑う! 日記風と言うのもおもしろい! まるで貴方は宇宙人かと思うほどのリアリティ!」

一番偉いと思われる男の人がリブラの作品の感想を語っていると、

隣の女性からリブラの作品の原稿が入った茶封筒をそつと渡される。だが、まだ話を止める気配はなかった。

『（正真正銘の宇宙人だが……）』

そつと心でリブラは呟いた。

## ラーメン屋

いつものようにこころ玉蕎麦を注文したりブラ。目の前にいつものように蕎麦が出てくる。

『作家デビュー、か！』

一味唐辛子をパツパツと入れながら一人呟く。そして自分が作家になったときのことを想像し始める。

『…フフフツフフ』

なにやら不気味な笑い声を出しながら想像している。蕎麦の中に一味唐辛子を大量に、否、全部入れてしまっていることに気づかず。

そして、笑みを浮かべているリブラは、紅く染まった蕎麦の麵一口分を口にスルツと入れる。

勿論、からアーーーーい！！　と言って火を噴いた。

すると、その衝撃で - から + へと替わった。まるで特撮ものの怪獣みたいに。

『　くだらん！　何が作家だア！　地球人略だろつがア！』

と言ってプラスは地獄のような熱さ、否、辛さを持っている蕎麦を口に入れた。

そしてもう一度、からアーーーーい！！　と言って火を噴いた。まるでオックス・ファイアのファイアブレスのように。

そして更に + から - へと替わった。

『　黙れ！　私は作家になります！』

そして数日後

リブラはこの前、“家族の医学”を読んだ所と同じ本屋に来ていた。自分の書いた本が本当に売られているかどうか確かめるために。

『（そんなア…これが私の本？）』

表紙は地球を覆うように抱いている強大な、テレビによく出てくる細い体をした宇宙人が描かれていて、至ってシンプルだ。

『“宇宙人も悩んでいる”。 作者：“宇宙人”……そのままではないか』

最もな意見だ。

だが、納得いかないリブラは誰も気づかれないような隅に移動し、出版社にウエーブスキャナーで連絡し問いただそうとする。

『あの、本のタイトルと作者名のことですが…』

『《いいでしょう？ 作品の販売戦略として謎めいた方が売れますからー！》』

との返答。だが、それでも納得できないリブラはさらに追及する。

『はあ、ですが、これで本当に売れるのです』

か？ と言うとした時、後ろ、自分の本が置いてあるほうから声が聞こえてきた。

「“宇宙人”の書いた本だって！」

「おもしろそう！」

そんな声が聞こえてきたため、リブラは後ろへ振り返る。すると、レジの所にその本を持った人の行列が出来ていた。

これを見た瞬間にリブラの“売れるのか”という疑問は消える。自分の目にはその本が売れている姿が見えているのだから。

『（売れてる！）』

少し浮いた気分になる。

更に数日後　スバル達

スバル、3人組、亜夢は学校に向かいながら、リブラ…もとい宇宙人が書いた本について話をしていた。

「ねえ、読んだ、“宇宙人も悩んでいる”？」

「50万部突破です！」

「ミソラちゃんが主演でテレビ化決定だってよぉ！」

委員長、キザマロ、ゴンタの順番で言った。キザマロはいいとして、ゴンタがそんな情報を知っていたは以外だった。

「主人公が地球の文化に馴染めないところがコミカルでおもしろいわぁ」

と委員長の感想。

「宇宙人も悩んでいるんですね。勉強になります」

とキザマロの上手いダジャレ。

「宇宙人も醤油とソースを間違っうなんて、あははははっ！」

と食べ物に関してはやはり覚えてるゴンタ。ということはゴンタはあの本を読んだ事になる。あのゴンタが…本を。

「そんなにおもしろいの？」

と不意にスバルが先頭を歩いていた3人に尋ねる。すると、3人はおかしな言葉を耳にしたかのように不意に止まり、もの凄い速さでスバルを囲んだ。

「もしかして!？」

「まだ読んでないんですかあ!？」

「俺だつて読んでんだぞ!？」

と言葉を繋なぐように尋ねる。

「え…？」

スバルはそこで固まる。3人の勢いに潰されそうになったため言葉がでなかったのだ。すると

「水星さんは読んでるわよね？」

委員長がスバルの隣にいる亜夢に振る。亜夢は少し驚いたが、直ぐにこう答えた。

「私そういうの信じないから読まないことにしてるの。それに、何？ “宇宙人”？ いるわけないじゃん、そんなの」



いるわけない…そう、普通の宇宙人ならいるわけない。この場に  
いる2体の宇宙人と同じFM星人という宇宙人を除いては。

亜夢は先に行くと言って後ろ姿で片手を振り、もう片方のカバンを  
持っている手は、手の甲を肩に当てて不良のような持ち方で4人か  
ら離れていく。世間ではこれをクールと言っらしい。

「…か、かつこいい」

このように2人も言っている。

「どこがよ、逃げただけじゃないの？」

少し怒った感じで委員長は言う。

「（………久々にあんな姿みたな）」

スバルはその時苦笑いをしていたという。

帰宅後 スバル宅

スバルは帰宅して直ぐ自分のベッドに寝転がり、両肘をついて本を読んでいる。“宇宙人も悩んでいる”という本を。本はあかねが持っていたそうなので借りたそう。

『どんな話なんだア？』

気になったのかウォーロックが訊いてくる。

「…主人公は、裏切り者の宇宙人を追いかけて地球に来たけど」

『裏切り者の宇宙人ねエ……』

「人間に取り付いてはみたが、地球の生活に馴染めないんだって」

『…何か、どこかで聞いたことあるような話だなア』

「そう言われてみると……もしかしてウォーロックが書いたの？」

『断じて違う』

即答。まあウォーロックが書いたにしては矛盾している場所が多い。

「だよねえ。こっちは日々、本物の宇宙人と戦ってるから、なんか新鮮味がないんだよなあ」

上向きになり、天井を見ながら呟く。

そして コダマ出版社

「続編ですか？」

先日と同じ出版社の同じ部屋で、リブラと出版社の職員は話をしていた。どうやら続編についての話のようだ。

「はい、読者からのたくさんのお手紙」

リブラと職員達が座っているソファを挟んだ机には、大量のファインレーターが置いてある。

「衣食住、全ての環境はこちらがバックアップします！」

『うーん………』

「頑張りましょう、先生！」

『先生？ ……フ』

リブラの顔は先生という言葉に一気に答えが決まった。答えは  
Yesだ。

という訳で、リブラは早速出版社の上の階の部屋で続編になるもの  
を書いていた。

部屋は想いのほか広く、ソファ、ベッドが2つあり、机にパソコン  
があるホテルのような悪くない部屋だった。

そのパソコンでリブラは続編を書いているのだが、早くの煮詰まっ  
たようだ。先程から手が動いていない。

後ろには先程の職員の一人が見守るように立っている。

『うーん ……（書けない。日記と小説は違う！ 私には無理だ！）  
……ううああアア！』

リブラは頭を思いつきり掻き毟る。

すると、職員が声を掛けてくる。

「お食事にしましょうか？ 和食、洋食、中華、何がいいですか？」

リブラは即答で

「トイレ」

と答える。

そしてトイレの中へ行き、ジャーツと一度水を流し

「A、逃げよう」

と言って周波数を変換させこの出版社から逃げ出した。

第83話 宇宙人も悩んでいる 前編（後書き）

はい、亜夢の少し懐かしの設定を入れてみました、クールを。（  
今まで設定を忘れてた）

……言わせたのは良いけど、かつこいい…のかな？ うん、自分  
で書いたのを読むとまったく分からん（――）

てか、明日の学校の時間割、副教科だけだぁー！（ どうでもいい）

## 第84話 宇宙人も悩んでいる 後編

### ラーメン屋

出版社から逃げ出して、いつものようにおやつがてらを食べるにラーメンでころ玉蕎麦を頼む。目の前にころ玉蕎麦が現れる。

『やはり……私には無理だ……ん？』

ラーメン屋がいつもとは違う事に気づいた。それは、この店にいる客の数がいつもより圧倒的に多かったからだ。いつもは、リブラを合わせて数人しか来ないのだが今日は客の数が比べられないほど多い。強いて言うなら店の外まで行列できるほどだ。

そして、何より違うのが、全員リブラと同じころ玉蕎麦を注文していたのだ。いつもは暇なこの店の店長は今忙しそうにその注文に対応していつている。

「いや〜ん、ここが小説に登場するお店なのねえ〜」

リブラの向かいの席に目をキラキラさせ、ころ玉蕎麦を見ながらくねくねして言っている委員長姿がある。他の4人もここでころ玉蕎麦を注文しているようだ。

「はい、主人公がいつもころ玉蕎麦を食べているお店ですう！ スバル君、感動ですよねえ〜！」

バンツ！

「っ！？ ゴホツゴホツゴホツ！ そ、そうだね…ゴホツゴホツ！」  
むせた。

スバルが麺口に入れた瞬間にキザマロが背中を思いつきり叩き、そのときの衝撃で口に含んだ麺が喉の気管支に入り込もうとしたのだ。それを隣でから見ている変装姿の亜夢は、狙った？と心の中で疑問を抱いている。それ程凄い偶然が起きたのだ。むせさせた本人はスバルに誤りもしない。

「…（って何で私までここに？ ……でも、まあまあ美味しいんじゃない？）」

亜夢は蕎麦を一口食べてから少し正直じゃないことを一言心で呟く。

「ころ玉蕎麦おかわりっ！」

「私も！」

ゴンタに引き続き委員長もおかわりを頼む。

「へーい！ 騒がしくて悪いねえ。…何か、今人気の本に登場する宇宙人がここが好きなんだそうだ」

この店の店長が返事をした後、リブラの許で小声で話す。その宇宙人がリブラとも知らずに。

『…（ “ 月×日。いやな事があってもツルツル屋のころ玉蕎麦を食べると忘れられる” ……私の本のせいだ… ）』



最初の方はリブラが本に載せた一部のようだ。つまり、自分が書いた本のせいでこんなに騒がしくなったという事だ。

#### あるデパートの屋上

リブラは気分を変えて誰も居ないビルの屋上の黄色いベンチに座っていた。そして上を見上げ青空を見ている。

『ここに来ると落ち着く……ん？』

後ろの、屋上入り口のドアがある方がうるさくなったので振り返ってみると、“宇宙人も悩んでいる”の本を持った読者と思われる人たちがやってきていた。

リブラはそれを見て、ズッコケそうになる。

『（ “ 月×日。私はここから見る青空が好きだ。この空の向こう、

我が故郷を思う”（『

と日記に書いていたことを思い出す。

「ここが小説に登場するデパートの屋上ねえ！」

目をキラキラさせ、体をくねくねさせながら委員長が言う。

「112ページですよ、スバル君！」

バンツ！

「感動ですね！」

「…もう帰っていいかな？」

「（私も……）」

キザマロがまたもやスバルを叩いた後、スバルはうんざりした感じ  
で言う。亜夢も同じく心の中で。

「宇宙人が座るベンチはあれかあ！」

とゴンタはリブラが座っているベンチの方向に指を差す。

リブラはそれを見て体が竦む。

## テレビ局

そして数分後、クビになるまで毎週訪れていたテレビ局に周波数を変えてやって来た。すると、眼前にあの本の読者と思われる人たちの姿が。

『ツ！？（ここもかつ！）』

「人間の姿に良く来てたんですって！」

先程と同じ動きの委員長。

「46ページですよ、スバル君！」

ベシッ！

少し音は変わったが、やはりスバルの背中を叩く。

「……………帰らせてください」

落ち込みながらスバルが言う。

「（このままスタジオに逃げ込もうか……）」

明らかに逃げようとしている考えの亜夢。

## 温泉

今度は“YOU・TOPIA”という名前の温泉に来ていた。

『……ここもか』

温泉につかり、頭にタオルを両側に垂れるように、顔を隠すように載せているリブラはお約束のように呟く。

「宇宙人って綺麗好きなんだな！」

ゴンタが言う。

ここは男湯なので男子3人が今ここにいる。言うまでもなく委員長達は女湯にいる。…亜夢は変装がバレるのではないだろうか。

「56ページですよ、スバル君！」

ベシッ！

眼鏡を掛けていないキザマロは、お約束のようにスバルの背中を叩く。男湯中にその音は響く。服を着ていないので痛みが先ほどまでより直に伝わり、もの凄く…痛い。

「…帰りたいよお……」

溜息混じりで顔を伏せて呟く。だが、その願いは叶わない。

『（地球人として生活するのは私には無理だ。地球侵略の方がまだマシだ）』

先日とは逆の考えになってしまった。こんないつもとは違う落ち着かない生活なんて彼には耐えられないのだろう。

ガラガラッ

「ラブリー・バランスさん、いらっしやいませんか？」

すると、入り口の引き戸が開いてマイクを持った男の人と、TVカメラを持った人が入ってきた。勿論温泉なので裸でタオルを巻いている。

「宇宙人も悩んでいる」の作者という噂ですが！

ええ！

温泉中に驚きの声が響く。

『(バレた!?)』

「ラブリー・バランスが作者!？」

「どこ、どこに居るんですかあ!？」

ゴンタとキザマロが周りを見渡して捜し始める。他の客も集まって、どこだどこだ、と捜し始める。

『(A、逃げよう)』

頭にタオルを載せたままにして、客達の間を歩いていこうとした刹那

ツルツ!

『うお!?!』

ドゥオン!

と大の字で仰向けに倒れた。客全員の注目はそこに集中する。タオルは頭から落ち、顔が丸見えになる。

「ラブリイ。バランス！」

ゴンタとキザマロが指を差して真っ先に口にする。

すると、先程の衝撃で、- から+に替わっていた。ウガァー、と立ち上がる。

『B、地球侵略！ 電波変換！ リブラ オン・エアァァ！』

うわぁぁー！！

リブラは電波変換し、天井を突き破り外へ出る。そして、先日事件を起こした公園近くのガスタンクの場所に移動する。

『リブラスイング！』

体を回転させてガスタンクにぶつかろうとする。

「ロックバスター！」

だが、直ぐにロックマンの攻撃に阻止された。回転はその時点で静止する。

『来たな、ロックマン！ ヘビーウェイト！』

自分の頭上の少し前大きな分銅を出現させる。

「バトルカード！ プレデーション！ スタンナックル！」

ロックマンは左手を電気属性のナックルを構える。

『リブラスウイング!』

リブラ・バランスは、先程上に出現させた分銅が落ちてくるタイミングを見計らって、自分の体を回転させる。技は見事に分銅に回り、ロックマンの方に向かって勢い良く飛んでいく。

「うおおおおおお!!」

ドンッ!

一瞬、受け止めた。しかし、分銅は止まらず、そのままロックマンを巻き込んでいき、ガスタンクへとぶつかる。ぶつかった部分はクレーターのように凹む。

ぶつかって直ぐ、分銅は消える。技の効果が消えたのだ。一瞬、分銅とガスタンクの間にはさまれたロックマンは、なんとか無事なようだ。

『くっそオ! ん?』

よく見ると、ガスタンクが少し破裂して、ガスがプシューッと漏れている。

「っ!?! しまった、タンクが!」

『天は我を見放さず、ハッ!』

リブラ・バランスは左の天秤に乗っているフレイムウェイトをガスが噴出しているところに向かって飛ばす。



「バトルカード！ プレデーション！ ワイドウェーブ！」

それを防ぐべく、ワイドウェーブを放つ。だが、フレイムウェイトはものともせず、ワイドウェーブの水を弾き、そのまま向かっていく。

「っ！！ うわぁー！」

ギリギリで避けてその場から逃げる。刹那、轟音とともにガスタンクは爆発した。

爆発したときの炎の勢いはリブラ・バランスの所まで届き、体ごと燃える。

『ぐわア あああああア！！ 派手にやり過ぎたか…！！』

爆発した時に発生した燃えているガスタンクの一部がロックマンのところに降り注ぐが、軽々と避けている。

『アクアウエイトがあれば……もはや、これまでか…うおおおおお おおおおオ！！！！』

そうリブラ・バランスが諦めかける、刹那、右の天秤にアクアウエイトが現れた。

『（アクアウエイト！！）』

リブラ・バランスの体を水のウォールが包んだ。

今、+と-は入れ替わっていないのに水の力が使えた。何故だろうか？

『…ッ！ お前か！』

…：… 心の中に潜む-が入れ替わらずにアクアウエイトの力を使い、+を助けたのだ。

『… 久しぶり』

『あア、久しぶり…：… お前の言うとおりでこの様だ』

『私も、あなたの言う事で参りました』

『… 炎と水…：』

『… AとB…：』

『… 2つで1つが丁度いい！！』』

今、心の中で2人が分離して2つの人格になったように、心の中で2人の人格は1つになって1人のリブラへと戻った。

その刹那、腹の炎のマークはいつもの天秤のマークへと変わった。

「ええーい！」

その頃、爆発によって引き起こった炎をワイドウエーブを何度も放ち消化しようとしているロックマン。しかし、炎はまったくおさまる気配がなく、逆に更に勢いを増している。

「焼け石に水だあ！」

『アイスペガサスにスターブレイクしろ！』

「うん。スターブレイク！ ロックマン！ アイスペガサス！」

スターブレイク  
変身後、空に羽ばたき飛び立ち、空中から炎上している場所に見渡せる所まで上昇する。

「SFB！マジシャンズフリーズ！」

全ての炎の真下に大きな魔方陣を出現させ、炎全てを凍らせた氷柱を出現させる。

全てを凍らせた後、ロックマンは変身を解除し地面に着地する。

「リブラ・バランス！」

「……………ここはどうする？ A、退却する。 B、退却する。意見があったな」

旅方の意見があった後、リブラ・バランスは周波数を変換させてこの場から去っていった。

「逃げた……………」

数日後 学校

キーン・コーン・カーン・コーン！

放課後になり、委員長3人組みを先頭とし、その後をスバルと亜夢が会う居ていく。委員長は手に何かの本を持っている。

「主人公の地底人が地球の文化になじめないところがコミカルで面白いわあ！」

「地底人も悩んでいるんですね！ 勉強になります！」

「地底人も麦茶と麺汁を間違えるなんて、あははは！」

何処かで見たとような光景。委員長の手にあるのは“宇宙人も悩んでいる”ではなく、“地底人も悩んでいる”だ。

「宇宙人も悩んでいる”の次は“地底人も悩んでいる”か」

『地球の言葉で二匹目の登場っていうんだろ？』

……言うのだろうか。

「っていうか、次から次へと変わって行くところがちが困っちゃうんだけど？ 大一地底人なんて居るの？」

不意に亜夢が咳くと前の3人はピタツと足を止めた。……何処かで見たような光景だ。次の瞬間、亜夢を囲んだ。

「……いますう！」「」

「っ！？」 ……絶対いなーいい！！」

と亜夢の声はコダマタウン中に響き渡ったという。

否、もしかしたら、宇宙人がいるのだから、地底人だっているかもしれない。もしかしたら、あなたの直ぐそばに……

第84話 宇宙人も悩んでいる 後編（後書き）

はい、何かよくある都市伝説っぽく終わらせてみました。それとスバル君が叫ぶところを亜夢ちゃんに叫んでもらいました（笑）

何だろう…凄いい長い気がする…。一話の半分だけのはずなのに…何故？

…残すは雑談やって最終話まで突っ走るのみですね…。今のところ…もしかしたら、書かないつもりなの46話から49話を書くかも…はい、かってばっかですみませんm(\_\_\_\_\_)m

そういえば、なんだかこの頃「テスト勉強」や「テスト」と言っている方が多いですねえ。中間テストなんですかね？ 因みに私の学校はテスト無いですね。二学期だからかな？ でも、ラッキーって感じですね。(うざい)

い それでは、テストがある人は体を壊さないように頑張ってください！

## 番外編 ちよつとした雑談9

始まりました、クライマックス編前、最後の雑談！ いやあ、もうクライマックスになるのかあ。

まあ、そんな話は置いて、ゲストを呼びましょう。…雑談シリーズに必ず登場している、亜夢ちゃん！ そしてパートナーのジヤスミン！

「……出たくて出てるわけじゃないんだけど…？」

『まあまあ。あ、こんにちは』

そんな事は置いて、次。何だかんだで主人公、スバル君！ ついでにウォーロック！

「何だかんだって…。こんにちは！」

『俺はついでかよ！？』

アイドルじゃなくてアーティスト、ミソラちゃん！ パートナー、ハーブ！

「おはよう御座います！」

『ポロロン、ミソラ、ここは現場と違うんだから普通でいいのよ』？

「あ、そっか。では、改めてこんにちは」

……ハーブ…今ゲームの設定使ったよね？ “ポロロン”って。

『一度使ってみたかったのよねエ…なんでアニメではないのかしら？』

それは……そういう設定だから…かな？ 兎に角、いつものこの3人と3体と私で進めていきましようか。

「で、毎回いろんな意味のわからない事してるけど、今回は何する？」

意味のわからないって……今回は…私が今やっているTwitterの話でも。

「「「「『はあ？』』』」」」

いや、だからTwitterでも

「却下」

「駄目」

『何で俺たちがそんな話聞かなきゃならないんだ』

『無駄ね』

『聞く耳はありません』

「もしかしてネタ切れで他にすることないの？」



うう……じよ、冗談だよ。（本当は亜夢ちゃんのツンデレ集を  
）

「却下！」

え、は、はい？ まだ何にも言っていないよ？

「私には読心術がデフォルトで備わってるのよ」

なっ、ちよっ、そんな設定ないよ！？

「兎に角却下は却下！」

くっ……うん（くそ、感想返信の時に心を読まれたのはそういう  
ことだったのか……じゃあしょうがない。雑談1からずっと忘れら  
れてたあれをやってももらいますか）……じゃあ、歌ってください。

「『『えっ？』『』『』」

「『』……『』『』」

いや、だから歌ってください。あ、コラボでね、ミソラちゃんと亜  
夢ちゃん。

「……いきなり歌えって言われても……」

「ていうか、なんでそんな話になるのよ？」

え？ 言っただけじゃなかったっけ？ 雑談1で、君達が歌うとき、コラボ

はまた今度つて言つたよ、私。

「（……そういえばそんな事言つてた気が……）」

そつだなあ……曲は、歌う声優さん（水樹奈々さんと福圓美里さん）に合わせて、ラジオの“スマイルギャング”で生まれた“プロテイン美里”でも。

「ツ！……！！！！！！！！ ちよつ、それは駄目え！！！！！！」

えっ？ 駄目？ 凄い歌詞が面白いのに。スタッフの悪ふざけ満載の曲（笑）

「てか、何でそれえ！？ あれは本当にスタッフの悪ふざけが混じつてるから！」

「もう、ギャグでもあんな歌、歌えない！！！」

でも、ちゃんとCDは発売されてるじゃないか。立派な曲だよ。ニコ動にだってちゃんとあるんだ

「「言うなああ！！！！」」

「『『『（恐ッ／恐すぎるわ………）』』』」

………わかつたよ（気になる人はググって下さい）。じゃあどうする、曲？

「ベタにどちらかの歌を2人で歌つていうのは？」

うーん、でも何だかなあ……。そうだ、じゃあ私が指示した曲を歌って。

「どんな？」

奈々さんの曲とその他諸々……。

「えっ？ 歌う曲一つじゃないの？」

3曲お願いします。FULLじゃなくて1番だけでいいですから。

「思ったけど、僕らいらんないよね？」

「確かに。省かれてるよな」

『でも私達は』

『亜夢ちゃん達の歌う姿見れるだけで十分だわ』

「……じゃあ僕らはギャラリーってことで」

『あア、でも俺には歌の良さがわからん』

『そりゃあガサツのあんたには分からないわよ』

『あアん？ 何だよ、ハープ。やろっつてののか？』

『そっついう三下の台詞は死亡フラグよ？』

『上等だア！ 表へ出る！』

ああもう、うるさいから静かにしてね？ でないと…クライマックスなのに定番なしにするよ、ウォーロック？

『はア！？ 俺だけエ！？』

うるさい…！！！！

『……分かったよ（くそ、ハープ目、覚えてるよ！）』

たく、ウォーロックはまったく。さて、曲はどうしようかなあ……  
1曲目は奈々さんの「pray」、2曲目は挑戦的な意味を込めて  
放課後 イータイムの「GO!GO!MANIAC」、3曲目は…  
…「ハートウエーブ」で。やっぱりリメイクだからね

「……2曲目のやつはなに？」

「あれって確かあるアニメの軽音楽部の曲……だったよね？」

さて、じゃあ歌ってもらいましょう！

「「人の話聞いてよ！」「」

…ミソラちゃんギター持ってるよね？

「えっ、あ、うん……」

亜夢ちゃん楽器で何が弾ける？

「え………キーボードと少しベースを弾けるぐらい………ってなんで？」

はい、これ2曲目の楽譜と3曲の歌詞。それと亜夢ちゃんキーボードかベース好きなほうを選んで。

「え…じゃあベース…って、まさか演奏しろと？」

Yes!

「はあ！？ 無理だつて！」

大丈夫、これは小説！ 何でもありの世界！ だからきつと成功する！

「（それが成功するかはあんたの手によるんだけども……）」

がんばってね、未来の（スバル君の）お嫁さん

「ツ！！！！？／／／／／」

「あれ？ 2人ともどうしたの？ 熱でもあるの？」

「な、何でもない／／／」

「？」

『（本当に鈍感ねエ……）』

『おい、何であの2人の顔は紅いんだ？』

『（こっちもか……）』

ちゅ、どござー!

「ああ、もう分かったわよ!　いくわよ、ミソラ!」

「OK、亜夢!」

因みに【】をミソラちゃん、「」を亜夢にします。(2曲目は弾いているイメージをしながらお願いします)

「誰に言ってるの?」

スバル君、気にしちゃだめだよ?　それではミュージック・スター  
ト!!!

〽  
〽  
〽

「今は前だけ　見ればいい」

【信じる事を　信じればいい】

「愛も絶望も　羽になり」

【節なる翼へと】

【「蘇れ僕の鼓動」】

〽  
〽  
〽

「暗闇の　月も星も　孤独を嘆くHoly tears」

【 十字架を紡ぎ描こう 「 共に 輝き尽きるまで 「 【

【 破壊のセレナーデ 「 【

「 瓦礫オベラの舞台でも 「

【 「 君が唄えば暁の果てに また羽撃ははたけるはず 「 【

「 僕は今でも 弱いままで 「

【 光の剣を 抜けないでいた 「 【

【 残酷な運命いまを 「 逃げないで 「 【

【 「 凜と生きるために 「 【

「 いつしか涙は明日あすを灯す 「

【 奇跡の太陽に 「 【

「 もう行こう 【 護るものがあるから 「 【

〽  
〽  
〽

2 曲目行くよ〜！ 楽器の準備はOK？ ミュージック・スター

トー！

〽  
〽  
〽

【 やばい 止まらない 止まらない 昼に夜に朝に Singing so loud 】

「好きなことしてるだけだよGirls Go Maniac」

【 あんなメロディ こんなリック 探しいきたいんだもつともつとみんないつしょにね 「Chance chance 願いを Jump jump かがけて Fun Fun 想いを shout shout 伝えよう ミスったら リハつてことにしてもつかい！」 】

）  
）  
）

【 はっ！ 】

）  
）  
）

【 誰も持つてる ハートって言う名の 小宇宙 】

「 ギュと詰まっているよ 喜怒哀楽や 愛 」

【 シュンってなったりワクワクしたり busy 】

「 カオス満載な日々 歌にしちゃおう 【 ぶちまけ合っちゃおう 】 」

【 「 授業中も無意識に 研究する musician ship エアでOK 雰囲気大事 不意に刻むリズム通じあっちゃうビーマイ自由ゆじに エンジョイ 楽しんだもんが勝ち 」 】



【ごめん ゆずれない ゆずらない 縦横斜めSwinging around】

「好きなおと出してるだけだよGirls Go Maniac」

【あんなグルーヴ こんなにバウヴ 試していきたいんだ ずっとずっと息あわせてね 「ChaseChase明日をBreakBreak夢見て FaithFaith強気でShakeShake盛り上がるう 浴びたら わすれられないしよ 喝采！」】

〵  
〵  
〵

はい、流石演奏までできるとは！ ラスト言ってみよう、ミュージック・スタート！

〵  
〵  
〵

【飛び交うシグナル それぞれの今日を乗せて】

「おなじ周波数 重ねあい君と話す」

【迷い ためらいを 振り切り】

「そこにあるはずの道を行こう」

【見上げる 「空は心に 積もる願いの色 描く夢を映し出す」】

「必ず【いつかこの手に触れる明日への地図】」

【強く】

「高く【届くまで】」

【「輝いて」】

うわぁ、凄い、ライブみたい！（行った事無いけど……）

「「ふう、疲れた〜」」

「2人ともお疲れ様！」

『中々良かったじゃねエか』

『あら？ ウォーロックに音楽の良さなんて分かるのかしら？』

『意外ねエ……』

『ほっとけー！』

いやぁ、やっぱりアイドルの2人のコラボは凄いな。

「って、2曲目の奴、早過ぎ。あんなの聴いた事も無いのに歌えるか！ その前に弾けるか！」

とか言っている割には歌えてたし、弾けてたし……聴いた事も無いのにあそこまでいけるのか……す、凄い才能だ。ある意味天才だ…。

「でも、コラボっていいね！ また今度やってみたい！」

「……ミソラがどうしてもって言うならやってあげてもいいわよ？」

素直じゃないなあ。ではそろそろ時間ですので。

次話からは、いよいよクライマックス編です。予定では16話の予定（あくまで予定で、増えるかもしれない減るかもしれません）。内容はアニメとオリジナルを混合しようと思っています。だから、半分アニメで半分オリジナルってことになります。

最後までお付き合い下さいますよう宜しくお願い致します！ それではさようなら

「「さようなら」」

「……また」

『じゃあな…』

『『失礼しまーす』』

第85話 ロックマン対フェニックス・プロミネンス 再び(前書き)

サブタイ微妙…( -\_- ; )

## 第85話 ロックマン対フェニックス・プロミネンス 再び

### ある電波空間

フェニックス・プロミネンス……涼介とフェニックスが電波変換した姿。そのフェニックス・プロミネンスは今、昼間の電波空間を自分の翼を使って飛んでいた。周りを見回しながら。

「……………おい、本当にこの辺にいるのか？」

『あア、俺の能力のがそう言っている』

フェニックスの能力。2つある。1つは電波体が発する電波や、電波変換したときに人間に残った電波体の残留電波を探知する事ができる能力。それがどんなに微弱であってもだ。2つ目はどんなに傷を負っても再生する能力。

先程のフェニックスの言葉からして能力とは前者の方だろう。という事は誰かを探しているのだろう。勿論、電波体に限るが。

『うーん、……………ッ、あそこだ！』

フェニックスは何かを察知し、涼介に指示をする。指示した方向にはビルがある。

「……………誰がいるぞ」

フェニックス・プロミネンスの視界には、緑色の髪をした男か女かわからない顔立ちのウェーブスキャナーのイヤホンをした子供が、

ビルの屋上に座っていた。

「……やあ、来たんだ…フェニックス。いや、フェニックス・プロミネンス」

「っ……」

彼はフェニックスの事知っている。

『久しぶりだな、ジェミニ』

『フン、よくここが分かったな』

すると、彼のウェーブスキャナーから2つ鬼のお面をつけた電波体が現われた。彼、ツカサを洗脳している電波体ジェミニだ。

「（こいつがジェミニか……）」

『俺の能力を忘れたか？』

『……そうだったな』

「ふふ、それより用件は何だい？」

ツカサが笑った後に口を開いた。…彼のその時の笑い方は不気味なものだった。

『そろそろどうにかしないとまずいんじゃないか？』  
地球抹殺

「何故？」

「何故ってお前、何のために地球に来てんだよ？」

涼介はツカサに問う。何故と問いかけてくる意味が分からなくて。

「ふふふ……何のため、か。…そうだね、強いて言うならこれを溜めるにするため、かな」

そう言っつてズボンのポケットから水晶の玉がドラゴンの爪に捕まれたような物を取り出した。

『…アンドロメダの鍵か。だが、見るところ、全然溜まっていなようだが？』

確かに、中に入っている紫の液体は満タンというには程遠かった。

「まあね。だけど、以外とこの星おもしろいんだよね。特にスバル君、ロックマンがね」

「星河？ あんな弱え奴のどこが？」

「君も、時が来れば分かるよ。なんなら今度ちゃんとロックマンと戦ってみたら？ 兎に角、僕達はまだゆっくりと見物させてもらうよ。これが溜まるその日まで」

『……OK、じゃあこっちはこっちで好きにさせてもらうぜ、右腕さん？』

フェニックスが言っつと、ジェミニはそっつとそっつぽを向く。好きにしろんでも言っつているかのようだ。

『よし、行くぞ涼介』

涼介はコクツと頷く。刹那、その場からフェニックス・プロミネンスの姿は消えた。周波数を変えた訳ではなく、音速の速さで立ち去ったのだ。

「……新左腕のお手並み拝見といこうか」

『あいつじゃロックマンを倒せないと思うがな。ま、精々頑張ってもらおうか』

## その日の夕方

委員長とスバルと亜夢はいつものように家に向かって歩いていった。因みに今日は、図書館に行って来たため、今下校しているのだ。



何故行つたのかと言うと、もうすぐ夏休みに入る。その夏休みの間に何か本を読んで、感想を書いてこいと宿題が出されたためである。

「それにしても、夏休みに入る前に本を借りに行くなんて、めんどくさいぜえ」

ゴンタが愚痴を零す。

「文句言わないの。これも勉強なんだから。それよりキザマロ、何かいい本あつた？」

「はい、“背が伸びる運動”という本を。これで背が伸びること間違ひ無しです！」

全員本を借りているようだ。

「私はお料理の本よ」

「『『『ええ!!?』『『『『

全員身を引いた。ある意味危険を感じ取つたのだ。

「何よ？」

「い、いやあ、委員長って料理できたのかな…って」

スバルが代表して委員長に言う。他は全員頷いた。

「何言っているの？ 出来ないから、これから夏休みのうちに練習するんでしょ？」

「あ…そう」

そんな他愛もない会話をしていると、スバルの視界にある人物が入ってくる。その人物は車道を挟んだ向かいの道に彼が立っていた。

「……っ」

「どうしました？」

キザマロが不思議がって訊いてくる。ここは軽くあしらって不死宮を無視するのが一番だが、不死宮はこちらを見ているため気になっ  
てしょうがない。

「い、ごめん！ 僕ちよつと用事があるから先に帰るね！ 明日また学校で！」

そう言つて、皆の応答も聞かずに背を向け駆けて行く。今いる道を右へ曲がり、誰も居なさそうな路地の方向へ。

「え、ちよつ、あなたの家はあつちでしょ!？」

直ぐに委員長が叫ぶが、スバルはこっちは近道、と言い振り返りもせず駆けて行く。

「……なによ、まったく」

「そうですね、せつかく委員長が教えてあげたのに近道だなんて…あれは間違いなく嘘ですね」

「ええ！？ キザマロ、嘘かどうか分かるのか！？」

「あんなの、態度が激変したところを見れば誰でも分かるわよ。さあ、そろそろ帰らないと」

キザマロの変わりに委員長は答え、自分のトランサーを開きデジタルの時計を見る。時計は18:30を表示していた。辺りは既に薄暗い。子供が出歩くには危ない時間帯になる直前だ。

「……………」

亜夢は先程スバルが何かを見て激変したことに気づいていた。そのため、先程不死宮が立っている場所を見る。だが、そこには不死宮の姿はない。亜夢が見る前に移動したようだ。

「どうしたの、水星さん？」

顔を伏せて考え事していると不意に委員長の声が聞こえる。

「…………ごめん、そろそろ仕事に行かなくちゃ」

「ええ！？ そうなのかなぁ？」

「ゴンタ君、しょうがないですよ。彼女はアイドルなんですから」

「…………そう、ならまた明日学校で」

「それじゃあ……………」

皆に手を振ると、亜夢は駆け出した。

## 路地

汚い路地を駆けているスバル。本当に誰も人気の無い奥の方へと向かっている。

「ウォーロック、あれって」

『ああ、誘ってやがるな。おもしれエ！行くぞ、スバル！』

「うん、電波変換！ 星河スバル オン・エア！」

誰もここには人は居ない。スバルが人気の無い場所へ駆けたのは電波変換する姿を見られなくなかったため、近くの人気が無い場所はここしか見当たらなかったためだ。

スバルはロックマンへと変身してウェーブロードの上に立つ。

「ウォーロック、あいつは？」

「ここだぜ？」

「『ツ！？』」

後ろから声が聞こえた。誘ってきた敵の声だ。勿論知っている。何  
度も戦って一度も勝てたことがない相手の1人だから。

「フェニックス・プロミネンス……」

『誘ってくるとはいいい度胸じゃねエか』

『こつちも、ちょっとばかり遅<sup>Loss</sup>れているからな。悪いが今すぐ抹殺<sup>Erase</sup>  
させてもらおう！』

フェニックスは焦っているように見える。そんなフェニックスとは  
裏腹に、不死宮は至って冷静そのものだ。

『フン！ やれるものならやってみやがれ！ 行くぞ、スバル！』

「うん。バトルカード！ プレデーション！ ジェットアタック！」

ロックマンはジェットアタックの体制に入る。フェニックス・プロ  
ミネンスは腕を前でクロスし受け止める体制に入る。だが

「っ！？」

『What!?!?』

フェニックス・プロミネンス達の目にはこちらではなく、背中を向け反対の方向へ全速力で進んでいくロックマンの姿がある。

『誰がここで戦うって言ったア？ 俺を殺したければついてくるんだな！』

挑発するウォーロック。ジェットアタックを使ったのは場所を移動するため。普通の速さで移動しても直ぐにフェニックス・プロミネンスに追いつかれてしまい、攻撃されると判断したロックマン達は、ジェットアタックでスピードを上げて少しでもフェニックス・プロミネンスの間を空けながら場所を移動しようと考えたのだ。街に被害を加えないように。

「…………舐めやがって」

フェニックス・プロミネンスは宙に浮き、猛スピードでロックマンとの差を詰める。これでもまだ半分も力を使っていない。

『くそッ、もつとスピード上げる！』

「これ以上は無理だよ！」

ロックマンも限界までスピードを出しているはずだった。だが、それ程以上にフェニックス・プロミネンスは速過ぎたのだ。

すると、展望台が見えてきた。

「…見えた！」

そう言った刹那、ロックマンはウェーブロードから飛び降りて展望台へと降り立つ。

「……………」

フェニックス・プロミネンスは無言のまま一瞬で間合いを詰める。至近距離から攻撃するために。

「プロミネンスプレス！」

そして一瞬で燃やし尽くすほどの火力の炎を放つ。だが、ロックマンに触れた途端、ロックマンの体はボンツと音がしてヌッキーの置物へと替わった。その置物は見る見るうちにフェニックス・プロミネンスの炎に焼かれていく。

「ちっ、またヘンゲノジュツか……………」

舌打ちし呟いていると、

「スターブレイク！」

後ろからロックマンの声が聞こえた。この言葉は前にも聞いたことがある。

「……………新しい力、というやつか」

『さっさと決めちまおうぜ？　これが奴の最後の夜だ』  
last night

辺りは闇一色。今日はそれ程暗い夜なのだ。月の明かりが無い。月が出ていない。街灯の光でさえこの闇に飲まれそうないきそうだ。

「行くぞ！」

アイスペガサスの姿になったロックマンが言う。やはり敵が炎属性なだけあって、それに強い水属性に変身したようだ。

「アイススラッシュ！」

「ファイアーカッター！」

両者は手始めに小さい攻撃、氷の塊と炎の刃を飛ばしあい、お互い消滅させる。

そして両方とも間合いを詰め、

「はぁぁぁぁー！！」

「うぉぉぉー！！」

ぶつかり合った。



「……ジャスミン、スバル君が何処にいるか分かる？」

少し離れた場所で亜夢は歩きながらジャスミンに尋ねた。

『…展望台に電波体の周波数が2つあるのは分かるけど、これがスバル君のかどうかは分からないわ』

「そう…兎に角行くよ！」

『でも、亜夢ちゃん、今は夜よ？ もし、展望台にスバル君が居たとしても、2つあるということは敵と戦っているということよ？ 夜じゃ戦えない私達が行ったとしても何が出来るの？』

そう、今は夜。2人はウエザートランスの能力で夜では戦う事が出来ない。否、戦う事の前に変身が出来ないのだ。否、出来なくはない。ただ、変身すると夜の力闇ダークに体を支配されてしまうのだ。まだ、闇をコントロールすることが出来ないため。

これではただの足手まとい。役に立たないゴミとやらなら変わりない。ただの邪魔者。

「…それでも……行く！」

だが、亜夢の意思は変わらなかった。例え自分が役に立たなくとも、ゴミであろうとも、ただ大切な人ともたからがそこにいるのならその人をただ護りたい、それだけだから。

ジャスミンはその答えを聞いたかったとばかりに頷く。彼女は亜夢の見方だ。例え亜夢がどんな道を行こうとも一緒に向かっていく。

「行くよ！」

『ええ』

2人は闇へと向かって走り出す。ただ1人の友達を助けたいから。

第85話 ロックマン対フェニックス・プロミネンス 再び（後書き）

遅くなりました、すみません！m（――）m

時間掛かったわりには凄い何書いたか分からない……。文章として成り立っていない場所だらけだと思います……。てか、英語はあっているのだろうか……？

はあ、凄いグダグダ感が……。てか、なんかスバルが危ない目にあっている前提の話みたいな終わらせ方にしてしまった……。orz

あ、感想は制限なしにしたんでユーザーじゃない人でもできるようにしました。気軽に送って来てください。

それでは

## 第86話 闇(ダーク)

「バトルカード！ プレデーション！ スイゲツザン！」

天を駆けるペガサス<sup>ロックマン</sup>は左手を変え、フェニックス・プロミネンスに突っ込んでいく。

「ファイアーブーメラン！」

それに対して羽から大きい炎の刃を一つ飛ばす。

「こんなもの、破壊してしまえば問題ない！」

突っ込みながらスイゲツザンでブーメランを切りつけ、消滅させる。そしてそのままフェニックス・プロミネンスを切りつける。

ガキッン！

「何！？」

だが、受け止められた。フェニックス・プロミネンスが持っている先程のブーメランと瓜二つの刃で。

「この使い道は何も飛び道具だけじゃないんだぜ？ はあ！」

今度はフェニックス・プロミネンスが刃で薙ぎ払いロックマンを押し返す。

「くっ！」

ズザアーツという音を立て持ちこたえる。

『スバル大丈夫か？』

「なんとか……」

『さて……不死宮、そろそろウォーミングアップ終わりだぜ』

「ああ……っ」

フェニックス・プロミネンスは手に持っていたブーメランをロックマンに向かって投げた。ブーメランは凄いスピードで向かっていく。

「っ！！」

ギリギリで反応し避けた。いや、体が勝手に避けた。人間のせきずいで起こる反射のせいであろう。不意打ちだったためか、避けた後もまだブーメランの軌跡を見ていた。だが、それが間違いだった。

「……っ！ 消えた……」

目の前に向くと、先程まで居た筈のフェニックス・プロミネンスの姿が無い。一瞬にして消えた。

「遅い！」

いや、後ろに回り込まれていた。あの音速のスピードで。

「しまっ」

「

「プロミネンスプレス！」

「うわああああああ！！！」

直撃。振り向いているときに炎が直撃。体が焼けるほどの熱さが体を襲う。

炎が晴れたあと、ロックマンの体、翼、腹、肩、頭、足などの全ての場所の所々に火傷の痕が見られる。相当重症だろう。いや、火傷ので住んだのだ、運が良い。本当は太陽と紙一重の熱さがあるので燃え尽きていても不思議は無い。だが、ペガサスに変身していたのが幸いしたのだろう。水属性は炎属性に強い。先程の炎の威力が僅かだが低下したと考えられる。

「はあ…はあ…」

既に息は上がっている。それに対してフェニックス・プロミネンスは汗さえ掻いていない。

「ちっ、完全に焼いたと思ったが、しぶとい奴だ。だが、次で終わらせる！　ファイアーカッ　」

「待って！」

「…っ？」

「っ！　亜夢ちゃん！」

展望台へと亜夢が、今たどり着いた。走ってきたせいか息が荒い。

「また、か……」

フェニックス・プロミネンスは呆れている。これがもう4回目のパターンだから。

「はあ…はあ…今度は…私よ！」

「悪いが、戦う相手を変えるつもりは無い。例えお前がどれ程俺より弱くても、だ」

自分より弱いから簡単に勝てる。だから戦う相手が変わっても、戦況はなにも変わらない。だが、変わらなくても相手は変えない。もう、時間がないから。

「…逃げるの？」

「何？」

「だから逃げるの！？　もしかしたら強くなっているかもしれないのに、戦ってもいかに弱いと決め付けて戦わない。どう考えたって逃げてると思えない。……だから、あんたはそこまでのチキン臆病野郎って言っているのよ！」

完璧に挑発。ハツタリかまして、自分が強くなっていると言って、戦えと。そう言っている。だが、そのハツタリに引っ掛かったようにカチンツと聞こえる。

「…そこまで言うならやってやるっじゃねえか！　てめえ生きてかえさねえから、覚悟しろ！」

「望むところ！」

「ちょっと待って、亜夢ちゃん！」

先程まで黙っていた、正しくは混乱していたロックマンが遮ってきた。

『ハアア！？ テメエ何言っているか分かっているのかア！？』

「そうだよ！ 君の力でも勝てるかどうか分からない、下手すれば死ぬかもしれない！ 大一、君夜じゃ」

「うっさい！！」

『「ッ！？」』

「黙ってあなたは離れてろ！ 力の無い奴が近くに居たら邪魔で戦えないでしょ！！」

「…………でも」

「大丈夫…………私は死なない…絶対に」

「…………分かった。だけど無茶はしないで」

ロックマンはボロボロの体を無理やり動かし、その場から離れた。

亜夢はわざとロックマンを離れさせた。彼を自分のせいで傷つけないから。例えどんなに自分から嫌われようが、傷つけない



から。

「ジャスミン…電波変換して私がおかしくなっても……あいつを倒すまで解除しないでね…?」

『えエ、…亜夢ちゃん……覚悟は良い?』

「そんなの、さっきからOKに決まっているじゃない……電波変換！ 水星亜夢 オン・エア！」

電波変換…いつものようにジャスミン・ハートへと姿が変わる。だが、刹那

「くっ… つ!!!!」

彼女の体に電撃のような痛みが走り、身を反り返らせる。途轍もない、体中を針で一気に刺すような痛み。だが、彼女は悲鳴をを声に出さずに口の中で消している。彼に心配してほしく無いから。

『亜夢ちゃん…!!』

「大丈夫っ…これくっ…らい！」

ジャスミン・ハートに異変が生じる。着物の色が徐々に黒に変色していく。足下の方から色が真っ黒に。まるで、体を蝕んで行くかのように。

「ファイアーカッター！」

「風の舞……風壁……あぁっ!!!!」

小手調べにフェニックス・プロミネンスは威力の小さい技を放ったのだろう。だが、ジャスミン・ハートはそれを技で跳ね返すだけで精一杯のように見える。いや、精一杯どころではない。技を使った瞬間に更に痛みが電気のように体を走る。

「ファイアーブーメラン！」

今度は二本、刃を飛ばす。

「くっ…っ！？」

避けられない。否、避けることが出来ない。体の自由のが利かない。まるで、体を何者かに固定されているかのように。

「（やばい…当たる！）」

よこせ……

「（えっ…？ 今何か聞こえた…）」

体を…よこせえ！！

「（っ！…！？）」

その刹那、刃は同時にジャスミン・ハートに当たり、爆発を起こす。爆煙でジャスミン・ハートの姿が見えない。

「終わったか？ 何か強がった割には大した事なかったな」

「そんな……」

ロククマンは絶句していた。だが、本当にやられたかどうかは煙が晴れないことには分からない。

煙は徐々に晴れていく。

「どれどれ？ ……何!？」

煙が薄つすらとしてきた頃、煙の中のジャスミン・ハートの姿が見えた。彼女は…何事もなかったかのように立っている。だが、ブルーメランが当たる前とは姿が違った。色は…漆黒の黒。純粹な黒で、着物、簪、扇子、ジャスミン先程までであった瞳の輝き、全てが黒に染められていた。

「ウエザートランス……闇ダーク……」

そう言った刹那、黒一色のジャスミン・ハートの口元がニヤつき、姿が消えた。

「っ!？ 後ろ」

「闇の舞…残月」

ザンツ!

「がはっ!」

か? と言って振り返った瞬間に扇子を闇に染めた剣に変え、体を切り裂いた。

「…くそが！」

直ぐに体制を建て直す。傷は、フェニックスの能力で自然に癒えていく。

「プロミネンス・プレス！」

ジャスミン・ハートに炎を放つ。だが刹那、姿が消えた。

「闇の舞…闇討ち…」

だが、声だけは聞こえた。姿は見えない。

「…………どこだ!？」

ザンツ!

「ぐわあ!？」

辺りを見回しているフェニックス・プロミネンスは不意に背中を刀か何かで切られる。後ろには誰もいないのに。

『…………誰も居ない。…………そうか、あいつ闇に隠れて俺らの背後に周り、不意打ちをしているんだ!』

フェニックスが感ずく。たった一撃しか喰らっていないはずなのに。そう、ジャスミン・ハートの今の攻撃は、自分自身を闇に溶け込ませ、相手を不意打ちする技。まさに闇討ちのごとく。

「くそ！」

『なあに、俺の能力を使えば良い！ ……そこだ！』

フェニックスの指示した場所に口から発する炎を放つ。

「闇の舞…ミラーージュ闇の鏡…」

すると、何も無い場所に六角形の鏡のような岩が現れ、炎を呑みこんだ。その後、その岩は姿を消した。

「よし、次はどこだ？」

『……そこだ！』

「ゴツドバード…！」

今度は途轍もない速さで、指示した場所につつまむ。だが、

「闇の舞…闇の鏡…」

フェニックス・プロミネンスの前に先程の岩が現れる。刹那、先程呑みこんだフェニックス・プロミネンスの炎が岩から噴出される。

「っ！？ ぐわあ！！！」

途轍もないスピードで突っ込んできたフェニックス・プロミネンスは不意な攻撃に避けることが出来なかった。そのまま炎に飲み込まれて、それと同時に攻撃が消された。だが、炎属性に炎属性の攻撃

はあまり効果を生まない。更に治癒能力で直ぐに傷が癒えていく。そのため、炎の中のフェニックス・プロミネンスは火傷を負って、その傷が癒えて、を繰り返している。

「ちっ、暑いな……」

そう言った刹那、空中へと舞い上がり、ジャスミン・ハートの方を見る。だが、先程と同じように姿は無い。また闇の中に溶け込んだようだ

「消える」

重たく濁った声が聞こえ、その刹那、フェニックス・プロミネンスはゾツとし、体にプレッシャーが押し掛かった。それは、今から殺すと言っている殺気のようにも思える。

「っ！？ 何処だ！？」

四方八方に目を配り探す。だが、姿は無い。

「……闇の舞……闇黒流撃」  
ダイクネズエネレーション

そして、次の声が聞こえ、声の方に振り向いた。扇子をい開いた状態のジャスミン・ハートが見えた刹那……

『「ッ！！ ぐわあああああああ……！！」』

何か凄まじいエネルギーに体が貫いた。貫通するような痛みが体を走り、空中から地面へうつ伏せの状態で落ちる。どうやら気絶したようだ。

「……………」

だが、ジャスミン・ハートは全く表情を変えていない。こうなって当たり前のような瞳でフェニックス・プロミネンスを見ている。この時点で勝負はついた

「フ…」

はずだった。口元をニヤリとさせ、フェニックス・プロミネンスに近づいていく。

フェニックス・プロミネンスの先程の攻撃の傷は徐々に癒え始める。だが、そんな事はお構いなしに近づいていく。

「…フフフ…闇の舞 闇黒流撃」

立ち止まり、扇子を前に構えて先程の技を放つ。漆黒のエネルギー砲が、転がっているフェニックス・プロミネンスの体を貫く。

「が…はっ…！」

空気が肺から一気に出された。癒えていた箇所にも更に傷がつく。先程より酷く…。

「闇の舞 ダークネスメテオ 闇黒隕石」

扇子を振り下ろすと同時に、上空に黒い空間が出現。そこから半径

10メートルはある大きな隕石が出現し、フェニックス・プロミネンス目掛けて落ちていく。

その刹那、爆発が生じ、爆風が発生する。

『ぐあああああああああ！！』

今の爆発で電波変換で絶えられるダメージを越え、電波変換が解除。それと同時に爆発の中にいたフェニックスはモロにダメージを喰らい、<sup>デリート</sup>跡形もなく消滅した。

「くっ…何!？」

勢いの強い爆風から何とか持ちこたえるロックマン。かなり離れていたのに、先程の爆風は強かった。電波人間でも立っていられるのがやっとのところだ。

『スバル……フェニックスの周波数が消えた…』

「っ！ それじゃあ」

『ああ、奴を倒したようだぜ』

今の会話からすると、この2人は戦いを見ていなかったようだ。否、正しくは亜夢の邪魔にならないように戦いが見えないところまで離れていたのだ。なので、先程の風が爆風によるものだという事はこの2人は知らない。

『（しかし妙だ……ジャスミンの周波数が今までにないくらいにマイナスのエネルギーに感じられる…何故だ…）…まあいい、兎に角



行くぞ、スバル！」

「うん！」

2人は先程まで戦っていた展望台の方へと戻っていく。すると、誰かが立っている人影が見える。

「亜夢ちゃんだ！」

直ぐに気づいたロックマンは亜夢に近づき声を掛けようとする。

「おーい、亜夢ちゃん……ん……？」

何かがいつもと違うことに気づいた。全てが漆黒の闇に染められているような姿。まるで、何かに浸食されたような。その彼女はこちらへと振り向き、口が開く。

「……死ね……」

そして、いつもと違う、亜夢が使はずのない言葉が耳を通った。ロックマンには何が起きたか分からなかった。

「亜夢ちゃん」

「闇の舞 抹消」

「……っ!?!?」

ん、と言う前に彼女が掌をこちらに向ける。刹那、見えない何かを放たれ、ロックマンはそれを避けた。

見えない何かは後ろにあった垣根に触れると、垣根と共に抹消した。

「な、何をするの……?」

怯える。彼女がいきなり攻撃してきたから。あれは、完全にロックマンを殺す気でいた。

## 第86話 闇(ダーク)(後書き)

また、遅くなってしまった…(´・`・´) …… 本当はもう少し書こうと思ったのになぁ。このままじゃあと13話じゃ終わらないかも。

うわぁ、この話見返してみると、亜夢ちゃんが一番キャラ崩壊している話だなぁ。しかも、フェニックスはあんなに強かったのに、治癒できないほどまで一瞬でダメージを与えられてデリート、という呆気ない終わり方をさせてしまった……ごめんよ、フェニックス。

それにしても、闇のときの技名が…いいのが思いつかずに厨二病みたいな名前にしてしまった……もう、駄目だなぁ、良い名前が思いつかない…。

…… 亜夢ちゃんが闇に吞まれて、ロックマンを殺しに掛かる……うん、まさに凄いベタな展開だ (何故そこで音符!?)

あ、誤り字、脱字などの指摘があったら遠慮なく言ってください。直ぐに直しますので(´・`・´) <

あ、そろそろスカパーで「けいおん!」見なきゃ

第87話 心（前書き）

長めにしていたら、遅くなりました（<―>）

## 第87話 心

「な、何をするの……?」

「……………」

尋ねたが、彼女（田夢）から返事が帰ってくる事はなかった。だが、暗い瞳をしているジャスミン・ハートはロックマンを睨みつけている。睨みつけるだけでロックマンは押し潰されそうなプレッシャーに陥っていた。

「おい、何ださっきの!? まるで俺達を消す気だったじゃねエか!」

ウォーロックも混乱していた。先程の攻撃は当たれば一瞬で消えてしまいそんな攻撃だった。現に先程の攻撃に当たったものは一瞬にして眼前から消えたのだ。

「一体どうしたの?」

「……………」

だが、何度尋ねても返事は無い。

「闇の舞 黒十字」  
ブラッククロス

代わりと言わんばかりに、一瞬で扇子を十字に切った。その刹那、黒い衝撃波が起こり、ロックマンの方へ向かってくる。

「っ！？ バトルカード！ プレデーション！ バリア！」

自分の周りにバリアを発生させ、衝撃波を防ごうとする。だが、衝撃波は無駄と言わんばかりに、バリアを切り裂く。

「っ！！ うわあ！！！」

勿論、衝撃は消滅することなくロックマンに直撃する。ただでさえ、先程の戦いのせいで火傷を負いボロボロの体に、更に爪のような傷跡が体に十字に刻まれる。

「はあ…はあ…はあ…」

先程のダメージが酷いため、膝を着く。そして息が荒い。

『くそッ！ あいつ俺達のことがかかっていねエのか！？（もしや、さっき感じたマイナスエネルギーと何か関係があるのか？ それにあの姿…いつもと何かが違う）……もしかして、何かに操られているのか？』

「っ！ ウォーロック…それって…」

『前に言っただら？ 亜夢が夜に電波変換すると…』

「…闇に支配されそうになる…っ！！ それじゃあ！」

『ああ、どうやらその闇つてのが原因らしいな』

……彼女はいつもとは違っている。姿、瞳、力、技。全てが見たこともないほどに変わっている。しかし、その原因は、その闇の力に

ある。

「……それなら亜夢ちゃんを我に変えさせる。…それしか方法はな  
いよね？」

『だが、どうやる？ ハッキリ言って、勝てる相手じゃねエぞ』

確かに、真っ向に戦って勝てる相手じゃない。かといって不意打ち  
が効きそうな相手でもない。

いくらスターフォースを使ったとしても、フェニックスには敵わな  
かった。増してやその相手をジャスミン・ハートは倒している。ど  
う考えても勝つどころか、話しにもならない。

「でも……やるしかないよ！ 僕は友達なんだから！」

『……フツ、そうか』

「行くよ、ウォーロック！」

『おっツ！』

ロックマンは立ち上がり、友達を助けると決意する。直ぐにジャス  
ミン・ハートに視線をやると掌をこちらへ向けてきた。

「闇の舞 抹消」

「くっ！ バトルカード！ プレデーション！ ヘンゲノジュツ！」

そして、先程と同じ衝撃波を飛ばしてきた。その刹那、ロックマン

は一枚のバトルカードをプレデーションさせた。ボンツという音と共にヌッキーの置物と白い煙が出現する。“抹消”の技はヌッキーに当たると共に消滅した。

「バトルカード！ プレデーション！ ブレイクサーベル、フリーズナツクル！」

左手をブレイクサーベル、右手をフリーズナツクルに変えるとジャスミン・ハートの後ろに周波数を変えて現れた。

「はっ！」

フリーズナツクルでジャスミン・ハートに攻撃しようとする。だが

バシッ！

瞬間、扇子を前に出してフリーズナツクルは防がれる。だが、その時スバルは、掛かった！と声を挙げた。見ると、亜夢の扇子は氷に閉じ込められるように固まっている。どうやらフリーズナツクルの効果が働いたようだ。

「…ちっ………」

ジャスミン・ハートの口から舌打ちするような音が聞こえた。だが、そんなことお構いなしにロックマンはブレイクサーベルを構える。

「やあ！」

そして上から降り下ろす。



ガシッ！

「っ！？」

だが、ブレイクサーベルはあっさりジャスミン・ハートの手に止められた。しかも軽々と。扇子がなければ勝てると思っていたが、片手でブレイクサーベルをとめれるほどの力をジャスミン・ハートは持っていたようだ。

「ふ……弱いな……」

その時、言葉を発したのはジャスミン・ハートだった。その刹那、ロックマンはジャスミン・ハートに吹き飛ばされた。

「くっ！」

『くそッ！ 俺たちじゃ何もできないのか！？』

圧倒的な力の差。敵が亜夢だからと言ってロックマンは手加減してはいない、本気だ。だが、それでもあちらの方が一枚上手なのだ。このままでは助けるどころかやられてしまう。

「どうすれば……」

ロックマンは悩む。今までこれほどまでに悩んだことはなかっただろう。だが、いくら悩んだところでどうやれば友達を助け出せるのか、解決策は全く浮かばなかった。

「無駄だ……こいつを救う事はできない」

そこへ不意に声がした。聞こえた方向はジャズミン・ハートがいる場所から。声もジャズミン・ハートそのものだった。では、今はジャズミン・ハートが発した言葉？

「この人間の体は私が支配した。もう私のものだ」

笑っている。確実に、おもちゃを手に入れた子供のように楽しそうな声で。

「っ！……お前は誰だ!？」

「…そうだな、仮に“ダーク”とでも名乗っておく」

闇の力の実態はたぶん、今ジャズミン・ハートを支配しているものなのだろう。だから名はダーク。

「亜夢ちゃん…目を覚まして!」

「…ん……ここは…？」

ロックマンが叫んだ刹那、ロックマンと戦っているはずの亜夢が今目を覚ました。辺りを見回すと、四方八方何も無く暗い。まるで暗い空間に閉じ込められているかのようだ。

「…何よ……ここ……」

怖い。そう言いたげな口調で亜夢は呟いた。この空間でたった一人。今までそうだったように、家族が急に居なくなった時のようにまた一人ぼっちになった気分だ。

気がついたかア？

「っ！！ 誰!？」

不意に不良っぽい声が聞こえた。その声はこの空間中に響くように聞こえた。否、聞こえたというか、頭に流れ込んできた感じだ。…その声はどことなく自分の声によく似ているような気がした。

お前を支配する機会を待っていた、闇ダークの力…といえは分かるかア？

不気味に聞こえた。まるで亜夢を嘲笑っているかのような。

「……ここは何処!？」

何もない空間に向かって疑問に思っていたことを叫んで訊いてみる。

お前の心の中だア。いや、もうあたしのだがな

答えが帰ってきた。だが意味が分からない部分がある。

あたし？ 亜夢の心の中だということとは、大体想像がついた。戦っていた場所から急に変わったのだから、ここは夢か心の中のどちらかと考えられた。だが先程の「あたしの」、とはどういうことだろうか？

もうお前の体はあたしのものだア。意識だって、力だってあたしのものお。つまり、もう既にここはお前ではなくあたしの心の中、ということだよ

「っ！！ ちょっと！ そんな勝手な事が許されるわけ無いでしょ！！」

許されるわけ無い。大体意味がわからない。何故急にそんな体が誰だか知らない者の物になるなんて。

これが許されるんだなア！ あたしはお前に勝った！ 勝つてお前の体を得たのだ、これが証拠だア！

勝負？ 何の話！？ と亜夢は返す。確かに、闇ダイクと戦った事なんて一度も無い。勿論、あったことも話したこともない。今話したのが初めてである。

忘れたカア？ お前が喰らった痛み、あれはあたしがお前に対して力を使ったから起きた痛みだア。つまり、お前が電波変換した瞬間からもう既に戦い始まってたんだよ！ 体の奪い合いって

いうデスマッチがなア

ダークが言うには、夜に電波変換した瞬間に体に電撃のような痛みが走ったのは、亜夢の体を手に入れるために闇が攻撃してためだつたらしい。その攻撃に耐えられなくなった亜夢は呆気なく闇と入れ替わってしまった、これが亜夢の敗北を意味するらしい。

「っ！？ じゃあ、私がここにいるって事は…あんに負けたってこと！？」

そうだ。さて、お前の友達とか言う奴もそろそろ消えてもらうかア

…嫌な予感がした。闇の力は亜夢の精神でも敗北するほど強いもの。言葉からしてその強い力の矛先が誰か亜夢の友達に向けたということだろうか。近くに居た亜夢の友達は……

「……っ！！ あんた、スバル君に何を」

そう、スバルしかない。先程離れたと言っても、フェニックスがデリートされたならそれを感じてやってくるはず。ならばやはりスバルしかない。

あア、今こんな感じだぜエ

すると、亜夢の眼前に外の映像といえるものが映し出された。そこには、胸に十字の深い傷を負ったロッキマンの姿があった。

「っ！！ スバル君！」

おオーツと、助けようなんて思っても無駄だぜエ？ 今、お前の体はあたしが支配しているんだからなア。大一、お前は一生この暗闇の中から出る事は出来ない。言うならば出口のない空間だと思え

「っ！？ どういうこと！？」

敗者にはそれなりの罰を与えるってのがあたしの考えでねエ。お前はずっとそこで1人孤独に暮らしていくんだよ、死ぬまでなア

胸にその言葉が突き刺さった刹那、亜夢は絶句した。

闇に負けたから体、心までもが奪われた、自分の体なのに動かす事する出来ない、自分の精神弱さが招いた結果、全てが自分のせい。スバルがあんな姿なもの、自分が弱かったから。その自分は彼を助けたいのに助ける事も出来ない、自分のせいなのに何も出来ない。それなのに助けられないままこの空間に死ぬまで閉じ込められる？

「死ぬ。闇の舞

ダークネズエネレーション  
闇黒流撃」

ジャスミン・ハートが呟いた刹那、不意に電光石火のごとき速さの一撃が目の前に。今から避けても間に合わない。ロックマンはそれを一瞬で考えて、そこで目を閉じた。

ジャスミン・ハートの攻撃はロックマンを一瞬で貫いた

ドーオオンッ！！

「……ちっ」

筈だった。ロックマンには先程の攻撃がカスリもしていない。代わりに轟音と舌打ちする音が聞こえた。

「何が……っ！？」

痛みがなく、轟音が聞こえたため不自然に思い目を開ける。するとそこには茶色で所々にパーツを付けている西洋の大剣を持った電波体のような、ただどこ処かで見えた事がある、否、知っている者が立っていた。

『久しぶりだな、この星の正義の英雄<sup>ヒーロー</sup>。否、ロックマンとウォーロック』

やはりそうだ。後ろ姿で顔が見えないが、声で分かった。彼は昔、FM王からの任務を背き、守護ライセンスと共にロックマンとアンドロメダの鍵を賭けて戦った事のある電波体。名は

「君は……ヘルクレス!？」

「いかにも、某の名はヘルクレス。忘れたわけではなからう?。」

ヘルクレス。だが、ヘルクレスは確か、FM王の動きを探ると地球を離れたはずだが。

「話は後だ。何やら取り組んでいるようだな?。」

「うん、実は彼女が闇の力って奴に操られているんだ」

ロックマンは答えた。彼女は今にも襲い掛かってきそうなのであくまでも簡単に。

「……あの者の周波数はジャスミンそっくりだな。という事はジャスミンは生きていたのか。…と言う事は、あれはジャスミンの電波変換した姿……つまり、あの者からマイナスエネルギーを感じられるのは、その闇の力のせいなのだな?。」

「あア、そうだ。ジャスミンの能力が暴走したみたいだな」

今度はウォーロックが答える。否、ロックマンは答える事が出来ないのウォーロックが答える。マイナスエネルギーを感じられるのはウォーロックだけなので、ロックマンは答えられないから。

「……天気によって変身する能力、か。今は夜…そういうことが。ならば某は助太刀致そう!。」

全てを把握したヘルクレスはロックマンに言った。



「ありがとう…でも」

助太刀すると言っても、相手があのだジャスミン・ハート。増してや、フェニックスを軽々と倒したあの闇の力にどれだけ人数が増えても勝ち目は無い。

『要はあの者を闇から開放することができればいいのだな？ だが、貴公がダメージを食らっているところからして、倒せそうでは無いな。ならば、倒さなければいいのだ。倒すだけが答えではない』

「……そうか！ ヘルクレス、僕と一緒に時間を稼いでくれ！」

『御意』

何かを気づいた後、ヘルクレスに指示を出した。

「ウォーロック！」

『ああ、分かっているぜ！』

「よし、行くよ！」

そう指示した刹那、2人は二手に別れた。

「亜夢ちゃん！ 目を覚ますんだ！ 君はこんな闇の力なんかには負ける筈ないだろ！？」

といきなり亜夢の回りに走り込んできたロックマンは叫んだ。

「……何を、無駄だと言ったはずだ。こいつを救う事はできない」  
そう言った瞬間、ジャスミン・ハートはロックマンの方へ扇子を向ける。

「闇の舞 闇黒流げ」

『させん！ ヘビーバスター！』

「っ！ ……ちっ」

不意にジャスミン・ハートの後ろからヘルクレスが左手をバスターに変え、弾丸を放った。だが、その弾はジャスミン・ハートには当たらず、扇子に当たった。その扇子はジャスミン・ハートの手から弾け飛び、ロックマンの目の前へ落ちた。

「ジャスミン！」

その扇子をロックマンは拾い上げる。確か、ジャスミンは電波変換するとこの扇子姿になる筈。つまり、これはジャスミンの筈だ。

ロックマンは先程と同じで何度かジャスミンを呼んだ。しかし、返事は帰ってこなかった。

「無駄よ……今は気絶していてあたしがこの体を支配している限り起きる事は無い」

「くっ……！」

もし、ジャスミンが入れば、電波変換を解除してもらいさえすれば

助かる筈だったのだが…。だが、ロックマン達はこれが狙いだっただけではない。まだ作戦は成功していないが、少なくともこれを奪う事で作戦は成功する確率が上がった。何しろ、武器がなくなっただけだから。

「…もしかして、それがなくなったからってあたしが弱くなったとでも思っているの？」

少し、怒りこもった声だった。声は低いし、殺気は放っているし。今にも殺すと言っているかのように。

「闇の舞 抹消」

「くっ！」

片方の掌から発せられた抹消がロックマンの頬の横をかすりそうになって通り過ぎていった。そうだ、まだ彼女にはあの恐ろしい技が残っていた。どんなものでも、あの技に触れただけで抹消するあの技が。

ジャスミン・ハート更にもう片方の掌を突き出した。

「闇の舞 ダークネズエネレーション  
闇黒流撃」

「っ!？」

扇子がないのに、両掌を重ね合わせて先程の技を放った。ロックマンは何とか、横に回避し避ける事に成功した。

『(……………某が防いだときより威力が上がっている…。先程のは手を

抜いていたという事が……)」

ヘルクレスが防いだと言うのは、先程ロックマンが目を閉じたとき  
のあれだ。あの時、闇黒流撃が消えたのはヘルクレスが最大の力で  
メシアパワードを放ったかららしい。電波変換していないから、電  
波変換時より威力はなつかたのもあるだろうが、差ほど変わらない  
だろう。ヘルクレスが先程の技を放つても、今の闇黒流撃を防ぎき  
れないだろ。

「……………亜夢ちゃん！！！」

叫んだ。もう力も残っていないの力を込めて。空元気と言う奴だ。

「……だから無駄……………っ!？」

急ピクツに体が止まった。否、動かなくなった。それどころか

「……………っ!?!? うあああああああ!?!?!」

頭が割れる程の痛みが走った。

ッ！？ 何、何が起こった！？

「…そんなの嫌だ…」

亜夢は1人顔を伏せたまま呟いた。

…何を言っている！？

「友達を傷つけたまま、このまま出口のない空間に閉じ込められたままなんて……そんなの嫌だ！！ 出口が無いならあたしが作る！」

な、何を……まさか

ダークは混乱していた。急に体の自由が利かなくなった上に、亜夢が変なことを言い出したから。

そして、そんな意味のわからない事が2つ同時に起きた、それを考えた後、ダークは一つの答えを導き出した。

お前…！！！！

「…スバル…君…」

頭を抑えているジャスミン・ハートの口からロックマンの名が呼ばれた。ダークの時には呼ばれることがなかったため、これは亜夢のものだと考えられる。

「っ！ 亜夢ちゃん！」

「ちっ、引っ込んでろ！」

だが、今度は先程とは違う口調の言葉が聞こえた。今はダークのもののようにだ。

「…まさか、あいつ…あたしに（精神で）勝とうとしているのか…？ …くっ！」

まだ、頭が痛いのか、再び頭を抑える。

「ウォーロック、これって」

『あア、徐々に亜夢の意識が戻りつつあるな……作戦通り、倒さずに元に戻せそうだぜ？』

作戦…それは、亜夢に少しでも意識を表に出させる事。例え、ダイクを倒せたとしても、それで亜夢が元に戻るかわからない。そう、部外者が何をやっても、戻るか否か、彼女の体で起きた事を直せるか否か。それは彼女自身に掛かっている。そうなれば部外者であるロックマンたちにはなにもできない。だが、出来る事もある。それは意識を戻す手伝いをしてやる事。そう、つまり作戦とは彼女が意識を取り戻すまで時間を稼ぐというものだ。

「うん、ヘルクレス！」

『御意！』

名を呼び、アイコンタクトで指示を出した。その刹那、ロックマンとヘルクレスはその場から離れてウェーブロードへと移った。

「……あとは亜夢ちゃんしただね」

お前の仕業かア！？

「もう……あたしは大切な人<sup>友達</sup>を傷つけたくない！ だから、あたしの体は返してもらおう！」

亜夢はそう笑って宣言した。

無駄だア！ お前の体はあたしのもの。お前はもう亜夢じゃない。あたしが亜夢だア！！

「……あんたじゃない……あたしが水星亜夢だあああああああああああああ！！！」

バキーンッ！

何かが割れるような音がこの空間中に響いた。すると、目の前に日が差し込むような光が現れた。先程の音は闇の空間が割れた音だったようだ。

ツ！？ バカなツ！！ あたしの心が……壊れた……ウアアアアアアアアア！！

そのうめき声が聞こえた刹那、声が消滅するように聞こえなくなっていた。そして、亜夢は光に向かってと歩いていく。

空間が崩壊する……先程ダークは、空間がダークの心だと言った。つまり、その空間が崩壊すればダークそのものが壊れる<sup>負ける</sup>というものだったのだらう。そのため、ダークの声は消えた。



ピカアーンッ！！

「『くっ！』」

ジャスミン・ハート、ロックマンが持っていた扇子から眩い光が放たれる。目も開けていられないほどだ。

光が晴れるとそこには、元のジャスミン・ハート、着物、瞳、簪、扇子、何もかもが元に戻っていた。

「亜夢ちゃん！！」

ロックマンは名を呼びながらジャスミン・ハートに近づいた。その刹那、「スバル君……」と言って、ジャスミン・ハートはロックマンの胸に倒れこんだ。まるで緊張の糸が切れたかのように。更にその刹那、電波変換が解除された。スウーすウーという声から亜夢は安心して眠っているようである。

「よかった……」

『一件落着、だな』

ロックマンの安心した声の次に、ウォーロックが言う。

『フ、流石は真の正義を司っている男よ』

「そんな事無いよ。ヘルクレスのお蔭だよ、ありがとう。本当に時はどうなるかと思っただよ。……そういえば、どうしてここへ？」

照れながらヘルクレスに礼を言うと、何故地球にいるのか尋ねた。いきなりFM星を探っていたヘルクレスがここへ来たと言うことは何か理由があるに違いないからだ。

『……そのことなんだが……まずい状況になった』

「えっ？」

その刹那、7月だというのに寒い風が吹いたような気がした。

## 第87話 心（後書き）

はい、ダークも消えましたあ。まあ正確に言うと、消えて無いんですけど…。あ、少し補足を。ダークの内（心）と外（スバル達に向かって）の口調は違います。内の方はダーク本来の口調で、外の方は亜夢の口調でダークが思ったことを言わせています。なので、口調が内と外では少し違います。補足は以上です。

あ、闇の技の黒十字は「BLAC CAT」のトレインが使った技と同じだと思ってください。（同じって事はパクリじゃね？）

わかりましたかね、ロックマン達の作戦の意味？何か表現すると難しかいんですよ、やっぱり。明日読み直して、おかしなところは訂正します。あ、おかしなところ、意味わからないところ等がありましたら、教えてくださいてもよろしいですよ。

さて、いよいよ終わりに近づいていきますよ。（まだですけど…）

にしても、7900字以上って……もうちょいで8000字じゃん！（そっち！？）

では、感想待ってます

第88話 タイムリミットは三日(前書き)

凄いですタイ悩みました……何でだろう……てか何でタイムリミット  
? (自分に聞け)

## 第88話 タイムリミットは三日

「どづいうこと？　まずいつて何が」

ウーイー、ウーイー、ウーイー！

尋ねた刹那、タイミングを見計らったかのようにサテラポリスのサイレンの音が聞こえた。これだけ長時間力の加減もせずに戦ったのだ、サテラポリスが電波の乱れを察知してやってきたのだろう。逆にこれだけやって、気づかないのはおかしいのだが。

『……ここでは場所が悪い、一先ず場所を変えるぞ』

「分かった」

そう返事したロックマンは直ぐに胸に顔を乗せて眠っている亜夢を抱きかかえ、その両手以外の周波数を変えてウェーブロードに飛び移り、サテラポリスがやってくる方とは逆の方向に進み出した。

その刹那、サテラポリスが到着した。

「御用だ、御用だあ！」

パトカーから勢いよく出てきたわいいが、誰からも何も反応がなく少しの間沈黙が流れる。

「……反応はなし、か。まだ近くにいるかもしれん！　探せえ！」

トランサーの中を覗き、先程まで電波の乱れをキャッチしていたら

しい画面を見る。しかし、今は全く反応していない。だが、五陽田警部は何か残っていないかと他の職員に探させた。勿論その中にはライセンスも含まれている。

「……っ！ 警部！」

すると、1人の職員が、先程展望台のフェニックスが戦った場所の辺りで五陽田警部の名を呼んだ。

「どうした!？」

五陽田警部を含め全員は小走りでその1人の許へと向かう。

「子供が倒れていますっ！」

「何い!？」

職員の前には不死宮がうつ伏せて倒れていた。

## ウェーブロード

一先ず、展望台から離れたロックマン達はサテラポリスが追っていない事を確認すると、その場で足を止めた。場所はビルより上空のウェーブロード。流石にこのままでは街の人々に生身のままの亜夢が見つかってしまうため、ビルの屋上へと降り立った。ついでに電波変換も解いた。流石にもうエネルギーが残っていなかったようだ。

「それで、まずいつて何が？」

『そうだけ、もったいぶらずに教える！』

亜夢をビルの屋上のコンクリートの上に横に寝せながら質問するスバルと、もう待ちきれないと言わんばかりのウォーロック。

『ウム……貴公等、フェニックスが電磁波ボールを地球で使った事は知っておるう？』

「うん…彼女が危ない目に遭いそうだったけど、何とか破壊できたよ」

亜夢に少し視線を向け、その後直ぐに視線を直しながら質問に答える。スバルの記憶の中には、亜夢が電磁波ボールの暴走のせいで過去に飛ばされてそれを過去のロックマンが助けてくれたという、まだ新しい記憶が残っている。

『ならば、その電磁波ボールを使ったら起きる現象は？』

更に問いかけた。確か、電磁波ボール使用時に起きる現象は……

「……電波空間と現実世界の融合……！」

そして、合わさる事のなかったどちらかの世界、空間が消滅。

『…その電磁波ボールの改良版、言わば真・電磁波ボールと呼べる物を地球に発生させ破壊するという情報が入った』

「『ッ！？』」

改良版。つまりあの電磁波ボールの不具合、熱で暴走するというなどの問題を全て解消して作り上げた完成版ということになる。だが、何故そういうことになったのだろうか？ 直ぐにでも地球を破壊するという王の既望なのだろうか？

『詳しい事は某にも分らん。FM王が何故急にそのような事を決めたのか。だが、確実に何か秘密があるからなのだろう』

そうに違いない。地球抹殺を目論むFM星人達が日々、アンドロメダの鍵のマイナスエネルギーを死に物狂いで集めている。アンドロメダの鍵にマイナスエネルギーが溜まるのも時間の問題だ。正直言うと、ほっといても地球は勝手に滅んでいく。なのに待てないということなのだろうか？ それ程FM王はせっかちなのだろうか？

『それで某から一つ提案がある』

『……何だ？』



ウォーロックは訊いた。

提案？ 先程のあの話からの提案なのだが、何を提案するのだろうか？

『真・電磁波ボールを発生させるまで後三日。その三日の間にFM王のいるFM星に乗り込み、FM王を止める』

「『何だつてえ／何イ！？』」

思わぬ一言。否、ヘルクレスの言い方からいつかそう言うのではないかと少しばかり思っていた。しかし

「止めるってどうやって？ いい案でもあるの？」

方法はあるのだろうか？

『いや、ない』

「『……………』」

更に思いもしなかった言葉から言葉を失った。方法が無いのにどうやって乗り込むというのだ。それに乗り込めたとしてもFM王に勝つ確率など殆ど無いに等しい。

『確かにFM星に乗り込む方法もFM王を止める考えは某にはない。だが、諦めることは出来ない。某はもう星が滅びる様を見たくはないのだ……………』

ヘルクレスは拳を強く握り締める。ヘルクレスは昔、AM星がアン

ドロメダによって滅びる様を見てしまっているのだ。それからだ、FM王を止めようと思いはじめたのは。

「ヘルクレスの言う事も分かる…僕だってこのまま地球を抹殺なんてさせない。けど…どうすれば…」

完全にいき詰まっていた。何も良い案が浮かばない。

問題は2つ。まず1つ目は何日も掛かるFM星にあと三日以内に辿り着くこと。2つ目はFM星にいるFM星人達を倒すか潜り抜け、FM王を倒すこと。

1つ目の問題でもうアウトだ。フェニックスの速さでも半月程掛かるのに、尚且つあと三日以内にFM星に行き着くなんて無理がある。大一、それが可能だとしても大量のFM星人を退けFM王を倒すだなんて、あまりにも可能性が薄い。大量の武将がいる敵陣の中に1人の雑兵を送るようなものだ。

そんな望みの薄い、否、無いに等しいのに良い案が浮かぶわけが無い。スバル達は徐々に表情が暗くなっていく。

「何暗くなってるのよ。そんなんじゃないや救えるものも救えないわよ？」

瞬間、声が聞こえた。振り向くと寝かせていたはずの亜夢が目を見ました体を起こしていた。

「亜夢ちゃん！」

『よオ、目は覚めたか？』

『ほう、あれだけの精神力を使っておきながら、もう目覚めたのか。並大抵の精神力ではないな』

スバル、ウォーロック、ヘルクレスの順で言った。それを聞いた刹那、亜夢は目を瞑って腕を組み、そっぽを向き

「これくらい大した事無いじゃん？」

と強がり。しかし、亜夢の精神力が並大抵ではない事は事実だ。現に精神力を使い切って負けた相手に、直ぐ精神力で打ち負かしたのだから。

『亜夢ちゃん、素直じゃないんだから』

と今度は亜夢のトランサーの中のジャスミンが。どうやら彼女も気がついたようだ。

「それよか、そんな暗い顔しない！ まだ地球が滅びるとも、FM王が倒せないとも確実に決まったわけじゃないじゃん？」

どうやら、話は初めから全て聞いていたようだ。

「あと三日時間があるんだし、考えれば答えが出るかもよ？ 何も行動しないよりマシだし、ね？」

暗い1人と2体に慰めるように同意を求める。

「……そうだね、とりあえず今日はもう帰ろう。明日も早いし」

時刻は既に8時を回っている。あれだけの戦闘の後なのにそこまで

時間は経っていなかった。けれども、子供が出歩くにはもう遅い時間帯である。

「そういえば、ヘルクレスはこれからどうするの？ 何なら家に来れば良いよ？ まあ家と言ってもウエーこのブスキャナーの中だけだ」

「……そうだな。一緒に居たほうが何かと都合が良いかもしれんな」

「はア！！？ ちょっと待てよ！？ つまり、こいつと同居しろってことかア！！？ 嫌だぜ、俺はそんなの！ 大ー2人もは入れる程広かねエよ！？」

納得したヘルクレスとは裏腹に、ウォーロックは納得していない様子だ。否、嫌がっているようだ。

「我慢しなよ、それくらい」

「それくらい！？ お前にとってはそれくらいでも、俺にとっちゃ大問題なんだよッ！」

吼えるウォーロック。だが、その言葉はスバルには届かない。

「じゃあ宜しくね、ヘルクレス」

「忝い」

「って聞けエエエエエ！！」

そんな様子を亜夢とジャスミンは静かに見ている。ただし、ところどころ笑いながら。

「じゃあまた明日」

「うん」

亜夢の言葉にスバルは頷く。その後、亜夢は電波変換してその場を後にして帰っていった。その時間ダイクの力の影響を受ける事はなかったようだ。

「僕達も帰ろう」

『おい……マジで俺の家に入ってくるのか?』

まだ言ってる、とスバルは心の中で呟く。流石に可愛そうなので

「……分かった。明日アマケンにウェーブスキャナーを貰いに行こう」

と、ウォーロックに言う。その瞬間、ウォーロックの顔に笑顔と言うものが帰ってきた。

「（貰えるかわからないけど）」

貰えたら吉、貰えなかったら凶だ。貰える確率はかなりと言って良いほど低い。まず、アマケンでは今トランサーの新開発をしているらしいのでウェーブスキャナーはその部品と化しているかもしれない。

「じゃあ行くよ」

その後電波変換し家に帰り、あかねがいつものように笑顔で出迎えてくれたのは言うまでもない。

## その頃 アマケン

天地はアマケン職員が全員（宇田海以外）帰宅した後、アマケンの中心地点にある司令室のようなフロアでパネルを操作しながら何か調べ物をしていた。フロア内のモニターには宇宙空間が映しだされている。たぶんこれはアマケンにある電波望遠鏡による映像だと思われる。

「FM星か……先程からの妙な電波反応と関係があるのか？」

天地の言う妙な電波反応とは、先程天地が帰ろうとした直前にトランサーに反応があった微弱な電波らしい。

「……っ!？」

宇宙空間の映し出されている映像を徐々に動かしていくと何かの衛星のような物を発見した。その衛星のような形をしたものには見覚えがある。

「まさかつ……!」

その映像を拡大してみると、そこには“絆”と一文字だけそう記されてあった。

「やはり……これは“宇宙ステーション絆”の一部……! まさか先程の微弱な電波はこれによるものか？」

本当の宇宙ステーション絆より小さく、所々切り離された跡が見られる。たぶんこれは宇宙ステーション絆の切り離された一部であろう。

天地はパネルを操作し、電波望遠鏡のある機能を使う。ある機能とは、スバルのビジライザー同様に電波やウェーブロードなどを映し出すことができる機能のことだ。

「……これはっ!？」

地球抹殺まであと三日



## 第88話 タイムリミットは三日（後書き）

いやあ、丁度一週間ぶりの更新ですねえ……本当にすみませんm  
——) m

てか、一週間掛けた割りに短い……。

はい、お気づきの方もいらっしゃると思いますが、この話はアニメ路線に移すための繋ぎの話です。あははは、一週間掛けて繋ぎの話も掛けないとは……もう少し頑張ろう(´・`・;) )

というか、あまりにも不死宮が空気過ぎて皆さん忘れてましたよね。あれ、戦っている間もずっと気絶してたんですよ。書いてる自分でもどこで出そうか迷っていたら、最終的にこの話でサテラポリスに連れて行かれてしまったというオチ(?)に……。

真・〜っていうと何かの技の響があるんで、真・電磁波ボールっていうのはこの話だけでしか呼ばないことにします。次からの話からは名前は電磁波ボールで。まあだったら書くなよって話になります。が、そこはスルーで。

もしあれば誤り字、脱字の指摘してください……てか、誤り字多い気がする……。

今日は5時間しか寝てませんが、いつもの土曜日)というか日曜日)に寝るより長いほうですよ。毎週この日は4時に寝て4時間後に起きますから) 早く寝ろ!)

第89話 告白（前書き）

告白って言っても「愛の」ではないですよ？  
（ そんなこと思う  
のお前だけだろ ）

## 第89話 告白

### 宇宙ステーション絆

スバルの父親大吾が乗っている“絆”は今まさにFM星に向けてブラザーバンドを送信し続けている。絆が送信しているブラザーバンドとは簡単に言えば一種の電波だ。

しかし、その絆に向かってやってきている黒い影。狼のような姿をしたその黒い影はウェーブロードを駆け抜けている。

ヒュイイイイイン・ドカアアアアン

そして、宇宙ステーション絆は青い光を発した瞬間………爆発した

『ッ！！』

という夢を見たウオーロックは目を覚まし、ガバツと状態を起こす。はあはあと息を荒くして呼吸をしている。かといってウオーロックは酸素を吸って二酸化酸素を吐いているわけではない。

見渡すと、ここはスバルの部屋。電気を消しているため今は夜なのは間違いない。だが、そんなことは分かっている。先程のあれは夢なのだから。

『はあ…はあ…』

『どづつした？』

不意に横からヘルクレスが尋ねてくる。どうやら、ウォーロックのせいで目が覚めてしまったようだ。

『……いや、なんでもない。ただの夢だ』

『…そうか』

返事を聞いたヘルクレスはそれ以上聞こうとはせず、そのまま眠りにつく。

『（……やな夢だぜ）』

そう言って、ベッドの上で眠っているスバルを目を向けた。その後静かにウォーロックも眠りについた。

「行つてきまーすっ！」

「車に気をつけるてね！」

「はい！」

玄関からスバル、リビングからあかねの声が家中に響く。

スバルはカバンを持ちボタンツというドアの閉まる音共に家を出る。あかねはリビングにあるダイニングテーブルの上にある食器を片付けている。勿論2人分の食器だ。

だが、キッチンに食器を持っていく前に、部屋にある棚に近寄る。その棚の上にある、青空の下タンクトップを着ている大吾が小さい頃のスバルの肩に手を置いている、写真が入っている写真立てがある。それを両手で大事そうに持つ。

「あんなに元気に学校に行くなんて……スバルは強くなつたわ、大吾さん」

その写真に話し掛けるように言葉を発する。その後その写真立てを胸によせ抱きしめる。

登校中

スバルはいつものように登校する道歩いている。その10メートル程後ろに委員長を含む3人組がスバルを観察するようにスバルの背中を見ている。

「不登校だった頃の星河君が嘘みたいね」

「委員長の教育の賜物ですよ」

「まあね」

「ご機嫌の委員長に、何を教育したのだ、とツッコミたくなる。因みに、スバルが登校するようになったのはウォーロックのせいである事は言うまでも無い。」

「あれ？ 止まったぞ？」

「「えっ？」」

2人顔を見合わせて話していた委員長とキザマロはゴンタの一言で視点をスバルに向きなおした。すると、確かにスバルは交差点に差し掛かるところで立ち止まっている。普通ならそこを右に曲がって

道路を横断していく筈なのだが。

「どうしたんでしょう?」

キザマロが言ったその刹那、交差点を右に曲がり道路を横断せずに左に曲がって駆けて行った。

「あれ…学校とは反対方向だぞ。何処へ行くんだ?」

走っていく様子を眺めるように顔だけ動かしてスバルを見ている3人。その3人は周りから見ると、頭の上に疑問符が浮かんでいるように見える。

「……さてはサボリ癖の復活ですかあ?」

メガネの縁を人差し指と親指でクイツとしながら言う。その刹那

「何ですってえ!?! 委員長の私の目の前で! そつは行くもんですか!?!」

委員長の怒りが爆発し、スバルと同じ方向に駆けて行く。

「「委員長!」」

「グズグズしないで追うのよっ!」

走りながら、後を向きゴンタとキザマロに命令する。それに背くことが出来ない2人は委員長の背を追うように走り出す。

その頃スバルはアマケンに向かって走っていた。すると、もう直ぐそこにアマケンが見えてきた。もう少しで中に入ろうとした瞬間

「待てえっ！」

ドンッ！

「うわあ！？」

ゴンタのボディプレスによって取り抑えられてしまった。2人はアスファルトの上に倒れる形になる。

「ふっはは！ 学校をサボろうたってそうはいかねえぞ、登校拒否！」

勝ち誇ったようなゴンタ。この前は簡単に脱出してしまったので今度はそうはいくまいと、強めに体を上から抑えている。

「何言つてんだよ、ゴンタ！ 離せよ、アマケンに用があるんだ！」

「大人しく学校へ行くんだ！」

「宇宙ステーションの一部が発見されたんだ！」

「何っ！？」

スバルのその言葉を言った後、ゴンタは体を起こしスバルを自由にした。勿論、詳しく話を聞くためだ。



「宇宙ステーション？」

その後、委員長とキザマロが追いついて質問した。

「父さんの宇宙ステーションだよ！」

アスファルトの上に倒れていたスバルはゆっくりと立ち上がり、3人に言い放った。

## アマケン

アマケン内の司令室のようなフロアに天地、宇田海スバル同様、委員長達も来ている。すると、天地がパネルを操作しモニターにアマケンの電波望遠鏡による宇宙空間の映像を映し出す。

「昨日微弱の電波を感知したため、アマケンの電波望遠鏡がFM星を観測中、偶然爆発した宇宙ステーションの一部と思われる浮遊

物を発見した」

映像には昨日天地が発見した衛星のような浮遊物を映し出す。

「その後の調査で正確には宇宙ステーションに搭載されていたブラザーバンドの送信システムである事が分かった」

「ブラザーバンドだって!？」

「何ですか、ブラザーバンドって?」

2、3年前、この宇宙ステーションが飛ばされる前後でニユース等で、ブラザーバンドについて説明があつていたかもしれない。しかしそんな話し、まだ小さかった委員長達はそのことを覚えていなかった。

「スバル君のお父さんの研究で宇宙の知的生命体との友好を目的に作られた特殊な電波なんです」

パネルを操作し映像を変え、宇田海がブラザーバンドについて説明する。

「へえ、よくわからないけど凄いなお前の親父さん」

「ブラザーバンドの実験中、これを敵対行為と取ったFM星人によって宇宙ステーションは破壊された……」

先程の宇宙ステーションの映像に戻しながら天地が説明する。

「だが、この装置は宇宙ステーションから切り離され、もうエネルギー

ギーは存在していない筈なのに……」

ピッ！

天地は電波望遠鏡の電波を見ることができ機能のボタンを押した。その刹那、その切り離されたブラザーバンド送信システムから、黄緑色の電波が送信されている映像になる。この電波はブラザーバンドの電波だ。昨日天地が驚いたのはこの映像のようだ。

「驚いたことにまだブラザーバンドを送信し続けているんだ……F M 星に向けてね」

「本当ですか!？」

『大吾だ!』

スバルの次にウォーロックの音が響いた。直ぐにウェーブスキャナーをスバルは見るが、誰も居ない。外に出ているのだと直ぐ認識したスバルはビジュライザーを掛けて前を見る。

そこにはウォーロック、ヘルクレスの姿がある。だが今用があるのはウォーロックだ。

「ウォーロック、今なんて言ったの!？」

『大吾だ! あの装置の中にお前の親父さんの存在を感じる』

「父さんの!？」

「星河君? 誰と話しているの?」

先程から誰も居ない場所に向かって叫んでいるスバルに尋ねた委員長。しかし、スバルから返事は帰ってこなかった。どうやら聞こえていないようだ。

「父さんはやっぱり生きてたんだね、そうなんだねウォーロック！？」

『今度こそ全てを話す時が来たようだね、スバル』

ウォーロックのその言葉にスバルは静かに頷いた。

ヘルクレスは先程の話を静かに聞いていた。ウォーロックの話しを全て悟っているかのように。

場所は先程とは違う、宇宙ロケットの姿が見える渡り廊下のような側面を透明のガラスに包まれた通路。そこに天地とスバル、ウォーロックとヘルクレスが居る。ヘルクレスについては先程この場所に移動する途中で天地に説明しているので天地に驚きは無い。

「じゃあ僕は席を外すよ」

「天地さんも一緒に居てください。さあ、教えてくれウォーロック」  
今にも話しを始めようとしていた時、少し遠くの方では委員長達壁  
から覗くように見ていた。

「何を話しているのかしら？　ねえ、ウォーロックって誰よ？」

「さあ…？　俺に聞かれても…」

ゴンタに尋ねるが分かる訳も無い。

「正体は分かりませんが、ウェーブスキャナーを介して会話をして  
いるようですよ」

メガネの位置を直しつつ言った刹那、後ろからオツホンツというわ  
ざとらしい咳払いが聞こえたため、3人とも後ろに振り返る。後ろ  
には宇田海が立っていた。

「ねえ、君たち。今日は特別僕の発明を見せてあげるよ」

そう言ってゴンタの背中を押してスバル達がいる方向とは逆に進ま  
せる。

「いえ、遠慮しま　」

「さあ、遠慮しないで僕の研究室へ！」

「『ええ〜！』」

嫌面しながら委員長達は宇田海に連行されていった。学校へは行か

なくて良いのだろうか？　と言う疑問はあえてスルーする。

話しは、ウォーロックの方へ戻る。

『前にも話したよな。俺はFM王ケフェウスの命を受けて9体のFM星人を率いて宇宙ステーションを襲撃した』

## イメージ

電波星人の能力を活かし、仲間たちはステーション内の電子機器に取り付き

9体の電波体は宇宙ステーションにウエーブロードへ侵入すると同時に、パネルを操作する電子機器の電腦に侵入し内側から機器を爆発させていく。ステーション内は直ぐに爆発したときの爆煙に包まれる。

そして俺は波長の合う生命体を発見してそいつの体に乗っ取った

その煙の中、ウォーロックは、壁際でパネルを操作している1人の青年の姿を見つけた。どうやら波長の合う地球人らしい。

『こいつは好都合だ！』

そう叫んだ刹那、パネルを操作している青年はウォーロックの方に振り向いた。その青年はスバルと同じビジライザーをしてウォーロックを見ている。ビジライザーのお蔭でウォーロックの姿が見えているようだ。

だが、そんな事はお構いなしにウォーロックはその青年に突っ込んだ。

「うわあああああああああ！！！」

「それが父さんだったの？」

『そうだ。星河大吾だ。俺は人間と電波変換して一暴れするつもりだった。ところが、大吾と合体した俺はまるで体を電気が帯びるような衝撃を受けた』

『ウワアアアアアアアアア！！！！』

合体、電波変換しようとした瞬間悲鳴を上げたウォーロック。次の瞬間、黄緑色の空間に大吾と2人で向かい合って立っていた。

何故だか分からんが、異性人に対する憎を氷が溶けるように消え、反対にFM王とFM星人に俺は疑問を覚えた

「ブラザーバンドだ」

『ブラザーバンドオ？』

「我々は今、ブラザーバンドで結ばれているんだ。私は地球人、星河大吾」

『俺はFMプラネットのウォーロックだ』

ドカアアアアアン！！

2人が空間に包まれている間、何度も機器が爆発し、ステーションはほぼ壊滅状態に陥っていた。乗組員<sup>クルー</sup>は怪我をしている人も居れば爆発に飲み込まれて倒れている人も居る。

が、その時宇宙ステーションは火の海と化していた

『お前だけは助けてやる』

「駄目だ！ 仲間を見捨てて自分だけ助かるうとは思わない！」

その刹那、ウォーロックと大吾を包んでいた黄緑の空間は音を立てて消滅し、中から大吾とその隣にウォーロックが現れる。

現実世界の戻ってきた刹那、大吾は負傷者がいると思われる場所へと駆けて行き炎の中へと突っ込んだ。

『大吾！』

炎の中を抜けるとそこには傷つき倒れているクルーの1人を発見した。気絶しているように見える。直ぐ様大吾は近づき声を掛けて反応を確認する。

「しっかりしろ！」

「…ゴホツゴホツ！ 星河…チーフ……」



苦しそうに大吾の名を呼んでいる。どうやら煙を吸って酷く衰弱しているようだった。

『こんな所にいたか』

すると、ステーション内の天井辺りから白鳥のような姿をした電波体の声が響いた。キグナスだ。

ジジッ！！

キグナスは呟いた刹那、大吾達の近くにある太い電子ケーブルが繋がれている電子機器の電腦に入り、電気を帯びた電子ケーブルを抜き取りそのケーブルで大吾達に向けて操作した。イモムシのように動いているそのケーブルは今にも襲ってきそうだった。

バチバチバチバチバチッ！！

だが、その刹那ウォーロックがキグナスの入った電腦の中へと入り音を立てて2秒後に黄緑色の光と白色の光が同時に光の速さで外に出た。

ジジジッ…バタンッ！

その刹那、電気を帯びていたケーブルは電気が消失し、力を失ったようにその場に倒れた。

「っ！ ウォーロック！」

大吾は先程上に向かった両者の光を目で追いかける。するとそこにはウォーロックとキグナスが向かい合っている。

『何の真似だ、ウォーロック!?』

『俺にも分からねエ！ ただFM星に嫌気がさしたのさ!』

『裏切るのか貴様!?』

『黙れエ！ テヤアアア!!』

ウォーロックから先にキグナスに突っ込んだ。だが、危なくキグナスはウォーロックの攻撃を避けた。その後、黄緑色の光と白色の光ウォーロック空中で何度もお互いにぶつかり合う。キグナスは

だが、キグナスは逃げるように周波数を変えて姿を消した。

『ッ……ッ』

ウォーロックは直ぐに追おうとしたが、今はそれほど頃じゃない。先程大吾が居た場所を見ると既に紅い炎に囲まれ逃げ場を失っていた。

「ゴホッゴホッ！」

もう酸素ではなく煙を吸ってしまう危険な状況へと化していた。もう誰も助からないと思うであろう。

『……仕方ねエ、最後の手だ』

「最後の手?」

大吾の許へ降りてきながらそう呟いた。ウォーロックの言う最後の

手……この絶望的は場所から助かる事が出来るのだろうか？

だが、ウォーロックの言った言葉は思いもよらぬ言葉だった。

『ステーションの全員を電波生命体に変換する』

「電波生命体！？」

『お前たちは肉体は失うが、電波として命を永らえることは出来る』

ゼット波。それは一部の電波体が発生させる事が出来る特殊な電波の事。そのゼット波は地球人などの電波生命体以外の生命体の肉体に有毒を齎してしまう危険な電波だ。少しぐらいなら害は無いが、長い間浴びすぎると肉体が電波生命体へと変換してしまつらしく、電波変換とは違って一生元には戻らないらしい。

つまりウォーロックはそのゼット波を浴びせ、この絶望的な場から打開しようと言っているのだ。

「……そんな事が可能なのか？」

『迷ってる暇はねエ！ 今はそれしか助かる方法はねエんだ！』

ドカーンッ！！ ドカーンッ！！

数回ステーション内から爆発が聞こえる。もうステーションは持たないと表しているのだろ。時間は無い。そんな中大吾は少し悩み決断した。

「ウォーロック……」

コクツと深く頷いた。答えはYes。

『ウォーロックウツ!!』

だが、それを聞きつけたかのようにウォーロックの後ろにキグナスがもうスピードでやってきていた。だが、一足遅かった。

ヒュイイイイインツ!!

ウォーロックから青色の膨大の電波光が発生され、ステーション内を光が包む。

そしてその刹那、

ドカアアアアンツ!!

宇宙ステーション絆は爆発した。宇宙空間にビジライザーを残して。

「人間を電波生命体に……?」

話しが終わり、ウェーブスキャナーを右手に持っている天地がウェーブスキャナーに話すように言う。何故ウェーブスキャナーを持っているのかは、天地はビジライザーが無いいためウェーブスキャナーを通じてウォーロックの姿を見ているからだ。

『FM星人の中でも俺にだけ備わった能力だ』

『（ウォーロックにだけ……か）』

今まで黙って全てを悟っているかのように聞いていたヘルクレスは心の中で呟いた。

『確かに大吾は生きている……電波生命体としてな』

「そうだったのかあ、ウォーロック！ 君は父さんを助けてくれたんだね！」

自然とスバルは笑顔になった。大吾が生きていると聞いて安心したように、スバルは笑顔をウォーロックに向ける。

ウォーロックはそんなスバルから目を背け続ける。

『だが、どう言い訳したところで宇宙ステーションに襲撃したことは事実だ。……すまん、スバル』

今度は目をスバルに向けて謝罪した。だが、スバルはそんな事は気にしていないようだった。大吾が生きている。ただそれだけで良かったのだ。

「ウォーロック、君はさつきブラザーバンド送信システムに大吾先輩の存在を感じると言っていたが……」

『ああ、大吾だけじゃねえ。電波生命体となった宇宙ステーションのクルー全員を感じるぜ』

「実はその後の調べて分かったんだが、1ヶ月前からFM星の周波数大域が急激に変化し続けているようなんだ」

天地は前日、FM星近くの“宇宙ステーション絆”の一部を見つけ、その後アマケンに残っていた宇田海と共に調べた結果、そのような数値がでたようだ。

「FM星で何か起きているようなんだ」

「……父さんと何か関係あるの？」

2人は尋ねるが、ウォーロックは首を横に振った。だが、何も分からなかったが呟いた。

『1ヶ月前……確か、フェニックスがFM星に一時帰還したのもそれくらいだったな』

『……ッ！まさか！』

すると、先程まで黙っていたヘルクレスが何かを思い出したかのようについに声を発した。

「どうしたの？」

『……一から考えてみたのだ。FM王が何故急に電磁波ボールを使い地球を急ぐように抹殺しようとしているのか理由をな』

この時まだヘルクレス以外誰も気がついていなかった。FM王が何故急に地球を抹殺を急いだのかを……

## 第89話 告白（後書き）

ふう、何か凄い書く気が湧いてきたんで二日書いたのをまとめて上げました。何だっけ……こういうのおもしれえ病って言うのかな？

あ、少し補足を。分かっているとは思いますがイメージというのはウォーロックの記憶を描写したものです（もっとも描写といえる描写になっていませんが）。あとイメージ中の“ ”

”というのはウォーロックが現代喋っているときを表します。イメージ中の『』はイメージ中の電波体です。

他に天地は電磁波ボールのことにFM王による電磁波ボール出現日も知っています。ヘルクレスと一緒に説明したことにしているので。

うわあ、今回補足多いなあ……。まあ伏せん混じらせたし良しとするか（なにが良し！？）

まあ皆さん分かることですよ。アニメでやってたんですから（笑）

では、感想、誤り字、脱字など待ってまゝ

第90話 プラザーバンド(前書き)

タイトルとまったくと言っていいほど関係ないですが、まあいいで  
しょう(笑) ( いいのか!?)



## 第90話 ブラザーバンド

『…一から考えてみたのだ。FM王が何故急に電磁波ボールを使い地球を急ぐように抹殺しようとしているのか理由をな』

『……何だよ？ もったいぶらずに話しやがれ』

急かすようにウォーロックはヘルクレスに言う。ヘルクレスは一旦目を瞑り考えた後目を開け何かを決心したように言い始める。

『…貴公等は何故ステーションを破壊するようウォーロック達にFM王が指示したと思う？』

その問いにスバルが答える。

「ブラザーバンドを敵対行為だと思ったから」

『そう。ならば簡単だ。FM王が今も変わらずそのブラザーバンドに敵対行為があると思った場合どうなると思う？』

『ッ！ なるほど。その電波の元が地球にあると考え、地球を完全に抹殺することでブラザーバンドが消えると考えたのか。そのためにフェニックスを使い電磁波ボールの完成を急がせ、完全に消滅させ元を断とうということか』

ヘルクレスの問いにウォーロックが続けると、スバルと天地は絶句した。

『そうだ。あくまで某の推測だがな。別に電磁波ボールを使わずと

もアンドロメダの鍵を使えばフェニックスを使って実験のような真似はさせなかったはずだ。だが、何しろその鍵は貴公等が持つていたからな、アンドロメダを使って地球を抹殺することが出来なかったため電磁波ボールを使う事になったのだろう」

「だが、周波数大域が急激に変化したのは何故なんだ？」

今度は天地がスキャナーを通してヘルクレスが質問してくる。

「貴公は思わぬか？ 質問攻めしてくるような奴にこれが最後と言つて答えたなら、更に粘り強く質問を繰り返してくるような奴を腹立たしいとは思わぬか？ 怒りが沸いてくるとは思わぬか？ それと同じ、敵対行為をしてくる生命体を滅ぼしたと思つたら粘り強く敵対行為をしてくるのだ。怒りが増さないわけがあるまい」

ヘルクレスが説明したことをまとめると、地球抹殺を急がせた動機は大吾達が発生させたと思われるブラザーバンドを断とうとしたため。フェニックスに電磁波ボールの実験をさせ完成へと急がせた。そして怒りが沸いたために周波数が急激に変化した。この3つのことがかかった。

考えてみれば、動機は意外と単純な勘違いだった。イラついたから破壊する。ただそれだけだ。合理的な考えではないが、殺伐なFM星人にとってこれ以上の理由は要らない。

「……なら……それなら絶対止めなくちゃ。そんな勘違いで地球を破壊されてたまるか。父さんだつて生きてるつて分かつたんだ。父さんが帰ってくるまで地球を守らなきゃ！」

最初は小声で顔を伏せたまま口を動かしていく。その後スバルは決

心しような声をヘルクレスに向けて言い放つ。今の彼は何ものにも恐れぬような、そんな目をしていた。

『あア、FM王を止めなきゃ大吾に合わせる顔がねエからな!』

ウォーロックも表情は笑っているがスバルと同じ目をしている。

『フツ……流石だな、この星の正義の英雄<sup>ヒーロー</sup>。その目、何処かの誰かにも見せてやりたいものだ』

誰かという言葉に2人は首を傾げたが今はそんなことそうでもいい止めるという選択は出たが、どうやって止めるかが全くと言っていいほど案が無い。

全員頭をフルに回転させ考えてみることにする。

……考えた結果、FM星まで行くことはやはり無理だろう。あと二日以内という短時間で何ヶ月も掛かるFM星に行くのには無理がある。

「……FM王が電磁波ボールを出現させるって事は地球に現れるってこと?」

不意にスバルが尋ねる。その問いには無論ヘルクレスが答える。

『たぶんな。確信は出来んがその可能性はある』

ピピピピピッ!

すると、不意に天地のトランサーから音がする。どうやら着信音のようだ。天地は直ぐにトランサーを開け、通話を開始する。

「私だ」

トランサーに映っていたのは若い男性だが、アマケンの作業着を着ていたのでアマケンの職員のようなのだ。

《街にFM星人が出現した模様です！》

「FM星人だと!?!」

「カカツ!カカツ!」

### コダマタウン市街

街では何度か爆発が起きていた。高いビルが何棟も立ち並ぶ内の一つが20メートル近いところで小さく爆発。人が歩いている道路で爆発。無論全てFM星人の仕業だ。

市街に居た人たちはその爆発から悲鳴を上げながら逃げて行く。

『オアアツ!!』

オックス・ファイアは自慢の巨漢で力を利用して近くにある自動車を持ち上げ投げ飛ばし爆発させる。

『ホリヤアツ!!』

クラウン・サンダーは自分自身から電気を発生させてアスファルトをエグツていく。

『アアアツ!!』

ウルフ・フォレストは大きな爪でビルを横に切り裂き破壊する。

『又ウウツ!!』

リブラ・バランスは自らを回転させ自動車、ビルを巻き込みながら破壊している。

『デアアツ!!』

そしてオヒュカス・クイーンは自分の長い尾を自動車に絡みつけ、それを武器のように器用扱っていく。

その5体の電波人間がいる場所の中心部にあると思われる高層ビルの屋上にはキャンサー・バブルがアンドロメダの鍵を持って破壊する有様を見渡している。

『ダーハツハツ!! マイナスエネルギーで満タンにするブク!』  
その後暫くキャンサー・バブルはうるさい高笑いを何度か続ける。

スバルは先程まで居た通路を駆け、更にアマケンの玄関から外に飛び出した。

「行くよ、ウォーロック、ヘルクレス!」

『おっッ!』

『御意』

立ち止まってウェーブスキャナーから2体の電波体から返事を聞くと同時に

「電波変換！ 星河スバル オン・エア！」

ウォーロックと電波変換して、FM星人がいると思われる市街まで横にいるヘルクレスと共に駆けて行った。

ウーーーーー！ ウーーーーー！ ウーーーーー！

街中にサテラポリスのサイレンが鳴り響く。サテラポリスの車は先程から破壊活動をしているFM星人たちのもとへ向かっているようだ。

「くそっ！ 遂に奴ら、集団で攻撃を始めやがった！」

腕を組んで仏頂面で1人車の中で怒っている。因みに車は自動運転で勝手にハンドルが動いて操作するため、ハンドルやブレーキなどを手動でしなくても良いらしい。

サテラポリスが向かっている市街では、先程より攻撃が増していた。FM星人たちは無差別に街を破壊していく。オックス・ファイアのファイアブレス、オヒュカス・クイーンのスネークレギオン、クラウン・サンダーのフォールサンダー、ウルフ・フォレストのワイドクローなどの技を自動車、ビル、アスファルトの道路などに命中させ破壊していく。

そんな状況の中、街の人々は悲鳴を上げて逃げ回っているというのに、近くのビルの屋上からその様子を平然と見下ろしている少年が1人。否、正しくは、少年1人と後ろに仮面を2つ付けた電波体が1体。

『今更何を張り切っているんだ、あの連中は？』

「下手な考えはやめて、力技でマイナスエネルギーを溜める作戦に出たんだ」

少年、ツカサが言った刹那、彼はズボンの右ポケットから右手で太陽の光が反射している球体を取り出す。アンドロメダの鍵だ。

中は空っぽのアンドロメダの鍵を見ながらツカサは呟く。

「精々頑張るがいいさ。…っ……」

その刹那、自分の頭上にあるウェーブロードを見上げた。すると、一筋の青い光と茶色の光がFM星人達の方に向かって通り過ぎていく様子が見えた。

「……ヘルクレスもいるのか…ふっ、おもしろくなりそうだ」



ツカサは口元に笑みを浮かべ目瞑り、ウェーブスキャナーについているイヤホンを耳に入れて音楽を聴き始めた。

その刹那、下の市街のところへサテラポリスが到着した。オックス・ファイアたちの50メートル程手前に止め、ドアを開けて外に出てくる。

『フレイムウエイト!』

『ファイアブレス!』

すると、2体の電波体の不意打ちと呼べる2つの炎の攻撃を繰り出した。不意に繰り出してきたためサテラポリスは車の後ろに隠れる事もできない。ましてや隠れたところで防げるわけでもない。いきなりの絶対絶命の瞬間、サテラポリス職員全員を護るように前方に薄い円状のガラスのようなものが出現され、2体の攻撃を防いだ。

「っ!? …… ロックマン!」

すると、五陽田警部がいる場所の10メートル程前にロックマンとヘルクレスが降り立った。五陽田警部たちを護った先程のあれはどつやらバトルカード、バリアのようだ、ロックマンがプレデーションしたのであろう。

「貴様また余計な真似を

」

「五陽田警部! 街の人を安全な場所へ誘導してください!」

「よし分かったあ! ……っ!? 俺に指示するなあ!」

言葉を途中で切られたにも関わらず指示に従ったと思ったら、ノリツッコミ。

だが、五陽田警部達はその指示に従うことにした。殆ど電波体相手に効果が無いウィルスバキュームでは逆にいても邪魔になる。そのため、1人を除いた職員は全員ロックマン達から見えなくなるくらいまで距離を離し、散り散りになって街の人の非難を優先させた。

『ライセンス……』

今はロックマン達、ライセンス、FM星人以外この場には誰もいない。ヘルクレスはそれならばと思い、後を向きライセンスに話し掛けた。

「久しぶりだなヘルクレス」

『ライセンス、今は話している暇は無いようだ。力を貸してくれるか？』

「ああ。勿論だ！ 電波変換！ 守護ライセンス オン・エア！」

ライセンスが左腕を天に掲げた刹那、ライセンスとヘルクレスは茶色い光に包まれる。光が晴れると、茶色いボディに背中にもマント。そのマント上に2メートルを越す大剣をも背負っている赤いバイザーをしている電波人間が立っていた。名はヘルクレス・メシア。かつてロックマンと戦った強敵の1人だ。

ヘルクレス・メシアはロックマンの左隣へと立つ。

「久しぶりだな、ロックマン。いや、星河スバル」

「ライセンスさん、行きますよ！」

「ああ！」

2人で合図をし、返事をした刹那2人はFM星人の元へと走り出す。

「ロックバスター！」

「ヘビーバスター！」

2人は同時に近くにいたオックス・ファイア、リブラ・バランスに左手のバスターを放つ。しかし、その弾は避けられヘルクレス・メシアとロックマンを挟んで囲むように回り込む。ロックマンとヘルクレス・メシアは重ね背中を合わせて、ロックマンはオックス・ファイア、ヘルクレス・メシアはリブラ・バランスをバスターを向けながら見る。

『アンドロメダの鍵を復活させようなんて、いい加減諦めろ！』

相手に向けているウォーロックが叫ぶ。

『黙れ、ウォーロック！ 元はといえばお前の裏切りが原因だ！

そして、どうやらお前もらしいなヘルクレス！』

オックス・ファイアは言ったが、ヘルクレスは何も言い返さない。言い返すだけ無駄だからだ。

『今日こそお前達と決着をつけてやる！』

そう言った刹那、2体の電波体はロックマン達の足元目掛けて炎系の技を放つ。

だが、その攻撃は同時に難なくジャンプで避けられる。そして空中にいる2人は次の攻撃の態勢に入る。

「バトルカード！ プレデーション！ プラズマガン！」

「ソードブレイク！」

ロックマンはオックス・ファイアにプラズマガンを向け放ち、ヘルクス・メシアは大剣をリブラ・バランスに振り下ろす。

その頃アマケンでは街の様子をフロアのモニターに映し出していた。

「頑張つてえ、ロックマン様あゝ！」

ロックマンとヘルクレス・メシアが戦っている映像に天地、宇田海委員長達全員がモニターに見入っている。そんな中、1人だけ質問してくる人物がいた。

「……すみません、ウォーロックって何者なんですか？」

「「え、っ？」」

キザマロだ。キザマロの不意の質問に天地と宇田海はおかしな声を上げてしまった。まるで親に悪いテストの点数を聞かれたときの子供のような声で。

「スバル君が話していた相手です。ほら、ウェーブスキャナーで」

「そついやスバルの奴がいないけど、どこ行ったんです？」

更に質問してくるキザマロと余計な事に気づくゴンタ。これをどう対処するか一瞬考えた。

「す、スバル君ならその……」

「もう、星河君のことなんて今どうでもいいでしょ！」

言葉が詰まった刹那、委員長が助け舟を出すようにゴンタとキザマロに言って黙らせる。彼女にその気があるわけではないだろうが、天地達からすると助かった一言だった。

「ロックマン様はたった1人でFM星人と戦っているのよ？」

……あれが1人に見えるのだろうか？ 本当はヘルクレス・メシアを含め2人と2体だが、委員長の目にはロックマンしか映っていないようなので1人だと思っっているらしい。

「私、応援に行かなくちゃ！」

「よしなさい！ 街は今危険だ！」

そう言っつて全員に背中を向け、後ろにあるドアからこのフロアから出て行くこうとする委員長を天地は止めた。

「でもロックマン様が……」

天地のほうに振り返り訴えかける。

「君が傍らにいたらロックマン様…あ、いや、ロックマン達は思う存分に戦えない。だろ？」

「だつてえ……」

委員長を縮こまり言葉を返せなくなった。確かにロックマンの傍にいて、もし自分に攻撃してきたらロックマンが体を張って護り、攻撃を受けて倒れたりするかもしれない。自分が足手まといになる。そう思うと委員長は言い返せなくなった。

ロックマンとヘルクレス・メシアは二手に別れて戦っている。ロックマンがクラウン・サンダー、キャンサー・バブル、オックス・フアイアを相手にし、ヘルクレス・メシアはウルフ・フォレスト、オヒュカス・クイーン、リブラ・バランスを相手にしている。

『フォールサンダー！』

クラウン・サンダーは電撃をロックマンに放つ。地面に当たると同時に電気による爆発が生じたが、ロックマンはギリギリで周波数を変え、その場から離れた。

『逃げおつたか……』

ロックマンはクラウン・サンダーの数メートル程離れてはいたが背後へと回った。そしてウォーロックを向けロックバスターを放とうとした刹那

『ブーメランカッター！』

ロックマンに声と共に鉄のブーメランが背中に直撃した。キャンサー・バブルの仕業だ。

「ぐはっ!？」

不意打ちをしようとして不意打ちにあった。ロックマンはそのいきなりの衝撃に耐えられるわけもその場にうつ伏せで倒れた。

その頃ヘルクレス・メシアは…

『ハウリンググウルフ!』

「サウザンドソード!」

ウルフ・フォレストが放った三匹の緑色をした狼を大剣で目にも留まらぬ速さで何度も切りつけ切りつけ、狼をサイコロサイズに細かく切った。刹那、狼は電波と化し消えていく。

『スネークレギオン!』

「おっと!」

ヘルクレス・メシアは左横から来る数匹の蛇を難なく周波数を変換して避ける。

その後、オヒユカス・クイーンとウルフ・フォレストの後ろに現れた刹那、

『ヘビーウェイト!』

頭上に直径5メートルはありそうな分銅が出現し落ちてきた。

「何い!?!? ぐわああああ!」



その分銅に避ける事も出来ず、仰向けで潰された。潰されて数秒後に分銅は姿を消した。だが、ヘルクレス・メシアは倒れたまま起き上がれなかった。

すると、別々の場所でロックマン、ヘルクレスメシアの周りにFM星人達が取り囲んだ。

「くっ！」

「これってピンチって奴か…？」

ロックマンは囲まれていた事に絶句していたが、ヘルクレス・メシアの言葉は少しのんきだった。しかし頭の中ではやばい、と思っっているらしい。

『これが裏切り者の末路だ。お前を始末したらゆっくりマイナスエネルギーを溜めるブク/溜めさせてもらう』

別々の場所でオヒュカス・クイーンとキャンサー・バブルは同時に言った。

瞬間、FM星人から不気味な笑い声が響き始めた。

『『『『（どうすれば……）』』』』

ロックマン達は頭の中で必死にこの場を打開する方法を考えていた。ロックマンにはスターブレイクという力もあるが、生憎使おうとする瞬間にカードを敵に弾き飛ばされるのがオチだろう。

そんな最中、どこからともなく歌声が聴こえてきた。

### ロックマン側

【 例えばこの先 二つの心が 】

「っ!?! ……これってまさか!」

ロックマンはこの歌に聴き覚えがあった。

『ハッ! この歌声はミソラっち!』

と、どうやらキャンサー・バブルも聴き覚えがあるらしい。それもその筈、彼はこの歌を歌っている女の子のファンなのだから。

### ヘルクレス・メシア側

「 悲しみに潰されそうでも そんな顔はやめて 」

「 『 『 『 ツ!? 何だ!?』』』』 」

ヘルクレス・メシアも合わせ、FM星人は驚き混乱してた。

だが、ヘルクレスはこの声を聞いた事があるような気がしていた。  
しかし、何処聞いたのかわからない……

【 違う夢見ても そばにいるから 】

『 いたぞ、あそこだ! 』

そしてキャンサー・バブルとオックス・ファイアが、声が聴こえてくるビルの屋上に振り向き発見する。すると、そこにはギターを弾いて歌っているハープ・ノートが立っていた。

「 グラビアなんて大っ嫌い! ハープ・ノート推参! 」

「 ハープ・ノート…! 」

「 助太刀するわ、ロックマン! 」

そう言うとビルから飛び降り、周波数を変えてロックマンの隣に現れる。何故ここにいるのかと言うと……嫌いにグラビア撮影のために海外に飛行機で言っていたそうだ。するとその飛行機の中のラジオでFM星人がコダマタウンで暴れていると聞きつけたため、鬱憤晴らしに金田にトイレに行くフリをして電波変換してやってきたそうだ。要するにストレス発散にここへ来たと言う訳だ。

『何だミソラっちじゃなくてハーブ・ノートかブク…』

少し伏せて落ち込むキャンサー・バブル。中の人はその人だと知らずに……。

『何処だ!?!』

オヒュカス・クイーンは辺りを見渡し声が聴こえる方を探す。だが、何処にもそれらしき影、それどころか人っ子一人見当たらない。すると

「お飾りのCheapなPrideは捨ててしまおう」

ザンツ!

「グワアアツ!!？」

声が聴こえた刹那、リブラ・バランスが背中を切られた。誰もいない筈の場所で後ろから。

「太陽のもとで瞳そむけずに生きていこう」

ザンツ!

「何イツ!!?」

聴こえた刹那、今度はウルフ・フォレスト。次々とFM星人が見えない敵に切られていく。何が起こっているのか全員頭を悩ませていた。

「そつだよ 笑いたい はしゃぎたい素直に 感じられる 眩しいHappiness」

きっとこの歌を歌っている主がダメージを与えているのさだろうが、その歌っている主が先程から見えない。本当、空気のようになっているのさだろうか…?

「絶対あきらめない 誰にも奪えない夢がある」

すると、今度は3体を包めるほどの大きな竜巻が発生する。

「グワアアアアアア!」

その後3体はその竜巻に呑まれ、上へ上へと上昇していく。

「今すぐ 伝えたい 掴みたい あせらず 深呼吸して」  
刹那、竜巻は消え、3体はアスファルトの地面に向かって落ちてくる。だが、3体は激突する寸前で周波数変えてヘルクレス・メシアの20メートル程先に着地した。

「太陽が似合うよ とびきりの笑顔 見せて」

すると、歌が歌い終わったのであろう瞬間にヘルクレス・メシアの前にある人物が現れた。その姿はヘルクレスも一度見ている。夜あるビルの屋上から帰っていく様子を。

『フツ、誰かと思ったら貴公か』

「助けてやったのに何その態度？ お礼の一つでも言ったら？」

『いや、感謝している。忝い』

「べ、別に嬉しくないんだからね？」

『あらあら、素直じゃないんだから』

そこにいたのは腕を組んで顔を合わせずにそっぽを向いているジャスミン・ハートだった。

## 第90話 プラザーバンド（後書き）

はい、助けながら歌わせてみました。まさかヘルクレスとジャスミンが組むとは昨日まで思いつかなかっただろうなあ（笑）

それにしても……背景描写落ちてませんか？ 何かどうも調子でなくて…トランプ？（スランプ！）

しかも後半が…なんか更に駄文…orz

あ、話は変わりますけど明日、NHK6時10分のMJにミュージックジャパン亜夢が歌っている声をやってもらっている（私の脳内では）声優歌手の水樹奈々さんがです。アルバム収録の新曲を歌うそうです。（嘘です）

奈々さん知らない方は、お暇があれば見ることをお勧めします（笑）

てか、来週（明日の日曜日から）奈々さんテレビに出すぎですよ。MJにとんねるずの食わず嫌い王にも出ますし……まあなんやかんだ言って絶対見ながら録画するんですけど（笑）

では、感想などお待ちしております

## 第91話 決意(前書き)

遅れましたあ (<|>) 最終話までのプロットやら学校の宿題み  
たいなのやってたらもう4日も経って…orz

サブタイの決意って言うほどの決意でも無いかも…



## 第91話 決意

「……おい、ヘルクレス。こいつと知り合いなのか？」

とヘルクレスへの質問。

ヘルクレス・メシアこと、ライセンスは今、「いきなり女の子が歌いながら出てきて助けてくれた」以外に、「何だこいつ？ それにこの格好俺たちと同じ電波人間？ それにあの強さ。そして何よりヘルクレスが礼を言った後のあれ。ツンデレですか？」と他にも多数脳内に疑問が浮かんでいる。それをまとめて質問したのが先程の言葉だ。

『あア、先日深い訳があつてな』

何があつたらこんな子が助けに来るんだ、とツツコミたくなるがそれを心の中で抑える。

しかし、この姿は何処かで見たとあるような気がしていた。

「（確か何度かロックマンの近くに居たような気がする……：ハーブ・ノート？ いや、もう1人のほうだったかな？）」

まあジャスミン・ハートはあまりサテラポリスなどの人前に出ていないので知名度が低いのは無理もない。

しかし、考えるのは後だ。まずは、目の前にいるアスファルトに叩きつけられそうになって周波数を変え、何とか助かった3体のFM星人を倒す方が先だ。

「で、助けに来たけどどうする？ 協同戦とか？ 何ならあたし達だけでも倒せるけど？」

『いや、かりを作るのは趣味じゃない。ここは協同戦だ』

と、何故か勝手に話が進んでいる。そうこうしているうちに目の前にいるFM星人は睨みつけてくる。

『1人で倒せるだア？ 舐めやがって！』

すると、ウルフ・フォレストが怒り溢れたような殺気を放ちながら声を出す。

『2人で我々を倒す気にいるのか？』

『フツ、やれるものならやってみろオ！』

そうリブラ・バランスが最後に言った後、3体はヘルクレス・メシアとジャスミン・ハートの方へと飛び掛った。

刹那

「風の舞 突風！」

ジャスミン・ハートが扇子を横に一扇ぎさせ、飛び掛ってきた3体をもの凄い風で地面に足をつかせた。

『クッ！』『クッ！』

手を前で顔を隠すように組み、その場に吹き飛ばさないように持ちこたえる。だが、それが仇となった。

『……ッ!? 消えた!』

風が止んだ後に前を見たが、もう既に姿がなかった。たぶん、周波数を変えて移動したのだ。

「さて、行きますか!」

その声が聞こえたのはリブラ・バランスの後ろからだった。

それに気づき、振り返ろうとしたリブラ・バランスにヘルクレス・メシアは、

「サーベルアタック!」

ブウン、ドオンッ!!

上から下へと2メートルもある大剣を音速で振り下ろし、リブラ・バランスの頭に叩き付けた。

『グワアアアアアアアア!』

リブラ・バランスから悲鳴が上がる。叩き付けたリブラ・バランスの足元にはクレーターが出来ている。つまり、それ程今の一撃は強大なものだったのだ。

『リブラ!』

「風の舞 竜巻！」

『ッ!? チッ!』

今度はジャスミン・ハートがリブラ・バランスの方を見ていたウルフ・フォレストの後ろからに攻撃しようと半径5メートル程の竜巻を発生させた。先程3体の電波体を上空に上げた技のようだ。

だが、ウルフ・フォレストはギリギリで後ろに素早く飛んだ。だが、しかし。そちらには何があっただろうか？

「ご苦労さん。ソードブレイク！」

『ッ! しまっ』

バコオーンッ!!

た、といおうとしたが、時既に遅かった。ウルフ・フォレストの頭から背中までを、何か粒子を放出していた大剣に叩きつけられた。否、空中の電波を吸収して力を溜め込んでいた大剣で、溜め込んだ電波を放出させながらウルフ・フォレストを叩きつけたのだ。ウルフ・フォレストは呻き声が上げられないほどの痛みを体中受けながら倒れていた。ウルフ・フォレストの電波、つまり周波数に合わない電波を放出させながらヘルクレス・メシアが叩きつけた為、ウルフ・フォレストの電波が反発しあつたためであろう。反発しあつた電波は電波人間の体を保つ事が出来なくなってしまうのだ。

先程ジャスミン・ハートがウルフ・フォレストを攻撃した方向は、リブラ・バランスの方の反対側から。つまり、リブラ・バランスの

反対側を前にして後ろに飛んだため、ヘルクレス・メシアがいたのだ。それはまるでそこに行くように仕組まれていたかのような現状に見える。

『ウルフ！ くツ、スネークレギオン！』

2体が殆ど一発で戦闘不能にさせられたため、残るはオヒュカス・クイーンだけとなっていた。そのオヒュカス・クイーンはヘルクレス・メシアに蛇を2体投げつけた。

「無駄だ。ダークバスター！」

2体の蛇に向かって二発、漆黒の弾丸を放った。その弾丸は蛇に当たった刹那、火の粉を放ち、蛇を燃焼させた。蛇は灰となって空気中を舞う。

『何ツ！？』

「風の舞 風月漸！」

『ツ！？』

ザンツ！

いつの間にかオヒュカス・クイーンの背後に回っていた。誰にも気づかれないように速度を追い風で上げて見えなくする“風の舞 風速”を使ったのだろう。最初の気づかれないように回ったのもこの技を使ったからであろう。

『ウワアアツ！！』

オヒュカス・クイーンは切りつけられると、リブラ・バランス達が倒れている方向へと吹き飛んでいく。

いつの間にかそこにはヘルクレス・メシアの姿は無い。ジャスミン・ハートの隣へと周波数を変えて移動していたようだ。

「これで決める。風の舞 鎌鼬！」

そしてとどめに、扇子で空中を水平に切り、3つの鎌鼬を出現させる。

『ゴッツ!? グワアアアアアアアアアア!』『』『』

そして鎌鼬はFM星人たちを飲み込んだ。FM星人達は断末魔を上げると電波変換が解除されこの場から逃げていった。

「…………ふう、終わりましたなあ」

と、ヘルクレス・メシアは気を抜いて隣に立っているジャスミン・ハートに話し掛けた。

「……………まだスバル君達の方が残ってるよ」

だが、ジャスミン・ハートは気を抜かずに早く行こうと言わんばかりの口調で言う。

『達? という事はお主ロックマン以外にもいるのか?』

ヘルクレスが同じFM星人であるジャスミンに尋ねる。

『えエ、ハーブ……ノートが行っているわ』

「……早く行くよ」

何故かジャスミン・ハートは急かすように歩みを進め、ウェーブロードへと移る。

「（……そういうことか。モテる男は辛いな、スバル……）」

そつ心で言っへルクレス・メシアは後をつけて行く。

## ロックマン側

ロックマンとストレス発散のためにやって来たハーブ・ノートはビルの屋上。オックス・ファイア、クラウン・サンダー、キャンサー・バブルの3体はその直ぐ下にロックマン達を見上げていた。

何故ロックマンもビルの屋上にいるのかと言うと、FM星人がハーブ・ノートに気を取られている最中に移動したようだ。

『丁度良い、裏切り者が揃ったわけだ』

『まとめて始末してしまえエー!!』

オックス・ファイアが言い放った刹那、ロックマンとハーブ・ノートは飛び上がり攻撃を開始する。

「マシンガンストリング！」

「バトルカード！ プレデーション！ リュウエンザン！」

ハーブ・ノートはギターから弦を飛ばし、ロックマンは左腕をリュウエンザンに変えて地面へと降り立った。



アマケン

先程、ロックマンがハーブ・ノートに助けられる様子を見ていた委員長は

「何がハーブ・ノートよっ！ キーーーーー！」

ビリビリビリビリッ！

口でハンカチを咥え、そのままそのハンカチをビリビリと食い破った。周りから見たら、嫉妬とは恐ろしい物、だによく分かる光景である事は間違いない。

「「い、委員長……」」

抑えようとしたが、まったくもってそれが出来る様子ではない事を把握したゴンタとキザマロはそっとしておく事にする。

「スターブレイク！ ロックマン！ アイスペガサス！」

上空のウェーブロードの上でアイスペガサスに変身したロックマンのもとにオックスファイアがオックススタックルで徐々に迫ってくる。

『ウオオオオオオ！』

だが、ロックマンはオックスファイアに両手を向ける。

「スタチオビヌクバン  
SFB！ マジシャンズフリーズ！」

そして、魔方陣をオックス・ファイアに向けて発射させ、オックス・ファイアは触れた途端に体が一瞬で氷に包まれ凍ってしまう。そして地面へと氷のまま落下する。ドーンと落ちた音と共にオックス・ファイアは周波数を変えて姿を消した。

「スターブレイク！ ロックマン！ グリーンドラゴン！」

次にロックマンはグリーンドラゴンへと変身し、アスファルトの地面へ飛び降りる。そして、こちらに向かってきているクラウンサンダーに向かってSFBを放つ。

「SFB！ エレメンタルサイクロン！」

『ヌワアアアアア！』

体を回転させ、木の葉交じりに竜巻を起こし、クラウン・サンダーを上へ上へと巻き上げていく。クラウン・サンダーは周波数を変えてこの場から逃げていった。

残るはキャンサー・バブル1人。だが、ロックマンは容赦はしない。

「スターブレイク！ ロックマン！ ファイアレオ！」

ファイアレオに変身後、ウォーロックを腰の辺りに持ってきてエネルギーを溜め始める。

「SFB！ アトミックブレイザー！」

ロックマンが放ったその電波のエネルギー砲はキャンサー・バブルを空の彼方へと吹き飛ばした。

『ドワアアアアアアア！ 覚えてるよオー、ブク！』

キャンサー・バブルは捨て台詞を残して、周波数を変えて姿を消して行った。これで全てのFM星人を追っ払ったようだ。

『やったな、スバル！』

「うん。……っ!？」

変身、電波変換を解こうとした刹那、ロックマンの胸のあたりから小さい光が放たれている事に気づいた。何だろうとロックマンが手を胸へやると

「『…うわぁッ!…!』」

急にその光は大きく輝き出し、ロックマンの体を包んだ。

光の中

黄緑色に白をプラスしたような色の空間の中にロックマン、否、電波変換の解けたスバルとウォーロックが立っている。

「ここは……？」

『何もねエみてエだが……』

そんな感じで2人が辺りを見回していると、目の前に青、オレンジ、緑の丸い光が現れ段々実態の形に変わっていく。

青は、青色の天馬、ペガサス・マジックの姿に。

オレンジは、オレンジ色の獅子、レオ・キングダムに姿に。

そして緑は、緑の龍、ドラゴン・スカイの姿に。

「ッ！ 君たちは……」

『AM星人！』

スバルの後に続けるようにウォーロックは言う。

ウォーロックが言った通り、そこにいたのはAMの三賢者と言われたAM星人の唯一の生き残りで今はサテライトペガサス、レオ、ドラゴンの管理をしている者たちだ。ロックマンにスターフォースの力を授けたのも言うまでも無いこの3体だ。

『スバル、ウォーロック。最後の戦いの時が来たようだ』

「最後の…戦い…？」

『お前達の抱えている問題は知っている。そしてその問題点、FM王ケフェウスが地球の自分の手で抹殺するために太陽系まで1人で出向くようだ。例の電波ボールを所持して』

『何イツ!? 護衛も付けずにか!?!』

『そうだ。そして明日FM王が太陽系まで出向く。その時しかチャンスはない』

ペガサス、レオ、ドラゴンの順に説明するように話す。そして最後にペガサスが

『スバル、ウォーロック。お前達は地球のために戦うか? あの強大な電波体、FM王に勝ち目はないかもしれないぞ?』

と訊いてきた。

「……勝ち目は無い…? か…? ウォーロックはどう思う?」

『…俺はどちらでも良い。決めるのはお前だ』

「そっか……僕は戦う！ たとえ勝ち目がなくなっても、地球を守り、父さんの帰りを待つ。それが、父さんとの約束だから！」

答えはもう決まっていた。何時どんな時でもこう答えようとスバルは思っていた。昔、約束を交わした時から答えは変わらない。

『そうか。ならば、明日戦の場まで送ろう。それが我々の最後の役目だ』

「うん、ありがとう」

スバルが礼を言った刹那、光は眩く強くなる。

そして光が晴れるとそこは元の場所だった。

「……最後の戦い、か」

そう小さく呟いた刹那、後ろから足音が聞こえた。

「スバルくん！」

声の主はハープ・ノートだった。

「どうしたの？ 電波変換を解いたと思ったたらブーツとしちゃって？」

ハープ・ノートの会話からすると、先程の光の空間はハープ・ノートには見えなかったみたいだ。更に差ほど時間は経っていないようにも聞こえる。

「ちょっとね。それよりライセンスさん達の方は」

「とつくに終わってるぜ？」

「えっ？」

後を振り返ると大剣を背中に抱えているのではなく、右手で持ち肩に乗せているヘルクレス・メシアと、何故か不機嫌そうな顔をしているジャスミン・ハートが立っていた。

「ライセンスさん！ それに亜夢ちゃんも。2人とも大丈夫そうだね！」

「はっはっは、余裕だってあんなの」

「とか言ってピンチになったの誰でしたっけ？」

「それは言うな」

ヘルクレス・メシアとジャスミン・ハートの会話を聞いて、スバルとハーブ・ノートは苦笑いを浮かべた。

「あはは……それより、実は皆に話しておきたいことがあるんだ」

「……？」「……」

そしてスバルは、光の空間で起きた事を全て話した。電波変換を解こうとした時に光に包まれた事、AMの三賢者との話し、そして明日FM王と戦いに行く事、全てを。

全てを聞いた後、暫く沈黙が流れていた。

「……まさかスバル君……1人で行っちゃうの？」

その沈黙を破ったのはジャスミン・ハートだった。

「……うん」

「だったら、私も行く！」

「亜夢も行くなら私も行く。丁度グラビア撮影に行くのも嫌なところだったし！」

「グラビア？」



ハープ・ノートの言葉にライセンスは疑問が浮かんだ。何故なら、ハープ・ノートの正体を知らないからだ。

「あ、いやいや何でも。それより、私も行くよ！」

手を振り何とか誤魔化し、言った。

「俺たちも行こうぜ、ヘルクレス」

「……残念だがライセンス。貴公は地球に残ったほうが良い。地球の守護をしているお主が地球を離れたら、もしもの時に対処できない」

ヘルクレスの予想外の言葉にライセンスは一瞬固まり、直ぐに我に帰った。

「おい、そりゃないぜ？」

『では頼むぞ、ライセンス』

「っておい、俺の意見は無視か!？」

ライセンスの言葉を見無視したのには理由がある。だが、今は言わないでおこうとヘルクレスは心の中にしまいこんだ。

「……亜夢ちゃん、ミソラちゃん。気持ちは分かるけど

「意志は曲げないよ!」「」

『あらあら、2人とも』

『フフ、こうなったら止めるのは無理よ、スバル君？』

ジャスミン、ハーブはどこか楽しげな声で言った。

「……はあく、分かったよ。じゃあミソラちゃん、亜夢ちゃん、ハーブ、ジャスミン、ヘルクレス、約束して」

「無理はしないって」

「うん！」

『ええ』

『御意』

『へッ、せいぜい足を引つ張らないようにしろよ！』

『あら、それはどっちの台詞かしらね？』

『何だと？ やるってのかハーブ？』

『私は何も言っただけですけど？』

『その態度ますますムカついてきたッ！ 表に出やがれ、ハーブ！』

『もつとっくに出てるわよ。頭悪いわねエ』

いつの間にか2体の電波体の喧嘩が開始されていた。

そんなこんなで、地球人3人と宇宙人4体はFM王の野望を阻止するために立ち上がるのだった。

「……完全に俺のこと忘れられてるな……」

たった一人の地球人は忘れられて落ち込んでいた。

地球抹殺まであと二日

第91話 決意（後書き）

何かライセンスのキャラがおかしな方向へ進みつつありますね。ク  
イックロッドさん、すみません。私にはライセンスにお笑いの道に  
進んでもらうしか浮かばなかったんです（おい！）

え？ ミソラの戦闘が無いつて？ アニメはこんな感じでしたよ（  
笑）

にしても……何故この前はMJは5時10分からだったのだろう。  
…W杯……お前のせいで奈々さん見逃すところだったじゃないか！  
（八つ当たり）

では、感想待ってます

第92話 太陽系（前書き）

サブタイ変えました。元は海王星……まあどちらでも良いのですがね。

## 第92話 太陽系

次の日 AM7:05

ピピピピッ！

アラーム音が聞こえる……スバルの家の2階、スバルの部屋からだ。

「ん……んん」

その音で目が覚めた。目をこすっているところを見るとまだ眠くて寝ぼけているようだ。

スバルは直ぐにうるさいウェーブスキャナーのアラーム音を止め、状態をベッドから起こした。その後、ウェーブスキャナーの中を覗く。

「おはよう、ウォーロック、ヘルクレス」

『おっ！』

『おはよう』

目を合わせて電波体達と挨拶を交わす。

今日は平日。普通なら学校へ行かなければならないのだが、今日は少し違う。

『早く行くぜ、スバル』

「うん」

スバルは普通なら学校に行く身支度をするのだが、今日はしていない。いつもの服に着替えて、ウェーブスキャナーを持ち、部屋のドアを開けて1階へと駆けていく。

「おはよう、スバル」

「おはよう、母さん」

いつも通りに挨拶を交わす。しかし、この後はいつもと違う。

「母さん、その……」

申し訳なさそうに話しを切り出す。無理もない。スバルは今、学校を休ませてくれと頼もうとしているのだから。

「何？」

笑顔で尋ねてくるあかね。この状況じゃ言い出し難い。しかし、地球の危機なのだからそうも言っていられない。

「……今日学校を休みたいんだけど……」

「……どうして？ 理由がなければ無理よ？」

理由がなければ休ませてくれない。全くそうである。理由は無いのに休むなど、不登校の不良以外の何者でもない。

「……詳しくはいえないけど」

「約束を守りに行くんだ」

「……………」

あかねはスバルの言葉を聞いた後、目を瞑って黙り込んだ。スバルはその様子をジーツと見ている。緊張感漂う中、スバルは一度だけ息を呑む。

「……………似てるわね……………」

「えっ？」

「いいわ。その代わりに、ちゃんと約束を果たしてくるのよ？」

あかねは笑顔で言った。先程言った言葉にスバルは一瞬と感ったが、あかねの言葉に一安心した。

「ありがとう！」

「さ、ご飯早く食べちゃって？」

「うん！」

そう返事してスバルはリビングの、朝ごはんが並んでいるダイニング



ゲテールへと向かう。

「（大吾さん……あの子も大人になったわ）」

そんなスバルの姿を見ながらあかねは心の中でそつと呟いた。

## その頃 太陽系

広大な宇宙。 辺り一面真っ暗な宇宙空間。 そこは星達が輝いて綺麗に見える。

そんな宇宙の一部太陽系。 太陽系の中で一番の明るさ、否、熱を持つ太陽が太陽系に光を照らしている。 地球で地球人が生きていられるのも殆どは太陽のお蔭なのだ。

その太陽系の太陽を中心として、一番端を周っているの青色に見える海王星の辺りに黄緑色をした何かがあるように見える。

『……ほう、あれが地球……中々綺麗な星だな』

見た目、小柄の身長にマントを羽織っており、額に小さな王冠を付けている黄緑色の電波体。その電波体が海王星付近にいるのが分かる。

『……………』

暫くの間その電波体は、太陽系第三惑星地球を見つめていた。どうにも何かを探っているようにも見える。

『……フェニックスの気配がない……やられたか……』

そう呟いて彼は目を瞑った。まるで、フェニックスに謝罪しているかのように。

『……いよいよ、か……』

そう言って、彼は両掌をそっと重ね合わせ、その掌を地球の方に向けて光を発生させる。

アマケン AM 8:00

アマケン本館の玄関前、つまり外。そこにスバルは身支度を済ませ、学校に行かずにここへ来ている。勿論学校には許可はあかねが取っている。委員長たちには秘密だが。

ウィーン

すると、玄関の自動ドアが開き、中から誰かが出てくる。天地だ。

「おはよう、天地さん」

「おはよう。……行くのかい？」

天地は分かりきった質問をしてきた。何度質問されても答えは変わらない。勿論、スバルの答えはYes。

「……大吾先輩に似てるな、そういうところ」

「えっ？」

不意に呟いた天地の言葉に驚いた。何故だか先程もあかねが似ていると言っていたようなことを思い出す。

「頑張れよ、地球を守るのは君等だけなんだから」

「え、あ……うん」

少し、天地とあかねの言った言葉を考えていたところに不意に言われたため少し間抜けな返事をしてしまった。自分でも少し恥ずかしいと思っっている。

『……来たぞ』

そんな事考えているとウォーロックが一言呟いた。スバルはその言葉に反応して頭に掛けていたビジライザーを掛ける。

すると、上空に見えるウェーブロードからピンク色の閃光と白色に近い閃光が目の前に降りてきた。

「ごめーん、待った!？」

『ほら、ミソラが早く支度しないから』

「だってえ、金田さんに二ホンに帰るって言ったら泣きながら止められるんだもん」

どんな理由だ。大の大人が女の子に向かって泣くって……。で、ジャスミン・ハートの方は……

「べ、別に寝坊したわけじゃないからね!？」

『……ごめんなさいね』

……寝坊したらしい。なんともベタな……。ジャスミンは頭

を下げて誤っているのが何故だか可哀想に見える。スバルはそんな2人の電波人間に苦笑いを見せる。

その後ハーブ・ノート、ジャスミン・ハートは電波変換を解き、人間の姿へと戻る。

「あはは……でもこれで全員揃ったわけだね」

「スバル、それは良いんだが……何故昨日もこいつは俺のウェーブスキャナーの中にいたんだ？」

「ん？ 某のことか？」

「お前以外誰がいんだよ！」

何やらウォーロックはお怒りの様子だ。

昨日あの戦闘の後、ウェーブスキャナーをもう一台もらおうという密かな計画を実行としたのだが、何分学校があったのでそちらの方をゆうせんしてしまい、貰い忘れたまま時は過ぎ今に至るのである。

「まあまあ、いいじゃない」

「よかねエよ！」

そんなウォーロックをスバルは何とか暴れないようになだめ様としていると

「ん？……ッ！」

『『ツッ！ これは！』』』

急に4体の電波体が何かに驚き、東の方角、つまりスバルから見て右の方向に視線を向けた。否、性格には東の空に向けた。

すると、そこには何かキラキラと星が幾つも輝いて見える。否、点滅しているようにも見える。

「何あれ!?!」

『……どうやらFM王の緊急信号らしいな……』

「『ツッ!』」「『』」

スバル、ミソラ、亜夢、天地を含めた4人は驚いた。あの星が輝いて見えるのがFM王の緊急信号だというのだから驚かないわけがない。

『……FM、星人達……これから……地球……抹殺……の……準備……を開始する……』

ウォーロックが一字一句星の信号を読み取り解読していく。

『それまで……裏切り者……を……足止め……せよ……ッ!?! 足止め!?!』

「『『ツッ!?!』』」

足止め。つまり、地球抹殺の準備が整うまで時間稼ぎ。

まずい事になった。足止め、しかもFM王の命令となると、FM星人は何が何でもFM王のもとへは行かせてくれないだろう。だが、逆にわかった事がある。

地球抹殺は明日、のはずだが準備。準備が完了次第抹殺すること。つまり、それは今日抹殺するということを意味している。

『チツ、まずいな』

『このままじゃ行くまでに時間が掛かるわ!』

ハーブの言った時間が掛かるとは、FM星人を倒してから行くのなら、という前提の話だ。だが、戦わなければいけない状況になりつつある。そのため何とかしなければならぬのは事実だ。

ドカアアアアンツ!!

「「「「「ツ!!!?」」」」」

すると、何処からか爆音が聞こえてきた。方角は……市街地の方からだ。

たぶん、FM星人の仕業だと思われる。

『……なるほど、街を破壊して我々を誘き出し、そのまま宇宙に出る前に足止めしようと考えた訳か……』

先程の爆音の具合からヘルクレスはFM星人たちのやりそうな事を予測したようだ。あちらもワンパターンなので分かるといえば分かるのかも知れないが。

「……どうすれば……」

地球を選べば街が破壊され、街を選べば地球が抹殺される。どちらを選ぶかと訊かれたら、普通は地球を選ぶだろうが、その間に街の人間が殺されていけば地球を護つてもその人たちを護れない。逆に街を選べば地球が抹殺されて全て消える……。

確かに、犠牲の少ない方を選ぶほうが利口なのだが、スバルにはそんな事はできない。誰かを犠牲にするような真似は……。だが、このままでは完全にまずい。

「ああ、もう！ めんどくさい！！ 皆、行って！ FM星人達はあたしが食い止めるから！」

すると、痺れを切らしたように亜夢が言う。亜夢は地球に残ってFM星人達と戦おうというのだ。確かに、亜夢程の力があればそれも可能だろう。だが、相手は6体だ。何があるかわからない。そんな中1人残すわけには

「だったら、あたしも残る！ いいよね、ハープ？」

『ええ、勿論よ！』

「ちょっと、あたしだけでじゅうぶ」

「亜夢だけを残しては行けないよ。あたしも残る」

「……っ……ミソラ……分かったわよ。その代わり、足は引っ張らないでよね？」



「そつちこそ！」

ミソラも残る……これならば2人。先程の1人よりもマシだ  
とは思うが、それでもまだスバルは不安だった。

「でも、2人ともー」

「早く行つて！」

「……でも」

『スバル、彼女等を信じようではないか？』

ヘルクレスの一言で少し悩まされた。しかし、その一言でどうする  
かは決まった。

「……わかった。その代わり無茶はしないで」

「「勿論！」」

『私達がついてるから大丈夫よ！ ね、ジャスミン？』

『そうね、ハープ』

「行くよ、ミソラ！」

「うん！ スバル君、地球は君に任せたよ！」

「必ず帰ってきてね！」

2人はその言葉を残して市街地の方へと走って行った。

FM星人は彼女たちに任せる。そう決まった。後は、スバル達がFM王を食い止めるだけだ。

「行くよ、ウォーロック！」

『おう！』

「電波変換！ 星河スバル オン・エア！」

スバルはロックマンへと電波変換し、天地と向かい合う。

「スバル君、頼んだよ」

「はい！」

ロックマンは返事をする。3枚のスターフォースのカードを取り出した。

ピカアーンッ！

すると、その3枚はいきなり眩い光を放ち、ロックマンとヘルクレスを包んだ。

その光は包んだと同時に球体になり、そのまま空中に浮かびだした。刹那、途轍もない速さでその光の球体は天に向かって上昇していく。

「頼んだよ」

天地は1人その言葉を呟いた。

AM8:20 球体は地球の気圏内を飛び出し、海王星へと向かって猛スピードで向かっていく。

## 第92話 太陽系（後書き）

あとがきを、二回目の方はすみません。一回目の方ははこんにちは。何か話がグダグダな気が……。しかも2人の送れた理由がベタ過ぎますね……。特に亜夢が。

FM王の緊急信号っていうのは、アニメで言うFM星からの緊急信号ですね。ま、こんな風に信号出したのかなあ？って感じで書きました。

すみません、何か浮かばなかったんでこんなに短い、そして内容が薄くなってしまうました……。

今回はもう少し早めに投稿する…予定です。あくまで予定です。

では、感想まっています

## 第93話 FM王ケフェウス

宇宙空間 光の中

ロックマン、ウォーロック、ヘルクレスはカードから発せられた光に包まれた後、光の中に立っていた。周りは真っ白い光一色で、外宇宙空間が見えないようになっていた。

今も猛スピードでFM王のいる海王星付近に向かっていく光の中にはロックマンたちの他に、AMの三賢者の姿もあった。

『貴公等がAM星人の生き残り、か？』

初めにヘルクレスがペガサスたちの姿を見て問う様に言う。ヘルクレスは疑っているわけではないが念のために尋ねた。

『いかにも、我らはAMの三賢者にしてサテライトの管理者』

『ヘルクレス、お前も行くのだな？』

ペガサス、レオの順に言う。すると、ヘルクレスは少し驚いたように目を見開いた。

『な、何故某の名をツ？』

『お前の事はAM星にいた頃から知っている。正義感を持つFM星人などそうはいないからな』

つまり、FM星人の中で目立っていたから目を付けられていた、と

ドラゴンが説明する。ヘルクレスはそれに納得したのか少し口に笑みを浮かべて、もう口を開こうとはしなかった。

『おい、どれくらいでケフェウスのもとまで着くんだア？』

すると、ウォーロックが待ちきれないと言わんばかりに訊く。無理もない、今にもFM王が抹殺の準備を進めているのだ。一刻も早く阻止しなければいけないのだから。

『案ずるな、この中では既に2、3分程経っているが、外の世界ではまだ数秒しか経っていない』

「『えっ／＼ア？』」

ペガサスの発言にロックマンとウォーロックは疑問を覚えた。

つまり、外の世界とこの光の空間の中では時間の進み方が違うというのだ。そういえば、ロックマンとウォーロックが昨日この空間の中に来たときも、空間の中では時間は経っていても外の世界では全くと言っていいほど時間が経っていなかった。それと同じなのだろう。

『……………そろそろ着くぞ』

レオが言うと、辺り真っ白だった空間の一部が消え、宇宙空間が映り出す。すると、青色に見える1つの星が見えてきた。

海王星。海王星が青い色をしているのは、大気中に含まれるメタンによる赤い光の吸収の結果によるもの、という説がある。その海王星にもう目の前まで接近していた。

すると、その海王星の後ろの物陰に隠れるように、何か電波を放っているような電波体の姿が見える。

黄緑色の電波体。見ただけで分かる、何か異様な電波を放っている。あれが、“FM王ケフェウス”。

「……………あれが…？」

『そう、FM王』

『ケフェウスだ』

ロックマンの質問に答えるように、ウォーロックとヘルクレスが続ける。

『……………スバル、我々に出来ることはここまでだ』

『あとは任せたぞ』

『地球を守ってくれ』

ペガサス、レオ、ドラゴンがそう言つと、ロックマン達は静かに頷いた。その刹那、

ピカーンッ！

という光の弾けるような音と共にその空間は消え、ロックマン達は宇宙空間に存在するウェーブロードへと降り立った。FM王、ケフェウスの目の前に。

A M 8 : 5 0

地球

コダマタウン市街

街、コダマタウンではF M星人による破壊活動が続いていた。

ビル、道路、車。あらゆるものというものの、建物と言う建物はF M星人の攻撃で破壊され、黒い煙を上げていた。朝っぱらに出勤する大人や、学校に登校する途中の学生はそのF M星人に恐れ、悲鳴を上げながら逃げてく。それはまさに地獄絵図、この世の終わりのような光景だ。

『ハツハツハ！ もっともっと逃げ惑えエー！！』

バコオーンツ！

そう言って、オックス・ファイアはアンガーパンチをアスファルトに叩きつけ、アスファルトに亀裂を入れる。するとその亀裂から、



地下の水道管が破裂したのか水が勢いよく噴き上がる。

それを見て更に恐れをなしたのか、更に逃げ惑う。

『アーハッハッハ！ この破壊活動によりケフェウス様の命令どおりロックマン達の足止め、更に地球人の悲鳴でマイナスエネルギーを溜める。まさに一石二鳥ブクウ！』

すると、その光景を見ているキャンサー・バブルが高笑いを上げる。

『さて、これだけ暴れたのだ。そろそろロックマン達がやって来る頃だろう』

『おい、本当に来るのかよ？』

不気味な笑みのオヒュカス・クイーンにウルフ・フォレストが不安そうに尋ねる。

『大丈夫じゃ。ロックマンは地球人を見捨てるような事はできぬからう。その裏をかいたというわけじゃわい』

ウルフ・フォレストの質問にクラウン・サンダー代わりに答える。

『だからこうやって破壊活動をしているということだ、ヘビーウェイト！』

それに続けるかのように言ったりブラ・バランスは青色をした車を巨大な分銅でグシャグシャに潰した。もうこの車は使い物にならないだろう。

そう言った攻撃で破壊活動をしているFM星人とは別に、上空のウエーブロードに2人の少年が立っており、その光景を見下ろしている。

「…またやってるね」

『フン、懲りもせずによくやるこつた』

ジエミニ・スパークBとW。ブラックホワイ双葉ツカサの電波変換した姿だ。Wは少し笑みを浮かべて見ているが、Bは呆れている様子だ。

「まあ無駄な事だと気づいていないのがあいつ等のいいところさ」

そう言ってWは上空を見上げた。よく見ると、空は曇で敷き詰められている。雨は降りそうな気配はないが、晴れる様子もない。そんな空をWは暫く見つめていた。まるでロックマンが宇宙にいつている事を知っているかのようだ。

破壊活動を止めようともせずに行っているFM星人。

タッタッタッタッタ！

その後ろから駆け寄ってくるような足音が2つ。

「ん？ 来たか？」

最初に気づいたのはウルフ・フォレスト。ウルフ・フォレストは後を振り返る。それに気づいたのか他のFM星人たちも後ろ、背後に来たと思われるロックマンの方向へ振り向いた。

「『『『『『ツッ！ 何！？』』』』』」

だが、そこに居たのは彼らFM星人の敵、亜夢とミソラが電波変換したジャスミン・ハートとハーブ・ノート。ロックマンではない。

「バカな！ 何故だ！？」

オヒュカス・クイーンの言葉にジャスミン・ハートがニヤけた顔で答える。

「残念だったわね。ロックマン達ならとっくに宇宙に行ってるわよ」

「ツッ!? どういう事だ、オヒュカス!?」

ジャスミン・ハートの答えに理解できないのか、ウルフ・フォレストを含めた5体はオヒュカス・クイーンの方へ視線を向けた。

「くっ、どうやら考えが甘かったか……!!」

「……ならば、追いかけるまでだア！」

オックス・ファイアはそう吼えた。彼女たちを威嚇するように。

「「させると思っつ？」」

だが、彼女たちには効かなかった。威嚇などでは決して負けない大切な約束、友達フライザがいるから。

『……余に弓引く愚か者が、よもや同じFM星の戦士とはな……飼  
い犬に噛まれるとはこのことよのお、ウォーロック、ヘラクレス』

一瞬の沈黙のあと、ケフェウスが呟いた。

『久しぶりだな。地球を破壊するなんてバカな事は止めな、王様！』

『……FM星に甲斐をなす地球を滅ぼして何が悪い！』

ケフェウスは目を瞑る。数秒、ケフェウスは目を瞑った後カツと目を見開いた。

「コッツ！……くつ」

突然として何かに押し潰されそうな感覚が襲ってきた。重圧フレッシャーによくにた何か。この何かは何なのか？

「くつ、ケフェウス特有の電磁波か……！」

重圧にも似たその感覚はどうやらケフェウスが発する特有の電波らしい。

「……くつ、……それは違う！ 父さん達はFM星との友好のために宇宙に旅立っただんだ！」

先程のケフェウスの言葉にロックマンは電磁波に持ち堪えながら、反論する。

「だまれ！ 本当は我が星を侵略するつもりだろうに！」

ケフェウスの怒号。怒りに満ち溢れた声だ。どう言っても信じてくれなさそうだ。

「……やるしかないね……」

曇り空の真下。雨は降りそうな気配はない。しかし、嫌な天気であることには間違いない。まるで、不吉な事が起きそうな天気だ。

その曇り空の真下では、2人の電波人間、ジャスミン・ハート、ハープ・ノートはFM星人に囲まれていた。

『アンガーパンチ!』

オックス・ファイアが拳を前に出し、2人の電波人間に突っ込んでいく。勿論、スピードはそこそこあるのだが、モーションが大きい  
ため難なくジャンプして避けられる。

『バブルポップ!』

「っ!? しまっ

」

た、と言う前に空中でキャンサー・バブルの泡に2人とも閉じ込められてしまった。

『フォールサンダー!』

そこへ、クラウン・サンダーの電撃。水の泡に電気。水は電気を通しやす。勿論、泡に閉じ込められているため、その電撃を回避することは不可能。

「っつ！ きゃあああああああ！！」

何度も言うが、水は電気を通しやすい。クラウン・サンダーの電撃は2人の体をいつも以上に駆け巡り、いつもの2倍以上のダメージを与えた。いわゆる属性攻撃という奴だ。

途轍もない、電撃を喰らった2人は泡が消えると同時にアスファルト地面へと落下していく。

『ゴルゴンアイ！』

『ワイドクロー！』

オヒュカス・クイーンは目から発生させた赤い2つのレーザー。ウルフ・フォレストは爪を横に一閃し、その時に起きた漸撃を飛ばす。

ドカーンッ！！

2つの攻撃は、2人が地面へぶつかる瞬間にぶつかった。だが、彼女等にぶつかったのかは分からない。何故ならその時に起きた煙で見えないのだから。

『やったか…？』

FM星人達を取り囲んでいる中心の場所で煙が上がっている。誰も倒したかどうか確認することが出来ない。しかし、ウルフ・フォレストは尋ねるように呟いた。

『……………ッー！』

オックス・ファイアは目を疑った。何故なら、煙が晴れた場所には電撃によってか、体のあちこちが焦げてボロボロな彼女たちが立っていたから。ダメージは与えた筈だが何事もなかったかのような顔をしている。

『くッ!』

『もう一度だ!』

オヒュカス・クイーンがそう指示した刹那、ジャスミン・ハートはクラウン・サンダーに指差した。

「その骸骨。いい攻撃でんげきだったわ」

『又……?』

いきなり話しかけられたことに少し疑問を浮かべるクラウン・サンダー。だが、次の言葉でそんな疑問は完全に消え去る。

「電撃だったら負けないよ。……発動 ウェザートランス 雷サンダー!」

微笑み呟いた刹那、扇子を天へとかざす。瞬間、曇から雷が発生し、ジャスミン・ハートに雷が轟音と共に落ちた。

更に刹那、雷は消える。ジャスミン・ハートの着物は電気の様に入りの着物に変わっている。更にジャスミン・ハートの体には電気が走っているようにも見える。

『何ッ!? 姿が変わった!?』



ウェザートランス。ジャスミンの天候により能力を変える能力。かつてはこの力でジェミニを超える程の力があつたという最強の力。

「さあ、全員弾け飛ばしてやる！ 行くよ、ハープ・ノート！」

「OK！」

その言葉を交し合うと2人は、攻撃する態勢に移る。敵を倒すための攻撃のために。

### 第93話 FM王ケフェウス（後書き）

皆さん、突っ込みたい事はわかります。戦闘は？ 何日にちも掛かった割りに進んでないよね？ え、雷って御坂 琴？

いやあ、自分でもびっくりなぐらいに執筆進まずに気がついたらもうこんな日にちが……すみません。

つ、次はちゃんと戦闘があります。ケフェウスとの戦闘は微妙ですが、地球の方では何か凄い事に……たぶん……（曖昧！）

雷は本作ラストのウエザートランスです。ウエザートランスは計7つあって、その内5つはこの作品に登場させました（風も合わせて）。あと2つは、次回作でないと出せないやつと、どこで出そうか考え中のやつがあります。まあどうでもいいですが（笑）

あと補足です。雷状態のジャスミン・ハートは、あの電撃使いとか、エレクトロマスター常盤台最強無敵の電撃姫とか、レールガン超電磁砲撃つたりとか、砂鉄を操ってチェンソーにして攻撃とかするのあの人は一切関係ありません！ 亜夢もあの人もツンデレですけど違います！ 「させると思う？」というあの人の名言（？）も言わせましたが、断じて違いますので、そのところご了承下さい。（誰も思っていない）

あ、あと電気が走ってるからと言って超野菜人でもありません（殴  
ブロリーか！

では、感想待ってます

第94話 友達(ブラザー)(前書き)

今回は日にちを掛け過ぎて長くなり過ぎました(いつもの約2倍くらいです)……すみません。

## 第94話 友達（ブラザー）

コダマ小学校

5 - A

AM 9 : 39

場所は変わってコダマ小学校。いつものように委員長、キザマロ、ゴントは1時間目の授業を受けている。

キーン・コーン・カーン・コーンッ！

時計の短針が40分を指した瞬間と同時にチャイムは鳴る。1時間目の終わりのチャイムだ。

「起立！ 礼！」

委員長の号令と共に授業は終了した。終了して先生が教室から出て行く。それと同時にクラスの生徒は一斉に自分の席から移動する。勿論、キザマロとゴントも例外じゃない。直ぐに委員長の座っている席へと駆け寄る。

「委員長、今日はスバル君来てませんね」

キザマロが委員長の左後ろにあるスバルの席を見ながら言う。それと同時に委員長とゴントはその空いた、誰も座っていないその席を見る。

「……そうねえ。どうしたのかしら？」

「昨日も僕達は途中から学校に行きましたけど、結局スバル君は来ませんでしたしね。何かあったんでしょうか？」

昨日FM星人の戦闘に気を奪われていた3人は、とりあえずその後  
に学校へ向かった。まあ結果は遅刻という当たり前の結果だったの  
だが、何故かその後スバルは来なかったそう。まあFM星人と戦  
っていたのだから無理もない。

「そつえば亜夢ちゃんも来てねえよな」

「水星さんはお仕事で忙しいのよ」

委員長が言ったように亜夢が来ていないのは“仕事”という二文字  
でない理由を説明できる。本当は違うのだが、それを3人＋クラ  
ス全員が知る由もなかった。

「まったく。明日お説教をしなきゃいけないようね……！」

何故か委員長は静かに笑っていた。それは悪魔の微笑みと言っても  
過言ではない。それを見て、キザマロとゴンタは少し後ずさる。

ピピピピッ！

すると、タイミングを見計らったかのようにキザマロのトランサー  
に着信が届く。キザマロが中を開けて確認してみると、どうやらサ  
テラポリスからの緊急連絡メール（台風などの災害の時によく送ら  
れてくる）のようだ。

「…………ツ！？ 大変です！」

「どづしたの？」

「何かあったのか？」

メールの内容を見た途端、キザマロは血相を変えた。

「コダマタウン市街地でまたFM星人が暴れているそうなんです！」

その声はクラス全体に聞こえた。それを聞いた途端、クラスの殆どもキザマロと同じく血相を変えた。

「何ですって、またなの!？」

「大丈夫なのかつ？」

ゴンタが珍しく被害状況をキザマロに訊いた。

「被害状況は分かりませんが、FM星人が暴れている場所から半径500メートルは通行止めになっているようです！」

500メートルといえば、1キロメートルよりはないとはいえ、結構な距離だ。つまり、それほど危険だということだ。

「結構危険ね。まあロックマン様ならそれぐらい直ぐに終わらせてくれるわ！」

委員長の期待とは少し違うが、今まさにFM星人と戦っている2人が居る。

コダマタウン市街

AM 9 : 4 5

キザマロのトランサーにメールが届いて10分後。丁度ジャスミン・ハートがウエザートランスしたところだ。

「さあ、全員弾け飛ばしてやる！ 行くよ、ハープ・ノート！」

「OK！」

その言葉の後にジャスミン・ハートは扇子を、ハープ・ノートはギターを構える。

『周波数も変わったブク！？』

キャンサー・バブルがFM星人を代表したかのように言う。

『チツ！ 姿が変わったからってなんだア！』

『俺たちにお前ら2人で勝てると思ってのこア？』

オックス・ファイア、ウルフ・フォレストは吼える。まるで犬のよううに。

「うるさいわねえ」

「この前私とジャスミンにもかなわなかった奴等がよく言えるわよ」

『弱い犬ほどよく吼えるのよね』

『はッ！ 言ってるッ！』

呆れた顔のハープ・ノート、しかめっ面のジャスミン・ハート、微笑みのジャスミン、爆笑中のハープ。どう見ても完全に余裕をこいているとしか思えないだろう。だがこれは

『舐めやがってエー！』

『この女アあまー！』

挑発。オックス・ファイアとウルフ・フォレストはいつも毎度のごとく彼女等の挑発に引っかかり、飛び掛る。

「雷の舞 落雷！」

刹那、扇子を天に向け、ゆっくりと2体に方向に向けて降ろした。瞬間、薄い雲から青色の稲妻が2体目掛けて落ちてくる。

『何イ！？』

上を見え上げて声を上げた瞬間、



ドゴォーンッ!!!

『ギャアアアアアアア!』

断末魔と共に2体は地面にうつ伏せで倒れた。所々焦げており、プスプスと黒い煙を上げている。体に何ボルトもの電圧が掛かったのだろう。一発で殆んど戦闘不能寸前だ。

「手加減したから安心して」

そのジャスミン・ハートの一言でFM星人は後ろへ身を引いた。「あれで手加減……」という恐怖の色を顔に浮かべながら。

ウーーーーー! ウーーーーー! ウーーーーー!

すると、そこへサテラポリスのサイレンが聞こえてきた。

「御用だ、御用だ!」

毎度のように五陽田警部が自分の車から降りてきた。またか、とFM星人は思っている。はつきり言って、どこから沸いてきた、という言葉が似合うのではないかと彼らは思っている。

「やい、FM星人!」

『天誅!』

ドカーンッ! ビリビリビリッ!

「ぐわああああっ！ ……ゲフツ」

ボタン！

五陽田警部は倒れた。アニメや漫画でよくある、黒い煙を吐きながら仰向けに。

「あーあ、何やってるんだよ、まったく」

すると、もう一台の車がやって来てライセンスが降りてきた。他の職員は着ていないようだ。すると、五陽田を肩に乗せるように抱えて、ジャスミン・ハート達に口を開く。

「この一帯、半径500メートル以内は通行止めにしてある。思う存分戦え！」

『何だってエーブク！？』

その言葉にはキャンサー・バブルが驚いた声を放った。他のFM星人は絶句している。ついでとは言え、アンドロメダの鍵にマイナスエネルギーを溜める筈だったのだ。それを阻止された一言だったのだ。無理もない。どおりで先程から誰もいないわけだ。

「ありがとう！」

「さて、それなら心置きなく暴れますか！」

その言葉を聞いた刹那、ライセンスは車に五陽田警部を乗せてこの場から去って行った。どうやら、五陽田警部を連れ戻しにきただけらしい。

「今度はあたしよ！」

そう言って、ハープ・ノートは弦を飛ばした。

海王星 AM10:00

その頃、海王星ではロックマン、ウォーロック、ヘルクレス対FM王ケフェウスが戦い繰り広げられていた。

「ロックバスター！」

『ヘビーバスター！』

ヒュン、ヒュン

2人は持ち前のバスターでケフェウスに攻撃していた。しかし、そ

のバスターはケフェウスの一歩手前辺りで、静かの音と共に消滅していた。

『何度やっても無駄だ。余にはそのような攻撃効かぬ！』

『くッ、やはりFM王には電波による攻撃が効かぬようだな』

そう、ヘラクレスの言うとおり先程から暫くの間、FM王に攻撃していたのだ。ロックバスター、キャノン系、ガトリング、プラズマガンなどの攻撃は全て効かなかった。

「くっ、どうして効かないんだ!？」

『恐らく、奴の電磁波だ』

「電磁波？」

ロックマンはヘルケレスの言葉に疑問を持った。その疑問にはウォーロック答える。

『奴には電波とは別に、奴特有な電磁波を膨大に放っているんだ。さっき俺たちが重圧で押しつぶされそうになったのもその電磁波の仕業だ。あんまり電波体が浴びすぎると厄介な事になっちまう。奴の電磁波にはそういう事ができるようになっただ』

「そんな……!」

『だが、それにも弱点がある。それは、攻撃は電波しか防げないということだ』

つまり、電磁波は電波による攻撃、飛び道具しか防げない。電波体などの電波にしか効果がない。逆を考えれば、電波を使わない、物理系の攻撃は効くということ。電波体じゃなければ電磁波は効かないということだ。

「でも、どうすれば……ん？」

ロックマンは何かに気づいたのか下を向いて悩んでいた顔を上げてケフェウスの方を見た。

『どうした？』

「いや……FM王の後ろから紫色の光が見えたようだ……」

『何ッ？』

真つ先、ウォーロック後ろに視線を向けた。すると、ロックマンの言うとおり、ケフェウスより数メートル程後ろに紫色の光が漏れているように見える。光を発しているであろう本体はFM王と被って見る事が出来ない。

『……電磁波ボールか！？』

『かもしれないな。FM王の言う準備とはあれが使えるまでの時間を稼ぐのかもしれない……ならば、奴を倒す事に拘らず、あれを壊すことを優先した方が利口かもしれない』

「わかった」

そう言って、ロックマンは一枚のバトルカードを取り出した。

「バトルカード！ プレデーション！ ベルセルクソード！」

プレデーションさせた途端、ロックマンの両腕は三日月の様な形をした剣へと変わり、その瞬間ロックマンの姿は消えた。

『何ッ！？』

「でやっ！」

すると、ケフェウスの目の前に現れた。そして両腕の剣をクロスさせて斬るように剣を振るった。

『クッ！』

ガキインッ！

だが、ケフェウスは剣が当たるまでの一瞬の時間に、両手に電波を集結させて黄緑色の2つのソードを作り、攻撃を受け止めた。

「くっ！」

『余にはこういうことも出来るのだ。電波を操るなど余には容易いッ！』

そう言っつて、徐々に押し返し始めた。剣と剣は互いに沿って摩擦が生じ、電波の火花のようなものが散り始める。

「……………今だ、ヘルクレス！」

『御意!』

ロックマンの言葉を聞いて直ぐ、周波数を変えて姿を消した。

『何ッ!? 何処へ行った!?』

『メシアパスワード!』

ケフェウスが探し始めた刹那、後ろから声が聞こえた。周波数を変えて回り込んで現れたのだ。

メシアパスワード。ヘルクレス最強の技。バスターとソードが互いの電波を反射しあう事で、互いの性能を最大限まで上げる。かつては、ソード、バスター、1発の攻撃だけで風撃、爆発を起こしたり、水龍を作って攻撃するといった多種な攻撃ができるヘルクレス最強の技だ。今回はソードに反射した電波エネルギーを溜め最大限まで高めている。更にはFM王の放っている膨大な電波、電磁波まで吸収しているようだ。文字通り最強の一撃が今生まれようとしている。

『待て、止める! クッ!』

阻止しに行こうとしたケフェウスはロックマンの剣を受けているために阻止しにもいけない。まさに手を足も出ない。

『ハアアッ!』

限界まで高めた大剣を電磁波ボール目掛けて振り下ろした。

バキインッ!

何か割れるような音と共に、轟音が起きた。そして凄まじいほど大きな風撃も起きた。宇宙空間の筈なのに凄い威力だ。

ロックマンはその風撃が消えると共に、ケフェウスから数歩後ろへ下がり、ソードをウォーロックと戻した。

『やったか？』

ウォーロック質問。これを、ああ、というヘルクレスの返事とともに全てが終わった

『否……まだだ』

筈だった。まだ戦いは終わっていなかった。

『何ッ！？』

「そんな……電磁波ボールを壊したんじや」

『フッ、念のために保険はかけておくものよのオ、ヘルクレス』

ケフェウスは笑っている。不気味な笑いだ。まるであざ笑っているような顔だ。

『FM王、何をした？ 何故某の最大攻撃でこの電磁波ボールに傷一つもついておらぬのだ？』

「『ッ！？』」



絶句した。傷が一つもついていない？先程の攻撃で割れるような音はした筈なのに何故？

『簡単だ。その電磁波ボールも余と同じように電波を消滅させる力を持っているのだ』

『……つまり、某の攻撃、貴公の電波を吸収した剣は、全てそれに消されたと？』

『その通り。風撃までは消せなかった見ただがのう』

先程の何か割れたような音は攻撃を打ち消した音だったようだ。そのため、まだ電磁波ボールは破壊されていない。無傷だ。

「だったら、今度は物理のソード系で」

『無理だ。元は電波だ電磁波ボールに傷を与えることは出来ぬ。仮に出来たとしても、自分の体がそれに触れれば消滅する可能性もある』

「……そんな……」

完全に望みを失い垂れる。唯一の物理系も電磁波ボールの前では無意味。それなのにどうやって破壊しろというのだ。完全に万事休す。

『だが、方法はある……メシアパスワード!!』

またもやヘルクレスは先程と同じで電波を溜め始める。

『何度やっても同じだぞ、ヘルクレス』

『確かに電波は効かない……だが、爆発はどうだ？』

『爆発……だと……？ ……ッ！』

ケフェウスはヘルクレスの言った言葉を数秒考えた後、ヘルクレスの異様な行動に気づいた。ヘルクレスは反射させたエネルギーをあらゆることが自分の体に溜めているのだ。

『お主……何を……』

『見て分からぬか……？』

聞かなくてもケフェウスには何をしているか分かっている。だが、信じられないのだ。

「ヘルクレス！ 何してるのっ？」

『テメエ、まさかこのまま命絶とうとしてんじゃねエだろうな！』

こんな膨大な電波エネルギーのある中でそんな事したら足すからねエゾツ！』

『ああ、某は消えるだろうな。木っ端微塵に。だが、これを破壊するには十分な電波と電磁波がここにはある』

ヘルクレスの今やろうとしている事は自爆<sup>メシァパワー</sup>。それはヘルクレス曰く、電波を吸収した量が多ければ多いほど威力をまし、自爆の場合は威力が増せば死ぬ確率も高くなるらしい。そしてそのエネルギー源はここにいるFM王の発している膨大な電波と電磁波。

『クツ、余がここにいるだけでそれが破壊されるということか……させぬ!』

ケフェウスはヘルクレスを止めに掛かった。しかし、それにはリスクが伴う。ヘルクレスがケフェウスを巻き込んで爆発する危険性だ。だが、ケフェウスはそんな事には恐れなかった。

ガシッ!

ケフェウスはヘルクレスの両脇下から両腕を通し、肩をガツシリと逃げられないように捕らえる。

『くっ! FM王、離れる! 某は貴公まで巻き込む気はない!』

『お主が甘いことは分かっている! だからこうして止めにきたのだ! お主は他の者まで巻き込み、犠牲者をだそうとはせぬからな!』

ヘルクレスは暴れて腕を振りほどこうとするが、待ったと言っているほどビクともしない。FM王の電磁波の影響で思いのほか力が発揮しないのだ。

『くっ、ロックマン、ウォーロック! FM王と一緒にこの場から離れる!』

『な、何言っやがる!』

「そうだよ! 誰かが犠牲になってまで地球を救おうなんて間違っ

てるよ！」

ロックマンは思う。地球が破壊されるのは嫌だ。家族、友達、仲間……大切な人が居る。そして何より大吾との約束がある。だが、誰かが犠牲になる。その方がもっと嫌だ。それを選ぶぐらいなら地球を破壊される方がマシ……とも言えない。だが、どちらも間違っているのは事実。

『これ以上FM王に星を破壊されるようなマネはさせたくない！』

『スバル……FM王を連れて行くぞ』

「え、ウォーロックまで何言い出すの！？ そんな事できるはずが

」

『じゃあお前にはこの状況を打開できる策があるのかよ！！？』

「っ！……それは……」

『何もねエのに横から出しゃばってんじゃねエ！ テメエはヘルクレスが帰ってくると信じようとおもわねエのか！』

「っ！」

ウォーロックは信じているのだ……。ヘルクレスが帰ってくること、信じようとしている。

彼は変わった。ほんの数ヶ月前までは、他人なんてほっとけ、と言っていた彼が今は他人を信じようとしている。彼にも何らかの変化が起きた。

「……………分かった。ヘルクレス！必ず帰ってきて！」

『……………御意』

その返事を聞いた刹那、ロックマンはケフェウスの直ぐ後ろまで周波数を変えて移動した。

『な』

に、と言う前にケフェウスはロックマンにヘルクレスから引き剥がされた。電磁波で力が弱っているとはいえ、後ろからならば関係ない。引き剥がすと同時にケフェウスはジタバタと暴れだす。

『離せ！ 離さぬか！』

だが、王の力ではロックマンの力に勝てるわけもなかった。

『くっ！ ヘルクレス！ お主が何故そこまでして命を掛ける必要がある！？ たかが他者の為にそこまでする必要があるのだ！？』

『……………FM王…否、ケフェウス。某にも理由は分からぬ。確かに星がこれ以上、お主たちの破壊してほしくないのだが、それ以上に……………“守りたい物”が出来たから』

『な……………』

ケフェウスにとっては単なる電磁波ボールの破壊を阻止するための質問だった。だが、ヘルクレスの返答を聞いて、一時沈黙してしま

う。  
『それが出来たのもあいつライセンスと出合ったからだろう。だから、あいつの住む星を破壊されたくない。ただそれだけだと某は思う。貴公にも“守りたい物”が出来てはわかるだろう』

ヘルクレスはそれを話し終えたのか、目を瞑ったあとにロックマンに首を縦に振って、合図を送る。

瞬間、ロックマンは周波数を変えてケフェウスごと姿を消した。

『さらばだロックマン、…… A M 星人ウオーロック、そして…… ライセンス』

眩き、目を閉じた刹那、ヘルクレスは茶色い光に包まれる。

ヒュイイイイイン・ドカアアアアン！！

数秒後、その光は爆発すると電磁波ボールと共に宇宙から消え去った。

場所は海王星から少し離れた星。後ろの方に見える輪がある星は土星のようだ。目の前にあるのは先程まであの場所辺りにいた、海王星。となるとここは海王星と土星の間、天王星辺りだろうか？、とロックマンがそんな事を考えていると、

ドカアアアアン！！

『『ツ！？』『』』

もの凄い爆発と共に、爆風が生じた。2人ともウエーブロードから吹き飛ばされそうになる。

『う、ウワァッ！』

すると、ケフェウスは体が浮いた。ケフェウス自体の体重が軽いためかそれに耐えることができなかつたのだらう。次の瞬間、後ろに向かつて吹き飛ばされる

ガシッ！

筈だった。手を誰かに掴まれた。手の先を見て、腕を伝って相手の顔を見るとそこにいたのはロックマンだった。

『ッ！』

「大丈夫！？ くっ…！」

無事かどうか心配したが、それどころではない。ケフェウスの電磁波のせいで自分も気を抜けば吹き飛ばされそうなのだから。

『大丈夫かアー！？』

「なんとかあー！」

よく見ると、ケフェウスの手を握っているのは右手で、左手のウォーロックはロックマンと同じで持ちこたえているようだ。力が思うように出せないロックマンの手助けをしているのだろう。

数秒後、爆風は治まり、何とか持ちこたえたようだ。殆ど体力は残っていないようだ。

ロックマンはケフェウスをウェーブロードの上に立たせて、自分は腰が抜けたかのようにウェーブロードに座った。

「っ、疲れたあー」

『な、何故余を助けた？』

「？」

不意にケフェウスがロックマンに訊いてくる。ケフェウスは何か小刻みに震えているように見える。



『余を助ける理由など、お主にはないはず……』

「ヘルクレスが守ろうとしていたんだから、守らないわけにはいかないでしょ？ ヘルクレスは君が変われると信じたから僕に守らせようとしたんだよ。僕を“信頼”して。大一、助けるのに理由なんていらナイよ」

『そ、そんな理由で……？ ウォーロックはどうなのだ？ 恨みがあるのではないのか？』

『……確かに、FM星人たちには腹が立ったがお前に個人的な恨みはねエ』

ケフェウスは2人の言葉に言葉を失っていた。今までこんな者たちは居なかった。周りは全て敵ばかりだった彼にとってこんな事は初めてだ。

『……他者への信頼、か。他者を信頼するなど、余にはできん……』

ケフェウスは顔を伏せ、小さく呟いた。

「どっしって？」

『……余は小さい頃から、王の座を狙うものたちから命を狙われておった。兄弟、親族、側近たち。余を亡き者にしようとして様々な策を企てた。命を落としかけたことも何度かある。全てが余の敵だった……』

「……信頼できなかつたんだね？……」

『身内にも命を狙われ続けたのだ。身内も信用できぬのに他者など信じる事などできぬ。例え信頼したところで裏切られるのは分かっている。どうせ裏切られるのならば信用などしなければ良い。“孤独”こそが世の生きるすべだ……』

そこまで言うと、ケフェウスは黙り込む。辛い過去だったのだ。誰もが敵。ケフェウスはその敵の中で今まで孤独に生きてきたのだ。

「……………その気持ち、分かるよ」

『何…？』

「僕も初めはそうだった。裏切られるぐらいなら孤独の方がマシ。友達を作るより作らないほうが良い。僕もそうだった」

スバルは今まで経験、ウォーロックと出会うまでの過去の話しを、ケフェウスに笑みを向けながら語り始める。

「ウォーロックと出会うまではずっとそうだった。信頼できるパートナーが出来てから、大切な友達、“守りたい物”ができた」

『……………お主にとって守りたい物とは何だ？』

簡単な質問だ。勿論、

「友達」

迷いはない。スバルにとって守りたい物は友達。ヘルクレスにとってパートナーライセンズだったように、スバルもそれに近い信頼できる者だった。

「……友達が出来て気づいたんだ……“孤独は何も生まない”って」  
『孤独は何も生まない、か。……確かにそうかも知れぬな』

ケフェウスは小さく笑っていた。周りから見たら、笑っているかどうかさえ判断できないほどの小ささだが、ロックマンにはしっかりとそれが確認できる。

「ねえ、FM王。いや、ケフェウス。……僕と友達になってくれない？」

『ッ！？』

ロックマンはそう言って右手を差し伸べてくる。

ケフェウスにとって想定外の言葉に度肝を抜かれる。友達……今まで一度も出来たことの無い、信頼できる仲間……。

ケフェウスはその手を握り、握手するか迷っている。友達なんて作っても、どうせ裏切られる。そんな事を考えている。

「大丈夫。僕は君を裏切らない」

その言葉、心を読んだかのような言葉でケフェウスは、何故か信頼できるような気がした。初めてだった。こんなことを言われたのは。

『……地球の者よ……お主の言葉、信じて良いのだな？』

「スバルだよ。星河スバル」

『……では、スバル、信じてよいのだな？』

「勿論！」

スバルとケフェウスは手を握りあった。それは友達としての契約の  
ようなもの。握り合った手は電波体で分らないはずなのに、暖か  
く感じた。

「ありがとう！」

『礼を言うのはこっちの方だ。それより、FM星人達の命令を解か  
ねばな』

「あ、そうだった！」

ケフェウスは先程と同じ、両手を体の前で重ね合わせ、光を黄緑色  
の電波を発し始める。

ハープ・ノートはFM星人全員（オックス・ファイアとウルフ・フオレスト以外）にギターの弦を巻き付かせている。

『『『『くっ…！』』』』

身動きが取れない4体に対し、ジャスミン・ハートは笑っている。そして扇子を天へと上げた。

「雷の舞 避雷針」

ビガァーンッ！！

刹那、薄い雲から青い閃光が4つ、弦で身動き取れない4体へと、文字通り避雷針に落ちるかのように落ちた。全員悲鳴を上げる暇もなく、丸焦げの状態で何が起こったのか分析しているようだ。

「うっん、やっぱりもっと雲が厚くないと雷系の技って威力落ちちやうなあ……」

『でも、雷雲並みの厚さだと、電波体でも一瞬でチリも残らないくらい吹き飛んじやうわよ？』

恐ろしい言葉がああ小さな扇子から聞こえたような気がする……何故あの扇子は笑顔なのだ、と心の中でFM星人たちは呟いている。勿論、先程の雷のせいで4体とも麻痺して動けない。

「さて、そろそろ止めをさしましょう？」

「OK〜！」

そう言っただけで彼女等は扇子、ギターを構える。

「シヨックノート！ フォルテツシモ！」

「雷の舞 サンダーボルト 最高電圧！」

身動きできない彼等に、2人は最大の攻撃を放った。

ハーブ・ノートの方はギターから発せられた大型の音符の電波。

そしてジャスミン・ハートの方は、扇子を上にした瞬間、そこに雷が落ちて扇子がそれを吸収した。刹那、扇子はそれを何倍にも電圧を増幅させ、扇子を相手に向ける。瞬間、高電圧の電撃として放たれた。

『『『ウワアアアアアアアアアアッ！！』』』』

4体は一気に後方へと吹き飛ばされた。

すると、キャンサー・バブルの右手からアンドロメダの鍵が飛び出した。

『し、しまったブクウ！』

時既に遅し。アンドロメダの鍵は地面へと思いっきり打ち付けられ、音を立てて粉々に砕け散る。

『アア!!!?』

『『ツ!!!?』』

『『ウオツ!!!?』』

オックス・ファイアとウルフ・フォレストは目が背覚めていたように、鍵が壊れると同時に全員一緒に絶句する。

「アンドロメダの鍵が……」

「壊れちゃった……」

ジャスミン・ハートの言葉の後にハーブ・ノートが言葉を繋げた。

『鍵が…アンドロメダの鍵が……ウワアアアア!!』

キャンサー・バブルはうつ伏せの状態で倒れたまま、涙を流しながら泣き出した。

『お、おい、どうするッ?』

『どじぶると言わへても……』

オックス・ファイアの言葉にクラウン・サンダーが答える。どうやらクラウン・サンダーは驚いた時にあごが外れたらしく、うまく喋れていない。今も自分の顎を支えている。

『んっ』

すると、クラウン・サンダー、ウルフ・フォレストを中心とするFM星人が何かを感じたのか、後ろに振り返り、東の空を見上げる。すると先程と同じで、空に星が光り輝いている。

『あれはッ』

『FM王の緊急信号だ!』

リブラ・バランス、オヒュカス・クイーンの順に言った後、ウルフ・フォレストがその信号を読み上げていく。

『全員……帰還せよ……FM星への帰還命令だ!』

「帰還命令!? じゃあロックマン達は」

『上手くやってくれたみたいね』

「それじゃああたしたちの地球は」

『抹殺される心配は、もう無くなったのよ』

ジャスミン・ハート、ジャスミン、ハーブ・ノート、ハーブの順で言うていく。



「そんなバカな!!」

上空ウエーブロードにて、1人だけ納得のいかないジエミニ・スパークWホワイトことツカサは、信じられないような顔をしていた。

『……戦闘の途中だが』

『命令とあらば仕方あるまい』

『我々に選択の余地はない』

『お前達、命拾いしたな!』

オックス・ファイア、クラウン・サンダー、リブラ・バランス、そしてオヒュカス・クイーンが捨て台詞を残した後、クラウン・サンダー以外はこの場を立ち去った。

「僕は嫌だ！ このまま引き下がれるか！」

『だが、撤退命令は絶対だぞ？』

「ふん、腰抜けのFM王目！！」

そう言った後、ジェミニ・スパークはこの場から周波数を変えて後にする。

『行くぞ、キャンサー？』

『……………うん……………』

キャンサー・バブルにそう告げると、立ち上がり、一緒にこの場を去って行った。

ジャスミン・ハートとハーブ・ノートもそれを見送った後、この場から去っていった。

「ケフェウス、ありがとう」

『礼など良い。元々こちらが出した命令だ。友達となった今、止めさせる事が余のやることなのだからな』

そう言葉を交わしたあと、2人は微笑み合う。

『スバル、そろそろ余は帰らねばならぬ。そして、余は民に伝えようと思う。お主から教わった友達、信頼の大切さを』

「うん、頑張って王様！」

『ウォーロック、お主もありがとう。お蔭で余の中にあつた地球人に対する憎悪が消えたようだ』

『いや、俺は何もしてねえよ』

『そうか……。スバル、ウォーロック。いつかFM星に遊びに着て

くれ。その時は余の友達として民たちに紹介しよう』

「うん。いつか必ず行くよ！」

『それまで良い王様でな』

『あア。ではな』

「うん、また！」

ロックマン、ケフェウスが手を振った後、ケフェウスは姿を消した。周波数を変えたのだろう。ロックマンも地球へと帰るために、地球へと向かって行った。

北極 P M 1 2 : 0 2

昼すぎの北極。北極のある数多くある氷柱の中の、一番大きな氷柱

の近くのウェーブロードに2人の電波人間、ジェミニ・スパークのWとBが立っている。

『……海底火山の爆発で、地表へ姿を現したようだな』

「痺れを切らしたんだよ、ア・ンド・ロメダも」

Wは自分が持っている本物のアンドロメダの鍵を取り出す。中身はほんの数的しかマイナスエネルギーが入っていない。

『そろそろ俺たちが本腰を入れる頃だな』

「そうだね……」

そう言いながら、大きな氷柱へと視線を向けなおした。否、ア・ンド・ロメダが氷付けにされている氷柱に視線を向ける。何か大きな企みを持っているような笑みを浮かべながら。

地球抹殺へのカウントダウンは……止まらない。

地球抹殺まであと一日



## 第94話 友達（ブラザー）（後書き）

おつかれさまでーす。いやあ、凄いグダグダですね……。

ほんとはこの半分ぐらいになる予定だったんですが……私の描写の下手さでこんなことに……すみません。

さて、反省……

スバルこんなキャラだったっけ？ ケフェウスの台詞引用し過ぎ、そして内容グダグダしすぎ……orz

次話からは、今回のより早く更新できると思います。次話からもうアニメなんで（笑）

では、感想待ってます。

第95話 マイナスエネルギー（前書き）

何か余分ななとこ書いてたら遅くなりました！<>



## 第95話 マイナスエネルギー

PM1:26 アマケン

アマケン一階の司令室フロアにて、天地、宇田海、亜夢、ミソラの5人は戦闘終了後、アマケン内の食堂にて昼食を済ませ、スバルの帰りを待っている。地球を救った英雄を待っている。

亜夢やミソラは、食べずに待っていよう、と言っていたのだが、お腹が2人同時にグーと鳴ったので、紅くなりながらもしょうがなく食べたらしい。

「それにしても、帰ってくるの遅いね」

「確かに……」

『地球からかなり離れているとは言っても、電波変換してるんだからそんなに遅くはないはずなんだけど……』

『もしかして、何かあったのかしら？』

ジャスミンの一言で亜夢とミソラは血相を変える。ついでを言つと今にも電波変換をこの場で行なおうとしている。

「待て待て！ スバル君なら大丈夫さ。もし行き違いなんてことになつたらどうするんだ？」

「「「うっ……！」」」

天地の一言に何も言い返せなくなった。行き違いにでもなったら話にならない。ただの笑いものだ。

『……あ。ロックマンとウォーロックの周波数だわ』

「「えっ!?!」」

不意のジャスミンの言葉に、2人は度肝を抜かれながら亜夢のトランサーに顔を向けた。ジャスミン曰く、その時の2人の顔はもの凄く恐かったという。

「ただいまあゝ」

刹那、いきなりスバルがフロア入り口にて現れた。多分、電波変換したままここまで周波数を変えたまま入り、電波変換を解いたのだろう。

スバルはぐったりしている。FM王の大量の電波、電磁波を浴びたのだ。生身に影響がない方がおかしい。

「「スバル君!?!」」

「お帰り!」

「お帰りなさい、スバル君!」

2人以外、天地と宇田海は至って冷静だ。逆に2人は喜びより先に驚きが出てしまう。だが、ぐったりしているスバルにはその2人が眼中に入る事はなかった。

「それにしても、帰り遠かったあ……」

『殆ど体力が残ってない状態だったからなア。近いとはいえ、帰ってこれたのが奇跡だな』

ウエーブスカヤナーからウォーロックの声が聞こえる。スバル達が遅かったのは単に体力が残っていなかったからスローペースになっていただけのようである。

『あら？ ヘルクレスは？』

『そういえば感じられないわね……』

ハープ、ジャスミンが言うと、スバルは暗い表情へと変わる。

「……まさか!？」

「そんな……!」

両手を口にあて驚く亜夢とミソラ。亜夢には少し悔しい表情も見られる。

『あいつは“守りたい物”守っただけだ。心配するな。この広い宇宙の中であいつは生きていくはずだ。だろ、スバル?』

「……うん。そうだよ、ヘルクレスは必ず帰ってくる。そう約束したんだから!」

ウォーロックの言葉にスバルは元気を取り戻す。そのスバルの言葉に他の皆の悲しみの表情は消えた。

「……話は変わるが、スバル君、ウォーロック。FM王の撤退命令を信用していいのかい？」

天地が違う話を切り出した。内容はケフェウスの撤退命令を信用していいのかというものだ。

「うん。ケフェウスはもう地球を抹殺する理由がなくなったからね」  
笑顔で答えるスバル。

『ウイルスなどの被害も、もうなくなるだろう。FM星に送られたウイルスも帰って行ってるみたいだから』

更に付け足してウォーロックが答える。スバル達が帰っている道中、地球から撤退していくウイルス達をウォーロックは見たそうだ。これで地球にはもう電波ウイルスがいなくなるというのは言うまでもあるまい。

「そつえば、例の送信システムですが」

宇田海は思い出したように目の前のパネルを操作し、モニターに宇宙ステーション“絆”の送信システムの映像を映し出す。

「今は役目を終えたように機能を完全に停止しています」

宇田海のいうとおり、送信システムから出ていた特殊を出している様子はない。宇田海の話では、FM星の周波数大域の急激な変化も消えている、らしい。

「……FM星を浄化したということか…？」

『かもな』

「ウォーロック。父さんは…？」

スバルは今一番気になっている、絆の中に大吾が居るのかを訊く。スバル、否、天地や宇田海にもとって一番気になっていることだ。

『……残念だが、もう感じない。ステーションの乗組員<sup>クルー</sup>達の存在も』

ウォーロックはモニターも見ながら静かに言う。周波数を感じないということは、その場所から立ち去ったということだろう。ならば、今何処で何をしているか分からない。何も手がかりがなくなっただということになる…。

殆ど陽が沈んでしまった夜。ここでいつもの円形のテーブルを囲むようにして全員座っている。

何やらFM星人達がギャーギャーと騒いでいる。否、騒いでいるのはキャンサーだけのようである。

『オイラは帰らないブク！ 明日ミソラっちのコンサートがあるんだブクウ！』

『このチケット、手に入れるのに苦労したんだぞオ…！』

何を嘆いているかと思えばミソラのコンサートがあるからだそうだ。その嘆きに皆を同意させるかのようにクラウンが何処からか、髭を起用使ってチケットを二枚取り出し、皆に見せる。チケットはピンク色で、「響ミソラ コンサートチケット」書かれている。

『なら、FM星の帰還は明日の夜だ。それまで各自、自由行動としてよう』

そうウルフが提案する。

『賛成だ。 1日あれば身辺整理も出来る』

『私も思いつきり買い物出来る。 オックスは？』

『俺は別に。 まあ、ゆっ、くり休ませてもらうさア』

両腕を上には伸ばし、伸びをする。リブラ、オヒュカス、オックス、一応全員賛成のようだ。

キャンサーとクラウンは歓喜を上げながら踊っている。周りから見ると、奇妙な踊りだ。

数分後、各自（オックス以外）は一筋の光となり、この秘密基地を後にして別々に分かれていった。

『さて、俺はどうするかなア……………』

1人テーブルの前に座っているオックスはあと一日何をするかのに考えている。

『うーん……………ッ!？』

グサリッ

『何…イッ!？』

気づけば電気を帯びたソードに、後ろから胸を貫かれていた。ソードを帯びている電気が体を流れているのが分かる。徐々に体が麻痺してきて痛みが感じなくなってきた。

『う…あ……………』

オックスは最後の力を振り絞り、殆ど体が麻痺して動かない体を動かして後ろから刺した張本人を見る。

「フッ……………」

その人物は笑っていた。オックスも知っている人物だ。否、オックス

スだけではない。FM星人達もよく知っている人物だ。

『きッ…貴様ア、アアアアアアッ!!!!』

刹那、もう2つ目のソードが胸を貫いた。オックスの断末魔は数秒後に、姿が徐々に消えていくと同時に消えた。

ヒュイイインッ

それと同時に、電波となつて消えたオックスは彼の持つていたアンドロメダの鍵に吸い込まれていった。するとアンドロメダの鍵に6分の1程の紫色のマイナスエネルギーが溜まっていった。

ガシャーンッ!

同時にオックスの身に纏っていた、赤色のシヨルダー、顔のマスクのようなものが地面に落ち、秘密基地内に笈した。



次の日 展望台

学校は終わり、展望台へ来ていたスバルとウォーロック。今日はわりと早めの1時ぐらいに学校が終わったため、日差しが強い。その炎天下のなか、スバル何の気なしにビジライザーを掛け、芝生の上に座り込んでいる。

「……………」

スバルは顔を伏せて考えごとをしているようだ。たぶん、大吾の行方についてだろう。

『何処にいつちまったんだ。大吾の奴…………』

隣に座っているウォーロックが呟く。どうやらウォーロックも大吾の事を考えているようだった。

「…………父さんはこの宇宙の何処かに必ずいる。僕がみつけてみせる！」

『その時は俺も一緒だぜ、スバル』

ウォーロックもスバルと同じ考えである。その後、スバルはウォーロックに、ありがとう、とお礼を言う。

…………ウォーロックは大吾の事とは別に他のことも考えている。

『（戦いが終わった筈だが…………何なんだこの感じは？）』

何か嫌の予感がしていた。確信はない。野生の感という奴だ。こつ  
いつときのウォーロックの感は良くあたるらしい。

「何してるの？」

「っ！」

すると、不意に後ろから誰かが話しかけてくる。振り返ると、そこ  
には亜夢が立っていた。

「……何だ、お前か」

「カチーン、何だって酷いんじゃない？」

「!?!」

姿が見えていないと思ってウォーロックは呟いたのだろうが、亜夢  
はスバルの腰にあるウェーブスキャナーを介して、僅かにウォーロ  
ックの言葉が聞こえたようである。因みに、カチーン、と言ったの  
は、彼女がテレビとかでよく聞くあの音らしい。

『地獄耳が……』

「何か言った？」

亜夢の額には徐々に青筋が浮かんでくる。顔は笑っているが、相当  
怒っているようで、今にも殴りに掛かりそうな雰囲気だ。

『何でもねエよ』

それを察知したのか、ウォーロックは即座に話しを誤魔化す。

「どうしたの？」

「うん……ちょっとね」

亜夢はスバルの隣（ウォーロックとは逆）に座り、スバルに尋ねる。  
だが、スバルは話そうとはしないようだ。

『テメエらこそ何しに来たんだよ？』

「た、たまたま来たらスバル君が落ち込んでるの見ただけだよ！」

『（ほんととは後についてきたなんて言えないわね……）』

ジャスミンだけが知っている秘密。これを言うかどうかは御想像にお任せする。

その転 朝倉マユ宅

朝倉マユ。小学校低学年くらいの女の子。彼女は一度、FM星人ウルフにリッキーと名前をつけ、一D（電波）ペットとして飼いならしたことがある人物だ。彼女はウルフのことをFM星人とはしらないが。

その彼女は今庭で、ウルフが残したDペット（ウルフの子供だとマユは思い込んでいる）コリッキーとフリスビーを投げて取らせるといふ遊びをさせている。

ガブツ！

空中に飛ばしたフリスビーをコリッキーは口でキャッチし、マユの元まで持ってくる。よく見ると、コリッキーは赤ん坊だった頃より成長しており、今や大型犬並みの大きさになっている。Dペットは普通の動物より育つのが早いのだろう。

「わあ、コリッキーえらい」

そう言って、コリッキーの頭を優しく撫でる。そして、コリッキーの前にDペット用の餌を置いてあげた。

「はい、こ褒美だよ」

それをコリッキーは息を切らしながら、待ってました、と言わんばかりに食べ始める。

「えらいえらい」

そう言って、マユは食べる様子を眺めている。

そのマユ達の様子をFM星人ウルフは上空のウェーブロードから、うつ伏せに寝転び腕に顎をのせて眺めている。

『（地球人に飼われるなんざ、ろくでもない体験だったが……今となれば良い土産話だ）』

ゆっくりと、起き上がっていく。

『元気でやれよ……ん』

ウルフが立ち上がって呟いた後、視界に何かが映るのを見た。刹那

ドゴォーンッ！

『グワアアアアアッ！！』

ウルフに電撃が放たれた。先程視界に入ってきた人物からの不意な攻撃だろう。

電撃が止んだ後、ウルフはその場に苦しく悶えながら倒れる。

『クッ、お前は……！』

先程攻撃してきた人物は2人。白い姿の者と黒い姿の者。その2人はウルフに手を向けると、

ドゴオーンッ！

電撃を放った。

「ほ？」

ふぬけた声を上げながらマユは上空を見上げた。先程までウルフがいた場所を見ていた。姿は見えなくとも、何かを感じたのだろう。

コリツキーもマユと同じ場所を、少し不安そうな顔で見ている。

そこにはにはウルフの体の一部、ショルダー等しか残っておらず、ウルフの姿は消デリートされていた。

『思った通りだ。地球人に何か仕掛けるより遥かに効率が良い』

ジェミニ・スパーク。

ウルフがいた場所より少し離れた場所で、Bはアンドロメダの鍵の中を覗いている。中は6分の2程のマイナスエネルギーが溜まっている。

「大したものだねえ。F.M星人が生み出すマイナスエネルギーは」

その横でWは不気味な笑みを浮かべながら笑っている。

『これならいける……アンドロメダを動かせるぞ！』

とある大型ショッピングモールの中にあるショッピングモール、否、詳しく言うとショッピングモールの中にある洋服店。こういうのをアパレルショップというのだろうか。

とある大型ショッピングモールの中

話を戻そう。物質変換したオヒュカスはその店の中で鏡の前に立ち、衣服を自分に合わせて自分の姿を見ている。斜め左後ろに店員さんらしき人が大量の衣服を抱えているのが見える。どうやら全てオヒュカスが選んだ商品らしい。

『（節約の日々は終わった！ 私が地球で稼いだ金、今日で使い切

つてやる！』

オヒュカスの言うお金とは、地球での生活のため節約して生活費を貯めていたお金である。それをキャンサーが地球侵略のために使い切った事もあったが、それはまた別の話である。

数分後、オヒュカスは大量の紙袋を両腕で抱え、店を後にしエスカレーターから降りてくる。その時凄くご機嫌な顔をしていることは言うまでもない。

降りてしまい左に回り、エスカレーターの側面側を歩き始めた瞬間、

ドゴオーンッ！

『ッウワアアアッ！！』

室内のはずなのに雷、否、電撃が放たれた。オヒュカスはダメージを食らったため、物質変換が溶けてウェーブロードへと移動された。

オヒュカスは跪いた様な体制をしていると、目の前にジエミニ・スパークが腕をエレキソードを変えて立っている事に気づく。

『ジエミニ、何のマネだ！？』

彼らは無言で笑みを浮かべ、エレキソードで攻撃する態勢になる。

『お前達ッ……！』



刹那、2人一斉に駆けて来て、オヒュカスをエレキソードで切り裂いた。

ザンツッ！！

『アアアアッ！！』

短い断末魔と共に、オヒュカスは電波マイナスエネルギーとなつてデリートされた。

## 秘密基地

リブラ物質変換し、自室で引越しするように荷物をダンボールに纏めていた。ダンボールの中には、ラブリー・バランス時代の衣装や、“宇宙人は悩んでいる”の本を何冊が見られる。

『……FM星に帰ったらまず何を食べる？ A、電波ライメン。 B、電波バーガー』

そんな食べ物あるのか、とツッコミたくなるような食べ物を口に出してのんきに考えている。

後ろにジェミニ・スパークが立っているとも知らずに。

ドゴォーンッ！

『グアアアアアッ！！？』

瞬間、ジェミニ・スパーク2体から電撃が放たれる。

リブラは物質変換が解けると同時に、ジェミニ・スパーク達とは逆方向、つまりリブラにとって前方へと飛ぶ。

『貴様ッ！！』

リブラは空中で攻撃してきた方向を見る。しかし、ジェミニ・スパークたちはそこには居らず、リブラを挟むようにしてリブラの両側にいた。

「フフフっ」

『お前に選択の自由はないんだよ！』

『一体どういつつもりだ！？』

リブラが言った時には既に2体は後ろに回り込んでいた。

『何のために!?!』

リブラが後ろへ振り返る。視界に映ったのは、2メートル程先でジェミニ・スパークがジェミニサンダーの構えに入っていることだけ。ガシッ!

『「ジェミニサンダー!!!」』

腕を力強く合わせた瞬間、ジェミニサンダー最大技は放たれる。

『ウオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!』

電撃に絶える事が出来なかったリブラは、天秤だけ残してデリートされた。カランカラン、とその場に天秤が落ちる。

アンドロメダの鍵には6分の4ほどのマイナスエネルギーが溜まっている。

『あと2体...』

「キャンサーとクラウンだ...」

不気味に笑った2人はその場から姿を消した。

アマケン

今、スバルと亜夢はアマケンの中、司令室のフロアにいる。気分転換……というか、炎天下の中外にずっといるのは流石にこたえるので、とりあえずアマケンに来たのだ。因みに天地と宇田海もスバル達の近くにいる。

すると、フロアに入り、アマケン職員の男性が天地の下へ駆けて来る。

「天地さん、緊急通信です」

「どうした?」

「北極圏を中心とした広い範囲で原因不明の電波障害現象が発生していて、今も範囲が広がっています」

「何だと!?!?」

すると職員は、説明を続けながらパネルを操作し始める。

「その現象の中心地付近で、このような物が発見されたとの報告が来ています」

そして、モニターにその映像を映し出した。何百メートルもの高さの氷柱が映っているが、画像がぶれていてはつきりと映っていない。

「画像が荒いのですが……」

そう言うと、氷柱の上の方を拡大していく。すると、そこに映っていたのは、氷柱の中に閉じ込められているアンドロメダだった。

「これはっ…！」

「まさか、アンドロメダ!？」

天地の後に宇田海が続ける。

「アンドロメダの鍵は壊れたはず……だよな？」

『えエ、あるとき完全に……』

間近で壊れるのを見ていた亜夢とジャスミンは言ったあとに絶句する。

「それならどうして…?」

『……あの嫌な感じはこれだったのか……』

最後のウォーロックが呟く。どうやらウォーロックの野生の感はあるたようだ。

「……このまま監視を続けてくれ」

天地は職員に冷静に対処する。職員は返事を返すとそのままパネルを操作し始める。

「宇田海！」

「はい！」

2人でアイコンタクトを取るとスバル達を別の部屋へと移動させる。

### 宇田海の研究室

移動させられた場所は宇田海の研究室だった。部屋のあるテーブルの上には何やら、六角形の箱のような電子端末、側面が青、赤、緑色の3つが置かれている。

『これが新しいトランサーか？』

逸早くウォーロックが気づく。どうやら、修理していたトランサー

らしい。……原型は全く感じられないが。

「スターキャリアーです！」

宇田海が自慢げな声で言う。相当な自信作のようである。

「スターキャリアー？」

2人の疑問には天地が答える。

「スバル君のトランサー、修理のついでにいろいろ改良を加える内にね、」

「これはもうトランサーとは別の何か！ 名づけて、スターキャリアーです！」

天地の説明が途中でいつの間にか宇田海が説明している。……後ろからファンファーレが聴こえたような気がしたがあえてスルーする。

「ロックマンがよりスピーディに戦えるって聞いたけど？」

スバルは宇田海ではなく、天地に訊く。天地は頷くと真ん中にある青色のスターキャリアー右手でを持ち上げる。

「全てのバトルカードを内蔵して、」

スターキャリアーを操作する。すると、スタキャリアーの上に大きな目のディスプレイが出現した。どうやら電源を入れたら出現する仕組みのようだ。

「相手に対して有効なバトルカードを瞬時に出せるようにしたんだ」  
ディスプレイ一杯に多種なバトルカードが表示される。すると、画面が切り替わりウィルスが表示される。そのウィルスの右には3枚のカードが表示されている。すると、瞬時に真ん中のカード、モジヤランスが選ばれ拡大された。

「ウォーロックにプレデーションさせなくても武器が出せると言う訳さ」

「へえ〜」

「ビジライザーの原理を応用して、電波空間をモニターできるようにしてみた」

すると、スターキャリアーを操作し、ディスプレイの“WATIN G”という文字をタッチする。するとディスプレイに電波空間が映し出される。

左から黄緑色の手が出てきて、手を振っている。それが引つ込んだかと思ったら、下からドアップでウォーロックが現れた。迫力のある顔で一瞬スバルは身を引いた。

『見えてるかア？』

「うん、一応…」

「まだこの程度だけだね。サテラポリスからの依頼に答えて開発したんだ」



「え、コレ完成したんじゃないの？」

スバルが聞いた途端、宇田海の顔が横から入ってくる。

「まだですよ！ 肝心な大発明がまだなんですよ！！」

大発明と言うぐらいなのだから、きっともの凄い発明なんだろうなあ、と亜夢はそつと頭の中で考えてみたりしている。

### その頃　コダマモノレール

市街を巡回するモノレールの中では委員長、キザマロ、ゴンタの3人がいた。何処かへ行っているのだろう。

「スバルの奴。ミソラちゃんのライブのチケット、折角とってやったのに何でこないんだよ〜」

委員長の左に座っているゴンタの言葉からすると、3人はミソラのライブへ向かっているようで、スバルにもそれを誘ったらしい。結果断られたようだが。因みにチケットを取ったのはゴンタではない事は言うまでもない。

「まあまあ、スバル君にも色々事情があるんですよ」

委員長の右に座っているキザマロが言うと、委員長は右拳を軽く握り締め、

「さあ、今日もノリノリでいくわよ〜！」

と、ライブ前からテンションが上がっていた。

そんな委員長達と同じモノレールの、後ろの車輜では

『……………』

物質変換したキャンサーとクラウンがただボーっと、座席に座って天井を見ていた。クラウンの隣では、まだ2、3歳くらいの子供が、クラウン物質変換時の背中についている“矢”を軽く引っ張り遊んでいる。

すると、小さな音と共に矢は真ん中から半分に折れて、その尾の部分の子供が握って見ている。それに、その母親が気づいたのか、子供を抱えてクラウンから離れさせる。

『ハア〜……………FM星に帰れるのは嬉しいが』

『ミソラっちの歌が聴けなくなるのは寂しいブク……………』

2人はやや憂鬱モードだった。すると、クラウンが左手に持っていた紙袋からある物を取り出した。それはミソラのCDだったが、少し違う。クラウンがCDを傾けると、ジャケットの絵が“ギターを持っているミソラ”から“ギターを持ってバイサインしてウイंकしているミソラに”に変わる。どうやら、角度を変えると二枚中一枚の絵に変化するあれ、らしい。

『ミソラっち！？ それは何ブック！？』

『知らぬのかア〜？ ミソラちゃんの新曲。先着予約100名様限定の、“お宝ジャケット”じゃよオ〜！』

『何イ！！？ そんなの初耳ブック！ オイラにも見せるブック！』

キャンサーがCDをクラウンから引ったくり、何度も角度を変えながらジャケットを見ている。その頃クラウンの隣では先程の子供が矢の尾を折れた部分同士を、そつとくつつけている。一瞬折れる前に戻ったかと思っただが、直ぐにクラウンが体を動かしたため、矢の尾が座席へと落ちる。

その子供はまたもや母親に、よしなさい、と言われながら抱えて連れて行かれた。

『余のミソラちゃんに触るでない！』

クラウンがそう言ってキャンサーから取り上げようとした刹那

ドゴォーンッ！

『ウオオオオツ！？』

『ウギヤアアアツ！？』

黒い穴が出現し、そこからキャンサー達に雷が落ちた。瞬間、キャンサー達の物質変換は解け、辺りの乗客は驚きざわつき始める。モノレール内に雷が落ちた事、そして落ちた相手が宇宙人だったこと。特に2つ目の理由で悲鳴を上げそうになっている人も居る。

キャンサー達はそれを察知したのか、直ぐに周波数を変えて、モノレールより上空のウエーブロードへ移動する。すると目の前にはジエミニ・スパークの姿があった。

『お主はジエミニー！』

『何するブクウツ？』

『まアそう怒るな』

ジエミニ・スパークたちへの反論に対し、Bは冷静に言う。すると、Wがアンドロメダの鍵を取り出す。

「これを見なよ……」

『それは……』

『アンドロメダの鍵ブク……。お？ 壊れたはずなのに……どういってとブク？』

すると、Bが不気味な笑み、そして相手を見下すような目で答える。

『悪かったなア。お前たちに渡したのは偽物フェイクだったんだ』

『偽物……』

『なんと、我らを謀ったと言つのか……！』

『こつちの証拠にほら……』

Wは右手にあるアンドロメダの鍵を横目で見る。

『ちゃんと溜まってるだろ……？』

『それがマイナスエネルギー？』

アンドロメダの中に溜まっている、紫色の液体のような電波を見ながらキャンサーは尋ねる。

『そつだよ。君たちF.M.……星人の、ね』

『お前たちから恐怖や苦しみを集めさせて貰ったのさ』

『地球人をどうにかするより、手っ取り早いからね』

『ッ！？ まさかお主等』

言い終わる前に、Bは周波数も変えずに一瞬でクラウンの背後に回り

グサリッ！

『ゴワアッ！！』

『ッ！？』

キャンサーが声に気づいてクラウンを見た時には既にクラウンは、  
王冠ごとエレキソードで貫かれていた。

『又アアアアアアアアッ！！！！』

キャンサーは絶句していた。見えなかったのだ。Bの速さに付いて  
いけなかつのだ。

クラウンの体は徐々に電波となって消えていき、代わりにアンドロ  
メダの鍵内にマイナスエネルギーが溜まっていく。

『後1人…お前ので一杯になる』

『ッ！？』

Bがキャンサーを横目で見て言う。キャンサーはこの状況で恐怖を  
覚えた。次にやられるのは……自分だ。<sup>キャンサー</sup>

『アンドロメダが復活するんだ』

『地球抹殺再会だよ』

最後の言葉に更にキャンサーは言葉を失っている。



『キャンサーか!?!』

『そつみたいね!』

、と短く確かめるとウォーロックは周波数を変えて、アマケンより2メートル程上のウェーブロードへと移動した。

『ウウウウウウウウウッ!』

すると、もの凄い速さでキャンサーがウォーロックの胸にドンッという音と共にぶつかる。

『ッ、何だ、どうした!?!』

見ると、キャンサーは大量に涙を流している。キャンサーは直ぐに、先程の“あの出来事”を離し始める。

『クラウンがやられたブク! オイラもやられるブクウ! 助けてブクウッ!』

全くと言っていいほど、文になっていない。兎に角、ちゃんと話しを聞くために、ウォーロックは胸で泣いているキャンサーの両脇を抱える。

『キャンサー、何があった!?!』

『皆ジエミニにやられたブク! オイラもやられるブク、助けてブクウ!』

『何だとッ!?!』



その頃 北極

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴッ

地表、いや、巨大な氷柱は揺れている。大地震が起きたかのように、火山の噴火寸前のように、激しく。

アンドロメダ。揺れの中心部には氷柱の中に閉じ込められているアンドロメダの姿がある。

氷柱には小さいが

亀裂が入っていた……………。

## 第95話 マイナスエネルギー（後書き）

これまた凄く長いような……にしても、最初凄い駄文だ（-\_-;）

やっぱりBSで奈々さんを見られなかったのが……あ、いえ、何でもないです。

では、ラスト5話になりましたが、最後までお付き合い下さいますようお願いしますm（-\_-）m

さて、テストも終わったしポケモンしなきゃ……AB！見すぎて全然進んでないから……ね

## 第96話 絆（前書き）

サブタイ本当は「ふたつの絆」だったんですけど、この“ふたつ”がスバルとツカサなのか、スバルとミソラにかけてあるのか分からなかったの、まとめて絆にしました。別にコレと言って深い意味はありませんw

## 第96話 絆

スバル、亜夢、天地、宇田海は宇田海の研究室のモニターの前に集まり、外にいるキヤンサーと会話をしている。因みにウォーロックとジャスミンはウェーブスキャナーとトランサーの中にいる。

モニターは、肉眼ではキヤンサーを見ることができないので姿を見るために使われているようだ。

『アンドロメダの鍵を持っていたのはジェミニだったのか……』

「仲間の命をマイナスエネルギーに変換するとは……」

キヤンサーから詳しい話しを聞いた後、ウォーロックと天地は呟く。

《あと一体で鍵が一杯になるブク！ オイラ殺されるブクウ！》

助けを求めるように言うキヤンサーに、宇田海が

「君がここにいたらこっちが襲われてしまいますう！ 早く出てってください！」

と、血も涙もない言葉。その言葉にキヤンサーは涙を流しながら「そんなアブクウ！」と嘆いている。

『おちつけッ！ 奴が近づいてきている気配はない』

ウォーロックが嘆いているキヤンサーに言い聞かせる。暫くすると、キヤンサーの嘆きも止んだ。

「あと一体のFM星人……」

スバルは考えている。キャンサー以外の残りのFM星人と言うと、

「……ウォーロックもFM星人だね」

「それを言うと、ジャスミンもだよね」

スバルと亜夢が自分たちのパートナーを覗きながら言う。だが、2体の電波体はその言葉に少し反論する。

『あア』

『だけど、ウォーロックが言ったようにジェミニが近づいてくる気配はないわ』

電波体の気配が分かる2体が言うのだ。間違いないだろう。そうなら、他のFM星人は……

「……ハープ……ッ！ ミソラちゃんが危ない！」

スバルの言葉にキャンサー以外の全員は戦慄が走った。不吉な予感と、何か嫌な予感がしたからだ。

## ライブ会場

その頃、ライブ会場ではミソラのライブが行なわれていた。毎度のように会場は凄い人と熱気だ。

因みにミソラはライブ用の衣装を着ている。袖なしの黒い衣装に、ネクタイをしていて短パンをはいている。

【 時々意地悪な 風に押し戻されて 】

ミソラの弾いているエレキギター型トランサーの中にはハーブがいる。そのギターだけで殆どの歌の曲は出来ているのだからある意味凄い。

「『……………』」

そのステージの天井、照明がある場所の影には黒と白と二つの影があった。

【 遠く 見える この瞬間があつて 】

スバル、亜夢の2人と2体の電波体は戦慄が走って数秒後、電波変換してミソラのライブ会場へ向かうべく周波数を変えた。

《なんでミソラっちが危ないブク？ ハープとみそらっちは関係ないブクよオ》

一人キョトンとしていたキャンサーは部屋に残っている天地と宇田海に尋ねた。それに宇田海が少し威張って答える。

「関係ありますう。ハープ・ノートの正体は響ミソラですからあ！」

《はア！？》

瞬間、キャンサーの頭の中で“天使のような笑顔のミソラ”と“ドSの女王のような鬼のようなハープ・ノート”を想像した。そして、それが一緒だと認識した直後。

《何、だ、ってエエエエエエエ！！！！？》

知らぬが仏。という言葉があるが、今の状況はそれに少し近いものではないだろうか？

ワーーーーー！

観客席では歌が止むと同時に凄いい歓声が湧き上がった。その観客の中には委員長達の姿もある。

「みんなあ！　ありがとうー！！」

するとミソラが客席に向かって手を振りながら笑顔を見せ、舞台そでへと駆けて行く。

ミソラが疲れて肩に掛けていたストラップ（ギターに付いているベルトのようなもの）を掛けるのをやめ、手でギターを持つ。瞬間



ビギヤーンツ！ バキーンツ！

2つの音と共にギターがネックの真ん中から折れた。否、前者の音は軽い電撃音、後者の音はギターが折れる音。つまり、何らかの電撃によりギターが折られたのだ。

『キヤアアアア！！』

ギターからハープの悲鳴が聞こえる。どうやら、先程の電撃がハープにもダメージを与えたようだ。

「ハープ！？」

『離れている』

「えっ？」

声が聞こえたためミソラが正面に向き直ると、目の前は暗闇で、声の主が見えない。すると、もう一人の声が聞こえてくる。

「僕達はその裏切り者に用があるんだ」

「あたしのライブを邪魔する気！？ 許さないわよ！ 電波変換！」

刹那、舞台そでから爆発、爆音と共に黒い煙がステージに出現した。客席にいる観客は少々パニックになりつつある。

「何なの？」

瞬間、煙の中から電撃と共にハーブ・ノート、ジェミニ・スパークの2体が飛び出した。

「ミソラちゃん!!」

「違います！ ハーブ・ノートですよ！」

ゴンタとキザマロが叫ぶ。瞬間、ハーブ・ノートが立っている場所に雷撃が落ちる。直ぐにジャンプして避けたためダメージは負わなかったが、代わりにステージの一部が破壊される。

観客はその光景を見て既に非難し始めている。が、委員長達は違う。

「ハーブ・ノートですって!!? どういうことよ！」

「ここは危険です！ 早く逃げましょう！」

ハーブ・ノートに今にも食い付きそうな委員長をゴンタとキザマロが抑えている。

瞬間、空中にいるジェミニ・スパークB、Wはロケットナックルを同時に繰り出した。

『ちょっと、何マジになってるのよ、ジェミニってばア!?!』

そのロケットナックルをハーブ・ノートが空中で体を捻らせつつずつ確実に避け、ハーブがジェミニに言う。

『戦士として役立つぞのお前だが……』

「アンドロメダ復活のためには、立つてもらおうよっ！」

的をはずしたロケットナックルは方向を変え、尚もハーブ・ノートの元へ向かってくる。

「マシンガンストリング！」

だが、ハーブ・ノートが弦をクモの巣のように張り巡らせ、跳ね返すことが出来る壁のようなものを作る。

ロケットナックルが弦にぶつかった刹那、ロケットナックルは不規則な方向へ跳ね返され、ステージや観客席へとぶつかり爆発する。

「……………ここじゃ戦えないわ」

小さく呟くと、ピンク色の光となり周波数を変えながら天井へと向かい、外に出る。ジェミニ・スパークもその後を追うように黄色い光となる。

ハーブ・ノートとジェミニ・スパークが光のまま数回ぶつかりあう。そして、ガキインツ、という音を最後にライブ会場の屋場へと着地する。

『戦いは終わったのよ！ 王の命令に背く気！？』

『王？ 弱気なケフェウスなど宇宙のゴミだ』

Bが毒づくくと、Wが左手にエレキソードを出現させる。

「今やアンドロメダは僕等の物」

『俺達がFM星の新たなる支配者となるのさ!』

Bも右手にエレキソード出現させる。瞬間、ハープ・ノートに向かって突っ込んでくる。

「ッ!」

いきなりの事に驚き、一瞬体の自由が利かなくなる。しかし、直ぐに自由を取り戻し、Bの攻撃を避ける。Wの攻撃も避けようとしたが、それが足への攻撃だったため、避けた途端に地面に尻餅をついてしまう。

「……………」

どうやら、尻餅着く直前に右足首を痛めたらしい。痛みにより右足首を抑える。

『…………ジエミニの狙いは私だわ! ミソラは逃げて!』

「駄目! 今電波変換を解いたら貴女がやられちゃうわ! そんな事絶対にさせない!」

『馬鹿な地球人だ……』

「ッ! くっ、……………」

Bが倒れているハープ・ノートの首を掴み持ち上げる。

『ミソラァー!』

『お前が死ねばアンドロメダが起動する』

そして、Wがゆっくりと近づきながら呟く。

「どつちにしる皆死ぬのさ」

「タイボクザン！」

「ッ！」

刹那、上空から誰かが攻撃してくる。地面に当たる瞬間にジエミニ・スパーク達は後ろにジャンプし避ける。勿論その時ハーブ・ノートから手を離れた。

ドォーンッ！

地面にぶつかった瞬間、砂埃が舞い上がる。

「止める、ジエミニ・スパーク！」

中からはロックマンの声が聞こえた。砂埃が晴れると、左腕をタイボクザンに変え、ハーブ・ノートを右手で胸に抱きしめるように抱えている。

『ロックマン！』

「風の舞 突風！」

『「ッ！」くッ』

瞬間、何処からともなく強風が吹きジェミニ・スパーク達の動きを止めた。よく見ると、ロックマンの隣に扇子を構えているジャスミン・ハートの姿がある。

「亜夢ちゃん、ミソラちゃんをお願い」

「わかった」

ロックマンはジャスミン・ハートにハーブ・ノートを任せると、タイボクザンを構えたままジェミニ・スパークへ向かって駆けて行く。ガキインツ！

振り下ろしたタイボクザンを直ぐにBがエレキソードで受け止める。受け止めたBが振り払おうと力を加え、ロックマンも押し負けないように力を入れる。刹那、がら空きとなった右横からWがエレキソードって切り掛かる。

しかし、ロックマンはそれを読んでいたかのように、冷静に後ろに避けてエレキソードを空振りさせる。

「バトルカード！ プレデーション！ ロングソード、ガトリング！」

瞬間、右手をロングソード、左手をガトリングに変えると空中もジャンプし、ガトリングをWに放つ。

ダダダダダダダダダッ！

「くっ！」

空振りしたWには隙が出来ていたため、避ける事が出来なかった。続けてロックマンはBにロングソードで切り掛かる。

受け止めると思っていたBは、ギリギリで空中へと避ける。ロックマンは虚空を切った刹那、Bがジャンプした勢いを利用して反転し、ロックマンの背中に右腕を向ける。

『ロケットナックルッ！』

放たれたロケットナックルは、ロックマンが背後を振り向いた瞬間に腹部に直撃。骨がきしむような音共にロックマンを数メートル程吹き飛ばす。

ズザァー………！

体は屋上を滑り、屋上の淵の辺りで停止する。

高さ数メートルある屋上。ここから落ちれば、電波人間でもダメージを負う。それを踏まえると危機一髪だったロックマンが、体を起こそうとする

『ッ、スバル！ 上だ！』

刹那、ウォーロックの声が響いた。上を見ると、ジェミニ・スパークの2体が右手と左手を重ね合せている。

『「ジェミニイ、サンダァー！！」』

瞬間、極太の電撃が放たれる。悲鳴と共にスバルは屋上から体を空中へ投げ出される。

『スバル、スターブレイクだ!』

「う…ん！」

体制を立て直し、アイスペガサスのカードを取り出す。

「変身なんて」

『させるかア!!』

瞬間、屋上からジェミニ・スパークの2体が向かってくる。そして、同時にロケットナツクルを繰り出した。

「ッ！　うわああッ!!」

勿論空中で姿勢を変えることができず、2つのナツクルを喰らってしまう。そのときの衝撃で右手に持っていたカードが手を離れ、宙を舞う。

瞬間、体にあたったナツクルは、ロッキマンの元から軌道が外れたと思っただけで直ぐに軌道を変えてロッキマンの背中に直撃した。その衝撃のせい、ロッキマンは軽く気を失った。

だが、これによりロッキマンは宙を舞っていたカードの元に近づいた。それに気づいたウォーロッキは手をカードの元まで伸ばし



『届けエ!!』

一気に口を閉じて飲み込み、スターブレイクを行なった。刹那、青い光に包まれた。

「スターブレイク! ロックマン! アイスpegasus!」

地面へ激突する寸前に翼のあるアイスpegasusに変身する事によって、激突を回避した。ロックマンも気を取り戻したようだ。

『「ロケットナックルツ!」』

先手必勝と言わんばかりに不意討ちを繰り出すジェミニ・スパーク。

「アイススラッシュ!」

だが、2つのナックルは氷の塊に軽く打ち落とされてしまう。

『次だッ』

「スターブレイク! ロックマン! グリンドラゴン!」

新たなカードをスターブレイクさせ、緑の光に包まれる。刹那、グリンドラゴンのへと姿を変える。

『「ジェミニイ、サンダー!」』

極太の電撃を放つジェミニ・スパーク。しかし、ロックマンはそれに怯むことなく体を回転させる。

「SFB！ エレメンタルサイクロン！！」

瞬間、木の葉交じりの竜巻が発生。電撃と竜巻はそのまま正面から激突しあう。

『「く…う…！！」』

徐々にロックマンの竜巻の方が押ししていく。いくらあちらが強力だといえども、属性の関係上、木属性は電気属性に強いのだ。

『行けるぞ、スバル。踏ん張れ！』

「うん！」

ロックマンはラストスパークをかける。

『「う…うわあああああああ！！」』

竜巻とジェミニ・スパークとがゼロ距離になった瞬間、竜巻はジェミニ・スパークにダメージを与え、その衝撃でジェミニ・スパークの電波変換が解けてしまう。

「ッー！！」

ロックマンは啞然とした。ジェミニ・スパークの正体を見て。

変身していた人間は衝撃で地面に倒れたが、数秒後にゆっくりと体を起こしていく。そこにいたのは……

「ツカサ君……？」

笑っている双葉ツカサ。ロツクマンが友達だと思っていた人物は笑っている。

「強くなったね、スバル君」

「え……………」

「でもそんな事はどうでもいいんだ。アンドロメダの鍵は僕等の手の中にある。地球は終わりだよ……………」

ツカサの背後にいたジェミニが黒い空間、電波空間を移動するとき使う空間を開き、ツカサごとこの場から消え去った。

「…………ツカサ君が…ジェミニ・スパーク……………」

啞然と立ちすくむロツクマンの背後、20メートル程離れた場所に委員長達の姿があった。

「あいつ、…ツカサ…だよ…?」

「今、ロツクマンの事を“スバル君”って……………」

会話からするに、今の一部始終を見ていたようだ。委員長達も半場啞然としているように見える。

『ハープ達が心配だ。屋上に戻るぞ』

「うん……………」

ウォーロックの冷静な言葉にロックマンは頷くと、屋上に向けて周波数を変えた。

スバル宅 玄関前

スバルは直ぐにミソラの右腕を自分の左肩に掛けて、スバルの家の玄関前へといきなり現れた。たぶん、電波変換したまま移動し、ここに着いて電波変換を解いたのだろう。勿論、亜夢はミソラの左腕を右肩に掛けている。

「ミソラは？」

急に連れて来られた為に場所を知らなかったミソラはスバルに訊いた。

「僕の家だよ。足、ちゃんと手当てした方が良いと思って」

「そついえばスバル君の家来るの初めて……」

今まで忘れていたといわんばかりの口調の亜夢。亜夢はいつか行くと思っていたらしいが、今の今まで忘れていたらしい。

「ありがとう」

ミソラが御礼言つと、ガチャツ、と扉が開いた。

「玄関先で何やってるの？ ……あら」

母、あかねが扉を開いたのだった。扉の向こうから声が聞こえたから気になったのだろう。

### 数分後

あかねがリビングで、救急に包帯を直している。ミソラの怪我の手当てに使ったのだろう。

「スバルったら。アイドルの亜夢ちゃんが友達になったと思ったら、ミソラちゃんとも友達になってただなんて。ビックリしちゃったじゃない」

何処か嬉しそうな表情で呟くあかね。救急箱に包帯を直してしまっ  
たあと、あかねは2階を笑顔で見つめていた。

「足、大丈夫？」

「うん、もう平気」

「それにしてもスバル君のお母さん、手当て上手だったよね」

スバルは自分の部屋のベッドへ向かう階段、亜夢はベッド、ミソラ  
は安静のために机の前の椅子に腰掛けている。

「2人とも、助けてくれてありがとう！」

「いって、いつもの事だし！」

「うん……」

ミソラが御礼を言うと、亜夢は元気に答え、逆にスバルは少しうな  
垂れながら答える。

「元気ないねえ、どうしたの……？」

『ジエミニ・スパークの事か？』

「うん…ツカサ君、友達だと思っていたのに……」

スバルの一言にその場の空気が重くなる。友達に裏切られる……これは彼にとつてももの凄く辛い事だ。勿論、ミソラも亜夢にとつても。

「スバル君……」

『ジエミニはツカサ君のと完全に同化してるわ』

『ジエミニ・スパークにはもう人間の意識が残っていないのよ……』

亜夢のトランサーの中に居るジャスミン、スバルのウェーブスキヤナーの中に臨時で入っているハーブがスバルに言う。

『ジエミニを倒してもツカサが元に戻る可能性はゼロに等しい……』

付け加えてウォーロックが言う。

「そんな……」

「そんなのやってみなくちゃ分かんないわよ！ 友達なんですよ？ 助けてあげなきゃ！」

ミソラがウォーロック、スバルに対して言い放つ。

「ゼロに等しいって言っても、ゼロじゃないんですよ？ まだ可能性が残ってるんだったら、助けてあげないとね？」

言葉の裏をかいたような台詞を言う亜夢。

「……………そうか……そうだね！」

2人の言葉にスバルは元気を取り戻す。先程までの暗い表情とが逆に、明るい表情になる。

『ジエミニはFM星を乗っ取るきよ。アンドロメダのを使って』

『このままじゃ地球が破壊されるだけだわ』

『その前にジエミニを止めるぞ、スバル！』

「そんなのやだもん！ がんばろ、スバル君、亜夢」

2人の顔に笑顔を送るミソラ。無論、スバルと亜夢は深く頷き、うん、と答える。

「えへへ、何か3人で地球を救うのって何かかっこ良くない？」

『3人？』

『3人じゃねエだろ』

『6人でしょ！』

亜夢のトランサー、スバルのウェーブスキャナーから声がした。ジヤスミン、ウォーロック、ハーブの3人だ。

それを認識したのか、3人の地球人と3体の電波体は同時に頷いた。



意思を確認するかのようには。

ピピピピッ！

すると、ウェーブスキャナーから着信が鳴る。全員がスバルのウェーブスキャナーへと視線を向ける。

「ん……天地さん」

着信の件名を見ると、ローマ字で天地と書いてある。スバルは直ぐに真ん中のボタンを押し、通話を開始する。

《スバル君！ スターキャリアーが完成したよ！ アマケンに来てくれるかな？》

「はい！」

## アマケン

場所は変わってアマケン、宇田海の研究室。電話があった後、電波変換してきたのだらう。通話を切って差ほど時間は経っていない。

「これがスターキャリアー？」

部屋中心にあるテーブルの上に置いてある4つのスターキャリアーを見て、ミソラが尋ねる。

「うん。トランサーでも、ウェーブスキャナーでもない、新世代の電波端末だよ」

そう天地が説明しながら、テーブルの上にあるウェーブスキャナーを3つ手に取り、スバル達に手渡す。スバルは側面が青、ミソラは緑、亜夢は赤色を手渡された。

瞬間、ウォーロック、ハープ、ジャスミンはスターキャリアーの中へと移る。

『中々居心地良いぜエ！』

ウォーロックはスターキャリアーの中が気に入ったようだ。

「はあ、肝心な大発明が未完成なのが心残りなんですけどね……」

「大発明って？」

「ふうん、ではちょっとだけ見せてあげましょう！」

そう言うと自慢げに宇田海はテーブルの上に置いてある残り1つを手に取り、ボタンを押して操作する。

「ハッ！」

変な掛け声と共に、スターキャリアーに電波が収束され、傘のような形に構成された。だが、それは直ぐに原型を崩し、収束された電波は直ぐに周りに拡散されていった。

「……………」

「……………今のは何？」

呆然として見ている3人。すると、スバルが宇田海に今起こった現象を尋ねる。

「電波の物質化です！ 急な雨、傘が無くて困る事ありませんか？ そんなとき！ スターキャリアーから傘が出てきたらとおーつても便利、ですよね？」

「え、ええ、まあ」

何処かの通販番組のように紹介する宇田海が、ミソラに振ったため、戸惑いながらもミソラは苦笑いを浮かべながら答えた。

「大発明って……………」

「それがよー！」

『……………全然駄目じゃない』

スバル、ウォーロック、ハーブの順で聞こえない程度に呟く。すると、亜夢一人、苦笑いも浮かべずに呆然としていた。

『……………亜夢ちゃん？』

「……………へっ？ あ、ごめん。ちょっと考え事……………あはははは……………（まさかあんなしょぼい発明だったとは……………期待したあたしがバカだった……………）」

ジャスミンが声を掛けてきたため、亜夢は我に変える。その後、心の中で溜息をついて一人落ち込んだ。

「必ず実現して、もっと便利で快適で、世のため人のためになるスターキャリアーに進化させてみせます！！」

宇田海はそう言っているが、後に完成させたのは彼ではない事はまた別の話し。

その宇田海の声がコダマタウン中に飴した事は言うまでも無い……………。

## 北極

「あと少しで一杯になるのに……」

『まあ、いい。これだけあればアンドロメダは起動する。地球を滅ぼすには十分だ』

アンドロメダが閉じ込められている氷柱の前のウェーブロードに、ジエミニ・スパークの2体がアンドロメダの鍵に溜まっているマイナスエネルギーを見ながら呟く。

アンドロメダの鍵には6分の5程のエネルギーが溜まっている。これが完全に溜まっているなら、地球を破壊するのに10分と掛からないだろう。

Bはアンドロメダの鍵を持っている右手を天高く上げた。刹那、紫色の光が放たれた。

ゴゴゴゴゴゴゴツ！

瞬間、アンドロメダの目が紫色に光、アンドロメダから膨大な電波エネルギーが放たれた。それは北極だけではなく、世界中の電波空間に影響を与えていく。

ドゴオオオオオンッ！！

そして更に瞬間、アンドロメダを閉じ込めていた氷柱は轟音を立てて砕け、崩れた。その重さ故に北極の海に数十メートルもの水しぶきが上がる。

そして、崩れた氷柱があつた場所に居たのは……

……鍵によって復活したアンドロメダ本体……

## 第96話 絆（後書き）

さて、ほんと長いですよ、すみませんm(´▽`)m

何だか、いらぬ描写とか減らしたつもりなんですけど逆に増えるんですよ……なんででしょうw？

ついでにこの話に少し次回作の伏線を張りました。まあアニメ&ゲームした方なら直ぐに分かりますねw

それにしても……まだ最終話まで書いてないのに、あと書きの構想はできるといふ……。普通逆ですよw まあ、あと書きは凄く最後までグダグダにしていくなので、そこところよろしく願いますw(´▽`)おい

ではでは、感想まっます

## 第97話 アンドロメダ(前書き)

今回はいつもより1、2日早いですよお。その分駄文ですけど、あえてスルーでお願いしますw



## 第97話 アンドロメダ

アマケン 司令部

スターキャリアーを渡し終えた5人と3体は、北極圏から異常な電波が発生されたため、それを調べに司令部にいた。

天地、宇田海、職員達は中央のパネルを操作していく。

「天地さん！ アンドロメダが動き出しました！」

すると、一人の職員がそう告げた。直ぐにその職員はモニターにその映像を映し出す。

モニターに映し出されたのは、北極の海を猛スピードで駆け抜けていくアンドロメダの姿。どうやらこの映像はアマケンの衛星による映像らしい。

「ッ、アンドロメダ！」

『不完全なマイナスエネルギーでも、地球を破壊するには十分ってわけか…！』

アメロツパ

アンドロメダが先ず向かったのは、科学が最も発達していると言われているアメロツパ。

数十メートル程の高さが立ち並ぶ街の中心部でアンドロメダは動きを止めた。

刹那、

ヒュイイイイン・ドカアアアアアンツ！！

アンドロメダが5本指のような口を開けた直後に衝撃波が放たれる。それは広範囲へとアンドロメダの周りへ広がっていき、一瞬にしてその場にあった建物やビルを破壊した。

ビッグバンイーター。アンドロメダ最高クラスの衝撃波の技だ。

数秒後、そこに残っていたのは建物の瓦礫だけになっていた……

スバル達は、その光景を見て戦う事を決意し、アマケンの外へと駆け抜けてきた。

「アンドロメダを倒すぞ！」

立ち止まり、スターキャリアーの中のウォーロックに言う。

『今度こそ最後の戦いだ！』

『危険な戦いになるわよ、ミソラ』

「ハープと一緒に平気よ！」

ミソラ、ハープも最後の戦いに向けて最後の言葉を交し合う。

『無理しちゃだめよ、亜夢ちゃん？』

「わかってる。“全員無事に帰る”だよな？」

「うん！」

『『『えエ／あア！』』』』

亜夢がスバル達の方に顔を向けると、頷きながら返事が帰ってくる。その時の彼らの目に迷いは無かった。

「電波変換！ 星河スバル！ オン・エア！」

「電波変換！ 響ミソラ！ オン・エア！」

「電波変換！ 水星亜夢！ オン・エア！」

瞬間、3つの光が彼らを包み、電波変換した姿でウェーブロードの上へと現れる。そして、アンドロメダの元へと駆けていく。“全員無事に帰る”の言葉を胸に秘めて…。

《スバル君！》

「ッ！ ……天地さんの声だ」

暫く駆けていくと、耳元から天地の声が聞こえてきた。彼女たちが驚いているところを見る他の2人も聞こえたいらしい。あちら側から通信状況良好ですう、と宇田海の声が聞こえるところからして、天地の近くに居るらしい事が分かる。

《新開発のスターキャリアーで、君達との通信が可能になった！

また、戦闘モニターしてここから君達をサポートする事もできる！》

戦うロックマン達への、少しでも負担を軽くしようという配慮からの開発だろう。

そんな時間もつかの間、前方から何かに向かって来ている姿が見える。

「ッ、ロックマン！」

ハープ・ノートが叫ぶ。どうやら向かって来ているのはウイルスのようだ。

電波ウイルスはFM王の命令で帰還して地球にいないはずなのだが、目の前にウイルスが居る。理由はアンドロメダによる能力らしい。アンドロメダがジャミング電波でウイルスを生み出しているようだ。

「丁度いい、スターキャリアーの性能テストだ！」

「強行突破ね！」

「OK！」

ロックマンのあとに、ハープ・ノートが確認を取り、ジャスミン・ハートが肯定する。

瞬間、ロックマンはカードを取り出さず、こっぴど叫ぶ。

「バトルカード！ リユウエンザン！」

カードもないのにプレデーションし、ウォーロックがリユウエンザンへと変わる。

これはスターキャリアーに新しく取り付けられた機能。カードを転プレデーション

送しなくても、自分が思ったカードを瞬時に出すことができるのだ。これにより、プレデーション時よりコンマ5秒ほど縮まったらしい。これも宇田海が開発した機能ということと言うまでも無い。

「バトルカード！ スイゲツザン！」

続けてハーブ・ノートがギターハーブが消え、右手をスイゲツザンに変える。

「風の舞 フウゲツザン！」

ジャスミン・ハートはいつものように扇子を風月漸へと変えた。だが、少し見た目が変わっている。いつもは風を纏った剣なのだ。だが、今回は日本刀のように長く峰の方がそり返っている刀に変わっていた。

ジャスミン・ハートは一瞬驚いたが、今は驚いている場合じゃない。と思い、そのままロックマン達とウイルスに切りかかっていく。

「えい、ハッ！」

ザンツ！ ザザンツ！

ロックマン、ハーブ・ノート、ジャスミン・ハートは次々とウイルスを切ってデリートし、徐々に数を減らしていく。

「バトルカード！ テイルバーナー！」

リュウエンザンからテイルバーナーの火炎放射器へと変える。刹那、轟音と共にウイルス達を炎が包みデリートしていく。

「バトルカード！ プラズマガン！」

ハーブ・ノートはスイゲツザンからプラズマガンへと武器を変え、ピンク色の光の電撃を数発放っていく。

「バトルカード！ エアスプレッド！」

そしてジャスミン・ハートは風月漸からエアスプレッドに変え、一発だけ大量のウィルスの中心部に放つ。刹那、中心のメットリオに当たると同時に周りにいたウィルスに弾が広がり誘爆した。瞬間、エアスプレッドが当たったウィルスはデリートされていき、先程までいたウィルスは激減した。

ロックマン達は残りのウィルス達をデリートしていきながら、足を止めずに駆けていく。

「アンドロメダはアメロッパを破壊して、尚も移動中です！」

「何!？」

職員が言い、天地が反応する。

アンドロメダがアメロッパを殆ど壊滅状態にしても、その破壊活動が止む事はなく、今は他の国を目指して海の上を太平洋を移動している。

「ロックマンがアンドロメダに接近！」

その頃ロックマン達もニホンを飛び出し、ウェーブロードで太平洋を横断していた。

「くっくっ!」「くっく」

3人の目の前、数キロメートル程先からアンドロメダが向かってきている事に気づく。アンドロメダ自体が大きく目立っていたのだ。離れていても姿が見えて当然だろう。

『アンドロメダよ!』

『これ以上破壊を許すなア!』

ハーブ、ウォーロックの言葉に3人は頷く。

「行くよ、2人とも！」

「くっく!」「くっく」



言葉、返事を交わした瞬間にロックマンはファイアバズーカ。ハイプ・ノートはガトリング。ジャスミン・ハートはヘビーキャノン、とそれぞれ武器を装備し攻撃を開始する。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

しかし、真正面から何度攻撃を繰り返しても傷は全く付いていない。更に動きもとめることは無く、そのままロックマン達のほうに向かってくる。

ぶつかる前にロックマン達はジャンプしアンドロメダの上へと乗り移る。上から攻撃をするつもりのようなのだ。

「バトルカード！ ブレイクサーベル！」

「バトルカード！ ライメイザン！」

「バトルカード！ ブレイブソード！」

3人はソード系へと武器を変え、上からアンドロメダに振り下ろし、何度も攻撃する。

ガキンツ、ガキンツ！ ガキーンツ！

だが、ダメージどころか傷すら付かない。瞬間、アンドロメダは移動するスピードを上げた。ロックマン達はその上から振り落とされ、ウェーブロードへと着地した。地球の重力にしたがっている以上、慣性には逆らえないのだ。

「何て頑丈なの……」

「傷一つ付かないなんて……」

ハープ・ノート、ジャスミン・ハートは、アンドロメダの後姿を見ながらそう呟く。刹那

『無駄だよ』

「……っ！」「」

背後から声が聞こえた。振り返るとジェミニ・スパークが立っていた。

「ツカサ君！」

『地球はもうお終いなんだよ』

「無駄な抵抗は止めにして……どう？ 僕と手を組まない？」

「っ、何だって!?!」

W、否、ツカサから思わぬ提案が発せられた。

『一緒にFM王を倒して、この宇宙に君臨するんだ』

「どうぞだい、ロックマン。いや、スバル君？」

更にBから言葉が付け足され、Wが確認を取るように訊く。だが、スバルの答えは決まっていた。

「嫌だ！ 友達を倒して宇宙に君臨だなんて御免だ！ 目を覚ませ  
ツカサ君。アンドロメダを止めるんだ！」

『交渉決裂か……』

暗い顔では呟き、刹那

『「ジエミニサンダー！！」』

「くっ！！」

「くっ！」

電撃が放たれて、一瞬ハーブ・ノートとジャスミン・ハートは体が動かなくなった。だが、ロックマンが攻撃するかを予想していたかのような動きで、直ぐに2人の手を握って海の中へと飛び込んで電撃を避けた。

ジャボオーンッ！

数メートル程高い水しぶきが上がる。ジエミニ・スパークの2人はアンドロメダの上へと周波数を変えて移動し、そこに目掛けて

『ギガミサイル発射ア！！』

アンドロメダの技を放った。直径20メートルはある巨大ミサイルはロックマン達が飛び込んだ場所目掛けて進んでいく。まるでロックオンしているかのように標準が定まっていた。

「「「ぷはあー！」「」」

酸素を補給するために3人は同時に海面へと顔を出す。瞬間、気づいたときには既にミサイルは眼前へとやってきていた。

「あ  
」

ドカアアアアンツ！！！！

気づいた刹那、ロックマン達が居た場所から爆音と共に数百メートル程高き水しぶきが上がった。

「はい！」

天地が隣にいる宇田海にそう告げる。天地には嫌な予感がしていた。すると、近くでパネルを操作していた職員が天地の名を呼んだ。

「どうした？」

「アンドロメダは…進路をニホンへ向けました！」

「何っ!？」

天地から嫌な汗が噴き出した。ニホン…つまり、今天地たちが居るここだ……。

アンドロメダが進路をニホンに変え、ニホンに向けて海の海水を駆け分ける程のスピードで向かっていた。その頃、一閃の光がウエー

ブロードを駆け、海の中へと飛び込んだ。

海中

水深十数メートル程の海底にロックマンは仰向けに倒れていた。たぶん、先程のギガミサイルによるダメージで気絶しているのだろう。

『ロックマン。ロックマン。…目を覚ますブク』

近くで声が聞こえる。キャンサー・バブルだ。先程海へ飛び込んできたのは彼らしい。

電波変換しているところからして、電波変換装置を使ってここへ来たのだろう。

「…ん……君は……」

ロックマンの目が覚める。目がぼやけているため誰だか認識は出来ていないが、体をゆっくり起こして彼を見る。瞬時にロックマンはキャンサー・バブルだと認識する。

「キャンサー…僕を助けに来てくれたの？」

『か、勘違いするなブク！ オイラ、ミソラっちを助けに来たブク。お前はついでブク』

最後を嫌そうに暗めに言う、キャンサー・バブル。

「っ、2人は!？」

『まだ気を失ってるブクウ……』

キャンサー・バブルがそう言うと、視線を自分の背後へと向ける。そこにはハーブ・ノート、ジャスミン・ハートが先程のロックマン同様、仰向けで気を失っている。

『無理もねエ。あれをまともに喰らったんだ』

「……キャンサー・バブル」

『ん、ブク？』

視線をロックマンへと向き直る。ロックマンはキャンサー・バブルに真剣の眼差しを向ける。

「2人を頼むよ。僕はアンドロメダを追う」

そう言うと、ロックマンは視線をキャンサー・バブルからアンドロメダが向かったであろう方向を見る。

ピピピピッ！

アマケン、天地たちが居る場所々に通信が入った。

「天地さん！ スバル君から通信ですう！」

宇田海がそう言うと、直ぐに通話をONにし通信を開始する。

「無事だったかスバル君！」

《天地さん！ アンドロメダは？》

「奴はニホンに向かっているぞ！」

《ニホンへ！？》

ニホン      コダマタウン市街

その頃アンドロメダは既にニホンのコダマタウン、上空に到着していた。



着いてすぐには、アンドロメダの影があっても、曇り空になったただけ、としか考えて気づいていなかった住民だが、影の大きさが異常なまでに不自然な形をしていたためようやく気づく。敵、何か怪物のようなものが現れた、と。

瞬間、住民は悲鳴を上げてその場から立ち去っていく。

刹那

ドドドドドドドツ、ドカアアンツ！！

隕石のようなものが無数に現れビルなどの建物を破壊していく。隕石は重力による空気抵抗、摩擦により炎に包まれている。

それにより落下した隕石は建物を破壊すると同時に爆発し、黒い煙を上げる。アスファルトなどの道路は大きなクレーターが行くとも出来ている。隕石は次から次へと雨のように降り注ぎ、止む気配は全くない。

これがアンドロメダの技、リュウセイグン。何処からとも無く現れる隕石で何もかも破壊していく危険な技だ。

ウーーーーー！ ウーーーーー！ ウーーーーー！

すると、サテラポリスのパトカーが数台アンドロメダの手前で停止した。住民はそれに気づく様子もなく悲鳴を上げながら逃げていく。

「住民を安全な場所に移動しろ！ どわあっ！？」

五陽田警部がパトカーから出てきて指示を出した瞬間に地面が大きく揺れた。また隕石が近くに落ちたのだろう。

周りを見ると、殆ど建物が瓦礫以外に残っていない状態になっている。

そして次にアンドロメダを見た。途轍もなく大きく迫力がある。

「お、おい五陽田！ 相手がロボットだなんて聞いてねえぞ！ てか、管轄が違っただろ！」

「バカモォーン！ 頭のパトライトが悪を倒せと俺を呼ぶんだあ！」

「……………」

そんなライセンスと五陽田警部の言い争いのようなものが続いた後、アンドロメダは口を開けた。すると、電波エネルギーがそこに収束し、

ドカーンッ！

一気に衝撃波が放たれた。ビッグバンイーターだ。

「っつー！！ どわあああああー！！」

それに気づいた五陽田警部達はその場を全速力で退避し、ギリギリ避ける事が出来た。

『地球を一気に消滅させるより見ごたえがあるな』

アンドロメダの背後のウェーブロードでは、ジェミニ・スパークB笑っていた。Wはアンドロメダの鍵に溜まっているマイナスエネルギーを見る。

「アンドロメダの鍵がマイナスエネルギーで満たされるのも時間の問題……フフ」

そう言って、腰にアンドロメダの鍵をしまつ。

ヒュンッ！

刹那、ジェミニ・スパークの真横を青色の一閃が通り過ぎた。その光はアンドロメダの背に当たる瞬間に方向を転換させ、アンドロメダの目の前へと移動して止まった。

そこにいたのは翼が付いているロックマン、アイスペガサス。

「スタキオスセパン S F B！ マジシャンズフリーズ！！」

刹那、アンドロメダの足元に巨大な魔方陣を出現させ、アンドロメダ自体を氷の氷柱に閉じ込める。

だがそれは、瞬時に壊された。瞬間、アンドロメダは人型の姿に変形した。口が手となり、中から本体が現れ、腹部に黄緑色の核コアが出現する。

「スターブレイク！ ロックマン！ グリーンドラゴン！」

アイスペガサスのS F Bでは敵わないと思い、今度はグリーンドラゴンの姿に変わりウェーブロードから地面に移動する。

「SFB！ エレメンタルサイクロン！！」

体を回転させ、木の葉交じりの大きな竜巻を発生させる。その竜巻ごとロックマンはアンドロメダに攻撃に向かう。

ガシィッ！

「うわあああああ！！」

だが、なんとアンドロメダは巨大な手を竜巻の中へと突っ込んできた。瞬間、ロックマンはその巨大な手に掴まれ、押し潰されそうになる。見た目が巨大なだけあって力も強大だ。

刹那、回転が止まったため竜巻も完全に消滅する。

「ああ、ロックマン様のピンチ！ ロックマン様あ！！」

「危ないよ、委員長！」

「これ以上近づくのは危険です！」

すると、数十メートル程離れた瓦礫の物陰に委員長達が居た。どうやら逃げ遅れたようだ。すると、身を乗り出してでもロックマンの元へ向かおうとする委員長を2人掛りで止めに入る。

「く……う……スター……ブレイク……！」

ロックマンは苦し紛れながらも最後のスターフォースのカードをスターブレイクさせた。刹那、眩い光と共にアンドロメダの手から逃

れ、オレンジ色の姿へと変わった。

「ロックマン！ ファイアレオ！」

瞬間、ロックマンは左手のウォーロックにエネルギーを収束させる。

「SFB！ アトミックブレイザー！！！」

そしてそのエネルギー砲をアンドロメダに放つ。

ドゴーンッ！

だが、アンドロメダは両手を横に合わせてそれを防ぎ、エネルギーを周りに拡散させる。

『目障りだ……』

「ネビュラブレイカー……！」

そうWが言った瞬間、アンドロメダの核が光だし、そこから極太い黄緑色のエネルギー砲が放たれた。

「バトルカード！ バリア！」

ロックマンはバリアで防ごうとする。だが、そんな薄い壁で防げる訳も無く、バリアを貫通してロックマンに直撃する。

「うわああああああああああっ……！！！」

ドオンッ！

悲鳴と共にロックマンは瓦礫の山の地面へと落下した。落ちた音と共にそこには大きなクレーターが出来る。

「ロックマン様あー!!」

委員長の声と同時に委員長達がロックマンの元へ駆けて来る。

「ッ!」

見てみればロックマンは仰向けに大の字になって気絶していた。それを見て委員長は絶句する。

「ロック…ク…マン様…。ッ!？」

委員長が駆け寄ろうとした瞬間、ロックマンが黄緑色の光に包まれる。刹那、晴れると同時にそこいたのはスバルだった。

「……ッ……ッ……」

一瞬、3人に沈黙が流れた。

「ロックマンの正体は」

「ほ、星河スバル君……」

ゴンタの言葉を繋げるようにキザマロが続ける。

「ロックマン……様……ううん」

「委員長!」

委員長は何が何だか分からなくなり、気が動転して笑みを浮かべて気絶した。それをゴンタとキザマロが両手で体を支える。

ギユイイイイイインツ

「ッ!?」

キザマロ、ゴンタが音に気づきスバルの方を見ると、3枚の散らばっていたスターフォースのカードが浮かんでいる。そのカードはスバル上を何度も輪を描くように巡回する。

《ウォーロック》

《ウォーロック》

《ウォーロック》

その声はまるでカードから何者かの声が発せられているようだった。

ウォーロックはスバルの右手にあるスターキャリアーからその様子を見ている。

『その声は……』

『AM星人!』

ウォーロックは気がつけば黄緑色の空間にいた。そして、目の前に居たのはAMの三賢者ペガサス、レオ、ドラゴン。

『ウォーロック』

『ッ! これは...!』

ドラゴンがウォーロックの名を呼んだ瞬間、背景が黄緑色から宇宙空間へと変わった。

ウォーロックが後を振り返ると、そこにあつたのは紫色のエネルギーが渦巻いているように見える紫色の惑星があつた。

『AM星だ』

『AM星?』

ウォーロックが訊いた途端、星から紫色のエネルギーが消え、膨大なエネルギーが膨張すると同時に爆発した。

『く、ウ……………』

眩い光が発生したため、ウォーロックは光から顔を守るために手で防ぐ。



『FM星の送り込んだアンドロメダによって、AM星はこの宇宙から消滅した』

ペガサスは話しを進め始める。

『お前はその時のAM星人の生き残りだ』

『ッ！ な、何だとッ!?!』

思いもよらぬレオの言葉にウォーロックは驚き聞き返した。

## 第97話 アンドロメダ（後書き）

ふう…長いですねえ（^ー^；）

それにしても所々の駄文が酷い……。ほんとに、もう……。ね。

さあ、残すところあと3話です。次の話は結構上げるの早いと思います。下手すれば明日。サボれば3日後ですw（おい）

次はですねえ、早い上にいつもより短い訳ですよ。その次の話に向けて少々短くしないといけないのでね……。因みに次の次からオリジナルシナリオになるはずですよ。でも、その話しが上手くいかないようならリメイクに戻して、次の次の次、つまり最終話だけオリジナルシナリオになるかも……。まあ、どちらにしてもお楽しみに

では、感想待ってまーす

第98話 AM星人(前書き)

今回は短めなんで早く上げれました

## 第98話 AM星人

『宇宙ステーションの危機に際し地球人を電波生命体に変換しただろっ』

ウォーロックが大吾を含めた乗組員達クルーに向けて使った能力にんついて、ペガサスから語り始める。

『あの能力はAM星人の特殊能力だ。FM星人には無い』

ペガサスの次にレオが断言する。

電波生命体に変換。それはゼット波によるものだ。前にも説明したがゼット波とは、一部の電波体が発生させる事が出来る特殊な電波の事だ。レオの言葉からするに、一部とはAM星人のことを指す。

『これから我々はスバルが目覚めるまで時間を稼ぐ』

『かせ……ぐ？ どういうことだ？』

『アンドロメダを止める事が出来るのはお前達だけだ。頼んだぞ』

ウォーロックの言葉を聞いていないように言うドラゴンに、疑問が解決していないウォーロックは更に言葉を発しようとする。だが瞬間、黄緑色の空間は消滅して気がつけば元の世界に戻っていた。

「「うわぁ!?!」」

キザマロとゴンタの声が聞こえる。どうしたと言わんばかりにウォ

ーロックがスターキャリアの中から、ゴンタ達の目線の先を見る。すると、スバルの体の上、30センチメートルほど浮かんだ場所で輪を描くように回っていた3枚のカードが、上空へとゆっくりと上昇していく。

ピカアーンッ！！

青、オレンジ、緑の3色の眩い光がその3枚のカードから放たれた。

『「何ッ？」』

突然の事にジェミニ・スパークの2人は目をやられそうになる。だが、ギリギリで手で光を遮断する。

瞬間、カードの中からアイスペガサス、ファイアレオ、グリーンドラゴンの姿をした光が出現する。それはカードから出現すると同時にアンドロメダに向かって飛んでいく。

「あれは……！」

Wが呟く。刹那、その3体はアンドロメダの真正面に突撃しようとし、アンドロメダはそれを両手で潰そうとする。

だが、刹那。その3体は潰される前に上、右、下へ別々に方向転換させ避ける。するとアンドロメダの両手は空振りして、ただパン、と手を叩いた状態になる。だが、その分アンドロメダの体重は前へと掛かり、傾く。

3体は、それを利用してか、前へ傾いた頭を重点的に何度か攻撃する。前、後ろ、前と順番に攻撃しアンドロメダの頭はグラグラと傾

く。

……父さん……父さん……

「スバル」

父さん…行かないで。嫌だよ、僕は父さんと離れるのは嫌だ！

「スバル。父さんは必ず帰ってくる」

……そんなの、ほんとかどうか分からないよ。だって、宇宙って危険なところなんでしょ！？ 空気だって無いし！

「……ベロベロバー！」

っ？ な、何？ 急に変な顔しちゃって……？

「…こんな顔の奴が宇宙で死ぬと思うか？」

っ！

「父さんは必ず帰ってくる。だから…俺を信じろ、スバル！」

……………うん。僕、父さんを信じるよ。

「よし、偉いぞお〜」

えへへ……………

「……………それじゃあな、スバル。俺が居ない間、母……………さんと地球を守ってくれよ」

うん！ 僕が母さんと地球を守る！ だから父さんは安心して！

「ああ、“約束”だぞ？」

うん、約束！

「それでこそ俺の息子だ！ それじゃあな、スバル！」

……………父さん……………父さああん！！

それが……父さんのと最後に交わした約束いそはだった……

「スバル！ 目を覚ませよ、スバル！」

「起きてください、スバル君！」

ゴンタ、キザマロはスバルの傍までいつの間にか近づいていた。

「……ん……ッ！」

彼らが数回呼んで、スバルは気がついたのか目を覚ます。瞬間、体をガバツ、と起こす。

「気がついた！」



「アンドロメダは!？」

ゴンタが言った瞬間、スバルは2人へアンドロメダが何処に居るのかを訊いた。

「あのロボットのことでですか…?」

キザマロが視線を向けた先を辿って行くと、空中にアンドロメダの姿がある。それに加えて先程の3つの光がアンドロメダに攻撃してダメージを加えていた。

「あれは!？」

『AM星人だ』

「AM星人!？」

右手に持っているスターキャリアーの中を見る。瞬間、ウォーロックが真剣な顔をして語る。

『AM星人がお前が気がつくまで時間を稼いでたんだよ』

「え」

スバルが言葉を言おうとした刹那、グリーンドラゴンの姿をした緑色の光がアンドロメダの左手に近づき爆発した。

「っ!！」

スバルはいきなりの事に絶句し、先程言おうとしていた言葉を失う。

見ると、アンドロメダの左手から肩に掛けての部分が殆ど無く、代わりに黒い煙を上げている。

『アンドロメダがッ………!!』

「くっ!!」

瞬間、アンドロメダは爆発の反動で後ろにゆっくりと傾いていく。

すると、刹那。それを狙ったかのようにファイアレオの姿をしたオレンジ色の光がアンドロメダの背後から近づき、右手の手の甲にぶつかる瞬間に爆発する。

更に、今度はペガサスの姿をした青い光がアンドロメダの胸部の部分に近づく。両手を失っていたアンドロメダは何もする事ができなかった。刹那、胸部の核コアの部分で爆発した。

今のがとどめとなったのか、アンドロメダは徐々に崩れていきながら地上へ落下していく。

「バカなっ!!」

『アンドロメダがッ………!!』

ドォーン………!!

静かに仰向けに倒れるアンドロメダ。それは、目の光を失い、完全に停止する。

『見て、ミソラっち!』

キャンサー・バブル、ハーブ・ノート、ジャスミン・ハートは遠くのビル付近のウェーブロードからその光景を見ていた。啞然として、けれども笑顔に勝利を確信しながらそれを見ていた。

別の場所、アマケンでは天地、宇田海、職員達がモニターを見ている。

「やったあ、やりましたよ天地さん!」

その宇他海言葉に天地が頷き、その場に歓喜の声が沸きあがる。

『く、そッ! AM星人目……アンドロメダの鍵が完全に復活すれば、おいまだ』

グサッ!

『ガ、…ハッ！』

Bが後ろにいるWの方に振り向こうとした刹那、背後からエレキソードが貫かれた。

「もっと早くこうすれば良かった……」

笑っている。Wは相棒であるはずのジェミニ、Bをエレキソードで貫いて尚且つ笑っていた。

『ツカ、グワアアアアアアアアア！！！』

刹那、Bは電波となり消滅。電波と化したなつたBはアンドロメダの鍵へと吸収され、マイナスエネルギーで満たされた。

「ふふふ、勝負は僕の勝ちだ……アンドロメダ！」

右手に持っていたアンドロメダの鍵をアンドロメダに向けると同時に、鍵から紫色の光が放たれ、アンドロメダの核へと入っていく。

刹那、木っ端微塵と砕かれたはずの体の一部は見る見るうちに、アンドロメダの体を修復する。すると、破壊された筈の両腕、核が完全に無傷の状態へと戻っていく。

「ふっふっふっふ…ハッ、ハッハ！」

体が完全に修復されたアンドロメダを見て、ジェミニ・スパークは勝利を確信したかのように笑った。

瞬間、アンドロメダはむくりと体を起こし、宙に浮いている。

「そ、そんな…！」

『チツ、鍵にマイナスエネルギーが完全に溜まっちゃまったようだな。こうなると、アンドロメダは壊れても壊れても瞬時に修復しちゃうぞ！』

「……やるしかない…行くよ、ウォーロック！」

『スバル……おう！』

「2人は早くここから逃げて！」

スバルの傍に居たゴンタ、キザマロに逃げるように指示する。

「は、はい／＼お、おう！」

2人は返事を返すと委員長を抱え、この場から走ってこの場を立ち去っていく。

『スバル、勝てねエかもしれねエぜ？』

「それでも、やるしかないよ。父さんと約束したんだから」

『そうか……なら、思いっきり行けエ！』

「うん！ 電波変換！ 星河スバル！ オン・エア！」

スバルはスターキャリアーを天へとかざし、ロックマンの姿へと変

わる。

ロックマンとアンドロメダとの最終決戦が今始まる。

第98話 AM星人（後書き）

何だかんだで約束公開ですね……何処かで聞いたこと、見たことあるような内容、と思う方は突っ込まないで上げてくださいw 私も何かで見たような覚えはあるんですけど、思い出せないんですw

さて、次回はアンドロメダを呆気なく負かしますよお（ネタバレ）  
いやあ、呆気なく負けてもらわなうと話しが進まないの……。

第99話 三枚転送(トリプルブレイク)！(前書き)

ようやく出来ましたよお！(\*; ;\*)

若干、サブタイがネタバレですが、悪しからず。



## 第99話 三枚転送（トリプルブレイク）！

ゴゴゴゴゴゴゴッ！

アンドロメダ前方のウェーブロードにロックマンが立っている。一瞬睨み合う両者。

すると、ロックマンは左手をブレイクサーベルに変える。そして横に振ると同時に。

「でやあああああ！！！」

ロックマンは一気に間合いを詰め、巨大なアンドロメダに真正面から戦いを挑む。

だが、そんな真正面から突っ込んでアンドロメダが何もしないわけが無い。刹那、アンドロメダは右手を前方に向けた。

「ネビュラブレイカー！！」

ジエミニ・スパークが言い放った刹那、掌から黄緑色の極太のレーザーが放たれる。

「……………くっ！！」

ロックマンはそれを読んでいたかのような動きで体をくねらせ避けるが、流石に太きまでは想定していなかったのか少し背中をかすめてしまう。

だが、避けると同時にロックマンは直ぐに体制を立て直し、ウエー  
ブロードに着地すると同時に更にアンドロメダの目の前まで駆け出  
す。

「はあああああ！！」

ブレイクサーベルを振るう。これはあらゆる物を破壊するサーベル  
のだ。だが、アンドロメダの変身前の上の部分、つまり今の姿の手  
の甲の部分には通じなかった。

理由は核を守っていたから、とロックマンは予測する。そのためア  
ンドロメダの顔に振るったのだ。

ガキインッ！

金属がぶつかる音が響く。一瞬火花が散ったようにも見える。

これで少しはダメージを負ったとロックマンは思ったが、現実はその  
う甘くない。アンドロメダはダメージどころか傷すら負っていない。  
そう、先程と同じように。

「っー」

直ぐに後ろに退避しようとしたが、そうさせてくれる程アンドロメ  
ダは優しくない。ロックマンが気づいたときには頭上に赤く燃え上  
がる岩のような物が迫ってきていた。

ドッー

「っ、わあああああ！！」

瞬間、リュウセイゲンに直撃したロックマンはそのまま落下していく。

ドカアアアッ！

落下した場所にはロックマンより二周りほど大きいクレーターが出来ている。アンドロメダが発生させたリュウセイゲンは一応電波で出来ている物質のため、“相手に攻撃する”という役目終えて既に消滅している。

『大丈夫か、スバル！？』

「うっ……なんとか」

ゆっくりと先程の攻撃でボロボロになった体を起こしていく。

『どうする？ あのデカブツ攻撃を当てた所でダメージは負わねえぜ……？』

「……うん。だけど、あの部分なら……」

そう言うと、ロックマンはその部分に視線を向ける。そこにはアンドロメダの腹部の黄緑色の核がある。ロックマンはあの部分を弱点だと踏んでいるようだ。

『……なるほど。だが、どうする？』

「……僕に考えがある……」

ウォーロックを自分の口元に近づけ、ジェミニ・スパークに聞こえないように小声でボソボソと呟き、説明する。

『……ほう。お前にしては上出来かもな。それで行け!』

「うん」

「話し合いは終わったかい? もっとも、このアンドロメダに勝つなんて到底不可能だと思うけどね」

余裕を見せるジェミニ・スパーク。瞬間、ロックマンはまた左手のウォーロックをブレイクサーベルへと変えた。

「ふ、またそれかい? 何度やっても無駄だよ。アンドロメダには傷一つつかない」

「装甲には……. . . . . でしょ?」

「何?」

ロックマンは笑みを見せた。次の瞬間、ロックマンは飛び上がりアンドロメダの核と同じ高さまでになる。瞬間、バトルカードを追加する。

「バトルカード! ジェットアタック!」

刹那、左手のブレイクサーベルを前に構え、核に向かって猛スピードで突っ込んでいく。

「っ!?!? まさか……. . . . . させるか! ネビュラブレイカー!」

ロックマンは思いのほか距離を詰めていた為、流石に掌からのネビュラブレイカーは使えない。そのためジェミニ・スパークは核からのネビュラブレイカーを放つように指示を出す。

『今だスバル!』

「ヘンゲノジュツ!!」

ボンッ!

「なっ!」

ロックマンの姿はレーザーが直撃する瞬間にヌッキーの置物へと変わり、代わりにロックマンの姿は消えた。ネビュラブレイカーが直撃するとヌッキーは消滅する。だが、やはりロックマンの姿は無い。

「何処に行ったあ?」

ジェミニ・スパークから焦りが見える。アンドロメダの唯一の弱点を破壊されるのではないか、という嫌な考えが浮かんで余裕がなくなっただ。

アンドロメダの上下左右、前後を見回す。しかしアンドロメダの近く、周りには姿は見えない。とすると、残りはジェミニ・スパークの後ろという事も考えられるが……

「……………いない」

姿は見られない。だが、その瞬間、ジェミニ・スパークはある事に

気づいた。

「……………バトルカードか……………」

瞬間、目を細めて右手を前に向ける。すると、ジェミニ・スパークはアンドロメダの核前方の何も無い場所に電撃を放つ。

「っ!?!? ぐはっ!」

何もない場所に放った筈の電撃は手ごたえがあった。瞬間、電撃で放たれた場所からロックマンが現れ、右後ろのウエーブロードへ飛ばされる。ズザザ、とウエーブロードを滑ると数メートル後ろで停止する。

「やはりか。インビジブルとは考えたね……………でも、僕の電撃の前には無意味だけどね」

また余裕を取り戻したのか、ジェミニ・スパークは口元に笑みを浮かべる。

インビジブル。一定時間姿を消し、殆どの攻撃を受け付けない。だが、例外もある。ボルティックアイなどのインビジブル対策の電気攻撃。ジェミニ・スパークの電撃もその一つだ。

「く……………でも、これも想定の内!」

「何?」

ロックマンはニヤリと笑う。すると、ジェミニ・スパークは自分の横を何かがヒュン、と猛スピードで通りすぎていく物を肌で感じた。

一瞬唖然としたが直ぐになんだ、とジェミニ・スパークは振り返る。すると、ロケットのような形をした小さなミサイルがアンドロメダの核に向かって突き抜けていつている。これは特定の条件で相手を狙うバトルカード、レーダーミサイルだ。

「しまった！」

ジェミニ・スパークが声を発したときには既にあたる直前だった。これで終わりだとロックマンが確信した。

「とでも言うつと思ったかい？」

「え」

ジェミニ・スパークがニヤつく。刹那、ミサイルは核へと直撃して爆発が起きた。轟音と共に黒い煙が発生し、黒い煙で爆発した所が完全に隠れて見えなくなる。

「……………っ！！」

『なッ……………！』

煙が晴れていく。すると、ロックマンとウォーロックは爆発した所を確認すると絶句した。その部分には全く傷がついていなかったのだ。

「バカな！ 直撃したはずだぞ！？」

「ふふ、アンドロメダには半径1メートル以内に物体を感知したら防御されるようにプログラミングされているんだよ。ほら」

そう言うと、ジェミニ・スパークは電撃を核に向けて放った。瞬間、黄緑色の核は灰色の装甲に瞬時に包まれた。電撃はそれにあたるとバキンという音と共に周りの何も無いところへ拡散されていった。

「こんな風に。硬さは装甲と同じぐらいだから、何をしても傷をつける事は出来ないよ。もつとも、マイナスエネルギーが完全に溜まっていなかったときは発動しなかったみたいだけどね」

先程のペガサスの爆発時には発生していなかったのは、マイナスエネルギーの量が不十分だったかららしい。

「そんな……！」

万策尽き、度肝を抜かれたショックで俯いた。

瞬間、アンドロメダの掌が上から振り下ろされようとしていた。そのため、俯いていたため気づくの遅れた。ウォーロックの声で気づき、避けようとした時には既に遅かった。

「うわあああああああああああ……！！！」

ロックマンの体はウェーブロードをつき抜け、瓦礫の山となっている地面へと叩き潰された。



アンドロメダが手を地面から離すと、ボロボロになったロックマンの体が仰向けの状態で転がっていた。

「……………これで君ともお別れだよ……………スバル君」

不気味に笑い、声のトーンを下げて呟くジェミニ・スパーク。

『スバル……………大丈夫か…？』

「う……………ん……………」

朦朧とした意識で今にも気絶してしまいそうなロックマン。それでも何とか首を横に振って意識を保つ。

力がない返事からして、相当な程のダメージを負っているだろう。しかも、元々一度ダメージに耐えきれなくなり、電波変換が解けているのだ。それを含めると相当なダメージになっている筈だ。また何時電波変換が解けてもおかしくない。

『くそッ……………何か手はねエのかよ……………！』

「……………」

ウォーロックの言葉に返答しない。

ロックマンはもう既に諦め掛けていた。もう手は使いつくした。万事休す、万策尽きたのだ。選択肢はもう……………負けるだけしか残っていないのだろうか。

すると、アンドロメダはが掌をこちらに向けてきた。ジェミニ・ス

パークの命令で止めをさす気なのだろう。

『ッ！ おい、スバル避ける！』

「くっ………！」

避けようと体を起こそうとしてはみるが、体は言う事を聞いてくれない。動かない。

姿勢を崩し、尻から地面に倒れる。

「……もう………」

駄目だ、と完全に諦めていた。もう、待つのは負け、死だけだと思っただ。

だが、

『「スバルくんノロックマン………！」』

『「ッ！？」』

そんな諦めを打ち消すように、遠くの方から声が聞こえて来た。

「諦めちゃ駄目っ！」

「必ず、“全員無事に帰る”んでしょっ！？ だったら簡単に諦めるなっ！っ！」

『お前が死ぬと、ミソラっちが悲しむブクウ！ ミソラっちを悲しませるのは許さないブクよオー！』

「<sup>ミンソ</sup>ハーブ・ノート、<sup>あむ</sup>ジャスミン・ハート、キャンサー・バブルの声だ。何処からかは分からない。でも、確かに声は聞こえた。

『。。。だからあたし達ノオイラ達は、絶対に勝つって信じてる（ブク）！』『』

「っ！」

今の言葉に目を見開いた。すると、後方からも声が聞こえてきた。

「ロックマン様！ 頑張つてえ！！」

「負けないで下さい、スバル君！！」

「俺達の地球を守ってくれよー！！」

先程居た場所より離れた所からだろう。眼が覚めたのであろう委員長、キザマロ、ゴンタの声が聞こえた。

今彼女等はロックマンが勝つと信じている。友達<sup>フレンド</sup>が皆がロックマンを信じている。

思い返せば色々な事があつた。無理やりの登校、ウォーロックとの出会い、FM星人との戦い、他にも沢山。そして何より……友達<sup>フレンド</sup>が出来た。

「（友達……僕が学校に行けたのも皆のお蔭。強敵と戦えたのも、

地球を任せてケフェウスと戦えたのも。僕は皆に助けられてばかりだった……。なら（）」

ロックマンは地面に手を着き、ゆっくりと力を入れ立ち上がっていく。フラフラに倒れそうになりながらも、どんなに体が動かなくてもゆっくりと立ち上がる。

「今度は僕が皆を助ける！」

そして白い3枚のカードを取り出す。先程3つの光が放たれたスターフォースのカードだ。

「今更何をしてもう遅い！ アンドロメダ、やってしまえ！！」

アンドロメダの掌に電波エネルギーが瞬時に集まっていく。

「行くよ、ウォーロック！ 最後の転送だ！」  
スターブレイク

『おっ！』

「トリプルブレイク  
三枚転送！」

『ガブツ！！』

ウォーロックが三枚同時に飲み込んだ刹那。アンドロメダの掌からネビュラブレイカーが放たれた。

更に刹那。白く、眩い光がその場から発生する。

「な、何だっ！？」

光の範囲はどんどん広がっていき、数十メートル程離れているジエミニ・スパークごと包み込みそうな勢いだ。

スバル

これを使えるのは一度きりだ

スターフォース  
星の力、存分に発揮するが良い

数秒後、光はピカアーン、と飛び散るように消えた。夜空に星が流れる流星のように。

光が消え、ジエミニ・スパークはアンドロメダの放った場所を静かに見る。勿論、ロックマンが倒れているのかを確認するためと先程の光の正体を確認するためだ。

「……っ!!」

だが、ジエミニ・スパークが目にしたものはそのどちらでも無かった。放たれ場所には倒れているロックマンどころか、虫一匹すら居なかった。流石に今の一撃でもロックマンを完全に消滅させる事は出来ないはずだ。ならば、何処にいる。

スタッ

すると、ジエミニ・スパークの背後から着地するような足音が聴こえた。恐る恐るジエミニ・スパークは振り返る。

「っ！ 何だ、その姿はっ……!!」

絶句するのも無理は無い。そこに居たのはロックマン。だが、体の全体が白、ウォーロックは少し大きめで、右手の腕に引っ掻くための銀のツメが二本着いており、肩にはドラゴンの時のシオルダー。そして背中に、白色の片方2メートル、直径4メートル程の大きさの翼が付いていた。

> i9839 — 1396 <

「ロックマン！ スターソルジャー！」

今までのスターフォース時の一部が合わされたような姿のロックマン。スターフォースの最後の力の名は星の力スターソルジャーを司る戦士。

『スバル、いけるな?』

「うん。……さっきAM星人の声が……」

『ああ。これが最後のチャンスだ!』

「うん!」

瞬間、一度翼を羽ばたかせ宙に浮いた途端、ジェミニ・スパークの眼前から姿をヒュン、と消した。

ジェミニ・スパークが一度、驚愕した後にアンドロメダの方へ振り返る。すると、アンドロメダの前にロックマンの姿があった。

「アンドロメダア!!」

ジェミニ・スパークが叫んだ瞬間、アンドロメダは両手を前に出した。刹那。

「ネビュラブレイカー!!」

極太いレーザーが瞬時にエネルギーが集束し始める。だが、ロックマンはそれを見ても何も動じない。それどころか、向かってくる攻撃を防ごうともせず、放たれるその瞬間までをただ見ているだけだった。

「ははっ! 防がないと死ぬぞ!」

ジェミニ・スパークはそれを見て笑って言っていたが、ロックマンはそんな事を聞いていない。代わりに、放たれる直前にゆっくりと体を回転させ始める。

「スタキカズザパン」  
「SFB！ エレメンタルハリケーン！！」

エレメンタルサイクロンのように大回転をし始めたが少し違う。いつもより回転スピードが倍以上。そして、木の葉交じりだったサイクロンは、稲妻が走るハリケーンへに。

ドゴオオオオオンッ！

「何ッ！？」

2つの技はぶつかり合う。殆ど力は互角に見える、だが、僅かにエレメンタルハリケーンがネビュラブレイカーを徐々に押している。2つのネビュラブレイカー、つまり両手から放っているのだ。普通の2倍もの威力の筈なのだが、それにエレメンタルハリケーンはそれ以上威力で押しているのだ。途轍もない威力である事は間違いない。いつものSFBとは格が違う。

その光景に信じられないように驚愕するジェミニ・スパーク。

すると、轟音と共に二つの技は消滅する。瞬間、ロックマンがアンドロメダの懐に一瞬で入り込み、核の部分がから空気になる。直後、ロックマンはウォーロックにエネルギーを集束させていく。

「SFB！ アトミックメテオバーン！！」

刹那、アトミックブレイザーより巨大な炎のレーザーが放たれる。しかし、核の1メートル範囲に入った瞬間に灰色の装甲に包まれた。轟音と共に、炎のレーザーは装甲に弾かれて周りに拡散されていく。



「……はははっ！ 流石にその威力の技でも装甲は破れないようだね！」

一瞬を間を置いてジエミニ・スパークは不気味にも笑って勝利を確信した。弱点に技が当たらなければ、どんなに威力があつたつて、倒す事は出来ないと考えたからだ。

だが、その言葉を聞いてもロックマンは技を止める事は無かつた。代わりに威力を増させて放ち続ける。

「無駄だよ！ そんな事してもただ熱くなるだけだよ！」

「……………それが狙いだよ」

「……………何？」

ロックマンの言葉でジエミニ・スパークから笑みが消えた。瞬間、更にロックマンから言葉が告げられる。

「熱を加えて温めたものを急に冷やしたらどうなると思う？」

そう言うと、ロックマンは技を放つのを止め次の技を繰り出す準備に入った。

「……………ッ！ まさか……！！！」

「SFB！ マジシャンズアブソリュートゼロ……！！！」

魔方阵が出現した途端、ガキンツと光り輝く氷に温められた灰色の装甲を瞬時に凍らせた。その名のとおり絶対零度のごとく

数秒後、バキバキツと碎ける音と共に氷は碎けて、装甲だけが残る。だが、氷だけが碎けた直後に装甲にベキンツと亀裂が入る。

「っ！」

「温められた物を急激に冷やすと、温度変化に耐えられなくなる。それが硬ければ硬いほど碎けやすい！」

バキイインツ！

装甲は真つ二つに碎け散る。瞬間、アンドロメダの核が現れ、弱点が丸裸になった。

瞬間、ロックマンはウォーロックを前方に構え、エネルギーをチャージし始める。

「これで終わりだ！ ロックバスター！！」

そして、ピンク色の一筋の弾丸は放たれた。

ドカアアアアアアアアアンツ！！

直撃すると同時に核は爆発し、轟音と共に煙を上げて地上に落下していく。

ロックマンはアンドロメダの体が碎けて行くのそつとを見送った……。

「終わった……」

『ただ、スバル。アンドロメダの鍵を壊さない限り何度でも復活するぞ!』

「っ、そうだった! ジェ ……っ!？」

ロックマンがジェミニ・スパークの名を叫ぼうとして見回したが、先程までいたジェミニ・スパークの姿がないことに気づき、言葉が出ずに絶句した。

「何処に……!？」

瞬間、アンドロメダの体から紫色の光が放たれる。徐々に砕け散った一部が集束し、先程までの原型を取り戻していく。

「まずい! 早く何とかしないと」

そんな事を言っている内にアンドロメダは完全な無傷の姿に修復された。

ゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ

戦闘体制に入り、奇怪な音と共にロックマンに襲い掛かるように両手を前に出す。刹那、勢いよくロックマンに掌で潰すように体重を前に掛ける。

「っ!! くっ!!」

ロックマンは両手で受け止める。スターソルジャーの今なら、例え

完全なアンドロメダにも力負けするような事はないだろうが、それではジェミニ・スパークを探索することが出来ない。逆に言うと、ジェミニ・スパークを探索するとアンドロメダを野放しにすることになってしまう。

「（どうすれば……！）」

受け止めたままゆっくり押し返しながらロックマンは考える。

## 宇宙空間

地球の大気圏内を抜け、ウェーブロードに沿って宇宙空間に飛び出していく黄色い光。ジェミニ・スパークは宇宙空間をウェーブロードを駆け抜けていく。

「ふふふ。あと3分で最終兵器は起動する……！」

最終兵器とは、アンドロメダが星の中心部へと潜り起爆し星を破壊する、という例のあれだ。これによりA M星が破壊された事は言うまでも無い。

「そうすれば地球は宇宙から消滅する。アンドロメダは鍵さえあればいくらでも後から回収できる……ふははは、ははははは！……！」

そうやって地球を見ながら甲高い声を上げる。すると、前方から何かが近づいてくることをジェミニ・スパークは感じ取り前方に向き直る。

「ん……なっ  
」！

目の前から猛スピードで近づいてくる黄緑色に光にジェミニ・スパークは絶句した。これは彼もロックマンも良く知っている者だった瞬間、ジェミニ・スパークは猛スピードで近づいてくる光、強大な電波をいきなりの事で避けることが出来ず、そのまま直撃してしまう。

「な、ぐ……う、わああああああああっ！！！！」

電波の格が違いすぎた。強大な電波に直撃した瞬間、ジェミニ・スパークは体が断末魔と共に電波となり飛び散っていった。

アンドロメダの鍵と共に。



「ってか、その白いの何？」

『ブク？』

ハーブ・ノート、ジャスミン・ハートの順にロックマンに尋ねる。  
キャンサー・バブルは何が言いたいのか良く分からない。

「え、あ、これはちよつとね……体は大丈夫だよ」

話をすると少し長くなりそうなので、ジャスミン・ハートの質問を軽くあしらひ、体は無事な事を笑顔で伝える。

「それより、何があったの？ アンドロメダを倒したの？」

「……それが僕にも分からないんだ」

『ふう……だあああッ！！！！？』

「……っ！？」

キャンサー・バブルが一息着いて空を見上げた瞬間、いきなり異様な声を上げた。ロックマン達は直ぐにその方向に顔を向ける。すると、そこには空を黄緑色の光で埋め尽くされていた。

『あれはッ……！！』

《アンドロメダの鍵は破壊した。もう復活の心配はない》

空から響くように幼さのある声が聞こえて来た。

『じ、この声は、FM王だアッ!』

瞬間、キャンサー・バブルは途轍もない速さで頭を両手（鉄）で抑えてしゃがみ込み、ブルブルと怯えだした。

「えっ!？」

「FM王!？」

彼女達は驚きを隠せずに声を発した。だが、ロックマンは少し驚いたが、声を発する程大げさではなかった。

《地球人よ……我等FM星は、地球人の友情を敵対行為と見なし、地球を破壊しようとした。かつてAM星を破壊したときのように、同じ過ちを繰り返す所だった。だが、我々は地球人、ロックマンのお蔭でようやく目覚める事が出来た》

ケフェウスはスバルの名を出さずにそう告げる。ロックマンの正体をバラすまいと、彼なりの思いやりだろう。

すると、スターソルジャーの変身が自然と解ける。どうやらあれは時間制限があつたようだ。

《地球人よ……申し訳ないことをした……。FM王として此処に懺悔する。ウォーロックよ。お前には謝らねばならぬ……AM星人のお前には》

「っ! AM星人だつて? ウォーロックが!？」



『FM王ケフェウス！ 星河大吾、いやスバルの父親は今何処に？』  
ロックマンの言葉を見殺し、ウォーロックはケフェウスに尋ねる。

『安心しろ。今逢わせてやる』

ケフェウスの声が響くような声からいつもの声へと変わった。多分、今の声は地球人には聞こえず、先程までの声が地球人にも聞こえていたのだろう。

『ほんとに／本当か！？』

『あの者をお主達に逢わせる為に余はやってきたのだ。友達として  
フラザー  
当然だろう？』

すると、黄緑色の光の空にケフェウスの姿が映し出された。だが、それは途轍もなく大きなもので、ケフェウスとは比べ物にならないほどだった。

多分、光の屈折などを使って見せているのだろう。塵気楼みたいなものだ、とロックマンは考える。

瞬間、それから黄緑色の光が一閃ロックマンに放たれる。

『くっ、……！』

眩い光にロックマンとウォーロックは包まれる。ロックマンはあまりの眩しさに目を瞑る……。

「……………ここは？」

目を開けると白い空間の中に居た。しかも、電波変換が完全に解けて、ウォーロックの姿がない。

「スバル」

「っ！ ……父さん！」

振り返ると、宇宙服を着た電波体と同じように電波の体をした父、大吾が立っていた。瞬間、スバルは大吾の元まで駆け、力いっぱい抱きついた。

「逢いたかったよ、父さん！」

「よく頑張ったな、スバル。偉いぞお！」

スバルの頭をクシャクシャに撫でながら微笑む大吾。スバルは久しぶりの父に撫でられて嬉しそうだ。

「うん、約束だからね！ 父さん、僕と家へ帰ろ？ 一緒に母さんのところへ！」

「……………」

「父さん？」

スバルの言葉に大吾は返答しなかった。大吾からは先程までの笑顔が消え、真剣な眉をしかめて顔つきに変わる。

「……父さんの話を聞いてくれ、スバル」

フォン、という音と共に空間全体に宇宙空間が映し出された。見たことが無い星がある事から、太陽系ではないらしい。

「FM星人は、自ら生み出したアンドロメダの影響を受け、好戦的で大意的な宇宙人となってしまった。だが、我々にFM星人を責める事はできない。地球でも、人間同士で怒り、憎しみ、争い事をしてる」

「……………」

自分より身長の高い大吾の顔見つめるスバル。大吾はそれを確認すると、眉を緩め微笑み話しを続ける。

「ブラザーバンドは未来への希望だ。人を愛し、信頼し合う事で、例え敵対する相手でも心は通い合い、ブラザーバンドで結ばれる」

「ブラザーバンドがFM星を浄化したように？」

「そうだ。そしてお前とケフェウスが友達になれたように」

返答に付け加える大吾。その時の顔はとても優しくそうだ。

「いつか必ず、地球からも争い事は消える。それが父さんの願いだ」  
「うん！」

すると、大吾は上を見上げる。否、遠く広がる宇宙に視線を向けた。

「父さんは広大な宇宙へ旅立つ。宇宙の様々な生命体とブラザーバンドを結ぶ。地球の架け橋となるために。だからスバル、地球はお前に任せたぞ」

「父さん……？」

スバルが尋ねた途端、大吾の体がゆっくりと宙に浮き始めた。

「っ！……父さん！」

そして、最後に

「母さんに宜しくな」

と言い残し、大吾は周波数を変えて地球から旅立っていった。

第99話 三枚転送(トリプルブレイク)！(後書き)

これを書き始めたのが19日の日曜日。その時思ったことが「今週中に終わらせる！」結果、次の週に突入……orz

サボってたわけじゃないんです。ただ、自分の小説を進めるときの計画性が無かった所為で、行き詰ってこんな事に……すみません m ( ) m

さて、反省会。(おい)

最後の2人+3体の電波体空気じゃない？

ケフェウスってこんなのだっけ？

何か話が矛盾してない？

つてか、長くない？

描写落ちてない？

……空気なのは、それが私のクオリティーだからです。ケフェウスは若干こんな感じでは？という感じで書きました。矛盾はデフォです。長いのもデフォです。描写についてはいつもの事なのです(ノ、)。

ではでは、次回はあと書きセットで上げますね。出来れば今週中に終わらせたいと思ってます。どうぞ、最後のあと書き(雑談)をお楽しみに(本編は?)

追記：挿絵をUMAさんから頂きましたので載せさせてもらいました。このたびは本当にありがとうございました m ( ) m

最終話 平和（前書き）

W 最終話は短いんですけど、あと書きに時間が掛かってしまいました

## 最終話 平和

### 次の日

アンドロメダとの戦いが終わって次の日。スバルはいつものように身支度をし、学校へ行くこうとしていた。因みに今日は夏休み前、最後の登校日。3学期制なら1学期の終わり。世間でいう、終業式がある日だ。

ガチャッ！

「行って来ます！」

「車に気をつけるのよ」

いつものように玄関からあかねの音が響く。スバルは扉を開け、学校への道を駆けて行く。

「だから何度言えば分かるかなー。ロックマンの正体はスバルなんだって！」

いつもの交差点のところで声が聞こえる。スバルと同じく登校して

いるゴンタのようだ。その左にはキザマロ、1メートルほど前には委員長の姿がある。なにやら頬が赤くなっているようにも見える。

「委員長もあの時見たでしょう？」

キザマロの言葉に足を止める委員長。すると、顔をムスツとさせ瞬時に後ろに振り返る。

「いいえ、見てません！ 何にも見てません！ 私のロックマン様が星河君だなんて！」

瞬間、頭に血が上っていき、顔が赤くなっていくのが分かる。今にも頭から大噴火しそうな委員長。

すると

「おはよう！」

スバルが挨拶しながら隣を駆け抜けていった。すると、いきなりの事に委員長の頭は冷めていき、一時停止する。

「…………ふん！」

我に帰った委員長は、ゴンタ達を送るわけでもなく、ただ右手を腰に当ててムスツとした顔でそっぽを向くのだった。



「父さん……」

昨日、あれから気づいたときには展望台に立っていた。亜夢やミソラやキャンサーがいるわけでもなく、日が沈みかけていた中、スバルは一人立っていた。

「……………」

両手を見つめる。先程まで父に触れていた感触は夢だったのだろうか、と左、右という順で確認する。瞬間、右手を見た時、視界に何かが入った。

スバルは右方向を少し覗く感じで視線を向ける。

「……………つ、ツカサ君！」

向けた先には10メートル程離れた芝生の上に双葉ツカサが仰向けに倒れていた。

「大丈夫かな、ツカサ君？」

『何、ケフェウスがやったんだろっからな。大丈夫だろ』

「……………だと良いけど……………」

スバルはいつもの道を走っていた。学校に行き始めて何度も歩いたこの道を。

途中、ミソラのバーチャルライブの映像が映し出されているモニター付きのビルがあったが、スバルは軽く横目で見るとそのまま学校へスピードを飼えずに走っていく。

すると、校門より少し手前の場所あたりに緑色の髪をした、男の子か女の子が見分けが付かない子が歩いていた。

「あっ！」

スバルは直ぐに誰だか認識した。直ぐに彼の元まで駆けていく。

「おはよう、ツカサ君！」

「あ、おはよう、スバル君」

スバルが彼の横になると、彼も気づいたのか挨拶を返す。

双葉ツカサ。

ジエミニ・スパークWとして宇宙空間でケフェウスにデリートされたのだが、何故か元の姿、しかもジエミニと確実に意識が分離している。たぶん、ケフェウスの特殊な能力によるものなのだろうが、スバルはあえて深く考えない事にした。

「体はもう大丈夫なの？」

「うん。すっかり……でも、何も覚えていないんだ、僕。確か、車の事故にあってそれから」

『そいつは好都合だ』

「え？」

「こら、ウォーロック！」

「スバル君？」

「う、ううん！ なんでもない！」

ウォーロックが発して直ぐにスバルが小声でスターキャリアにバシないようにツッコむ。誤魔化しては見るものの、不思議そうにツカサが視線を向けてくるのが、バシてないか少し怖い。

だが、確かにウォーロックが言うとおり、好都合かもしれない。記憶があると、ツカサの事だ、自分を責めるに決まっている。今まで働いてきた悪事の罪の大きさに心が押し潰されてしまいかもしれない

い。それを考えると、知らない方が幸せなのだろう。

だから、スバルはこう言う。今までの記憶の埋め合わせになるかどうかは分からないが。

「ならば、これから楽しい思い出を一杯作ろうよ！ ね？」

笑顔で問いかける。ツカサもそれに笑顔で返す。それが、友達<sup>フレンド</sup>だから。

「おはよう御座います！」

そして、スバルとツカサは笑顔で、元気よく挨拶し校門を潜る。夏休み前最後の学校が始まる。

「……目覚めたか……」

とある空間の中、低い声が空間内で響く。姿は暗くて見えないが、それは少年の声である。だが、それにしても少し低い声だった。

「……久しぶりにあなたの顔を見たわ。何年ぶりかしらね？」

今度は少女の声が響いた。どうやら、先程の声の主と話しをしているようだ。

「……約1万年ぶりだ。……俺は誰とも会いたくなかったがな」

「？ 何故？」

暗くてよく分からないが、今の少女の質問に少年は鼻を鳴らしてそっぽを向いたようだ。

「本題に入るぞ。まさか使命を忘れたわけではないだろう？」

「ええ。あれの完全復活を阻止する。あれをもう一度封印するには、3つのムーアの遺産が必要よ？」

「わかっている。1つ目の遺産の場所は大体見当がついている」

「そう。なら、一刻も早く」

「ああ」

そう少年の低い声が響いた瞬間、その空間から一瞬にして2人の気配が消えた。

終業式も終わり放課後

5 - A

放課後と言ってもまだ午前中だ。普通ならここで誰もが家へと帰り、昼食を食べて午後から友達を遊ぶ者。夏休みの宿題のフライングに入る者。成績表を親に見せて怒られる者に分かれるのだろうか、スバル+委員長達+亜夢だけが教室に残っていた。あとの者（廊下で待っている亜夢のファン以外）は終わると同時に光の速さで帰ったという。

「で、何？」

亜夢がいつものように尋ねる。因みに今日は午後から仕事らしいので早く帰りたいらしい。

「そうよ、キザマロ。私は早く帰って宿題を終わらせたいのだけど  
？」

どうやら委員長が残らせるよう命じたのではないらしい。その証拠にフライング発言……。

「じゃあ、時間もあれなので率直に言います。スバル君！」

「え……何？」

何故かこれから危ない質問が飛んできそうな予感をスバルは感じた。恐る恐る聞き返してみると、キザマロが一呼吸置いてこう言う。

「ロックマンの正体はスバル君なんですか？」

「「は………！」」

それを聞いて、スバルと亜夢は固まった。だが、瞬時に我に帰り亜夢はスバルにバレないように小声で話し始める。

「（正体バラしちゃったわけ……？）」

「（そ、そんな筈は……）」

「この前あのロボットと戦ったために変身するところをこの目でゴンタ君と、しかも目の前で見ました。ね、ゴンタ君！」

「ああ！ この目でな！」

「「……………」」

2人は再度固まった。どうやら、スバルはあの時目の前で変身した

事を忘れていたようだ。

「（バラしちゃったんだ……しかも目の前で……）」

「（……無我夢中だったので忘れてました……）」

そう言っつて、スバルは小さくうな垂れる。

「いい加減にしてよ！ 私のロックマン様が星河君なわけないですよ！」

すると、委員長が割って入ってくる。「私の”の部分に亜夢は少しムツと来たが、ここは抑える。」

「でも、委員長も見てましたよね。ロックマンがスバル君に戻るところ！」

「見てま せん！！ 私はなにも見てません！！」

委員長が強調させて言う。これはこれで強情すぎるのではないか、と思う。

「……11時52分、か……」

亜夢が教室の前にある時計を見て呟いた。午後から仕事の彼女としては、そろそろ帰りたいと思う。それなので

「……帰っていい？」

と、直球で言ってみる。まあ亜夢は自分の正体がバレたわけ



ではないのであまり関係が無い気もするが。

「駄目ですよ！」

すると、キザマロが一言。首を傾げながら亜夢は聞いてみると

「委員長を抑える人が居なくなります。委員長が納得するまで居てもらいますよ！」

それを聞いて、亜夢は一瞬思考が完全に停止した。

「ちよっと！ 抑えるってどついう意味よ、キザマロ！ 私は猛獣か！」

「ええ、委員長は怒りはエベレスト級。可愛さ余って未知さ百倍とかどうとか」

デジャブなのだろうか、何処かで聞いたような台詞を吐くキザマロ。スバルは既に目が点になりつつある。

すると、ようやく亜夢の思考が追いついた。

「……まさか、それほんとに？」

「勿論。委員長を言い負かしたのはあなたしか居ませんしね」

キザマロが指を立てて冷静に告げる。

時刻は午後の12時を回った。それを見た亜夢は……スイッチが入った。

「ロックマンはスバル君。納得？ よし、OK！」

と素早く委員長長の言葉を聞かずに決めてしまう。めんどくさい時によく、あれのようだ。

「ちょっと、何よそれ！ 私は納得してないわよ！」

「ちっ……………」

「亜夢ちゃん、舌打ち……………」

スバルが亜夢にツッコんだが、もう既にスバルは付いていけなかった。それ以外はなにも言う様子はなかった。

「さっさと認めなよ！」

「嫌よ！ 私は星河君がロックマン様だなんて認めないわ！」

「何で、理由は？」

「まったくもって、スバル君とロックマン様は違うからよ！」

「何処が？」

「全部よ、全部！ 凛々しくたくましいロックマン様が、そんな貧弱で不登校のスバル君と一緒にされたらこっちが困るわ！」

「……………泣いて良いかなあ……………？」

心に深い傷を負ってしまったスバルは既に泣きそうな顔をしていた。

「確かにそうかもしれないけど、見たでしょ、この反応！　これが証拠よ！　……って、あれ？　スバル君どうしたの？」

亜夢の力強い最初の言葉が止めとなり、スバルは教室の隅で体育座りで落ち込んでいた。なにやら、負のオーラを放っているようにも見える。

「ほら見なさい。こんなのがロツクマン様だなんて、侵害だわ！」

「ちょっと、それは酷いんじゃない!？」

「大体」

「だから」

そんなこんなで2人のいがみ合いは続いていく。

「……ここまでくると、スバル君を哀れに思えてきますね……」

「確かにな……」

「はあ……」

こうして1人の少年の事で始まった言い争いを最後に、1学期は終了したという。その後亜夢は仕事には間に合わなかった事は言うまでもない。

最終話 平和（後書き）

何だかんだで終わってしまいましたねw

いやあ、これは直ぐに完成したのにと書きが凄く掛かってしまいました。お待たせしてしまいすみません。

とある空間に出てきたあの方たちは次回作ですね。ま、少年の方は誰だか皆さん分かりますよね（ただ一人を除いてw）

あ、ついでに言うと、今日は響ミソラさんのお誕生日ですね（8月2日現在）。では、最後に、おめでとー！

## あと書き

どーも、この小説の作者のシューティングスターです。因みにレベル0です。

「ちょっと！ いきなり何超 磁砲のネタ使ってるのよ！ ていうか、中の人あたしだし！！」

『亜夢ちゃん、それは禁句よ？』

あ、また紹介する前に出てくるねえ、君達は。まあ、あと書きというか、やっぱり雑談しますって事です。読者さん分かりました？

「……なんかここ数ヶ月雑談無かった間に、あんたキャラ変わった？」

そりゃあ、あれですよ。キャラチェ

「それいな！」

ベキッ！ 回し蹴り

いたっ！？ ちょ、久々の蹴り凄く痛いよ！？ しかも腰って！

「うるさい。はい、さっさと進める」

……はい（もう、あとでおぼえ）。

「あとで……何？」

あ……すみません。進めます（読心術あるの忘れてた……）。

では、改めまして、あと書き+雑談を進めていきます。この小説の作者の（ry

「……大事なところ略してどうするのよ……」

『全く同意見ですよ、作者さん』

さつき名乗ったし、時間短縮ってことですよ　では、ゲストを。まず亜夢ちゃんとジャスミンです！

『こんにちは』

「チーズ！」

ちよ、それ、しゅg

「はい、早く進める」

く、自分の事は棚に上げて……次のゲスト、スバル君&ウォーロツク&ミソラちゃん&ハーブです！

「ちよ、何故一気に!?!」

『扱い雑だな、おい!』

「こんにちはー」

『……ミソラはそこスルーなの？』

「うん」

……はい、次、何だかんだで最後影が薄かったライセンスさん！

「……言われてみれば本編の最後の方、扱い雑じゃなかったか、俺？」

それは私の技術が足りないからしょうがないんです。まあ、あまり気にせずに。次回作はたぶん殆ど出番無しですから。

「っておい！ 今サラッと恐ろしい事言わなかったか！？ ってか、マジなのか！？」

さて、次は。

「って無視かい！！」

クライマックス編の序盤の方でサテラポリスに拾われ、最後はどうなったか全く分からなくなり空気と化した不死宮ー！

「おい、それお前のせいだろ！」

「……あ、また来た」「」

「そして何だ、そのお前らの反応は！ 俺一応お前等より一っ年上だぞー！？」

まあまあ、落ち着いて。それではあと書きらしいあと書きを。題し

て、本編の反省会。

「『『『『』』』』つまり反省会か……』』』」「『『『『』』』』』」

まず、クライマックス編を振り返りましょう。2ヶ月ぐらい掛かったし、長かったし、駄文でした。すみません。よし、次。

「『『『『』』』』ちよつと待てー/待ったー!』』』』」「『『『『』』』』』」

え、何？

「もつとちゃんと振り返ろうよ！ あとがきでしょ!?!?」

「そうよ！ なによ、このリアルの話は!」

……じゃあ……クライマックス編の内容についての振り返りと裏話でも。これでいい、スバル君、ミソラちゃん？

「うん」

「OK!」

じゃあ85話目から88話まで“振り返れば奴がいる”。

「“振り返る”、でしょ。誰よ、奴って。意味分からないし」

ツッコミありがとう、亜夢ちゃん。そうだねえ、この時はまだ描写とか良かったと思うよね、うん。

「他にないのかよ……」「」



そういえば、どことなく風月さんに展開を読まれてた気がする。

「まあ、あなたの頭じゃ直ぐに読まれるわよ」

うう……まあそうかも……。そういえば亜夢ちゃん、不死宮と戦う前にスバル君に無理やり強い言葉を言っただけで離れさせたり、闇に支配されて消そうとしたりと、わりと物騒な事やってたけど謝らなくていいの？（やり返し）

「え！？ あー……えーっと……ごめんなさい」

「え……？ いやあ、気にしてないよ、亜夢ちゃん」（ハニカミスマイル）

「（ドキッ！）」 亜夢ですよ

「……流石スバル／＼ヒーロー。こうやって落としてるわけか……罪な奴」

「え？ 2人ともなんですか？」

「「なんでもない」」

「????？」

これが、ザ・鈍感ですね、わかります。じゃあ次、89話から94話まで。

初のおもしれえ病（？）になった時ですね、この頃は。アニメ路線

に戻ったので書きやすかったのかな？ あんまり考えることないし。

『それいったらこの小説終わりだな』

『ほんと、駄目作者ね』

ウォーロックとハーブは次回作の出番なし、と。じゃ、サヨナラ2人とも

『『……ごめんなさい／すまん』』

冗談はさておき、久々にライセンスさんが電波変換しましたね。やっぱり、改めて出すと強すぎる気が……

「確かに」

「ってか、亜夢と組むとか最強じゃない？」

あーあ、今思えばミソラちゃんの言うとおり最強だね。まあ、アニメ路線だからそういう組み合わせになっちゃったんだよ。許してね？

「はあ……」

「でもさあ、何でケフェウスは一日でFM星と地球を行ったり来たり出来るの？ フェニックスでも凄く次巻が掛かるんじゃない……」

……光の国からボクらのために」

「いや、ウルトランと違うから！ ってか、何でそこで歌うの！」

いやあ、やっぱりポケは必要かと。ナイス ツツコミ！ まああれですよ。それくらい速いってことだよ。

「（どれくらいだよ……）」

じゃあ残り最後まで。まあ殆どアニメ路線だからあまり言う事ないよね？（このときから描写ガタ落ちしたのは黙っておこう……）

「ほほう、それを黙っておくとはねえ作者……？」

……しまったあ。……はい、わたくし作者は自分の不甲斐ないばかりに最後は描写が落ちてしまいました。

「土下座は？」

ちよ、土下座ってあなた！ それは流石にひ

「早くやる

……すみませんでしたあーm（──）m

「思ったけど、後書きって普通作者さんは土下座するものなの？」

「「「『『『『……『『『『『

……それは、亜夢ちゃんに聞いてください。ミソラちゃん。

「え、あたし！？ し、知らないわよ、そんなの……！」

「「「『『『『『『『『『『『

じー……………

「うう、作者！ 何とかしなさい！」

ええ、でも私土下座させられたし。結構傷ついたな。 (ニヤリ)

「うっ……………あたしが悪かったわよ……………」

これからは？

「くっ……………これからは土下座しろ、なんて言いません。なので、許してください」

はい (勝った!) じゃあ気を取り直して雑談の方に行きましょう! このグダグダから脱出しましょう!

「グダグダなのはいつもの事じゃなかったっけ? (ってか軽ッ)」

……………ミソラちゃん、気のせいです。

「いいけど、何するの?」

良い質問だねスバル君。流石主人公! この前あるアニメのドラマCDを見てて凄く面白かったわけですよ。なので、今回はこの小説の初巻ドラマCDをみんなで作ろうかと。

(初巻って、次巻とかあるのか……………) 一同

さ、脚本作ってあるから、直ぐ収録するよー。ちょうど、上手い具合にここスタジオだしね

(既に脚本って……しかも、やっぱりここスタジオだったのか……)  
一同

BGMも効果音もバッチシできるよ！ 何しろスタジオだからね！  
じゃあまず「あいつに伝えておくれ、バーのカウンターでまってるはずさ」っていろいろを撮るよ。

「何このタイトル……」

スバル君、気にするな。私が考えたわけじゃない。

(じゃあ誰が考えたんだよ……) 一同

主演はウォーロック。んで、兄貴分がライセンスさん、恋人役がジヤスミン、敵役がハープ。はい、台本。たぶん、ウォーロックが好きそうな奴だから。

『ほう、そりゃあ楽しみだな』

読者の皆さんは脳内変換しながら聞いてくださいな。なお、ここからはドラマCD風なので、描写はしません。台詞と音だけです。あと脚本にしたがうのでキャラ崩壊はよくあります。あと、読みにくかったらすみません。それでも大丈夫な方はお読み下さい。嫌な方は飛ばして下さい。

「それ、大丈夫なの？」

気にするな、亜夢ちゃん。はい、じゃあいくよー。「あいつに」  
y」スタート！

カチンツッ！ カチンコの音

ゴクツゴクツゴクツ ウォーロックが酒を飲んでいる音

ガラガラガラ！ ガラガラガラ！ 引き戸の開閉音

「よお、またこんな所で飲んでるのか？」

『兄貴っすか。いいんすよ、俺は群れるのは苦手なんで』

「お前はよくうちで働いてくれている。今度、幹部に推薦しようと思ってるんだが」

『いやいや、そんなの勤まらないっす。柄じゃないっすよ』

「まあ、そういうと思ったけどな。でも、俺の代わりが欲しいんだ」

『え、兄貴。それはどういう意味で？』

「俺、今回の仕事かたづいたら、足洗って、あいつのために生きてみようかな……っ。そう思ってるんだ。完全な死亡フラグなんだけどなあ。まいったなあ、ははは」

『そんな！ 兄貴が抜けちまうなんて……寂しいっすよ……』

「まあそういうな。俺がようやく見つけた、ささやかな幸せなんだ。好きにさせてくれ。死亡フラグなんだけどな」

『嫌っすよ。兄貴が居てくれたから、あんなどうしようも無かった俺がここまで……』

「お前はもう一人で大丈夫だ。俺が居なくてもな。だから、この指輪をあいつに渡させてくれ。うむ、あるう事なき完全な死亡フラグだ」

『そんなこといわれたら、とめられないっすよ……』

「死亡フラグのことか？」

『いや、確かに止められないんですけど、指輪の方です』  
「……結婚指輪。完全な死亡フラグアイテムだな。これはお前が届ける結果になるだろう。……じゃあ、そろそろ行く。外に出た瞬間死ぬけどな。死亡フラグの立ち方が半端ない。ピンピンだ！ 即効死ぬな。じゃあ、また明日」  
『はい、お疲れした！』

ガラガラガラ！ ガラガラガラ！ 引き戸（ry

バンツ！ バンツ！ 銃声

『ツ！？ 今の音は！？』

ガラガラガラ！ ガラガラガラ！ 引き戸（ry

「ゴホツゴホツゴホツ！」

『ツ！ 兄貴！ 兄貴！』

「う、……ウォーロック、ぐっ！！ この…指輪を……あい、つ、に……」

『兄貴……！ 兄貴イイイイイ！！』

カラカラン 戸を開ける音

『あら、ウォーちゃんいらっしやい。何飲む？ ヤクルトでいい？』

『いや、フアントで』

『何味？』

『オレンジで。いや、やつぱヤクルトで』

『そんな物は置いていないわ。どうしたの？ 何かあったの？ 今日ウォーちゃんおかしいわよ？』

『<sup>ねえ</sup>姐さん。どうか、取り乱さずに聞いてください……』

〜  
〜  
〜 シリアス系のBGM

『んじゃ、先にお手洗い済ませてくるわね』

ガチャ ガチャ ジャー ガチャ ガチャ 開け閉め&流す音

『お待たせ』

『姐さん。どうか、取り乱さずに聞いてください……』

〜  
〜  
〜 シリアス系(r y

『ごめん、先にメール打たせてね』

1分後

『お待たせ』

『姐さん。どうか、取り乱さずに聞いてください……』

〜  
〜  
〜 シリアス系(r y

『キヤアッ、こんなところ破れてる！ どうか引っ掛けたかア？

くそオ！ 買ったばかりなのに！ で、何？』

『兄貴が、これを……!!』

〜  
〜  
〜 シリアス系(r y

『ごめん、テレビ消すわね？ ビッ』



プツン！ 消える音

『兄貴が、これを……！』

~~~~~ シリアス系（ry

『はい！ 奥のテーブル空いてますんでエ！！ ごめんなさい、何？』

『兄貴が、これを……！』

~~~~~ シリアス系（ry

『これはツ……！ 指輪……！』

『兄貴は……兄貴は……！』

『いわなくても分かってる。はい、餃子二人前入りましたア！！  
……ありがとう、ウォーちゃん。最後まであの人の傍に居てくれ  
て……あの人、ウォーちゃんのこと、はい、追加で回鍋肉ほいくろう入りま  
したア！！ ……あいつは、血はつながって無くても俺の弟だつて

……』

『うつ……』

『そこまでは言っていないけど、まあ弟的な存在みたいなの？ 悪く言  
うなら金魚の糞的な？ まあ、悪く言う必要は無かったわね、ごめ  
んなさい。あなたの事、それぐらい慕ってたのよ……』

『そうだったんすか……兄貴……。じゃあ、俺はこれで失礼します』  
『ウォーちゃん待って！ あ 何名様で？ あア、すみません。  
カウンターしか空いてなくて。はい、すみません。またお願いしま  
す！』

~~~~~ シリアス系（ry

『待つて、ウオーちゃん！ あなた……』

『何すか……？』

『あの人の敵を取るんじゃない的な感じ！？』

『止めないで下さい、姐さん！』

『一人じゃ無謀すぎる的な！？ 無駄死にしちゃうよ風な！？ だからそんなことはお願い…… 止めて』

『俺は兄貴がいたから、一緒にいただけです。元々一匹ポメラニアなんすよ。じゃあ姐さん……さらばっす！』

カラカラン 戸を（ry

『ウオーちゃん、ウオ……ウオーなんだっけ？ ウオーカー？ ウオーカーちゃアアアアアん……！』

『遂に来てやったぜ。ここまで何人の奴を殺ってきたか……もう逃がしゃしないぜ……だが、もう、俺の体もボロボロで一步も動けやしねエが、この片腕さえあれば十分！』

ガチャンツ 銃のリロード音

『テメエに標準をあわせて、引き金を引く！ それだけだ……これで終わる！ 兄貴と2人で生きてきた人生が。これでお前を殺すウ……！』

『浅はかね』

『死ねエエエエエ！』

ドォーンッ！！

テッテッテテテ テッテッテテテ テッテッテテテ テッテッテテテ

I
変なBGM

『兄貴……見てますかい……？ 終わらせましたぜい……2人で歩んできた兄貴との人生を……これからは』

《おまえは、もう一人でも大丈夫だ》

『はい、大丈夫です……ありがとうございます……御座いました……』

テツテテテ

カチカチンツ！ カチンコ（ry

はい、カット！ 素晴らしいテイクが撮れたよ！ 一発OK！ はい、完成つと！

「じらー……！」

何、亜夢ちゃん？

「何ってツッコまれないとも思っただの！？ よし、次行こう、とかってスルーされるとでも思っただの！？」

うん。次は

「行かないわよ！ ちゃんと反省会やるわよ！」

？ 訳がわからないよ？

「訳が分からないのはあんたの脚本とBGMよ！ まず1つめ。何で死亡フラグを主張するのよ！ しかも連呼で！ 何よ、あのしつ

「こさはー!」

だってベタじゃん? 斬新かな〜と思って。

「斬新過ぎよ! こんなの誰が付いてくるのよ!! そして2つ目。ジャスミンのキャラが悲愴感をぶち殺してるわよ! なによ、あれ! 幻 殺して殺したのか!」

いや、流石に殺せないでしょ!

「分かってるわよ!」

……そういう天然のキャラ設定なんだけど。萌えない?

「人気出ないし、萌えないわよ! そして最後。ラストのBGMは何よー!ー!ー!ー!」

あれは間違えて流したんだけど、まあこれはこれでありかと思つてそのまま流しきつてみた。結果、未知なる新しい結果が生まれたじやん

「駄作という結果よ」

反省会は終わり?

「……まだポメラニアンとかあるけど、長くなるからいいわ。次は反省点をふまえなさいよ?」

……わかった。じゃあ次、「殺戮姫ミソラ姫」ね。主人公は不死宮、ヒロインはミソラちゃん、付き人はスバル君。敵兵はハーブ。

「何かあからさまに危なげなタイトルなんだが……」

はいはい、いくよ不死宮。スタート！

カチンッ！

~~~~~ シリアス系（ry

「貴様がつえくなぐの赤い牙と呼ばれた男か？」

「ふっ、作用だ」

「本来、貴様のような何処の馬の骨とも分からぬ一傭兵ごときをこの有り得てはならない自体に我がよえくなぐ帝国は陥っており。説明が無いが以下省略じゃ。お前は、我が帝国の姫君、ミソラ様をお守りし、あの忌まわしき深き森越えをしてもらいたい。出来るか？」

「それが任務とあらば」

「よかるう。ミソラ様をお通しする。ミソラ様！こちらがその任務にあたる傭兵で御座います」

「まず顔が気に入らない」

「ぎゃ、ぎゅ、ぎゃあ！」 刺された

「ミソラ様！いきなり旅のパートナーが死んでしまいます！」

「急所ははずしてあるわ。あなた、名前は？」

「不死宮と申します」

「響きが気に入らない」

「ぎゃ、ぎゅ、ぎゃあ！」 刺された

「ミソラ様！ いきなり旅のパートナーが死んでしまいます！ それでは出発は夜更けとなります。お支度を。では頼むぞ、不死宮」  
「はっ！」

「返事は“はい”よ」

「ぎゃ、ぎゅ、ぎゃあ！」 刺された

「ミソラ様！ いきなり旅のパートナーが死んでしまいます！」  
「だから急所ははずしてあるわ」

夜更け

「（では、出発だ。何処ぞに敵国の兵士が潜んでいるやもしれぬ。慎重に頼むぞ不死宮）」

「（はい）」  
「お腹空いた」

「（ぎゃ、ぎゅ、ぎゃあ！）」 刺された（小声）

「（ミソラ様！ いきなり旅のパートナーが死んでしまいます！ しかも隠密行動です。むやみに目立つ行動はおやめ下さい）」

「こいつが悪い」

「（すみません）」

「もうしわけ御座いません”よ」

「（ぎゃ、ぎゅ、ぎゃあ！）」 刺された（小声）

「（ミソラ様！ いきなり旅のパートナーが死んでしまいます！ しかも隠密行動です。むやみに目立つ行動はおやめ下さい）」

「こいつが悪い」

「（もうしわけ御座いません……）」

「行くわよ」

「（はい）」

「(はっ)」

数十分後

「何だか疲れてきたわ」

「一時間も歩いておりませんよ。姫様」

「もし宜しければ、わたしくめがおんぶを」

「何処の子供よ」

「ぎゃ、ぎゅ、ぎゃあ！」 刺された

「ミソラ様！ いきなり旅のパートナーが死んでしまいます！ 分かりました。休憩にしましょう」

「何かおもしろい話しをして、不死宮」

「傭兵ごときに面白い話など御座いません」

「して」

「ぎゃ、ぎゅ、ぎゃあ！」 刺された

「ミソラ様！ 旅のパートナーが死んでしまいます！ 不死宮よ、面白くなくていい。お前の経験してきた人生を少し話してはくれまいか？」

「承知しました」

~~~~~ シリアス系 (ry

「私は、親と言うものがおらず、気づいたときには剣を手に、生きるために戦っていました。何故生きなければならぬのか。相手の命を奪ってまで。よく分からないまま過ごしていました。でも、そんなのときにです。あれは、10歳の時だったと思います」

「詰まらない」

「ぎゃ、ぎゅ、ぎゃあ！」 話しの途中に刺された

「もう良い。私が話しをする」

くくく 明るいBGM

「料理長の噂の話です！ 実は、ほんとにこれでこれでこれだったらしいんですよ！」

「はははははっ！ それは愉快なっ、ははっははっははっ！ はあ、はあ。こんなに笑ったのは久しぶりねっ」

「ふっ、初めて笑ってくれましたね」

「お前のお蔭じゃない」

「ぎゃ、ぎゅ、ぎゃあ！」 刺された

「ミソラ様！ 旅のパートナーが死んでしまいます！ 不死宮よ、お前も自分が笑わせたように言うのではない！」

「すみっ、……もうしわけありま ぎゃ、ぎゅ、ぎゃあ！」
刺された

「回復した。いくわよ」

「はい！」

「はっ！」

ヒュンツ！ 矢が飛んでくる音

「危ない！」

ガチンツ！ 剣で打ち落とした音

「わらわの前でいきなり剣を抜くなど無礼極まりない」

「いやああっ！ 飛んできた矢を、ぐは！ 払った、うっ、まででつぐはっ！ この先に、敵兵ぐあっ！ 潜んで、るうっ！ 片付け

て、参りますうっ！」 刺されながらも喋っている

「頼むぞ、不死宮よ！」

『ギヤー』 やられた（棒読み）敵兵
「ふっ、他愛も無い！」

チンツ 刀を鞘へしまう音。

「おお、不死宮よやったか」

「はい。ですが、他の兵を呼んだ可能性があります。ここからは直ぐに離れましょう」

「その髪の色が気に入らない」

「はふう！ これはあっ！ こついう、キャラぐわあっ！ 設定なんでえっ！ こつちですう！ 急いでえっ！」 指されながら先を急ぐ

「もう十分であるう。今日はここまでとするか。姫はここで仮眠を
「あなたたちはどうするの？」

「我々は当番で見張りを変わります」

「あなたはずっと起きて見張ってなさい」

「ぎゃ、ぎゅ、ぎゃあ！」 刺された

「ミノラ様！ 旅のパートナーが死んでしまいます！」

「腹いせは終わったから寝るわ」

「はい、おやすみなさいませ」

すう……すう…… 寝息

「眠るのは一瞬、か。ふっ、とんだじゃじゃ馬姫様だな」

「バツチリ起きてるわ」

「ぎゃ、ぎゅ、ぎゃあ！」 刺された

「ミソラ様！ 旅のパートナーが死んでしまいます！ どうか今は休息を」

「わかった。寝るわ」

「では、私から先に寝るぞ？」

「ああ、見張りは任せておけ」

モノローグ

「（……なんて仕事を引き受けてしまったんだ。長い傭兵生活で一番厄介な仕事かもな。百人の敵に囲まれていたほうがまだ冷静沈着で入られたぜ）」

「どんな存在だ、あたしは」

「ぎゃあっ！ モノローグなのにつ、何で聞こえ、ぎゃああっ！！」

次の日

「（長い森を抜け、俺たちを待ち受けていたものは）」

わああああ！ おらあああ！ x1000

「（ 絶望の光景だった。千を越える敵……！！）」

「う、既に見透かされておったか……」

「なんと、あさはk(ry)」

「俺が何とかする」

「何じゃと！？ 正気か！？」

「俺は……その姫様を守りたい。あんな無邪気な顔……俺はずっと忘れていた。それを……守りたい」

テツテツテテテ テツテツテテテ テツテツテテテ テツテツテテ
I 変なBGM

「ははは……思い出すだけで、笑いが込み上げてくる……。長い傭兵生活だが、こんな楽しかった旅は……初めてですよ……！ はっはは……はっはははは……！」

ズザァー 倒れる音

テツテテテ

カチカチンツ！ カチンコ（ry

はい、カーツト！！ すばらしいテイクが撮れたよ！ 一発OK！ はい、完成つと！

「くらくらくらー！！！」

何、亜夢ちゃん？

「全くさっきの反省会の反省点が生かされてないわよ！」

キャラを萌えに特化してみたんだけど、何か？

「どう考えてもおかしいでしょ！ 主人公何回刺されてんのよ！
っていうか萌えるか……！」

「ってか、何で主人公俺なんだよ！ ここはスバルだろうが！」

え、だってミソラちゃんがスバル君を刺す姿なんて誰も見たくないでしょ？ しかも、今日誕生日だし（8月2日執筆）

「……………」

「そして何より、またラストのBGMがおかしい!!」

あれは間違えて流したんだけど、まあこれはこれでありかと思ってそのまま流しきってみた。結果、未知なる新しい結果が生まれたじやん

「いや、同じ言い訳をどうどうと繰り返してる時点でわざとだって分かってますから！ 2回も繰り返えりたら分かりますから！」

どうでも良いけど何故敬語？

「……………ほんとにどうでも良いわね……………」

さて、もう一個ぐらいやつとこうか。次は……………GLガールズラブでもやつとく？

「はあく!!!? 何でそうなんのよ!!!」

え、だってBLボーイズラブなんて誰も見たくないでしょ？ しかも配役が居ないし……………ツカサ君がいるなら別だけど。

「そんなの誰もみないわよ!!」

「あるよ！ 全然あるよ、亜夢ちゃん！」

「え!?! スバル君そういうの好きだったの……………?」

「いや、ここでそう言えって台本が渡されていただけだよ」

「~~~~~!! 作者あああああ!!」

わーい、引つ掛かったあ〜！ 滑稽だね〜

「殺す！ 絶対殺す!! 大体こんなのやらないわよ!!」

じゃあ君たちに恋が実る伝説のお守り渡して、一人の男の子に渡そうとしたら修羅場になった……的な昼ドラにする？

「……あれ？ 何処かで聞いた事がある展開な気が」

デジャブよ。私にはそんな記憶は御座いません。(忘れた方は雑談
7へ)

あ、でもそろそろ読者の皆さんが疲れてきた頃だと思っからこの辺にしようか。ってか、本文より字数半端ないよね、これ……

(……そう思うなら書くなよ) 一同

じゃあ、昏ドラマに出したからこれにてドラマCDはおしまい！

「あれ？ ちょっと！ あたし出てないわよ!」

え……まあ十分ツツコンだから良いでしょ？

「酷っ！ ま、まああんなのに出るよりはマシか……」

……酷い……あんなのって……折角寝る間も惜しんで考えたのに……

「え、あれ？ 何でそこで落ち込むの？ ってか泣いてるし！」

「『あゝあ、泣かせやがったぜ。この女』」

「う、うっさい！ あたしのせいじゃないわよ！」

「『『でも流石にさっきのは酷いな／酷いわ』』」

「うっ……」

「亜夢ちゃん。とりあえず謝ったら？」

「うっ……う、ごめんなさい……」

……ふ……フッフッフ！ あっははははっはっは……！

「な、何で急に笑い出すのよ！？」

また騙された〜！ 涙腺コントロールぐらい基本Z E Y O（土門風）ってか女の子なら普通見抜けるでしょ〜！ 君、ほんとに女の子〜？

「くっ……だったら皆だってー！」

【いや、ここでそう言えって台本が渡されたただけだ（よ）／だけよ】
亜夢以外一同

「……………」

大爆笑中

はあー、笑った笑ったあー！ さて、ここにきてあとがきらしくちやんとした締めを。

今まで応援してくださった方々、読んでくださった方々。本当にありがとうございます

当初の完結予定をかなり過ぎ去ってしまいましたが、ここでこの小説を終了させ頂きたいと思います。99話ではUMAさんの挿絵も描いてくださいましたし、ほんと恵まれてますねえ、この小説。

次回作は、1ヶ月、つまり8月丸まる休ませてもらい、9月から再開したいと思います。え？ 何故1ヶ月も休むのって？ そりゃあ夏休みですからねw受験勉強やら遊びに使っわけですよwww

(この人の場合全部遊びに使いそう……) 一同

あと、次回作に向けてオリジナルシナリオを練ったりしますので、暫くの間お待ち下さいませ。

ではでは、長くなりましたがこの辺で。いろいろありましたが、兎に角応援その他諸々ありがとうございます 次回作をお楽しみに

「さようならー!!」

「またいつか来てやるぜ、あばよー!!」

「じゃあな！」

『また次回作でな！』

『ポロロン。さようならー』

『またいつかお会いしましょう。ほら、亜夢ちゃんも』

「作者殺す作者殺す作者殺す作者殺す

」

……えーっと……死亡フラグ……？

「 殺す殺す殺す殺す殺す……！」

あ………では、皆さんさようならー。また1ヶ月ほど先で
よし、
逃げろー！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3330j/>

流星のロックマン スターフォース

2011年9月4日08時34分発行